

宮城県埋蔵文化財調査報告書第191集

新田東遺跡

—三陸自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ—

平成15年3月

宮城県教育委員会
国土交通省東北地方整備局



1. 新田東遺跡（中央右側）と桃生城跡（中央）の遠景（南東から）



2. 新田東遺跡調査区全景（北東から）



1. 百萬塔（左側）と S I 24 穫穴住居跡出土の三重小塔（右側）



2. 三重小塔の出土状況（S I 24 穫穴住居跡）



1. S I 8 焼失整穴住居跡（奈良時代）



2. S I 34D 焼失整穴住居跡（奈良時代）



1. S I 8 焼失窓穴住居跡出土の土器（奈良時代）



2. S I 34D 焼失窓穴住居跡出土の土器（奈良時代）



1. S I 21 竪穴住居跡出土の土器（奈良時代）



2. S I 20 烧失竪穴住居跡出土の土器（平安時代）



1. 奈良時代の各種土器



2. 奈良・平安時代の鉄製品

序 文

新たな世紀、21世紀を迎え、携帯電話やパソコンなど高度情報通信機器が普及し、これらなくしての社会生活は考えられない時代となりました。これらの情報通信技術や情報処理技術はこれからも進歩し、われわれの社会生活や世の中の仕組みまでも変えていくことでしょう。このような日々変化していく時代の中にあって私たちの行く末を考えるとき、来し方を正確に知ることの重要性がますます増してきております。

歴史は、過去に起こった事実の積み重ねから明らかにされていかねばなりません。県内各地域は情報の共有化により均質化しておりますが、特に地域との結びの強い埋蔵文化財は各地域の個性溢れる歴史を明確にするためにも欠くことのできない重要な位置を与えられてきております。しかし、埋蔵文化財は道路や宅地の造成、ほ場整備などの大規模開発により年々破壊され、消滅の危機にさらされています。

このような中にあって、宮城県教育委員会では、開発部局等に遺跡の所在を周知徹底とともに、開発との関わりが生じた場合には積極的に保護することに努めてきております。

本書は、国土交通省東北地方整備局仙台工事事務所との保存協議に基づき、三陸自動車道路－矢本石巻道路－建設工事に先立って実施した河北町新田東遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、隣接する奈良時代の著名な城柵官衙遺跡である桃生城を支えた大規模な集落跡の様子が明らかとなりました。この成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後に、遺跡の保存に理解を示され、調査に際しては多大なる御協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際に調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成15年3月

宮城県教育委員会

教育長 千葉眞弘

例　　言

1. 本書は国土交通省東北地方整備局仙台工事事務所との保存協議に基づき、三陸自動車道－矢本石巻道路－建設工事に先立って平成13年度に実施した発掘調査報告書である。
2. 調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 発掘調査の測量は、新田東遺跡地内の基準杭No.1:国家座標第X系 X = -162,830.133、Y = 39,281.710、H = 43.887、と基準杭No.2:X = -162,925.908、Y = 39,397.161、H = 31.609の2点を結ぶ直線を基準線とし、3m方眼のグリッドを設定して行った。この基準線と磁北との偏差は西に 50°19'19"で、磁北の真北との偏差は 7°10"である。検出した遺構の実測図は、グリッドを基準に平面図・断面図とも原則として 1/20 の縮尺で作成した。
4. 本書の遺構番号は、遺構の種別ごとに調査現場で検出順に番号を付したものを使用した。
遺構の種別については次の略号を使用した。
掘立柱建物跡 (SB)、竪穴住居跡 (SI)、井戸跡 (SE)、土壙 (SK)、柱列 (SA)、溝 (SD)、焼成遺構・遺物包含層・その他性格の不明な遺構 (SX)
5. 本書で扱う遺構は、縮尺 1/400 の全体図に示した (第3図)。また、各遺構の個別の平面図・断面図は、原則として掘立柱建物跡は平面図が 1/100、断面図が 1/50、竪穴住居跡・井戸跡・土壙は平面図・断面図とも 1/60 の縮尺で図示した。また、遺物実測図は土器・土製品・鉄製品が 1/3、石器が 2/3、石製品が 1/3 または 1/6、鏡・ガラス小玉が 1/1 の縮尺で図示した。
6. 遺構の記録写真是 35mm フィルムのリバーサル・カラー、モノクロと 6 cm × 7 cm のモノクロ、ネガカラーを使用して撮影した。また、遺構全体写真是無人ラジコン・ヘリコプターによる航空写真撮影業務を㈱日本特殊撮影に委託して行った。
7. 土色については『新版標準土色帳』(小山正忠・竹原秀雄、1976) を参照した。
8. 本調査で得られた遺物、図面、写真などの諸資料は、宮城県教育委員会で一括して保管している。
9. 出土遺物は報告書掲載図面 No. を付記し、掲載「収納」番号と一致させて平箱に収納した。
10. 鉄製品の保存処理については、東北歴史博物館の及川規氏の協力を得た。
11. 鉄滓の分析は㈱川崎テクノリサーチに業務委託し、その成果を付章 2 に掲載した。
12. 珠文鏡の保存処理・復元は、㈱東都文化財研究所に業務委託し、その成果の一部を付編に掲載した。
13. 炭化材・種子の分析は㈱古代の森研究舎が行い、その成果を付章 2 に掲載した。
14. 遺物の写真撮影は、㈱アートプロフィールに業務委託して実施した。
15. 本調査成果の一部は、『現地説明会資料』、『平成13年度宮城県遺跡調査成果発表会資料』、『第28回古代城柵官衙遺跡発表会資料』、『発掘された日本列島展2002』にすでに概要を一部報告しているが、本書の内容がすべてに優先する。

16. 報告書作成のための整理作業は、遺構図面を柳澤和明が担当し、そのトレースを柳澤、大沼美代子が行った。遺物整理は柳澤和明、茂木好光、西村力が担当した。遺物実測は柳澤の指導のもとで古代の土器については主に佐藤悦子があたり、トレースを柳澤、大沼が行った。縄文土器については茂木、鉄製品と石器などについては西村が担当した。遺構・遺物写真の整理は茂木が担当した。
17. 本書の第3章8の縄文土器・弥生土器・統縄文土器・古墳時代前期土器の項と写真図版の作成を茂木好光、縄文石器の項を西村力が担当し、それ以外の図版作成と本文執筆・編集は柳澤和明が担当した。
18. 調査の実施及び報告書の作成にあたっては、以下の方々、機関、団体から御協力、御指導を賜った。御芳名を記し、感謝の意を表したい。

相澤清利、池田敏宏、井上喜久男、及川規、金子裕之、金田明大、坂井秀弥、佐川正敏、佐藤敏幸、鈴木三男、巽淳一郎、田中宏明、辻秀人、深澤敦仁、藤沢敦、望月精司、森下章司、八木光則、山口明、渡辺博人；河北地区教育委員会、奈良国立文化財研究所平城京跡調査部・飛鳥藤原京跡調査部・文化財調査センター、東北歴史博物館、長野市立博物館、文化庁記念物課、宮城県多賀城跡調査研究所

目 次

巻頭カラー図版

序文

例言

調査要項

目次

はじめに	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 周辺の遺跡	1
第2章 調査の方法と経過	1
第3章 I区で発見された遺構と遺物	7
1. 捩立式建物跡	7
2. 壁穴住居跡	21
3. 井戸跡	148
4. 炉跡	154
5. 焼成遺構	155
6. 土壙	155
7. 遺物包含層	162
8. その他の出土遺物	166
第4章 II・III・IV区で発見された遺構と遺物	171
第5章 考察	176
1. 古代の土器類の分類	176
(1) 土師器	176
(2) 須恵器	183
(3) 須恵系土器	189
(4) 製塙土器	190
(5) 灰釉陶器	190
2. 土器群の設定と年代的位置付け	190
(1) 基準資料による土器群の設定	190
(2) その他の主要遺構出土土器を含めた工器群の設定	192
(3) I群土器の特徴	194
(4) I群土器の年代	202

(5) II A群土器の特徴	203
(6) II A群土器の年代	206
(7) II B群土器の特徴	206
(8) II B群土器の年代	208
3. 遺構期の設定と集落の変遷	209
(1) 遺構期の設定	209
(2) B期の集落の様相	212
(3) 桃生城廃絶以降の平安時代の集落	222
4. 特殊遺物	223
(1) 三重小塔	223
(2) 珠文鏡	227
第6章 まとめ	228
註・引用文献	229
付章	237
1. 新田東遺跡より出土した炭化材・種子の分析	237
2. 新田東遺跡出土製鉄関連遺物の分析・調査	243
写真図版	259
抄録	
奥付	

調査要項

1. 遺跡名：新田東遺跡（宮城県遺跡地名表記載番号66073）
2. 遺跡記号：SE
3. 遺跡の性格：集落跡
4. 所在地：宮城県桃生郡河北町飯野字新田
5. 事業主体：国土交通省東北地方整備局仙台工事事務所
6. 調査主体：宮城県教育委員会
7. 調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
8. 調査協力：国土交通省東北整備局仙台工事事務所、河北地区教育委員会、宮城県多賀城跡調査研究所
9. 調査期間：
確認調査 平成12年11月27日～12月5日
事前調査 平成13年4月23日～12月10日
10. 調査対象面積：約10,000m²
11. 調査面積：8,500m²
12. 調査員
〔確認調査〕佐藤則之、佐久間光平
〔事前調査〕柳澤和明、茂木好光、西村力、佐藤則之、佐久間光平、須田良平、吉野武、引地弘行

第1章 はじめに

1. 遺跡の位置と地理的環境

新田東遺跡は河北町飯野字新田に所在し、河北町の中心部である成田（通称飯野川）から北西に約2.5kmの距離にある。本遺跡は南東に向かって傾斜する丘陵上に立地する。この丘陵の北・西・南に沢が入り、南には沖積面が広がる。沖積面の標高は3m前後で、本遺跡は44m付近から3m付近まで広がり、比高差が約40mと大きい。丘陵裾部の傾斜は急峻で、丘陵尾根も約5°と比較的傾斜がある。本遺跡は東西約300m、南北約350m、約6万m²の広がりをもつ（巻頭図版1-1・2）。

本遺跡は東西約3.5km、南北約4kmの独立丘陵の南西端に位置する。この独立丘陵は北上山地の末端部をなし、東が南流する北上川によって分断され、北・西・南が沖積面となっている。さらに北・西・南には旧北上川がこの独立丘陵を抱き込むように弧状に南流している。

2. 周辺の遺跡

本遺跡の西隣、同じ独立丘陵上には奈良時代の城柵官衙遺跡として著名な桃生城跡がある。『続日本紀』によれば、桃生城は天平宝字2年（758）頃から造営が開始され、翌3年（759）秋頃には完成し、15年後の宝亀5年（774）7月に海道蝦夷の攻撃によって西郭が敗られたことなど、造営から廃絶までの経緯がよく知られている。桃生城跡については、宮城県多賀城跡調査研究所が昭和49年～平成13年度まで10カ年計画で調査し、遺跡の概要が次第に明らかになってきた（宮城県多賀城跡調査研究所、1975・1976・1995～2002；柳澤、2001；白鳥他、2002）。

新田東遺跡はこの桃生城跡の外郭東辺から約50mの至近距離にあり、本遺跡のある丘陵を登って行くと、桃生城跡の外郭東辺北部にある土橋状の通路部分（桃生城跡第4次調査区）に到る（第151図）。本遺跡は桃生城跡と同じ奈良時代を中心としており、年代的・位置的にみて本遺跡は桃生城跡と密接に関連する。

新田東遺跡、桃生城跡の立地するこの独立丘陵上には、高屋敷遺跡（72）、問答山遺跡（60）、外吉野遺跡（61）、後谷地遺跡（62）、万歳山B遺跡（31）、細谷B遺跡（28）、細谷遺跡（10）、宗全山遺跡（8）、拾貫毫番遺跡（32）、角山遺跡（29）など古代の集落跡が多くあり、桃生城跡に瓦を供給したとみられる太田窯跡（27）もある。

第2章 調査の方法と経過

新田東遺跡は、三陸自動車道の路線策定に先立つ分布調査で平成2年に発見された。この時に建設省と宮城県教育委員会との間で協議が行われ、桃生城跡の城内を通る計画であった路線を東に大きく振ったため、新田東遺跡の中央を路線が縦断することになった（第2図；巻頭図版1-1）。

三陸自動車道の建設の進捗に伴い、国土交通省の要請を受け、平成13年度に確認調査を行い、その結果をみてから事前調査の時期、期間などを協議することになった。確認調査は、平成12年11月27日



第1図 新田東遺跡と周辺の遺跡（1/50,000）

～12月5日の延べ7日間行った。確認調査の際には調査対象地の大部分が杉林であったため、杉林の間をぬうようにして9本のトレンチを設定し確認調査を行った。その結果、古代の竪穴住居跡数棟、掘立柱建物跡、土壌など古代を中心とする遺構が多数検出された。そして、これを受けた再協議で、平成14年度当初より4ヶ月間の予定で事前調査を行うことになった。

三陸自動車道建設に伴う事前調査は、平成13年4月23日～12月10日の延べ132日間行った。

三陸自動車道の路線内で、標高25m～45mまで広がる丘陵頂部が遺跡中心部にあたる。この主要調査区をI区とした。調査対象面積は約10,000m²で、発掘調査面積は8,500m²である。

4月23日より発掘機材を搬入し、7月24日までに重機によるI区全体の表土除去を終え、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、土壌など主要遺構の検出作業をほぼ終えた。I区で検出した主要遺構には、掘立柱建物跡14棟、竪穴住居跡49棟（建て替えを含めると60棟）、井戸跡3基、焼成遺構2基、炉跡1基、土壌20基、平場1などがあり、この他に遺物包含層2箇所がある（第3図）。

表土除去と遺構検出作業の進捗に併せ、光波測距儀による3m方眼のグリッド設定とレベル基準点設定を行った。遺構平面図の作成も主要遺構の精査の進捗に併せて随時行ったが、10月以降に精査と併行しながら平面図の作成とレベル測定を集中して行った。I区の調査区は細長いため、各主要遺構の精査が終了した時点で、写真撮影を行った。そして、調査区全体と遺跡全景の写真撮影については、無人ラジコン・ヘリコプターによる航空写真撮影を10月31日に行った。

9月29日には一般を対象とする現地説明会を開催し、発掘調査現場を公開して調査成果の概要を説明した。約200名の方が遺跡を訪れ、見学された。

I区の調査区の斜面下方は、標高16m～25mまで傾斜がきつくなっていて、その下に南東に向かって入る比較的大きな沢がある。その沢頭にあたる標高15m～17mまでの間に比較的緩やかな斜面があり、ここにII区を設定した。

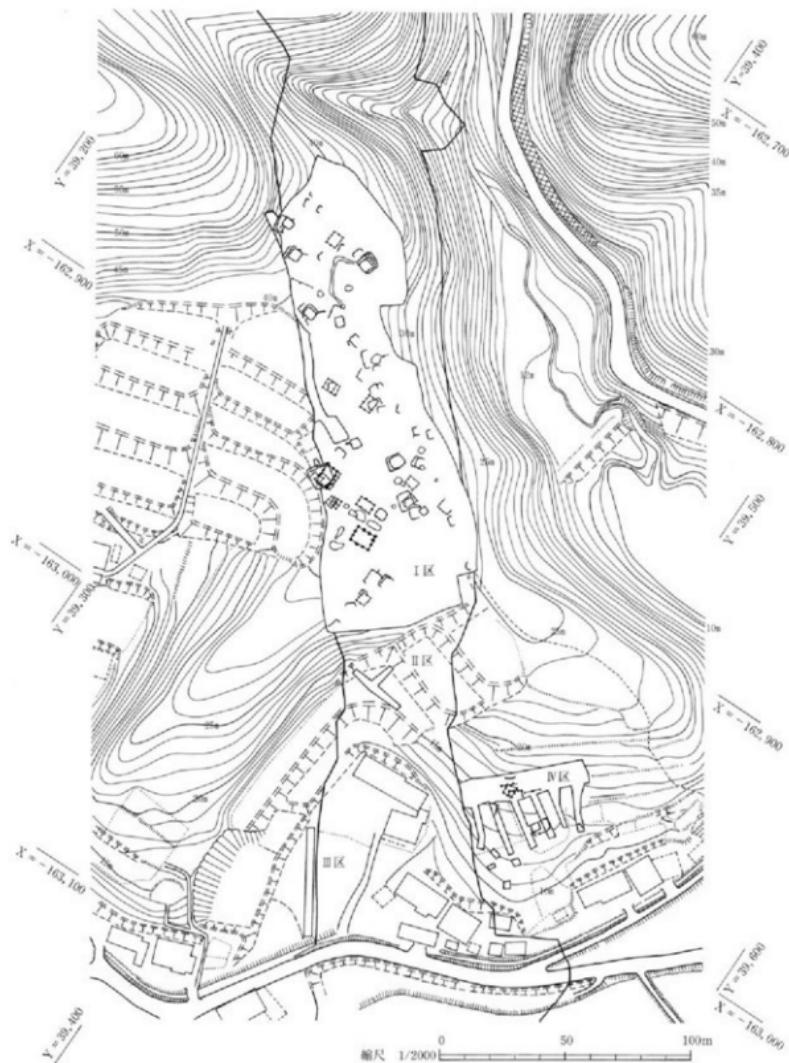
II区では遺物包含層（SX3遺物包含層）の北西端部を検出した。II区の下方の斜面も三陸自動車道の計画路線の範囲内に入り、そこまでSX3遺物包含層が広がると考えられる。しかし、この斜面に面した三陸自動車道の計画路線の範囲内で、まだ買収契約が完了せず、移転が行われていない民家もあったため、この民家跡地を含めた確認調査を来年度以降に行うこととし、II区については危険防止のため、それ以上は発掘調査面積を括げなかった。

なお、II区の南西斜面下にある三陸自動車道計画路線内の民家については、三陸自動車道計画路線の両脇に移転することになったため、宮城県教育庁文化財保護課、河北地区教育委員会、地権者で協議し、確認調査を行うことにし、その結果をみて再度協議することにした。そして、II区の南側をIII区、東側をIV区とし、国庫補助の緊急調査費を用いて、III・IV区の確認調査を行った。

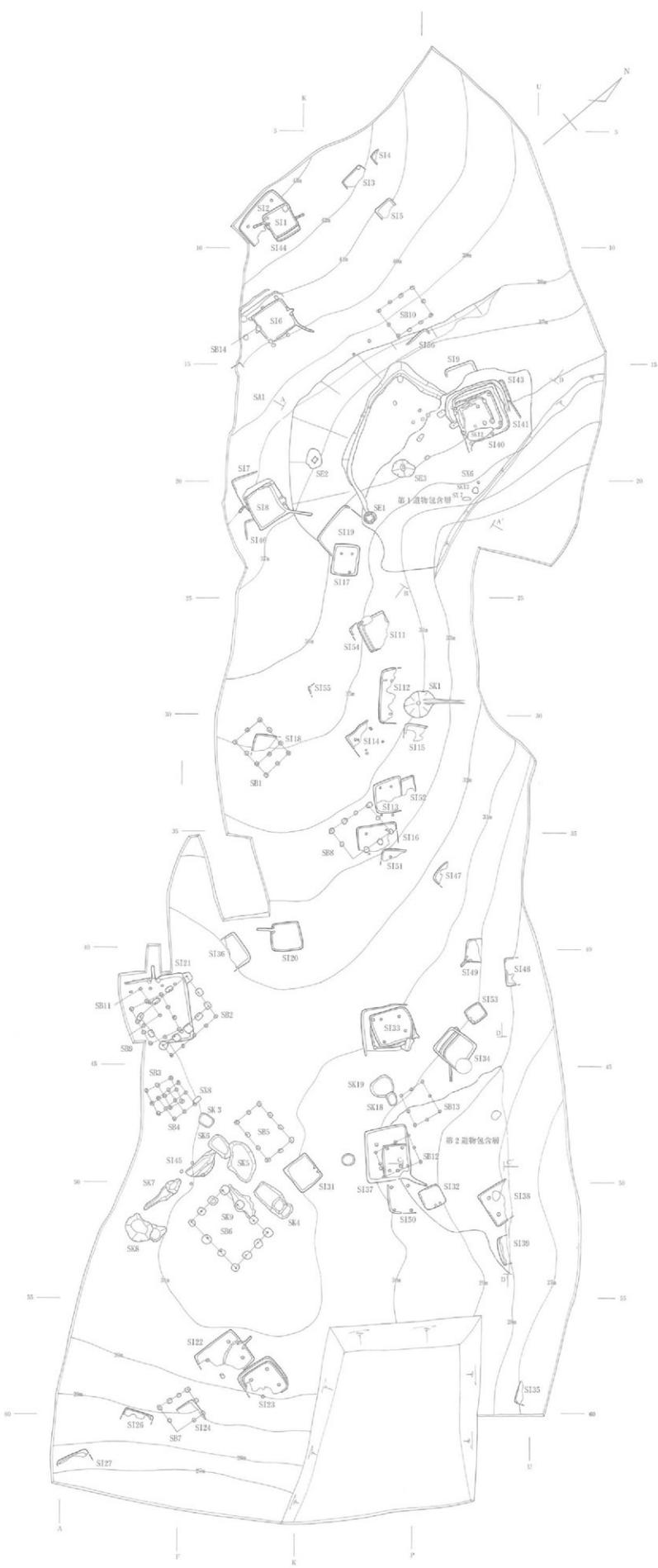
III区は丘陵斜面が大きく削平を受けた人為的な平坦面であったため、遺構は検出されなかった。表土から古代の遺物が少数出土した。

IV区で掘立柱建物跡、竪穴住居跡などが検出されたので、事前調査を行い、掘立柱建物跡2棟、柱列跡2条、竪穴住居跡3棟、遺物包含層1箇所を検出した（第2・127図）。宮城県教育庁文化財保護課、河北地区教育委員会、地権者で協議し、遺構面を土盛り保存した後に民家を移転・建設するよう

地権者に指導して、了承が得られた。そのため、遺構の掘り下げは孤立柱建物跡、柱列跡について必要最小限に留め、竪穴住居跡、遺物包含層の掘り下げは行わなかった。IV区の概要については、一連の遺跡であるため、本報告書に記すことにした。



第2図 新田東遺跡の調査区配置図 (1/2,000)



第3図 新田東遺跡 I 区検出主要遺構全体図

第3章 I区で発見された遺構と遺物

I区は本調査の主体となる調査区である。検出された主な遺構には、掘立柱建物跡14棟、竪穴住居跡49棟（建て替えを含めると60棟）、井戸跡3基、焼成遺構2基、炉跡1基、土壙20基、平場1などがあり、この他に遺物包含層2箇所がある（第3図、図版1・2）。

1. 掘立柱建物跡

【SB 1 掘立柱建物跡】（平面図・断面図：第4図、遺物：第5図、図版3-1）

〔位置〕調査区中央部西際、丘陵尾根上の標高35m付近に位置する。柱穴の残存状況と地形からみて、南半部は上部を大きく削平されている。

〔重複〕S 18竪穴住居跡と重複するが、S 18竪穴住居跡の残りが悪く、新旧関係は不明である。

〔柱間数・棟方向〕桁行3間、梁行2間の東西棟で、東妻より西に1間目に間仕切りがある。

〔柱穴〕一辺40~50cm程の方形で、深さは最も残りのよい北西隅柱穴で37cm、最も残りの悪い東妻棟通り下柱穴で10cmある。間仕切りの柱穴は一辺45cmの正方形で、深さ20cmある。埋土は地山粘板岩礫片を多く含む褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕直径約18cmの円形で、しまりの悪い褐色土である。

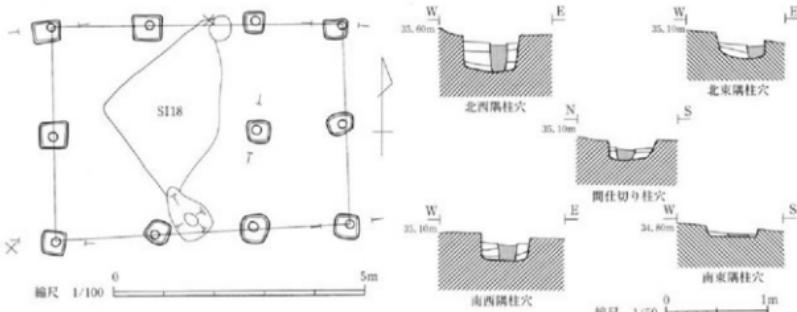
〔平面規模〕桁行総長は北側柱列で約5.8m、柱間寸法は西から2.0m・2.1m・1.7mである。梁行総長は東妻で約4.0m、柱間寸法は北から2.0m・2.0mである。

〔方向〕東妻でみると北で西に約3°偏る。建物の方向は丘陵尾根・等高線とは無関係である。

〔出土遺物〕掘方から土師器壺・甕、須恵器壺、繩文土器深鉢の破片が少数出土した。土師器はいずれも製作にロクロを使用しないもの（以下、「非ロクロ調整」と略称する）で、壺は体部に段のあるものである。須恵器壺（1）は静止糸切り後に体下部～底部を回転ヘラケズリしたものである。また、柱痕跡から非ロクロ調整の土師器壺・甕、須恵器甕の破片が少数出土した。

【SB 2 掘立柱建物跡】（平面図：第6・59図、断面図：第7図、遺物：第8図、図版3-2~4）

〔位置〕調査区中央部南寄りの西際、丘陵尾根上や西側の標高31.5m付近に位置する。柱穴の残存状況と地形からみて、南半部は大きく削平されているとみられる。



第4図 SB 1 掘立柱建物跡平面図（1/100）・断面図（1/50）

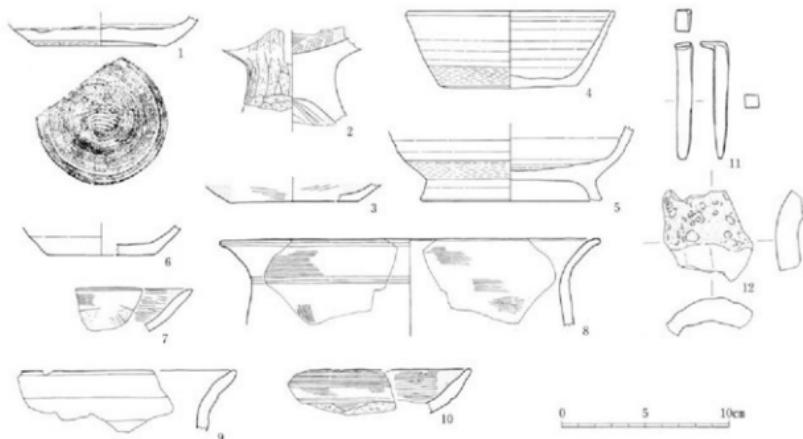
〔重複〕 S I 21堅穴住居跡、S B 9・11掘立柱建物跡と重複する。S I 21堅穴住居跡よりも新しく、S B 9・11掘立柱建物跡よりも古い。

〔柱間数・棟方向〕 衍行4間、梁行3間の南北棟で、東側に廂が付く。東側柱列と東廂が衍行4間、西側柱列が衍行3間と変則的である。

〔柱穴〕 身舎の柱穴は一辺1.1m前後の正方形または長辺約1.1m、短辺約0.7mの長方形で、深さは最も残りのよい北西隅柱穴で90cm、最も残りの悪い南妻柱通り下柱穴で54cmある。南西隅柱穴を除く身舎柱穴はいずれも柱痕跡部分を深く段掘りしている。また、身舎の柱穴では斜面側にあたる南妻柱穴3箇所とそれ以外の柱穴3箇所で板状の粘板岩礫片や須恵器甕の大きめの体部破片(11~13)を礎盤に入れている。廂の柱穴は一辺約40cmの正方形のものが多く、身舎の柱穴よりかなり小さい。深さも、最も残りのよい北端から1間目柱穴でも43cmと、身舎の柱穴よりも約50cm浅い。段掘りではなく、礎盤も入れていない。身舎・廂の柱穴とも埋土は粘板岩礫片を多く含む暗褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕 身舎は径約30cmの円形、廂は径約24cmの円形である。堆積土は粘板岩礫片、明黄褐色土を含む褐色土で、しまりが悪い。

〔平面規模〕 衍行総長は東側柱列で約7.7m、柱間寸法は北から1.9m・1.9m・2.1m・1.8mである。

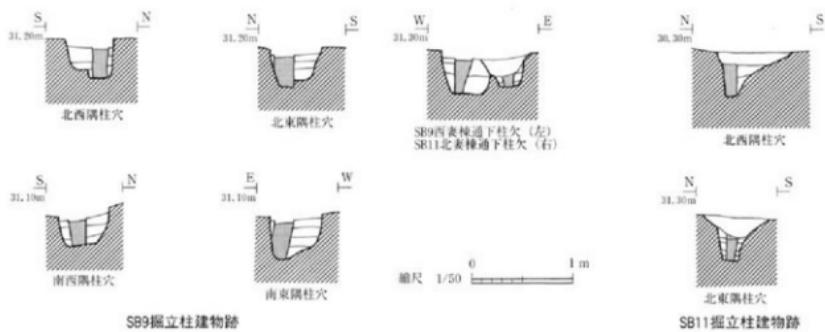
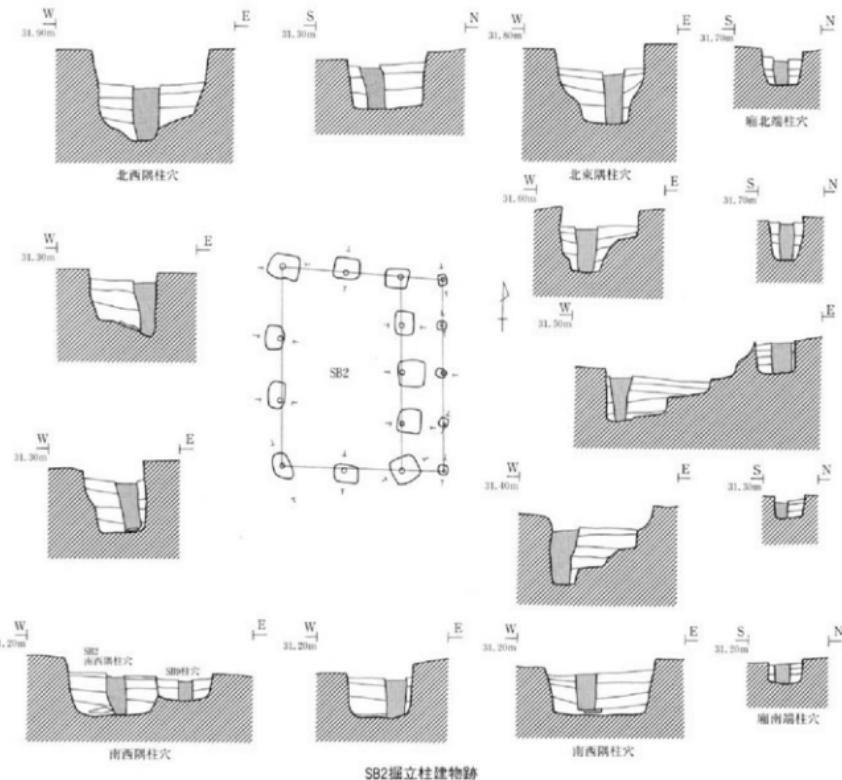


番号	種類	分類	遺構	概状	残存	寸	写真収納
1	漆器鉢	A3	S B1	北西隅柱穴六方	口徑7.8cm、外周：底盤静止せず切り下部～底盤凹部へラグラク付、断面サンディック状。	001	
2	土器鉢	S106		内表面より1間目柱穴六方	破片、断口クロコ調節、外周：丁目らへラケズリ、内面：ヘラミギテー黒色経斑。	34-4	001
3	土器鉢	I CT1	S106	北西隅柱穴六方	破片、口徑7.6cm、断口クロコ調節、平底、外周：ヘラミギテー黒色経斑、内面：ヘラミギテー黒色経斑。	001	
4	漆器鉢	B1	S106	西妻面より1間目柱穴六方取穴	定形、口徑12.4、底径8.2、高さ4.7cm、外周：底盤へラ切り一部品ナメ・付子面凹部へラケズリ。	34-5	001
5	須恵器鉢	AorB2	S106	東妻面より1間目柱穴六方	1/2、口徑10.8cm、底面不明し不明一体子面へ底盤凹部へラケズリ・付子面へ西ヨロクロナメ。	001	
6	漆器鉢	B2	S103	北西隅柱穴中央六方痕跡	破片、体下部へ底盤へラケズリ、底径6.4cm、外周：回転形切り無痕。	001	
7	土器鉢	I B2	S109	北西隅柱穴六方	破片、口縁部凹部、素ヤロコ調節、外周：口縁コナメ、体部分ヘラケズリ、内面：ヘラミギテー黒色経斑。	001	
8	土器鉢	I A	S109	北西隅柱穴六方	破片、口径22.6cm、素ヤロコ調節、外周：口縁コナメ、体部分ヘラミギテー黒色経斑。	001	
9	土器鉢	I A	S107	北西隅柱穴六方	破片、口縁部凹部、素ヤロコ調節、外周：ナメ・摩滅。	001	
10	土器環	I B1	S B11	北妻柱通り下柱穴六方取穴	口縁へ体部破片、丸底付灰、出ロクロ調節、外周：ナメ・ガラス・黒色経斑。	001	
11	鉢	S106		崩倒不明	深形、万葉脚。口径3.1cm、底盤3.3×0.8cm長方型、体形高約0.8cm前後。	37-3	001
12	漆器口	S95		朝鮮村西より1間目柱穴六方	破片、残存幅5.5cm、残存幅5.3cm、底定幅6.8cm。	028	

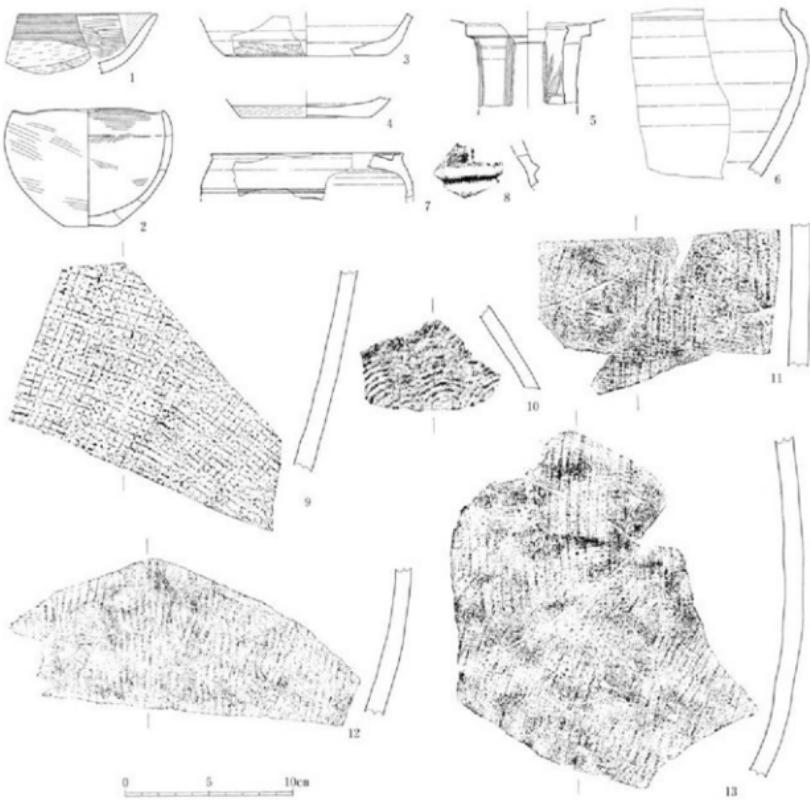
第5図 SB1-3・5・6・7・9・11掘立柱建物跡出土遺物



第6図 SB2・3・4・9・11根立柱建物跡平面図 (1/100)



第7図 SB2・9・11掘立柱建物跡断面図(1/50)



番号	種類	分類	個数	残存	特徴	備考	写真	取扱
1	土器器皿	I B2	西側柱列北より1周目柱穴断片	破片	表面クロコ調。外面：口縁ヨコナギ、体部手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		001	
2	土器器皿	I C	新ピット	3/5	口径9.1、底径3.0、高さ7.0cm。表面クロコ調。外面：体部ヘラミガキ。津屋。底部ケズリ→ヘラミガキ。手縫。	33-24	001	
3	土器器皿	A5	身寄南東隅柱穴断片	破片	口径9.6cm。外面：底面ヘラミ切口→体下部→底部手持ちヘラケズリ。焼成良好。		001	
4	土器器皿	B3	西側柱列北より2周目柱穴断片	破片	口径7.8cm。外面：底面切口端に不明→体下部→底部同軸ヘラケズリ。焼成不良。		001	
5	土器器皿	B3	西側柱列北より2周目柱穴断片	破片	片端が複合で崩落した部分破片。接合部に2条の跡線ある。環状部2段構成。環部に長方形透かしミ字半位。外面：ヨコナギ→透かしヘラケズリ、透かし面手持ちヘラケズリ。内面：縫目11。ロクロナギ。焼成堅壁。	33-25	001	
6	土器器皿	B	西側柱列北より1周目柱穴	破片	脚部→体下部断片。口径6.9、底径3.0cm。底部と海部との間に発かないタイプ。縁の上端が済む。脚間に横筋の次縁。縁と透かし。焼成堅壁。	33-26	001	
7	円筒瓶		西側柱列北より2周目柱穴	破片	底面貫。直径約11.4cm。底面部分約10.4cm。底部と海部との間に発かないタイプ。縁の上端が済む。脚間に横筋の次縁。縁と透かし。焼成堅壁。		001	
8	円筒瓶		西側柱列北より2周目柱穴	破片	底面貫。脚部破片。外面：ロクロナギ。十字透かし、底辺沈線。底辺疊帶。内面：ヨクロナギ。焼成堅壁。SII-10(第1回測定)と同一標本。	33-26	001	
9	土器器皿		身寄北西隅柱穴断片	破片	脚部破片。外面：正格子叩き目。内面：平行当て具縁→ナギ。焼成堅壁。		001	
10	土器器皿		西側柱列北より2周目柱穴断片	破片	外面：同心円状叩き目。内面：同心円状当て具縁。灰白色。胎土に細かい砂粒含む。焼成不良。北側東系。	33-27	001	
11	土器器皿		身寄南東隅柱穴断片	破片	脚部破片。外面：平行叩き目。内面：無文当て具縁。ナギ。焼成普通。	34-1	001	
12	土器器皿		西側柱列北より2周目柱穴断片	破片	脚部破片。外面：平行叩き目。内面：ナギ。焼成普通。	34-2	001	
13	土器器皿		身寄南東隅柱穴断片	破片	脚部破片。外面：平行叩き目。内面：ナギ。焼成普通。	34-3	001	

第8図 SB 2 据立柱建物跡出土遺物

また、西側柱列で約7.9m、柱間寸法は北から2.8m・2.5m・2.6mである。梁行総長は北妻で約4.7m、柱間寸法は西から2.5m・2.2mである。また、南妻で総長約4.7m、柱間寸法は西から2.4m・2.3mである。廟の出は北妻から1.7m、南妻から1.7mである。平面形は東側柱列が西側柱列より0.2m短いため、やや歪んでいる。

〔方向〕東妻でみると北で西に約1°偏り、ほぼ磁北を向く。

〔出土遺物〕掘方から非クロロ調整の土師器坏（1）・甕、須恵器坏（3・4）・高台坏・蓋・高坏（5）・甕（9～13）、円面硯（7・8）、縄文土器深鉢の破片が少數出土した。土師器坏には丸底気味のもの（1）、体下部に段のあるものがある。須恵器坏には体下部～底部を手持ちヘラケズリしたもの（3）、体下部～底部を回転ヘラケズリしたもの（4）がある。また、柱痕跡などから非クロロ調整の土師器坏・壺（2）・甕、須恵器坏・鉢（6）・甕の破片が少數出土した。須恵器甕の体部破片の中には体部外面に同心円状叩き目痕のあるもの（10）が1点あり、北関東系のものとみられる。

【S B 3 掘立柱建物跡】（平面図：第6図、断面図：第9図、遺物：第5図）

〔位置〕調査区中央部南寄りの西際、丘陵尾根上やや西側の標高31m付近に位置する。

〔重複〕S B 4 掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

〔柱間数・棟方向〕桁行2間、梁行2間の総柱建物である。

〔柱穴〕一辺40～50cmの方形または隅丸方形を基調とし、深さは最も深い北東隅柱穴で65cm、最も浅い南西隅・北西隅柱穴で35cmである。北西隅柱穴と西側柱列中央柱穴では、柱位置を段掘りしている。埋土は地山土ブロックを含む明褐色土・明黄褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕南西隅柱穴と南側柱列中央柱穴では柱が抜き取られているが、それ以外の7箇所の柱穴で柱痕跡を確認した。柱痕跡は直径16～18cmの円形で、堆積土は地山粒・炭化物を少量含むしまりの悪い暗褐色土である。

〔平面規模〕西側柱列で総長3.50m、柱間寸法は北から1.80m・1.70mである。また、北側柱列で総長3.40m、柱間寸法は西から1.70m・1.70mである。

〔方向〕西妻でみると北で東に約10°偏る。建物の方向は丘陵尾根とは無関係である。

〔出土遺物〕掘方から非クロロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・蓋、縄文土器深鉢の破片が少數出土した。このうち土師器坏には体下部に段のあるものがある。また、柱痕跡から非クロロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、縄文土器深鉢の破片が少數出土した。このうち土師器坏には平底のもの、須恵器坏には回転糸切り無調整のもの（6）がある。

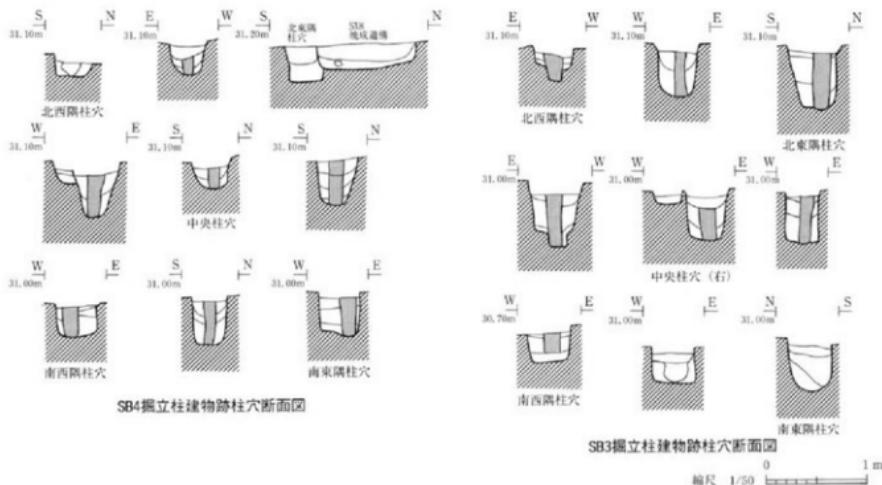
【S B 4 掘立柱建物跡】（平面図：第6図、断面図：第9図）

〔位置〕調査区中央部南寄りの西際、丘陵尾根上やや西側の標高31m付近に位置する。

〔重複〕S B 3 掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。また、北西隅柱穴はS X 8 焼成遺構と重複し、これよりも古い。

〔柱間数・棟方向〕桁行2間、梁行2間の総柱建物である。

〔柱穴〕一辺40～50cmの方形または隅丸方形を基調とし、深さは最も深い西側柱列中央柱穴で56cm、



第9図 SB3・4 挖立柱建物跡柱穴断面図

最も浅い北西隅柱穴で32cmである。埋土は地山土ブロックを含む明褐色土・明黄褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕すべての柱穴で柱痕跡を確認した。北西隅柱穴と北側柱列中央柱穴では柱が切り取られている。柱痕跡は直径14~16cmの円形で、堆積土は地山粒・炭化物を少量含むしまりの悪い暗褐色土である。

〔平面規模〕北側柱列で総長3.55m、柱間寸法は西から1.65m・1.90mである。西側柱列で総長3.35m、柱間寸法は北から1.60m・1.75mである。

〔方向〕西側柱列でみると北で東に約2°偏る。建物の方向は丘陵尾根とは無関係である。

〔出土遺物〕掘方から非クロロ調整の土師器壺・甕、須恵器壺・甕、縄文土器深鉢の破片が少數出土した。このうち須恵器壺には体下部～底部を回転ヘラケズリした底部小破片がある。また、柱痕跡から非クロロ調整の土師器甕、須恵器壺の破片が少數出土した。

【SB5 挖立柱建物跡】(平面図・断面図: 第10図、遺物: 第5図、図版4-1)

〔位置〕調査区南半部、丘陵尾根上の標高31m付近に位置する。

〔重複〕重複はない。

〔柱間数・棟方向〕桁行3間、梁行2間の東西棟である。

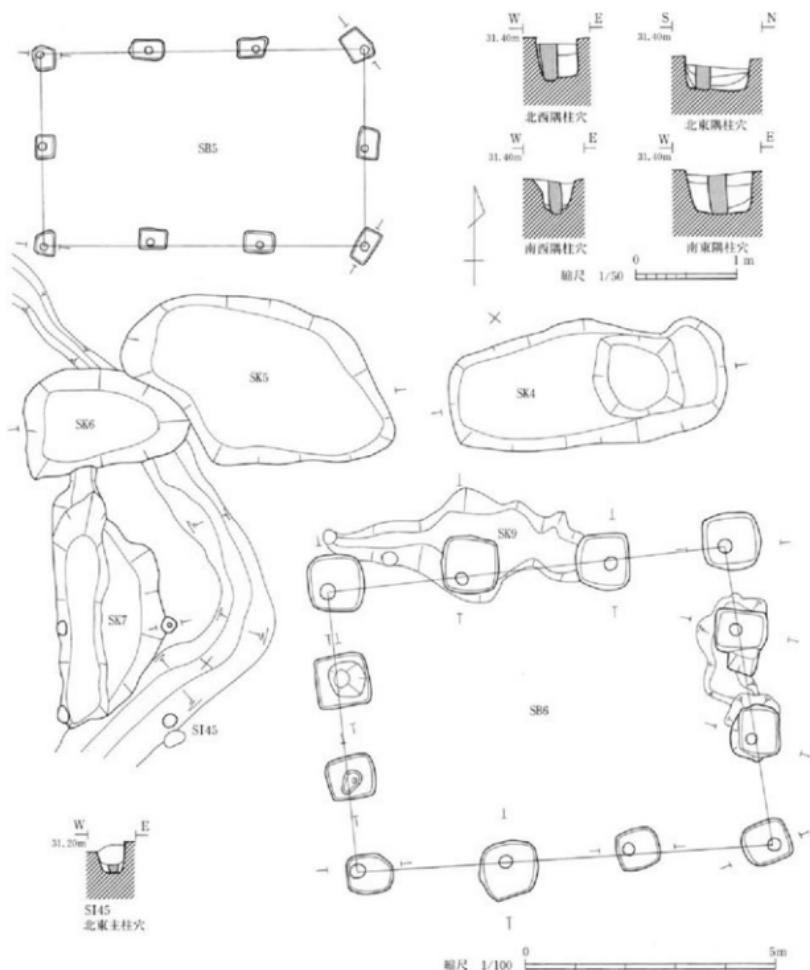
〔柱穴〕長辺60~70cm、短辺約40cmの長方形または一辺40~50cmの方形を基調とし、深さは最も深い南東隅柱穴で56cm、最も浅い北東隅柱穴で34cmある。埋土は明褐色土ブロックを多く含む暗褐色土・明褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕直径約15~18cmの円形で、堆積土はしまりの悪い黄褐色土である。

〔平面規模〕 桁行総長は北側柱列で約6.4m、柱間寸法は西から2.1m・2.1m・2.1mである。梁行総長は東妻で約4.0m、柱間寸法は北から2.0m・2.0mである。

〔方向〕 東妻でみると北で東に約1°偏り、磁北とほぼ一致する。

〔出土遺物〕 掘方から非ロクロ調整の土師器壺・甕、縄文土器深鉢、韁羽口（12）の破片、柱痕跡から非ロクロ調整の土師器甕の破片が少數出土した。



第10図 SB5・6 据立柱建物跡平面図（1/100）、SB5 据立柱建物跡柱穴断面図（1/50）

【SB 6 挖立柱建物跡】(平面図: 第10図、断面図: 第11図、遺物: 第5図、図版4-2)

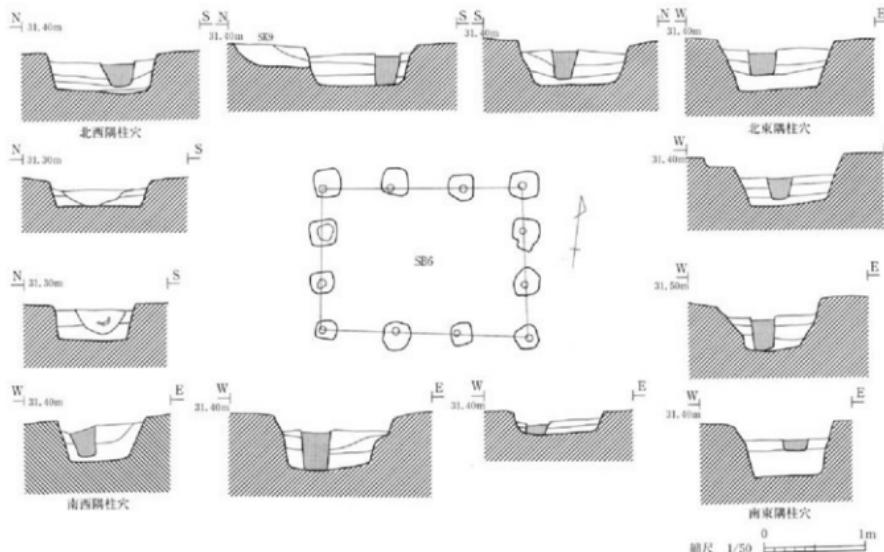
〔位置〕調査区南半部に位置し、標高31m付近の丘陵尾根上にある。

〔重複〕SK 9 土壇と重複し、これよりも新しい。

〔柱間数・棟方向〕桁行3間、梁行3間の東西棟である。

〔柱穴〕一辺約0.8~1.2mのほぼ正方形または長方形を基調とし、深さは最も残りのよい南東隅柱穴で64cm、最も残りの悪い西妻北から1間目柱穴で26cmある。東側柱列の北から1間目柱穴では南側を段掘りしている。埋土は径1~8cmの粘板岩礫片を多く含む暗褐色土・褐色土の互層でしまりがよい。

〔柱痕跡〕柱が抜き取られている西妻の北から1・2間目柱穴を除く10箇所の柱穴で柱痕跡を確認した。直径24cm前後の円形で、堆積土は径1cm以下の粘板岩礫片を少量含み、しまりの悪い黒褐色土である。北東隅柱穴、東側柱列の北から1間目柱穴、南東隅柱穴、南西隅柱穴、西妻の北から2間目柱穴、北西隅柱穴、北側柱列の東から1間目柱穴の7箇所の柱穴では、柱痕跡の底面が掘方の底面に接していない。このうち東側柱列の北から1間目柱穴、南西隅柱穴、西妻の北から2間目柱穴、北西隅柱穴、北側柱列の東から1間目柱穴の5箇所の柱穴では、柱痕跡の底面が掘方の底面より6~8cm上にあり、北東隅柱穴では16cm、南東隅柱穴では26cm上にあり、掘方底面との差が大きい。しかし、柱痕跡の底面レベルは30.8m前後とほぼ同じ標高にあり、本建物を建てる際に柱の高さを調節したことによるものと考えられる。



第11図 SB 6 挖立柱建物跡柱穴断面図 (1/50)

〔平面規模〕桁行総長は北側柱列で約8.0m、柱間寸法は西から2.7m・3.0m・2.3mである。梁行総長は東妻で約6.0m、柱間寸法は北から1.7m・2.2m・2.1mである。

〔方向〕東妻でみると北で西に約9°偏る。建物の方向は丘陵尾根とは無関係である。

〔出土遺物〕掘方から非クロロ調整の土師器壺（3）・高壺（2）・甕、須恵器壺・高台壺（5）・甕の破片、炭化した種子（モモ）破片が少數出土した。このうち須恵器壺・高台壺（5）は体下部～底部を回転ヘラケズリしている。柱抜取穴からは底部をヘラ切り後に体下部を回転ヘラケズリした完形の須恵器壺（4）1点の他、非クロロ調整の土師器甕の破片が少數出土した。また、柱痕跡から非クロロ調整の土師器壺・甕の破片が少數出土した。他に鉄釘（11）が1点出土した。

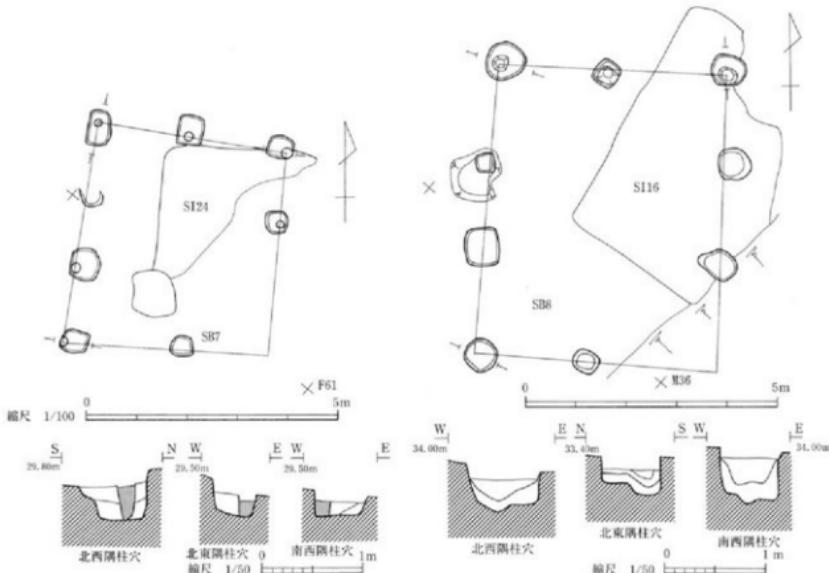
【S B 7 挖立柱建物跡】（平面図・断面図：第12図、遺物：第5図）

〔位置〕調査区南半部南端、丘陵尾根上の標高29m付近に位置する。

〔重複〕SI24堅穴住居跡と重複し、これよりも新しい。

〔柱間数・棟方向〕桁行3間、梁行2間の南北棟である。

〔柱穴〕一辺40～60cmのほぼ正方形または長辺70cm前後、短辺45～60cmの長方形を基調とし、最も残りのよい北西隅柱穴で深さ52cmある。東側柱列の北から2間目柱穴、南東隅柱穴は削平されて残存していない。埋土は径1～8cmの粘板岩礫片を多く含む暗褐色土・にぶい黄褐色土の互層で、しまりがよい。



- 【柱痕跡】直徑約16cmの円形で、堆積土は暗褐色またはにぶい黄褐色土で、しまりが悪い。
- 【平面規模】桁行総長は西側柱列で約4.4m、柱間寸法は北から2.9m（2間分）・1.5mである。梁行総長は北妻で約3.8m、柱間寸法は西から1.8m・2.0mである。
- 【方向】東妻でみると北で東に約9°偏る。
- 【出土遺物】掘方から非ロクロ調整の土師器甕（9）の破片、柱痕跡から須恵器甕の破片が少數出土した。
- 【S B 8 挖立柱建物跡】（平面図・断面図：第13図、図版4-3）
- 【位置】調査区中央部、丘陵尾根上の標高33m付近に位置する。
- 【重複】S I 16堅穴住居跡と重複する。S I 16堅穴住居跡より新しい。S I 13堅穴住居跡との新旧関係は不明である。また、S I 13堅穴住居跡と近接し、これと同時には存在しない。
- 【柱間数・棟方向】桁行3間、梁行2間の南北棟である。
- 【柱穴】一辺40~80cmのほぼ正方形を基調とし、深さは最も残りのよい北西隅柱穴で52cmある。南東隅柱穴は削平されて残存していない。各柱穴の多くは柱抜取穴が大きく入り、埋土がほとんど残っていない。柱抜取穴の堆積土は地山土ブロックを含む褐色土・にぶい黄褐色土で、しまりがない。
- 【柱痕跡】柱はいずれも抜き取られ、柱痕跡の大きさは不明であるが、各柱穴の底面には円形の窪みがあり、柱痕跡を反映しているとみられる。
- 【平面規模】桁行総長は西側柱列で約5.8m、柱間寸法は北から約1.9m・約1.8m・約2.2mと推定される。梁行総長は北妻で約4.4m、柱間寸法は西から約2.1m・約2.4mと推定される。
- 【方向】西側柱列でみると北で東に約5°偏ると推定される。
- 【出土遺物】掘方から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕の破片が少數出土した。
- 【S B 9 挖立柱建物跡】（平面図：第6・59図、断面図：第7図、遺物：第5図、図版3-2）
- 【位置】調査区中央部南寄りの西際、丘陵尾根上や西側の標高31.5m付近に位置する。
- 【重複】S I 21堅穴住居跡、S B 2・11挖立柱建物跡と重複する。S I 21堅穴住居跡、S B 2挖立柱建物跡よりも新しく、S B 11挖立柱建物跡よりも古い。
- 【柱間数・棟方向】桁行3間、梁行2間の東西棟である。
- 【柱穴】一辺約50cmの正方形を基調とし、深さは最も残りのよい南東隅柱穴で46cm、最も残りの悪い南側柱列東より2間目柱穴で26cmある。埋土は径2~6cmの粘板岩礫片、明黄褐色土ブロックを多量に含む暗褐色土の互層で、しまりがよい。
- 【柱痕跡】すべての柱穴で柱痕跡を確認した。直徑約16cmの円形で、堆積土は径1cm以下の粘板岩風化礫片、黄褐色土ブロックを多く含む褐色土で、しまりが悪い。
- 【平面規模】桁行総長は南側柱列で約5.2m、柱間寸法は西から1.8m・1.5m・1.9mである。梁行総長は東妻で約4.3m、柱間寸法は北から2.1m・2.2mである。なお、北側柱列の桁行総長が約5.2mと南側柱列よりも0.1m短いため、平面形はやや歪んでいる。
- 【方向】東妻でみると北で東に約12°偏る。

〔出土遺物〕 挖方から非ロクロ調整の土師器壺（7）・甕（8）、須恵器壺・甕の破片が少數出土した。このうち須恵器壺には体下部～底部を持ちヘラケズリしたもの、回転ヘラケズリしたものがある。柱痕跡から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器壺・蓋・甕の破片が少數出土した。

【SB10掘立柱建物跡】（平面図・断面図：第14図、図版5-1）

〔位置〕 調査区北半部、丘陵尾根上やや北寄りの標高39m付近に位置する。

〔重複〕 重複関係はない。西に隣接するSI56住居とは同時には存在しない。

〔柱間数・棟方向〕 桁行3間、梁行2間の南北棟である。

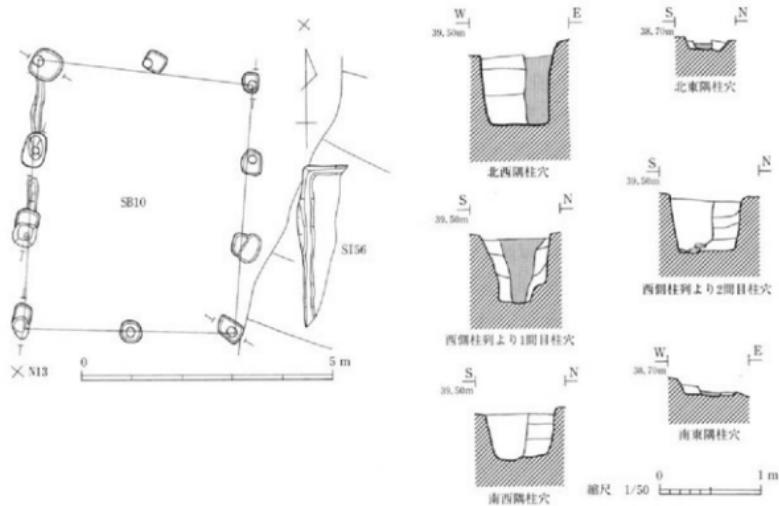
〔柱穴〕 一辺約40～50cmの隅丸方形または長方形を基調とし、深さは最も残りのよい北西隅柱穴、西側柱列の北から1間目柱穴で68cm、最も残りの悪い北東隅柱穴で14cmある。埋土は径1～3cmの地山土ブロックを含む灰黄褐色・明黄褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕 北東隅柱穴、東側柱列の北から1間目柱穴、南東隅柱穴、南妻棟通り下柱穴、北西隅柱穴の5箇所で柱痕跡を確認した。それ以外の5箇所の柱穴では柱が抜き取られ、柱痕跡を確認できなかった。柱痕跡は径約17cmの円形である。柱痕跡と柱抜取穴の堆積土は、しまりの悪い灰黄褐色土である。

〔平面規模〕 桁行総長は西側柱列で約5.0m、柱間寸法は北から1.5m・3.5m（2間分）である。梁行総長は北妻で約4.3m、柱間寸法は西から2.2m・2.1mである。

〔方向〕 東側柱列でみると北で東に約5°偏る。

〔出土遺物〕 挖方から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器壺・甕の破片、柱抜取穴から須恵器壺の破片が少數出土した。



第14図 SB10掘立柱建物跡平面図（1/100）・断面図（1/50）

【S B11掘立柱建物跡】(平面図: 第6・59図、断面図: 第7図、遺物: 第5図、図版3-2)

〔位置〕 調査区中央部南寄りの西際、丘陵尾根上やや西側の標高31.5m付近に位置する。

〔重複〕 S I 21堅穴住居跡、S B 2・9掘立柱建物跡と重複し、これらよりも新しい。

〔柱間数・棟方向〕 柱行2間以上、梁行2間の南北棟と推定される。

〔柱穴〕 北妻、東側柱列北から1間目柱穴の3箇所の柱穴を検出した。長辺約25~35cm、短辺約20~25cmの長方形を基調とし、深さは最も残りのよい北西隅柱穴で45cm、最も残りの悪い東側柱列北から1間目柱穴で18cmある。埋土は径2~6cmの粘板岩礫片、明黄褐色土ブロックを多量に含む暗褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕 北妻の3箇所の柱穴には柱切取穴が大きく入り、その下で柱痕跡を検出した。柱痕跡は直径約14cmの円形で、堆積土はしまりが悪い褐色土である。東側柱列北から1間目柱穴では柱が大きく抜き取られ、柱痕跡を確認できなかった。

〔平面規模〕 柱行の柱間寸法は北から約2.4mである。梁行総長は北妻で約4.4m、柱間寸法は西から2.2m・2.2mである。

〔方向〕 北妻は西で北に約4°偏るので、東側柱列は北で東に約4°偏ると推定される。

〔出土遺物〕 柱抜取穴から非ロクロ調整の土師器壺・甕、須恵器甕の破片が少數出土した。このうち土師器壺には丸底気味で体下部に段のあるもの(11)、平底のものがある。

【S B12掘立柱建物跡】(平面図・断面図: 第15図、図版5-2)

〔位置〕 調査区南半部東寄り、丘陵尾根上北寄りの標高30m付近に位置する。

〔重複〕 S I 37堅穴住居跡と重複し、これよりも古い。

〔柱間数・棟方向〕 柱行3間、梁行2間の南北棟である。

〔柱穴〕 すべての柱穴を検出したが、西側柱列北から1間目柱穴は本建物よりも新しいS I 37B堅穴住居跡北西主柱穴に大きく壊されている(第91図)。長辺約40cm、短辺約30cmの隅丸長方形を基調とし、深さは最も残りのよい北妻棟通り下柱穴で53cm、最も残りの悪い南西隅柱穴で16cmある。埋土は径2cm以下の地山ブロックを多く含む暗褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕 西側柱列北から1間目柱穴以外の9箇所の柱穴で柱痕跡を確認した。柱痕跡は直径約15cmの円形で、堆積土は炭・焼土粒・地山粒を少し含むしまりのない暗褐色土である。

〔平面規模〕 柱行総長は東側柱列で約5.0m、柱間寸法は北から1.7m・1.4m・1.9mである。梁行総長は北妻で約3.7m、柱間寸法は西から1.8m・1.9mである。西側柱列の柱行総長が東側柱列より約0.2m短く、西妻の梁行総長が北妻より約0.2m短いため、平面形はやや歪んでいる。

〔方向〕 東側柱列でみると北で東に約16°偏る。

〔出土遺物〕 掘方から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕の破片、柱痕跡から非ロクロ調整の土師器甕の破片が少數出土した。

【S B13掘立柱建物跡】(平面図・断面図: 第15図、図版5-3)

〔位置〕 調査区南半部東寄り、丘陵尾根上北寄り、標高30m付近に位置する。

〔重複〕 重複はない。近接するS I 37堅穴住居跡、S B12掘立柱建物跡とは同時に存在しない。

(柱間数・棟方向) 棚行2間、梁行2間の東西棟である。

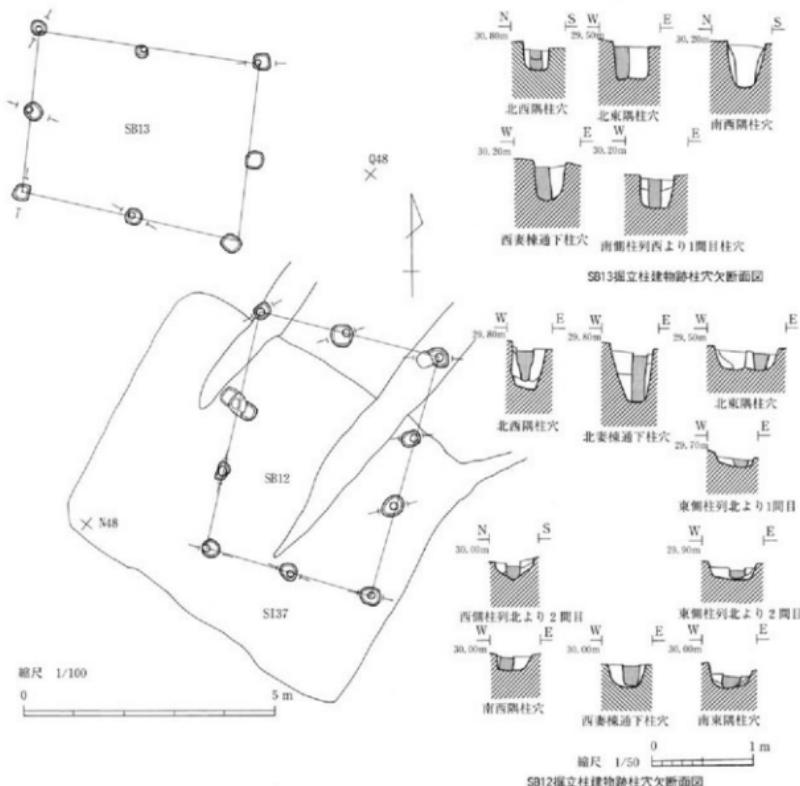
(柱穴) 8箇所の柱穴すべてを検出した。一辺30cm前後の隅丸正方形を基調とし、深さは最も残りのよい西妻棟通り下柱穴で51cm、最も残りの悪い北側柱列中央柱穴で17cmある。埋土は褐色土・黄褐色土で、しまりがよい。

(柱痕跡) 東妻棟通り下柱穴、南東隅柱穴、南西隅柱穴を除く5箇所の柱穴で柱痕跡を確認した。柱痕跡は直径約12cmの円形で、堆積土は暗褐色土で、しまりが悪い。

(平面規模) 棚行総長は北側柱列で約4.4m、柱間寸法は西から2.1m・2.3mである。梁行総長は西妻で約3.3m、柱間寸法は北から約1.6m・約1.7mと推定される。東妻の梁行総長が西より0.3m長いと推定されるため、平面形はやや歪む。

(方向) 西側柱列でみると北で東に約6°偏る。

(出土遺物) 挖方から縄文時代前期の縄文土器深鉢の破片が少数出土した。



第15図 SB12・13堀立柱建物跡平面図(1/100)・断面図(1/50)

【SB14掘立柱建物跡】(平面図・断面図: 第16図)

〔位置〕 調査区北半部西寄り、丘陵尾根上やや北寄りの標高40m付近に位置する。

〔重複〕 SI6整穴住居跡と重複し、これよりも新しい。

〔柱間数・棟方向〕 東西2間以上、南北2間以上の建物跡で、北・西側の柱列にあたる柱穴3箇所を検出した。調査区外に延び、東半部が大きく削平されているため、棟方向は不明である。

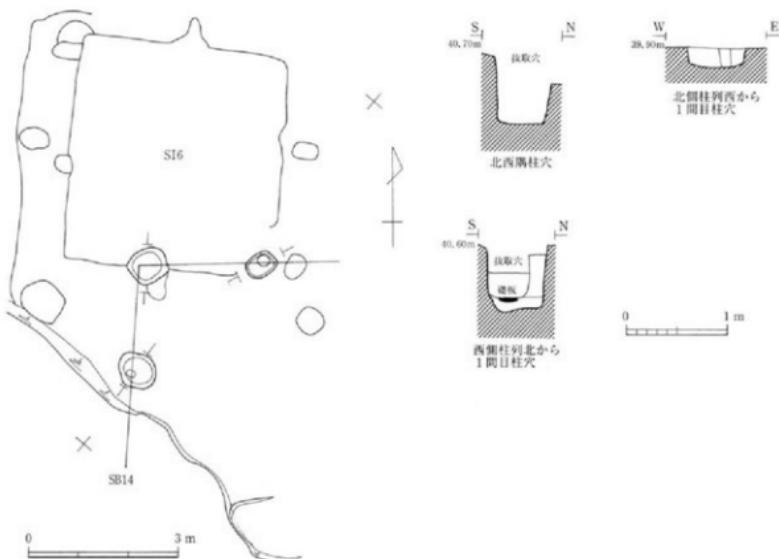
〔柱穴〕 長辺60~80cm、短辺45~70cmの長方形を基調とし、深さは最も残りのよい西側柱列北から1間目柱穴で70cm、最も残りの悪い北側柱列西から1間目柱穴で20cmある。埋土は黄褐色土で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕 北側柱列西から1間目柱穴で直径13cmの円形の柱痕跡を確認した。堆積土はにぶい黄褐色土でしまりが悪く、焼土粒を少量含む。西側柱列は柱が抜き取られている。また西側柱列北から1間目柱穴では、柱抜取穴底面で粘板岩板状礫片（長さ20cm、幅14cm、厚さ5cm）を用いた礫盤を検出した。

〔平面規模〕 柱間寸法は北側柱列で約2.5m、西側柱列で約2.2mと推定される。

〔方向〕 西側柱列でみると北で東に約4°偏ると推定される。

〔出土遺物〕 挖方から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕の破片が少数出土した。



第16図 SB14掘立柱建物跡平面図 (1/100)・断面図 (1/50)

2. 穴柱住居跡

57軒の穴柱住居跡を検出した。住居番号が一部順不同になるが、丘陵斜面の上方から下方に向かっ

て以下記載する。なお、索引のために以下の表を参照されたい。

件名	本文	遺構平面図	遺構断面図	遺物回面	柱居	本文	遺構平面図	遺構断面図	遺物回面
S11 p.22	第17図	第17・18図	第19図		S131 p.118	第89図	第89図	第89図	
S12 p.27	第17図	第18図	第19図		S132 p.129	第93図	第93図	第93図	
S13 p.28	第20図	第20図	なし		S133 p.98	第68・70図	第69・70図	第71・73図	
S14 p.29	第20図	第20図	なし		S134 p.197	第16・77図	第16・77図	第17～20図	
S15 p.29	第20図	第20図	第19図		S135 p.135	第99図	第99図	第99図	
S16 p.30	第21・22図	第22図	第23図		S136 p.82	第58図	第58図	第58図	
S17 p.46	第20図	第32図	第32図		S137 p.124	第91図	第91図	第92図	
S18 p.35	第25・27図	第29・31図	第29・31図		S138 p.131	第95図	第95図	第96・97図	
S19 p.48	第34図	第35図	第33図		S139 p.135	第98図	第98図	第98図	
S111 p.66	第60図	第60図	第46図		S140 p.49	第31・36・37・38・41図	第35～37・39図	第36・38・40～42・43図	
S112 p.69	第48図	第48図	第48図		S141 p.48	第34図	第33図	第33図	
S113 p.72	第51図	第52図	第53図		S143 p.47	第54図	第53図	第53図	
S114 p.69	第68図	第48図	なし		S144 p.23	第17図	第18図	なし	
S115 p.71	第69図	第49図	第49図		S145 p.117	第10図	第10図	なし	
S116 p.76	第51図	第52図	第53図		S146 p.47	第25図	第26図	なし	
S117 p.63	第44図	第44図	第44図		S147 p.78	第54図	第54図	なし	
S118 p.72	第50図	第50図	第50図		S148 p.94	第60図	第60図	第67図	
S119 p.65	第44図	第44図	第45図		S149 p.96	第66図	第66図	第67図	
S120 p.79	第55図	第55図	第56・57図		S150 p.127	第93図	第93図	なし	
S121 p.83	第59図	第60図	第61～65図		S151 p.78	第51図	第53図	第53図	
S122 p.137	第100図	第101図	第102図		S152 p.56	第51図	第52図	なし	
S123 p.103	第100図	第101図	第103図		S153 p.105	第74図	第74図	第75図	
S124 p.143	第104図	第104図	第105図		S154 p.68	第46図	第46図	第46図	
S126 p.146	第106図	第106図	なし		S155 p.68	第47図	第47図	なし	
S127 p.145	第107図	第107図	第107図		S156 p.14	第24図	第24図	なし	

I 区検出の竪穴住居跡の一覧

【S I 1竪穴住居跡】(平面図：第17図、断面図：第17・18図、遺物：第19図、図版 6－2・3)

〔位置〕調査区北西隅、丘陵尾根上北寄りの標高42m付近に位置する。

〔重複〕S I 2・44竪穴住居跡と重複し、これらよりも新しい。S I 44竪穴住居跡の位置を西側に約60cm移し、カマドの位置もS I 44竪穴住居跡とは正反対の南に移している。床面のレベルも一致していることから、S I 44竪穴住居跡の建て替えの可能性が高い。

〔平面形・規模〕平面形は長方形で、規模は南北が西辺で3.7m、東西が南辺で3.4mである。

〔方向〕西辺でみると北で西に約8°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの壁の高さは、最も残りのよい西辺で約40cmで、約100°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。東半部が大きく削平され、残りが悪い。

〔床面〕S I 44竪穴住居跡と同じく、大部分は地山面（黄褐色粘質土）を床面としている。ただし、東辺・南辺に沿って、S I 44竪穴住居跡の掘方埋土が一部にあり、この上面も床面としている。

〔カマド〕南辺の中央から約1m西寄りに付設されている。カマドの天井部は住居廃絶時に壊されていたが、左側壁、右側壁、燃焼部、煙道、煙出しピットが残されていた。左側壁は長さ75cm、高さは奥で35cm、焚き口で12cm、右側壁は長さ70cm、高さは奥で30cm、焚き口で12cm残存していた。両側壁外側の幅は下部で1.15mある。焚き口は下部幅約50cm、高さ12cm以上である。

燃焼部は奥行き60cm、幅45cm、奥壁高15cmで、深さ6cmの浅い皿状に掘り窪められ、焼土が堆積し、被熱・赤変していた。煙道は丘陵尾根の中軸線に直交するように南を向いて設けられ、カマド奥壁より外に向かって上向きに約4°傾斜しながら1.2m延び、その先に煙出しピットが付設されている。煙道は入り口幅19cm、最大幅27cmで、トンネル式の煙道天井部は削平され、深さ12cm残存する。煙出しピットは長径35cm、短径25cmの橢円形状で、深さ18cm残存し、煙道底面よりも3cm程深く窪めている。

カマドの両側壁は、粘板岩板状礫片を芯材として黄褐色～褐色粘質土を用いて作られている。カマドに用いられた粘板岩板状礫片は左側壁に3点、右側壁に2点残存していた。カマド天井部崩壊土にも粘板岩板状礫片が10点含まれていたので、カマド天井部にも粘板岩板状礫片が構築材として用いられていたと考えられる。これらの粘板岩板状礫片のうち、最も大きなものは右側壁奥に残るもので、長さ43cm、幅18cm、厚さ7cmあり、平坦面を内側に向けて立てられている。左側壁にもこれとほぼ同じ大きさのものが2点用いられており、平坦面を内側に向けて、内側に傾けて立てられている。この他、天井崩壊土に含まれる粘板岩板状礫片には長さ20cm前後、幅15cm前後、厚さ5cm程のものが多い。

カマド前面床下には、長さ61cm、幅43cm、深さ14cmの浅い床下土壤が掘られ、中に粘板岩板状礫片4点（最も大きなものは長さ36cm、幅32cm、厚さ5cm）を入れて、人為的に埋め戻して床面としている。また、カマド下の掘方は長さ約1.5m、幅約0.7m、深さ15cmの半円形の土壤状となっている。これら床下土壤やカマド下の掘方は、熱の遮断や水よけを考慮したものとみられる。

【周溝】各辺に幅20～30cm、深さ10～15cmの周溝が巡り、カマドの下は暗渠となる。住居構築時に人為的に埋め戻されている。

【主柱穴】主柱穴は認められない。

【堆積土】にぶい黄褐色土で、住居廃絶後に自然堆積している。

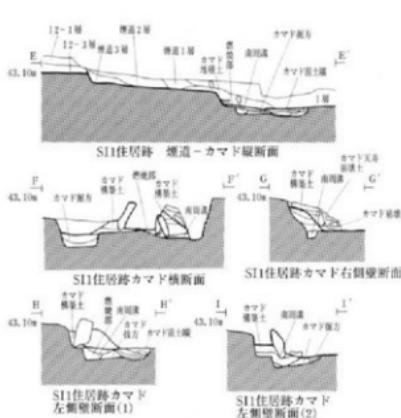
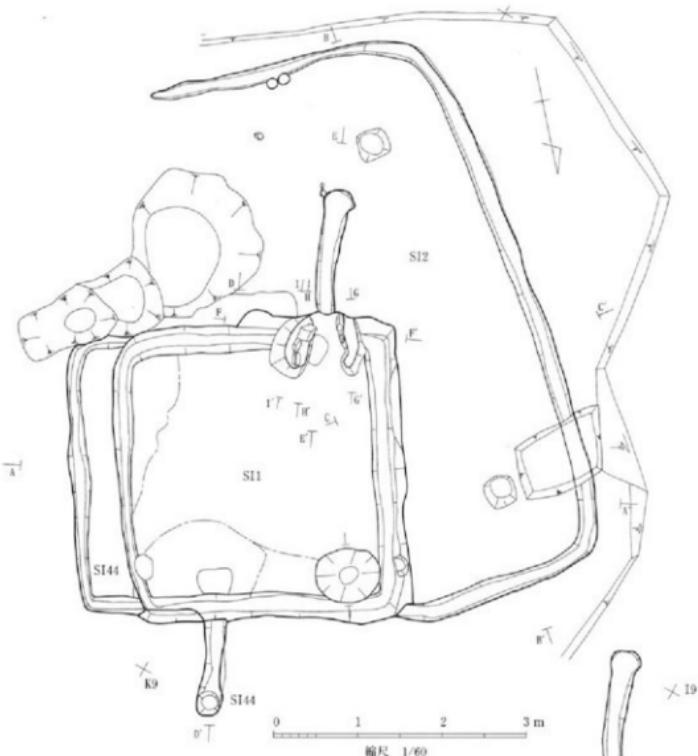
【出土遺物】カマド右脇床面近くから土師器甕（4）の破片、カマド内崩壊土から土師器甕・須恵器甕の破片、煙道から土師器環・甕の破片、堆積土から土師器環（1）・高台環・甕（3）、須恵器環・甕・短頸壺の破片が少數と円板状土製品（2）が1点出土した。土師器の多くはロクロ調整だが、甕には非ロクロ調整のものが少數ある。土師器環には底部回転糸切り無調整のものが4点、底部回転糸切り後に体下部を手持ちヘラケゼリしたもの（1）が1点ある。また、堆積土から土製支脚（9）、砥石（11・12）が出土している。

【S I 44堅穴住居跡】（平面図：第17図、断面図：第18図・図版6-2）

【位置】調査区北西隅、丘陵尾根上北寄りの標高42m付近に位置する。

【重複】S I 1・2堅穴住居跡と重複する。S I 1堅穴住居跡よりも古い。S I 2堅穴住居跡との新旧関係はないが、前述のようにS I 44堅穴住居跡からS I 1堅穴住居跡に建て替えられている可能性が高いこと、S I 1堅穴住居跡がS I 2堅穴住居跡よりも新しいことから、S I 44堅穴住居跡はS I 2堅穴住居跡よりも新しいと考えられる。

【平面形・規模】平面形は長方形、規模は南北が東辺で3.2m、東西はカマド左側の土壤の存在から



第17図 SI1・2・4堅穴住跡平面図・断面図 (1/60)

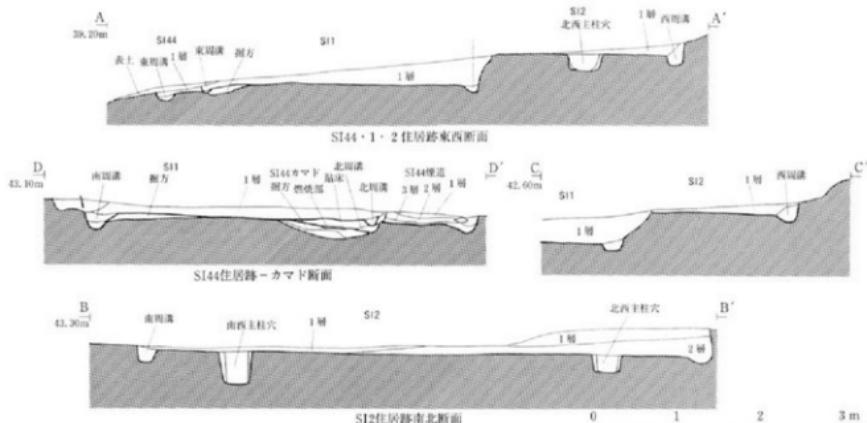
みて北辺で3.6m以上と推定される。

〔方向〕 東辺でみると北で西に約8°偏る。

〔壁〕 S I 1 壁穴住居跡に大きく壊され、東辺も上部を大きく削平されているため、検出面から床面までの壁の高さは5cm以下と残りが悪い。

〔床面〕 新しいS I 1 壁穴住居跡に大きく壊されているが、床面レベルはS I 1 壁穴住居跡と同じであり、大部分は地表面（黄褐色粘質土）を床面としていると考えられる。ただし、北辺に沿って掘方があり、掘方埋土上面も床面としている。

〔カマド〕 カマドは北辺の中央や東寄りに付設されている。カマド側壁・天井部はS I 1 壁穴住居跡構築時にはほぼ完全に取り払われていたが、燃焼部の一部と煙道、煙出しピット、カマド下の掘方を確認できた。燃焼部は奥行き30cm、幅42cm残存する。床面より約6cm低い位置にあり、床より



住居跡	層 位	特 徴
S I 1	掘方	褐色 (7.5YR4/4) 上に黄褐色 (10YR5/6) ブロック、厚1~3cmの粘板岩礫片が多く含む。しまりあり。人為堆積土。
	カマド掘方	表層色 (10YR5/6) 土、深1~5cmの粘板岩礫片を多く含む。しまりあり。人為堆積土。
	カマド機架部	表層色 (10YR7/8) 上に褐色 (7.5YR4/4) ブロック、厚1~2cmの粘板岩礫片、黄褐色粘質土ブロックを多く含む。
	カマド燃焼部	暗赤褐色 (3.5R3/6) 土、土を多量に含む。
	カマド前土塙	下部は黄褐色 (2.5YR5/6) 土で、土上・底を多く含む。その上に粘板岩を敷き、褐色 (7.5YR4/4) 土で埋める。最上部には厚さ5~8mmの薄灰層。
	壁	下部は黄褐色 (2.5YR5/6) 土で、土上・底を多く含む。その上に粘板岩を敷き、褐色 (7.5YR4/4) 土で覆し、しまりがあまりない。
S II	壁	褐色 (10YR4/4) 土、厚5~10mmの底を多く、底を少量含む。しまり性なし。自然堆積土。
	壁道1層	褐色 (10YR4/4) 土、厚2~3mmの粘板岩礫片、2~5mmの礫土・炭を多量含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	壁道2層	褐色 (10YR4/4) 土、厚2~3mmの粘板岩礫片、2~5mmの礫土・炭を多量含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	壁道3層	褐色 (10YR4/4) 土、厚2~5mmの粘板岩礫片を少量含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	カマド下周溝	褐色 (10YR4/4) 土、厚5~15mmの粘板岩礫片を多く含む。カマド下の南側溝は人為堆積土。
	周溝	褐色 (10YR4/4) 土、厚5~15mmの粘板岩礫片を多く含む。しまりややあり、粘性なし。自然堆積土。
S I 4-4	壁	表層色 (10YR4/4) 土、厚5~15mmの粘板岩礫片を多く含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	柱穴下周溝	褐色 (10YR5/6) 土、人為堆積土。
	周溝	褐色 (10YR5/6) 土。
	カマド燃焼部	暗赤褐色 (2.5R3/6) 土、土を多量に含む。
	壁道1層	表層色 (10YR4/3) 土、厚5~15mmの粘板岩礫片を含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	壁道2層	表層色 (10YR4/4) 土、厚5~15mmの粘板岩礫片を含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
壁道3層	表層色 (10YR4/4) 土、厚5~15mmの粘板岩礫片を含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。	
壁土1層	褐色 (7.5YR4/5) 土、壁下前の粘板岩礫片を多く含む。しまりあり。人為堆積土。	

第18図 S I 1・2・44壁穴住居跡断面図 (1/60)



番号	種類	分類	遺構	層位	残存	特徴	写真	収納
1	土器器環	II A	SII	埋土上層	<1/2	直径6.0cm。ロクロ調整。外側：底部回転手切り→体下部手持もヘラケズリ。内面：粗い斜材棒ヘラミガキ→黑色絞理。	002	
2	円板状土製品		SII	埋土上層		土製器円板の口縁～体下部を打た欠いて円板状土製品が軽用。高台径8.0cm。外側：底部回転手切り→高台融合→両ロクロナギ。内面：ヘラミガキ→黑色絞理。	22-1	002
3	土器器塊	II	SII	埋土上層		口縁13.2cm。ロクロ調整。口縁部分受け口状。	002	
4	土器器塊	II	SII	埋土上層		口縁14.2cm。ロクロ調整。口縁部分受け口状。カド右輪。口縁下部より衝土。	002	
5	土器器環	I BI	SII	床面	9/10	口縁12.4cm。高台3.1cm。素地ロクロ調、丸底気泡。外側：体下部に沈縫状の段。口縁～体下部ヘラミガキ。直角底。内面：ヘラミガキ→黑色絞理。	22-2	002
6	土器器高環		SII	床面	ほぼ完形	口縁14.4cm。高台3.1cm。脚部径7.2cm。脚部高2.4cm。口縁はカ底気泡で、体下部に段がある。脚部は脚部下部に凹痕状の段。脚部下部～脚部手持もヘラケズリ→脚部底コナギ。内面：脚部ヘラミガキ→黑色絞理。脚部手持もヘラケズリ。	22-3	002
7	土器器塊	I A	SII	床面	1/4	口縁14.0cm。直径4.0cm。高台7.1cm。丸底気泡。外側：体下部手持もヘラケズリ→口縁～体下部ヘラミガキ。内面：ヘラミガキ→黑色絞理。	002	
8	器器器蓋	A2	SII	埋土上層	<1/2	平底基。つまりなし。直面平頭。直面径8.2cm。底面～体底回転ヘラケズリ。	002	
9	器器器高台环	AorB2	SII	埋土上層	1/4	口縁12.6cm。外側：底面切り出し～手引～体下部～底部回転へラケズリ→高台接合→再びロクロナギ。	002	
10	カマド支柱?	SII	埋土上層		通片	1.00kg。残存長3.5cm。径1.0cm。外側：オサニエ。ナギ。	026	
11	礫石	SII	埋土上層		元形	粒板石製。長さ16.8cm。幅6.6cm。厚さ2.8cm。	39-9	033
12	礫石	SII	埋土上層		元形	粒板石製。長さ20.3cm。幅6.8cm。厚さ2.8cm。	39-15	033

第19図 S I 1・2・5 空穴住居出土遺物

やや埋められていたものとみられる。燃焼部の残存状況からみて、S I 1 竪穴住居跡と同程度のカマドと推定される。煙道は丘陵尾根の中軸線に直交するように北を向いて設けられ、カマド奥壁より竪穴住居外に向かって水平に85cm延び、その先に煙出しピットが付設されている。煙道は入り口幅25cm、最大幅26cmで、トンネル式の煙道天井部はほとんど削平され、深さ15cm残存する。煙出しピットは直径28cmの円形で、深さ20cm残存し、煙道底面よりも5cm深く埋めている。カマド下の掘方はわずかに残る燃焼部の下で検出された。長さ1.4m、幅1.1m、深さ13cmの浅い土壌状となつておらず、人為的に埋め戻された後にカマドが構築されている。

〔周溝〕 東辺・北辺・南辺で幅15~25cm、深さ5~8cmの周溝を検出した。S I 1 竪穴住居跡と同様に、各辺に巡ると考えられる。住居構築時に人為的に埋め戻されている。

〔土壤〕 住居の北西隅付近に1基ある。長径77cm、短径64cmの椭円形で、深さ34cmある。人為的に埋め戻されている。

〔その他〕 主柱穴、壁柱穴などの施設は認められない。

〔堆積土〕 S I 1 竪穴住居跡構築時に、カマドを取り扱ってから人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕 土壌からロクロ調整の土師器坏、堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、ロクロ調整の土師器坏の破片が少数出土した。このうち、堆積土出土のロクロ調整の土師器坏には、回転糸切り無調整の底部破片が1点ある。

【S I 2 竪穴住居跡】(平面図:第17図、断面図:第18図、遺物:第19図、図版6-2-4)

〔位置〕 調査区北西隅、丘陵尾根上北寄りの標高42m付近に位置する。

〔重複〕 S I 1・44竪穴住居跡と重複する。S I 1 竪穴住居跡よりも古い。S I 44竪穴住居跡との新旧関係はないが、S I 44竪穴住居跡からS I 1 竪穴住居跡に建て替えられている可能性が高いことと、S I 2 竪穴住居跡よりも古いことから、S I 44竪穴住居跡よりも古いと考えられる。

〔平面形・規模〕 平面形は長方形と推定され、規模は南北が西辺で6.7m、東西は南辺で3.3m以上である。

〔方向〕 西辺でみると北で西に約10°偏る。

〔壁〕 検出面から床面までの壁の高さは残りのよい南西隅付近で40cmあり、ほぼ垂直に立ち上がる。そこから離れるにつれて高さを減じ、北辺・南辺で周溝が途切れる箇所ではほとんど高さがない。

〔床面〕 地山面(黄褐色粘質土)を床面としている。

〔主柱穴〕 西辺から1.0m離れて北西主柱穴と南西主柱穴を検出した。掘方は一辺約40cmのほぼ正方形である。深さは北西主柱穴で20cm、南西主柱穴で60cmあり、南西主柱穴が深く掘られている。いずれも住居廃絶時に柱が抜き取られている。対角線上の位置に主柱穴が4箇所あったものと推定される。

〔カマド〕 東半部が大きく削平されているため、カマドの位置は不明であるが、西辺には付設されていないことは確実である。北辺で周溝が内側にわずか屈曲しており、ほぼ正方形と仮定するとこの箇所が北辺のほぼ中央にあたることから、北辺に付設されていた可能性がある。

〔周溝〕 西辺・北辺・南辺で幅20~25cm、深さ7~10cmの周溝を検出した。北辺・南辺の一部と東

辺は削平されているが、各辺に巡ると考えられる。住居構築時に人為的に埋め戻されている。

〔堆積土〕住居廃絶時に人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕床面から土師器有段坏（5）・高坏（6）・壺（7）の他、土師器坏破片、堆積土から土師器坏・壺の破片が少數出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整のものである。

【S I 3 竪穴住居跡】（平面図・断面図：第20図）

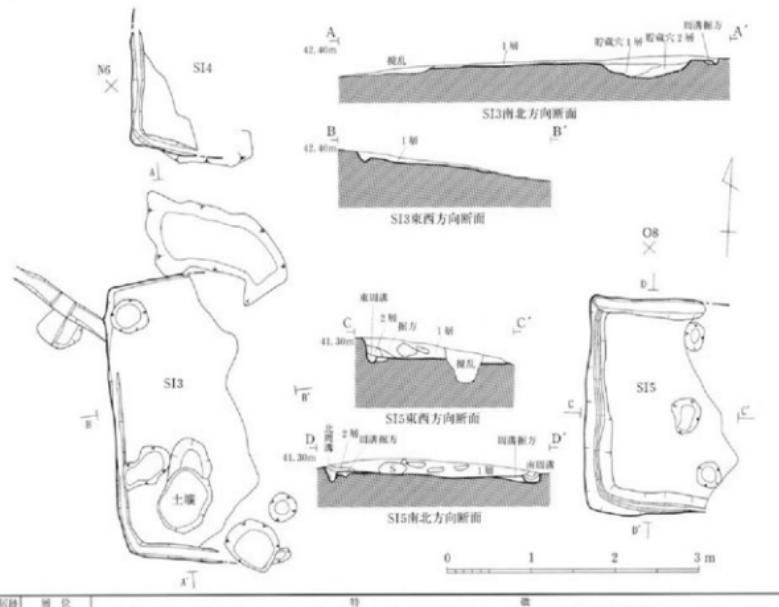
〔位置〕調査区北西隅、丘陵尾根上北寄りの標高42m付近に位置する。

〔重複〕新しい溝や土壤状の擾乱に一部壊されるが、主要遺構との重複はない。北に隣接するS I 3 竪穴住居跡とは1.4m離れており、同時には存在しない可能性もある。

〔平面形・規模〕平面形は長方形と推定され、規模は南北が西辺で3.2m、東西は南辺で1.1m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で西に約9°偏る。

〔壁〕東半部が床面下まで大きく削平され、西半部も上部を床面近くまで大きく削平されるため、検出面から床面までの壁の高さは5cm以下と残りが悪い。



柱直径	層位	特徴	
		地	壁
SI3	上層 1層	にかい黄褐色(10YR5/4) 土、地山とブロック、径3~20mmの粘板岩礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。	
	上層 2層	同褐色(10YR4/4) 土、径3~20mmの礫片、土、地山上ブロックを含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。	
	削平部	褐色(10YR4/4) 土、地山砂を多く含む。人為堆積土。	
	堆積土 1層	褐色(10YR4/4) 土、径3~20mmの粘板岩礫片、5mm以下の地上の土砂と混在する。しまりあり。粘性なし。自然堆積土。	
SI4	壁	褐色(10YR4/4) 土、地山砂・礫を多く含む。人為堆積土。	
	削平部	にかい黄褐色(10YR4/4) 土、地山とブロック、径3~5mmの粘板岩礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。	
SI5	壁	同褐色(10YR4/4) 土、地山砂・礫を含む。自然堆積土。	
	堆積土 1層	褐色(10YR5/6) 土、径1cm程の粘板岩礫片を含む。自然堆積土。	
	堆積土 2層	褐色(10YR4/4) 土、地山砂・礫を少額含む。自然堆積土。	

第20図 S I 3・4・5 竪穴住居跡平面図・断面図 (1/60)

〔床面〕 地山面（粘板岩礫層）を床面としている。

〔カマド〕 東半部が大きく削平されているため、カマドの位置は不明である。西辺に付設されていないことは確実である。

〔周溝〕 西辺・南辺で幅10~15cm、深さ4~13cmの周溝を検出した。西辺の一部と北辺は削平され残っていない。南辺で周溝掘方を検出し、住居構築時に人為的に埋め戻されている。壁材の痕跡は確認できなかったが、住居廃絶時に床と一連に人為的に埋め戻されている。

〔土壤〕 貯蔵穴ないし床下土壤とみられる土壤を南西部で1基検出した。平面形は達磨形で、長径1.15m、短径0.6m、深さ15cmあり、人為的に埋め戻されている。

〔堆積土〕 住居廃絶後に自然堆積している。

〔出土遺物〕 堆積土から非ロクロ調整の土師器壺・甕、須恵器壺・甕の体部小破片、攪乱から非ロクロ調整の甕体部小破片が少數出土した。

【S I 4 竪穴住居跡】（平面図・断面図：第20図）

〔位置〕 調査区北西隅、丘陵尾根上北寄りの標高42m付近に位置する。

〔重複〕 土壇状の攪乱に一部壊されるが、主要遺構との重複はない。南に隣接するS I 3 竪穴住居跡とは1.4m離れており、同時には存在しない可能性もある。

〔平面形・規模〕 南東部が遺存するのみで、他は床面下まで大きく削平されている。平面形は長方形と推定される。規模は南北が西辺で1.4m以上、東西は南辺で0.8m以上である。

〔方向〕 西辺でみると北で西に約3°偏る。

〔壁〕 大きく削平されているため、検出面から床面までの壁の高さは全体的に残りが悪い。最も残りのよい南西隅では22cmある。

〔床面〕 地山面（粘板岩礫層）を床面としている。

〔カマド〕 全体的に大きく削平されているため、カマドの位置は不明である。

〔周溝〕 西辺・南辺で幅15cm、深さ5cm以下の周溝を検出した。住居廃絶時に床と一連に人為的に埋め戻されている。

〔堆積土〕 人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

【S I 5 竪穴住居跡】（平面図・断面図：第20図、遺物：第19図）

〔位置〕 調査区北西隅、丘陵尾根上北寄りの標高41m付近に位置する。

〔重複〕 主要遺構とは重複しない。

〔平面形・規模〕 東半部が床面下まで大きく削平されているが、平面形は長方形と推定される。規模は南北が西辺で2.6m以上、東西は南辺で1.4m以上である。

〔方向〕 西辺でみると北で西に約2°偏る。

〔壁〕 最も残りのよい政変中央部で、検出面から床面までの壁の高さは27cmある。東半部が床面下まで大きく削平されているため、その近くの北辺・南辺の壁は残りが悪い。

〔床面〕 地山面（粘板岩礫層）を床面としている。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕東半部が大きく削平されているため、カマドの位置は不明である。西辺に付設されていないことは確実である。

〔周溝〕西辺・北辺・南辺で幅15~20cm、深さ5~10cmの周溝を検出した。周溝の周囲には周溝掘方がある。周溝内堆積土はこれより新しく、住居廃絶時もしくはそれ以降に自然堆積したものである。壁材の痕跡を検出していないため、住居機能時に周溝がオープンであったか、壁材があったのか抜き取ったか不明である。

〔堆積土〕住居廃絶以降に自然堆積している。

〔出土遺物〕堆積土から非ロクロ調整の土器器坏・甕、須恵器高台坏(8)・平頂蓋(7)・甕の破片が少數出土した。このうち土器器坏には体下部に段のある口縁~体部破片が1点ある。

【S16堅穴住居跡】(平面図:第21・22図、断面図:第22図、遺物:第23図、図版7)

〔位置〕調査区北西隅、丘陵尾根上の標高40.5m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕平面形は長方形で、規模は南北が西辺で4.6m、東西が南辺で4.2mである。

〔方向〕西辺でみると北東に約6°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの壁の高さは、最も残りのよい西辺と北辺西半で55~60cmあり、約100°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。南東部は上部を削平され、壁の高さは5cm以下と残りが悪い。

〔床面〕西辺より1.2~1.5m幅は地山面(黄褐色粘質土)を、それより東側は掘方埋土を床面としている。床面は平坦である。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕北辺の中央からに付設されている。カマドの天井部は住居廃絶時に壊されていたが、左側壁、右側壁、燃焼部、煙道が残されていた。左側壁は長さ55cm、高さは奥で36cm、焚き口で23cm、右側壁は長さ56cm、高さは奥で35cm、焚き口で27cm残存していた。両側壁外面の幅は下部で1.2mある。また両側壁は北辺の線より20cm外側に張り出している。左側壁-右側壁横断面をみるとわかるように、左側壁は天井部が一部残存し、燃焼部と焚き口の規模(幅・高さ)が推定できた。焚き口は下部幅49cm、高さ11cmである。燃焼部は奥行き60cm、幅49cm、奥壁高18cmで、深さ5cmの浅い皿状に掘り窪められ、焼土が堆積し、被熱・赤変していた。また、左側壁の内側は厚さ10cm、右側壁の内側は厚さ15cm、天井部は厚さ7cmの部分が被熱し、赤色に硬化していた。

煙道は丘陵尾根の中軸線に直交するように北を向いて設けられ、カマド奥壁より外に向かって40cmと短く延び、煙道底面の傾斜は上向き約24°と比較的急である。煙道は入り口幅30cmで、トンネル式の煙道天井部は削平され、深さ11cm残存する。煙道の先端には煙出しピットは付設されていない。

カマドの両側壁は黄褐色~褐色粘質土を用いて作られ、左側壁は長さ35cm、幅12cm、厚さ5cmの粘板岩板状礫片を芯材としている。

また、カマド両側壁・燃焼部の下には、北辺の周溝が幅20cm、深さ5~9cmの暗渠となって横

断している。そして、その埋土の上に長さ13~19cm、幅10~16cm、厚さ5cm程の粘板岩板状礫片3点を縱長に置いてからその上に長さ10~16cm、幅10~14cm、厚さ5cm程の粘板岩板状礫片4点を置き(図版7-4)、さらにその上を黄褐色粘質土で整地して燃焼部としている。

〔周溝〕残りのよい西辺・南辺・北辺西半でみると、周溝の掘方は幅約20cm、深さ約12cmあり、壁面下部より奥に6cm程抉り込むように掘られている。そして掘方埋土が残る部分では、掘方埋土を掘り込んで作られている。堆積土は2~3層に分かれ、構築時に人為的に埋め戻されており、住居の機能時には暗渠として機能していたとみられる。また、カマド両側壁・燃焼部の下には、北辺の周溝が幅20cm、深さ5~9cmの暗渠となって横断している。

〔外延溝〕北辺・東辺の周溝が合流する北東隅から、幅15~30cm、深さ15~20cmの外延溝が丘陵斜面下方に向けて2.5m延びる。外延溝の入り口部分の底面は、北東隅の周溝底面よりも約10cmレベルが低い。北東隅から長さ約20cmはトンネル式で、天井部が残っていた。それより先については上部が削平されており、どこまでトンネル式であったか不明である。また、天井部が残っていた箇所に接して長さ約30cm、幅約10cm、厚さ約8cmの粘板岩板状礫片2点が暗渠の構築材として据えられていた。外延溝の底面は住居外に向かって下方に約5°傾き、堆積土の下部には砂が薄く自然堆積していた。排水施設として機能していたことがわかる。

〔西側の外周溝と段〕本住居の西側には、幅約6m、奥行き1.0mの平坦面がある。この段は西辺の床面より55~60cm高い位置にあり、西際に幅20~55cm、深さ5cm程の深い外周溝が巡る。外周溝の北端と南端は、本住居の北辺・南辺と平行するように曲がり、その先は削平されている。この段と外周溝が本住居と一緒に人為的に埋め戻されていることから、本住居の機能時にはこの段と外周溝の底面が当時の地表面であり、西辺の壁の高さが60cmであったと推定できる。

なお、この段の西側のさらに約30cm高い位置に奥行き0.9mの平坦面がある。この平坦面には住居内の最上部に自然堆積した1層が一緒に堆積している。本住居に伴う段の可能性もあるが断定できない。

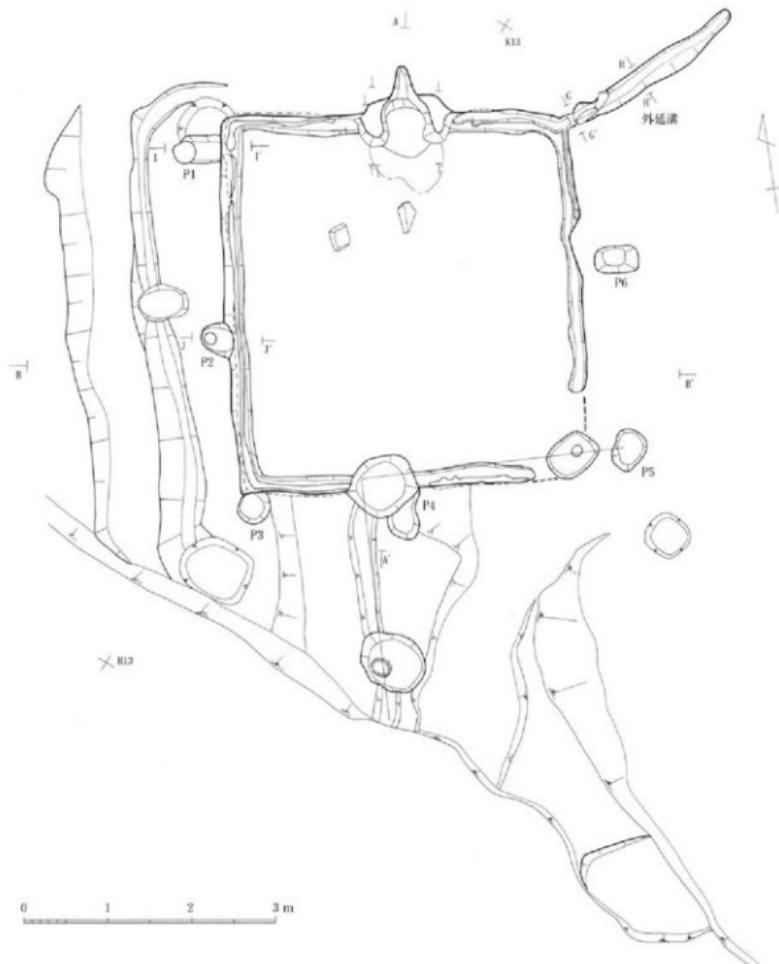
〔壁外柱穴〕西辺・南辺・東辺の壁からやや離れた位置で、北西隅(P1)、西辺中央(P2)、南西隅(P3)、南辺中央(P4)、南東隅(P5)、東辺中央(P6)の6箇所の壁外柱穴を検出した。掘方は長さ40~55cm、幅30~40cmの長方形を基調とし、深さは残りのよい北西隅柱穴(P1)で60cmある。掘方の埋土は一気に埋められている。P1、P2で直径15~20cmの円形の柱痕跡を確認した。

〔堆積土〕住居廃絶時に褐色土で人為的に埋められている。この埋土下部に焼土・炭化物を含む層(5層)があり、その上も人為的に埋め戻されている。途中にやや間隙を置きながら埋め戻していることがわかる。そして、西側の段と住居西半部の最上部の疊みにぶい黄褐色土が自然堆積している。

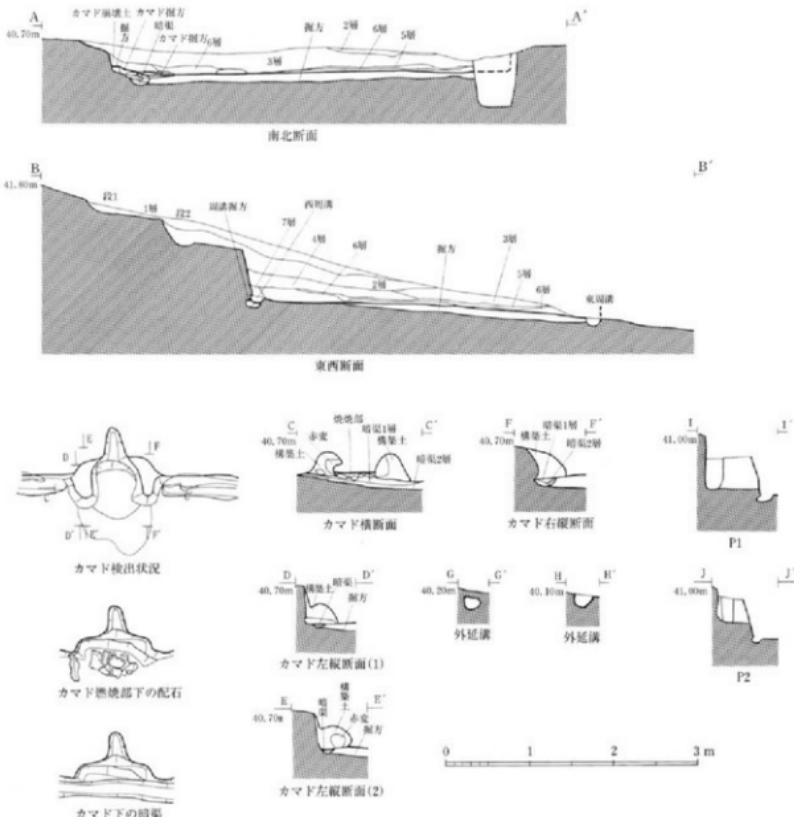
〔出土遺物〕出土遺物は少なく、土器はすべて破片である。掘方から土師器甕、カマド崩壊土から土師器甕(3)、須恵器甕(5)、埋土6層から須恵器甕、埋土5層から土師器甕、須恵器甕、埋土3層から土師器甕・高环(2)・鉢(4)、須恵器甕(7)、埋土2層から須恵器甕(6)、堆積土1層から土師器高环(1)、須恵器甕(8)、鉄製釦金具(9)などが出土した。このうち土師器はすべ

て非クロコロ調整のもので、土師器壺には底部が平底のもの、体下部に段をもつものが含まれる。また、須恵器壺には体下部～底部を回転ヘラケズリしたもの（5～7）が7点、手持ちヘラケズリしたもの（8）が1点ある。前者には焼成前に「大」？（5）、「三」？（7）と刻書したものがいる。

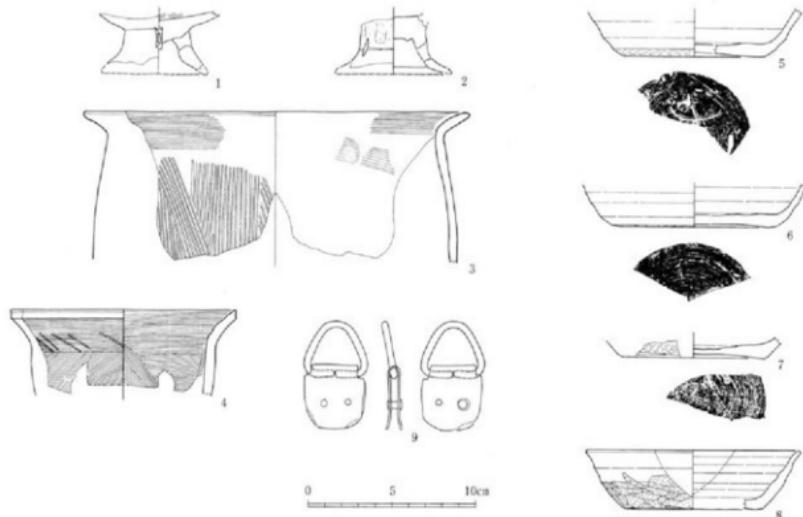
鉄製辻金具（9）は、径4mmの鉄棒で三叉状の三脚を作り、その一脚に薄い鉄板（長さ8cm、幅3.5cm、厚さ1mm）を二つ折りにして2箇所鉛留めにし、幅3.5cmの帯革に取り付けたと推定されるものである。脚が三脚であることから、長さの短い他の二脚にもこれとほぼ同じ幅の帯革が取り付けられ、三方向に引っ張ったものと考えられる。馬具の胸懸または面懸の辻金具とみられる。



第21図 S 16 穴住居跡平面図 (1/60)



第22図 S-16 積穴住居跡断面図 (1/60)



番号	種類	分類	幅	高さ	性質	器	年月	収納
1	土壠高環	埋土上層			破片 透かし2個、外面：摩滅、内面：ヘリカギホ→黒色地斑。		22.4	001
2	土壠高環	埋土上層			破片 透かし2個、外面：マツリ、摩滅。内面：ヘリカギホ→黒色地斑。		22.5	002
3	土壠設置	I A カマド 埋土	23.0		破片 外面：口縁コナゲ、側部ハケン。内面：ナゲ、摩滅。			001
4	土壠設置	I B 埋土上層	13.4		破片 外面：ヘラナゲ→口縁コナゲ、側部ハケン。内面：コナゲ、ナゲ。様付蓋。			002
5	葉巻設置	A3 カマド内	8.4	1/3	両面クロコナゲ→底面切欠き不規則下部→底部斜面へラケズリ→焼成前剥離「大」。		35-19	002
6	葉巻設置	A3 埋土上層	8.6	1/3	両面クロコナゲ→底面切欠き不規則下部→底部斜面へラケズリ→焼成サンゴイチ化。			002
7	葉巻設置	B3 埋土上層	8.4	1/6	両面クロコナゲ→底面切欠き不規則下部→底部斜面へラケズリ→焼成前剥離「二」。		35-19	003
8	葉巻設置	B3 埋土上層	12.8	8.6	1/3 両面クロコナゲ→底面へラケズリ→体下部手持ちヘラケズリ。			002
9	帶余長	埋土上層			鐵製馬具、長さ0.6m、幅3.7cm、厚さ0.8cm。		37.3	029

第23図 S I 6 積穴住居跡出土遺物

【S I 56 積穴住居跡】(平面図・断面図: 第24図)

〔位置〕 調査区北西隅に位置する。

〔重複〕 SX 5 平場と重複し、これよりも古い。SX 5 平場の造成によって大半が大きく削平され、西辺際が一部残存する。

〔平面形・規模〕 平面形は長方形と推定され、規模は南北が西辺で3.0m以上である。

〔方向〕 西辺は磁北とほぼ一致する。

〔壁〕 SX 5 平場の造成によって大半が大きく削平され、西辺際が一部残存する。検出面から床面までの高さは、残りのよい北西隅で60cmあり、ほぼ垂直に立ち上がるが、上部がやや崩れている。

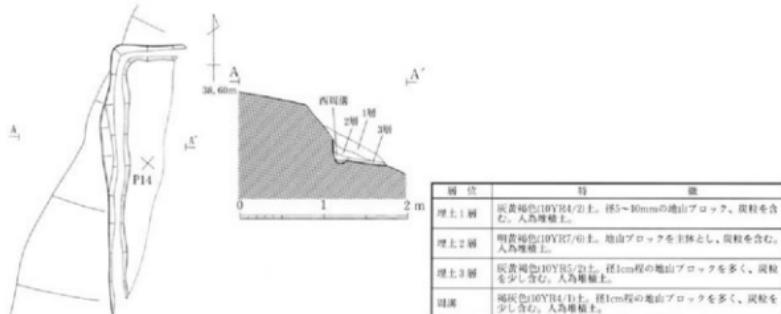
〔床面〕 ほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。

〔周溝〕 西辺・北辺で幅15~20cm、深さ5cm程の周溝を検出した。人為的に埋め戻されており、住居機能時に開口していたか、住居廃絶時に壁材を抜き取って埋め戻したかは不明である。

〔その他〕 大きく削平されているため、カマドの位置、主柱穴の有無などは不明である。

〔堆積土〕 3層に分かれ、積穴住居廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。



第24図 S I 8 穫穴住居跡平面図・断面図 (1/60)

【S I 8 穫穴住居跡】(平面図: 第25・27図、断面図: 第26・27図、遺物: 第28~31図、図版8)

〔位置〕調査区北半西際、丘陵尾根上の標高37.5m付近に位置する。

〔重複〕S I 7・46 穫穴住居跡と重複し、これらよりも新しい。

〔平面形・規模〕平面形はほぼ正方形で、規模は南北が東辺で4.5m、東西が南辺で4.7mである。

〔方向〕東辺でみると北で東に約8°偏る。丘陵尾根の方向とほぼ一致し、等高線に沿っている。

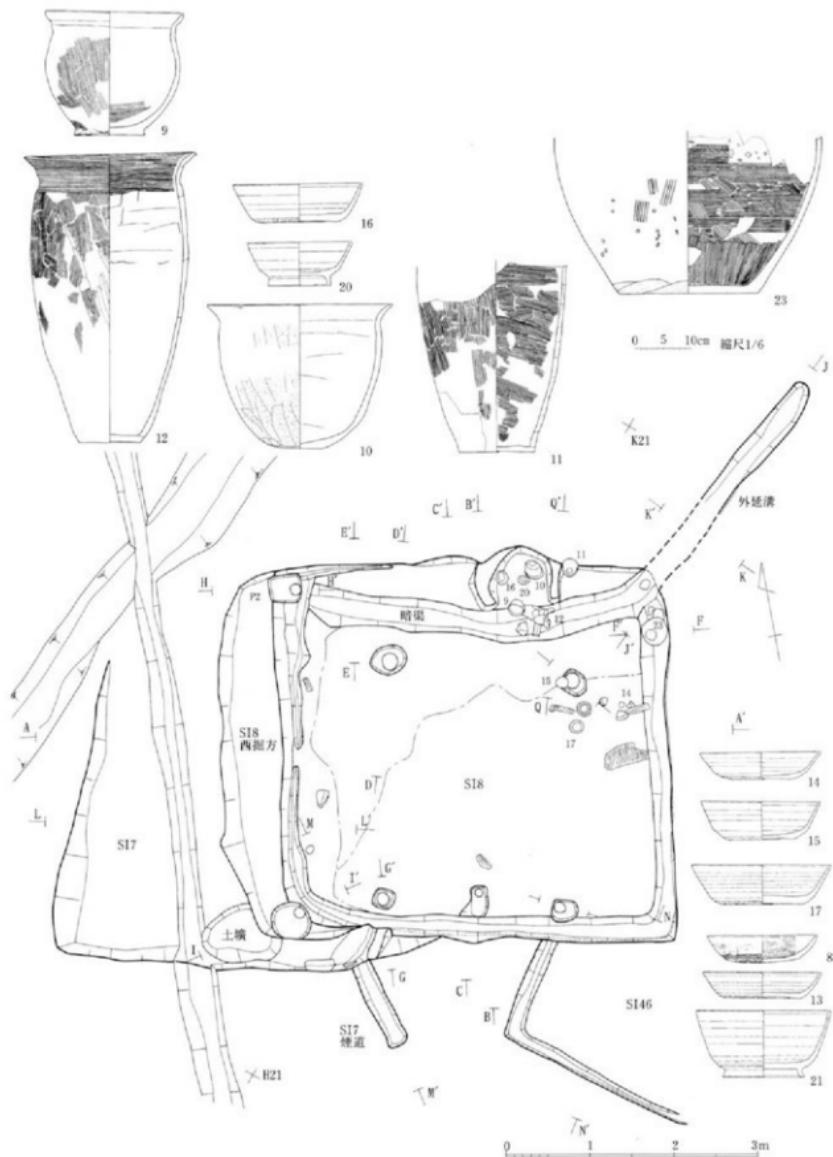
〔検出状況〕焼土塊を多量に含む暗赤褐色土(堆積土第7層)が床面全体やカマドの上、周溝、暗渠を覆うことから、火災にあって焼失したことがわかる。残りがよく、竪穴住居の構造や焼失時の竪穴住居内の様子がよくわかった。

〔壁〕北東部が上部を削平されているものの、全体として残りがよい。最も残りのよい西辺では壁の高さは60~70cmあり、105~120°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。次いで残りのよい北辺・南辺の西寄りでは壁の高さは50~60cmあり、西辺と同様に105~110°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。残りの悪い東辺中央では壁の高さは10cm、北東隅では10~15cmある。

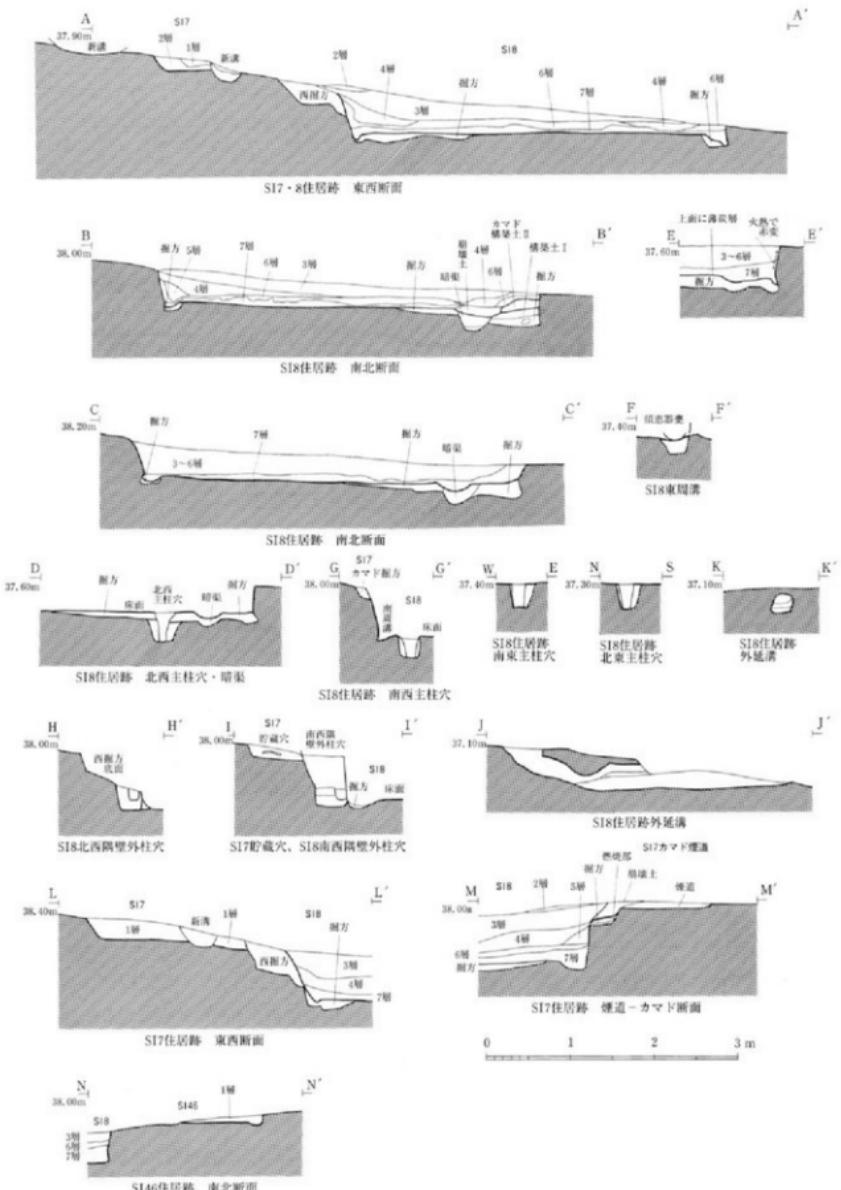
〔床面〕北半部は貼床、南半部は地表面の枯木岩盤を床面としている。床面はほぼ平坦だが、南半部から北半部に向かってほんのわずか傾斜している。

〔柱穴〕北辺から1.2m離れた北西隅-南東隅対角線上にP 1 北西主柱穴、北辺から1.3m離れた南東隅-南西隅対角線上にP 2 北東主柱穴、南辺周溝際にP 1 北西主柱穴に対応するP 3 南西主柱穴、南辺周溝間にP 2 北東主柱穴に対応するP 4 南東主柱穴、P 3 南西主柱穴とP 4 南東主柱穴を結ぶ中にP 5 南辺中央柱穴、北西隅の壁際にP 6 北西壁際柱穴、南西隅の壁際にP 7 南西壁際柱穴の7箇所の柱穴を検出した。これら相互の位置関係、掘方の規模、柱痕跡の大きさからみて、P 1~P 4 柱穴が主柱穴、P 6・P 7 柱穴がそれに準じて重要な柱穴、P 5 崩落中央柱穴が補助的な柱穴とみられる。主柱穴ではP 1 北西主柱穴、P 2 北東主柱穴がP 3 南西主柱穴、P 4 南東主柱穴よりも柱痕跡が2cm大きく、カマドの位置する北辺がより重視されたことが窺える。

また、焼失住居であるにもかかわらず、これら各柱穴には柱材が炭化して残らずに焼土・炭が充満していたこと、床面にも柱材がほとんど残っていないことから、柱材がほとんど生焼けの状態で住居が焼失したため、これらの各柱穴に用いられた柱が焼失後に腐り、その間隙部に焼土・炭



第25図 SI7・8・46整穴住居跡平面図 (1/60)



第26図 S17・8・46堅穴住居跡断面図 (1/60)

柱筋跡	場 所	特 徴				
掘方	褐色(7.5YR4/4)上。径1~5cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。人為堆積土。					
西側方	西側の西側で一段高くなっている箇所。褐色(7.5YR4/4)上。径0.5~2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。人為堆積土。					
床面	カマド右端部底。褐色(7.5YR4/4)上。径2~4mmの礫片。径1~2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりよい。人為堆積土。					
カマド掘方	褐色(7.5YR4/4)上。褐色土(10YR4/8)。径2~4mmの粘板岩風化礫片を多く含む。10~15cmの粘板岩風化礫片17点を測定し並べる。しまりよい。人為堆積土。					
カマド機架上 I	白カマド。褐色土(10YR4/8)と粘土上。径0.5~3cmの粘板岩風化礫片をやや多く含む。					
カマド機架上 II	新カマド。明褐色(7.5YR4/4)と粘土上。径0~10mmの粘板岩風化礫片をやや多く含む。下部に塊土をやや多く含み、厚さ5mmの薄泥層がある。					
カマド燃焼部	2箇所に分かれれる。上部には少し赤褐色(7.5YR4/8)で、明褐色(5YR5/8)まで。頂く焼き跡ある。下部は明褐色(2.5YR4/6)地土で、礫片を少し含む。					
カマド留壁土	2箇所に分かれれる。上部は明褐色(10YR4/8)と粘土上。2箇所が明褐色(5YR3/4)上で、塊土を多く含む。					
カマド前面梁架	カマドより東側では掘方と多く粘板岩風化礫片を含む褐色(7.5YR4/4)上で堆積。カマドより東側では削方を振り直し、下部を以て褐色(10YR3/4)上で堆積。					
曲周溝	火災時には焼片を少量含む褐色(7.5YR4/4)上で白熱焼成し、掠んだ状態。その上面に焼が堆積。					
東周溝	褐色(10YR4/4)上。径1~3cmの粘板岩風化礫片を多く含む。人為堆積土で、火災時にほんのちぎれのつれており、北西隅(?)には葉茎遺物が上面に散らわされている。					
外延溝	北東側から北側に約1.5mまでトネル式で。3箇所に分かれ、1箇所が堆積土、粘板岩風化礫片を多く含むが褐色(10YR4/8)上。2箇所が明褐色(10YR4/6)と粘土の天井部前壁。					
柱穴六方	褐色(7.5YR4/4)上。径0.5~3cmの粘板岩風化礫片を多く含む。人為堆積土。					
柱穴六方底部	同じ赤褐色(5YR4/4)上。焼土・炭を多量に含む。しまり・粘性ない。完全に焼けないで掘った柱の空間に下部起脚の焼土が崩れ落ちたもの。					
受外柱六方底部	褐色(7.5YR4/4)上。径0.5~3cmの粘板岩風化礫片を多く含む。人為堆積土。					
受外柱六方顶部	同じ赤褐色(5YR4/4)上。焼土・炭を多量に含む。しまり・粘性ない。完全に焼けないで掘った柱の空間に下部起脚の焼土が崩れ落ちたもの。					
堆積土上層	表土。黒色土。自然堆積土。					
堆積土上層	灰白色山砂土。自然堆積土。					
堆積土上層	褐色(10YR4/4)上。粘板岩風化礫片の焼土・粘板岩風化礫片。3mm程度の焼片をやや多く含む。自然堆積土。					
堆積土上層	褐色(10YR4/4)上。径5~10mmの焼土・粘板岩風化礫片を多く含む。自然堆積土。					
堆積土上層	褐色(10YR4/4)上。径1~5cmの黄褐色土(10YR4/8)。3mm程度の焼片・粘板岩風化礫片を多く含む。しまりのない住居内部に分布。自然堆積土。					
堆積土上層	褐色(10YR4/4)上。5cm以内の粘板岩風化礫片を多く含む。褐色土(10YR4/8)を少額含む。ややしまる。自然堆積土の壁面底上。					
堆積土上層	褐色(5YR3/4)上。8cm~10mmの焼土・炭片を多く含む。自然堆積土。					
堆積土上層	褐色(5YR3/4)上。燒土・炭を多く含む。自然堆積土。					
柱筋跡	柱筋跡(7.5YR4/3)上。焼土・炭で埋められた柱筋跡底面に黒く。しまりよい。人為堆積土。					
カマド掘方	暗褐色(2.5YR3/6)上。焼土を多量に含む。					
カマド燃焼部	暗褐色(7.5YR2/6)上。5mmの焼土・粘板岩風化礫片を多く含む。					
壁穴	暗褐色(5YR2/6)上。径5~10mmの焼土・炭(5mm程度)と炭片を多量に含む。人為堆積土。					
煙道	明褐色(10YR6/6)上。径1~3cmの焼土・粘板岩風化礫片を多く含む。					
壁上 1 節	黃褐色(10YR5/8)上。褐色(10YR4/8)と土(10YR4/8)と黒く含む。しまりよい。人為堆積土。					
壁上 2 節	褐色(10YR4/4)上。黃褐色(10YR4/8)と土(10YR4/8)と黒く含む。しまりよい。人為堆積土。					
壁上 3 節	褐色(7.5YR4/3)上。径1~4cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりよい。人為堆積土。					
S17						
P1 北西主柱穴	圓丸方形	45cm	35cm	35cm	徑16cmの円形	表面(張床上面)から柱底跡のみ残出され。焼土・炭片が充満。瓶片は既床を除くと共に残出
P2 北東主柱穴	長方形	33cm	28cm	30cm	徑16cmの円形	柱底跡に焼土・炭片が充満
P3 南西主柱穴	正方形	25cm	25cm	26cm	徑14cmの円形	柱底跡に焼土・炭片が充満
P4 南東主柱穴	圓丸方形	30cm	27cm	30cm	徑14cmの円形	柱底跡に焼土・炭片が充満
P5 南西中央柱穴	長方形	38cm	29cm	5cm	徑19cmの円形	柱底跡に焼土・炭片が充満
P6 北西壁際柱穴	長方形	45cm	33cm	32cm	徑13cmの円形	柱底跡に焼土・炭片が充満
P7 南西壁際柱穴	圓丸長方形	48cm	44cm	60cm	徑13cmの円形	柱底跡に焼土・炭片が充満
S16						

S 1 8 · 7 · 46 穴空住居跡土層一覧

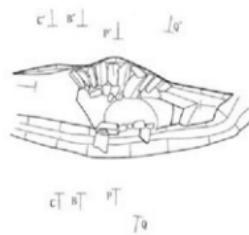
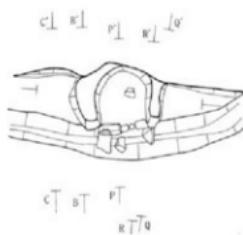
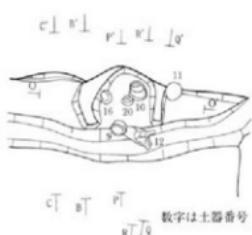
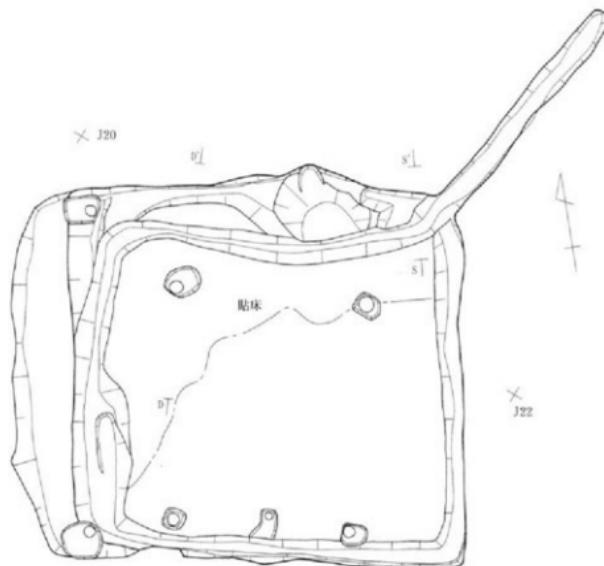
が崩れ落ちたものと考えられる。

各柱穴の掘方の平面形・規模・柱痕跡の規模・形状は以下のとおりである。

柱 穴	平 面 形	長 広	短 辺	深 さ	柱 痕 跡	観 考
P1 北西主柱穴	圓丸方形	45cm	35cm	35cm	徑16cmの円形	表面(張床上面)から柱底跡のみ残出され。焼土・炭片が充満。瓶片は既床を除くと共に残出
P2 北東主柱穴	長方形	33cm	28cm	30cm	徑16cmの円形	柱底跡に焼土・炭片が充満
P3 南西主柱穴	正方形	25cm	25cm	26cm	徑14cmの円形	柱底跡に焼土・炭片が充満
P4 南東主柱穴	圓丸方形	30cm	27cm	30cm	徑14cmの円形	柱底跡に焼土・炭片が充満
P5 南西中央柱穴	長方形	38cm	29cm	5cm	徑19cmの円形	柱底跡に焼土・炭片が充満
P6 北西壁際柱穴	長方形	45cm	33cm	32cm	徑13cmの円形	柱底跡に焼土・炭片が充満
P7 南西壁際柱穴	圓丸長方形	48cm	44cm	60cm	徑13cmの円形	柱底跡に焼土・炭片が充満

柱間寸法は P 1 北西主柱穴 - P 2 北東主柱穴が2.2m、P 3 南西主柱穴 - P 4 南東主柱穴が2.1m、P 2 北東主柱穴 - P 4 南東主柱穴が2.7m、P 1 北西主柱穴 - P 3 南西主柱穴が2.9mである。

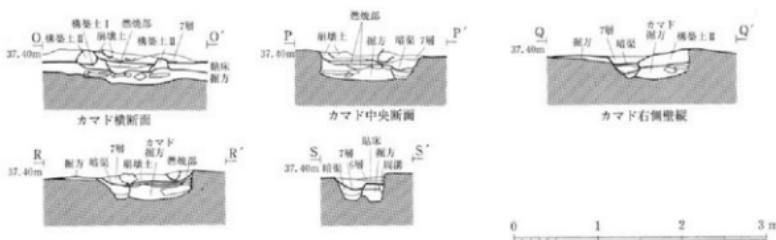
(カマド) 丘陵尾根の中軸線に直交するように北を向いて設けられ、北辺中央から約60cm東寄りの位置に付設されている。カマドの天井部は住居焼失時に崩壊していたが、左側壁、右側壁、燃焼部が良好な状態で残っていた。両側壁は北辺の縁と一致するが、燃焼部奥壁は北辺の縁より23cm外側に張り出している。焼失窓穴住居跡で残りがよいのにもかかわらず、煙道は窓穴住居跡の外に長く伸びてはいないこと、また燃焼部奥壁が屋外に23cm張り出すことから、煙道は燃焼部奥壁より斜め上に短く立ち上げて屋外に導くような構造であったと考えられる。



カマドの検出状況

カマド前暗渠縁辺の配石・丸瓦

カマド底面の掘方と配石



第27図 S 1 8 穹穴住跡の掘り上げ状況とカマドの細部 (1/60)

左側壁は長さ58cm、高さは奥で18cm、焚き口で15cm、右側壁は長さ57cm、高さは奥で16cm、焚き口で12cm残存していた。両側壁外面の幅は下部で1.1mある。また、左側壁で新旧の構築土（構築土Ⅰ・Ⅱ）を検出し（第26図の断面図B-B'、第27図の断面図O-O'）、カマド側壁は一度作り替えられていることがわかる。カマドの両側壁は黄褐色～褐色粘質土を用いて作られており、カマド右側壁端部には土師器甕体下部～底部破片（1）が芯材に用いられている。

焚き口は下部幅55cm、内面の高さは18cm以上で、20cm程と考えられる。燃焼部は奥行き65cm、幅55cm、奥壁高10cmで、深さ10cmの浅い皿状に掘り窪められ、焼土が堆積し、被熱・赤変していた。燃焼部にも新旧2回の重複が認められる。

カマド側壁と燃焼部の下は、竪穴住居構築時に長さ1.15m、幅0.8m、深さ15cmの土壤状に掘り窪められている。そして、奥壁から35cm離して横長になるように、扁平な粘板岩板状礫片3点（長さ24～25cm、幅10～16cm、厚さ4～7cm）が横一列に並べられている。さらにその上に奥壁下の壁に沿って扇形になるように縦に並んで、扁平な粘板岩板状礫片13点（長さ15～31cm、幅8～16cm、厚さ3～9cm）が両側から中心に向けて敷き並べられている（第27図中段、図版8-6）。そして、その上が15～20cmの厚さで堅く整地されている。カマドの両側も広く掘り窪められ、同様の厚さで堅く整地されている。

〔カマド前暗渠〕カマド前面では、カマド下およびカマド両側が整地された後、北西隅から北東隅に向けて、長さ4.2mにわたって弧状に通じる幅約30cm、深さ15～20cmの溝がやや傾斜しながら掘られている。さらにその後、カマド燃焼部と溝の接する縁辺に、粘板岩板状礫片2点、丸瓦2点（6・7）、土師器甕体部破片1点、須恵器鉢口縁部破片1点、土師器甕体下部～底部破片1点（1）が土留めとして並べられてから、この溝が埋め戻されている（第27図中段）。埋め戻された溝の上面は火災時には浅く窪んでおり（第26図の断面図B-B'、C-C'、D-D'；第27図の断面図P-P'、Q-Q'、R-R'）、北西隅で西辺周溝、北東隅で東辺周溝と接続して外延溝に続いている。本竪穴住居の火災時にはこの状態で暗渠として機能していたとみられ、外延溝のトンネル部分では焼土混じりの土が堆積していた（第26図の断面図J-J'）。

〔周溝〕西辺・南辺・東辺の3辺で幅20～35cm、深さ6～15cmの周溝を検出した。南辺・東辺では壁際を壁の奥に抉るように溝状に深く掘り込み、その上を嵩上げして埋め戻してから溝状にもう一度掘り窪め、機能面としている（第26図の断面図A-A'、B-B'、C-C'、L-L'）。西辺では掘方が幅広く、その上を嵩上げ整地してから溝状に掘り窪め、機能面としている（第26図の断面図A-A'）。また、北辺の西寄り約1mも西辺と幅は狭いが西辺と同様の方法で周溝を作つて機能面としている（第26図の断面図E-E'）。各周溝とも火災時には溝状に空いており、焼土塊を多量に含む暗赤褐色土（堆積土第7層）が堆積していた。なお、東辺で暗渠と合流する付近では周溝はほとんど埋め戻されており、その上に須恵器甕（23）が正位の状態で置かれ、甕の内部には焼土塊を多量に含む暗赤褐色土（堆積土第7層）が堆積していた（第26図の断面図F-F'）。この甕は口縁～体上部を欠くが、この付近で竪穴住居跡上部が削平を受けたためと思われ、本来は完形であった可能性が高い。

〔外延溝〕南西隅—北東隅の対角線の延長上、東辺周溝とカマド前暗渠の合流する北東隅から丘陵斜面下に向かって、幅25~33cm、深さ15~30cmの外延溝が3.0m延びる。北東隅から1.1mはトンネル式の天井部が残存していた。外延溝の底面は北西隅から1.1mは約27°の傾斜で下り、そこからほぼ水平となる（第26図の断面図J-J'）。トンネル式の天井部は底面の傾斜変換点から前後1.1m程の間で残っており、竪穴住居内部と竪穴住居外部の両側から掘削されていた。底面がほぼ水平となつた箇所の側から、トンネル式で長く掘削するのはかなり無理があり、トンネル式となっていたのは天井部が残存していた箇所付近まで、それより先については天井部がない構造であったと考えられる。

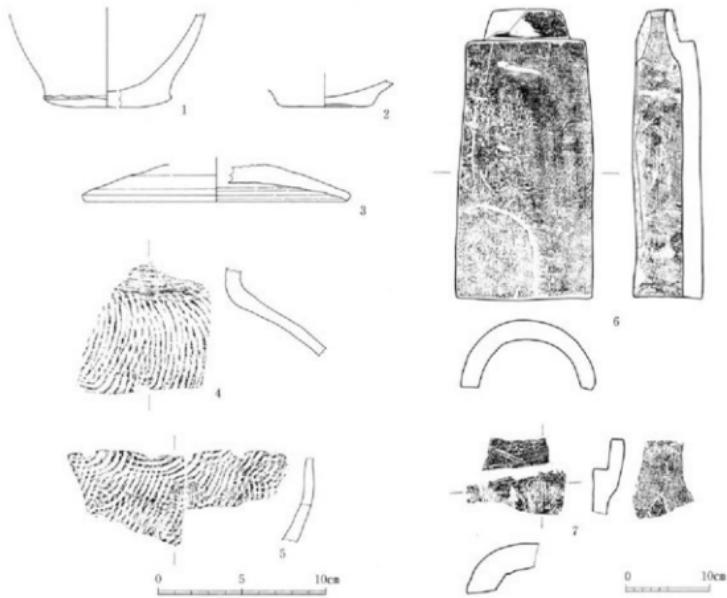
外延溝内の堆積土は3層に分かれ、1層が火災後の堆積土、2層が火災以前の天井崩壊土、3層が竪穴住機能時の自然堆積土である。3層の厚さは15~25cmあり、火災時までにかなり埋まっていたことがわかる。

〔西辺西側掘方〕丘陵斜面上方にあたる西辺の西側に、西辺と平行するように長さ4.5m、幅0.8mの掘方がある。西辺の床面から15~25cm高い位置にあり、掘方底面は傾斜し、やや凹凸がある。そしてこの掘方を人為的に一気に埋め戻して西辺の壁としていた（第26図の断面図A-A'、L-L'）。P6北西壁際柱穴とP7南西壁際柱穴も西側掘方を埋め戻した後に設置されている。竪穴住居構築時に人為的に埋め戻されていること、西辺での高さが60~70cmであることから、竪穴住居を掘削して掘削土を周囲に排土する際の足場と考えられる。

〔堆積土〕床面上の堆積土は7層に分かれ、本竪穴住居が火災で焼失した以降に自然堆積したものである。最下層の堆積土第7層は焼土塊を多量に含む暗赤褐色土で、床面全体やカマドの上、周溝、暗渠を覆い、その上面は起伏に富む。壁際では20~25cmと最も厚く堆積し、中央部の厚い箇所では12cm前後あり、薄い箇所では3cmと薄い。平均の厚さは12cm程とみられる。本竪穴住居跡の規模は南北4.5m、東西4.7m、床面積は21.15m²なので、焼土塊を多量に含むこの層の堆積は約2.5m³となる。埋蔵文化財関係で一般的に用いられているテン箱（内法54cm×34cm×15cm、0.0275m³）に換算すると、約92箱分と多量になる。本竪穴住居跡の屋根に葺かれていた葺土が焼失して崩れ落ちたものと推定される。この層直下の床面上に炭化材があまり多く認められなかったことは、本竪穴住居が火災に遭って焼け落ちるまでにあまり時間がかからず、焼け落ちた葺土にパックされて柱材や建築部材が生焼けであったため、その後にこれらの材が腐って残っていないものと推定される。堆積土第6層~第3層は焼失後の流入土で、堆積土第2層は10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰である。

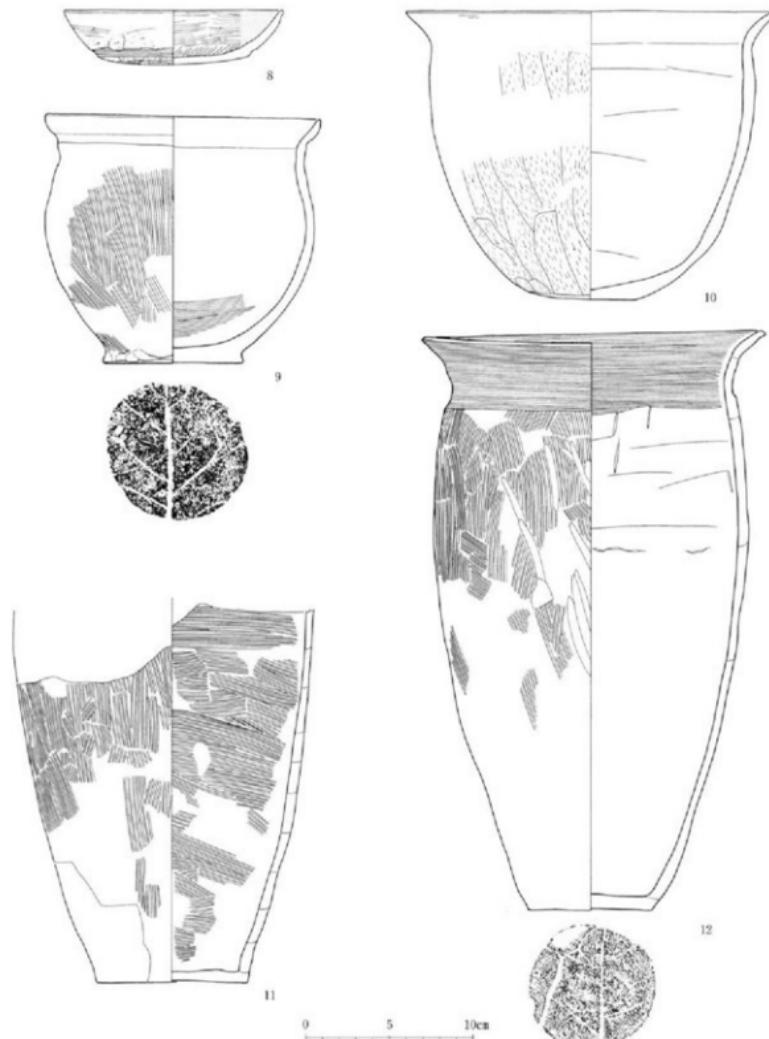
〔出土遺物〕竪穴住居構築時の遺物には、カマド右側壁端部構築材に用いられた非ロクロ調整の土師器甕体下部~底部破片（1）、カマド前暗渠に入れられた須恵器蓋破片（3）、カマド燃焼部下で暗渠との縁に並べられた丸瓦（6・7）、カマド下の整地から出土した土師器甕、須恵器壺の破片、掘方から出土した須恵器甕体部破片（4）、西掘方より出土した須恵器甕体部破片（5）、主柱穴掘方から出土した土師器甕破片などがある。これらのうち土師器はいずれも非ロクロ調整のもの、須恵器甕体部破片（4・5）は体部外面に同心円状叩き目痕のある北関東系のものである。

堅穴住居焼失時の遺物には、カマド内崩壊土上面から出土した完形の須恵器壺(16)・高台壺(16)各1点、カマド内崩壊土中から出土した完形の土師器鉢(9・10)2点と土師器甕(12)1点、カマド右脇床面に据えられていた土師器甕(11)1点、北東部の東周溝上に据えられた須恵器甕(23)1点、床面から出土した完形の土師器壺(8)1点、須恵器壺(13~15・17・18)5点、須恵器高台壺(21)1点、須恵器鉢・蓋破片(22)各1点、カマド天井崩壊土上面から出土し、カマドの上に置かれていたとみられる完形の須恵器壺(16)・高台壺(20)各1点、完形の鉄鎌(32)1点、刀子とみられる鉄製品破片(31)1点、磨石(33)1点、周溝内から出土した須恵器高台壺破片(19)1点などがある。



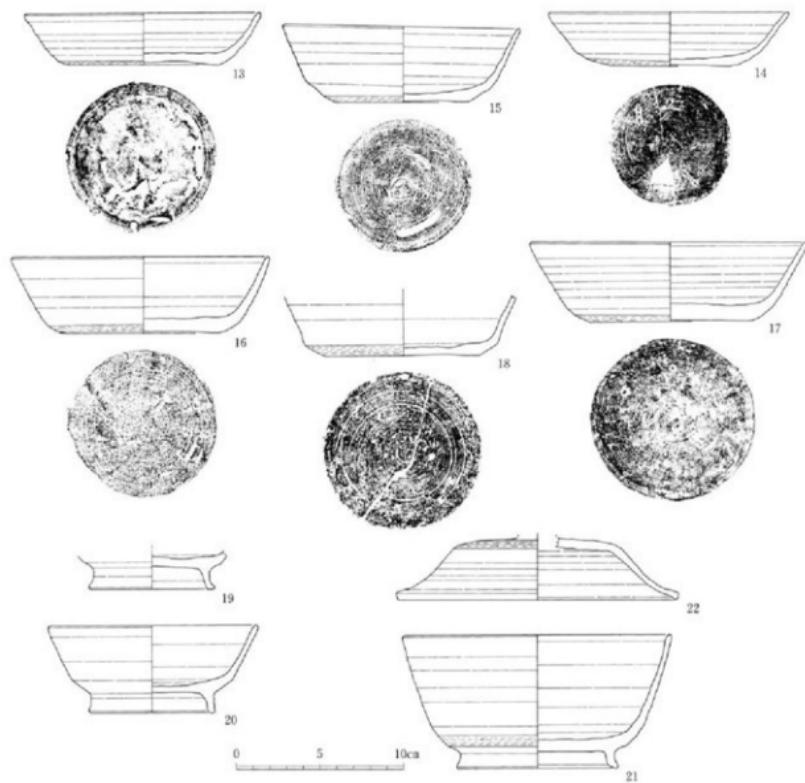
番号	種類	分類	調査位	残存	特	写真	収納
1	土師器機	I	カマド右袖構築材	破片	底径5.6cm。素ロクロ調整。外面：近部木製柄。体部厚済。内面：厚済。	003	
2	土師器機	I	西脇方	破片	底径5.6cm。素ロクロ調整。外面：近部ナギ。体部ナギ。厚済。内面：厚済。	003	
3	須恵器壺	Ala	カマド前暗渠	1/3	口径15.6cm。つまみ欠損。つまみとの接合面に1条の反織。外面：ロクロナギ→体部回転ヘラケズリ→つまみ接合→ロクロナギ。内面：ロクロナギ→中央一部にヘタミガ。	23-10	003
4	須恵器機	C	鍋床	破片	背面：側部ロクロナギ。側面凹凸模印用目痕。前面：側部ロクロナギ。側面ナギ。底白色。胎土に細かい砂粒含む。燒成不良。北東東系。	23-14	003
5	須恵器甕	C	西脇方	破片	背面：口縁内側焼き口部。内面：ナギ。底白色。胎土に細かく砂粒含む。燒成不良。北東東系。	23-16	003
6	有段丸瓦		カマド前暗渠	ほぼ完	全長45.6cm。底径6.2cm。上幅部11.3cm。下幅部3.6cm。上縁基部幅0.3cm。厚さ2.3mm。板土細密作り。凸縁焼き口ロクロナギ→部分的ヘラケズリ。凹縫：粘土粗粒。板目：合せ目。割目：小口。側面ヘラケズリ。瓦面アラミ。瓦面開口：分割した後左先端から正反対部向側面にかけて約6cmに切り落とす。黄褐色～茶褐色。胎土に径1mmの砂粒含む。燒成不良。	36-2	027
7	有段丸瓦		カマド内貼床	破片	凸縫焼き口ロクロナギ。凹縫：粘土粗粒。小口面：ヘラケズリ。黄褐色～灰色。胎土に径1mmの砂粒含む。燒成不良。	36-3	027

第28図 S-18堅穴住居跡出土遺物(1)-構築時の遺物



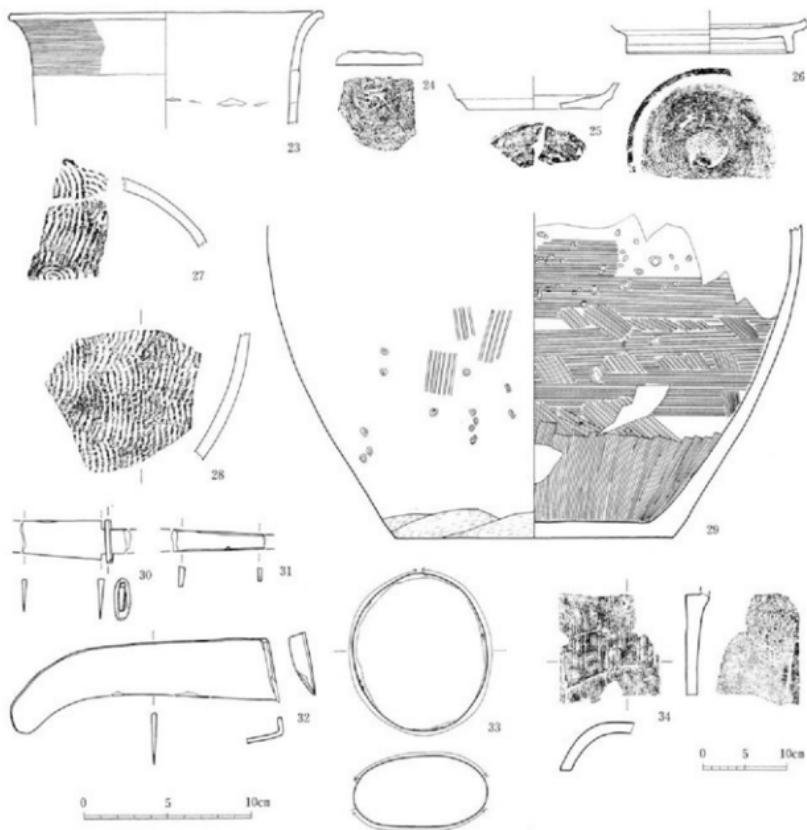
番号	種類	分類	断面	口径	式様	器高	残存	参考
8	土師器	I BI	底面	13.1	9.1	3.5	完形	素ロクロ調整。外面：体下部に斜線で段。底部手持ちヘラケズリ。口縁～体部手持ちヘラケズリ～ラミガネ。内面：ヘラリガネ・黑色地斑。21-13-8の順に二枚重ね出し。内面を上にして北東主六南から出土。
9	土師器	I A	カマド天井崩壊土	16.4	8.4	14.8	4/6	素ロクロ調整。外面：口縁ヨコナギナ。体部ハケメ・摩滅。体下部稍オサム。底部木葉瓶。内面：口縁ヨコナギナ。体部ヘラナギ・炭化物付着。カマド前壁架上に倒伏して出土。
10	土師器	II B2	カマド内	22.2	6.5	17.3	2/3	素ロクロ調整。外面：口縁ヨコナギナ。体部～底部手持ちヘラケズリ。体部にカマドの粘土付着。内面：口縁ヨコナギナ。体部ナギ。
11	土師器	I A	カマド右側底面	9	口縁欠	素ロクロ調整。外面：側部ハケメ。底部ナギ。内面：ハケメ。二次加熱により両面の所々剥落。		
12	土師器	I A	カマド天井崩壊土	20.5	7.4	34.5	3/5	素ロクロ調整。外面：底部木葉瓶・側部ハケメ～口縁ヨコナギナ。側中舟部に炭化物粘付着。側下部摩滅。内面：口縁ヨコナギナ。体部ヘラナギ。カマド前壁架上に倒伏して出土。

第29図 S-18 穴室住居跡出土遺物(2)－火災時の遺物



番号	種類	分類	網目	口径	底面	残存	特徴		写真	収納	
							外観	内面			
13	領土器環	A3	平面	14.1	9	3.1	完形	外観：底部へく切り→体下部～底部回転へラケズリ。両面火導版、両面重ね焼き板。 内面：北東主柱穴導床面から出上。	21-13	23-1	003
14	領土器環	A3	平面	13.3	7.2	3.2	完形	外観：底部切らず不明→体下部～底部回転へラケズリ。両面火導版・重ね焼き板。東周縫隙より焼け跡で近づに叢乱した状態で出土。	23-3	003	
15	領土器環	A3	平面	14.2	7.9	4.6	完形	外観：底部切らず不明→体下部～底部回転へラケズリ。両面火導版。北東主柱穴導床面から内面を上にして出土。	23-2	003	
16	領土器環	A3	カマド天井 崩壊土	15.43	9	4.6	完形	外観：底部切らず不明→体下部～底部回転へラケズリ。両面火導版。カマド内天井崩壊土上から内面を上にして出土。	23-4	003	
17	領土器環	A3	平面	16.6	9.7	4.8	完形	外観：底部切らず切り→体下部～底部回転へラケズリ。内面を上にして北東主柱床面から出土。	23-5	003	
18	領土器環	A3	平面			9.2	破片	外観：底部へく切り→体下部～底部回転へラケズリ。二次加熱を受け、褐色に変色。全体的に壊れ、内面を上にして北東主柱・縫隙上の保満から出土。	23-6	003	
19	領土器高台环	B1	円溝				破片	高台径9.6cm。外観：底部切らず不明→底部回転へラケズリ→高台総合→西ロクロナデ。	23-7	003	
20	領土器高台环	B1	カマド天井 崩壊土	12.4		5.3	3/5	高台径9.5cm。外観：底部へく切り→体下部～底部回転へラケズリ→高台総合→西ロクロナデ。体下部の回転へラケズリ崩壊。両面のロクロナデは平滑。カマド内天井崩壊土上から内面に火導版。	23-8	003	
21	領土器高台环	B2	平面	16		8	7/8	高台径9.6cm。外観：底部へく切り→体下部～底部回転へラケズリ→高台総合→西ロクロナデ。21-13-8の期に三次焼成され、内面を上にして北東主柱穴導から出土。二次加熱を受ける、褐色に変色。	23-12	003	
22	領土器蓋	A1d	平面	16.6		2/5	つまみ紐	外観：底部切らず明るく焼成された火導版へラケズリ。大導板、重ね焼き板。	23-11	003	

第30図 SI8堅穴住跡出土遺物(3)－火災時の遺物



番号	種類	分類	部位	残存	特徴	写真	目録
23	上部器物	I A	壁上4層	1/4	口縁～胴上部破片。口径18.8cm。外面：口縁ヨコナギ。胴部摩滅。内面：平底。軽く研磨み上げ痕。	003	003
24	漆器器环	A1	壁上		底盤中央破片。外面：底盤回輪ヘラケズリ～底盤に焼成前刷毛「×」	003	003
25	漆器器环	A1	壁上3層	1/4	底部破片。口径5.0cm。外面：底部へ切切り。	003	003
26	漆器器环	Ase12	壁上3層	>1/2	高台径10.0cm。施漆剥離手摺り切口～底盤回輪ヘラケズリ～高台結合～内口ヨコナギ。内面底端中央手摺り環。	23-3	003
27	漆器器環	C	壁上4層		外側：円心凹状引き目痕。内面：ナギ。底盤へ切切り。	23-15	003
28	漆器器環	C	壁上4層		外側：円心凹状引き目痕。内面：無。無文当ては横棒ヘラケズリ。底盤ナギ。底盤不良。北側東系。	23-17	003
29	銀器器環	A	東面溝上	1	制部～瓶蓋破片。瓶径16.3cm。外側：制部平行引目。下部手持ちヘラケズリ。底盤ナギ？。内面：胴部のキメナギノミノ。制下部ナギ。両面に一次削面による丸みねじ。	23-13	005
30	刀子		壁上7層	破片	身沿り角丸。横刃・刃闊。圓一部残存。	37-15	029
31	刀子?		木面	破片	刀子の裏板跡か。残存長5.7cm。最大幅1.4cm。厚さ3mm。14の漆器器環の裏の裏面から出土。		029
32	鉄鍬		木面	定形	右側き用の刃刃縫。無茎で基部折り返し。柄と身の装着角度約100°。全長15.9cm。最大幅3.9cm。厚さ3mm。重	37-22	029
33	石石		木面	定形	四緑羽裂縫。長さ5.4cm。幅1cm。厚さ3mm。ほぼ全面研磨。		033
34	有段丸瓦		壁上3層	瓦片	丁様部欠損。凸面：ヨコ引ヘラケズリ。凹面：和目。側面：ヘラケズリ。瓦四面を二分割した後に上屋基部から瓦基部側面にかけて斜めに切り落とす。留灰色。加えて厚1mmの砂・ガラス・長石粒・黒松炭。重さ2-4mmの瓦片を含む。	36-5	027

第31図 S18堅穴住居跡出土遺物(4)－火災時と火災後の遺物

竪穴住居焼失後に竪穴住居跡内に流入した遺物は比較的少なく、堆積土7層から土師器甕・須恵器壺・刀子(30)破片、堆積土6層から土師器甕・須恵器壺・壺破片、堆積土4層から土師器甕(23)・須恵器壺・鉢・甕(27・28)・壺破片、堆積土3層から土師器甕・甕・須恵器壺(25)・高台壺(26)・蓋・甕・有段丸瓦(34)破片、堆積土2層から土師器甕・須恵器壺・甕、堆積土1層から土師器甕・須恵器壺・甕破片が少数出土した。

【S I 7 竪穴住居跡】(平面図:第25図、断面図:第26図、遺物:第32図)

〔位置〕調査区北半西際、丘陵尾根上の標高38m付近に位置する。

〔重複〕S I 8 竪穴住居跡と重複し、これよりも古い。S I 46 竪穴住居跡とも重複するか近接するとみられ、これとは同時には存在しない。また新しい溝2条に一部壊され、北部も削平されている。

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は南北が西辺で3.6m以上、東西が4.7m以上ある。

〔方向〕西辺でみると北東に約20°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは残りのよい西辺で約20cmある。

〔床面〕地山面(黄褐色粘質土)を床面とし、平坦である。床面レベルはS I 8 竪穴住居跡よりも約65cm高い位置にある。

〔カマド〕丘陵尾根の中軸線に直交するように南を向いて設けられ、南辺中央から東寄りに付設されている。新しいS I 8 竪穴住居跡の構築に伴ってカマドの天井部・側壁が大きく壊されており、左側壁の一部、燃焼部奥壁、煙道、燃焼部掘方が残されているものの、残りが悪い。

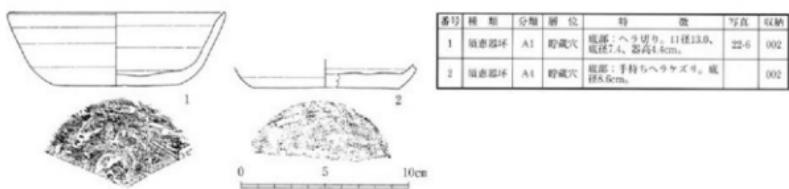
左側壁は地山黄褐色粘質土を用いて構築されており、右側壁には芯材に用いられた粘板岩板状礫片1点(長さ35cm、幅15cm、厚さ5cm)が残る。右側壁の芯材の位置と左側壁からみて、カマド側壁外表面の幅は1.1~1.2m程であったとみられる。燃焼部奥壁は高さ10cmあり、竪穴住居外に向けて幅25cmの煙道が長さ約1.1m延びる。煙道は上部が削平され、深さ8cm程残存する。煙出しビットは削平されて残っていない。

燃焼部の下は深さ10cmの土壤状の掘方がある。燃焼部掘方の上部には扁平な粘板岩板状礫片1点(長さ62cm、幅24cm、厚さ5cm)が据えられ、その上を整地して燃焼部としている。

〔土壤〕カマド右側の南辺際に長さ95cm、幅70cm、深さ12cmの土壤が1基あり、焼土・炭片を多量に含む暗赤褐色土で人为的に埋め戻されている。

〔その他〕周溝・主柱穴・壁柱穴は認められない。

〔堆積土〕新しいS I 8 竪穴住居跡の構築に伴って、人为的に埋められている。



第32図 S I 7 竪穴住居跡出土遺物

〔出土遺物〕 土壌から土師器甕、須恵器坏（1・2）、煙道から土師器甕、埋土から土師器甕の破片が少數出土した。これらのうち土師器はいずれも非ロクロ調整で、須恵器坏には底部の切り離しがへら切りのもの（1）と底部切り離し後に底部を手持ちへラケズリしたもの（2）とがある。

【S I 46堅穴住居跡】（平面図：第25図、断面図：第26図）

〔位置〕 調査区北半西際、丘陵尾根上の標高37.5m付近に位置する。

〔重複〕 S I 8 堅穴住居跡と重複し、これよりも古い。S I 7 堅穴住居跡とも重複するか近接するとみられ、これとは同時には存在しない。北半～東半部は床面下まで削平されている。

〔平面形・規模〕 平面形は方形で、規模は南北が西辺で1.3m以上、東西が南辺で2.3m以上である。

〔方向〕 西辺でみると北で東に約32°偏る。

〔壁〕 上部が大きく削平され、残りが悪く、検出面から床面までの高さは比較的残りのよい南西部でも12cmしかない。

〔床面〕 地山面（黄褐色粘質土）を床面とし、平坦である。床面レベルは S I 8 堅穴住居跡よりも約40cm高い位置にある。

〔主柱穴〕 主柱穴は認められない。

〔カマド〕 カマドの有無、位置は不明である。

〔周溝〕 幅約20cm、深さ約5cmで、西辺・南辺で検出した。北辺・東辺は床面下まで大きく削平されていたため、検出できなかった。

〔堆積土〕 廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕 埋土から摩滅した土師器甕体部破片が少數出土した。

【S I 43堅穴住居跡】（平面図：第34図、断面図：第35図、遺物：第33図）

〔位置〕 調査区北東部、丘陵尾根上東寄り、標高36.5m付近に位置する。

〔重複〕 S I 40・41堅穴住居跡と重複し、これらよりも古い。S I 9 堅穴住居跡と重複するか近接するとみられ、これと同時には存在しない。南半部と東部は床面下まで大きく削平されている。

〔平面形・規模〕 平面形は方形で、規模は南北が西辺で1.2m以上、東西が北辺で3.0m以上である。

〔方向〕 北辺でみると西辺は北で東に約18°偏るとみられる。

〔壁〕 検出面から床面までの高さは残りのよい北西部で40cmある。

〔床面〕 地山面（粘板岩）を床面とし、ほぼ平坦である。床面レベルは新しいS I 40 A 堅穴住居跡よりも約50cm高い位置にある。また、新しいS I 41 堅穴住居跡よりも約20cm高い位置にある。近接して同時には存在しないS I 9 堅穴住居跡よりも約80cm低い位置にある。

〔主柱穴〕 主柱穴は認められない。

〔カマド〕 カマドの位置は不明である。

〔周溝〕 北辺・西辺で検出し、幅15～20cm、深さ約5cmである。

〔堆積土〕 廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕 埋土1層から土師器坏（1・2）・甕、平瓦（3）の破片が少數出土した。これらのうち土師器はいずれも非ロクロ調整のものである。そして、土師器坏には平底のもの（1）、平底気味の

もの（2）とがあり、いずれも体部～底部を手持ちヘラケズリされている。平瓦（3）は桃生城跡出土のものと同様である。

【S I 41堅穴住居跡】（平面図：第34図、断面図：第33図、遺物：第33図）

〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根上東寄り、標高36m付近に位置する。

〔重複〕S I 40堅穴住居跡と重複し、これよりも古い。また、S I 43堅穴住居跡と重複し、これよりも新しい。東半部・南半部は床面下まで大きく削平されている。

〔平面形・規模〕平面形は方形で、規模は南北が西辺で1.0m以上、東西が北辺で2.7m以上である。

〔方向〕北辺でみると西辺は北で東に約9°偏るとみられる。

〔壁〕検出面から床面までの高さは比較的残りのよい北西部で33cmある。

〔床面〕地山面（粘板岩）を床面とし、ほぼ平坦である。床面レベルは新しいS I 40A堅穴住居跡よりも約30cm高い位置にある。また、古いS I 43堅穴住居跡よりも約20cm低い位置にある。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔周溝〕北辺・西辺で検出し、幅15～20cm、深さ約10cmである。

〔堆積土〕廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕埋土1層から土師器壊（4）・甕、須恵器壊（5）・高壊（6）の破片少數と刀子破片（7）1点が出土した。これらのうち土師器はいずれも非ロクロ調整で、土師器壊（4）は平底気味のものである。須恵器壊（5）は体下部～底部を回転ヘラケズリし、内面底部に「善」と墨書きされている。

【S I 9堅穴住居跡】（平面図：第34図、断面図：第35図、遺物：第33図）

〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根上東寄り、標高36.5m付近に位置する。

〔重複〕S I 40堅穴住居跡と重複し、これよりも古い。また、S I 43堅穴住居跡と重複するか近接するとみられ、これと同時に存在しない。東半部は新しいS I 40堅穴住居跡、S X 5平場に伴う造成によって床面下まで大きく削平されている。

〔平面形・規模〕平面形は方形で、規模は南北が西辺で3.9m、東西が北辺で1.8m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で東に約20°偏る。

〔床面〕地山面（黄褐色粘質土）を床面とし、平坦である。床面レベルは新しいS I 40A堅穴住居跡よりも約1.3m高い位置にある。また、近接するS I 43堅穴住居跡よりも約80cm高い位置にある。

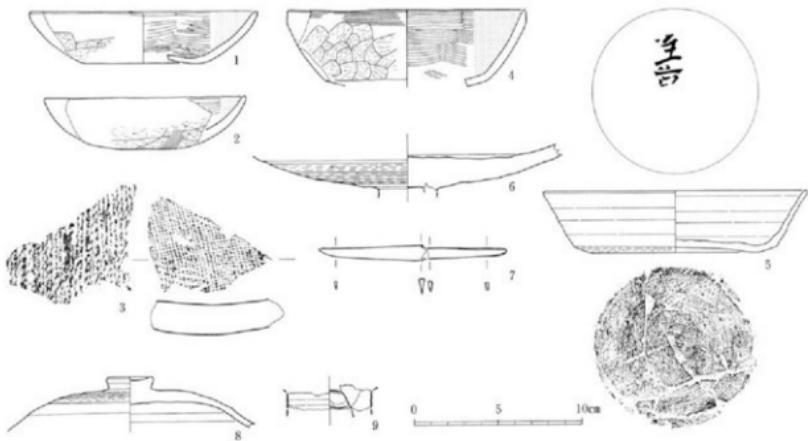
〔壁〕上部が大きく削平され、残りが悪く、検出面から床面までの高さは比較的残りのよい北西部でも17cmしかない。

〔周溝〕北辺・南辺の一部と西辺で幅20～30cm、深さ約5cmの周溝を検出した。周溝内には堆積土2層が堆積し、堅穴住居の機能時にはオープンであったことがわかる。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、西辺以外に付設されていたと考えられる。

〔主柱穴〕北西部の対角線上の位置で主柱穴とみられる柱穴を焼土の下面から検出した。

〔壁柱穴〕北辺・西辺・南辺の周溝内や壁際に壁柱穴とみられる小ビット4を検出した。



番号	種類	分類	住居	断面	残存	特徴	写真	図版
1	土師器	I B2	S I 43	埋土1層	1/4	口径13.6cm、底径0.7cm、高さ3.1cm、非ロクロ調整。平底。外側：体下部手持ちヘラケズリ・摩滅。内側：ヘラヒガ→黒色地。	33-10	022
2	土師器	I A2	S I 43	埋土1層	1/4	口径12.0cm、高さ3.1cm、非ロクロ調整。平底気泡。外側：体下部手持ちヘラケズリ・摩滅。内側：ヘラヒガ→黒色地。	33-11	022
3	平瓦		S I 42	埋土1層	破片	一枚作り。凸面：麻綿織印。凹面：布目。淡灰色。地成まい。『桃生城跡』分類の平瓦1類に相当。		027
4	土師器	I B2	S I 41	埋土1層	1/4	口径14.2cm、底径9.6cm、非ロクロ調整。平底気泡。外側：口縁ココナギ。体部手持ちヘラケズリ・摩滅。内側：ヘラヒガ→黒色地。	33-11	022
5	須恵器	A3	S I 41	埋土1層	2/3	口径15.8cm、底径9.7cm、高さ7.0cm。外側：底部切り離し不明一体下部へ底部回転ヘラケズリ。内側：底部	33-12	022
						→縫合部。内側：再接合。大棒底。地成まい。	33-21	022
6	須恵器	A	S I 41	埋土1層	破片	口縫・高台欠損。环状外縁。体下部回転ヘラケズリ→反接合跡あり→高台接合。	33-13	022
7	刀子	S I 41	埋土			鉄一、逆接合の縫合痕片と接続。半造り刃鋸。横闊：約7mm、身幅約5.1mm、刃幅7mm、厚さ3mm。		031
8	須恵器蓋	A 1d	S I 9	堆積土上1層	破片	「瓦み」形側面鋸刃。口縫欠。つまみ径2.8mm。外側：底部回転ヘラケズリ。内側：大棒底。	33-19	002
9	須恵器	A	S I 9	堆積土上	破片	脚部破片。外側：ロクロナギ。内側：指ササギ・チサ。片端との接合面に焼塗。	33-18	002

第33図 S I 9・41・43堅穴住居跡出土遺物

〔堆積土〕2層に分かれ、堆積土2層には焼土粒・炭片を多く含む。いずれも本堅穴住居の火災後に自然堆積したものである。火災した堅穴住居跡であるが、床面には炭化材はほとんど残っていないかった。

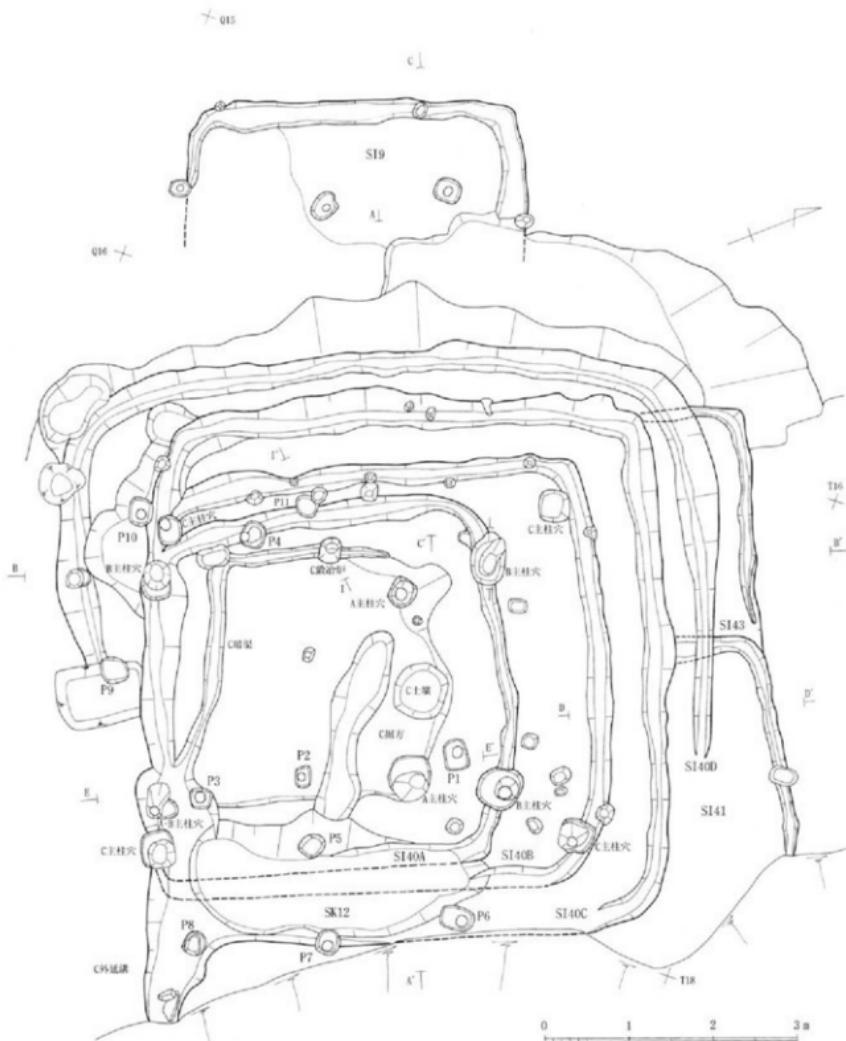
〔出土遺物〕主柱穴から土師器甕・須恵器甕・壺、周溝から土師器甕・堆積土から土師器甕・須恵器甕・蓋(8)・甕・検出面から須恵器高杯(9)の破片が少數出土した。これらのうち土師器はいずれも非ロクロ調整で、須恵器蓋(8)は体部が回転ヘラケズリされている。

〔S I 40堅穴住居跡〕(平面図：第34・36・37・39・41図、断面図：第35-37・39図、遺物：第36・38・40・42・43図、図版18)

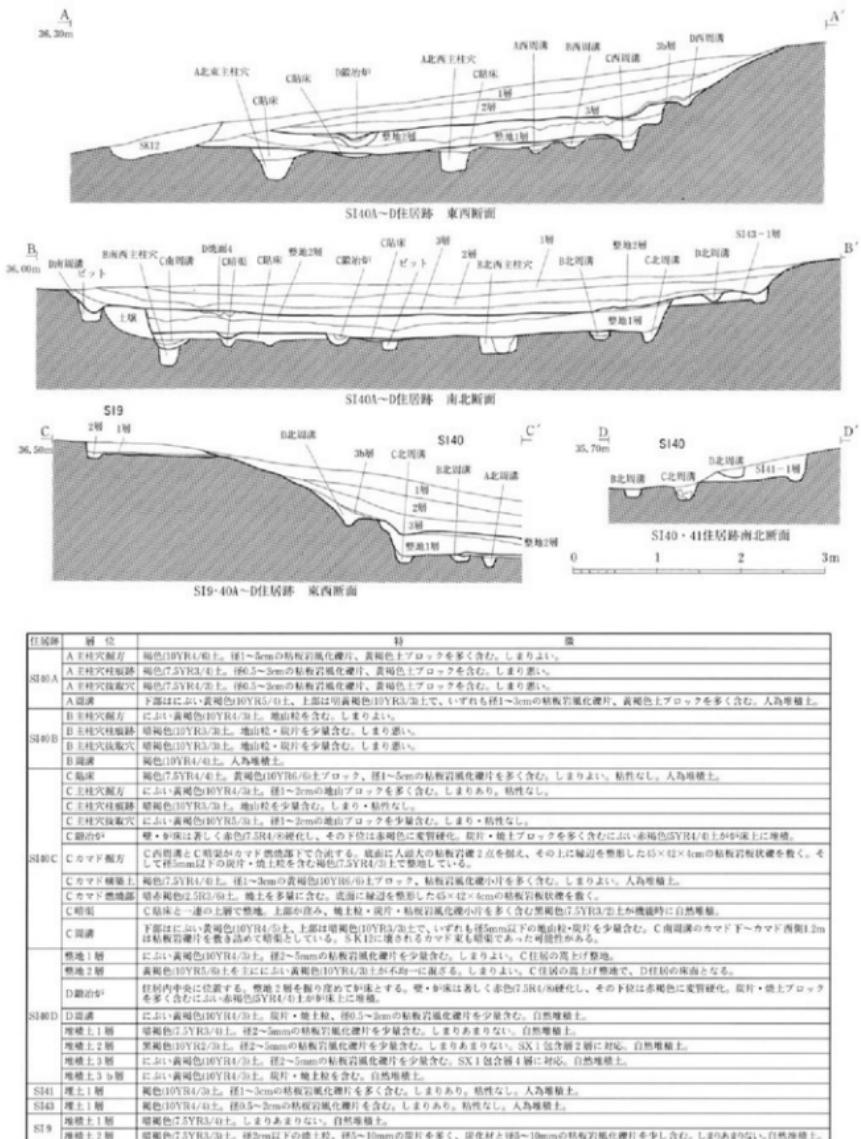
〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根上東寄り、標高36m付近に位置する。

〔重複〕S I 43・41・9堅穴住居跡と重複し、これらよりも新しい。また、S I 40堅穴住居跡は3回拡張されており、S I 40A堅穴住居跡→S I 40B堅穴住居跡→S I 40C堅穴住居跡→S I 40D堅穴住居跡と変遷している。S I 40A堅穴住居跡→S I 40B堅穴住居跡→S I 40C堅穴住居跡への変遷は、床面レベルを変えずに、南辺・東辺をほぼ一致させ、斜面上側にあたる西辺・北辺を拡張させ

たものである。また、S I 40D 竪穴住居跡は S I 40C 竪穴住居跡を 20~30cm 嵩上げ整地し、斜面上側にあたる西辺・北辺を拡張させている。S I 40D 竪穴住居跡は S K 12 土壙と重複し、これよりも古い。
 《S I 40A 竪穴住居跡》(平面図: 第34・36図、断面図: 第35・36図、遺物: 第36図)



第34図 S I 40A~D・9・41・43竪穴住居跡平面図 (1/60)



第35図 S140A~D・9・41・43窓穴居跡断面図 (1/60)

〔平面形・規模〕 平面形はほぼ正方形で、規模は南北が西辺で約4.2m、東西が北辺で約4.5mである。

〔方向〕 西辺でみると北で東に約12°偏る。丘陵尾根の方向とほぼ一致し、等高線に沿っている。

〔壁〕 床面レベルと同じくしてS I 40B豎穴住居跡・S I 40C豎穴住居跡と2度拡張されているため、壁の高さはない。

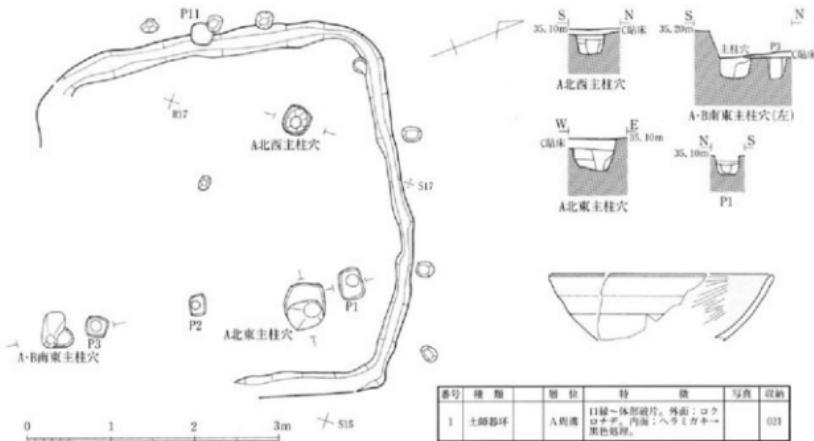
〔A床面〕 地山面（粘板岩岩盤とその風化した黄褐色粘質土）を床面とし、ほぼ平坦である。

〔A主柱穴〕 S I 40C豎穴住居跡の貼床の下から、北西・北東主柱穴を検出した。北西・北東主柱穴は、S I 40A豎穴住居跡の対角線上で、北辺から40cm離れた等距離、対称位置にある。掘方は北西主柱穴が長辺36cm、短辺30cmの隅丸長方形で、深さ20cmあり、北東主柱穴が長辺約50cm、短辺約45cmの隅丸長方形で、深さ28cmある。柱はいずれもS I 40B豎穴住居への拡張時に抜き取られており、柱痕跡の大きさは不明である。柱抜取穴も掘方と同様にS I 40C豎穴住居跡の貼床に覆われている。柱抜取穴の中心でみると、北西主柱穴－北東主柱穴の柱間寸法は2.25mである。

なお、周辺の柱穴の検出状況からみて、A南東・南西主柱穴はB南東・南西主柱穴と完全に一致し、南周溝上にあるとみられる。B南東主柱穴の柱抜取穴の中心でみると、北東主柱穴－南東主柱穴の柱間寸法は約3.2mとみられる。

〔その他の柱穴とピット〕 東辺の内側でP1～3の3箇所の柱穴、中央付近で1箇所のピット、西辺と北辺の外側でそれぞれ3箇所のピットを検出した。位置関係や人為的に埋められていることなどから、これらはS I 40A豎穴住居跡もしくはS I 40B豎穴住居跡に伴うとみられる。

〔Aカマド〕 カマドの位置は不明である。S I 40C豎穴住居跡のカマドが南辺東寄りに付設されていること、S I 40C豎穴住居跡がS I 40A・B豎穴住居跡と床面レベル、南辺の位置と同じくして拡張されおり、南辺の機能が踏襲されていると考えられることから、S I 40A豎穴住居跡のカマドも南辺に付設されていた可能性がある。



第36図 S I 40A豎穴住居跡平面図・断面図 (1/60)、出土遺物

〔A周溝〕西辺・北辺、および東辺の一部で、幅15~30cm、深さ約10cmの周溝を検出した。南辺はS I 40 B・C竪穴住居跡の南周溝と一致するため、幅、深さは不明である。S I 40 B竪穴住居跡の構築に伴い、人為的に埋められている。

〔出土遺物〕A周溝から土師器壊(1)・甕、須恵器壊・甕の破片、主柱穴柱抜取穴から土師器壊・甕の破片が少數出土した。これらのうち土師器はいずれもロクロ調整のものである。

《S I 40 B竪穴住居跡》(平面図:第34・37図、断面図:第35・37図、遺物:第38図)

〔平面形・規模〕平面形はほぼ正方形で、規模は南北が西辺で約5.3m、東西が北辺で約5.2mである。床面レベルを同じくしてS I 40 A竪穴住居跡を北に約1.2m、西に約0.4m、東に約0.3m拡張している。

〔方向〕西辺でみると北で東に約15°偏る。

〔壁〕床面レベルを同じくしてS I 40 C竪穴住居跡に拡張されているため、壁の高さはない。

〔B床面〕地山面(黄褐色粘質土)を床面とし、ほぼ平坦である。床面レベルはA床面と同じである。

〔B主柱穴〕北西・北東・南西・南東主柱穴4箇所を検出した。北西・北東主柱穴は、S I 40 B竪穴住居跡の対角線上で、北辺から約1.3m離れた等距離、対称位置にある。また、南西・南東主柱穴は南周溝上にあって、北西・北東主柱穴と線対称の位置にある。南東主柱穴はS I 40 D竪穴住居跡のカマド燃焼部掘方に覆われ、その下で検出した。掘方は北西主柱穴が長辺62cm、短辺42cmの梢円形で、深さ23cm、北東主柱穴が径約57cmの円形で、深さ34cm、南西主柱穴が一辺35cmの隅丸正方形で、深さ20cm、南東主柱穴が長辺35cm、短辺約23cmの長方形で、深さ56cmある。



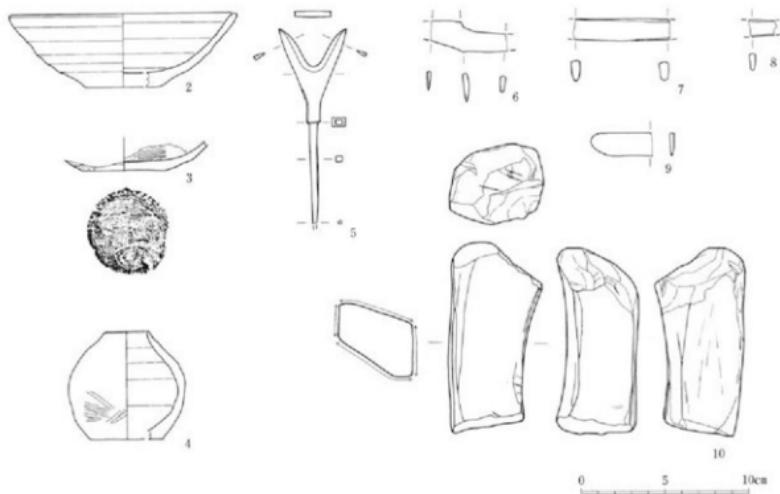
第37図 S I 40 B 竪穴住居跡平面図・断面図 (1/60)

柱はいずれも S I 40 C 壁穴住居への拡張時に抜き取られており、柱痕跡の大きさは不明である。柱抜取穴の中心でみると、北西主柱穴 - 北東主柱穴の柱間寸法は約2.3m、北東主柱穴 - 南西主柱穴の柱間寸法は約4.0mである。

〔ピット〕 西辺と南辺の際や周溝底面、周溝の縁の8箇所でピットを検出した。位置関係や人為的に埋められていることなどから、これらは S I 40 B 壁穴住居跡と床面レベル、南辺の位置を同じくして拡張されおり、南辺の機能が踏襲されていると考えられることから、S I 40 B 壁穴住居跡のカマドも南辺に付設されていた可能性がある。

〔Bカマド〕 カマドの位置は不明である。S I 40 C 壁穴住居跡のカマドが南辺東寄りに付設されていてこと、S I 40 C 壁穴住居跡が S I 40 A・B 壁穴住居跡と床面レベル、南辺の位置を同じくして拡張されおり、南辺の機能が踏襲されていると考えられることから、S I 40 B 壁穴住居跡のカマドも南辺に付設されていた可能性がある。

〔B周溝〕 西辺・北辺、および東辺の一部で、幅25~30cm、深さ10~15cmの周溝を検出した。南辺は S I 40 C 壁穴住居跡の南周溝と一致するため、幅、深さは不明である。S I 40 C 壁穴住居跡の構築に伴い、人為的に埋められている。



番号	種類	分類	朝代	残存	特徴		写真	反映
					外	内		
2	環底系土器环	II A	B周溝	1/3	外径13.6cm、底径1.5cm、高4.4cm。ロクロ調整。外面：底端部を斜め切り無調整。にふい黄褐色。胎土に砂粒含む。	33-1	021	
3	土師器环	II A	B周溝	破片	底径5.0cm。ロクロ調整。外面：底端部を斜め切り→体下部一部手持ちヘラケズリ。内面：やや崩れた放射状へナリ。黒色地。		021	
4	土師器环	II	B周溝	3/4	外径2.6cm、底径1.6cm、高6.5cm。ロクロ調整。外面：体部ヘラヘカキ・摩滅、底部調整不明。内面：ロクロナリ。	32-18	021	
5	鉢		B周溝	完形	輪盤式鉢器。底部に両側、現存長11.7cm。胎壁部～盤底部5.6cm。胎壁厚4.0cm。基盤有長6.6cm。	27-5	030	
6	月子		B周溝	完形	月子の素部破片か。現存長5.8cm。幅1.3cm。月元幅1.5cm。胎厚2mm。	27-31	030	
7	月子		B周溝	破片	月子の素部破片か。現存長5.5cm。幅1.3cm。月元幅1.5cm。	27-28	030	
8	月子		B周溝	破片	月子の素部破片か。現存長1.7cm。幅1.0cm。胎厚4mm。		030	
9	月子		B周溝	破片	月子の素部破片。現存長3.6cm。幅1.4cm。胎厚2mm。	27-37	030	
10	砾石		B周溝	完形	椭圓形砂岩製。直方体形。4面削形。長さ11.5cm、幅5.4cm、厚さ4.8cm。	39-13	035	

第38図 S I 40 B 壁穴住居跡出土遺物

〔S I 40 C 竪穴住居跡〕(平面図: 第34・39図、断面図: 第35・39図、遺物: 第40図)

〔出土遺物〕B周溝から須恵系土器壺(2)、土師器壺(3)・小型壺(4)・甕、須恵器鉢・甕の破片、主柱穴掘方から土師器壺・甕の破片、主柱穴柱抜取穴から土師器壺・甕、須恵器壺の破片が少數出土した。これらのうち土師器はいずれもロクロ調整のものである。他にはほぼ完形の雁股式鉄鎌(5)1点、刀子(6~9)破片4点、砥石(10)1点が出土した。

〔平面形・規模〕平面形はほぼ正方形で、規模は南北が西辺で約6.3m、東西が北辺で約6.5mである。床面レベルを同じくしたまま、S I 40 B 竪穴住居跡を北に約0.7m、西に約0.8m、東に約0.6m拡張している。

〔方向〕西辺でみると北で東に約20°偏る。

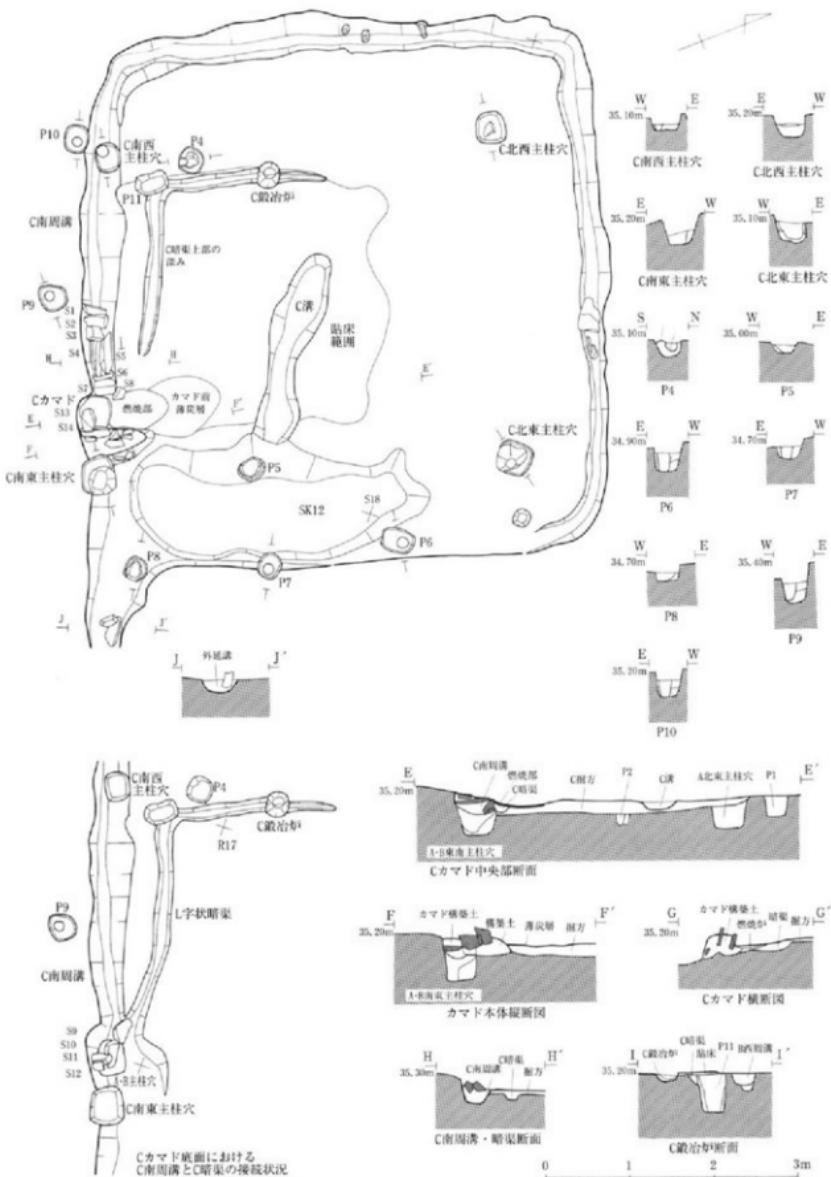
〔壁〕残りのよい西辺と北西隅、南西隅では検出面から床面までの壁の高さは32~38cmあり、約110°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。東辺は床面下まで大きく削平され、壁の高さはない。北辺・南辺の東寄りは上部を大きく削平され、北東隅・南東隅に向かうにつれて次第に残りが悪くなる。

〔C床面〕S I 40 B 竪穴住居跡を拡張する際に、S I 40 C 竪穴住居跡床面の大部分(西辺・北辺・東辺に沿った幅20~80cmのコ字状部分を除く)を浅く掘り窪め、そこをさらに貼床して床面としている。それ以外の拡張部分はS I 40 B 竪穴住居跡床面レベルまで掘削した掘方底面の地山面(黄褐色粘質土)を床面としている。床面はほぼ平坦である。床面レベルはA・B床面と同じである。

〔C主柱穴〕北西・北東・南西・南東主柱穴4箇所を検出した。北西・北東主柱穴は、S I 40 C 竪穴住居跡の対角線上で、北辺から1.2~1.3m離れたほぼ等距離、対称位置にある。また、南西主柱穴は南周溝上、南東主柱穴は南周溝上のカマド左隣にあって、北西・北東主柱穴と線対称の位置にある。掘方は北西主柱穴が長辺40cm、短辺36cmの隅丸長方形で、深さ27cm、北東主柱穴が一辺40cmのはば正方形で、深さ35cm、南西主柱穴が長辺35cm、短辺30cmの隅丸長方形で、深さ20cm、南東主柱穴が長辺35cm、短辺23cmの長方形で、深さ40cmある。柱はいずれもS I 40 D 竪穴住居への拡張時に抜き取られるか切り取られている。柱痕跡はC南西主柱穴でみると15cmの円形である。北東主柱穴の柱抜取穴の中心、北西主柱穴の礎盤、南西主柱穴の柱痕跡でみると、北西主柱穴-北東主柱穴の柱間寸法は約4.0m、北西主柱穴-南西主柱穴の柱間寸法は約4.6mである。

〔その他の柱穴〕C北西主柱穴とC南西主柱穴を結ぶ線上の南寄りでP 4柱穴、C北東主柱穴とC南東主柱穴を結ぶ線上の南寄りでP 5柱穴、東辺際に沿ってP 6~8柱穴、南辺の屋外でP 9・10柱穴、西周溝内と西辺壁際の3箇所で小ピットを検出した。位置関係や埋土、P 4柱穴がS I 40 D 竪穴住居の嵩上げ整地に覆われることなどから、これらはS I 40 C 竪穴住居跡に伴うとみられる。P 4~10柱穴の掘方は、長辺30~40cm、短辺25~30cmの隅丸長方形で、深さ12~30cmある。P 6・7・9・10柱穴では径12cmの円形の柱痕跡を確認した。P 4・5・8柱穴、ピットは柱が抜かれて埋められている。

〔Cカマド〕丘陵尾根の中軸線に直交するように南を向いて設けられ、南辺中央から約1.4m東寄りに付設されている。S I 40 D 竪穴住居の構築に伴って、カマドの右側壁、天井部は完全に撤去されていたが、左側壁、奥壁、燃焼部、燃焼部下の掘方が残っていた。煙道、煙出しピットは削平されて



第39図 S140C 竪穴住居跡平面図・断面図 (1/60)

残っていないため、その構造は不明確だが、奥壁が南辺より25cm外側に張り出すため、煙道が外に長く延びるタイプではない可能性が高いと考えられる。

左側壁は粘板岩板状礫片を芯材として黄褐色～褐色粘質土を用いて作られている。左側壁は長さ85cm、奥で高さ24cm、中程で芯材に用いられた粘板岩板状礫片の天端まで高さ34cmある。奥壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さ12cmある。カマド左側壁の芯材に用いられた粘板岩板状礫片は8点ある。最も大きいものは長さ28cm、幅23cm、厚さ7cm、次いで大きいのは長さ26cm、幅20cm、厚さ4cm、次に大きいものは長さ18cm、幅11cm、厚さ5cmで、これらは縦方向に立てられて芯材とされている。このうち内側を向いた1点は熱を受けてカマド内側が黒く焦げている。

カマド燃焼部の下にはS140C堅穴住居跡の南東主柱穴があり、S140C堅穴住居とそのカマド構築に伴い、柱を抜き取ってその柱抜取穴を埋め戻している。そしてその上に粘板岩の板状礫片や角柱状礫片4点(S9～12)を敷き、その上に縁辺を剥離によってホームベース形に整形した粘板岩の大型扁平板状礫片1点(S13)、粘板岩板状礫片1点(S14)を置き、その上を整地して燃焼部としている。

カマド燃焼部の下、およびC南周溝の暗渠に用いられた板状や角柱状の粘板岩礫片は14点あり(S1～14)、その大きさは以下のとおりである。

No.	長さ	幅	厚さ	No.	長さ	幅	厚さ	No.	長さ	幅	厚さ
S 1	30cm	16cm	5cm	S 5	40cm	13cm	10cm	S 10	40cm	15cm	14cm
S 2	33cm	16cm	7cm	S 6	26cm	15cm	6cm	S 11	28cm	17cm	6cm
S 3	22cm	22cm	10cm	S 7	30cm	20cm	8cm	S 12	22cm	15cm	3cm
S 4	51cm	16cm	12cm	S 8	18cm	13cm	5cm	S 13	45cm	42cm	4cm
S 5	48cm	13cm	10cm	S 9	30cm	15cm	10cm	S 14	33cm	16cm	5cm

カマド構築の手順は以下のように復元される。

① S140C堅穴住居跡の南東主柱穴の柱を抜き取り、柱抜取穴を埋め戻す。② S140C堅穴住居跡の床面の大部分を浅く掘り進め、カマド前にはL字状に溝を掘削し、カマド右側壁の下でC南周溝と接続させ、埋め戻して暗渠とする(L字状暗渠)。③カマド燃焼部の下を掘り進め、奥壁も作り出す。④カマド燃焼部の下からC南周溝とL字状暗渠の合流点にかけて、板状や角柱状の粘板岩礫片4点(S9～12)を並べる。⑤S9～12の上を整地し、その上に扁平で大型の粘板岩板状礫片1点(S13)、粘板岩板状礫片1点(S14)を置き、さらにその上を整地して燃焼部とする。⑥燃焼部と接する箇所から長さ1.2mにわたってC南周溝を整地し、その上部に角柱状・板状の粘板岩礫片8点(S1～8)を置いて暗渠とする。⑦燃焼部の両脇に側壁、その上に天井部を築き上げ、カマドを構築する。

〔C周溝〕西辺・北辺・南辺で幅20～40cm、深さ10～15cmの周溝を検出した。東辺では上部を削平されたり、新しいSK12土壤で壊されていたため一部を検出したにすぎないが、本来は四周を巡っていたとみられる。そして、南周溝と東周溝の合流点から斜面下方に向けて外延溝が延びている。

前述のように、Cカマドの燃焼部の下、およびカマド右側約1.2mまでは板状や角柱状の粘板岩礫片12点(S1～12)を入れて暗渠としている。この他の部分については、人為的に埋められているが、S140D堅穴住居を構築した際に嵩上げ整地しているので、S140C堅穴住居の機能時に暗渠

となっていたのか開渠となっていたのか区別できない。しかし、カマド右側の南周溝が少なくとも長さ約1.2mにわたって暗渠となっていること、周溝の底面に自然堆積した砂薄層が認められなかつたことから、この他の部分についても暗渠となっていた可能性が高いと考えられる。

〔L字状暗渠〕カマドの右側、竪穴住居内部の南西部で、南周溝・西周溝と平行し、Cカマド右側壁下で南周溝と合流するL字状暗渠を検出した。西周溝と平行する部分は長さ2.1m、南周溝と平行する部分は長さ2.7mで、いずれも幅は15~20cm、深さは10cmある。西周溝と平行する部分にはC鍛冶炉、L字状に屈曲する箇所にはピット（P11）が設けられている。

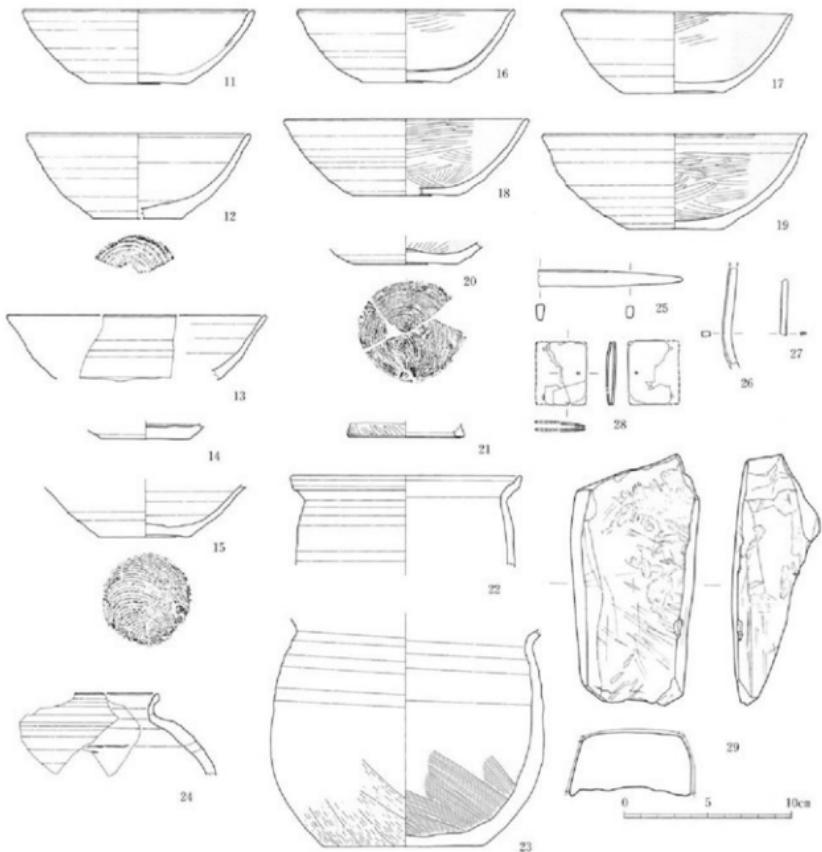
このL字状暗渠はC貼床とともに埋め戻され、SⅠ40C竪穴住居の機能時には暗渠の中心部分がわずかに壅んだ状態で機能していた。壅みは南周溝との合流点と屈曲部までの中间部分が深さ2~3cmと最も深くなっている。この壅んだ箇所に焼土粒・炭片を含む褐色土が堆積していた。C鍛冶炉の操業中に生じた焼土粒・炭片がこの暗渠上面の壅みに流れ込んだか、掃き出されたものとみられる。

〔C溝〕竪穴住居ほぼ中央部から南東隅に斜めに向かう溝が1条ある。新しいSK12土壤に壊されているが、南東隅で外延溝と接続するとみられ、長さ約2.4m検出した。幅は30~60cmと一定しない。深さは5~10cmと浅い。C掘方を貼床してから掘削しており、SⅠ40C竪穴住居の機能時には開渠であったとみられる。C鍛冶炉の東約90cmに隣接し、南東隅に向けて傾斜することから、鍛冶炉の操業と関連すると考えられる。

〔C外延溝〕南周溝と東周溝の合流点から斜面下方に向けて外延溝が延びている。外延溝は南周溝の延長線上にあり、長さ約1.1m検出した。その先は底面よりさらに大きく削平され、残っていない。幅は合流点で1.0mあるが、次第に狭くなって、先では35cmとなる。深さは10~26cmある。粘板岩板状礫片2点が入れ込まれており、人為的に埋め戻されている。

〔C鍛冶炉〕西周溝と平行する部分のL字状暗渠の上に、暗渠を掘り込んでC鍛冶炉が設けられている。長径31cm、短径25cmの楕円形で、深さ10cmある。西側の炉壁はアーバー状に起伏した熔着滓が分厚く付着している。鞴羽口は検出されなかった。また、C鍛冶炉内部の土壤を水洗洗浄したが、磁着する小土塊・小石が検出されたのみで、鉄滓（流动滓・粒状滓など）や鑄造済片は検出されなかった。

〔出土遺物〕カマド構築土から須恵系土器壺（13）、土師器壺（19）・高台壺・甕、須恵器壺・甕の破片、C貼床から土師器壺・甕、須恵器壺の破片、床面から土師器壺破片（20）・甕、須恵器甕の破片、Cカマドから銅製帶金具（28）1点、カマド前炭層から土師器壺、須恵器甕の破片、P4柱穴からほぼ完形の須恵系土器壺（11）と土師器甕（23）、C暗渠から土師器高台壺（21）、C周溝から須恵系土器壺（12・14）、土師器壺（16~18）、須恵器短頭甕（24）の破片、刀子？（25）1点、不明鉄製品（26・27）2点、砥石（29）1点、外延溝から須恵系土器壺（15）の破片などが少數出土した。これらのうち土師器はいずれもロクロ調整のもので、土師器壺で底部の切り放しと調整のわかるものはいずれも回転糸切り無調整である（16~20）。須恵系土器壺も回転糸切り無調整である（11・12・14・15）。



番号	種類	分類	層位	口径	底径	高さ	残存	特徴	写真	収納
11	須恵器上器体	P 4		13.6	6	4.4	1/2	ロクロ調理。外面：底面周縁部切り無調理。褐色。白色粒。赤色板状多く含む。施成不良。	33-3	021
12	須恵器上器体	C 細溝		13.4	5.4	5.1	1/4	ロクロ調理。外面：底面周縁部切り無調理。褐色。白色粒。長石板を多く含む。施成良好。		021
13	須恵器上器体	カマド構築上		15.5				破片。ロクロ調理。に山字模様。		021
14	須恵器上器体	C 細溝			5.4		3/4	ロクロ調理。外面：底面周縁部切り無調理。灰白色。細かい砂粒を含む。施成良好。		021
15	須恵器上器体	外試溝			5.5		1	ロクロ調理。外面：底面周縁部切り無調理。灰白色。細かい砂粒を含む。施成良好。	32-21	021
16	土師器体	II B	C 細溝	13	5.4	4.3	1/3	ロクロ調理。外面：底面周縁部切り無調理。	32-11	021
17	土師器体	II B	C 細溝	13.7	7	4.8	1/2	ロクロ調理。外面：底面周縁部切り無調理。素面。施成良好。内面：ヘラミガキ→黒色處理。	32-12	021
18	土師器体	II B	C 細溝	14.6	6.4	4.6	1/5	ロクロ調理。外面：底面周縁部切り無調理。内面：ヘラミガキ→黒色處理。	32-13	021
19	土師器环	II B	カマド構築上	15.8	5.7	5.7	1/3	ロクロ調理。外面：底面周縁部切り無調理。灰白色。内面：ヘラミガキ→黒色處理。	32-19	021
20	土師器环	II B	床面		6.2			ロクロ調理。外面：底面周縁部切り無調理。灰白色。内面：ヘラミガキ→黒色處理。胎土に舟形骨針を含む。		021
21	土師器高台环	II D	C 带渠				1/4	高台部小破片。ロクロ調理。外面：ロクロナデ→ヘラミガキ→黒色處理。内面：ロクロナデ→黑色處理。		021
22	土師器環	B	C 細溝	13.8			1/5	白線帯受け口既。ロクロ調理。		021
23	土師器環	B	P 4		9.5		3/5	外面：底面ロクロナデ。胴下部～底部手持ちヘラケズリ。内面：ロクロナデ、胴下部ナデ。	32-17	021
24	須恵器壺	B	C 細溝					破片。口部形状～脚上部破片。切端部。外側：ロクロナデ。胴下部に接。内面：ロクロナデ。	33-8	021
25	刀子?	C 細溝						破片。刀子の裏葉部分か。現存高8.6cm。幅1.0cm。幅厚5mm。		030
26	不明器物	C 細溝						破片。現存高3.9cm。断面1.5×3mm左右。		030
27	不明器物	C 細溝						破片。現存高3.1cm。断面1.5×1.5mm左右。		030
28	帶金具	C カマド						鉢形。通孔。長さ9.8cm。幅2.5cm。厚さ5mm。3箇所に穴開あり。うち1箇所に新星核。	37-40	030
29	砾石	C 細溝						細粒砂岩質。平行状。長さ15.0cm。幅7.7cm。厚さ5.2cm。	29-14	035

第40図 S1 140C 穴窓住居跡出土遺物

〔S I 40D堅穴住居跡〕(平面図: 第34・41図、断面図: 第35図、遺物: 第42・43図)

〔平面形・規模〕平面形はほぼ正方形で、規模は南北が西辺で約7.8m、東西が北辺で4.8m以上である。S I 40C堅穴住居跡を20~30cm嵩上げ整地し、さらに北に約0.7m、西に約0.6m拡張している。東へも拡張していると考えられるが、削平されて不明確である。

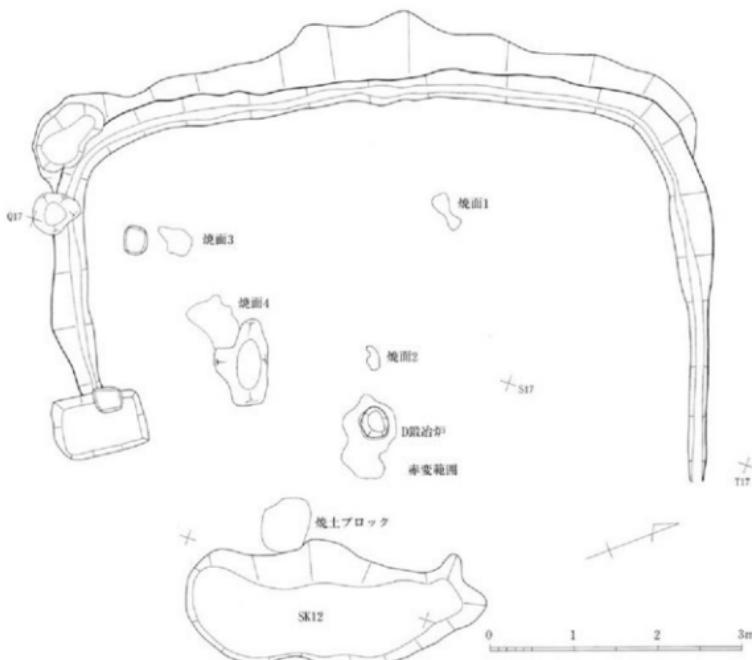
〔方向〕西辺でみると北で東に約17°偏る。

〔壁〕残りのよい西辺では検出面から床面までの高さは70~80cmあり、25~30°の傾斜で斜めに立ち上がる。東半部は床面下まで大きく削平され、壁は残っていない。

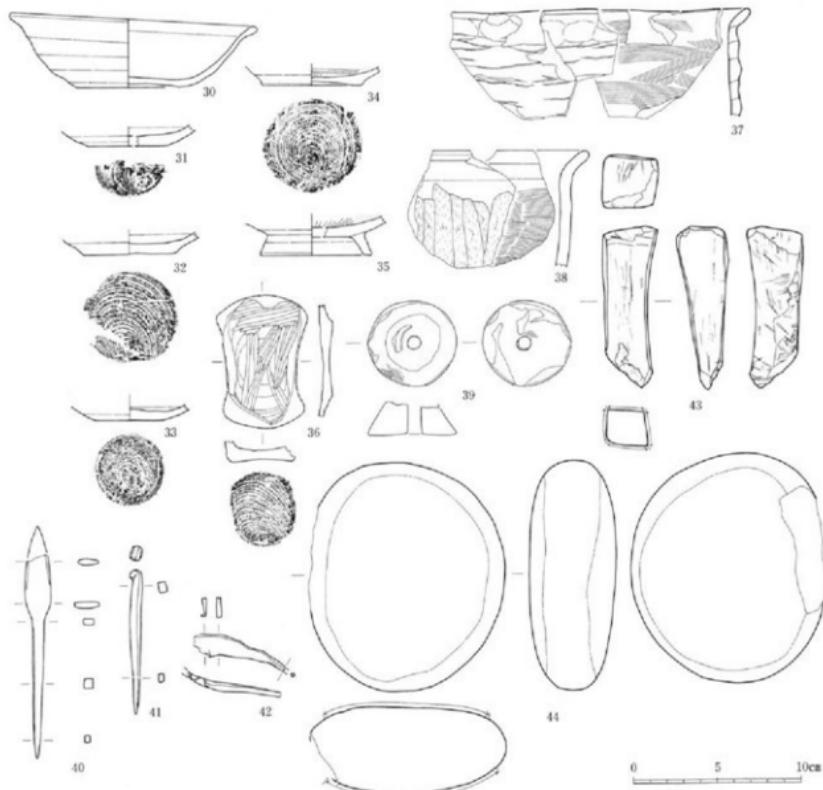
〔D床面〕S I 40C堅穴住居跡を20~30cm嵩上げ整地し、西辺を約1.2m斜面上側に、北辺を約60cm斜面上側に拡張させている。D西周溝の底面は床面中央部より約30cm高い位置にあり、埋め戻したC西周溝の上もC西周溝を反映して窪んでいる(第34図断面A-A'、C-C')。D北周溝の底面も床面中央部より約15cm高い位置にあり、D南周溝の底面も3cm高い位置にある(第34図断面B-B')。このように、D床面は中央部が窪み、各辺の縁辺に近づくにつれてレベルが高くなっている。全体としてみれば断面が浅い掘り鉢状になっている。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。



第41図 S I 40D堅穴住居跡平面図

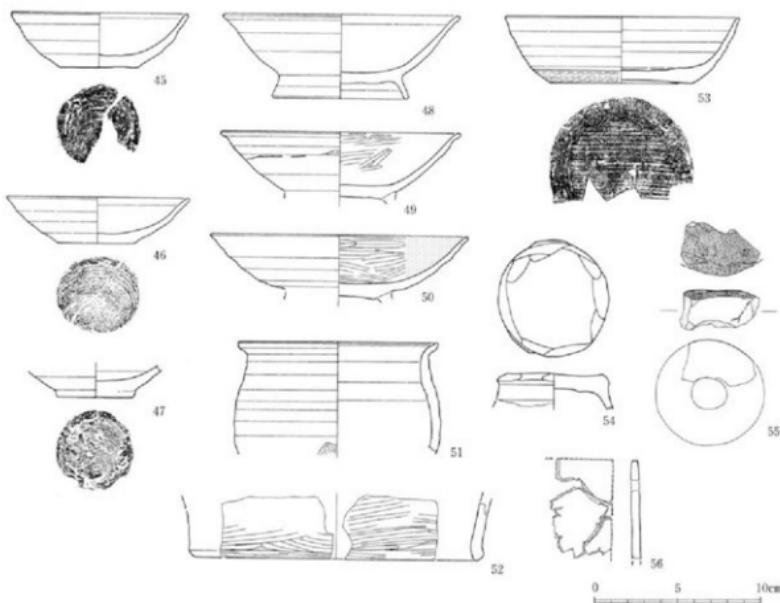


番号	器種	分類	形	残存	特	徴	写真	取納
30	刷毛手・破片	D整地	1/2	口径13.8cm、深さ6.0cm。ロクロ調整。外面：底部内板を切り無調整。褐色。砂粒を含む。焼成不良。	33-4	021		
31	刷毛手・破片	D整地	破片	底径6.0cm。ロクロ調整。外面：底部内板を切り無調整。黄褐色。白色灰を多く含む。焼成不良。	32-1	021		
32	刷毛手・破片	D整地	破片	底径5.5cm。ロクロ調整。外面：底部内板を切り無調整。黄褐色。白色灰を多く含む。焼成良好。	32-1	021		
33	刷毛手・破片	D整地	破片	底径5.2cm。ロクロ調整。外面：底部内板を切り無調整。白色。砂粒・ガラスを多く含む。焼成不良。	32-1	021		
34	土器高台环	II B	D整地	破片	底径6.0cm。ロクロ調整。外面：底部内板を切り無調整。内面：ヘリ上ガタ→黑色處理。	32-1	021	
35	土器高台环	II	D整地	破片	底径7.4cm。ロクロ調整。外面：ロクロナード塗装切り離し。不明→絆合。外面：ハラミガキ→黒色處理。	32-1	021	
36	土器耳皿	II B	D整地	破片	口縁4cm。無肩性。ロクロ調整。外面：ロクロナード塗装切り離し。内面：ロクロナード塗装切り離し。形状不明。	32-19	021	
37	製塩土器	D整地	破片	口縁4mm	口縁端削片。漆面ロクロ調整。外面：粘土被繊維上打痕一帯オサ。内面：ナゲ。黄褐色。径2~5mmの砂粒を含む。	33-9	026	
38	土器器鉢?	II?	D整地	破片	口縁端削片。ロクロ調整。外面：ロクロナード・漆面手持ちへラケズリ。内面：ロクロナード・体形ナゲ。	32-19	021	
39	土器粘合車	D整地	完形	上蓋、土器鉢、底面円錐形。断面薄有肩。頂部・底面削落。ナゲ。底部は比較状に覆む。底径約3.1cm。肩径約2.0cm。軸孔径0.8cm。重量45g。焼成良好。側面・下面に加熱。胎土に微細な長石粒・ガラス粒・砂粒を多く含む。	36-11	026		
40	鉄劍	D整地	破片	口縫端削片	頭端彫刻式。頭部の先端欠損。胎身断面は丸み造。胎部は匣型による業を作らない。現存長12.2cm。胎身幅1.6cm。頭部幅約3mm。	37-6	030	
41	鉄釘	D整地	完形	頭部×3mm×長方形。長さ約7cm。表面×3mm長方形。	37-25	030		
42	刀子	D整地	破片	頭部・基部破片。無開。現存長6.7cm。幅1.4cm。種厚3mm。	38-6	035		
43	鐵石	D整地	完形	施錠用砂岩製。直方体化。4面研削・擦磨。長さ9.7cm。幅3.3cm。厚さ2.0cm。	38-6	035		
44	磨石	D整地	完形	安山岩製。扁平な圓形。表面両面研磨。現存長11.7cm。幅5.3cm。	38-6	035		

第42図 S I 40D 積穴住居跡出土遺物(1)－構築時の遺物

(D周溝) 西辺・北辺・南辺で幅25~50cm、深さ5~12cmの周溝を検出した。東半部は床面下まで大きく削平され、新しいSK12土壤に壊され、周溝は残っていない。S140A~C堅穴住居跡でそれぞれ東周溝の一部を検出しているため、最終的に拡張されたS140D堅穴住居跡にも東周溝があったと考えられる。周溝は自然堆積しており、S140D堅穴住居の機能時には周溝は開闢であったとみられる。

(D鍛冶炉) D床面の中央やや東寄りで鍛冶炉1基を検出した。このD鍛冶炉は長径37cm、短径32cmの不整梢円形で、深さは8cmと浅い。炉壁は2~3cmの厚さで全体が著しく赤色硬化していた。炉の周囲の床面も長径100cm、短径65cmの不整楕円形に熱を受けて赤褐色に変化しており、D鍛冶



番号	種類	分類	幅	口径	底径	器高	残存	特徴	写真	収納
45	堅窓土器小型环	堅窓土3層	10.6	5.0	3.3	1/2	ロクロ調整。外面：底然回転式切り無調整。褐色。微細な砂粒を少含む。	32-22	021	
46	堅窓土器小型环	堅窓土3層	10.9	4.7	2.8	4/5	ロクロ調整。外面：底然回転式切り無調整。褐色。砂粒をほとんど含まない。	33-2	021	
47	堅窓土器環	堅窓土3層		4.7			ロクロ調整。外面：底然回転式切り無調整。底部の中柱に回転角切り痕があり、底部円柱作りを示す。にふる褐色。砂粒をほとんど含まない。		021	
48	堅窓土器高台环	A 堅窓土3層	14.2		5.1	1/3	外面：粘土積み上げ痕→ロクロナデ→底部切り離し不明→材高台→ロクロナデ。内面：滑らかなロクロナデ。	33-5	021	
49	土附器高台环	B/B 堅窓土1層	14.4			2/3	高台欠。外面：ロクロナデ。底部回転式切り→材高台。内面：ヘラミガキ。	32-29	021	
50	土附器高台环	B/B 堅窓土1層	15.5			3/2	高台欠。ロクロ調整。外面：ロクロナデ→底部回転式切り→材高台。内面：ヘラミガキ。	32-14	021	
51	土附器	B 堅窓土2層	12.0			7/6	口輪部受け口枕。外面：ロクロナデ→側下部手持ちヘラカズリ。内面：ロクロナデ。	32-15	021	
52	土附器	堅窓土2層	16.6				破片 内面：ロクロナデ→ヘラミガキ→保材。	32-16	021	
53	堅窓環	A3 堅窓土3層	14.1	8.5	4.0	1/2	内面：泥然静止釉→全体下部窓部凸合部に沿って打ち欠き、軋用。径6.8cm。	33-7	021	
54	円柱土製品	堅窓土3層					堅窓土3層高台2層の口縁一部下部窓部凸合部に沿って打ち欠き、軋用。径6.4cm。先端部内径2.1cm。	33-6	021	
55	縫口	堅窓土2層					破片 窓部加被。先端部窓部に沿って打ち欠き、軋用。径6.3cm。厚さ5mm。	32-26	028	
56	不明鉄製品	堅窓土2層					破片 窓部加被。現存長5.3cm、現存幅3.7cm、厚さ5mm。	38-26	026	

第43図 S140D 堅穴住居跡出土遺物(2) - 廃絶後の遺物

炉の下も8cm程の厚さで赤褐色に変化していた。縁羽口は検出されなかった。また、D鍛冶炉内部の土壤を水洗洗浄したが、磁着する小土塊・小石が検出されたのみで、鉄滓（流動滓、粒状滓など）や鍛造割片は検出されなかった。

〔焼面〕D床面の西半部で焼面1～4の4箇所の焼面を検出した。いずれも不整形で、焼面1は長径47cm、短径23cm、焼面2は長径30cm、短径15cm、焼面3は長径45cm、短径32cm、焼面4は長径70cm以上、短径45cmある。また、D鍛冶炉の南約1.0mの床面上には長径1.5m、短径1.1mの不整形の範囲に焼土が堆積していた。

〔堆積土〕竪穴住居跡廃絶後に自然堆積している。

〔出土遺物〕S I 40D竪穴住居跡構築時の遺物には、須恵系土器壺（30～33）、ロクロ調整の土師器壺（34）・高台壺（35）・耳皿（36）・壺（38）、製塙土器（37）、須恵器壺・高台壺・高壺・蓋・壺などの破片がやや多くと、土製鋸輪車（39）、鐵鎌（40）、鐵釘（41）、刀子（42）、砥石（43）、磨石（44）各1点がある。また、廃絶以降の遺物には、須恵系土器小型壺（45・46）・壺（47）・高台壺（48・49）、ロクロ調整の土師器壺・高台壺（50）・壺（51）・懸（52）、非ロクロ調整の土師器甕、製塙土器、須恵器壺（53）・高台壺・壺・壺などの破片がやや多くと、円板状土製品（54）、縁羽口破片（55）、不明板状鐵製品（56）各1点、鐵滓3点がある。

〔S I 17竪穴住居跡〕（平面図・断面図：第44図、遺物：第45図、図版9-1）

〔位置〕調査区北部中央、丘陵尾根上やや北寄り、標高35.5m付近に位置する。

〔重複〕S I 19竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形で、規模は西辺（長辺）が約4.5m、北辺（短辺）が約3.3mである。

〔方向〕西辺（長辺）でみると北で西に約42°偏る。

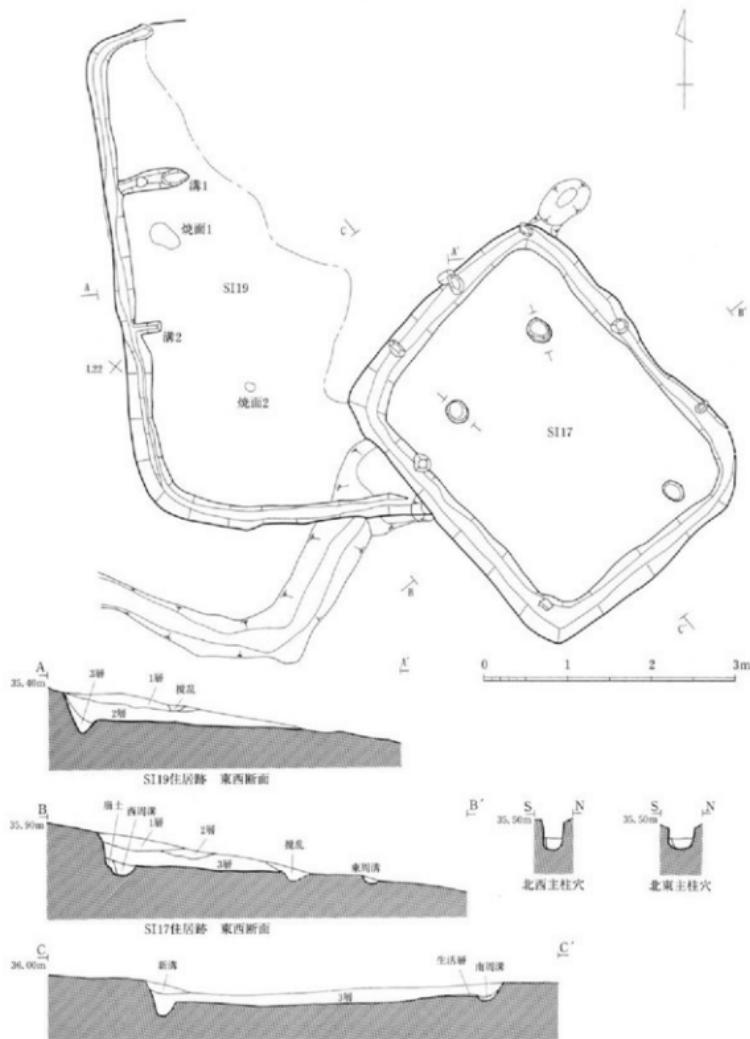
〔壁〕比較的残りのよい丘陵斜面上側にあたる西辺（長辺）・北辺（短辺）でも、検出面から床面までの高さは30～40cmしかない。丘陵斜面下側にあたる東辺（長辺）では床面下まで削平され、残っていない。

〔床面〕床面は平坦で、地山面（粘板岩岩盤）を床面とする。

〔周溝〕各辺を幅30～40cm、深さ約10cmの周溝が巡る。周溝内は自然堆積土である。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。丘陵斜面下側にあたる東辺（長辺）では床面下まで削平されていることから、この辺に付設されていた可能性がある。

〔主柱穴〕北西・北東・南東の3箇所の主柱穴を検出した。北西主柱穴は北辺（短边）から約1.2m、西辺（長辺）から約1.0m離れ、北東主柱穴は北辺（短辺）から約1.2m、東辺（長辺）から約0.9m離れており、竪穴住居跡の対角線上にある。また、南東主柱穴は南辺（短辺）から約0.5m、東辺（長辺）から約1.0m離れ、竪穴住居跡の対角線上にはなく、北西・北東主柱穴よりも短辺寄りに位置している。南西主柱穴はなかった。主柱穴は平面形が長径30cm程、短径25cm程の楕円形で、深さは北西主柱穴で45cm、北東主柱穴で25cm、南東主柱穴で10cmある。柱はいずれも抜き取られている。柱抜取穴の中心でみると、柱間寸法は北西主柱穴-北東主柱穴間が約1.4m、北東主柱穴-南



住居跡	層位	断面図	
		東	西
	溝底	褐色7.5YR4/3H。延1~3cmの粘板岩風化礫片を含む。自然堆積土。西側溝では根鉈が崩落。	
	地盤上1層	褐色7.5YR4/3H。延5mm程度の粘板岩風化礫片を少量含む。自然堆積土。	
	地盤上2層	褐色7.5YR4/3H。黄褐色10YR5/0Hの小粒質土ブロックを含む。自然堆積土。	
	地盤上3層	褐色7.5YR4/3H。灰白色灰山灰ブロック不均一に含む。しまりない。自然堆積土。	
	主柱穴掘方	黄褐色10YR5/6H。廻り土ブロックを多く含む。人為堆積土。	
	主柱穴抜取穴	に5~10cm黄褐色10YR5/0H。廻り土ブロックを含む。しまりあまりない。	
	溝上1層	褐色7.5YR4/3H。黄褐色地山砂と少層合む。しまりあり。人為堆積土。	
S119	溝上2層	に5~10cm黄褐色10YR4/3H。黄褐色地山砂を多く、泥片を少し含む。しまり強い。人為堆積土。	
	溝上3層	褐褐色7.5YR5/6H。堆山ブロックを含む。人為堆積土。	

第44図 S117・19堅穴住居跡平面図・断面図 (1/60)

東主柱穴間が約2.5mである。

〔壁柱穴〕北辺（短辺）で2箇所、東辺（長辺）で2箇所、西辺（長辺）で1箇所、北東隅で1箇所のピットを検出した。これらのピットは径15~25cm程の小さなもので、周溝中央、壁際、周溝と床面との境などにあり、本竪穴住居に伴う可能性がある。いずれも竪穴住居内と同様の土が堆積していた。

〔堆積土〕3層に分けられ、いずれも自然堆積土である。最下層の第3層には10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰のブロックが含まれている。

〔出土遺物〕堆積土からロクロ調整の土師器壺（1・2）の破片、完形に近い土師器高台壺（3・4）、砥石（5）1点、鉄滓（楕円形2点、発泡した塊状滓26点）の他、ロクロ調整の土師器壺・甕、須恵器壺・甕の破片など少數の遺物、主柱穴柱抜取穴から刀子破片（6）1点が出土した。

【S I 19竪穴住居跡】（平面図・断面図：第44図、遺物：第45図、図版9-1）

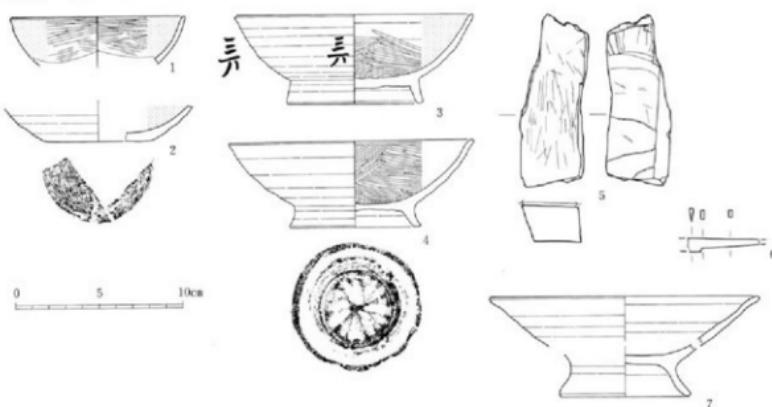
〔位置〕調査区北部中央、丘陵尾根上やや北寄り、標高35.5m付近に位置する。

〔重複〕S I 17竪穴住居跡と重複し、これよりも古い。

〔平面形・規模〕北部・東部が床面下まで大きく削平されている。平面形は隅丸方形とみられ、規模は西辺で約6.0m、南辺で3.4m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で西に約8°偏る

〔床面〕床面は平坦で、地山面（粘板岩岩盤）を床面とする。



番号	種類	分類	遺構	層位	現存	特徴	写真	収納
1	土師器高台壺or甕	II B	S I 17 堆積土 3 刷	破片	11幅1.4~1体底部破片。11径10.4cm。ロクロ調整・両面ヘラミガキ・両面黒色处理。		006	
2	土師器壺	II B	S I 17 堆積土 3 刷	破片	底部一部1/2破片。底径6.3cm。ロクロ調整。外面：底部同軸舟切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色處理→底端。		006	
3	土師器高台壺	II B	S I 17 回溝	7/8	口径15.2、高台径9.1、基高5.4cm。ロクロ調整。外素：底面同軸舟切り付高台一帯丸括弧エヌ→ロクロナメ。黒色。体部舟切りに墨書き「三月」。内面：ロクロナメ→体部一部→底部ヘラミガキ（口縁部はロクロナメを残す）→黑色處理。	247 35-22	006	
4	土師器高台壺	II B	S I 17 回溝	4/5	口径15.6、高台径9.2、基高5.2cm。ロクロ調整。外素：底部舟切り難し不明→付高台→菊花紋ササエ→ロクロナメ。黒色。内面：ロクロナメ→ヘラミガキ→黑色處理。	24-8	006	
5	砥石	S I 17 堆積土 3 刷	1面研磨・直角体状。	1面研磨。長さ3.3cm、幅3.3cm、厚さ2.2cm。		38.5	033	
6	刀子	S I 17 北東主柱穴	破片	身部一葉形鋸刃。半圓形角端。刃闊、保存長4.2cm。刃元幅3mm。茎元幅6mm。桟厚3mm。		029		
7	須恵器系土器高台壺	B	S I 19 堆土 2 刷	破片	口径16.0、高台径7.8、基高約5.0cm。ロクロ調整。底面舟切り難し不明→付高台。	24.9	006	

第45図 S I 17・19竪穴住居跡出土遺物

〔周溝〕西辺、南辺で幅25~30cm、深さ10~15cmの周溝を検出した。住居廃絶時に人為的に埋め戻されており、機能時に開渠であったかどうか不明である。北辺、東辺は床面下まで削平され、残っていない。西周溝の西辺をほぼ3等分する位置で、西周溝と直交して東側に短く延びる溝2条を検出した。北側の溝1は幅23cm、深さ8cmで、長さ80cm延びる。南側の溝2は幅12cm、深さ7cmで、長さ25cm延びる。溝1・2の埋土は西周溝と同様である。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、西辺以外の3辺のいずれかに付設されていたと考えられる。

〔焼面〕床面上で2箇所の焼面を検出した。焼面1は溝1と溝2の間にあり、長径30cm、短径25cmの不整形である。焼面2は溝2の南東約1.3mにあり、長径12cmの梢円形である。

〔その他〕主柱穴、壁柱穴などは認められない。

〔堆積土〕廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕埋土から須恵系土器高台環(?)、ロクロ調整の土師器環・甌、須恵器環・甌などの破片が少數出土した。このうち土師器環・須恵器環で底部の切り離し・再調整のわかるものは、いずれも回転糸切り無調整である。

【S I 11堅穴住居跡】(平面図・断面図・遺物:第46図)

〔位置〕調査区北部中央、丘陵尾根上やや北寄り、標高35m付近に位置する。

〔重複〕S I 11堅穴住居跡は床面レベルを同じくして南に拡張して建て替えられている(S I 11A堅穴住居跡→S I 11B堅穴住居跡)。また、S I 54堅穴住居跡と重複するが、S I 54堅穴住居跡の堆積土が周溝にしか残っていないため、新旧関係は不明である。床面レベルはS I 54堅穴住居跡がS I 11堅穴住居跡よりも約30cm高い位置にある。

《S I 11A堅穴住居跡》

〔平面形・規模〕南東部の一部を検出したのみだが、新しいS I 11B堅穴住居跡と同様に平面形は長方形とみられ、規模はそれよりも南北が40cm程短いと推定される。

〔方向〕新しいS I 11B堅穴住居跡と同様に、西辺でみると北で東に約14°偏ると考えられる。

〔壁〕拡張されたS I 11B堅穴住居跡に壊され、残っていない。

〔床面〕床面は平坦で、地山面(黄褐色粘質土)を床面とする。南東部に一部残る床面のレベルは、拡張されたS I 11B堅穴住居跡と一致する。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔周溝〕南東隅で幅20cm、深さ3cmの周溝を検出した。他辺は削平されて残っていない。

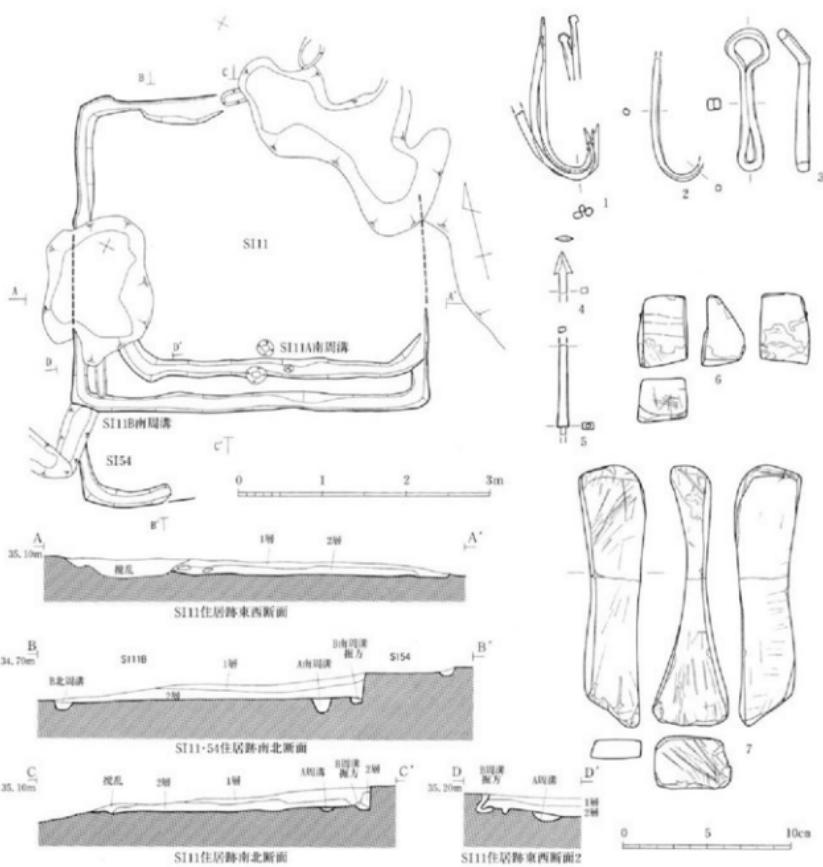
〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

《S I 11B堅穴住居跡》

〔平面形・規模〕北東部が大きな攪乱で壊され、東部が床面下まで大きく削平されている。平面形は長方形とみられ、規模は西辺で約3.7m、南辺で4.3mである。

〔方向〕西辺でみると北で東に約14°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、最も残りのよい南東隅で25~30cm、南辺で10~20cm、西辺で



井戸跡	層位	特徴
SI11A	南面溝	褐色(10YR4/6L)。径0.5~1.5cmの地山ブロックが多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	西溝側方	黄褐色(10YR5/8H)。地山ブロック、地山氯化鉄を含む。人為堆積土。
SI11B	堆積上.1層	褐色(10YR4/6L)。径1cm程の地山粒を多量に。灰片を少量含む。火災以後の自然堆積土。
	堆積上.2層	褐色(10YR3/4H)。地山ブロック・灰片・地山粒を多量に含む。炭化材を含む。火災時の自然堆積土。
SI54	南面溝	明黄色(10YR6/6L)。

番号	種類	遺構	層位	特徴	写真	続
1	鉄製釘	SI11B	床面	定形品1本。破損品1本がくついた鉄製造の單式釘。いずれも地盤断面約1mmの楕円形で、逆刺が内側に付いた筒型式。モチは扁平で、くびれがある。完形品は長さ7mmものと8.9mmのものとがあり、破損品は現存長5.3cm。	37-31	629
2	鉄製釘	SI11B	床面	モチと逆刺を欠いた破損品。現存長7.6cm。断面約1mmの楕円形。	37-30	629
3	引手	SI11B	床面	直角。横幅7.2~7.5cm。把手を1手。握込部・直角・断面約1.4mmの楕円形の握縁を二つに折り曲げて、両端に環状の槽を作り、一端を縫合に通絡される引き手。把手を1手。把手を取り落して手綱に付ける把手とすると(柄と引き手のつなぎ角度10°)。	37-31	629
4	鉄鍔	SI11B	壁上.1層	錐身・柄圓錐形。直形。現存長6cm。錐身径1.4cm。錐身高1.1cm。錐身断面円丸形。錐断面約1.3mm²方形。		629
5	鉄鍔	SI11B	壁上.1層	錐身を欠いた柄部成形。現存長5.4cm。錐身断面7×4mm²具方形。錐身が直角となる。錐断面6mm²方形。		629
6	砥石	SI11B	床面	砂利製。手打ち砥石。一面研磨。長さ4.3cm。幅3.0cm。厚さ2.6cm。	38-3	633
7	砥石	SI11B	壁面	地盤砂岩製。直方体状。一面研磨。長さ15.8cm。幅4.5cm。厚さ3.4cm。	38-7	633

第46図 S 111・54整穴住居跡平面図・断面図 (1/60)、S 111B 穴立住居跡出土遺物

10cm前後あり、約95°の傾斜でほぼ直に立ち上がる。南東隅では壁の奥に抉れるように周溝が掘削され、さらにその掘方に沿うように上まで埋められている。竪穴住居機能時には周溝は開渠であったとみられる。

〔床面〕 床面は平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。

〔主柱穴〕 主柱穴は認められない。

〔カマド〕 カマドの位置は不明だが、南辺にはないので、南辺以外に付設されていたと考えられる。

〔堆積土〕 2層に分かれ、堆積土2層は焼土・炭片を多量に含む。床面には炭化材はなかった。火災にあって焼失した竪穴住居跡であり、火災以降に自然堆積している。

〔出土遺物〕 床面から鉄製の大型釣針4点（1・2）、馬具の引手（3）1点、砥石（6）1点、埋土から非ロクロ調整の土師器環・甕、須恵器甕の破片少數と鐵鏹破片（4・5）2点、櫻乱から砥石（7）1点が出土した。このうち非ロクロ調整の土師器環は平底気味のものである。また、大型釣針（1）は3点が銛着しており、内鐵式の單式釣針である。引手（3）は轡の一部をなす鉄製金具で、歎先・鏡板に取り付けられて手綱を連結させるためのものである。直線的で振りのない2本線の柄の一端に鏡板に取り付けられる引手先、もう一端に手綱が付けられる引手壺を一体となって造りだした鍛造品で、「一体造くの字状引手壺無捩二条線引手」と呼ばれる型式（岡安、1984・1998）である。

【S I 54竪穴住居跡】（平面図・断面図・遺物：第46図）

〔位置〕 調査区北部中央、丘陵尾根上やや北寄り、標高35m付近に位置する。

〔重複〕 S I 11竪穴住居跡と重複するが、S I 54竪穴住居跡の堆積土が周溝にしか残っていないため、新旧関係は不明である。

〔方向〕 S I 11B竪穴住居跡と同様に、西辺でみると北で東に約14°偏ると考えられる。

〔壁〕 残りのよい箇所でも検出面から床面までの高さは8cmしか残っていない。

〔床面〕 床面は平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。床面レベルはS I 54竪穴住居跡がS I 11竪穴住居跡よりも約30cm高い位置にある。

〔主柱穴〕 主柱穴は認められない。

〔カマド〕 カマドの位置は不明である。

〔周溝〕 南東隅で幅20cm、深さ4cmの周溝を検出した。他辺は削平されて残っていない。

〔堆積土〕 周溝内に残るのみで、人為堆積土か自然堆積土か区別できなかった。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

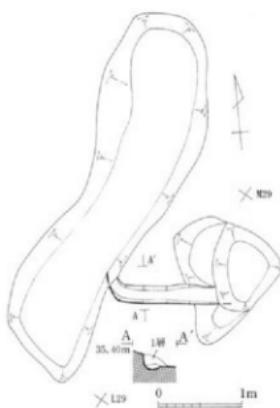
【S I 55竪穴住居跡】（平面図・断面図：第47図）

〔位置〕 調査区北部中央、丘陵尾根上の標高35.5m付近に位置する。

〔重複〕 杉の根の櫻乱が大きく入り、南東隅・南周溝を一部検出したのみで、それ以外は床面下まで大きく削平されている。残りがきわめて悪い。

〔平面形〕 方形とみられ、規模は東西が南辺で1.3m以上ある。

〔方向〕 南辺の方向からみて西辺は北で東に約17°偏ると推定される。



図版 特徴
堆積土Ⅰ層
褐色(10YR6/4)土。厚1cm以下の地由粒を多く含む。しまり・
転化なし。自然堆積土。
剖面
明黄褐色(10YR6/6)土。しまり・転化なし。自然堆積土。

第47図 S I 55堅穴住居跡平面図・断面図

〔平面形・規模〕 隅丸方形とみられ、規模は南北が西辺で約6.7m、東西は北辺で1.8m以上である。

〔方向〕 西辺でみると北で西に約48°偏る。

〔壁〕 検出面から床面までの高さは残りのよい箇所でも10cmしかない。

〔床面〕 床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。

〔主柱穴〕 北西・南西主柱穴を検出した。堅穴住居跡の対角線上にあると考えられ、いずれも西辺から約1.5m離れた位置にある。掘方は長辺35~40cm、短辺30cmの方形で、深さ27cmある。廃絶時に柱が抜き取られている。北西主柱穴-南西主柱穴間の柱間寸法は約4.3mである。

〔周溝〕 西辺、および北辺・南辺の一部で幅15~25cm、深さ10cmの周溝を検出した。周溝内は自然堆積土である。西周溝から北西主柱穴に向けて直交するように幅10cm、深さ5cmの浅い溝が延びている。内部は周溝と一連の自然堆積土である。

〔カマド〕 カマドの位置は不明であるが、西辺以外に付設されていたと考えられる。

〔堆積土〕 2層に分けられ、廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕 検出面から非ロクロ調整で脚部に透かしのある土師器高環脚部破片（1）、須恵器蓋破片が各1点出土した。

【S I 14堅穴住居跡】（平面図・断面図：第48図）

〔位置〕 調査区北部中央、丘陵尾根上の標高34.5m付近に位置する。

〔重複〕 北部へ東半部は床面下まで、遺存する箇所も上部を大きく削平され、残りが悪い。新旧2時期の主柱穴を検出し、それらの配置関係からみて拡張されているとみられる。S I 14・15堅穴住居跡と近接しているため、同時には存在しない。

〔壁〕 検出面から床面までの高さは残りのよい箇所でも14cmしかない。

〔周溝〕 南東隅と南辺の一部で、幅20cm、深さ6cmの周溝を検出した。周溝内は自然堆積土である。

〔堆積土〕 廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕 周溝内より非ロクロ調整で平底の土師器環底部破片が1点出土した。

【S I 12堅穴住居跡】（平面図・断面図・遺物：第48図）

〔位置〕 調査区北部中央、丘陵尾根上やや北寄り、標高34.5m付近に位置する。

〔重複〕 東半部は床面下まで、西辺は上部を大きく削平され、杉の根の擾乱も大きく入り、残りが悪い。

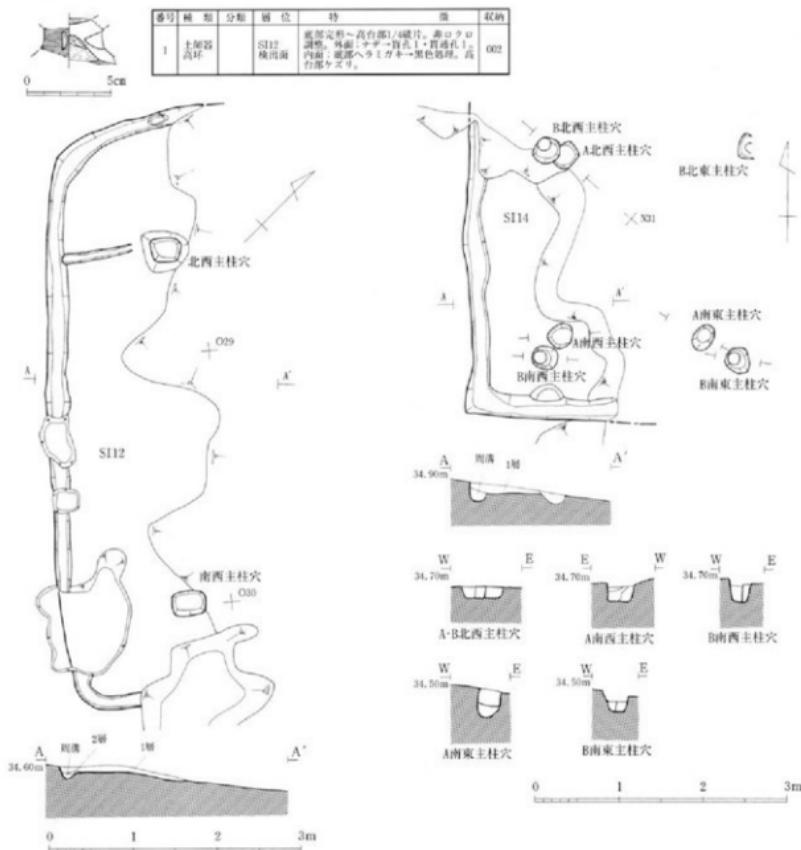
S K 1 土壌と重複するが、堆積土の重複がないため、新旧関係は不明である。S I 14・15堅穴住居跡と近接しているため、同時には存在しない。

〔平面形・規模〕 平面形は方形で、規模は南北が西辺で3.5m以上、東西が南辺で1.9m以上である。主柱穴と周溝の位置関係からみると、南北約4.0m、東西約4.3mの長方形と推定される。

〔方向〕 西辺はほぼ北に一致する

〔壁〕 検出面から床面までの高さは、西辺で15cmある。

〔床面〕 床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。



S II 12竪穴住居跡

S I 14A・B竪穴住居跡

第48図 S II 12・14竪穴住居跡平面図・断面図 (1/60)、出土遺物

〔主柱穴〕堅穴住居跡の対角線上の4箇所で、新旧2時期の主柱穴を検出した。古いA主柱穴は北西で検出できなかったが、新しいB主柱穴は北西・北東・南西・南東の4箇所を検出した。掘方はA・B主柱穴とも長辺30cm前後の隅丸方形を基調とし、深さは15~30cmある。A主柱穴の柱はいずれも建て替え時に抜き取られているが、B主柱穴では計2~15cmの円形の柱痕跡を確認した。B主柱穴の柱間寸法は、北西主柱穴-南西主柱穴間が2.6m、南西主柱穴-南東主柱穴間が2.3mである。また、A主柱穴の柱間寸法は、北西主柱穴-南西主柱穴間が約2.2m、南西主柱穴-南東主柱穴間が約1.7mである。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、西辺以外に付設されていたと考えられる。

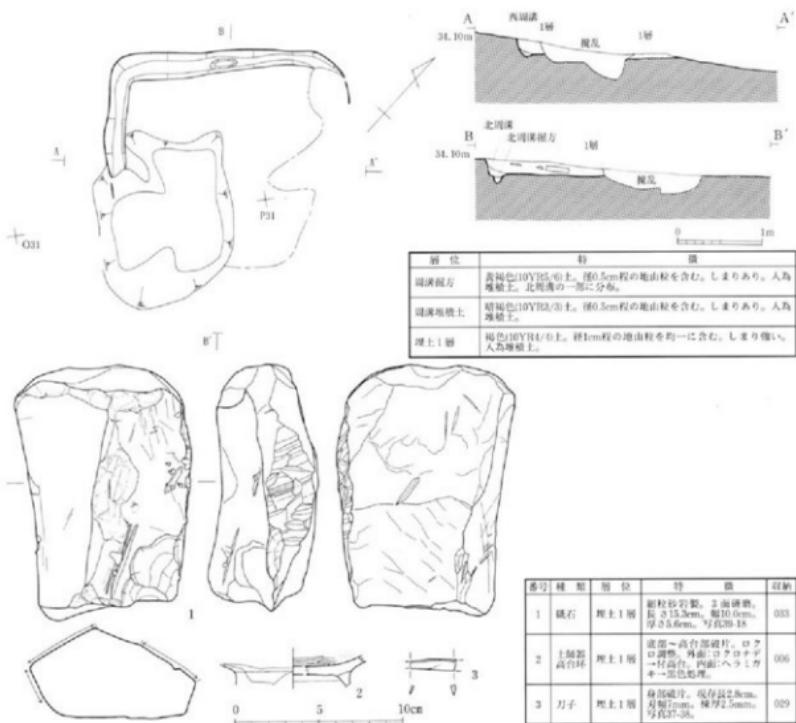
〔周溝〕西辺と南辺の一部で幅20~25cm、深さ9cmの周溝を検出した。自然堆積土である。

〔堆積土〕自然堆積土である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

【S I 15堅穴住居跡】(平面図・断面図・遺物:第49図)

〔位置〕調査区北部中央、丘陵尾根上やや北寄り、標高33.5m付近に位置する。



第49図 S I 15堅穴住居跡平面図・断面図 (1/60)、出土遺物

〔重複〕南東部には床面下まで、西辺は上部を大きく削平され、残りが悪い。S I 14堅穴住居跡と近接しているため、同時には存在しない。

〔平面形・規模〕平面形は方形で、規模は南北が西辺で1.5m以上、東西が北辺で約2.8mである。主柱穴と周溝の位置関係からみると、南北約4.0m、東西約4.3mの長方形と推定される。

〔方向〕西辺でみると北で西に約33°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、残りのよい箇所で15~20cmある。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、北辺以外に付設されていたと考えられる。

〔主柱穴〕主柱は認められない。

〔周溝〕北辺と西辺の一部で幅15~39cm、深さ4cmの周溝を検出した。廃絶時に人為的に埋められており、機能時に開渠であった可能性がある。

〔堆積土〕廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕埋土1層からロクロ調整の土師器壺・高台壺（2）・甕、須恵器甕の破片少數と砾石（1）1点、刀子破片（3）1点が出土した。

【S I 18堅穴住居跡】（平面図・断面図・遺物：第50図、図版3-1）

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上の標高35.0m付近に位置する。

〔重複〕S B 1 振立柱建物跡と位置的に重複するが、堆積土と柱穴との重複がないため、新旧関係は不明である。

〔平面形・規模〕平面形は方形で、規模は東西が北辺で約2.8m、南北が西辺で2.5m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で西に約37°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、残りが比較的よい北西隅で16cmある。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、北辺・西辺以外に付設されていたと考えられる。

〔周溝〕北辺、西辺で幅15~20cm、深さ5~10cmの周溝を検出した。堆積土は自然堆積土で、床面上と一連である。

〔堆積土〕廃絶以降の自然堆積土である。

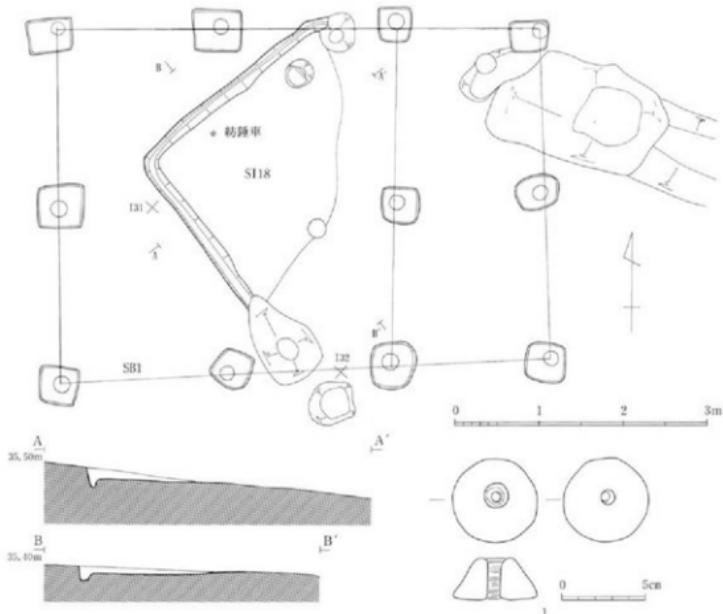
〔出土遺物〕床面から土製紡錘車（1）1点、堆積土から非ロクロ調整の土師器甕の破片などが少數出土した。

【S I 13堅穴住居跡】（平面図：第51図、断面図：第52図、遺物：第53図）

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上の標高33.5m付近に位置する。

〔重複〕S I 52堅穴住居跡と重複し、これよりも新しい。また、S I 16堅穴住居跡、S B 8 振立柱建物跡と近接し、これらと同時に存在しない。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形で、規模は長辺（南辺）が約4.1m、短辺（西辺）が約3.5mである。



部位	特徴	図
壁上土層	粘土質の地山に植生する。柱跡の間隔は約50cmである。	
柱跡	柱跡の位置は、柱跡の間隔は約50cmである。	

第50図 SI 18 穴住居平面図・断面図 (1/60)、出土遺物

〔方向〕東辺でみると、北で東に約32°偏る。

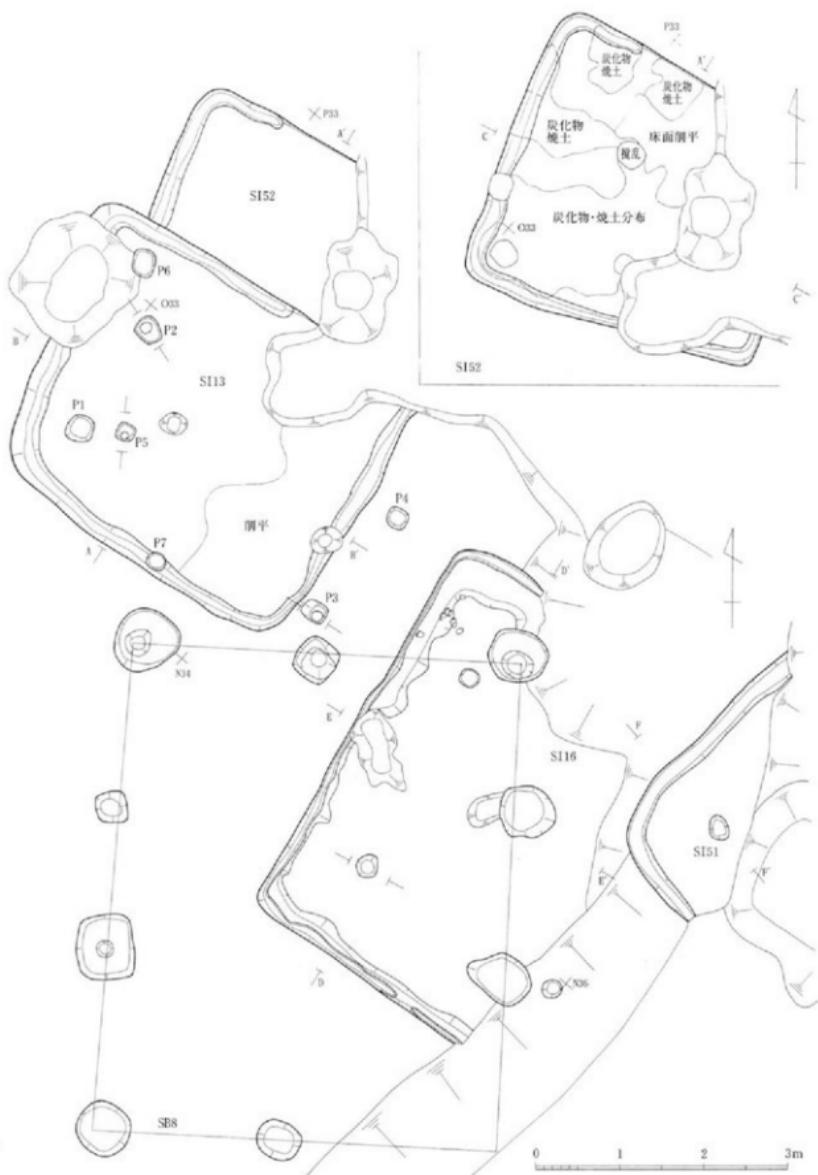
〔壁〕検出面から床面までの高さは、残りのよい北西隅で24cm、西辺で20~10cmだが、他辺では10cm以下である。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。東半部は床面下まで削平されている。

〔周溝〕各辺で幅15~30cm、深さ5~10cmの周溝を検出した。北辺中央東寄りでは周溝が途切れている。周溝内は自然堆積土である。

〔カマド〕カマドの位置は不明確だが、北辺周溝が途切れ、杉の根の擾乱が大きく入っている北辺中央から東寄りに付設されていたと考えられる。

〔主柱穴〕竪穴住居跡の対角線上の位置で南西主柱穴（P 1）と北西主柱穴（P 2）を検出した。南西主柱穴（P 1）は西辺から約0.8m、南辺から約0.9m離れた位置にあり、北西主柱穴（P 2）は西辺から約1.1m、北辺から約1.1m離れた位置にある。また、これと向き合う東辺の外側30~40cmの位置で柱穴（P 3・4）2箇所を検出した。P 3・4は通常であると屋外に位置することになる

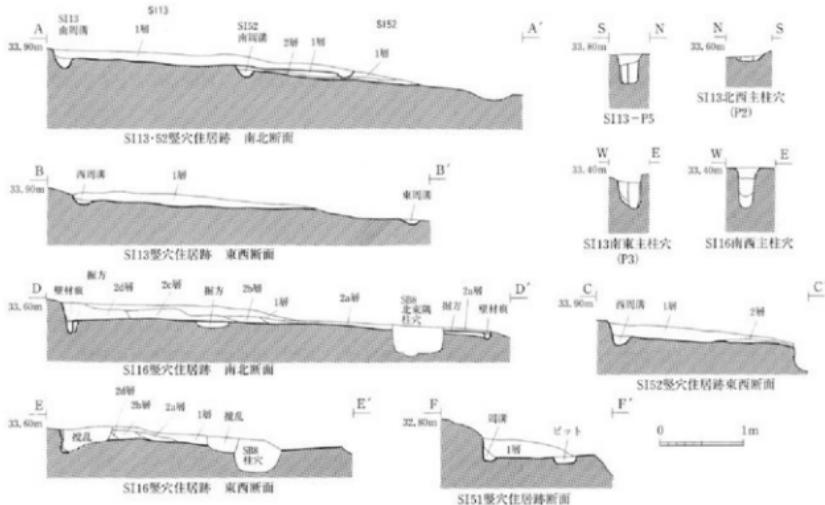


第51図 S 113・16・51・52堅穴住居跡平面図 (1/60)

が、南西主柱穴（P 1）と北西主柱穴（P 2）と対称の位置にあり、かつ東辺と平行して隣接することから、これらと対応する本竪穴住居跡に伴う主柱穴とみられる。掘方はいずれも一辺30cm前後の隅丸長方形を基調とし、深さは30~40cmある。北西主柱穴（P 2）、南東主柱穴（P 3）で径13cmの円形の柱痕跡を確認し、南西主柱穴（P 1）、南東主柱穴（P 4）は柱が抜き取られていた。柱間寸法は、南西主柱穴（P 1）~南東主柱穴（P 3）間が約3.6m、南西主柱穴（P 1）~北西主柱穴（P 2）間が約1.4mである。

〔堆積土〕廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土からロクロ調整で底部が回転糸切り無調整の土師器環2点（9・10）、鉄製の大型単式釣針（11）1点の他、ロクロ調整と非ロクロ調整の土師器環・甕、須恵器環・高台環・甕の破片などが少數出土した。



住居跡	層 級	特 徴
S113	主柱穴掘方	黄褐色(10YR5/8)土。径3~5cmの地山塊を多く含む。しまり・粘性ない。人為堆積土。
S113	主柱穴隣接	同色(10YR4/0)土。しまり・粘性なし。自然堆積土。
S113	主柱穴掘方	同色(10YR4/0)土。しまり・粘性なし。自然堆積土。
S113	堆積土上層	にまぐ黄褐色(10YR4/3)土。径0.5~1cmの地山塊岩岩ブロックをやや多く含む。しまりあまりない。粘性なし。自然堆積土。
S113	堆積土中層	にまぐ黄褐色(10YR5/3)土。径0.5~1cmの地山塊岩岩ブロックをあまり含まない。しまりあまりない。粘性なし。自然堆積土。
S113	堆積土下層	同色(10YR5/3)土。径1~3cmの粘土岩岩塊を多量に含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
S116	上付穴掘取穴	同色(10YR5/6)土。しまり・粘性なし。自然堆積土。
S116	壁材板	同色(10YR5/6)土。径1~5cmの粘土岩岩化離片を多量に含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
S116	壁材板	同色(10YR5/0)土。しまり・粘性なし。自然地盤土。
S116	堆積土上層	にまぐ黄褐色(10YR5/0)土。地山塊をやや多く含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土。
S116	堆積土2a層	同色(10YR5/0)土。第2a層より粘性が薄い。地山塊をやや多く含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土。
S116	堆積土2b層	同色(10YR5/0)土。第2b層より粘性が薄い。地山塊をやや多く含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土。
S116	堆積土2c層	同色(10YR5/0)土。第2c層より粘性が薄い。地山塊をやや多く含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土。
S116	堆積土2d層	同色(10YR5/3)土。地山塊を少し含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土。
S152	周溝	黄褐色(7.5YR3/4)土。径1~3cmの粘土岩岩片を多く含む。しまり・粘性ない。自然堆積土。
S152	周溝	同色(7.5YR3/4)土。しまり・粘性なし。自然堆積土。
S152	周溝	にまぐ黄褐色(10YR5/3)土。径5mm以下の地山塊岩岩ブロックを比較的多く、径5mm以下の崩片・地山塊を少し含む。しまりややなく。粘性なし。自然堆積土。
S152	堆積土上層	にまぐ黄褐色(10YR5/3)土。径1~5cmの灰土・地上プロフク。径5mmの地山塊岩岩ブロックを多く含む。しまりややあり。粘性なし。自然堆積土。
S152	堆積土下層	同色(10YR5/0)土。径1~5cmの灰土・地上プロフク。径5mmの地山塊岩岩ブロックを多く含む。しまりややあり。粘性なし。自然堆積土。

第52図 S I 13・16・51・52竪穴住居跡断面図 (1/60)

【S I 52竪穴住居跡】(平面図: 第51図、断面図: 第52図)

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上の標高33.5m付近に位置する。

〔重複〕S I 13竪穴住居跡と重複し、これよりも古い。また、S I 16竪穴住居跡、S B 8掘立柱建物跡と近接し、これらと同時には存在しない。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸正方形で、規模は南辺が3.6m、西辺が3.5mである。

〔方向〕西辺でみると、北で東に約21°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、比較的残りのよい西辺で10~18cmだが、他辺では5cm以下である。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。北東部は床面下まで削平されている。床面のほぼ全面と周溝内的一部分には炭化物・焼土が薄く堆積しており、火災したことが知られる。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明確だが、北辺周溝が途切れている北辺中央に付設されていたと考えられる。

〔周溝〕西辺・南辺・北辺、南東隅で幅15~25cm、深さ4~8cmの周溝を検出した。北辺中央では周溝が途切れている。周溝内は自然堆積土であり、一部では床面と同様に炭化物・焼土が薄く堆積していることから、火災時には開渠であったことが知られる。

〔堆積土〕火災以後の自然堆積土である。

〔出土遺物〕床面から非ロクロ調整の土師器壺、須恵器壺の破片、堆積土から非ロクロ調整の土師器壺・壺、須恵器壺・蓋・壺の破片などが少數出土した。このうち土師器はいずれも非ロクロ調整のもので、壺には体下部に段のある有段壺の破片が1点ある。また、須恵器壺破片には底部をヘラ切りしたもの、体下部~底部を回転ヘラケズリしたもの各1点がある。いずれも小破片で、図示できる遺物はない。

【S I 16竪穴住居跡】(平面図: 第51図、断面図: 第52図、遺物: 第53図、図版4-3、9-2・4)

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上の標高33.5m付近に位置する。

〔重複〕S B 8掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。S I 51竪穴住居跡とも重複するが、重複部分で堆積土が削平されているため、新旧関係は不明確である。ただし、南東主柱穴の底面レベルがS I 51竪穴住居跡の床面レベルとほぼ同じであること、S I 51竪穴住居跡と重複する位置で北東主柱穴が検出できなかったことから、S I 51竪穴住居跡が新しいと考えられる。また、S I 13竪穴住居跡と近接し、これと同時には存在しない。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形で、規模は南北が西辺で5.0m、東西が南辺で3.1m以上である。主柱穴と周溝との位置関係から推定すると、東西は約4.6mと推定される。

〔方向〕西辺でみると、北で東に約30°偏る。

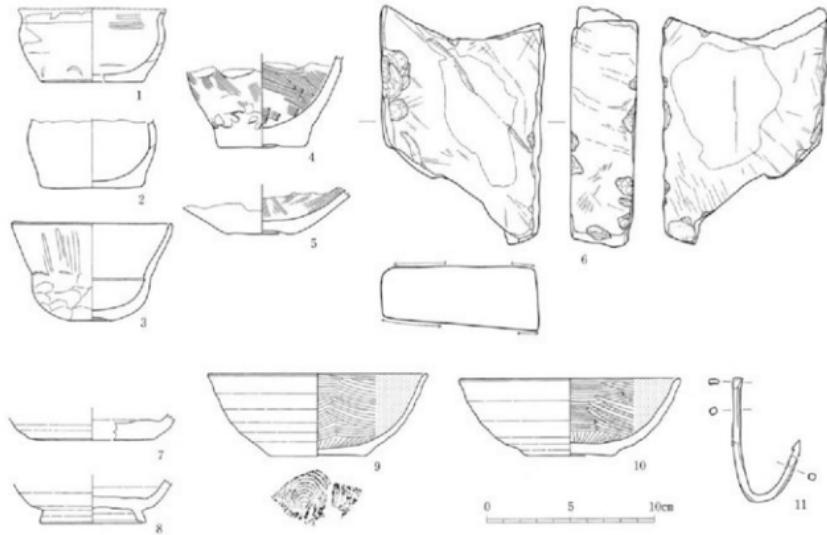
〔壁〕検出面から床面までの高さは、残りのよい南西隅で30cm、南辺で23cm前後、西辺で15cm前後ある。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。北東部～東部は床面下まで削平されている。

〔主柱穴〕竪穴住居跡の対角線上の位置で北西・南西・南東主柱穴を検出した。北東主柱穴はS 151 竪穴住居跡に壊されたとみられ、検出できなかった。南西主柱穴は西辺から約1.0m、南辺から約1.1m離れた位置にあり、北西主柱穴は西辺から約0.9m、北辺から約1.4m離れた位置にある。掘方は径25cm前後の楕円形で、深さは北西主柱穴で53cm、南西主柱穴で47cm、南東主柱穴で49cmある。いずれも柱が抜き取られ、柱痕跡は検出できなかった。柱間寸法は、北西主柱穴－南西主柱穴間が約2.6m、南西主柱穴－南東主柱穴間が約2.7mである。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、北辺または東辺に付設されていたと考えられる。

〔壁材〕西辺、南辺、北西隅で壁際に寄せた壁材の痕跡を検出した。壁材痕跡は幅5～7cm、深さ10



番号	種類	分類	遺物	層位	残存	特		写真	取納
						長	幅		
3	手標上器	SL16	磨削面	1/2	II層厚0.6cm、底径6.0cm、高さ約1.4cm、口幅細く外反。外面：擦オサエ。摩減。内面：ナデ、摩減。	24-5	006		
2	手標上器	SL16	磨擦土2型	1/2	II層厚0.6cm、底径6.0cm、高さ約1.4cm、口幅細く外反。内面：摩減。	24-6	006		
3	上加器	SL16	磨擦土1型	完形	表口クロ調整。II層厚0.6cm、底径1.5cm、高さ5.9cm。外面：口縁へラミキ。体部ケズリまたはミガキ。摩減。内面：摩減。	24-3	006		
4	上加器	SL16	磨擦土2型	破片	表口クロ調整。底径5.3cm。外面：体部へ摩減ナメ。内面：ヘラナメ。	24-4	006		
5	上加器	SL16	IK前	破片	表口クロ調整。底径4.2cm。外面：体部へ摩減ナメ。内面：ナメ。	24-5	006		
6	砾石	SL16	IK前	完形	細粒砂岩製。2面研削。長さ14.3cm、幅8.6cm、厚さ3.8cm。	29-12	003		
7	第亜器	A1	SL15	磨擦土1型	1/1	底径7.4cm。外面：底部へ切り口。		022	
8	第亜器	B1	SL15	磨擦土1型	-1/2	高台厚約4cm。外面：底部へ切り口～高台。	23-23	002	
9	上加器	BB	SL13	磨擦土1型	1/4	II層厚3.3cm、底径5.5cm、高さ4.0cm。クロ調整。外面：追加軋糞赤切り。内面：ヘラミキ～黑色短。	24-1	006	
10	上加器	BB	SL13	磨擦土1型	1/2	II層厚3.3cm、底径5.5cm、高さ4.0cm。クロ調整。外面：追加軋糞赤切り。内面：ヘラミキ～黑色短。	24-2	006	
11	鉄製釘	SL13	SL13	磨擦土1型	破損	鉄製錐頭の單式釘頭。ナモの一部と逆刺を欠く。ナモは扁平で、くびれがある。残存長7.5cm。地脚附	37-29	029	

第53図 S 13・16・51竪穴住居跡出土遺物

～15cmで、南辺で一部途切れるが、検出した各辺を巡る。壁材掘方は幅20～60cm、深さ5～15cmの周溝状となる。

〔堆積土〕廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕床面から土師器壺破片（5）、砥石（6）1点、碧玉製の管玉1点、堆積土から完形の土師器壺（3）、土師器壺（4）、手捏土器（2）の破片などが少數出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、古墳時代前期の塙釜式期のものである。

【S I 51竪穴住居跡】（平面図：第51図、断面図：第52図、遺物：第53図、図版9-4）

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上の標高32.5m付近に位置する。

〔重複〕S I 16竪穴住居跡と重複するが、重複部分でS I 16竪穴住居跡の堆積土が削平されているため、新旧関係は不明確である。ただし、S I 16竪穴住居跡の南東主柱穴の底面レベルがS I 51竪穴住居跡の床面レベルとほぼ同じであること、S I 51竪穴住居跡と重複する位置でS I 16竪穴住居跡の北東主柱穴が検出できなかったことから、S I 51竪穴住居跡が新しいと考えられる。また、SB 8掘立柱建物跡と近接し、これと同時に存在しない。大半が床面下まで大きく削平され、南東部を一部検出したにすぎない。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形とみられ、規模は西辺で3.1m以上、南辺で1.5m以上である。

〔方向〕西辺は北で東に約44°偏る。

〔壁〕西辺は上部が斜めに崩れているが、検出面から床面まで高さ22cm前後残っており、S I 16竪穴住居跡床面が掘り込み面であるならば、本来は高さ47cm程度であったと考えられる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。南東部以外は床面下まで大きく削平されている。

〔主柱穴〕西辺から約1.0m、南辺から約1.0m離れた位置で、南西主柱穴を検出した。それ以外の主柱穴は削平されて残っていないが、本来は竪穴住居跡の対角線上に4本の主柱穴が配されていたと推定される。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔周溝〕南西隅を中心とする西辺・南辺の一部で、幅約20cm、深さ約5cmの周溝を検出した。周溝内は自然堆積土である。

〔堆積土〕廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土から土師器壺・壺、須恵器壺（7）・高台壺（8）・壺の破片が少數、鉄滓（椀形滓）が1点出土した。このうち土師器には非ロクロ調整の壺が含まれるが、壺は小破片で摩滅しており、ロクロ調整使用の有無は不明である。須恵器壺（7）は底部がへら切りである。

【S I 47竪穴住居跡】（平面図・断面図：第54図）

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上のやや東寄り、標高31.5m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。杉の根の攢乱が大きく入り、北部～東半部が床面下まで大きく削平され、残りが悪い。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形とみられ、規模は西辺が約2.9m、南辺が1.1m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で西に約13°偏る。丘陵尾根の方向と一致せず、等高線に沿っている。

〔壁〕検出面から床面までの高さは西辺で15~20cm、南辺で10cm以下である。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。北部~東部は床面下まで大きく削平され、西部も杉の根の攪乱で大きく壊されている。

〔周溝〕西辺・南辺で幅14cm、深さ5cmの周溝を検出した。南周溝内は床面上と一連の土層、西周溝内は異なる土層が廃絶以降に自然堆積している。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔その他〕主柱穴、壁柱穴はない。

〔堆積土〕廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

【S 14堅穴住居跡】(平面図・断面図: 第55図、遺物: 第56・57図、図版10)

〔位置〕調査区中央部南東寄り、丘陵尾根上の標高32.5m付近に位置する。

〔重複〕堅穴住居跡、掘立柱建物跡との重複はないが、内部中央北東寄りは杉の根の攪乱で壊されている。

〔廃絶の原因〕火災によって焼失した堅穴住居跡である。

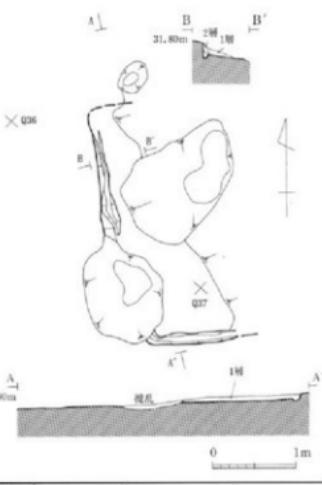
〔平面形・規模〕平面形はやや歪んだ隅丸長方形で、規模は南北が東辺で4.1m、西辺で3.7m、東西が北辺で3.5m、南辺で3.6mである。

〔方向〕東辺でみると北で東に約33°偏る。

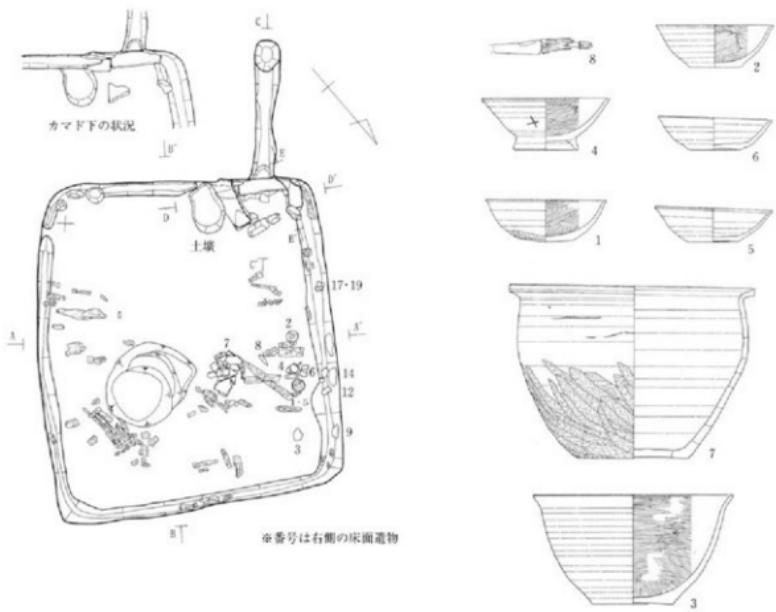
〔壁〕検出面から床面までの高さは、残りが比較的よい西辺・北辺で30~35cm、残りの悪い東辺で12cm前後、南辺東側で10cm以下である。西辺では壁は約110°の傾斜でやや斜めに立ち上がり、北辺ではほぼ垂直に立ち上がる。東辺でもほぼ垂直に立ち上がるが、中央部では奥に抉るようにして立ち上がる。

〔床面〕床面はほぼ平坦だが、北から南に向てわずかに傾斜する。地山面（粘板岩礫層）を床面とする。南東部を除く床面上には炭化材が散在している。このうち4点の樹種同定を行い、北西部床面出土の土師器坏（1）・須恵器坏（5）と接した垂木材とみられる炭化材がムクノキ近似・攪乱近くの炭化材がネムノキ属、東周溝と床面と接する箇所の炭化材がカエデ属、北周溝内中央の炭化材がクリと同定された（付章1参照）。

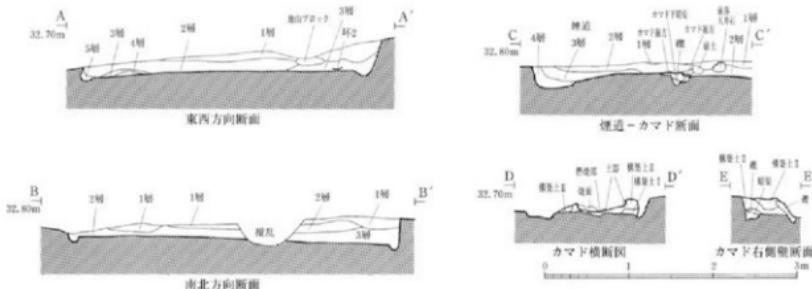
北西部（カマドを上にみた場合、住居の右下側）の床面上から、完形の土師器坏（1・2）・高台坏（4）・塊（3）、須恵器坏（5・6）・鉢（7）、刀子（8）が火災当時の現位置をほぼ保ったま



第54図 S 14堅穴住居跡平面図・断面図



火災時の床面遺物 (縮尺 1/6)



柱跡跡	層 級	断面	
		左	右
柱頭	カマドの噴気。にふく黄褐色(10YR4/3)土。径1~3cmの炭片。燃上ブロックを多量に含む。高さ5cmの鉄角状の炭化材もある。人為堆積土。		
カマド敷方	にふく黄褐色(10YR4/3)土。しまりあり。粘性あり。人為堆積土。		
カマド堆積土Ⅰ	作り替えた前のカマド堆積土。黄褐色(10YR5/0)土。殆ど灰礫片を積層材に用いる。径1~3cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。		
カマド堆積土Ⅱ	作り替えたカマド堆積土。黄褐色(10YR4/4)土。径1~3cmの焼上ブロック・炭灰、径1cm以下の中板岩風化礫片を多く含む。		
カマド燃焼部	赤褐色(5YR4/4)土。地土を多量に含む。しまりあり。粘性なし。		
煙道1層	にふく黄褐色(10YR4/3)土。地山土・炭化物を少量含む。しまりなし。自然堆積土。		
煙道2層	褐色(10YR4/4)土。径1~2cmの焼前ブロック。炭化物を多量に含む。火災後の人為堆積土。		
煙道3層	にふく黄褐色(10YR4/3)土。地山土・ブロックを多量に用いる。炭化物を少量含む。しまりなし。火災後の人為堆積土。		
堆積4層	暗褐色(10YR3/0)土。地山土ブロックを多量に含む。しまりなし。カマド使用中の自然堆積土。		
S-120	堆積1層	にふく黄褐色(10YR4/3)土。地山土・炭化物を少量含む。しまりなし。自然堆積土。	
	堆積2層	褐色(10YR4/0)土。地山土・ブロック・炭化物を多量に含む。火災後の人為堆積土。	
	堆積3層	褐色(10YR4/0)土。地山土・ブロック・炭化物をやや多く含む。火災後の人為堆積土。	
	堆積4層	黒褐色(10YR3/2/3)土。地山土・ブロックを多量に含む。火災時の自然堆積土。	
	堆積5層	炭化物層。火災時の自然堆積土。	

第55図 S-120堅穴住居跡平面図・断面図 (1/60)

まとみられる状態で出土した。西周溝底面から出土した完形の須恵器壺（16・17・19）もこれと接した箇所から出土したものであり、西辺壁際の棚に置かれていた壺が火災で焼け落ちたものである可能性がある。堆積土出土の土器もこの付近の上層から出土したものが多い。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕丘陵尾根の中軸線に直交するように、南辺の南西隅に寄せて付設されている。焼失住居跡なので、カマドの左側壁、右側壁、燃焼部、煙道、煙出しピットがよく残っていた。ただし、カマドの天井部は崩壊していた。

左側壁は長さ65cm、高さは奥で13cm、焚き口で13cm、右側壁は長さ53cm、高さは奥で20cm、焚き口で16cm残存していた。両側壁の内側は被熱のため著しく赤色硬化していた。両側壁外面の幅は下部で1.05mある。右側壁の外表面は南西隅の壁と一緒に著しく赤色に変化し、焼土化していた。本竪穴住居跡が火災によって焼失していることから、この赤変は火災によるものと考えられる。

カマドの両側壁は、粘板岩板状礫片を芯材として黄褐色～褐色粘質土を用いて作られており、一度作り替えられている（古いカマドの構築土Ⅰ、新しいカマドの構築土Ⅱ）。カマドに用いられた粘板岩板状礫片は左側壁に4点、右側壁に2点残存していた。左側壁・右側壁の焚き口部の芯材に用いられた粘板岩板状礫片は、左側壁のものが長さ30cm、幅25cm、厚さ6cm、左側壁のものが長さ34cm、幅12cm、厚さ6cmで、それぞれ径約8cmの掘穴に入れられて内側に傾くように設置されていた。

焚き口の燃焼部上からは、細長い粘板岩板状礫片1点（長さ45cm、幅14cm、厚さ6cm）が両側壁と直交するような状態で出土した。カマド天井部の芯材に用いられた粘板岩板状礫片が崩落したものとみられる。両側壁の焚き口に粘板岩板状礫片が内傾するように設置されていたことを考え併せると、焚き口は下部幅約85cm、内面の高さ約20cm、外表面の高さ約28cm以上のまくら状になっていたと考えられる。

カマド内の天井崩壊土には、カマド天井部本体やその構築材とみられる黄褐色粘質土ブロックや粘板岩板状礫片が含まれていた。この黄褐色粘質土ブロックの厚さは8cmあり、下面が赤く焼けて天井内側の壁が残っていた。天井部はこれよりもあまり厚くならない程度であったと考えられる。

燃焼部は奥行き55cm、幅55cm、奥壁高5cmで、奥壁から燃焼部中央にかけてなだらかに崖み、焼土が堆積し、被熱・赤変していた。燃焼部奥壁の下にはカマド両側の周溝（幅16cm、深さ10cm）が一連で続く。それをカマド構築時にカマド奥壁に近いカマド掘方とともに人為的に埋め戻して暗渠としてから、その上に燃焼部奥壁に沿うように粘板岩板状礫片（長さ58cm、幅17cm、厚さ8cm）を横置きに据えている。そして土師器壺体部破片を入れ込むとともに、その上を黄褐色粘質土で薄く整地し、その上を燃焼部としていた。

煙道はカマド奥壁より外に向かって1.4m延び、その先に煙出しピットが付設されている。煙道は入り口幅27cm、最大幅28cmで、トンネル式の煙道天井部は削平され、深さ12cm残存する。煙道の底面はほぼ水平に延びた後、煙出しピットに向けて傾斜している。煙道の入り口から長さ20cm

にわたって底面と側壁が被熱のために著しく赤色硬化していた。煙出しピットは長径37cm、短径30cm、深さ27cmあり、煙道底面よりも17cm程深く埋めている。

【周溝】各辺に深さ5~7cmの周溝が巡る。北辺・東辺・南辺は幅15cm前後だが、西辺は25cm前後とやや幅広い。周溝内からは火災時に焼け落ちた炭化材・炭化物や完形に近い須恵器壺(16・17・19)が出土し、西周溝の底面は西側壁と一連に焼け焦げていた。本竪穴住居の火災時には周溝は開渠であったことがわかる。なお、周溝はカマド両側壁の際で途切れるが、カマドの下にも周溝が続く。この箇所はカマド構築時に人為的に埋め戻され、その上に粘板岩板状礫片が置かれてからさらに整地され、暗渠となっている。

【土壤】カマド左側、カマド左側壁に接して1基検出された。平面形は長径60cm、短径40cmの楕円形で、深さ8cmある。

【堆積土】5層に分けられ、堆積土4・5層が火災時に焼け落ちた自然堆積層、堆積土2・3層が火災後に埋め戻した人為堆積層、堆積土1層がその後の自然堆積層とみられる。

【出土遺物】床面から完形の土師器壺2点(1・2)、土師器壺1点(3)、土師器高台壺1点(4)、須恵器壺2点(5・6)、須恵器鉢1点(7)、刀子1点(8)が出土した。これらはいずれも火災時に床面上に置かれていたものであり、ほぼ現位置を保っているとみられ、北西部に集中している。また、西周溝底面からは完形の須恵器壺3点(16・17・19)が出土した。これらは火災時に西辺の柵の上に置かれていたと考えられる土器である。このうち土師器はいずれもロクロ調整で、土師器壺・壺・須恵器壺は底部が回転糸切り無調整(2・3・5・6・16・17・19)のものが主体を占める。

火災後に人為的に埋められた堆積土2・3層からは、ほぼ完形や残存率の高い土師器壺2点(9・10)、土師器高台壺2点(12・13)、土師器壺1点(14)や刀子破片1点(20)の他、土師器壺・甕(15)、須恵器壺・甕の破片などが少數出土した。堆積土1層からは残存率の高い土師器壺1点(11)、須恵器壺1点(18)の他、土師器壺・須恵器壺・蓋・甕の破片が少數出土した。このうち土師器壺はいずれもロクロ調整であるが、甕にはロクロ調整のもの他、非ロクロ調整のものも少數含まれる。土師器壺・須恵器壺は底部が回転糸切り無調整のもの(9・10・18)が主体を占める。

カマド下暗渠からはロクロ調整の土師器甕口縁部破片、カマド燃焼部下整地からはロクロ調整調整の土師器甕体部破片、カマド崩壊土からはロクロ調整の土師器甕体部破片、煙道部1層からは須恵器甕破片が各1点出土した。

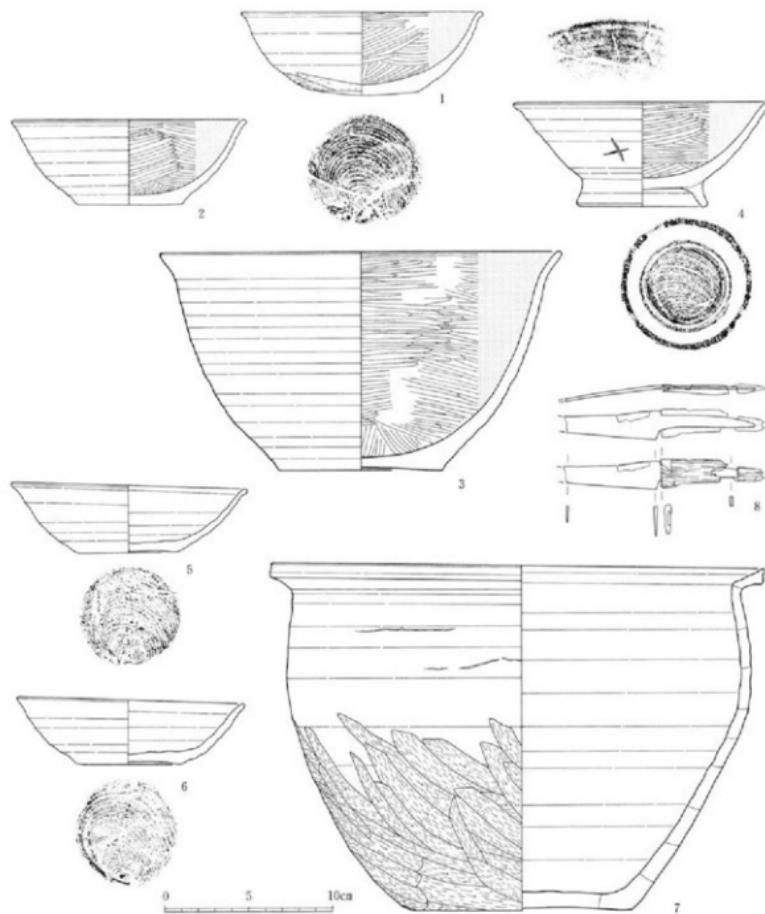
他には堆積土1・2層から炭化した種子(モモ、クリ)破片が少數出土した。

【S I 36竪穴住居跡】(平面図・断面図・遺物:第58図)

【位置】調査区中央部南東寄り、丘陵尾根上やや西寄りの標高32m付近に位置する。S I 20竪穴住居跡の南約3mに位置する。

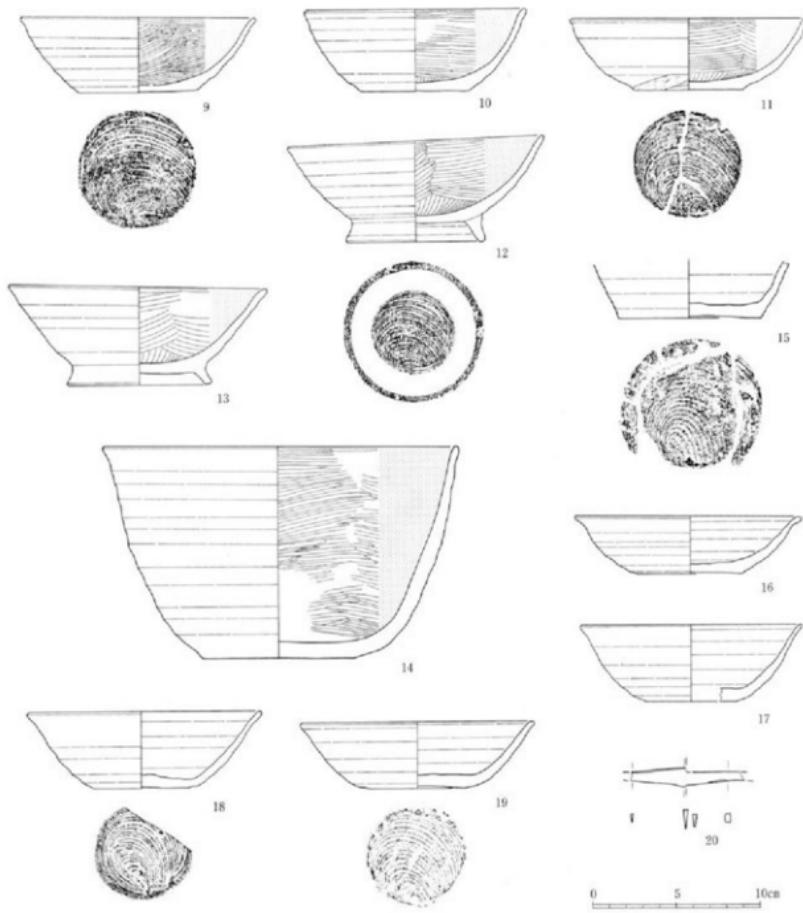
【重複】竪穴住居跡、掘立柱建物跡との重複はない。南半部は床面下まで大きく削平され、残された北半部にも杉の根の攪乱が大きく入っている。

【平面形・規模】平面形は隅丸方形とみられ、規模は東西が北辺で約4.0m、南北が東辺で2.3m以上ある。



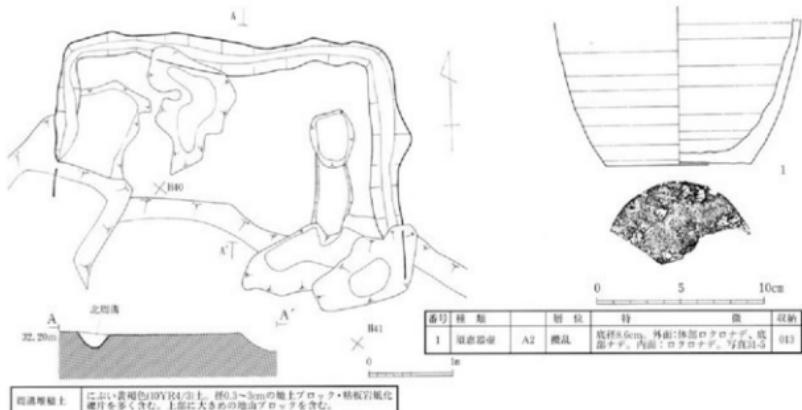
番号	種類	分類	幅径	口径	底径	器高	現存	特 徴	備 考	写真	版納
1	土器器	B A	床面	14.4	6.4	5.0	完形	ロクロ調整。外周：底部同軸角切り→体下部手持ち→ハラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色處理。	24-10	007	
2	土器器	B B	床面	14.0	6.2	5.1	完形	ロクロ調整。外周：底部同軸角切り無調理。内面：ヘラミガキ→黒色處理。	24-11	007	
3	土器器	B	床面	24.0	9.7	13.1	2/3	ロクロ調整。外周：底部削減。一面に手持ちハラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色處理。	24-18	008	
4	土器器高台环	B B	床面	15.3		6.3	完形	高台径7.8cm。ロクロ調整。外周：底部同軸角切り→高台→ロクロナデ→体中央に物盛前削溝「ノ」。 内面：ヘラミガキ→黒色處理。	24-15	007	
5	信者器	D1	床面	14.1	6.0	4.0	完形	外周：底部同軸角切り無調理。重ね焼き軸・炭化物。燒成早締。	24-21	007	
6	信者器	D1	床面	13.6	6.2	3.9	完形	外周：底部同軸角切り無調理。炭化物。著しく焼き垂れ。燒成早締。	24-22	007	
7	信者器	A3	床面	29.3	13.1	20.6	完形	外周：ロクロナデ→体下部→底削撤サザ。	25-15	008	
8	刀子		床面				破片	身部：多筋削除。刃先出用。基部に木骨一部残存。平造り舟様。横開・刃闊。根元長11.5cm。刃元幅1.7cm。基元幅0.9cm。基元厚5.6mm。根厚2mm。	37-14	029	

第56図 S I 20堅穴住居跡出土遺物(1) -火災時の床面遺物



番号	種類	分類	網 底	口徑	底径	甚高	残存	特徴	写真	状況
9	土師器環	II B	西周清空頭	14.0	7.3	4.5	完形	ロクロ渦摺。外面：底部斜軸系切り加彌調節。内面：ヘラミガキ→黒色處理。焼成不良。	24-12	007
10	土師器環	II B	堆積土 2 層	13.2	6.6	4.9	1/2	ロクロ渦摺。外面：底部斜軸系切り加彌調節。内面：ヘラミガキ→黒色處理。焼成不良。	24-13	007
11	土師器環	II A	堆積土 1 層	14.2	6.6	4.3	3/4	ロクロ渦摺。外面：底部斜軸系切り一休下部一面に手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色處理。	24-14	007
12	土師器高台环	II B	周溝内 3 層	15.3		6.1	3/5	高台径 5.3cm。ロクロ渦摺。外面：底部斜軸系切り一付高台→内びロクロナチ。内面：H1縫～底筋へヘラミガキ→黒色處理。焼成良好。	24-15	007
13	土師器高台环	II B	堆積土 2 層	15.4		5.9	1/2	高台径 6.6cm。ロクロ渦摺。外面：底部斜軸系切り一付高台→内びロクロナチ。内面：H1縫～底筋へヘラミガキ→黒色處理。焼成不良。	24-17	007
14	土師器碗	III	周溝内 3 层	21.5	9.0	12.7	1/2	ロクロ渦摺。外面：底部斜軸系切り一付ナチ。内面：ヘラミガキ→黒色處理。焼成不良。	24-19	008
15	土師器盤	III	堆積土 2 層	8.5				破片 ロクロ渦摺。外面：底部斜軸系切り加彌調節。焼成不良。	24-20	007
16	放置器環	DI	西周清空頭	13.5	6.3	3.5	3/4	外面：底部斜軸系切り加彌調節。焼成不良。重ね焼き痕。	25-1	007
17	放置器環	DI	西周清空頭	13.2	5.4	4.6	1/2	外面：底部斜軸系切り加彌調節。焼成不良。	25-2	007
18	放置器環	DI	堆積土 1 層	14.4	5.7	4.6	2/5	外面：底部斜軸系切り加彌調節。焼成不良。	25-3	007
19	放置器環	DI	西周清空頭	14.0	5.2	4.0	2/5	外面：底部斜軸系切り加彌調節。重ね焼き痕。焼成不良。	25-4	007
20	刀子		周溝内 3 層					鍔片 身部～翼部薄片。刃先と茎を一部欠損。手造り角棒。横開・口開。現存長 6.8cm、刃元幅 1.1cm。累光 0.8cm。厚 2.2mm。		029

第57図 S I 20整穴住居跡出土遺物(2)－火災後の床面遺物



第58図 S I 36 穫穴住居跡平面図・断面図（1/60）、出土遺物

〔方向〕東辺でみると北で西に約3°偏る。

〔壁〕床面まで完全に削平され、壁は残っていない。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（粘板岩礫層）を床面とする。

〔周溝〕北辺と東辺・西辺の一部で幅約30cm、深さ20~25cmの周溝を検出した。周溝内は焼土ブロックを多く含む自然堆積土である。火災で焼失した竪穴住居跡であり、機能時には周溝は開渠であったとみられる。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、北辺以外に付設されていたとみられる。

〔その他〕主柱穴、壁柱穴はない。

〔堆積土〕壁が残っていないため、周溝内にのみ堆積する。

〔出土遺物〕周溝内から摩滅した土師器甕体部破片、須恵器甕体部破片、攪乱から須恵器壺破片（1）が少數出土した。

【S I 21竪穴住居跡】（平面図：第59図、断面図：第60図、遺物：第61~65図、図版3-2、11-1~3）

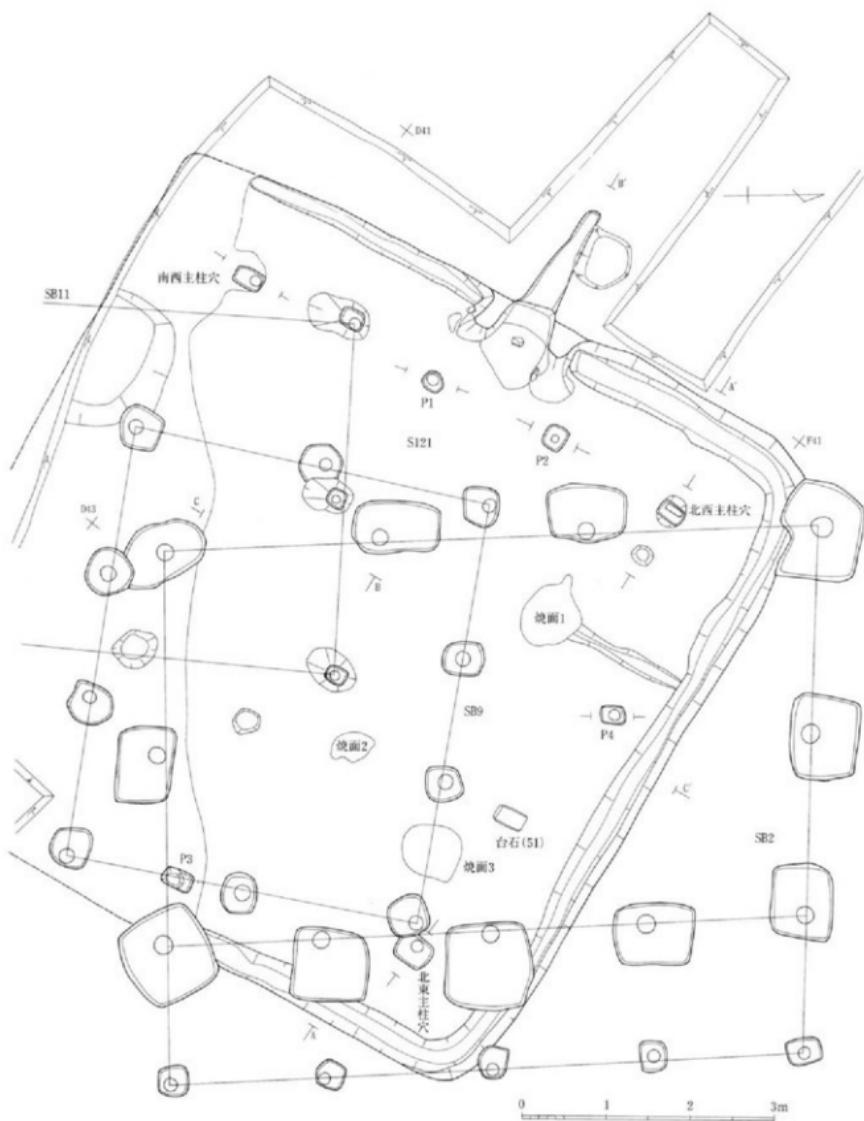
〔位置〕調査区南部半部、丘陵尾根上西寄りの標高31.5m付近に位置する。

〔重複〕SB2・9・11掘立柱建物跡と重複し、これらよりも古い。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸正方形とみられ、規模は南北が西辺（カマドの付設された辺）で7.8m以上、東西が北辺で約8.8mである。主柱穴と周溝との位置関係からみて、南北は約8.7mと推定される。

〔方向〕西辺でみると北で東に約31°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、最も残りのよい北西隅で63cm、北辺で30~60cm、西辺のカマド右脇で37cm、北東隅で26cmある。北辺中央で壁は約110°の傾きでやや斜めに立ち上がる（第60図断面C-C'）。西辺の北西隅寄りでは約100°の傾きでやや斜めに立ち上がる（第60図断面A-A'）。西辺のカマド左側では17cm以下、東辺では15cm以下となり、東辺の南半部、南西隅、南辺は床面

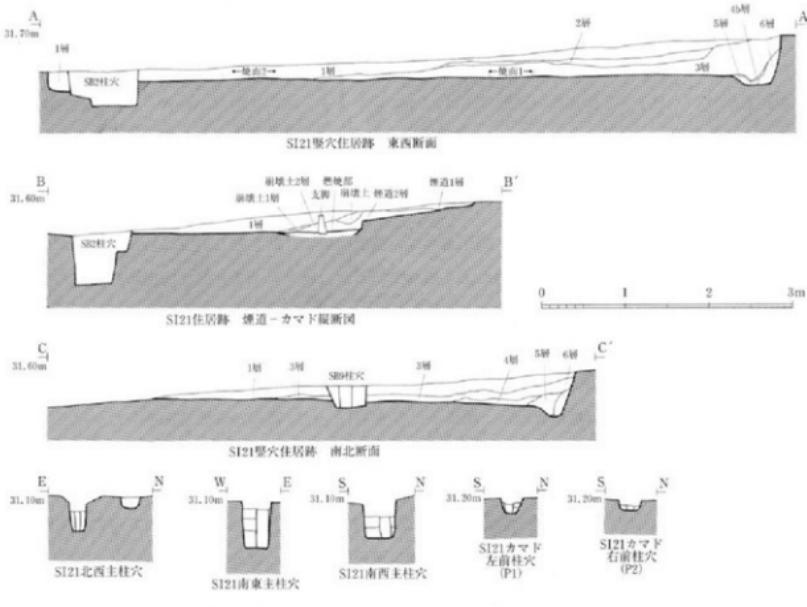


第59図 S I 21竪穴住居跡、S B 2・9・11据立柱建物跡平面図 (1/60)

下まで削平され、壁は残ったいなかった。この箇所では周溝も底面以下まで削平され、検出されなかった。

〔床面〕 地山面（径5～10cmの粘板岩板状礫片を主体とし、その隙間に褐色土を少し含む粘板岩風化礫層、または粘板岩岩盤）を床面とする。北東隅に向てわずかに傾斜するが、床面はほぼ平坦である。

〔主柱穴〕 南西・北西・北東主柱穴3箇所を検出した。南東主柱穴は調査区外に位置し、豊穴住居跡の対角線上に4箇所の主柱穴があるとみられる。北西主柱穴は西辺から約1.4m、北辺から約1.4m離れ、北東主柱穴は東辺から約1.3m、北辺から約1.5m離れ、南西主柱穴は西辺から約1.2m離れてある。



柱名	特徴
主柱穴掘削	褐色7.5YR3/3(1)土。径2~6cmの粘板岩礫片、深さ5~7cmの地山明黄褐色10YR6/6(1)土ブロックを多量に含む。しまりよい。人为堆積土。
主柱穴崩壊	褐色7.5YR3/3(1)土。径2~5~7cmの粘板岩礫片、地山明黄褐色土ブロックをや多く含む。しまり悪い。自然堆積土。
カマド前柱穴掘削	褐色7.5YR3/3(1)土。径2~5~7cmの粘板岩礫片、深さ5~7cmの地山明黄褐色10YR6/6(1)土ブロックを多量に含む。しまりよい。人为堆積土。
カマド前柱穴崩壊	褐色7.5YR3/3(1)土。径2~5~7cmの粘板岩礫片、地山明黄褐色土ブロックをや多く含む。しまり悪い。自然堆積土。
カマド構築土	黄褐色10YR4/6(6)土。粘板岩礫片を地盤材に用いる。径1~3cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりなし。
カマド燃焼部	赤褐色2.5YR4/6(6)土。土を多量に含む。しまりあり。粘性なし。
カマド崩壊土1層	褐色7.5YR4/6(6)土。径2~5cmの地山明黄褐色土ブロックを多く、径5mmの地土粒を少し含む。
カマド崩壊土2層	褐赤褐色5YR3/4(6)土。径1~2cmの地土粒を多量に含む。
SI21 神1層	にじく黄褐色10YR4/6(6)土。径1~3cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりなし。
神2層	褐色7.5YR4/6(6)土。径1~2cmの地土粒。粘板岩風化礫片を多く含む。
神3層	褐色7.5YR4/6(6)土。径1~2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人为堆積土。
神4層	褐色7.5YR4/6(6)土。径1~2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人为堆積土。
神5層	にじく黄褐色10YR4/6(6)土。径0.5~2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人为堆積土。
神6層	黒褐色10YR3/2(2)土。径0.5~2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人为堆積土。

第60図 S I 21豊穴住居跡断面図 (1/60)

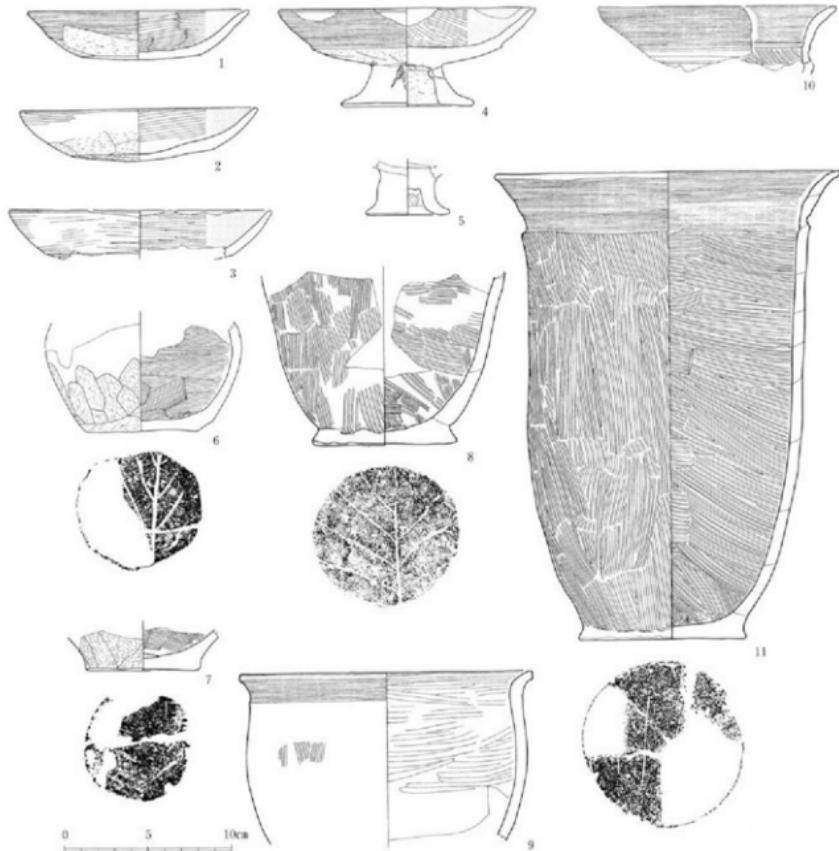
いる。掘方は南西主柱穴が長辺35cm、短辺25cmの長方形で、深さ50cm、北西主柱穴が長辺33cm、短辺22cmの長方形で、深さ43cm、北東主柱穴が長辺45cm、短辺35cmの隅丸長方形で、深さ55cmある。柱痕跡は南西主柱穴が径13cmの円形、南東主柱穴が径15cmの円形である。北西主柱穴の柱痕跡は長方形で、幅21cm、厚さ6cmの角材を用いているとみられ、廃絶時に切り取られている。柱間寸法は南西主柱穴-北西主柱穴間が5.8m、北西主柱穴-北東主柱穴間が6.1mである。

〔その他の柱穴〕 主柱穴以外の柱穴として、カマド左前でP1柱穴、カマド右前でP2柱穴、東辺中央に近い箇所でP3柱穴、北辺中央に近い箇所でP4柱穴を検出した。掘方はP1柱穴が長径27cmの歪んだ円形に近く、深さ19cm、P2柱穴が長辺30cm、短辺27cmの隅丸正方形に近く、深さ12cm、P3柱穴が長辺約30cm、短辺25cmの長方形で、深さ18cmある。P1柱穴で径12cm、P2柱穴で径8cmの柱痕跡を確認した。P3柱穴は廃絶時に柱が抜き取られ、柱痕跡を確認できなかった。掘方の平面規模は主柱穴とさほど変わらないが、深さは主柱穴よりも30cm程浅く、柱痕跡の径も小さい。P1・2柱穴間の柱間寸法は1.6mで、P1・2柱穴は南西主柱穴-北西主柱穴を結ぶ線上にあり、カマド中軸線から80cmの等距離にある。また、P3柱穴はカマド中軸線の延長線上にある。そして、北東主柱穴と未検出の南東主柱穴を結ぶ線上からやや東辺近くに寄ると推定される。〔カマド〕 西辺のほぼ中央に付設されている。カマドの向きは丘陵尾根の中軸線とほぼ一致する。三陸自動車道路計画路線幅の際にあり、削平されない箇所なので、断ち割り調査は行わなかった。カマドの左側壁、右側壁、燃焼部、煙道がよく残っていたが、カマドの天井部は廃絶時に壊されていた。煙出しビットは削平されて検出されなかった。

左側壁は長さ67cm、高さは奥で22cm、焚き口で8cm、右側壁は長さ92cm、奥で31cm、焚き口で22cm残存していた。両側壁の内側は被熱のため著しく赤色硬化していた。両側壁外面の幅は下部で1.55mある。燃焼部は奥行き1.0m、幅65cm、奥壁高12cmで、奥壁から燃焼部中央にかけてながらに窪み、焼土が堆積し、被熱・赤変していた。燃焼部の中央には支脚石(50)が据えられていた。この支脚石は砂岩製で、2面を大きく分割して頂部が平坦な四角錐状に整形している。燃焼部内に2cm埋め込んでいたので、燃焼部上面から支脚石の天端までの高さは22cmであった。支脚石は重量感あふれ、硬質なためか、被熱による表面の変色はほとんど認められない。

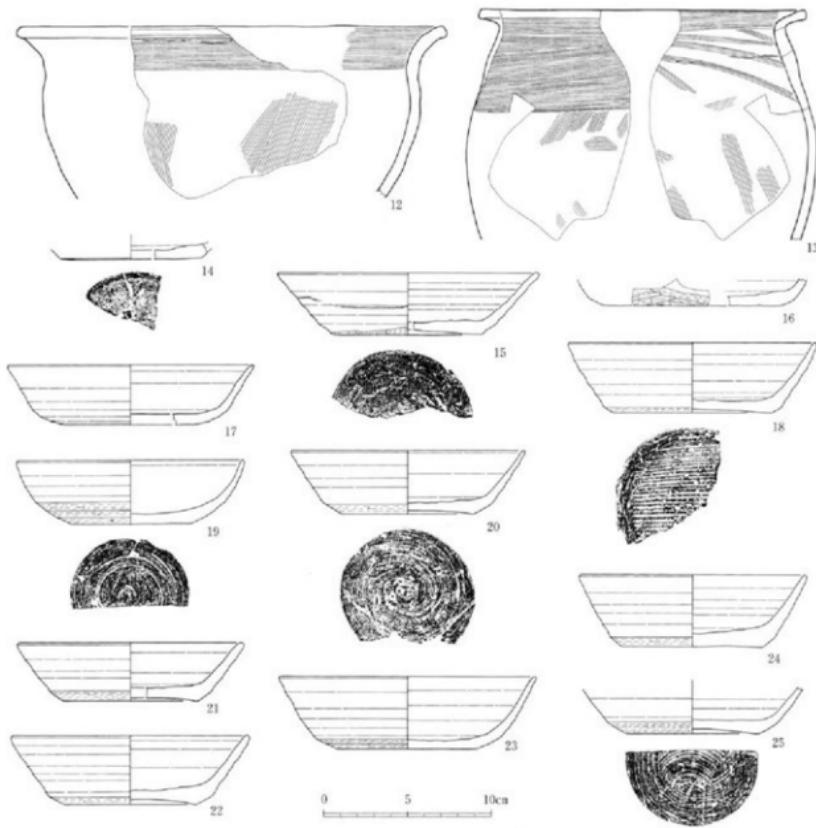
煙道の向きは北西で、丘陵尾根の中軸線とほぼ一致する。煙道はカマド奥壁より外に向かって上向きに約7°傾斜しながら1.35m延びる。煙道の最大幅の位置は入り口にある。ここで幅42cmあり、次第に先細りとなる。煙道入り口付近の側壁は、火熱のために赤色硬化していた。トンネル式の煙道天井部は削平され、深さ10cm残存する。煙出しビットは検出されなかったが、残存する煙道先端部の底面が3cm程深く窪むことから、ここに煙出しビットが付設されていたと考えられる。

〔周溝〕 北辺、西辺、東辺で、幅40~50cm、深さ10cm前後の周溝を検出した。西辺ほぼ中央に付設されているカマドの両側で周溝が途切れている。カマドの断ち割りを行っていないため、カマド下に周溝が連続していたか不明である。カマド左側の西辺では幅25cm程だが、上部を削平されて残りが悪いためと考えられる。周溝内の堆積土は2層に分かれ(堆積土5・6層)、人為堆積土である。堆積状況からみて、堆積土6層は周溝の掘方の可能性もある。



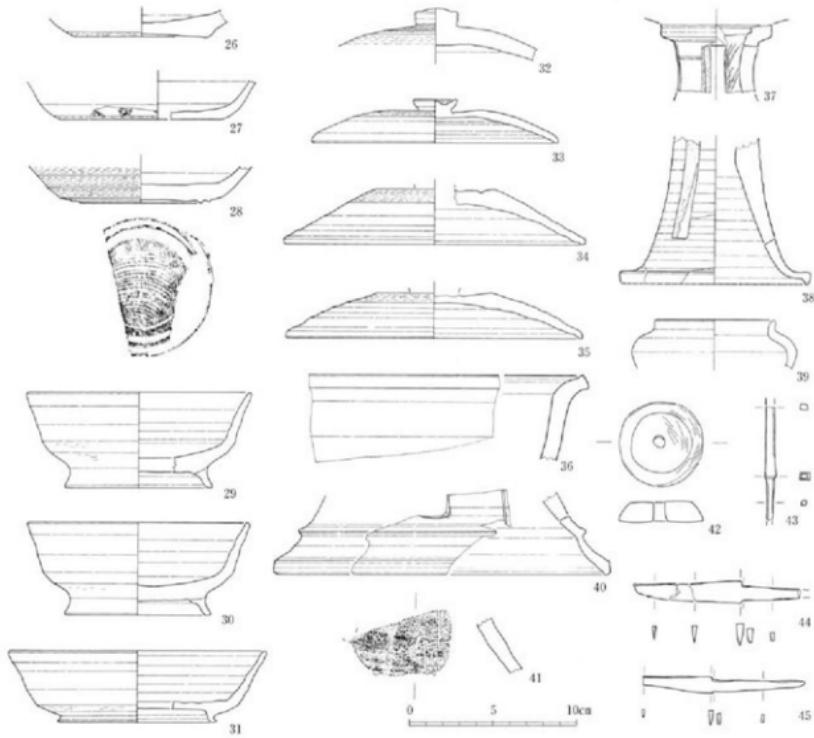
番号	器種	分類	層位	残存	特徴	写真	収納
1	土師器環	I IR2	埋土上層	1/2	口幅13.3mm、底径7.1mm、高さ2.9m。丸底気味。赤ロクロ調整。外面：口縁ヨコナギ→底部～瓶部手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黑色處理。焼成不良。	25-6	909
2	土師器環	I IR2	埋土上層	2/3	口幅14.2mm、底径8.4mm、高さ3.1mm。丸底。赤ロクロ調整。外面：口縁ヨコナギ、体下部～瓶部手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黑色處理。焼成不良。	25-7	909
3	土師器環	I IR2	埋土上層	1/4	口幅15.6mm、底径10.3mm、高さ約3.3cm。丸底気味。赤ロクロ調整。外面：口縁～底部ヘラミガキ。内面：ヘラミガキ→黑色處理。柱上に海綿状の剥離を含む。焼成不良。	25-8	909
4	土師器高环	西清		3/3	口幅15.3mm、底径7.8mm。脚部径2.5cm。器高5.9cm。赤ロクロ調整。外面：口縁ヨコナギ、体下部手持ちヘラケズリ。脚部ヨコナギ→黒色處理。瓶部ヘラケズリ。内面：口縁～瓶部ヘラミガキ→黑色處理。手持ちヘラケズリ。焼成不良。	25-8	909
5	土師器高环		埋土上層		底面～脚部破片。外面：脚部ケズリ、摩擦。瓶部ヨコナギ。内面：底面ヘラミガキ→黑色處理。脚部ヘラケズリ。ナメ。	25-9	909
6	土師器瓶	I	埋土上層	1/2	体高～瓶部不定形破片。赤ロクロ調整。外面：瓶部木製胎。体下部手持ちヘラケズリ。体上部ナメ。内面：ヘラナメ。	25-10	909
7	土師器瓶	IA	埋土上層		脚部～瓶部破片。瓶径8cm。外面：ナメ状のヘラケズリ。脚部ヘラケズリ。内面：ヘラナメ→黑色處理。		909
8	土師器瓶	IA	カマド上層		長胴壺腹下部～瓶部破片。瓶径8.6cm。赤ロクロ調整。外面：底部～瓶部ナメ。脚部ハナメ。内面：瓶部～底部ハナメ。内面：底部脚部に吸水材付着。		909
9	土師器瓶	I IR2	埋土上層	1/4	口幅～瓶部破片。口径17.8cm。赤ロクロ調整。外面：口縁ヨコナギ、体部ハナメ。内面：ヘラミガキ。	25-11	909
10	土師器瓶	IA	埋土上層		瓶底破片。赤ロクロ調整。外面：口縁ヨコナギ。内面：口縁ヨコナギ+横筋状線。脚部ハナメ。		909
11	土師器瓶	IA	埋土上層	3/4	長胴壺。口幅20.6mm、底径10.0cm、高さ25.0cm。赤ロクロ調整。外面：底部木製胎。脚部ハナメ→口縁ヨコナギ。内面：脚部～底部ハナメ→口縁ヨコナギ。肩部に保、炭化物付着。焼成良好。	25-12	916

第61図 S-121堅穴住居跡出土遺物(1)



番号	種類	分類	層位	口径	底径	高さ	残存	特徴			写真	枚数
								前面	裏面	側面		
12	土器器体	I-182	埋上2層	25.6				直口～体部破片。表面クロマ脱落。外面：口縁ヨコナギ、体部摩滅。内面：口縁ヨコナギ、体部摩滅。	25-14	009		
13	土器器體	I-181	埋上1層	19.2				口縁～側部破片。表面ヨコナギ。外面：口縁ヨコナギ、胸上部ヨコナギ、胸下部ナゲ。内面：口縁ヨコナギ、胸上部ナゲ。	25-13	009		
14	骨器	1-101	理上2層	8.4				直口～切妻へきりナギ。焼成不良。		009		
15	骨器	1-104	理上1層	15.6	8.8	3.7	1/3	外面：武部切妻へきり不明。体下部～底部手持ちへラケズリ。体部に粘土詰積み上げ板。焼成良好。	26-1	009		
16	骨器	1-105	理上1層	10.8				直口～底部へきり～体下部～底部手持ちへラケズリ。		009		
17	骨器	1-106	理上2層	14.7	7.6	2.6	1/3	外面：武部切妻へきり不明。体下部～底部同軸へラケズリ。火燐板。造成堅緻。	26-2	009		
18	骨器	1-107	理上2層	14.8	9.4	4.2	2/3	外面：武部切妻へきり不明。体下部～底部同軸へラケズリ。火燐板。造成良好。	26-3	009		
19	骨器	1-108	理上1層	13.6	7.0	3.8	1/3	外面：武部切妻へきり不明。体下部～底部同軸へラケズリ。内面：平滑なロクナナギ。焼成良好。	26-4	009		
20	骨器	1-109	理上1層	14.0	7.8	3.8	1/2	外面：武部切妻へきり不明。体下部～底部同軸へラケズリ。焼成良好。	26-5	009		
21	骨器	1-110	理上2層	13.6	8.0	3.5	1/2	外面：武部切妻へきり不明。体下部～底部同軸へラケズリ。焼成不良。	26-6	009		
22	骨器	1-111	理上2層	14.2	7.8	4.1	1/3	外面：武部切妻へきり不明。体下部～底部同軸へラケズリ。焼成不良。	26-7	009		
23	骨器	1-112	理上2層	15.4	8.4	4.4	1/4	外面：武部切妻へきり不明。体下部～底部同軸へラケズリ。焼成良好。	26-8	009		
24	骨器	1-113	理上1層	13.6	8.4	4.3	1/3	外面：武部切妻へきり不明。体下部～底部同軸へラケズリ。焼成不良。	26-9	009		
25	骨器	1-114	理上1層					<1/2> 外面：底面部側面切り～体下部～底部外周輪へラケズリ。焼成良好。		009		

第62図 S-121堅穴住居跡出土遺物(2)



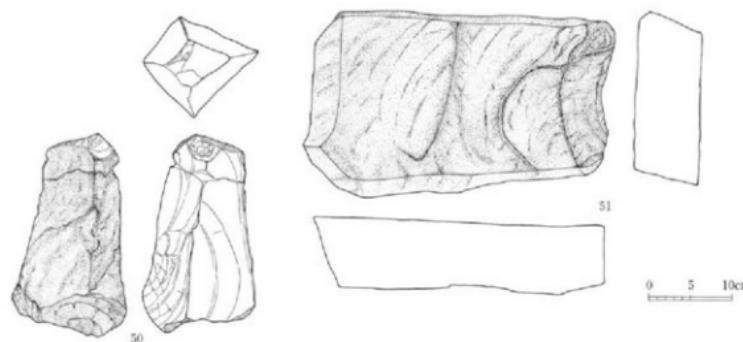
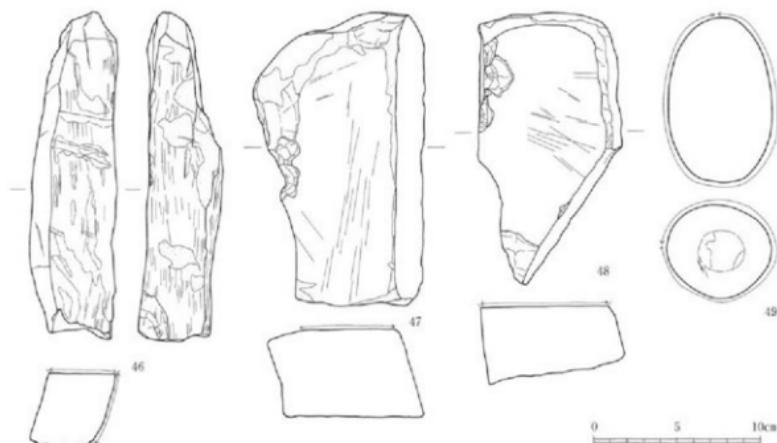
番号	種類	分類	層位	残存	跡	寸	写真	状態
26	須恵器杯	A3	埋土上層	破片	底端定形破片。底径8.0cm。外側：底部切り離し不規～体下部～底部回転へラケズリ。焼成不良。		26	009
27	須恵器杯	A3	埋土上層	破片	底径7.6cm。外側：底部切り離し不規～体下部～底部回転へラケズリ。体下部にヘラ記号。焼成良好。		26-10	009
28	須恵器高台杯	C	埋土上層	破片	外側：底面回転切り～体下部回転へラケズリ～振り出し(開口ロコナ)による「系」の解高台。焼成不良。		26-11	009
29	須恵器高台杯	B1	埋土上層	1/4	口径13.4cm。高台径8.8cm。底径5.6cm。外側：体下部～底部回転へラケズリ～村高台。大腹鉢。黒ね體質。		26	009
30	須恵器高台杯	B1	埋土上層	1/2	口径13.2cm。高台径8.5cm。底径5.6cm。外側：体下部～底部回転へラケズリ～村高台。火葬瓶。黒ね體質。		26-12	009
31	須恵器高台杯	A1	埋土上層	1/4	口径15.4cm。高台径9.4cm。底径4.3cm。外側：体下部～底部回転へラケズリ～村高台。黒かぶり。燒成良好。		26-13	009
32	須恵器蓋		埋土上層	破片	つまみ(完形)～体部破片。蓋部の丸い実錐状つまみ(幅2.6cm、高7mm)。外側：体部回転へラケズリ。焼成不良。		26-14	009
33	須恵器蓋	A1a	埋土上層	1/4	口径14.8cm。蓋高6cm。底面～球状つまみ(幅2.6cm、高7mm)。外側：体部回転へラケズリ。焼成中堅。		26-15	009
34	須恵器蓋	A1a	埋土上層	1/4	口径14.9cm。つまみ欠損。外側：体部回転へラケズリ。燒成堅固。		26-16	009
35	須恵器蓋	A1a	埋土上層	1/3	口径17.6cm。つまみ欠損。外側：体部回転へラケズリ。燒成堅固。		26-17	009
36	須恵器杯	A2	埋土上層	破片	口縁～底部破片。内面：ロクロナ。燒成良好。		26-18	009
37	須恵器高杯	B	積出面	破片	杯底が平面面で封した脚部破片。複合底に2条の縫隙高基る。杯底底面2段構成。脚部に長方形窓なし4単位。外側：ロクロナ～ロクロナ～透かし～ナメ。透かし筋手持ちヘラケズリ。内面：粒り目、ロクロナ。焼成堅固。		26-19	009
38	須恵器高杯	B	積出面	破片	脚部破片。ロクロナ～底長方型の透かし(幅1.4cm、ヘラケズリ)3単位。焼成不良。		26-20	009
39	須恵器皿	B1	埋土上層	破片	口縁～体部破片。口径2.2cm。最大径9.8cm。口部底が陥く(高8mm)直さざる。内面：ロクロナ。燒成堅固。		26-21	009
40	円筒瓶	A1	埋土上層	破片	脚部破片。脚部径16.0cm。ロクロナ。體部堅壁。長方型透かし・縫隙反覆。燒成堅固。		26-22	009
41	円筒瓶		埋土上層	破片	脚部破片。外側：ロクロナ～ヘラ状工具による花形の縫隙反覆、二字透かし(底本左上角側に透かしを施した右下側が残存)。内面：ロクロナ。燒成堅固。切と同一体体。		26-23	009
42	土製鍾錠車	B3	定形	1脚	輪面円滑形。径25.0mm。底径3.7cm。厚さ1.3cm。輪孔径0.2cm。重量29g。表面磨滅。		36-7	026
43	鉄鏡		埋土上層	破片	鏡身～鏡破片。鏡身欠損。鏡面に凹面。現存径6.7cm。荒破断面約4mm方形。素断面約4×3mm方形。		029	
44	刀子		埋土上層	破片	鏡身～鏡破片。平造り角機。鏡面～刃部。現存長9.9cm。刃部幅1.4cm。茎元幅0.9cm。極厚4mm。		37-17	029
45	刀子		埋土上層	破片	鏡身～鏡破片。平造り角機。鏡面～刃部。現存長9.8cm。刃部幅1.0cm。茎元幅0.7cm。極厚3mm。		029	

第63図 S-121堅穴住居出土遺物(3)

〔焼面〕 北半部の3箇所で焼面（焼面1～3）を検出した。焼面1は長径80cm、短径70cmの不整形で、焼面から北周溝に向けて幅15～21cm、深さ5cm以下の浅い溝が長さ1.4m延びている。焼面2は長径55cm、短径35cmの不整形、焼面3は長径72cm、短径63cmの不整形である。焼面2の北西50cmの床面上から、台石1点（51）が出土した。焼面2と関連があるのかもしれない。

〔堆積土〕 6層に分かれ、廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕 床面からは台石1点（51）、非クロロ調整の土器器坏・甕、須恵器器坏の破片が数点出土し



番号	種類	割位	特徴	写真	収納
46	礫石	埋土上層	鈍板岩質、角柱状、中弧。上面研磨・擦痕。長さ19.6cm、幅13.3cm、厚さ3.4cm。	38.8	033
47	礫石	埋土上層	細粒砂岩質、角柱状、中弧。上面研磨・擦痕。長さ17.5cm、幅10.3cm、厚さ3.3cm。	38.16	033
48	礫石	埋土上層	砂岩質、角柱状、中弧。上面研磨・擦痕。長さ16.4cm、幅10.6cm、厚さ3.7cm。	38.17	033
49	礫石	埋土上層	細粒砂岩質、楕円体。全面研磨。長さ10.0cm、幅8.3cm、厚さ5.6cm。		033
50	支撐石	カマド内	硬質で重量のある砂岩質、四角形。2面分割型、2面自然端。長さ24.0cm、幅13.5cm、厚さ12.0cm。		037
51	白石	床面	凝灰質砂岩質。扁平な直方体状。長さ26cm、幅21.5cm、厚さ13.0cm。全面自然端。		037

第64図 S121堅穴住居跡出土遺物(4)

た。周溝内（堆積土5・6層）、カマド崩壊土、堆積土3～1層からは非ロクロ調整の土師器坏（1～3）・高坏（4・5）・甕（7・8・10・11・13）・鉢（9・12）・壺（6）、須恵器坏（14～28）・高台坏（28～31）・高坏（37・38）・蓋（32～35）・鉢（36）・短頸壺（39）・壺・甕などが少數出土した。多くは破片であり、完形のものや残存率の高いものはやや少ない。この他、円面硯破片2点（40・41）、土製紡錘車1点（42）、刀子2点（44・45）、鐵鎌1点（43）、砥石3点（46～48）、磨石1点（49）、ガラス小玉1点（52）、珠文鏡1点（53）、炭化した種子（モモ）、縄文土器片、縄文時代の石器（剥片、チップ）などが出土した。

これらのうち土師器坏（1～3）はいずれも非ロクロ調整で丸底か丸底気味のものである。土師器高坏（4）も坏部は丸底気味で、脚部には透かしが4個入れられている。

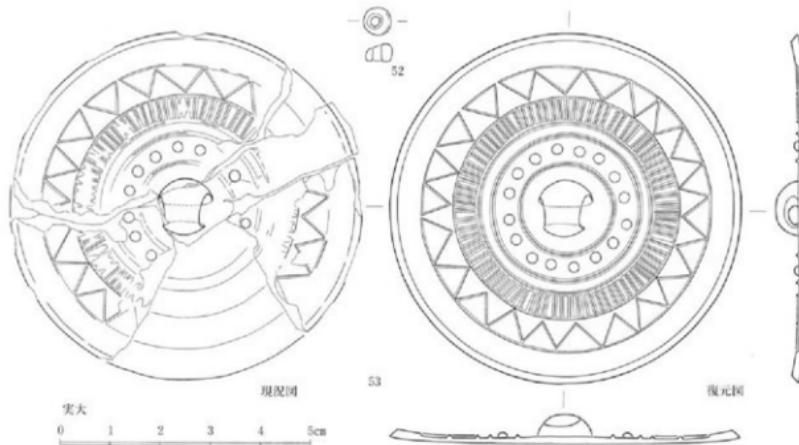
須恵器坏の多くは体下部～底部が回転ヘラケズリされており（18～27）、体下部～底部が手持ちヘラケズリされたもの（15・16）や底部がヘラ切り無調整のもの（14）は少ない。須恵器坏で回転ヘラケズリされたものの中には底部の切り離し痕跡が大きく残されているものがあり、静止糸切りのもの（18）と回転糸切りのもの（25）が各1点ある。

須恵器高台坏の中にも底部の回転糸切り痕が大きく残された削り出し高台のもの（28）がある。これは29～31のような付高台が一般的な陸奥國では特異なものである。また、須恵器高坏（37）も底部の下に円盤状に貼り付けて高台を接合しており、これもあり例のないものである。

円面硯破片2点（40・41）は同一個体の可能性のあるものである。脚部破片（41）は、外面に蓮花の蕾を逆位に線刻している。花弁は両側に3枚ずつ表現されている本例はモチーフとしては、多賀城廃寺跡出土の重弁蓮花文鬼板950B、多賀城跡出土の重弁蓮花文鬼板950Cの両脚部に施されている文様に類似している。これらは多賀城政府第I期〔神亀元年（724）～天平宝字6年（762）〕のもので、いずれも鬼板両脚部に蓮花の蕾が逆位に陽刻されている（宮城県多賀城跡調査研究所、1980・1982）。花弁は両側に2枚ずつ表現されている。

ガラス小玉（52）は完形のもので、珠文鏡と同一層位、約50cm離れて竪穴住居跡ほぼ中央の堆積土1層から出土した。エネルギー分散型蛍光X線分析装置（HORIBA MESA-500）によるNa（ナトリウム）以上の元素分析を行った結果、Pb（鉛）含有量が3.01Wt%と少なく、Si（ケイ素）含有量が60.76Wt%、Ca（カルシウム）含有量が15.62Wt%と多かった。精度の高い分析を行っていなければ、不確実ではあるが、鉛含有量の多い奈良時代の鉛ガラスではなく、古墳時代のアルカリガラスとみられる。

珠文鏡（53）は竪穴住居跡ほぼ中央の堆積土1層から出土した。破片4点が接合し、約2/3が残存する。“ブロンズ病”が進行し、遺存状態は劣悪である。周囲の土壤を箒にかけたが、残りの破片は検出されなかった。4点のうち3点はほぼ半分の遺存状態であり、まとまって出土した。残りの1点（53の右下破片）はこれらから約20cm離れて出土した。面径は7.0cmと小型である。外区文様は鏡の縁部より素文+鋸齒文+柳葉文+突線文、内区文様は珠文16個を一列に整然と配している。古墳時代前期の小型彷彿鏡で、樋口（1979）、中山・林原（1994）分類による珠文鏡I類、森下（1991）分類による珠文鏡2式、小林（1979）分類による珠文鏡A式に相当する。



番号	種類	層位	残存	特徴		写真	収納
				形	寸法		
52	ガラス小玉	埋土上層	完形	アルカリガラス。透明で深いスカイブルー。直径5.0mm、厚さ0.5mm、直徑／厚み比14.孔径1.5mm。古墳時代のものと想定。		36-14 011	
53	珠文鏡	埋土上層	2/3	"アシズ鏡"が進行。裏面は裏面。直径7.0mm、厚さ2mm。鏡面はわざ手に反る。鏡：直径1.6mm、周面から約4mm、裏面半球形。鏡孔：鏡面より1.5mm離れていて。外区文様：鏡の外周より表裏二面に刻まれて、内区文様：裏2mmの鏡面側を除いた中央に一列に整然と配する。10個の珠紋はおよそ鏡の外周側に対して左右対称に配されているが、外区文様の2列の副鏡文は左右対称に配されていない。鏡：鏡頭(1997分類)三足鏡・高台環式、珠：草円(1993分類)による珠文鏡式。中山道・秋葉利明(1994) 分類による珠文鏡式相当。古墳時代後期の切妻鏡。		36-16 011	

第65図 S I 21堅穴住居跡出土遺物(5)・珠文鏡・ガラス小玉

【SI48堅穴住居跡】(平面図・断面図: 第66図、遺物: 第67図)

〔位置〕調査区中央部の北斜面落ち際、丘陵尾根上の北寄り、標高29.0m付近に位置する。

〔重複〕主要構造との重複はない。東半部は床面下まで大きく削平され、遺存する西半部全体にも杉の根の攢乱が大きく入り、残りが悪い。

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は南辺で3.5m、西辺で1.2m以上である。

〔方向〕西辺でみると北東に約36°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、残りのよい南西隅で38cmある。それ以外では17cm以下と残りが悪い。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面(粘板岩礫層)を床面とする。一部に貼床されている。

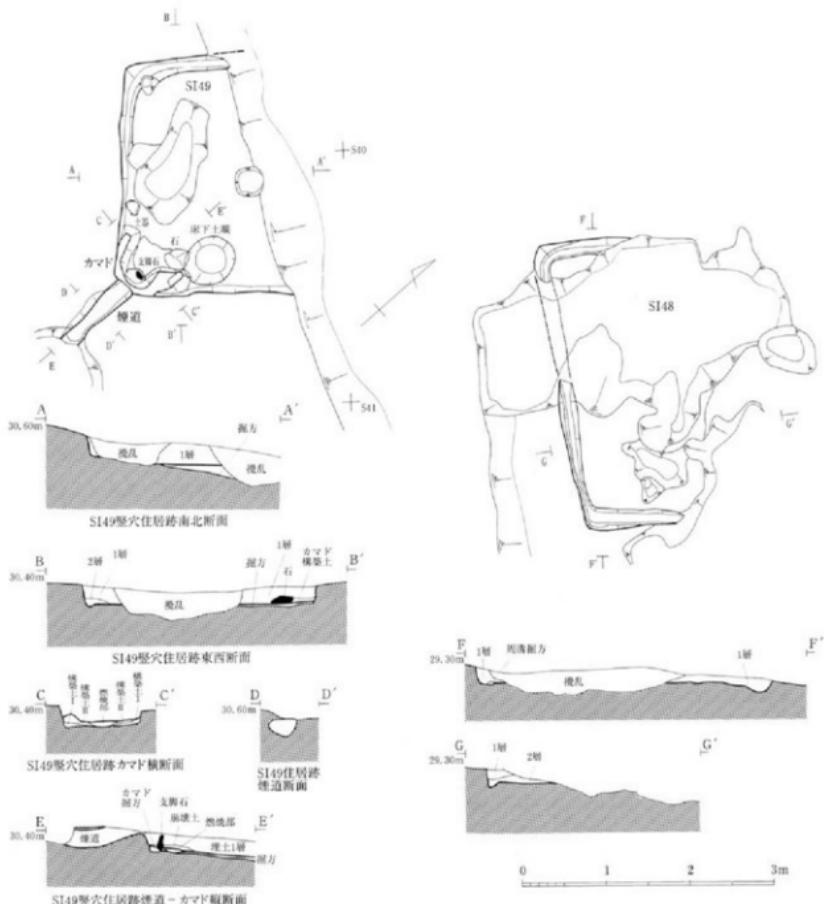
〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔周溝〕西辺、南辺、東辺で幅10~20cm、深さ6cmの周溝を検出した。西周溝の一部に周溝掘方が残存する。廃絶時に床面と一連に人為的に埋められており、開渠であったかどうか不明確である。

〔堆積土〕廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕貼床から須恵器壊片、床面から非ロクロ調整の土師器壊片、埋土から非ロクロ調整の土師器壊、須恵器壊(1)・高台环(2)の破片が各1点出土した。このうち須恵器壊(1)・高



住居跡	層 級	特 徴	
		地	面
SI49	表面解剖面	暗褐色(10YR3/4土上)。地面上ブロックを多く含む。	しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	理土1層	暗褐色(10YR3/3土)。砂2cm以下地山粒を多く含む。	しまりあり。人為堆積土。
	理土2層	暗褐色(10YR3/4土)。砂2~5mmの粗粒岩質化礫石をやや多く、底3cmの地山土ブロックを少し含む。	しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	地表	暗褐色(10YR3/3土)。灰白色火成岩ゴマド。	地面上アリコトを少し含む。自然堆積土。
SI48	南壁	褐色(10YR4/0土)。底3cm以下地山粒を多く含む。	しまりあり。粘性ややあり。人為堆積土。
	床下上層	褐色(10YR4/3土)。底3cm以下地山粒を多く含む。	しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	カマド側面	暗褐色(10YR3/4土)。灰・灰土粒・地山粒を少し含む。	しまりあり。人為堆積土。
	カマド側面土上	改修前のカマド構築上。暗褐色(10YR6/6土)。地山上・粗粒岩質化礫石を多く含む。	しまりあり。人為堆積土。
	カマド側面土下	改修したカマド構築上。暗褐色(10YR6/6土)。地山上・粗粒岩質化礫石を多く含む。	しまりあり。人為堆積土。
SI49	カマド支脚石	長さ30cm、幅10cm、厚さ5cmの角柱状の粗粒岩質。	なし。
	カマド支脚部	にふる赤褐色(10YR4/0土)。地土を多量に含む。自然堆積土。	なし。
	カマド側面土	暗褐色(10YR3/4土)。地土を多量に含む。	なし。
	縫道	暗褐色(10YR3/4土)。底0.5~1cmの粘粒岩質化礫石、底5mmの炭灰土。地土粒を多く含む。トンネル式で、火葬部が一混在。	なし。
	理土1層	暗褐色(10YR3/8土)。地山土・粗粒岩質化礫石を多く含む。	しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	理土2層	黄褐色(10YR5/8土)。地山土アリコト。	底2~4cm程の粗粒岩質化礫石を多く含む。

第66図 S I 48・49豎穴住居跡平面図・断面図 (1/60)

台环（2）は体下部～底部が回転ヘラケズリされ、高台环（2）は焼成前に底部に「×」と刻書きされている。

【S 149堅穴住居跡】（平面図・断面図：第66図、遺物：第67図、図版13-3、14-2）

【位置】調査区中央部、丘陵尾根上の北寄り、標高30.0m付近に位置する。

【重複】主要遺構との重複はない。東半部は床面下まで大きく削平され、遺存する西半部全体にも杉の根の攪乱が大きく入り、残りが悪い。

【平面形・規模】平面形は方形とみられ、規模は南辺で2.8m、東辺で2.2m以上である。

【方向】東辺でみると北東に約40°偏る。

【壁】検出面から床面までの壁の高さは、残りのよい南西隅で32cm、その他の箇所では20～30cmある。

【床面】床面はほぼ平坦で、掘方埋土上面を床面とする。掘方は南西隅を除く残存床面のほぼ全面に及ぶ。

【主柱穴】主柱穴は認められない。

【カマド】丘陵尾根に直交せず、等高線に沿って南東隅に設けられている。廃絶時にカマドの天井部が壊され、煙道の先端と煙出しピットが攪乱で壊されていたが、両側壁、燃焼部、煙道がよく残っていた。

左側壁は長さ63cm、高さは奥で18cm、焚き口で14cm、右側壁は長さ70cm、高さは奥で27cm、焚き口で9cm残存していた。両側壁の内側は被熱のため著しく赤色硬化化していた。両側壁外面の幅は下部で1.1mある。カマドの両側壁は、粘板岩板状礫片を芯材として黄褐色～褐色粘質土を用いて作られており、一度作り替えられている（古いカマドの構築土Ⅰ、新しいカマドの構築土Ⅱ；第66図断面C-C'）。カマドに用いられた粘板岩板状礫片は左側壁に2点残存し、天井崩壊土中に1点あった。焚き口は下部幅約1.1mで、高さは14cm以上である。燃焼部は奥行き52cm、幅60cm、奥壁高13cmで、奥壁から燃焼部中央にかけてなだらかに窪み、焼土が堆積し被熱・赤変していた。

カマド奥壁から手前15cm、カマド中軸線上の位置には支脚石（9）が残されていた。この支脚石は長さ21cm、幅11cm、厚さ6cmで、粘板岩礫片の下端を分割し、側面を剥離して角柱状に整形している。支脚石の天端となる上端は長軸5cm、短軸3cmの菱形状で、平坦である。底面となる下端は長辺8cm、短辺5cmの平行四辺形状である。支脚石の天端から火床までの高さは15cmで、支脚石は長軸をほぼ直にして据方（長径23cm、短径17cm、深さ6cm）の端に寄せて立てられている。支脚石はほぼ全面にわたって褐色～赤色に変化しており、特に奥壁側（第67図9左面）中央側面（同9右面中央）と手前側中央が著しく赤色に変色していた。

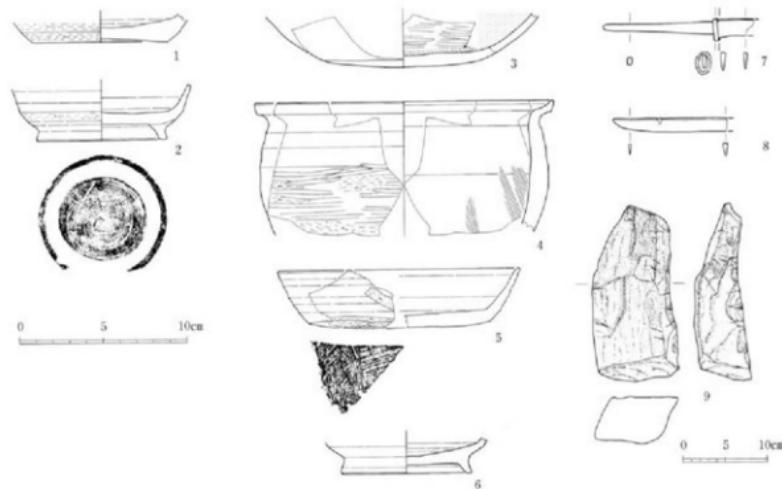
煙道はカマド奥壁よりほぼ南に向かって外に1.0m以上延びる。煙道はトンネル式で、一部天井が残されていた。この残りのよい箇所で幅35cm、深さ20cmある。煙道は中央の底面レベルが最も低くなるように、堅穴住居跡の内部と煙出しピット側の両側より掘削されたことが窺える（第66図断面E-E'）。先端の煙出しピットは攪乱に壊され、残っていないが、煙道縦断面の状況からみて、煙道の長さは残存する長さをさほど超えない程度であったと考えられる。

〔周溝〕南辺の西半と西辺で幅15~20cm、深さ3cmの浅い周溝を検出した。周溝は南辺の中央で途切れ、東辺にも設けられていない。

〔床下土壤〕カマド左脇の東辺際にある。長径65cm、短径55cmの楕円形で、深さ17cmある。本竪穴住居跡の掘方とともに人為的に埋め戻され、一部はカマド左側壁に土を覆われている。本竪穴住居跡の機能時には埋められていたとみられる。

〔堆積土〕廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕掘方から須恵器壊片、カマド右前の床面から須恵器壊体部破片、埋土から非ロクロ調整の土師器壊（3）・甕、ロクロ調整の土師器鉢（4）、須恵器壊・高台壊（6）・蓋・甕・壺、刀子（7・8）の破片、カマド燃焼部から非ロクロ調整の土師器壊破片、煙道から非ロクロ調整の土師器壊破片、攪乱から須恵器壊（5）破片などが少數出土した。土師器には非ロクロ調整の壊（3）・甕、ロクロ調整の鉢（4）がある。須恵器壊には体下部～底部が回転ヘラケズリのもの、底部静止系切り後に体下部～底部手持ちヘラケズリのもの（5）がある。



番号	種類	分類	遺構	層位	状態	特徴	写真	記載
1	須恵器壊	A3	SI08	埋土上層	1/2	底径8.0cm。外縁：底部切り離し不明。体下部～底部回転ヘラケズリ～底部部分的にナデ。焼成不良。	33-15	022
2	須恵器高台壊	B1	SI08	埋土上層	破片	底盤～瓶底、高台部：口縁部、外縁：底部切り離し不明。体下部～底部回転ヘラケズリ～付高台～瓶部に直角に丸削り。焼成良好。	33-16	022
3	土師器壊	I B2	SI09	埋土上層	破片	体下部～底部破片。丸底気泡。非ロクロ調整。外縁：体部～底部ケズリ～ナデ。内縁：ヘラミガキ～黒色処理。		022
4	土師器鉢	II	SI09	埋土上層	破片	口縁～体部破片。口縁部切口直角。ロクロ調整。外縁：ロクロナデ～体下部手持ちヘラケズリ～ヘラミガキ。	33-16	022
5	須恵器壊	C2	SI09	攪乱	破片	口縁～底部小破片。外縁：底部静止系切り～体下部～底部外縁手持ちヘラケズリ。焼成良好。		022
6	須恵器高台壊	E1	SI09	埋土上層	破片	体下部～瓶底、高台部切口直角。高台部8.8cm。外縁：底部切り離し不明。体下部～底部回転ヘラケズリ～付高台～瓶部に直角に丸削り。焼成良好。	33-17	022
7	刀子		SI09	埋土上層	破片	刃身口端～某部破片。片端残る。平打ち刃形。両刃（横刃・刃闘形）。茎脚部：中軸（闊から窄めにかけてやや細を狭める）。基部：茎脚（英語では「曲筋」または「曲筋部」など）。残長9.0cm。茎脚部長6.0cm。刃先幅1.1cm。茎先幅7mm。厚さ3mm。全長13.0cm。刃幅9mm。刃内側6mm。刃厚1.0mm。		001
8	刀子		SI09	埋土上層	破片	刃身脚部。平打ち。残長9.0cm。刃幅8mm。厚さ3mm。		001
9	支脚石		SI09	カマド内	完形	粘板岩質。角柱状。ほとんど自然形状だが、上面を剥離によって整った。長さ23.0cm。幅10.0cm。厚さ6.0cm。		007

第67図 S 148・49竪穴住居跡出土遺物

【S I 33堅穴住居跡】(平面図:第68~70図、断面図:第69・70図、遺物:第71~73図、図版14-3~7)

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上のやや北寄り、標高31.0m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。東半部は上部が大きく削平され、残りが悪い。2度建て替えられて拡張されている。古い方からS I 33A堅穴住居跡、S I 33B堅穴住居跡、S I 33C堅穴住居跡とする。S I 33B堅穴住居跡は床面レベルを同じくしながらS I 33A堅穴住居跡を西に拡張し、方向をずらしている。S I 33C堅穴住居跡はS I 33B堅穴住居跡を埋めて嵩上げ整地し、西・南に拡張し、方向をずらしている。カマド、主柱穴の位置も変えている。

《S I 33A堅穴住居跡》(平面図:第68・69図、断面図:第69・70図)

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形とみられ、規模は南北が東辺で3.4m以上、東西が南辺で3.1mである。

〔方向〕東辺でみると北で東に約31°偏る。

〔壁〕新しいS I 33B・C堅穴住居跡に壊され、壁の高さはほとんどない。

〔A床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。

〔主柱穴〕主柱穴はない。

〔Aカマド〕カマドの位置は不明だが、西辺または北辺に設けられていたと考えられる。

〔A周溝〕南辺・東辺・北辺で幅15~30cm、深さ6cm前後の周溝を検出した。人为的に埋められている。西辺・北辺は新しいS I 33B堅穴住居跡に壊され、検出できなかった。

〔堆積土〕S I 33B堅穴住居の構築に際して、床面レベルをほぼ同じくして拡張しているため、A周溝を埋めている以外には埋土はない。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

《S I 33B堅穴住居跡》(平面図:第68・69図、断面図:第69・70図、遺物:第71図)

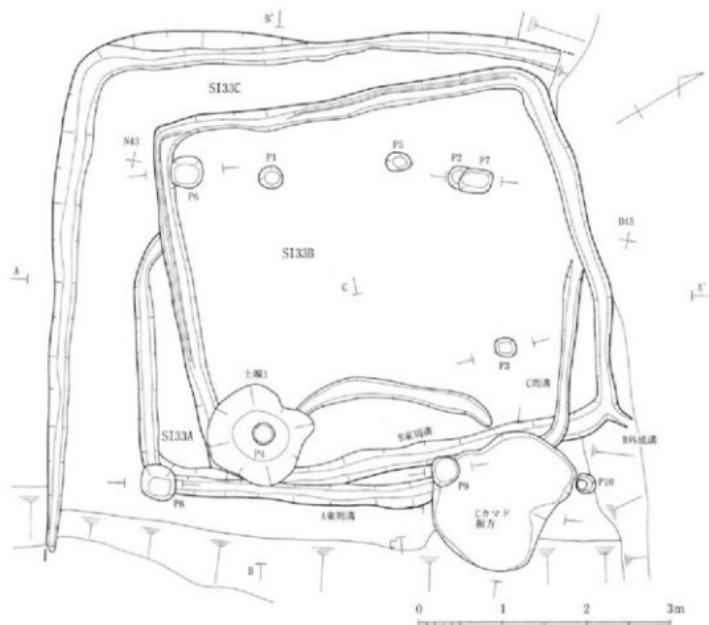
〔平面形・規模〕平面形はほぼ正方形で、規模は南北が西辺で4.8m、東西が北辺で4.5mである。

〔方向〕西辺でみると北で東に約21°偏る。

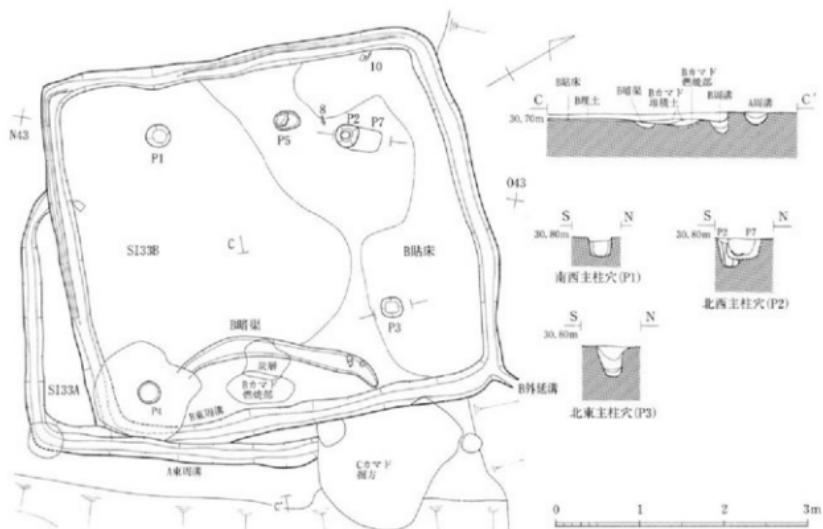
〔壁〕新しいS I 33C堅穴住居跡に壊され、南西隅付近で10cm前後残る以外、壁の高さはほとんどない。

〔B床面〕床面はほぼ平坦で、B貼床を床面とする。

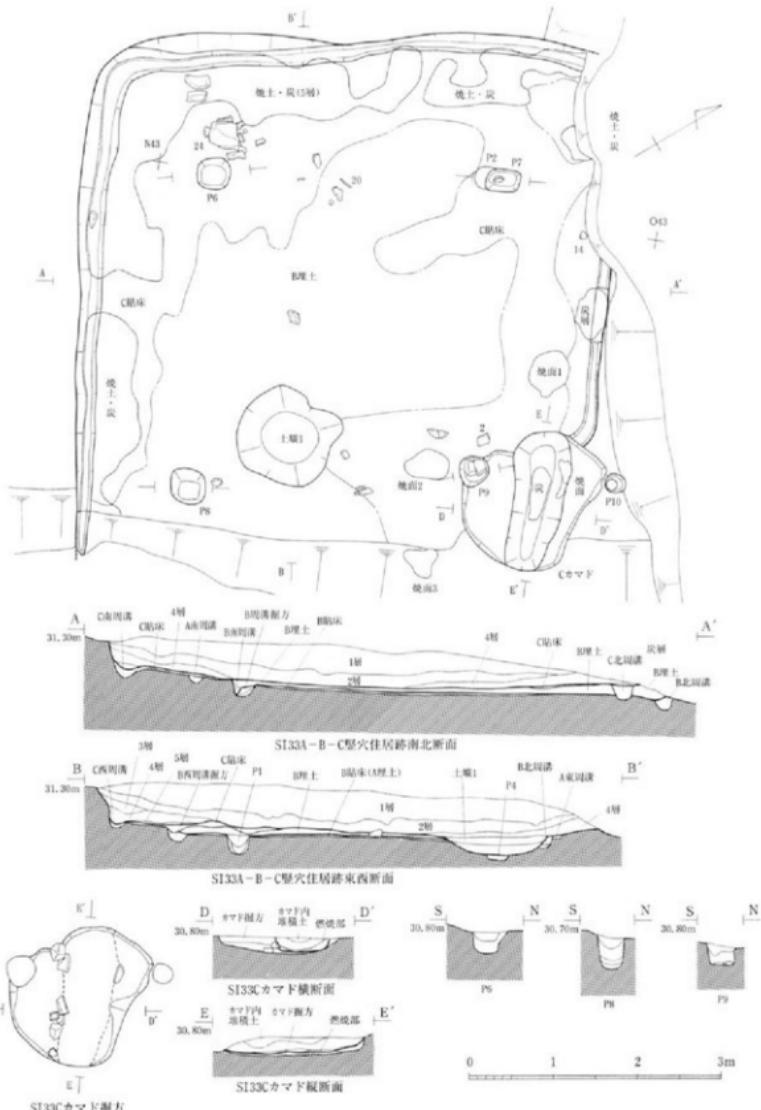
〔B主柱穴〕床面でP 1~P 4の柱穴を検出した。掘方はP 1柱穴が径27cmの円形で、深さ23cm、P 2柱穴が一辺27cmの隅丸方形で、深さ34cm、P 3柱穴が一辺25cmの隅丸正方形で、深さ37cm、P 4柱穴が径25cmの円形で、推定深さ25cm（上部を土壤1に壊され、5cm残存）である。P 1・3・4柱穴は柱が抜き取られ、P 2柱穴は柱が切り取られ、径10cmの円形の柱痕跡を検出した。層位的にはP 1~P 3柱穴の柱抜取穴がB貼床より新しく、B埋土に覆われるので、P 1~P 3柱穴はS I 33B堅穴住居跡に伴う。P 4柱穴は上部をS I 33C堅穴住居跡に伴う土壤1に壊されているので、S I 33B堅穴住居跡に伴う。これらP 1~P 4柱穴を結ぶといびつな四辺形となるが、ほぼ対角線上にあるので、S I 33B堅穴住居跡に伴う主柱穴とみられる。P 5もS I 33B堅穴住居跡に伴うとみられるが、深さ7cmと浅い。



第68図 SI 33A・B・C整穴住居跡平面図 (1/60)



第69図 SI 33A・B整穴住居跡平面図・断面図 (1/60)



第70図 S I 33C 整穴住居跡平面図、S I 33A・B・C 整穴住居跡断面図 (1/60)

剖面跡	層	特徴
SI33A	A面溝	に深い黄褐色(10YR4/3)土。黄褐色(10YR5/6)上アロック、炭化物を多く含む。しまりややあり。粘性なし。人為堆積土。
	B固結体	に深い黄褐色(10YR5/0)土。灰褐色(10YR4/2)土とプロックを全体的に含む。炭化物少含む。しまり強く。粘性あり。人為堆積土。
	B固結掘方	灰褐色(10YR4/2)～明黃褐色(10YR4/8)土。しまり、粘性あり。下部は一部グリサイト。人為堆積土。
	B固積溝	に浅黄褐色(10YR4/2)土。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。人為堆積の一部で壁材の抜取りの可能性ある箇所を確認。
	B上积水掘方	黄褐色(10YR5/6)土。厚4cm程の層を多く含む。しまりあり。人為堆積土。
SI33B	B上积水掘立柱穴六枚	底面に10YR4/4土・黄褐色(10YR5/6)土。厚4cm程の層を含み。しまりがよい。人為堆積土。
	B上积水掘立柱	底面に10YR4/4土。しまりあまりない。
	Bカド内埋積土	赤褐色(2.5YR4/8)土。土壤を多量に含む。
	Bカド内埋積土上	上層に分かれ。下部は塊状を多量に含む。上層は薄い成層。
	Bカド前炭層	灰褐色(10YR4/2)土。しまりあり。人為堆積土。
	埋土上(C层)	褐褐色(10YR5/6)土。炭化物、地面上アロックを多く含む。しまりややあり。粘性なし。人為堆積土。
	C側方	黄褐色(10YR4/2)土。炭化物上に深い黄褐色(10YR4/3)土とアロックを不均一に含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	C側溝	C側方と一連に残されている。
	C上积水掘方	明黄褐色(10YR6/0)土。厚4cm程の層を多く含む。しまりがよい。人為堆積土。
	C上积水掘立柱六枚	に深い黄褐色(10YR4/3)～明黃褐色(10YR4/8)土。炭化物を含む。しまりあまりない。自然堆積土。
	C上积水掘立柱	黄褐色(10YR5/6)土。炭化物を含む。しまりあまりない。自然堆積土。
	Cカド内埋積部	2層に分られる。下部には深い黄褐色(10YR5/6)土で明黃褐色土アロック・炭化物を少量含む。上部は褐褐色(10YR4/6)土で、明黃褐色土アロック・炭化物を少含む。
	Cカド燃焼部	赤褐色(2.5YR4/8)土。塊状を多量に含む。
SI33C	Cカド内埋積土上	自然堆積部で、3層に分られる。下部は薄い炭化物層で、その上は埋土柱・炭化物をやや多く含む黒褐色(10YR3/2)土。上部は灰褐色(10YR3/2)土で、明黄褐色土アロックが多く、炭化物・炭化土を少し含む。
	上層	上層には分かれ。下部は10YR5/6土上、厚3mmの地中上アロックを比較的多く含む。上部には深い黄褐色(10YR4/3)上で塊状を少量含む。埋土柱・炭化土・炭化物を少し含む。
	埋土柱上層	埋土柱上層(10YR4/3土)。厚3mmの地中上アロックをやや多く。炭化物・埋土柱を少し含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土。
	埋土柱2層	に深い黄褐色(10YR4/3)土。厚3mmの地中上アロックをやや多く。炭化物・埋土柱を少し含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土。
	埋土柱3層	比較的均質な黄褐色(10YR5/6)土。しまりあり。粘性なし。北・西壁際間に分布する崩落土。自然堆積土。
	埋土柱4層	に深い黄褐色(10YR4/3)土。厚3mmの地中上アロックを多く。埋土柱を少し含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	埋土柱5層	南・南西の壁際部に沿って分布する「床面崩れ」の塊土・根凝り。

S I 33 A・B・C 積穴住居跡土層一覧

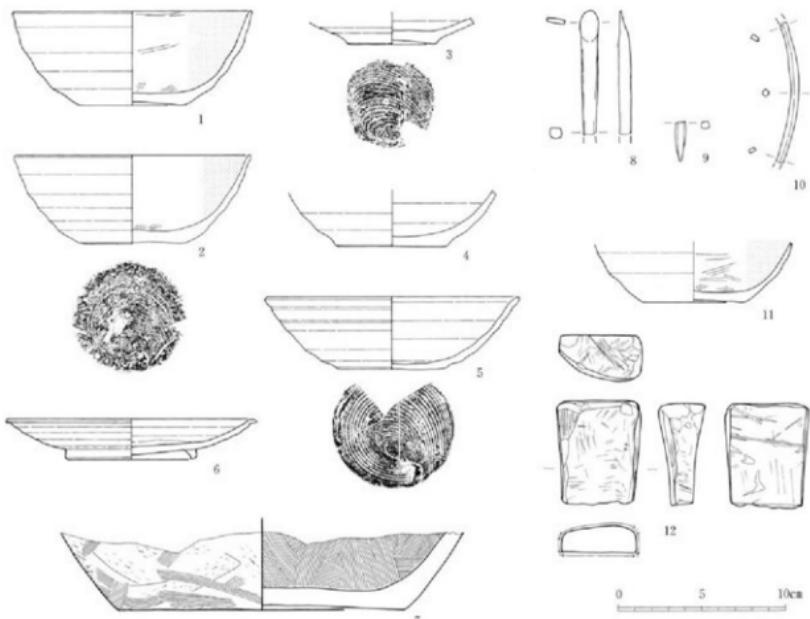
〔Bカマド〕 東辺の中央南寄りで、カマド燃焼部とカマド前炭層を検出した。これらはB埋土に覆われていたことから、S I 33 B 積穴住居跡に伴う。燃焼部は奥行き38cm、幅80cmで、中央がやや窪む。焼土が堆積し、被熱・赤変していた。カマドの両側壁・天井部・煙道は、S I 33 C 積穴住居跡に壊され、検出されなかった。カマドの向きは丘陵尾根の中軸線とほぼ平行し、丘陵斜面下側に付設されている。

〔B周溝〕 西辺と南辺の一部で、幅7~10cm、深さ10~15cmの壁材痕、幅20~25cmの周溝状となる壁材の掘方を検出した。壁材は抜き取られ、それ以外の各辺では幅15~30cm、深さ10~15cmの周溝状となり、四辺を巡っていた。南西隅はSI33C積穴住居跡に伴う土壌1に一部壊されている。また、南西隅から丘陵斜面下方に向けて、外延溝が約30cm伸びている。

〔Bカマド前炭層〕 カマド燃焼部を迂回するように、弧状となって東辺に接続していたとみられる幅15~25cm、深さ5cm前後の暗渠を検出した。人為的に埋め戻され、機能時にはやや窪んでおり、カマド前炭層が覆っていた。南西隅の連結箇所はS I 33 C 積穴住居跡に伴う土壌1に壊されている。

〔堆積土〕 S I 33 C 積穴住居の構築に伴い、人為的に埋められている。

〔出土遺物〕 構築時の遺物として、掘方・貼床からロクロ調整の土師器甕、須恵器壺（4）の破片が少數出土した。このうち須恵器壺破片（4）は底部が回転糸切り無調整のものである。機能時または廃絶時の遺物として、床面から残存率の高い須恵器壺1点（5）、鐵鏹1点（8）、不明鉄製品2点（9・10）の他、土師器壺・甕、須恵器壺・甕（7）・甕の破片、周溝から完形または残存率の高い土師器壺2点（1・2）の他、土師器壺・甕、須恵器壺（3）・甕、灰釉陶器皿（6）の破片、主柱穴の柱抜取穴から土師器壺・甕の破片、埋土から土師器壺（11）・甕、須恵器壺・高台壺・蓋・甕の破片、磁石（12）などが少數出土した。このうち土師器はいずれもロクロ調整のもので、土師器壺（1・2・11）と須恵器壺（3・5）は底部が回転糸切り無調整のもの、灰釉陶器皿（6）は黒錆90号窯式2型式の猿投窯製品である。



番号	種類	分類	部位	残存	特徴	測	写真	取扱
1	土器器	BII	底面	1/2	D径14.2cm、底径6.4cm、器高6.6cm、ロクロ調整。外側：底面削除し切欠痕。内面：ヘリミガキ→黒色处理。	28-1	015	
2	土器器	BII	底面	完形	D径14.2cm、底径6.4cm、器高6.6cm、ロクロ調整。外側：底面削除し切欠痕。内面：ヘリミガキ→黒色处理。	28-2	015	
3	土器器	DII	底面	破片	体下部～底面破片。底径5.4cm、外側：底面削除し切欠痕。底成前ヘラ記号「-」。著しく剥けむ。底成好。	28-7	015	
4	土器器	DII	側方	破片	底径6.6cm、外側：底面削除し切欠痕。内面：摩滅。底成不良。	28-8	015	
5	土器器	DII	床面	5/6	D径14.2cm、底径6.4cm、器高6.6cm、外側：底面削除し切欠痕。底成前ヘラ記号「-」。底成不良。	28-9	015	
6	灰陶陶器		周溝	1/2	D径15.0cm、高台8.7cm、高台d10.0cm、器高2.6cm、外側：体下部～底面削除～ヘラケツリ→定形化した三月酉高。内面：ヘリミガキ→黒色处理。	28-13	015	
7	漆器漆器	A	床面		破片、体下部～底面周溝。底径17.0cm、残存：体下部手持ヘラミエリ→ナメ。底部ナメ、変形が微弱。内面：ナメ。	28-10	015	
8	瓦		床面		破片、脚身～底面破片、變形式。底径長1.5cm、幅1.1cm、現存長2.4cm、底部断面7mm方形。	37-10	029	
9	不明鉄製品		床面		熱封または鉛錠などの破片。軸用素面×5mm方形。	38-12	029	
10	不明鉄製品		床面		熱封または鉛錠などの破片。軸用素面×5mm方形。	38-27	029	
11	土器器	BII	壁上		破片、脚身～底面破片。底径6.0cm、ロクロ調整。外側：底面削除し切欠痕。内面：ヘリミガキ→黒色处理。摩滅。	28-3	015	
12	鐵石		壁上		完形。無鉻粒状表面。直方体状。三面研磨・滑刷。底さ0.5cm、高さ6.0cm、厚さ2.8cm。	38-4	015	

第71図 S I 33B 積穴住居跡出土遺物

(S I 33C 積穴住居跡) (平面図: 第68~70図、断面図: 第70図、遺物: 第72~73図)

〔平面形・規模〕 平面形はほぼ隅丸正方形とみられ、規模は南北が西辺で6.1m以上、中央で約6.4m、東西が南辺で6.1m以上である。

〔方向〕 西辺でみると北東に約28°偏る。

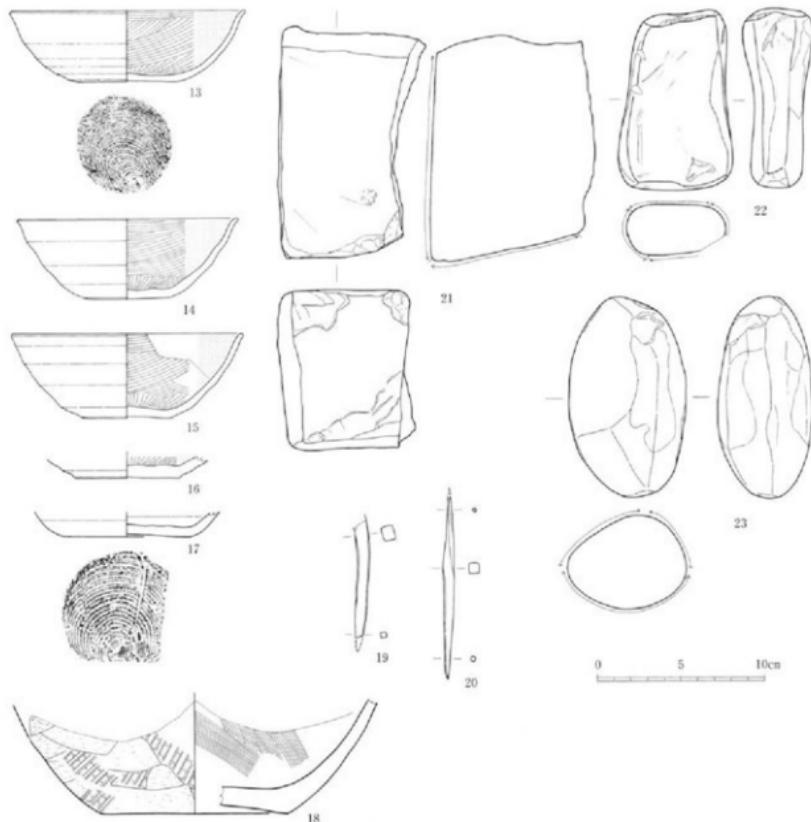
〔C床面〕 S I 33B 積穴住居跡の埋土、および拡張部分を中心とする貼床の上面を床面としている。

周溝に接した箇所と比べると、床面の中央は8 cmレベルが低く、中央がやや深んでいる(第70図断面A-A')。

〔壁〕 檜出面から床面までの壁の高さは、残りのよい南西隅で53cm、西辺中央で50cm前後、残りのやや悪い北西隅で26cm、残りの悪い南東隅で9cmある。北辺では壁が削平されてない。壁は西辺

中央で約100°、南辺中央で約110°の傾きでやや斜めに立ち上がる。また、西辺の南半では壁の上部が廃絶後に崩れている。

〔C主柱穴〕本竪穴住居の対角線上の位置で4箇所の主柱穴を検出した。P 6 南西主柱穴は一辺約



番号	種類	分類	網 疮	残存	特徴	写真	収納
13	土器蓋環	BB	北側下柱穴 後側起火穴	完形	直径14.0cm、底径6.0cm、器高1.6cm、ロクロ調査。外面：底部斜板赤切り無調査。内面：拔射状ヘラミガキ→黒色麁理。	28-4	013
14	土器蓋环	BB	未面	7.9	直径13.2cm、底径5.4cm、器高4.8cm、ロクロ調査。外面：底部斜板赤切り無調査。内面：ヘラミガキ→黒色麁理。	28-5	013
15	土器蓋环	BB	未面	1	直径13.8cm、底径5.4cm、器高5.1cm、ロクロ調査。外面：底部斜板赤切り無調査。内面：ヘラミガキ→黒色麁理。	28-6	013
16	土器蓋环	BB	埋柱上土槽	破片	底径6.2cm、外面：底部斜板赤切り無調査。内面：拔射状ヘラミガキ→黒色麁理。		013
17	第五回环	DI	上端	破片	底径6.6cm、外面：底部斜板赤切り無調査。内面：「煙道」。	29-12	013
18	第五回环	A	カクド内	破片	体下部一定距離片。底径11.0cm、外面：体下部一定距离口→手持ちヘラケアリ。底部ナデ、底部が粗面。内面：ナデ。	29-11	013
19	不明鉄製品		未面	鉄片	鉄片または鉄鋸などの片か、鉄削断面9mm×5mm。		029
20	鉄製網目具		未面	完形	單式のマスク、両端が丸り、一端がわざかに尖刺。底径11.0cm、輪郭断面9mm×5mm。	37-28	029
21	砾石		未面	砂岩質	直方体形状。三面研磨・削痕。長さ13.0cm、幅8.7cm、厚さ9.9cm。	39-3	035
22	砾石		埋柱上土槽	完形	砂岩質砂岩質。丸味のある直方体。各面研磨・削痕。去裏両面の中央深む。長さ10.8cm、幅6.8cm、厚さ4.3cm。		035
23	砾石		上端	完形	砂岩質。平面・断面橋円形。球状。長さ12.1cm、幅7.6cm、厚さ5.5cm。		035

第72図 S 133C 竪穴住居跡出土遺物(1)



第73図 S I 33C 穴立住居跡出土遺物(2)

40cmの隅丸正方形で深さ25cm、P 7 北西主柱穴は長辺40cm、短辺27cmの長方形で深さ24cm、P 8 南東主柱穴は一辺約40cmの隅丸正方形で深さ35cm、P 9 北東主柱穴は一辺約35cmの重んだ隅丸方形で深さ20cmある。P 9 北東主柱穴は底面に粘板岩板状礫片2点を敷いて礎板としている。いずれも廃絶時に柱が抜き取られ、柱痕跡を検出できなかった。

柱穴の中心でみると、柱間寸法はP 6 南西主柱穴-P 8 南西主柱穴間が約3.8mと他よりやや大きく、P 7 北西主柱穴-P 9 北東主柱穴間、P 6 南西主柱穴-P 7 北西主柱穴間、P 8 南東主柱穴-P 9 北東主柱穴間はいずれも約3.5mである。また、各柱穴を結んだ線は重んだ四辺形となるが、削平されて未検出の東辺を除けば、いずれも各辺と約1.5m離れてほぼ平行している。

〔その他の柱穴〕カマドを挟んでP 9 北東主柱穴と対になる屋外の位置で、P 10 柱穴を検出した。P 10 柱穴は掘方が径24cmのほぼ円形で、径14cmの円形の柱痕跡を確認した。

〔Cカマド〕北東隅でカマドの燃焼部、奥壁、掘方、カマド内堆積土を検出した。カマド側壁は上部を大きく削平され、燃焼部と接した内側だけが高さ約15cm残っている。煙道の有無は不明である。残りが悪いが、北辺の北東隅付近にカマドが付設されていたとみられる。カマドの向きは丘陵尾根の中軸線とほぼ平行し、丘陵斜面下側にある。燃焼部は奥行き約70cm、幅60cmで、焼土・炭が堆積し、被熱・赤変していた。奥壁は高さ約18cmあり、斜めになだらかに立ち上がる。カマドの掘方は平面形が径約1.7mの不整形で、深さ20cmある。そして、粘板岩板状礫片を入れた黄褐色土でこの掘方を埋め戻してから、掘方の中央や右寄りに、長さ約1.6m、幅60cmの長楕円形の掘方を掘り直して、奥壁-燃焼部-焚き口としている。カマド両脇に設置されたP 9 北東主柱穴とP 10 柱穴、及びカマド掘方からみて、カマド両側壁外側の幅は1.6m程と考えられる。また、長楕円形の掘方の左壁が焼けており、この位置からみてカマド左側壁の長さは1.3m程であったと考えられる。

〔C周溝〕西辺、南辺、及び北辺の一部で幅20~35cm、深さ10cm前後の周溝を検出した。東辺は削平されて残っていないが、後述の焼面3に隣接した位置にあったと考えられる。周溝は人為的に埋め戻され、わずか埋んだ状態で機能しておらず、その上面に焼土・炭を多く含む堆積土5層が堆積していた。

〔土壤〕南東部のP8南東主柱穴の近くで、平面形が径約1.3mの不整円形で、深さ20cmの土壤1を検出した。

〔焼面〕カマドを取り囲むようにして、床面上の3箇所で焼面を検出した。焼面1は径約50cmの不整円形、焼面2は長径50cm、短径35cmの楕円形、焼面3は一辺45cmの三角形状である。

〔堆積土〕5層に分けられ、自然堆積層とみられる。

〔出土遺物〕出土遺物は破片を中心にやや多く、床面から残存率の高い土師器環2点(14・15)、鉄製刺突具1点(20)、不明鉄製品1点(19)、砥石2点(21・24)の他、土師器環・甕・須恵器環・甕の破片、北西主柱穴柱抜取穴から完形の土師器環1点(13)、カマド内から土師器環・須恵器甕(18)の破片、土壤1から土師器環・甕・須恵器環(17)・高台環・甕の破片、磨石1点(23)、堆積土から土師器環(16)・高台環・甕・須恵器環・高台環・蓋・甕・壺の破片、砥石1点(22)などが出土した。このうち土師器はいずれもロクロ調整で、土師器環(13~16)、須恵器環(17)は底部が回転糸切り無調整である。大型の置き砥石(24)はP6南西主柱穴の脇、砥石(21)はカマド手前の床面から出土した。

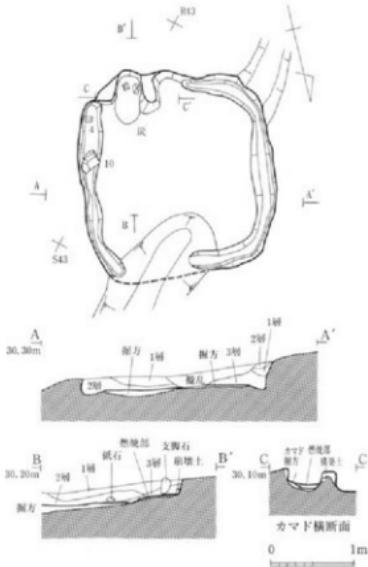
〔S153竪穴住居跡〕(平面図・断面図:第74図、遺物:第75図、図版15-2)

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上の北寄り、標高30.0m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。北辺が擾乱によって床面下まで大きく削平されている。SI34竪穴住居跡と近接する。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸正方形で、規模は南北が西辺で約2.2m、東西が南辺で約2.2mと小さい。

〔方向〕東辺でみると北で西に約7°偏る。



層位	特徴
根方	褐色7.5YR5/6-7.5Y12/4上、深1~5cmの粘板岩礫片を多量に含む。しまり・粘性あり。人為堆積土。
カマド根方	褐色7.5YR5/6-7.5Y12/4上、深1~5cmの粘板岩礫片を多量に含む。しまり・粘性あり。人為堆積土。
カマド横断土	褐色7.5YR5/6上、深4cm以下の粘板岩礫片を多く含む。しまり・粘性あり。人為堆積土。
カマド燃焼部	褐色7.5YR5/6上、土を多量に含む。
カマド崩壊部	褐色7.5YR5/6上、しまり・粘性あり。
理上1層	黒褐色7.5YR2/2上、深0.5~1cmの粘板岩風化礫片、施上材、瓦片を多量に含む。しまりよい。人為堆積土。
理上2層	褐褐色7.5YR2/2上、深1~2cmの粘板岩風化礫片を多量に含む。しまりよい。人為堆積土。
理上3層	褐褐色7.5YR2/2上、深5cm程の粘板岩風化礫片、瓦片を少量含む。しまりよい。人為堆積土。

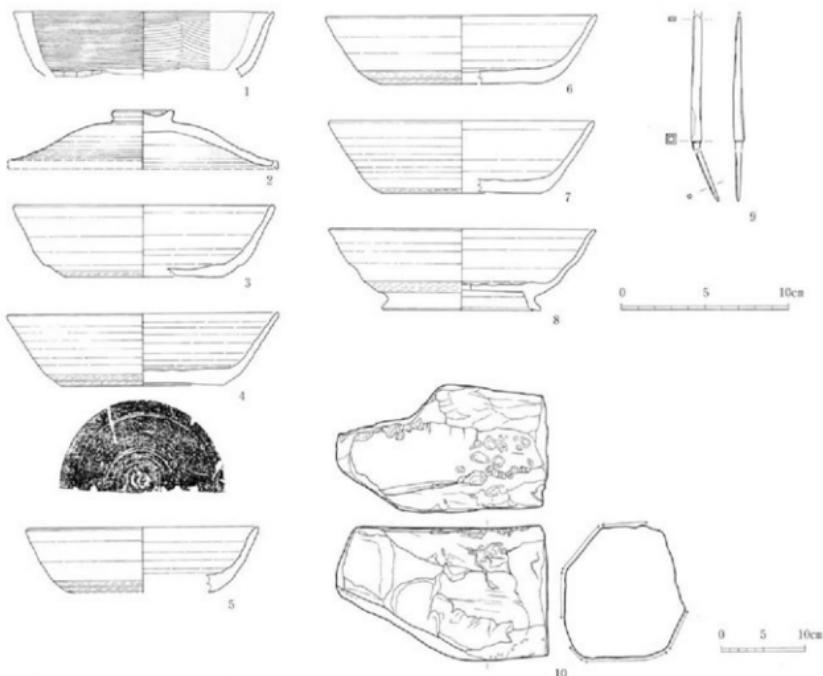
第74図 S153住居跡平面図・断面図 (1/60)

〔床面〕床面はほぼ平坦で、ほぼ全面に広がる掘方埋土上面を床面とする。

〔壁〕検出面から床面までの壁の高さは、残りのよい南西隅で30~40cm、残りの悪い北西隅で16cm前後、東辺で10cm以下である。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕丘陵尾根に直交せず、等高線に沿うように、南辺の南東隅に寄せて付設されている。廃絶時にカマド天井部が壊されていたが、カマドの側壁、奥壁、燃焼部、掘方が残っていた。周辺の残存状況からみて、煙道は長く延びていないものとみられる。左側壁は長さ32cmで、高さは奥で20cm、焚き口で10cm、右側壁は長さ45cmで、高さは奥で20cm、焚き口で15cm残存していた。



番号	種類	分類	層位	口径	底径	高さ	残存	特徴	備考	写真枚数
1	土器窯	A1	埋土上層	15.5		1/4	口縁一休下部断片、赤ロクロ調。外面：口縁ヨコナギ、体下部手持ちハラケズリ。内面ヘラミガキ、黒色鉢底。		022	
2	土器窯		南西隅		2.5	2/5	つまみ形容～底部破片。口縁欠損。口径約16.2cm。高さ約5.6cm。クロ調～両面褐色處理。施成不良。	33-21	022	
3	土器窯	A3	埋土上層	15.6	9.1	4.3	1/3	外面：底部切欠し不明一体下部～底部持把ハラケズリ。施成良好。	022	
4	土器窯	A3	埋土底面	16.2	9.6	4.3	1/2	外面：底部切欠し不明一体下部～底部持把ハラケズリ。施成不良。	33-20	022
5	土器窯	A3	埋土	13.8	9.0	3.9	3/4	外面：底部切欠し不明一体下部～底部持把ハラケズリ。施成良好。	022	
6	土器窯	A3	埋土上層	16.2	9.6	4.1	1/2	外面：底部切欠し不明一体下部～底部持把ハラケズリ。施成やや不良。	33-19	022
7	土器窯	A3	埋土上層	15.8	9.1	4.4	1/2	外面：底部切欠し不明一体下部～底部持把ハラケズリ。焼成良好。内面に火ழ�断。	022	
8	土器窯高台窯	A2	埋土上層	16.0	4.9	1/2	高台径4cm。外縁：底部切欠し不明～体下部～底部持把ハラケズリ～柱高台～内ジロクロナヂ。施成不良。	33-22	022	
9	鉢		埋土				破片	裏被：一部破片。腹身大きめ欠けるが一部残存する。蓋装式か。底被に両開。現存長11.3cm。底被断面	37-12	031
10	礫石		埋土				完形	砂岩製。山形研磨・削成。中輪。長さ25.3cm。幅14.3cm。厚さ14.5cm。	39-3	036

第75図 S-153竪穴住居跡出土遺物

両側壁外面の幅は下部で80cmある。両側壁の内側は被熱のため著しく赤色硬化していた。カマドの左側壁は地山削り出しで、右側壁は黄褐色粘質土を用いている。焚き口は下部幅32cmで、高さは15cm以上である。燃焼部は奥行き44cm、幅30cmで、奥壁から焚き口にかけてわずかに傾斜し、焼土が堆積し、被熱・赤変していた。奥壁は高さ18cmで、ほぼ直に立ち上がる。

カマド奥壁から13cm手前、2対の支脚石が立てられていた。支脚石は燃焼部から約20cmほど直に立ち上がる。この付近で、天井部の高さは少なくとも20cmあったことが知られる。支脚石は長さ約20cm、幅13cm、厚さ7cmと長さ約20cm、幅10cm、厚さ7cmの枯板岩板状礫片を用いている。
〔周溝〕各辺で幅15~25cm、深さ6~10cmの周溝を検出した。周溝はカマドの両側壁の際で途切れ、カマドの下を暗渠となって通らない。堆積状況からみて、機能時には開渠であったと考えられる。
〔堆積土〕3層に分けられ、廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕周溝から土師器壺・蓋(2)・甕、須恵器壺(4・5)の破片、大型の砥石(10)、埋土から土師器壺(1)・甕、須恵器壺(3・6・7)・高台壺(8)・蓋・甕、鉄鎌(9)の破片などが少數出土した。いずれも廃絶時の遺物である。このうち土師器蓋(2)は須恵器蓋を模倣したもので、ロクロ調整後に両面黒色処理しており、特異である。これ以外の土師器壺(1)・甕はいずれも非ロクロ調整である。須恵器壺(3~7)・高台壺(8)は体下部へ底部を回転ヘラケズリしている。

【S I 34堅穴住居跡】(平面図:第76・77図、断面図:第78図、遺物:第79~88図、図版16・17)

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上の北寄り、標高29.5m付近に位置する。

〔重複〕3回建て直されている。古いものから順にS I 34A堅穴住居跡→S I 34B堅穴住居跡→S I 34C堅穴住居跡→S I 34D堅穴住居跡とする。S I 34B堅穴住居跡、S I 34C堅穴住居跡、S I 34D堅穴住居跡は東辺、北辺、南辺を踏襲しながら西へ拡張している。S I 34D堅穴住居跡は火災にあって焼失し、再建されていない。南東隅は肥溜めと思われる現代の攪乱で壊されている。

【S I 34A堅穴住居跡】(平面図:第76図、断面図:第78図)

〔平面形・規模〕北西部と南西部、掘方がわずかに残るのみで、残りが悪い。平面形は方形とみられ、規模は南北が西辺で約3.5m、東西はA掘方の範囲からみて約4.1mと考えられる。

〔方向〕西辺はほぼ北を向く。

〔壁〕検出面から床面までの壁の高さは、残りのよい北西隅で36cmである。他は拡張されたS I 34B・C・D堅穴住居跡に大きく壊され、残っていない。

〔床面〕拡張されたS I 34B・C・D堅穴住居跡に大きく壊され、北西隅にほんのわずか残るのみである。S I 34D堅穴住居跡のD貼床面の下層に掘方がある。B・C・D周溝、C土壤1・2、D土壤がこの掘方よりも新しいことから、この掘方はS I 34A堅穴住居跡の掘方とみられる。

〔主柱穴〕残存状況からみて、主柱穴はないと考えられる。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔A周溝〕北西隅で幅10~18cm、深さ6~9cmの周溝を検出した。周溝は人為的に埋め戻され、その上に薄く生活層が堆積している。機能時には暗渠であったと考えられる。

〔堆積土〕S I 34B堅穴住居の構築に伴い、人為的に埋められている。

〔出土遺物〕 挖方から非クロ調整の土師器壺（1）・甕（2）、須恵器壺・高台壺・甕の破片が少數出土した。このうち土師器壺（1）は丸底で、須恵器壺・高台壺は体下部～底部が回転ヘラケズリされている。

〔S I 34 B 竪穴住居跡〕（平面図：第76図、断面図：第78図）

〔平面形・規模〕 平面形は方形とみられ、規模は南北が西辺で約3.7m、東西が約3.2mと推定される。

〔方向〕 西辺でみると北で西に約14°偏る。

〔壁〕 床面レベルを同じくして S I 34 C 竪穴住居跡に拡張されているため、壁の高さはない。また、

S I 34 A 竪穴住居跡と床面レベルをほぼ同じくして位置を東にずらしているため、西辺は S I 34 A 竪穴住居跡の埋土を壁としていたものとみられる。

〔B床面〕 床面レベルは S I 34 A 竪穴住居跡とはほぼ同じとみられ、S I 34 A 竪穴住居跡の貼床を床面としていたものと考えられる。

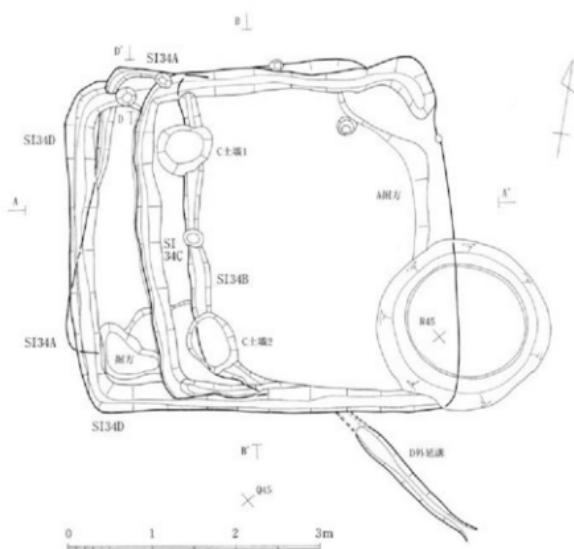
〔主柱穴〕 残存状況からみて、主柱穴はないと考えられる。

〔カマド〕 カマドの位置は不明である。

〔B周溝〕 西辺と南西隅で、幅16～24cm、深さ5cmの周溝を検出した。SI34C竪穴住居跡に拡張する際に人為的に埋められている。

〔堆積土〕 人為的に埋められた周溝以外に、堆積土は残っていない。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。



第76図 S I 34 A・B・C・D 竪穴住居跡平面図

《S I 34 C 壁穴住居跡》(平面図: 第76図、断面図: 第78図)

〔平面形・規模〕 平面形は方形とみられ、規模は南北が西辺で約3.9m、東西が約3.8mと推定される。

床面レベルを同じくして S I 34 B 壁穴住居跡を西に約60cm拡張している。

〔方向〕 西辺でみると北で西に約13°偏る。

〔壁〕 床面レベルを同じくして S I 34 D 壁穴住居跡に拡張されているため、壁の高さはない。

〔C床面〕 床面レベルは S I 34 B 壁穴住居跡とほぼ同じとみられ、S I 34 B 壁穴住居跡の床面を踏製していたものと考えられる。

〔主柱穴〕 主柱穴の有無は不明確である。

〔カマド〕 カマドの位置は不明である。

〔C周溝〕 西辺、南東隅で幅25cm前後、深さ10cm前後の周溝を検出した。西辺は奥に抉るように掘り込まれている。S I 34 D 壁穴住居跡への拡張に伴い、人為的に埋められている。北辺、南辺は S I 34 D 壁穴住居跡とほぼ一致するとみられる。

〔C土壤〕 西辺際の西周溝に沿って土壤1、土壤2を検出した。土壤1は長径70cm、短径58cmの不整橢円形で深さ15cm、土壤2は長径70cm、短径57cmの楕円形で深さ6cmある。S I 34 D 壁穴住居跡への拡張に伴い、人為的に埋められている。対角線上の位置にあり、主柱穴の抜取穴の可能性もあるが、大きく浅いため土壤と考えた。

〔堆積土〕 S I 34 D 壁穴住居跡への拡張に伴い、周溝と土壤1・2が人為的に埋められている。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

《S I 34 D 壁穴住居跡》(平面図: 第76図、断面図: 第78図、遺物: 第79~88図)

〔焼絶の原因〕 火災による焼失。

〔平面形・規模〕 平面形はほぼ正方形で、規模は南北が西辺で4.0m、東西が北辺で4.3mである。

〔方向〕 西辺でみると北で西に約13°偏る。

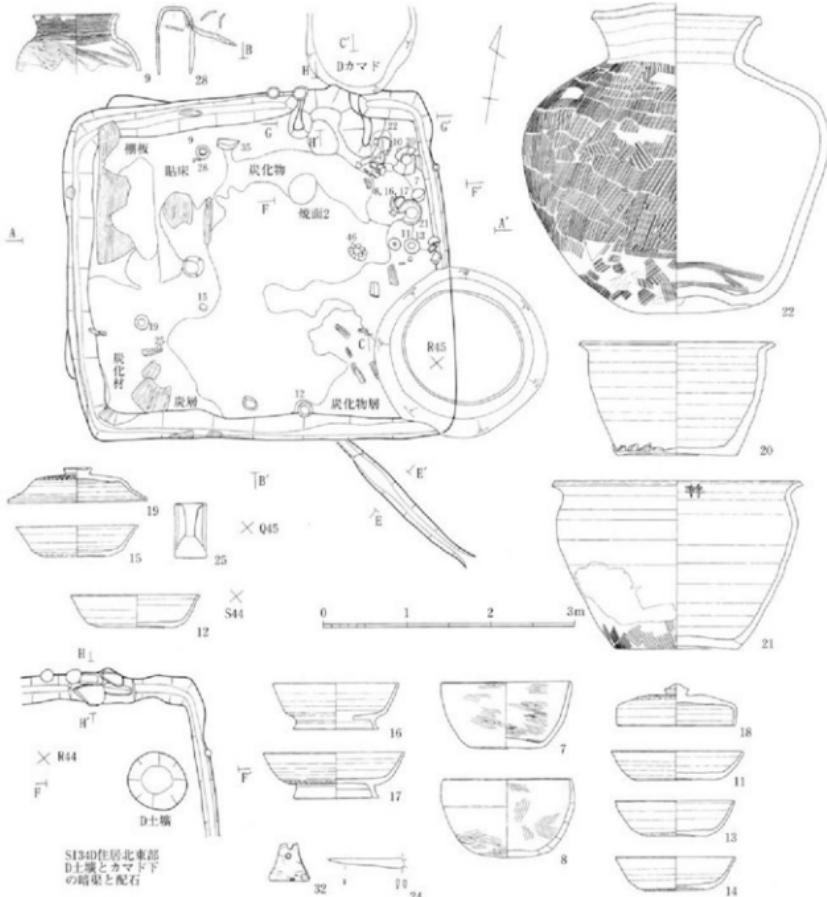
〔壁〕 検出面から床面までの壁の高さは、最も残りのよい西辺中央で56cmあり、約105°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。北辺では30cm前後、南辺では20cm前後あり、ほぼ直に立ち上がる。残りの悪い東辺では8cm以下である。

〔D床面〕 ほぼ全面に貼床され、その上面を床面としている。床面はほぼ平坦だが、斜面上方にあたる西側から下方にあたる東側に向けてやや傾斜する。西周溝と東周溝では16cmのレベル差がある(第78図断面A-A')。これに対し、南北方向のレベル差はさほどない。西辺と平行するように、北西部床面の上に長さ1.7m、幅45cm、厚さ2cmの炭化した板材(クリ材)があった(付章1)。脆弱で取り上げることができなかった。西辺との位置関係からみて、床から高い位置に床と平行に設置されていた棚板が焼け落ちたものと考えられる。北西部・南東部を中心に床面上には炭化材が14点あった。火災住居にも関わらず、床面上には薄炭層があるものの炭化材は少なかった。

〔主柱穴〕 主柱穴は認められない。コナラ節、クヌギ節、ケヤキ、クリ、ムクノキ近似種などがある(付章1)。

〔Dカマド〕 北辺の中央から約90cm東寄りに付設されている。カマドの天井部は崩壊し、カマドの

上部も削平されていたが、カマドの両側壁の下部、奥壁、燃焼部が残されていた。また、カマドの北に接して大きな攪乱があったが、それに壊されていない箇所からみると、煙道は長く延びてはいないと判断される。左側壁は長さ58cm、高さは6cm、右左側壁は長さ75cm、高さは6cm残存していた。両側壁外面の幅は下部で1.15mある。カマド両側壁はにぶい黄褐色土を用いている。燃焼部は奥行き55cm、幅40cm、奥壁高18cmで、奥壁から焼き口にかけてなだらかに傾斜し、焼土・炭が堆積し、被熱・赤変していた。燃焼部の下にはカマド掘方と暗渠があった。暗渠の掘方は幅27cm、深さ10cmで、カマド両側壁外側の周溝へと続いていた。暗渠・掘方は人為的に埋め戻され、その上部に長さ27~38cm、幅12~25cm、厚さ4~6cmの粘板岩板状礫片4点を据えてさらに整地し、燃焼部としていた。

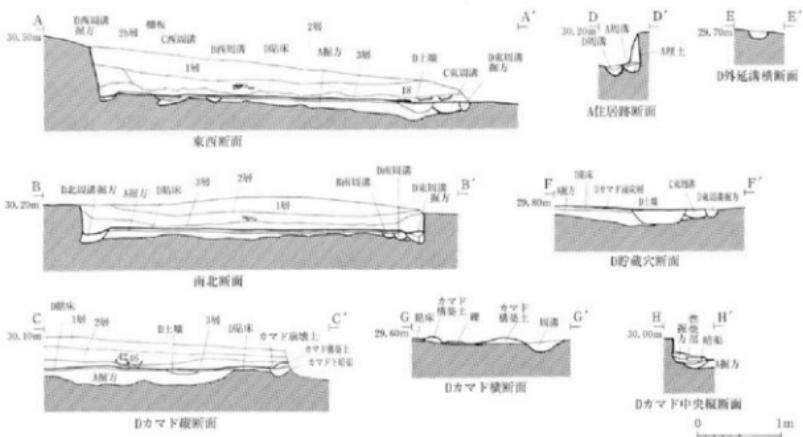


第77図 S134D整穴住居跡平面図（1/60）と床面の遺物出土状況

〔D周溝〕各辺で周溝を検出した。周溝の掘方は北・西・南周溝が幅25~35cm、深さ10~16cmで、奥に抉り込むように掘り底められた箇所もあった。東周溝は幅18cmと他辺よりも狭い。各辺の周溝は深さの半分程度が人為的に埋め戻され、火災時にはやや疊んだ半暗渠状態であった。

〔D外延溝〕南辺中央の80cm東寄りの位置から、斜面下方に向けて斜めに幅15~25cmの外延溝が長さ2.2m延びていた。外延溝の入り口は、南辺の側壁から斜めに削り貫かれ、長さ32cmにわたってトンネル式で、厚さ2cmの天井部が残っていた。この箇所で深さ15cmあり、以下は上部が削平され、次第に浅くなっていた。

〔床下土壤〕カマド右手前の床面下から土壤が1基検出された。平面形は径70cmの円形で、深さ15cmある。火災前に人為的に埋め戻され、その上に土師器碗1点(8)、須恵器高台坏2点(16・17)、



区分群	解説	断面図	
		左	右
S334A	A傾方	明赤褐色2.5YR5/0地山上と粘板岩風化礫小粒を多量に含む褐色7.5YR4/4土に混じり合う人為堆土。	
	A混構造	2層に分かれる。外側は明赤褐色7.5YR4/4土で、僅1cm以下の粘板岩風化礫を多く含む。内側は明赤褐色2.5YR5/0土に褐色土ブロックをわずか含む。しまりあり。粘性なし。人為堆土。	
	A生垣網	褐色2.5YR4/4土上、僅3cm以下の粘板岩風化礫片を含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積。	
S334B	A埋土	褐色2.5YR4/4土上、僅3cm以下の粘板岩風化礫片を多く含み、僅5mm以下の炭化物を含む。しまりあり。粘性なし。人為堆土。	
	B堆溝	褐色2.5YR4/4土上、僅3cm以下の粘板岩風化礫片を多く含む。炭化物をわずかに含む。人為堆積。	
S334C	C上礎	にまぐれ赤褐色7.5YR4/0土、僅3cm以下の粘板岩風化礫片を多く含む。炭化物をわずかに含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積。	
S334C	C下礎	にまぐれ赤褐色7.5YR4/0土、僅3cm以下の粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。人為堆積。	
S334C	C圍溝	褐色2.5YR4/4土上、僅3cm以下の粘板岩風化礫片を含む褐色7.5YR4/4土に混じり合う人為堆土。	
D軋跡	D軋跡	明赤褐色2.5YR5/0地山上と粘板岩風化礫小粒を含む褐色7.5YR4/4土に混じり合う人為堆土。	
	Dカマド縁堀	褐色2.5YR4/4土上、しまりあり。人為堆土。	
Dカマド掘方	Dカマド掘方	2層に分かれる。外側は2.5YR5/0土で、僅1~2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。カマド下暗渠の土に緩慢な粘板岩礫を散き、これらの土で人為的に埋められて堆積する。	
Dカマド壁裏	Dカマド壁裏	にまぐれ褐色7.5YR5/0土。地山上土ブロックを多く、炭化物・焼土を少し含む。しまりあり。粘性ややあり。人為堆積。	
Dカマド壁地部	Dカマド壁地部	赤褐色2.5YR4/4土上、焼土を多量に含む。	
Dカマド崩壊土	Dカマド崩壊土	にまぐれ褐色7.5YR5/0土。炭化物・焼土をわずかに含む。しまりあまりない。粘性なし。自然堆積。	
D周溝	D周溝	しまるのみ人為堆積土で、3層に分かれる。1層が褐色7.5YR4/4土上、2層が褐色土をわざかに含む明赤褐色2.5YR5/0地山上、3層が暗・焼土層を含む褐色7.5YR4/4土。	
D外延溝	D外延溝	褐色2.5YR4/4土上、僅3cmの粘板岩風化礫片、黄褐色地帯粘土ブロックを多く含む。人為堆積。	
D上礎	D上礎	暗赤褐色GYR5/0土上、僅2~3cmの粘板岩風化礫片、僅1~4cmの地帯土ブロックを多く含む。上面にはカマド前構造と完形の須恵器・鉢があり、火災時にはすべてに人為的に埋められた。	
堆積1.1層	堆積1.1層	褐色2.5YR4/4土上、僅5mmの粘板岩風化礫をやや多く含む。しまり・粘性なし。自然堆積。	
堆積1.2層	堆積1.2層	褐色2.5YR4/4土上、僅0.5~1cmの粘板岩風化礫片、僅5mmの炭化物・焼土を多量に含む。しまり・粘性なし。自然堆積。	
堆積1.2b弱	堆積1.2b弱	褐色2.5YR4/4土上、僅2~3cmの明赤褐色7.5YR5/0粘質土上に褐色土、5mmの炭化物・焼土を多量に含む。しまり・粘性なし。西に壁際で分布する自然堆積土。表面は褐色GYR5/0土。因に焼き残ったもどろき地。焼土、炭化物を多量に含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土で、屋根に置かれていた薪が火炎にあって焼け残ったもどろき。	
堆積土3層	堆積土3層	上面に土器を発見した箇所所で、因に焼き残ったもどろき地。焼土、炭化物を多量に含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土で、屋根に置かれていた薪が火炎にあって焼け残ったもどろき。	

第78図 S-134A・B・C・D 穴室住居跡断面図 (1/60)

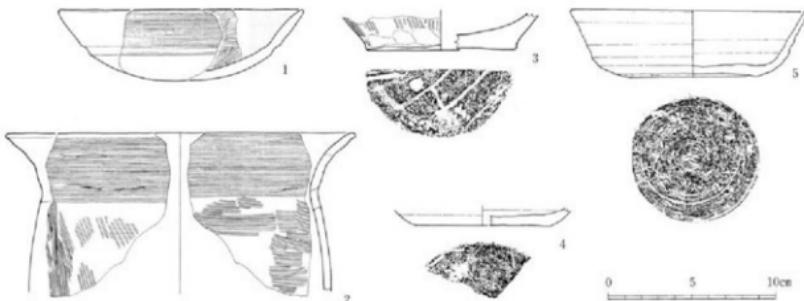
須恵器鉢 1 点 (21) が置かれていた。貯蔵穴と呼ばれることが多い床面の土壌と位置・形態が類似するが、機能的には埋め戻されていたことがわかる。

〔焼面〕 床面上に 2 箇所の焼面がある。北東部の焼面 1 は長さ約 1.2m、幅約 70cm で、焼け落ちた棚板に隣接する。焼面 2 は長径 40cm、短径 30cm の梢円形で、カマド手前に位置する。いずれも赤色硬化が著しい。火災によるものとは考えにくく、機能時に何らかの焼成を行ったことによるものと思われる。

〔堆積土〕 堆積土は 1・2a・2b・3 層の 4 層に分かれ、いずれも本堅穴住居の火災以後の自然堆積層である。このうち最下層の堆積土 3 層は、拳大～人頭大の固く焼き縮まった焼土塊、焼土、炭片を多量に含む。床面全面に広がり、壁際に 20～25cm と最も厚く堆積し、中央部の厚い箇所では 12cm 前後あり、薄い箇所では 3cm と薄い。堆積土 3 層上面は起伏に富む。堆積土上 3 層の堆積は約 1.7m (4.3m × 4.0m × 0.1m) で、一般に埋蔵文化財関係で用いられているテンバコ (内法 54cm × 34cm × 15cm、0.0275m³) に換算すると約 67 箱分に相当する。拳大～人頭大の固く焼き縮まった焼土塊はスサを含まない。詳細は考察で論述するが、拳大～人頭大の固く焼き縮まった焼土塊が床面全面に分厚く広がり、上面が起伏をなすような堆積状況からみて、本堅穴住居跡の屋根に葺かれていた葺土が焼失して崩れ落ちたものと推定される。

〔床面の遺物出土状況〕 中央部での遺物の分布は希薄で、各辺の壁から幅約 1m の帯状の部分から遺物は主に出土していた。遺物は北東部に特に集中し、その他の箇所では散在的であり集中していなかった。

北東部では、カマドの右脇に須恵器鉢 1 点 (22)、須恵器鉢 1 点 (20) が置かれていた。その南側に置かれた須恵器鉢 1 点 (21) を中心に、3 枚重ねにされた土師器塊 (8)、須恵器高台坏 (16・17)、2 枚重ねにされた須恵器坏 (11・13)、須恵器短頸壺蓋 1 点 (18)、土師器塊 1 点 (7)、刀子



番号	種類	分類	直通	幅	径	底径	高さ	特征	特	備	写真	枚数
1	土師器坏	I A1	S I 34 A	腰方	14.6	14.3	破片	肩口クロ、丸底、外面：口縁ヨコナギ、底面、腹部ヘラケツリーナギ、内面：ヘラミガキ→黒色焼成。			014	
2	土師器塊	I A	S I 34 A	腰方	20.8	14.6	破片	肩口クロ、外面：口縁ヨコナギ、脚部ハケメ、内面：ヨコヨコナギ、脚部ハケメ。			014	
3	土師器塊	I A	S I 34 D	貯蔵穴	9.0	2.5	肩口クロ、外面：底部木葉模様、内面：ナギ、摩滅。				014	
4	須恵器坏	A1	S I 34 D	埴床	8.0	1/1	底面：ヘラモリ。				014	
5	須恵器塊	A3	S I 34 D	貯蔵穴	14.1	7.8	4.0	1	底面：切り返し不規・一体下部へ底面凹凸ヘラケズリ。	大薄直。	28-19	014

第79図 S I 34 A堅穴住居跡出土遺物、S I 34 D堅穴住居跡出土遺物(1)～火災前の遺物

1点(24)、提げ砥石1点(32)が置かれていた。北周溝際の中央西寄りでは、置き砥石1点(35)、土師器甕口縁～体上部破片を転用した器台1点(9)、馬具1点(28)が出土した。南西部では須恵器環1点(15)、須恵器蓋1点(19)、鉄斧1点(25)が出土した。南周溝中央際では須恵器環1点(12)が出土した。



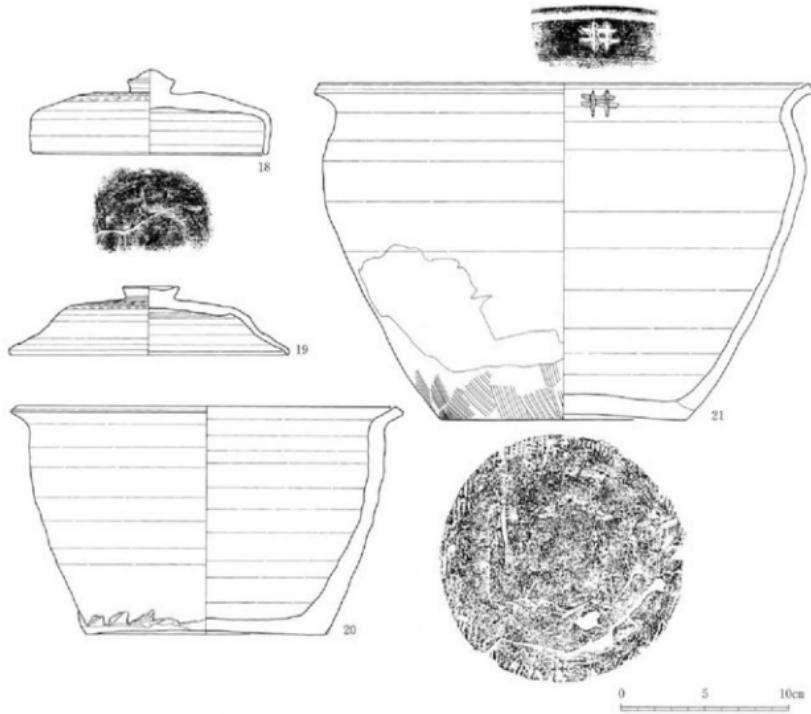
番号	種類	分類	別名	口径	腹深	高さ	残存	特徴	写真	収納
6	土師器環	I C1	外底深	13.6	8.8	4.9	1/4	井戸クロ。平底。外側：ヘラミガキ。内面：ヘラミガキ～黒色施釉。	28-14	014
7	土師器環	I B	底面	13.5	8.9	8.0	完形	井戸クロ。平底。外側：ヘラミガキ。内面：ヘラミガキ～黒色施釉。	28-15	014
8	土師器環	I A	底面	15.4	8.7	9.4	7/8	井戸クロ。丸底施釉。外側：ヘラミガキ。底縁斜段。内面：ヘラミガキ～黒色施釉。	28-16	014
9	土師器盤	I B2	底面	10.4				井戸クロ。外側：口縁ヨコナギ、脚下部ヘラナギ。脚部：ヘラミガキ。内面：口縁ヨコナギ、脚部ヘラナギ。器台に粘着。	28-17	014
10	土師器盤	I A	底面				1	井戸クロ。外側：脚部ナギ、倍オサム、底端ナギ。内面：ハケメ、ナギ。		014
11	須恵器環	A1	底面	15.8	9.4	3.5	完形	底部：ヘラ切切り。一次加熱を受けた。若物が全体的に焼れている。	29-20	014
12	須恵器環	A2	底面	15.3	8.7	3.9	1	底部：切り離し。不明。底部のみ回転ヘラカズリ。	29-21	014
13	須恵器環	A3	底面	14.2	7.2	4.3	完形	底部：切り離し。不明。一体下部～底端回転ヘラカズリ。画面に大難斑。	29-22	014
14	須恵器環	A3	底面	14.3	7.2	4.3	完形	底部：切り離し。不明。一体下部～底端回転ヘラカズリ。画面に大難斑。	29-23	014
15	須恵器環	A3	底面	14.6	7.5	3.7	1	底部：切り離し。不明。一体下部～底端回転ヘラカズリ。画面に大難斑。底部に燒成歯ヘラ骨舌「X」。	29-24	014
16	須恵器高台环	A1	底面	15.1		5.6	1/2	高台径10.2cm。外側：体下部～底部回転ヘラカズリ～窓合接合～再びロクロナギ。二次加熱を受けた。口縁～脚部に変化。器台一部剥落。	29-25	014
17	須恵器高台环	A2	底面	16.8		5.5	完形	高台径10.2cm。外側：体下部～底部回転ヘラカズリ～窓合接合～再びロクロナギ。二次加熱を受けた。口縁～脚部に変化。器台一部剥落。	29-26	014

第80図 S 1-34D 穫穴住居跡出土遺物(2)－火災時の土器

〔火災直後の遺物廃棄〕堆積土3層は火災時に屋根に葺かれていた葺土が崩れ落ちたと考えられ、その上面に完形に近い土器(38~48)の集中する箇所が南東部と中央部に各1箇所あった。このうち須恵器壺(39・43)・高台壺(44)は二次加熱を受け、器面が荒れている。火災で不要となったものを火災直後に廃棄したものと考えられる。

〔出土遺物〕火災前の遺物は少なく、D貼床とD土壌から少數の遺物が出土した。D貼床からは非クロ調整の土師器甕、須恵器壺(4)・鉢の破片、炭化した種子(モモ)が少數出土した。D土壌からは非クロ調整の土師器甕(3)・破片、須恵器壺(5)が出土した。

火災時の遺物は比較的多く、しかも完形のものや残存率の高いものが多い。火災時の遺物は主に床面から出土し、他に周溝や外延溝からも少數出土した。床面からは土師器甕2点(7・8)、土師器甕破片を転用した器台1点(9)、須恵器壺5点(12~15)、須恵器高台壺2点(16・17)、須恵器

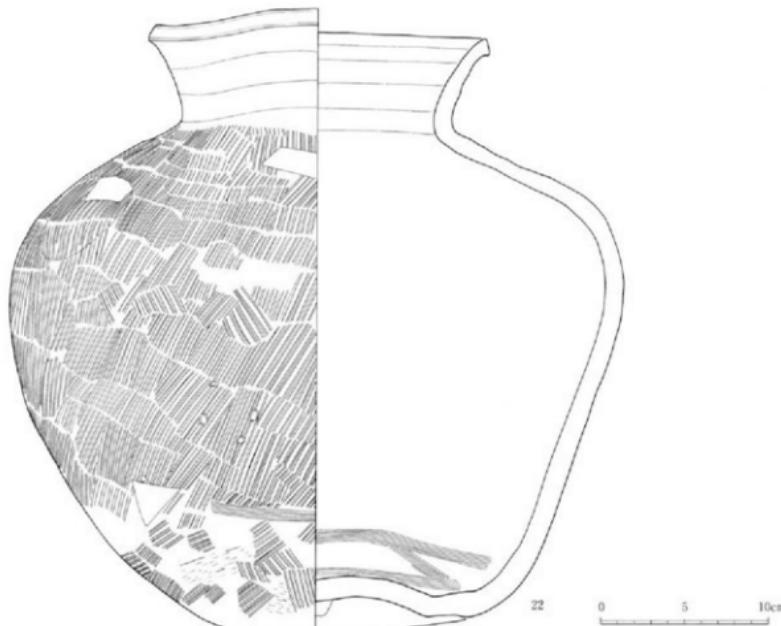


番号	種類	分類	断径	底径	高さ	現存	特	備	写真	取扱	
18	須恵器甕	B	床面	14.3	5.1	完形	宝珠つまみ。外面：丸井部回転ヘラケズリ。内面：焼成前へう書き×		29-15	014	
19	須恵器甕	A1d	床面	16.8	4.1	完形	渾んで低い珠状つまみ。外面：丸井部回転ヘラケズリ。内面：火附部火附部ヘラケズリ。表面火附部		29-14	014	
20	須恵器鉢	A1	床面	23.4	14.5	13.7	完形	外面：体下部クロコグレードササニ。粘土付着。底部ナデ。		30-2	016
21	須恵器壺	A2	床面	29.9	14.6	20.2	完形	外面：口縁～全体ロクロナギ。体下部平行明き。底部ナギ。内面：ロクロナギ→口縁に焼成前ヘラ	30-1 35-9	016	

第81図 S-1 34D 竪穴住居跡出土遺物(3)－火災時の土器

器蓋 1点 (19)、須恵器短頸壺蓋 1点 (18)、須恵器鉢 2点 (20・21)、須恵器甕 1点 (22)、刀子 1点 (24)、有袋鉄斧 1点 (25)、馬具 (木製三角錐形壺鏡に取り付けられた鉄製の逆U字状吊手金具) 1点 (28)、提げ砥石 1点 (32)、置き砥石 1点 (35)、磨石 1点 (36) の他、土師器甕・須恵器環・甕の破片が少數出土した。周溝からは完形の刀子 1点 (23)、有袋鉄斧 1点 (26)、手持ち砥石 1点 (34) の他、土師器環・甕・須恵器環・甕・鐵鍬 (27)、壺鏡の縁金具? (29~32) の破片、外延溝からは土師器環 1点 (6) の他、土師器甕破片が少數出土した。カマド崩壊土からは土師器甕・須恵器環・甕の破片が少數出土した。

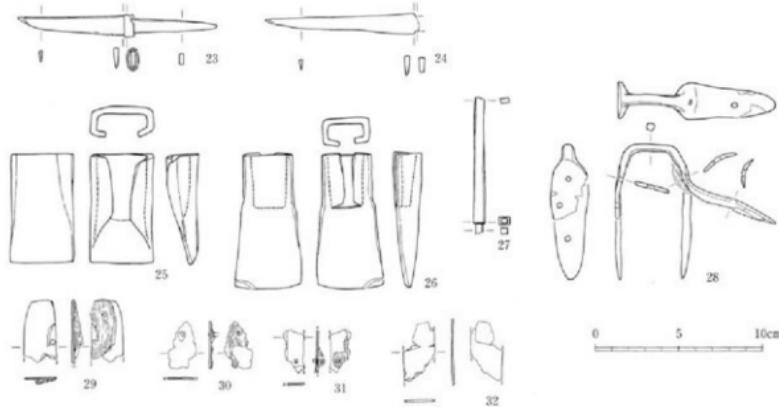
このうち土師器はいずれも非クロ調整で、土師器環 (6)・甕 (7) は平底、土師器甕 (8) は丸底である。須恵器環にはへラ切りのもの (11)、回転へラケズリのもの (12~15) があり、後者がやや多い。須恵器高台環 (16・17)、須恵器蓋 (19)、須恵器短頸壺蓋 (18) も回転へラケズリされている。須恵器鉢 (21) は内面口縁に焼成前に「井」とへラ書きされている。馬具 (28) は鉄製の逆U字状吊手金具で、木製三角錐形壺鏡に取り付けられたものである。刀子 (23) は刃部と茎部との境に瘤が装着されている。瘤を装着したまま遺存する例は数少ないものである。なお、土師器甕



番号	種類	分類	層位	口径	底径	高さ	特　　徴		写真	収納
							残存	状況		
22	須恵器甕	B	床面	20.3	27.4	完形	最大直径36.6cm、容積約20L。著しく焼き込み、外面側面部に焼き跡有り。焼けハシケ、底部に焼き跡あり。外由口輪郭にクロナザ。肩下部手持ちへラケズリ→脚部平行焼き目。底部ナザ。内面:口部加ロクロナザ。脚部無文当て具組。底部ナザ。	30-3	917	

第82図 S 134D 竪穴住居跡出土遺物(4)－火災時の土器

(7・8)は二次加熱を受け、黒色処理が部分的に消失している。須恵器壺(11・12)・高台壺(16・17)も二次加熱を受け、器面が荒れている。これらは火災による焼失の影響と考えられる。火災直後に堆積土3層上面に廃棄された遺物には、須恵器壺7点(37~43)、須恵器高台壺2点(44・45)、須恵器短頸壺1点(46)、須恵器甕2点(47・48)、鉄製紡錘車1点(49)、鉄鎌1点(50)、馬具の兵庫鎖1点(51)、環状金具1点(52)の他、非ロクロ調整の土師器壺・甕、須恵器壺・蓋・甕の破片がある。このうち須恵器壺は回転ヘラケズリされているもの(38~43)が10点と主体を占め、手持ちヘラケズリされたもの(37)は1点のみである。須恵器高台壺(44・45)、須恵器短頸壺(46)も回転ヘラケズリされている。また、須恵器高台壺(45)、須恵器短頸壺(46)は著しく焼け重み、短頸壺は内部に熔着滓も付着しており、生産された須恵器窯からさほど離れていないことが窺える。また、須恵器甕にはロクロ調整後に両面がヘラミガキされた体部破片が1点あり、土師器壺には有段壺の体部破片が1点ある。



番号	種類	加工	部位	特徴	図	写真	収納
23	刀子	床面	完形	切先わずかに欠損。平造り角棒。切先はフタラややつく。両面(縫接・切開)。茎部は中継で、間から茎尻にかけてやや幅を狭め。刃身部約5cm、茎部約3.5cm、茎端部約3cm。刃先幅2mm、刃先厚1mm。刃身部幅3mm。茎部幅3mm。刃端部は茎端部より後退する。若者。は長さ3cm、幅6mm、厚さ3mmの鉄板を底板。	23	37-16	030
24	刀子	床面	破片	刃身部約5cm、刃先はフタラややつく。平造り角棒。内側(縫接・切開)。現存長8.8cm。刃身部幅約3mm。刃身部厚3mm。刃身部幅3mm。刃身部厚3mm。刃先幅3mm。刃身部厚3mm。茎部幅3mm。	24		030
25	有茎鉗矛	床面	完形	頭打。両刃。横棒。鍔造。全長6.5cm。刃先幅3mm。刃部幅3mm。若柄部である袋部は横幅約0.9×1.0cmの柄丸長方形で、深さ5.5cmの空洞とG字。	25	37-19	030
26	有茎鉗矛	床面	完形	頭打。両刃。横棒。鍔造。刃部一部欠損。全長8.1cm。刃部幅3mm。若柄部である袋部は横幅約2.2×0.9cmの柄丸長方形で、深さ5.5cmの空洞となる。	26	37-18	030
27	鉄鎌	床面	破片	頭打・茎部断面。頭部大きく欠損。被覆に両刃。現存長8.2cm。薦歯断面約6×4mm長方形。茎歯面4mm方形。	27	37-13	030
28	木製・角棒の鉄製手取盤	床面	脚	馬具。木製取盤。角棒形足跡に打たれた鉄製U字形手取盤。鍔端(みずね)が取り付けられた逆U字形の鉄製受け金具と木製取盤が頭部に打たれた鉄製受け金具と組み合なっている。頭部は頭部約3mm、頭部幅約3mmのU字形の頭部を逆U字形の頭部で組み合なっている。左脚部:二三脚部:右脚部:頭部:頭部受け高さ1mm、頭部幅7.0mm、頭脚部2.5mm、頭脚部2mm。なお鍔端は、鉄製受け金具に舟形足跡を施してその先端に段段を付したものが頭部と木製取盤により固定され、これが頭部で鍔端が取り付けられたと考えられる。	28	37-2	030
29	木製・角棒の鉄製手取盤	カマド内	脚	頭打。約1mmと薄い鉄製足跡。30~31にはは幅2~2mmの方の脚に断面2mm方形の脚が入れ込まれ。29にはは幅2~3mmの方の脚に頭打がある。29~31には木製が接着している。脚はいずれも木製脚板に付して地中に埋められている。木製取盤。円錐形足跡に打たれた鉄製受け金具と組み合なっている。29が現存長3.8cm、42cm。30~31が現存長2.8cm、現存幅1.7cm。32が現存長3.5cm、現存幅1.7cm。	29	38-26	030
30	木製・角棒の鉄製手取盤	カマド内	脚	頭打。約1mmと薄い鉄製足跡。30~31にはは幅2~2mmの方の脚に断面2mm方形の脚が入れ込まれ。29にはは幅2~3mmの方の脚に頭打がある。29~31には木製が接着している。脚はいずれも木製脚板に付して地中に埋められている。木製取盤。円錐形足跡に打たれた鉄製受け金具と組み合なっている。29が現存長3.8cm、42cm。30~31が現存長2.8cm、現存幅1.7cm。32が現存長3.5cm、現存幅1.7cm。	30	38-37	030
31	金具か	カマド内	脚	頭打。約1mmと薄い鉄製足跡。30~31にはは幅2~2mmの方の脚に断面2mm方形の脚が入れ込まれ。29にはは幅2~3mmの方の脚に頭打がある。29~31には木製が接着している。脚はいずれも木製脚板に付して地中に埋められている。木製取盤。円錐形足跡に打たれた鉄製受け金具と組み合なっている。29が現存長3.8cm、42cm。30~31が現存長2.8cm、現存幅1.7cm。32が現存長3.5cm、現存幅1.7cm。	31	38-35	030
32					32	38-38	030

第83図 S 1-34D 積穴住居跡出土遺物(5)－火災時の鉄製品

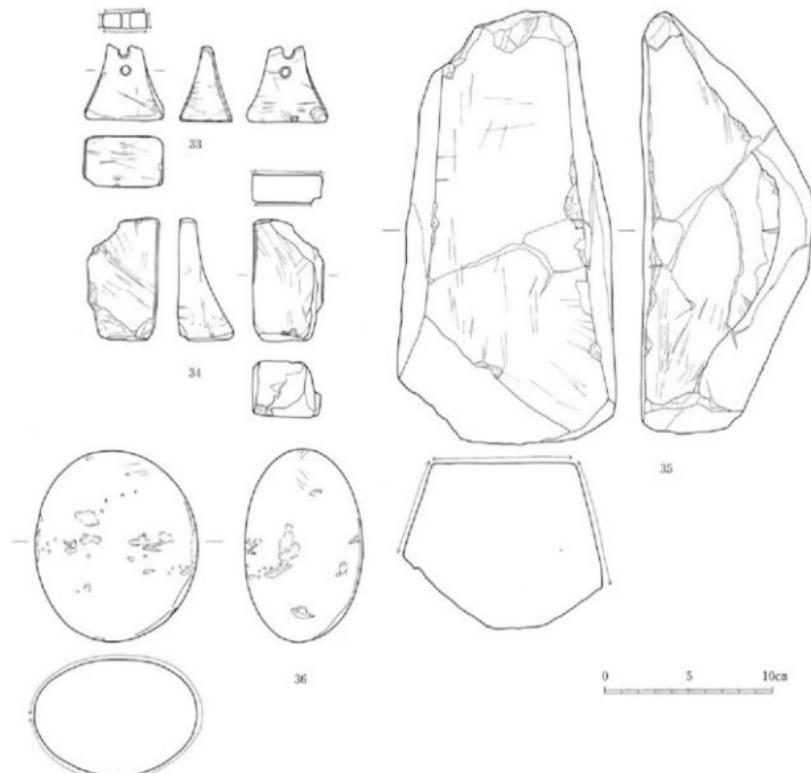
火災以後に廃棄ないし流入した遺物として、堆積土 2 b・2 c・1 層、検出面から土師器坏 (53)・甕 (54)、須恵器坏 (55~59)・高台坏 (60・61)・蓋 (62・63)、丸瓦 (64)、鏡 (65)、砥石 (66)、壁土の破片など少數の遺物が出土した。

【S I 45堅穴住居跡】(平面図・断面図: 第10図)

〔位置〕 調査区南半、丘陵尾根上部西寄りの標高31.0m付近に位置する。

〔重複〕 SK 7 土壌と重複し、これよりも古い。この土壤に床面下まで大きく削平され、4箇所の主柱穴のみを検出した。

〔主柱穴〕 北東・南東・南西・北西主柱穴を検出した。北東主柱穴以外は残りが悪い。掘方は長辺30cm



番号	種類	加工	特徴	現行	参考	写真	取扱
33	保げ砥石	底面	破片	砂岩製。四角形状。3面研磨・擦痕。中底。上部を一部欠損。上部と側面に金屬製工具によりφ6mmの円孔を表裏両面より穿つ。火災にあって全体的に變色。現存長5.5cm、幅4.5cm、厚さ3.1cm。66と同一個体の可能性がある。		38-1	035
34	手持ち砥石	周溝	丸形	細粒砂岩製。舟状。3面研磨・擦痕。中底。長さ7.3cm、幅4.3cm、厚さ3.4cm。		38-11	035
35	砥石	底面	砂岩製。不整な角柱状。	3面研磨・擦痕。中底。長さ24.0cm、幅11.9cm、厚さ10.0cm。		39-4	035
36	磨石	底面	砂岩製。平面・片面稍円形。	球状。全面鮮く研磨。長さ11.4cm、幅9.7cm、厚さ7.0cm。			035

第84図 S I 34D堅穴住居跡出土遺物(6) - 火災時の石製品

前後、短辺25cm前後の隅丸長方形で、北東主柱穴で径10cmの円形の柱痕跡を検出した。柱間寸法は北西主柱穴—北東主柱穴間が約2.0m、北東主柱穴—南東主柱穴間が約1.9mである。

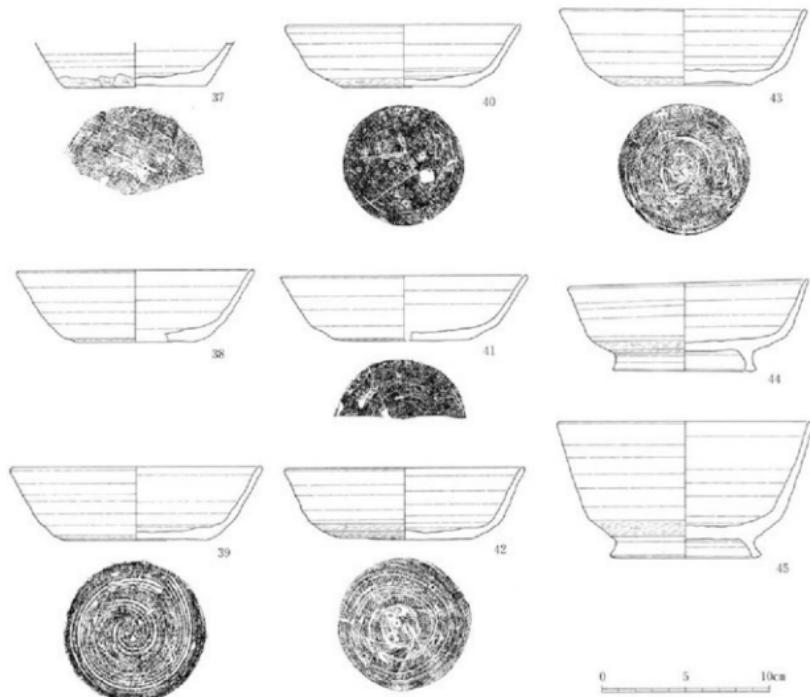
〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

【S I 31堅穴住居跡】(平面図・断面図: 第89図、遺物: 第90図、図版13-1)

〔位置〕 調査区南東部の中央、丘陵尾根上の標高31.0m付近に位置する。

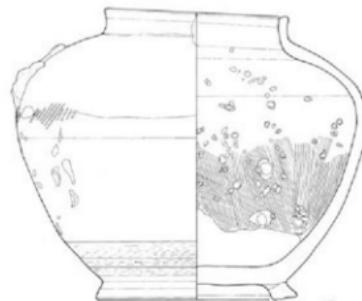
〔重複〕 主要遺構との重複はない。西隣のS B 5掘立柱建物跡東妻とは約2m離れている。方向は同じだが、同時には存在しないと考えられる。

〔平面形・規模〕 平面形は長方形で、規模は南北が西辺で3.4m、東西が南辺で3.9mである。

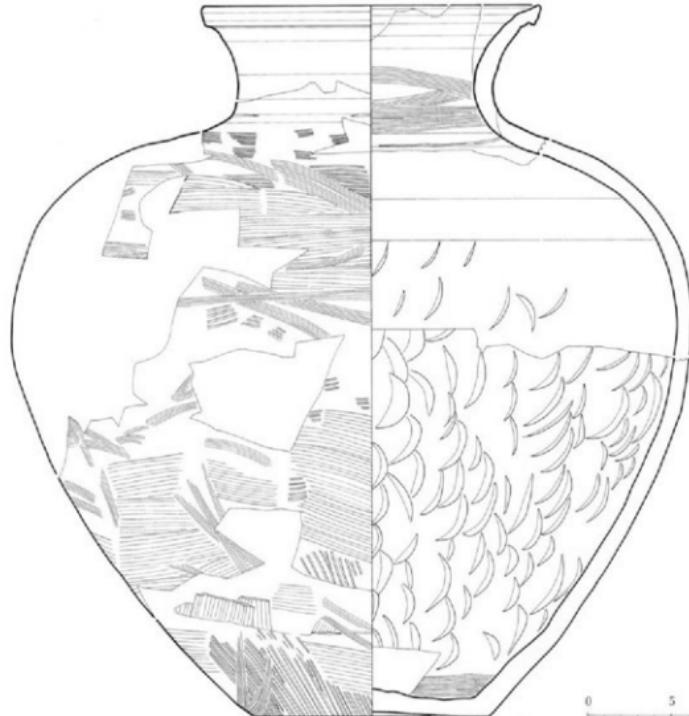


番号	種類	分類	幅 広	口幅	底深	基高	現高	特徴		寸法	状態
								前面	背面		
37	竪穴器	B4	3層上面	8.3	1/2	外面部底へ4段り一体下部～底部手持ちハラケズリ。底部焼成前へ音き」一。両面に火ழ痕。	35-15	015			
38	竪穴器	A3	3層上面	14.2	7.0	4.3	1/4	前面：底部切り離し不明。一体下部～底部回転ハラケズリ。焼成やや不良。		015	
39	竪穴器	A3	3層上面	15.0	8.0	4.1	2/3	前面：底部切り離し不明。一体下部～底部回転ハラケズリ。両面に火ழ痕・重ね燒き痕。	29-3	015	
40	竪穴器	A3	3層上面	14.1	7.2	3.7	完形	前面：底部切り離し不明。一体下部～底部回転ハラケズリ。両面に火ழ痕・重ね燒き痕。	29-4	015	
41	竪穴器	A3	3層上面	14.7	7.6	3.9	1/2	前面：底部へ4段り一体下部～底部回転ハラケズリ。両面に火ழ痕。	29-5	015	
42	竪穴器	A3	3層上面	14.5	8.0	4.3	完形	前面：底部へ4段り一体下部～底部回転ハラケズリ。両面に火ழ痕。	29-6	015	
43	竪穴器	A3	3層上面	14.7	7.8	4.6	完形	前面：底部へ4段り一体下部～底部回転ハラケズリ。両面に火ழ痕・重ね燒き痕。	29-7	015	
44	竪穴器高台环	A1	3層上面	14.4		5.3	2/3	高台径5.5cm。外面部下部～底部回転ハラケズリ。高台接合→再びクロナギ。外面部薄痕。二重加熱を受ける。	29-11	015	
45	竪穴器高台环	B2	3層上面	15.2		8.2	2/3	高台径2.2cm。外面部：底部へ4段り一体下部～底部回転ハラケズリ。高台接合→再びクロナギ。外面部薄痕。1層以上体部が引抜に著しく陥れ込む。高台接地面に重ね被き痕。	29-12	015	

第85図 S I 34D 堅穴住居跡出土遺物(7)火災直後の廃棄



46



47

番号	種類	分類	規格	口径	底径	高さ	残存	特徴	写真	取扱
新	須志器皿(短脚器)	B1	3層上面	11.0		17.5	完形	高台高12.0cm。高台高1.3cm。体部最大径20.9cm。外側：体部平行引き一ロクロナギー体下部同軸ハラケアリ。付口付一付口付一底足ナギー内面：体下部ナギー付口付一底足ナギー。燒成窓孔、焼成窓孔間隔が多めである。その上に崩落した事例が複数ある。内面の火炎紋は、火炎紋が複数窓孔間に現れる場合がある。その上に崩落した事例が複数ある。中央東辺寄りで正面で押しつぶされた状態で出土。	29-16	016
右	須志器皿	A	3層上面	20.2	14.0	42.6	1/2	胴上部中央寄りに火炎大溝がある。最狭径約5cm。容積約29L。外側：口頸部ニクロナギー、胴部平行引き一付口付一底足ナギー。内面：口頸部ニクロナギー、胴部ナギー。制度無文で口縁一側上部ロクロナギー、底足ナギー。焼成明確。往届内中より押しつぶされた状態で一括して出土。	30-5	018

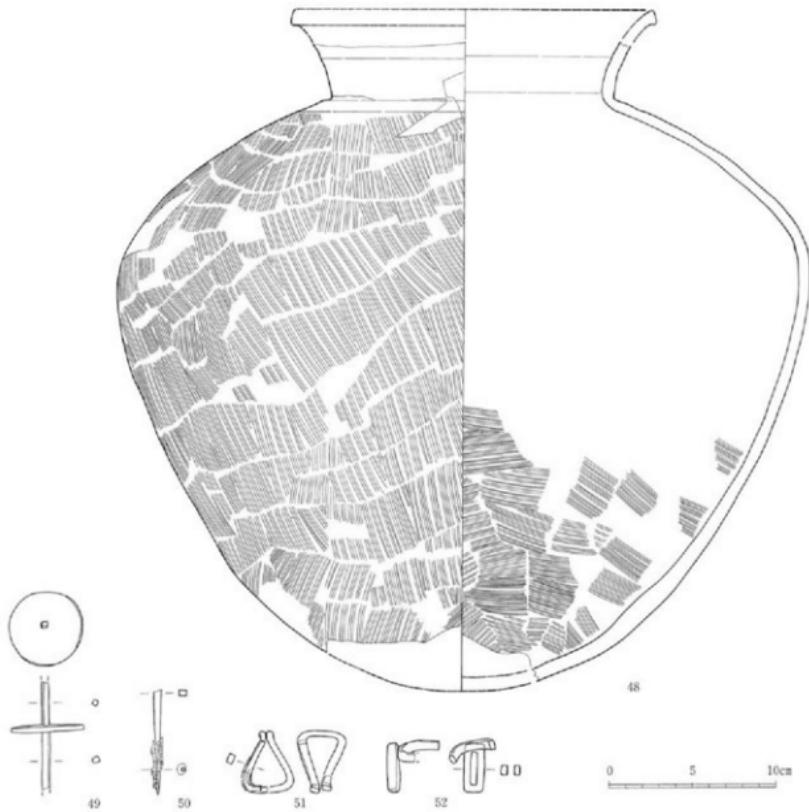
第86図 S I 34D 積穴住居跡出土遺物(8)－火災直後の廃棄

〔方向〕西辺で見ると北で東に約3°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、最も残りのよい南西隅で41cm、南辺中央で35cmあり、約100°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。西辺中央では35cmあり、ほぼ直に立ち上がる。北東部では15cm以下と残りが悪い。

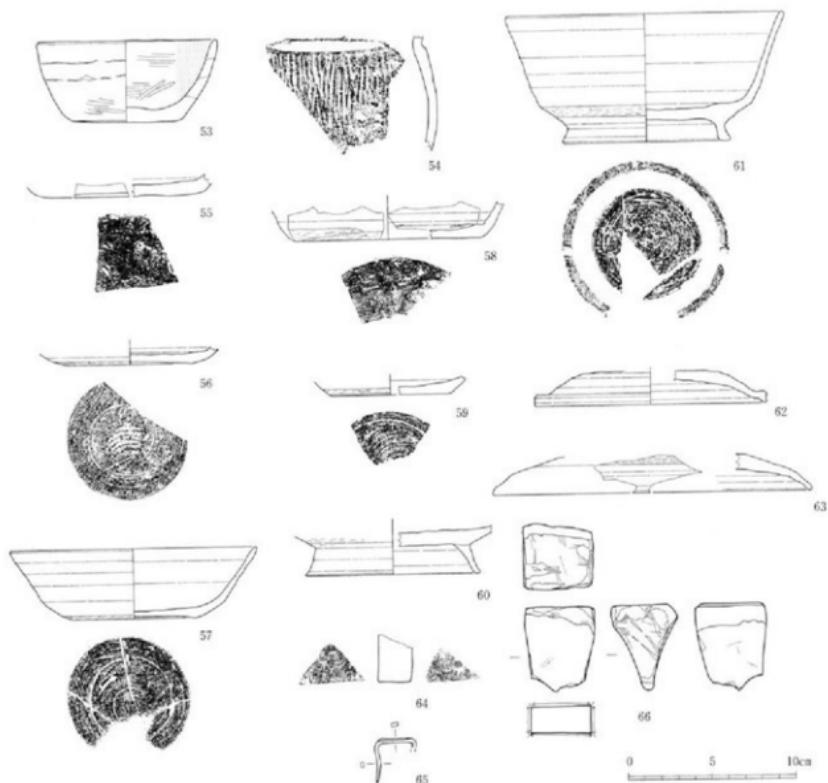
〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面としている。

〔主柱穴〕主柱穴は認められなかった。



番号	種類	分類	層位	特徴	写真	収納
48	須志器燃	B	3層上面	口縁部・底部欠損。底部へ側下部7/8残存。丸底。测定部高11.2cm前後。肩上部中央寄りに最大径がある。最大径41.4cm。容積約29.3L。外面：胴部～底部平行引き、底部ロクロナフ。内面：口縁部ロクロナフ。胴部平行当て長楕→ナフ。焼成壁厚。周囲端よりうつれた状態で出土。	30-4	619
49	鉄製防錆板		2層上面	筋幅・筋幅とも鉄板。筋幅の内側が欠損。筋幅直徑4.4cm、筋幅厚3mm。筋幅間4mm。筋基の挿入される孔直徑4.5mm。	37-21	630
50	鉄錠		2層	裏面破片。木質残存。現存長。断面15×3.5mm長方形。	37-18	630
51	兵庫鎖		2層	馬具。28の環鎖の部分金具に取り付く鍔鎖の兵庫鎖。もしくは未検出の骨の之間に取り付く兵庫鎖か。鎖1個分の部分。現存長3.2cm。断面5×4mmの軸形を有す。	37-5	630
52	環状金具		2層	長方形形状の環状金具と兵庫鎖の断片と思われる金具3点が接着。環状金具は完形で、長さ3.0cm、幅1.2cm、厚さ6mm。	37-6	630

第87図 S I 34D 穫穴住居跡出土遺物(9)一火災直後の廃棄

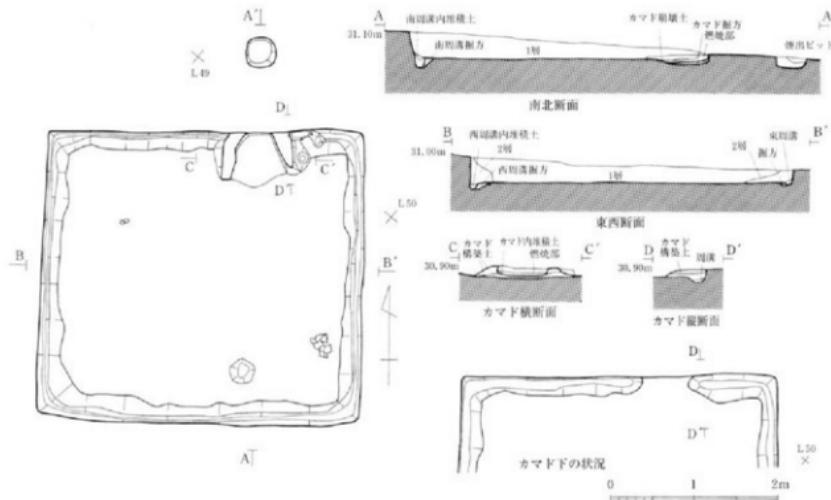


番号	種類	分類	層位	特徴	写真	取扱
53	土器器	I C1	2層	3/4残存。口径10.5cm。底径6.5cm。高さ4.5cm。口部クロマセ調整。平底。外表面：口縁～体部へうきがき、擦減、粘土層積み上に17個の泥點斑。内面：ヘラガサ・黒色斑。	28-18	015
54	土器器	I A	1層	全体～側面破損。口部クロマセ調整。外表面：ヘタメ。内面：ナデ。		015
55	須恵器	A1	2層	弧形破片。底径10.1cm。外表面：ヘタリ。施塗墨絞。		015
56	須恵器	A3	2層	弧形3/4破片。底径11.6cm。外表面：底部削正糸切り～体下部～武部外周回転ヘラケズリ。施成良好。内面：火痕斑。		015
57	須恵器	A3	2層	2/3残存。口径14.7cm。底径7.3cm。高さ4.2cm。外表面：底部削り出し不明～体下部～底部回転ヘラケズリ。施成不良。	29-8	015
58	須恵器	A5	1層	底部破片。底径11.0cm。外表面：底部削り出し不明～体下部～底部斜面持ちヘラケズリ。内面：見込みにヘタ記号「×」。施成壁紙。		015
59	須恵器	B3	1層	底部1/4破片。底径7.0cm。外表面：底部回転糸切り～体下部～底部外周回転ヘラケズリ。施成壁紙。		015
60	須恵器高台环	AorB2	2層	底部～高台部1/4破片。高台高1.4cm。高台底9.4cm。高台高1.7cm。底径7.7cm。外表面：底部削り出し不明～体下部～底部回転ヘラケズリ～付高台や内側クロコチ。施成壁紙。		015
61	須恵器高台环	B2	2層	口縁～高台2/3残存。口径16.6cm。高台高10.0cm。高台底13.0cm。高台高7.7cm。外表面：底部削り出し不明～体下部～底部回転ヘラケズリ～付高台～再びヘタスリ～付高台～再びクロコチ。付上に海綿焼附合。施成壁紙。	29-13	015
62	須恵器	A3d	1層	横断面 口縁～体部1/4破片。口径約9.6cm。内面：ロクロナゲ。施ね焼裂。施成壁紙。		015
63	須恵器	A3b	1層	口縫～体部小破片。口径約13.6cm。外表面：底部回転ヘラケズリ。施成壁紙。		015
64	丸瓦	2層	底部中央部小破片。底面：ヘタメ。内面：ナデ。施成壁紙。		027	
65	鐵	2層	片方の脚部破片。刃辺部厚2.5mm。刃辺部断面4×2mm長方形。脚部長2.7cm。脚部断面3×2mm長方形。	37-26	030	
66	甃石	2層	砂岩製。四角形状。一端欠損。5面研磨・施磨。中面。火災にあって全面焼付着。現存高4.5cm。幅4.7cm。厚さ3.1cm。33	38-2	030	

第88図 S-134D 穴状住居跡出土遺物(10)－火災後の遺物

〔カマド〕 北辺中央から60cm東寄りに付設されている。カマドの向きは丘陵尾根中軸線ではなく、等高線にはほぼ沿っている。カマドの上部が大きく削平され、煙道は完全に削平されていたが、カマドの両側壁と奥壁の下部、燃焼部、煙出しピットが残存していた。左側壁は長さ56cm、高さは奥で12cm、焚き口で10cm、右側壁は長さ52cm、高さは奥で8cm、焚き口で7cm残存していた。両側壁外面の幅は下部で1.15cmある。両側壁はにぶい黄褐色～褐色土を用いて構築され、粘板岩板状礫片を芯材に用いていなかった。焚き口は下部幅約95cm、高さ10cm以上である。燃焼部は奥行き60cm、幅65cm、奥壁高5cmで、焼土が堆積し、被熱・赤変していた。煙道は削平されていたが、径35cm、深さ13cmの煙出しピットが残されていたことから、長さは80cmあったとみられる。周溝は右側壁の下まで延び、その部分が暗渠となっていた。また、左側壁の際で周溝は途切れていた。そして、燃焼部の下はカマド構築土と一連の整地が続き、暗渠にはなっていなかった。

〔周溝〕 各辺で幅20～30cm、深さ5～12cmの周溝状の掘方、およびその中にある壁材の抜取痕跡と思われる幅8～10cm、深さ5～12cmの溝を検出した。周溝状の掘方はカマドの左側壁際とカマド右側壁下で途切れ、カマド燃焼部の下は暗渠となっていた。



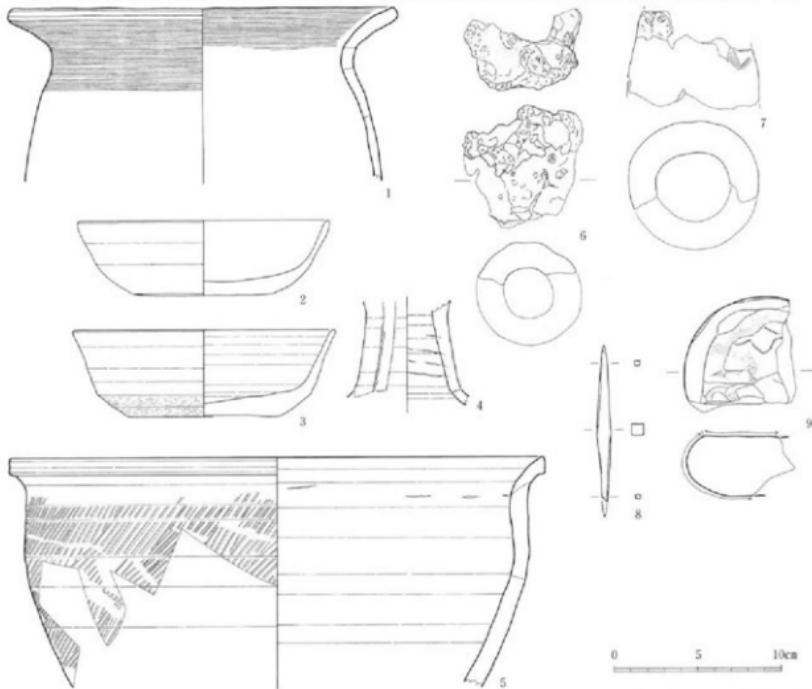
調査位置	特徴
周溝側方	黄褐色(10YR5/4)上。径1～4cmの粘板岩風化礫片を含む。しまり・粘性あり。人為堆積土。
周溝内壁積土	明黄色(10YR10/5)～30cm。黄褐色(10YR4/3)上。地山土。底を少許含む。しまりあり。壁材の抜取りか。
カマド側方	にぶい黄褐色(10YR4/3)。径3cm以下の地山土を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
カマド横断面	2層に分かれる。下部にはにぶい黄褐色(10YR5/4)上で、径0.3～1cmの地山土・粘板岩風化礫片を多く含み。しまりよい。上部は黄褐色(10YR5/4)上で、径0.2～1cmの粘板岩風化礫片・暗褐色土ブロックを少し含み。しまりよい。
カマド燃焼部	灰褐色(10YR4/7)上。底・壁面を多量に、地山土を少量含む。しまりあり。自然堆積土。
カマド内堆積土	明黄色(7.5YR5/8)上。しまりあり。カマドを埋め戻した人為堆積土。
煙出しピット	2個に分かれる。下部は暗褐色(10YR6/3)上で、径1cm程の灰化物・地山土を多く含み。しまりよい。上部は地山由来の明黄色(10YR6/4)上で、径2cmほど地山土を含み。しまりよい。
埋土上縁	暗褐色(10YR3/2)上。熱帯風化礫小粒を多量に含む。しまりなし。人為堆積土。
埋土下縁	黒褐色(10YR3/2)～暗褐色(10YR3/3)上。径5mm程の粘板岩風化礫片をやや多く含む。しまりなし。粘性あり。地盤に分布する。

第89図 S-131住居跡平面図・断面図（1/60）

〔堆積土〕2層に分かれる。實際の堆積土2層は自然堆積の可能性もあるが、大部分を占める堆積土1層は人為堆積土である。

〔出土遺物〕床面から土師器壺・壺の破片、堆積土から土師器壺・高壺・壺(1)、須恵器壺(2・3)・高壺(4)・鉢(5)・壺・壺・蘿羽口(6・7)の破片、鐵製刺突具(8)、鐵滓(椀形精鍊砂鉄系鍛冶滓・椀形鍛鍊鍛冶滓・粒状鉄滓・鍛造薄片)、磨石(9)などが少數出土した。

このうち土師器はいずれも非クロ調整で、土師器壺には丸底気味のものがある。須恵器壺には回転ヘラケズリのもの(3)とへら切り(?)のもの(2)がある。鐵製刺突具(8)は単式モリの可能性がある。鐵滓については、付章2に分析結果を掲載した。鐵滓は堆積土中から出土したが、本堅穴住居内かこの付近で鐵精鍊鍛冶～鐵鍛鍊鍛冶まで行なわれていたことを示している。



番号	種	分類	位置	枚数	特	写真	取扱
1	土師器壺	IA	埋上1層	1/4	口徑11cm～胴上部破片。口徑23cm。非クロ調整。外面：ヨコナデ、摩減。内面：ヨコナデ、摩減。焼成不良。	011	
2	須恵器壺	AI	埋上1層	1/2	口徑15.0cm。底径4.4cm。器高4.5cm。外面：底部へら切り？、摩減。内面：摩減。焼成不良。一次加熱を受けている。	012	
3	須恵器壺	A3	埋上1層	3/5	口徑15.6cm。底径9.0cm。器高5.2cm。外面：底部切り離し不明。一体下部～底部回転ヘラケズリ→底部削分的にナデ。焼成不良。	27.9	012
4	須恵器高壺		埋上1層	破片	面部1/4破片。面部ヨコナデ～縦長反方形透かし彫刻。内面に粘土被積み上げ痕。焼成堅絶。		012
5	須恵器壺	A2	埋上1層	1/4	口徑32.0cm。口縁凸縁線状。外面：平行開き目～ヨコナデ。内面：粘土被積み上げ痕→無文？でて底痕～ヨコナデ。燒成堅絶。	27.8	012
6	蘿羽口				先端部破片。先端部に壺蓋溝分隔く付着。残存長7.4cm。先端部内径2.0cm。先端部外径3.0cm。		028
7	蘿羽口				まと同一物体と思われる破片。壺蓋溝か一部付着。残存長7.0cm。外径2.8cm。内径1.5cm。外縁ナデ。		028
8	鐵製刺突具		埋上2層	單式の小字サスか。両端かずかく欠損するか、刺頭が突出と推定される。現存長9.0cm。袖部中央断面7mm方巾。	37.27	029	
9	磨石		埋上1層	破片	輪郭刃刀型。扁平な椎円柱状。底面に凹面研削。長さ6.3cm。幅6.7cm。厚さ3.7cm。		033

第90図 S-1堅穴住居跡出土遺物

【S I 37堅穴住居跡】(平面図・断面図: 第91図、遺物: 第92図、図版5-2、15-1)

〔位置〕調査区南東部の中央、丘陵尾根上北寄りの標高29.0~30.0m付近に位置する。

〔重複〕S X 2 遺物包含層2層と重複し、これよりも新しい。S B 12掘立柱建物跡（桁行3間、梁行2間の南北棟）と重複し、これよりも古い。

位置関係からみて、東に位置するS I 50堅穴住居跡と重複する。両者の床面レベルはほぼ同じで、S I 50堅穴住居跡の堆積土が残っていなかったため、新旧関係は不明である。S I 50堅穴住居跡西周溝が検出されず、それがS I 37B堅穴住居跡東周溝付近に位置すると考えられることから、S I 50堅穴住居跡がS I 37堅穴住居跡よりも古いと考えられる。

S I 37堅穴住居跡は一度建て替えられ、北辺・東辺をほぼ踏襲し、西に2.2m、南に2.0m拡張している。古い堅穴住居跡をS I 37A堅穴住居跡、新しい堅穴住居跡をS I 37B堅穴住居跡とする。

《S I 37A堅穴住居跡》(平面図・断面図: 第91図)

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形で、規模は南北が西辺で4.4m、東西が北辺で3.5mである。

〔方向〕西辺でみると北で東に約38°偏る。

〔壁〕床面レベルと同じくしてS I 37B堅穴住居跡に拡張されているため、壁の高さはない。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）と掘方埋土上面を床面としている。掘方は0.7~1.4mの幅で北辺に沿っている。この位置は斜面下側に当たる。

〔主柱穴〕堅穴住居跡の対角線上の位置で4箇所の主柱穴を検出した。掘方は長辺40cm前後、短辺25cm前後の隅丸長方形、または一辺30cm前後の隅丸長方形である。深さは比較的残りのよい南西・北西主柱穴が30cm前後、残りの悪い南東・北東主柱穴が10cm以下である。各柱穴の柱はS I 37B堅穴住居跡への拡張に伴って切り取られているとみられ、径14cm前後の円形の柱痕跡を確認した。

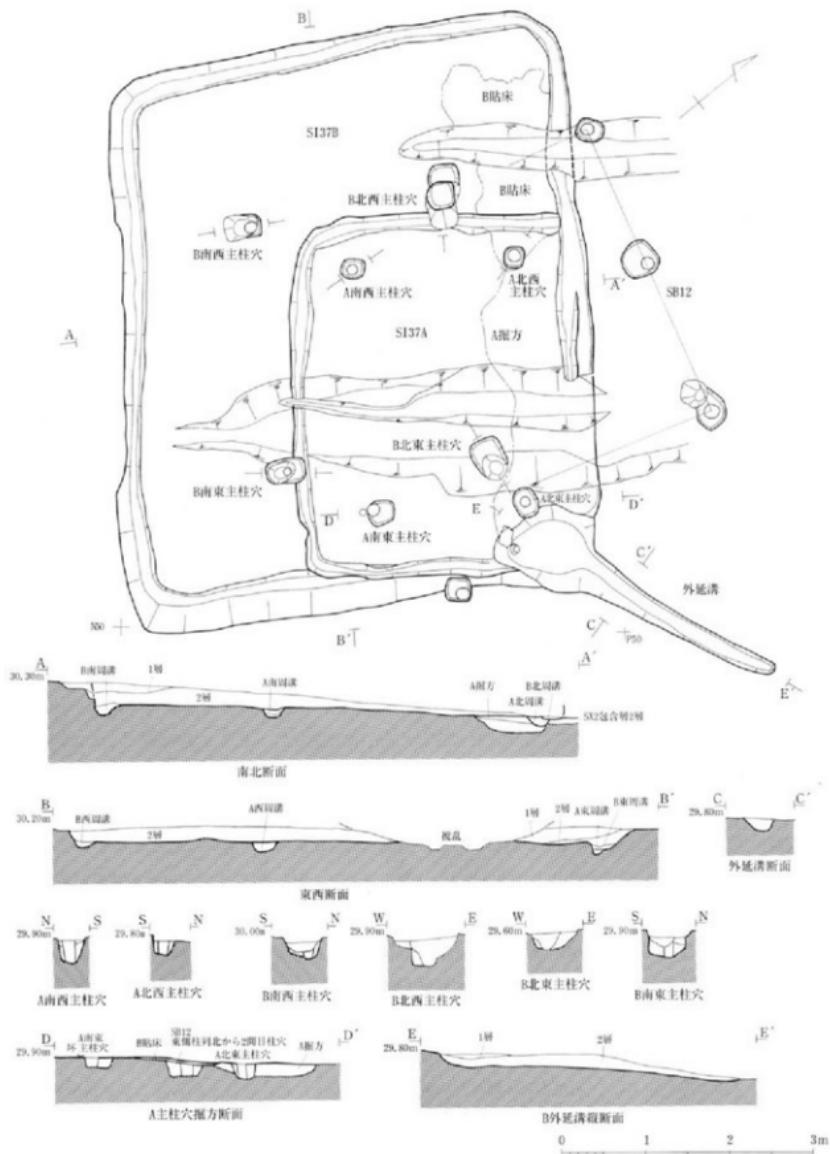
柱痕跡の位置でみると、南西主柱穴は西辺から65cm、南辺から70cm、北西主柱穴は西辺から50cm、北辺から70cm、南東主柱穴は南辺から85cm、東辺から85cm、北東主柱穴は東辺から85cm離れている。柱間寸法は南西主柱穴-南東主柱穴間が2.9m、北西主柱穴-北東主柱穴間が3.0m、南西主柱穴-北西主柱穴間が1.9m、南東主柱穴-北東主柱穴間が1.8mである。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔周溝〕各辺に幅13~30cm、深さ10cm前後の周溝が巡る。北辺は擾乱、北東隅はS I 37B堅穴住居

住居跡	層位	特徴
S I 37A	A掘方	灰黃褐色(10YR4/2)土。砂混じりに高い黃褐色(10YR5/3)地山土ブロックを含む。しまりあり。人為堆積土。
	A主柱穴掘方	褐褐色(10YR3/3)土。徑3cm以下の地山骨を多く含む。しまりあり。人為堆積土。
	A主柱穴和粗織	褐褐色(10YR3/3)土。土・塵・塵土・繊維・崩落物を少量含む。しまりなし。
	A崩土	灰黃褐色(10YR4/2)土。徑2cm程の高い黃褐色(10YR5/3)砂混じり地山土ブロックを多く含む。しまりあり。人為堆積土。
S I 37B	B崩土	褐褐色(10YR3/3)土。砂・崩落土・骨を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	B主柱穴掘方	に高い黃褐色(10YR7/4)-明黃褐色(10YR6/6)土。に高い黃褐色土ブロック、徑2cm以下の褐板岩風化碎片を含む。しまり・粘性あり。人為堆積土。
	B主柱穴和粗織	に高い黃褐色(10YR5/3)土。地山骨を少量含む。しまりなし。
	B主柱穴和粗織	灰黃褐色(10YR5/3)土。徑5mm程の地山骨を少量含む。しまりなし。
	B崩土	灰黃褐色(10YR4/2)土。徑2cm程の高い黃褐色(10YR5/3)砂混じり地山土ブロックを少し含む。しまりややあり。粘性なし。人為堆積土。
	B外周溝	2側に分かれ、いずれもしまりのない自然堆積土。網はに高い黃褐色(10YR4/3)上で、10cm~2cmの地山土ブロックを少し含む。2側は暗褐色(10YR5/3)で、徑0.3~1cmの炭・塵・骨を含む。
	堆積土上層	に高い黃褐色(10YR5/3)土。徑5mm程の地山土を含む。しまりややあり。粘性なし。自然堆積土。
	堆積土上層	褐褐色(10YR3/3)土。灰・塵土・骨、徑0.5~3cmの地山土ブロックを少し含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。

S I 37A・B住居跡土層一覧



第91図 S137A・B竪穴住居跡平面図・断面図 (1/60)

された暗渠であったのか不明である。

〔堆積土〕 床面レベルをほぼ同じくして S I 37B 穫穴住居跡に拡張されているため、堆積土は掘方、周溝、主柱穴にあるのみで、床面上にはない。

〔出土遺物〕 周溝からロクロ調整の土師器環・甕、須恵器環の破片が少數出土した。

〔S I 37B 穫穴住居跡〕(平面図・断面図: 第91図、遺物: 第92図)

〔平面形・規模〕 平面形はやや歪んだ隅丸長方形で、規模は南北が西辺で5.6m、東西が南辺で6.7mである。

床面レベルをほぼ同じくし、S I 37A 穫穴住居跡を西に2.2m、南に2.0m拡張している。北辺・東辺は外側にわずか拡張しているが、位置はほぼ踏襲している。

〔方向〕 西辺でみると北で東に約27°偏る。

〔壁〕 檜出面から床面までの壁の高さは、残りのよい南東隅で30~42cm、南西隅で26~35cmある。残りの悪い北西隅、南東隅、北辺では10cm以下である。

〔床面〕 床面はほぼ平坦で、多くは地山面（黄褐色粘質土）を床面としている。北西部は貼床上面を床面としている。

〔主柱穴〕 穫穴住居跡のほぼ対角線上の位置で4箇所の主柱穴を検出した。掘方は長辺45cm前後、短辺30cm前後の隅丸長方形、または一辺35cm前後の隅丸長方形である。深さはいずれも30cm前後ある。S I 37B 穫穴住居跡の廃絶時に、北西・北東主柱穴の柱は抜き取られている。南西・南東主柱穴の柱は切り取られ、その下から径14cm前後の円形の柱痕跡を確認した。

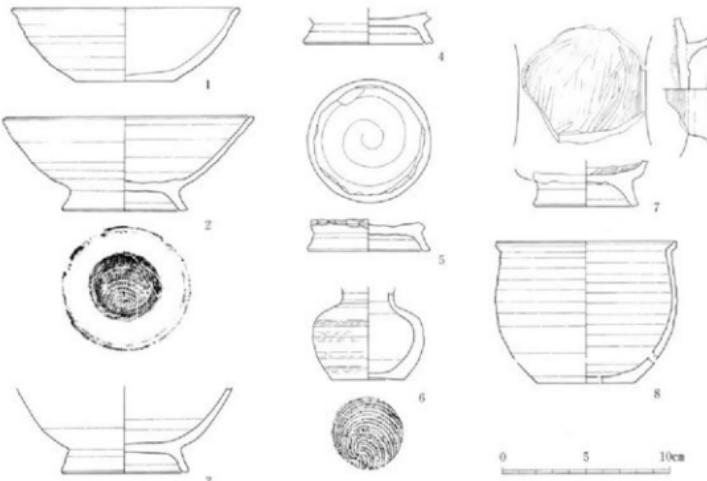
柱痕跡と柱抜取穴の位置でみると、南西主柱穴は西辺から2.1m、南辺から1.6m、北西主柱穴は西辺から2.1m、北辺から1.6m、南東主柱穴は南辺から2.1m、東辺から1.8m、北東主柱穴は東辺から1.4m、北辺から1.2m離れている。柱間寸法は南西主柱穴-南東主柱穴間が3.0m、北西主柱穴-北東主柱穴間が3.3m、南西主柱穴-北西主柱穴間が2.3m、南東主柱穴-北東主柱穴間が2.5mである。

〔カマド〕 カマドの位置は不明確だが、新しい溝に壊されている北辺中央東寄りに付設されていたとみられる。

〔周溝〕 各辺で幅25~55cm、深さ8cm前後の周溝を検出した。北東隅の周溝から東北東に向けて、幅30~40cm、深さ10cm前後の外延溝が長さ約2.8m伸びている。周溝、外延溝内は自然堆積土である。

〔堆積土〕 床面上の堆積土は2層に分けられ、いずれも廃絶以降に自然堆積している。

〔出土遺物〕 床面からは完形に近い須恵系土器高台環1点（1）、須恵系土器高台環高台部破片を転用した円盤状土製品1点（5）の他、須恵系土器環・高台環（3）、ロクロ調整の土師器環・甕、須恵器環・甕・壺の破片が少數出土した。主柱穴抜取穴からはロクロ調整の土師器環・甕の破片、周溝からは完形率の高い須恵系土器環1点（1）、須恵器小型壺1点（6）の他、須恵系土器環、ロクロ調整の土師器環・甕（8）、須恵器環・甕などの破片が少數出土した。堆積土からはロクロ調整後に両面をヘラミガキ・黒色処理した土師器耳皿1点（7）の他、須恵系土器環、ロクロ調整の土師器環・甕、須恵器環・甕・壺などの破片が少數出土した。



番号	種類	分類	削り	残存	物語	写真	取扱
1	須恵系上器環	周溝底面	3/4	口径13.6cm、底径6.0cm、高さ4.6cm。ロクロ調整。外面：底部回転角切り無調整。橙色。赤色粒・砂粒を少量含む。焼成不良。	31-6	015	
2	須恵系上器底盤	A 未面	7/8	口径15.0cm、底径7.5cm、高さ5.6cm。ロクロ調整。外面：底部回転角切り→付高台→内びロクロナデ。橙色。細かい白色粒・赤色粒を少量含む。焼成不良。	31-7	015	
3	須恵系上器底盤	A 未面	破片	体部一部。底部弧形確認。高台約5.6cm、高台高1.4cm。ロクロ調整。外面：底部回転角切り→付高台→内びロクロナデ。に点状白色斑・細かい砂粒を少量含む。焼成不良。	31-8	015	
4	須恵系上器底盤	A 未面	破片	体部一部。底部弧形確認。高台約7.8cm、高台高1.2cm。ロクロ調整。外面：底部回転角切り→付高台→内びロクロナデ。に点状白色斑・影模を多く含む。焼成不良。	31-9	015	
5	円板状土器盤	A 未面		須恵系上器底盤の様子。底部の周縁を打ち突出して軸端。高台径7.2cm、高台高1.1cm、高さ1.9cm。ロクロ調整。ロク	31-10	015	
6	須恵器底	B2 刃溝		口縁～脚部のみ欠損。直径13cm、最大径6.6cmで、最大部は体部中央にある。外面：底部回転角切り→体上部→下部脚回転角切り→付高台→内びロクロナデ。外側斜面に砂粒を多く含む。焼成良好。	31-11	015	
7	土器器耳鉢	B A 壁根土	破片	口縁欠損。体部～底盤と高台完全崩壊。高台径6.6cm、高台高1.5cm。ロクロ調整→付高台→内びロクロナデ→両面口縁～底盤部アーチカル→両面黑色施釉。	31-12	015	
8	土器器耳	B 四溝上面	1/3	口径10.6cm、底径5.8cm、器高8.5cm。口縁部短く外反して直立。ロクロ調整。外面：底部回転角切り無調整。に点状白色。焼成不良。	31-13	015	

第92図 S I 37B 積穴住居跡出土遺物

【S I 50積穴住居跡】(平面図・断面図: 第93図)

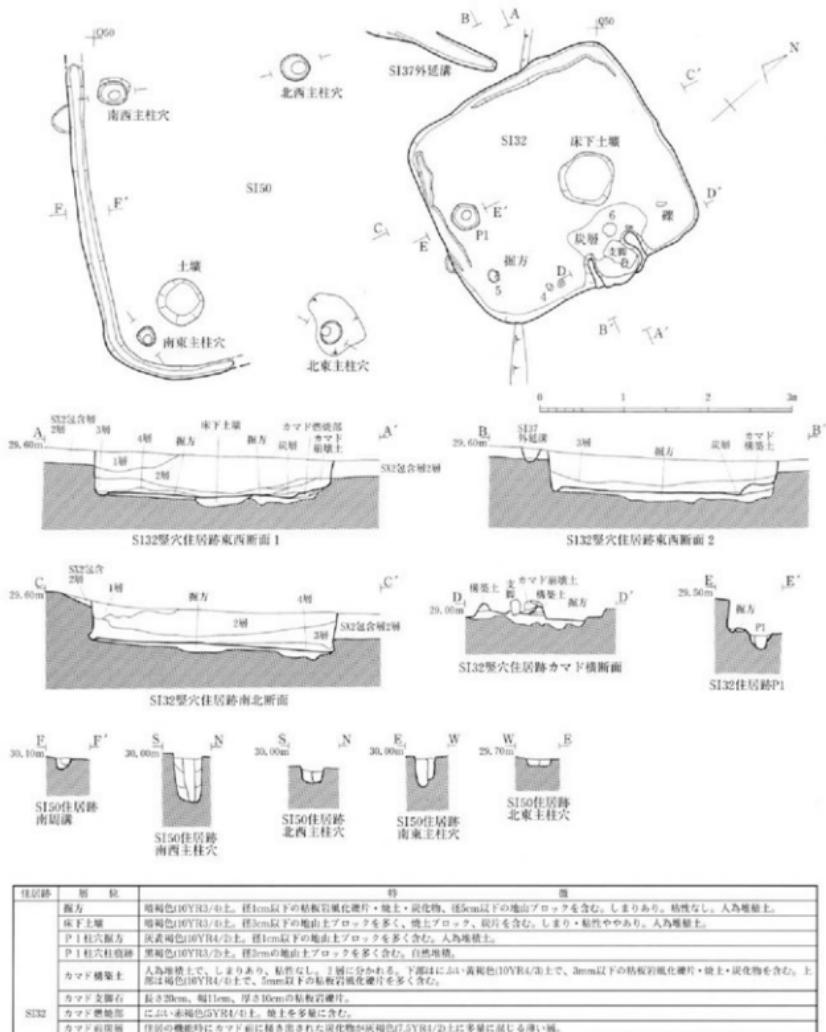
〔位置〕 調査区南東部の中央、丘陵尾根上北寄りの標高29.5m付近に位置する。

〔重複〕 S X 2 遺物包含層2層と重複し、これよりも新しい。また、位置関係からみて、西に位置する S I 37 積穴住居跡と重複する。両者の床面レベルはほぼ同じで、S I 50 積穴住居跡の堆積土が残っていなかったため、新旧関係は不明である。S I 50 積穴住居跡西周溝が検出されず、それがS I 37 積穴住居跡東周溝付近に位置すると考えられることから、S I 50 積穴住居跡がS I 37 積穴住居跡よりも古いと考えられる。また、北側のS I 32 積穴住居跡と近接しているため、これとは同時には存在しない。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸長方形とみられ、規模は東西が南辺で3.9m以上、南北が南周溝と北西主柱穴からみて3.0m以上である。

〔方向〕 南辺でみると北で西に約58°偏ることから、東辺は北で東に約32°偏ると推定される。

〔壁〕 床面まで削平され、壁の高さはない。



第93図 S132・50堅穴住居路平面図・断面図 (1/60)

〔床面〕北半部は床面下まで削平されているが、床面はほぼ平坦とみられ、地山面（黄褐色粘質土）を床面としている。

〔主柱穴〕竪穴住居跡の対角線上の位置にあるとみられる4箇所で主柱穴を検出した。掘方は径25～35cmの楕円形または円形である。深さは最も深い南西主柱穴で57cm、最も浅い北西主柱穴が9cmである。北西・北東主柱穴の上部が大きく削平されているため、底面レベルはほぼ同じである。各柱穴で径12cm前後の円形の柱痕跡を確認した。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔周溝〕南辺と南東隅で幅20cm前後、深さ10cm前後の周溝を検出した。周溝内は人為的に埋められている。

〔堆積土〕床面まで削平されているため、床面上に堆積土はない。

〔出土遺物〕北西主柱穴掘方から摩滅した土師器甕破片、検出面から非ロクロ調整の土師器甕破片が少數出土した。

【S I 32竪穴住居跡】（平面図・断面図：第93図、遺物：第94図、図版13-2、14-1）

〔位置〕調査区南東部の中央、丘陵尾根上北寄りの標高29.0m付近に位置する。

〔重複〕S X 2 遺物包含層2層と重複し、これよりも新しい。また、西側のS I 50竪穴住居跡、西側のS I 37竪穴住居跡と近接するため、これらとは同時には存在しない。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸正方形で、規模は南北が西辺で2.8m、東西が南辺で2.6mと小さい。

〔方向〕西辺でみると北で東に約10°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、残りのよい南辺・西辺で60cm前後あり、ほぼ直に立ち上がる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、掘方の埋土上面を床面としている。掘方は地山面（粘板岩岩盤）まで凸凹に掘り下げられ、南西部を除く全面が埋め戻されている。

〔柱穴〕南辺中央際から約40cm離れた位置で、P 1柱穴を検出した。掘方は径30cmのほぼ円形で、深さは20cmある。径11cmの円形の柱痕跡を確認した。他に組み合う柱穴がないが、人為的に埋められた埋土3層の下、床面上で検出されたことから、本竪穴住居跡に伴うものとみられる。

〔カマド〕東辺中央から30cm北寄りに付設されている。カマドの方向は丘陵中軸線ではなく、等高線にほぼ沿っている。カマドの天井部は住居廃絶時に壊されていたが、両側壁、奥壁、燃焼部、支脚石が残されていた。残存状況からみて、煙道は外に延びないとみられる。

左側壁は長さ40cm、高さは奥で17cm、焚き口で6cm、右側壁は長さ42cm、高さは奥で12cm、焚き口で10cmある。両側壁外縫の幅は下部で94cmある。両側壁はにぶい黄褐色～褐色土を用いて作られており、内側は被熱のために著しく赤色硬化していた。カマド構築土の下部に炭片・焼土粒が含まれることから、作り直されている可能性もある。奥壁はカマド両脇の東辺から外側に約15cm張り出し、高さ10cmで、ほぼ直に立ち上がる。焚き口は下部幅約60cm、高さ10cm以上である。

燃焼部は奥行き45cm、幅48cmで、奥壁から焚き口にかけてなだらかに傾斜する。焼土が堆積し、被熱・赤変していた。燃焼部中央やや左寄りには支脚石が燃焼部に深さ2cm埋め込んで直に立てら

れていた。支脚石は長さ20cm、幅11cm、厚さ10cmの粘板岩角柱状礫片を用いている。燃焼部上面から支脚石の天端までの高さは18cmであった。この箇所での天井高は18cm以上ということになる。

カマド焚き口より手前には、搔き出された炭が薄く堆積していた。

〔床下土壌〕カマド手前の中央やや北寄りの床下で、平面形が径70cmのほぼ円形で、深さ12cmの土壌1基を検出した。人為的に埋め戻されている。

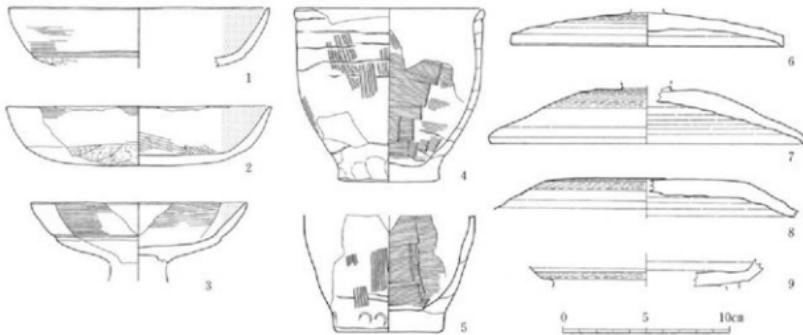
〔周溝〕西辺の北半と南辺の西半で幅10~20cm、深さ5cmの周溝を検出した。周溝は各辺を巡らない。開渠の状態で機能していたとみられ、廃絶時に床面とともに人為的に埋められている。

〔堆積土〕4層に分けられる。下層の埋土4層~2層は竪穴住居廃絶時に人為的に埋められた層であり、最上層の堆積土1層は窓みに自然堆積したものである。

〔出土遺物〕掘方から土師器坏(1)・甕・須恵器坏などの破片、床面から土師器坏・甕・鉢(4・5)、須恵器蓋(6)などの破片、カマド崩壊土から土師器甕などの破片、埋土3・2層から土師器坏(2)・甕・須恵器坏・蓋(7)などの破片、堆積土1層から土師器甕・須恵器坏などの破片、検出面(堆積土1層または埋土2層)からは須恵器高台坏(9)・平頂蓋(9)などの破片が少數出土した。

このうち土師器はいずれも非ロクロ調整のもので、土師器坏(1・2)・高坏(3)は丸底気味で、体下部に横位沈線が1条巡る。土師器鉢(4・5)はいずれも小型で、底部に木葉痕が残る。

須恵器高台坏(9)・蓋(6・7)・平頂蓋(8)はいずれも回転ヘラケズリされている。また、須恵器平頂蓋(8)は、頂部が平らでつまみのつかない特異な器形である。



番号	種類	分類	別称	残存	特徴		寸法	収納
					形	備		
1	土師器坏	1B1	瓶形	破片	口縁一体下部破片。口径15.6cm。丸底気味。非ロクロ調整。外側:口縁一体部ヨコナデ、摩滅。体下部横位沈線1条。手付ちヘラケズリ。内面:ヘラミガキ-黑色退色。摩滅。		27-11	012
2	土師器坏	1B1	埋土2層	破片	口縁一体下部破片。口径15.6cm。器高3.6cm。丸底気味。非ロクロ調整。外側:口縁-体部ヨコナデ、摩滅。体下部横位沈線1条。手付ちヘラケズリ。内面:ヘラミガキ-黑色退色。摩滅。		012	
3	土師器高坏	1B1	被出面	破片	口縁-底部-瓶形片。高台欠損。口径13.0cm。赤ロクロ調整。外側:口縁-体部ヨコナデ。体下部横位沈線1条。摩滅。内面:ヘラミガキ-黑色退色。摩滅。	27-10	012	
4	土師器鉢	1B1	床面	1/2	口径14.4cm。直径6.0cm。器高10.4cm。体部中央から口縁にかけて内輪気泡に直立し、口縁が崩く外反する。赤ロクロ調。内面:ヘラミガキ-黑色退色。内輪木葉痕-ナメラ、体部刷毛-土け継ぎ-ヘラケズリ。摩滅。内面:体部底辺横縫み-土け継ぎ-ヘラナゲ。洗	27-12	012	
5	土師器鉢	1B1	床面	破片	体下部-瓶形片(完形破片)。底径6.0cm。赤ロクロ調整。外側:底盤木葉痕。体部-ケズリ。ナゲ、摩滅。内面:ヘラナゲ。	27-13	012	
6	須恵器蓋	A4e	床面	8.9	体部-口縁部完形破片。つまみ欠損。口径16.0cm。外側:体部内輪ヘラケズリ。底盤不規。底面(カマド前面)出土。		012	
7	須恵器蓋	A4e	埋土2層	1/2	体部-口縁部完形破片。つまみ欠損。口径19.0cm。外側:体部内輪ヘラケズリ。底盤良好。重ね能。外側削除。内面:全縁丸み出。	27-14	012	
8	須恵器蓋	A3	被出面	1/4	平頂蓋。底盤無。口縁わずかに欠損。つまみはつかず。頭部が平ら。口径12.0cm。口徑約18.6cm。体部内輪ヘラケズリ。	27-15	012	
9	須恵器高台坏	Au12	被出面	破片	底盤下部-瓶形片。高台欠損。外側:武部切り離し不規-体下部-底盤内輪ヘラケズリ-付高台。高台両側を洗継縫に深くナゲ。	27-16	012	

94図 S I 32竪穴住居跡出土遺物

【S I 38堅穴住居跡】(平面図・断面図: 第95図、遺物: 第96・97図)

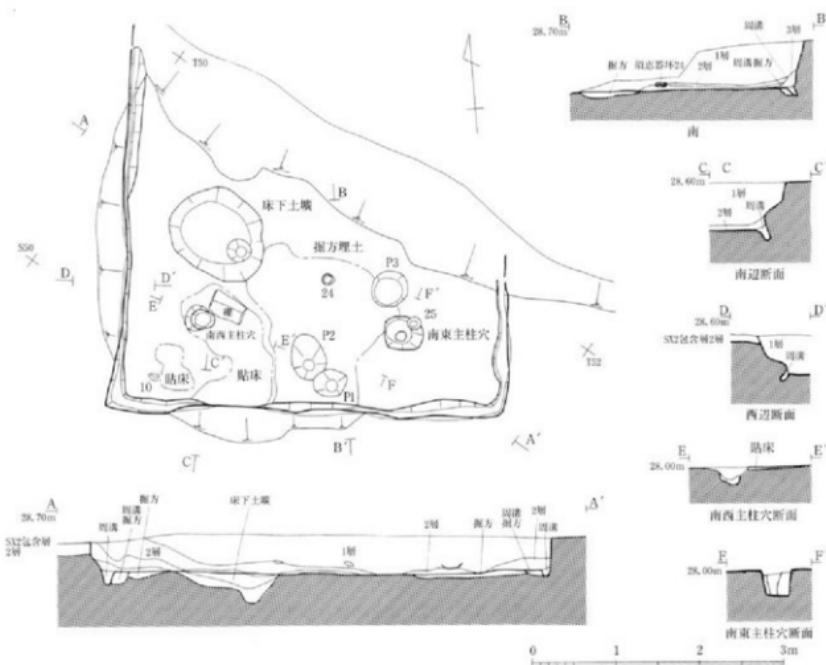
〔位置〕 調査区南東部の北斜面落ち際、丘陵尾根上北寄りの標高28.0m付近に位置する。

〔重複〕 S X 2 遺物包含層2層と重複し、これよりも新しい。また、東側の S I 39堅穴住居跡と近接し、これとは同時には存在しない。北部～北東部が床面下まで大きく削平されている。

〔平面形・規模〕 平面形は長方形で、規模は南北が西辺で4.4m以上、東西が南辺で4.2mである。

〔方向〕 西辺でみると北で東に約6°偏る。

〔壁〕 検出面から床面までの壁の高さは、残りのよい南辺で60～68cm、西辺の南半で50～64cmあり、



層位	特徴	図
堆方	暗褐色(10YR3/4)土。種1cmの程度。2～8cmの黄褐色(10YR5/6)地山粘土ブロックを多く含む。しまりあり。人為堆積土。	
堅穴解剖	暗褐色(10YR6/6)地山粘土。しまりあり。人為堆積土。	
堅穴解剖跡	暗褐色(10YR2/8)地山。	
堅穴柱後底穴	暗褐色(10YR3/4)土。黄褐色地山粘土ブロックを多く含む。しまりあり。人為堆積土。	
床下土壤	3層に分かれ。しまりのよい人為堆積土。1層は明黄色(10YR7/6)土面上に褐色(10YR4/4)土で、褐色(7.5YR3/3)土上で、炭片、明黄色(10YR3/3)土上にアロマを含む。2層は暗褐色(7.5YR3/3)土で、炭片、明黄色(10YR3/3)土上にアロマを含む。	
P 1	暗褐色(10YR3/4)土。5mm以下の中、岩片を多く含む。人為堆積土。	
P 2	暗褐色(10YR3/6)土。5mm以下の中、岩片を多く含む。人為堆積土。	
P 3	暗褐色(10YR3/8)土。5mm以下の中、岩片を多く含む。人為堆積土。	
周溝側方	暗褐色(5YR3/2)土。5mm以下の中山粘土を少し含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。	
周溝	黒褐色(5YR3/2)土。調べた程度多く、5cm以下の中地山粘土を少し含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。	
壁上層	暗褐色(5YR3/2)土。調べた程度多く、5cm以下の中地山粘土を少し含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。	
壁下層	暗褐色(5YR3/2)土。調べた程度多く、5cm以下の中地山粘土を少し含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。	
壁上層	暗褐色(5YR3/2)～暗褐色(10YR3/4)土。5cm以下の地山粘土ブロック、1cm以上の地山粘土を多く含む剥離少い層など層に細分される。人為堆積土。	
壁下層	暗褐色(5YR3/2)～(10YR3/4)土。剥離少い層の板状岩塊化層を不規則に含む表面層の粗面土。	

第95図 S I 38堅穴住居跡平面図・断面図 (1/60)

約105~110°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。南辺中央、西辺では壁の上部が崩れている。東辺では25cm以下、西辺北半では15cm以下と残りが悪い。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、掘方埋土上面および地山面（粘板岩岩盤）を床面としている。

〔主柱穴〕竪穴住居跡の対角線上と推定される位置で、南西・南東主柱穴を検出した。南西主柱穴の掘方は長径25cmの楕円形で、深さ20cmあり、柱が抜き取られていた。また、南東主柱穴は長辺48cm、短辺40cmの隅丸長方形で、深さは22cmあり、径12cmの円形の柱痕跡を確認した。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、北辺または東辺に付設されていたものと考えられる。

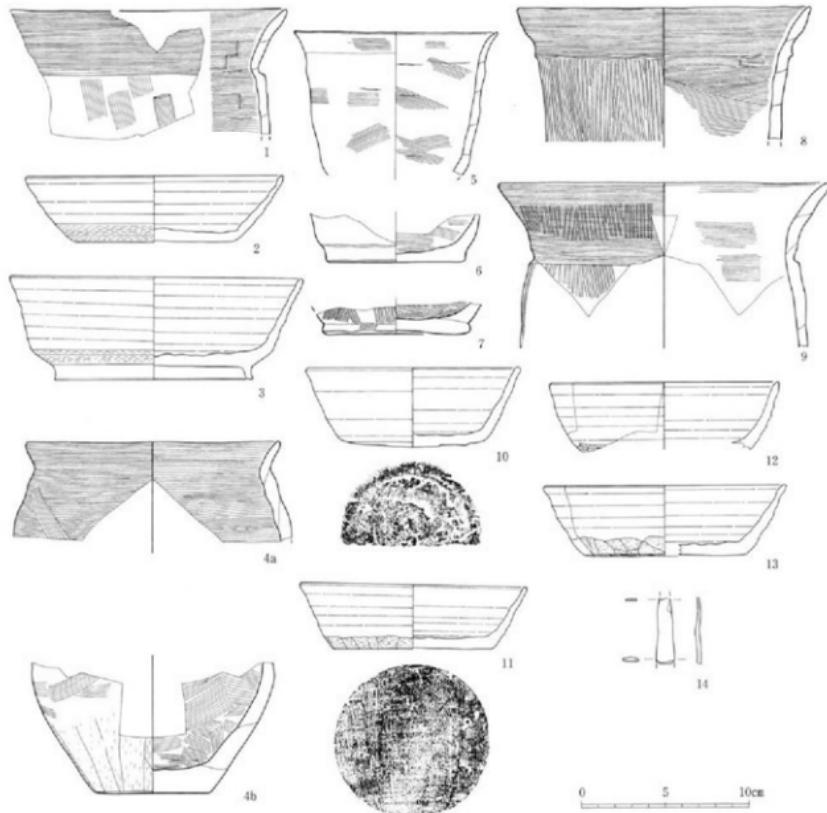
〔床下土壌〕床面中央西寄りで長径1.2m、短径1.0mの不整楕円形で、深さ36cmの土壌を床面下で検出した。また、南半部の床面上でP1~3のピットを検出した。P1は長径55cm、短径40cmの楕円形で、深さ8cm、P2は長径44cm、短径33cmの楕円形で、深さ6cm、P3は径約44cmのほぼ円形で、深さ11cmある。床下土壌とP1~3はいずれも人為的に埋め戻されている。

〔周溝〕西辺・南辺・東辺で、幅10~20cm、深さ10~15cmの周溝掘方を検出した。掘方は壁の奥に抉るように掘り込まれている箇所が多くみられた。壁に接した箇所を埋め戻さず、内側を埋め戻しており、開渠として機能していたとみられる。開渠の上幅は10cm前後、深さ10~15cmである。

〔堆積土〕3層に大別され、埋土3層が壁際の崩落土、埋土1・2層が人為堆積土である。

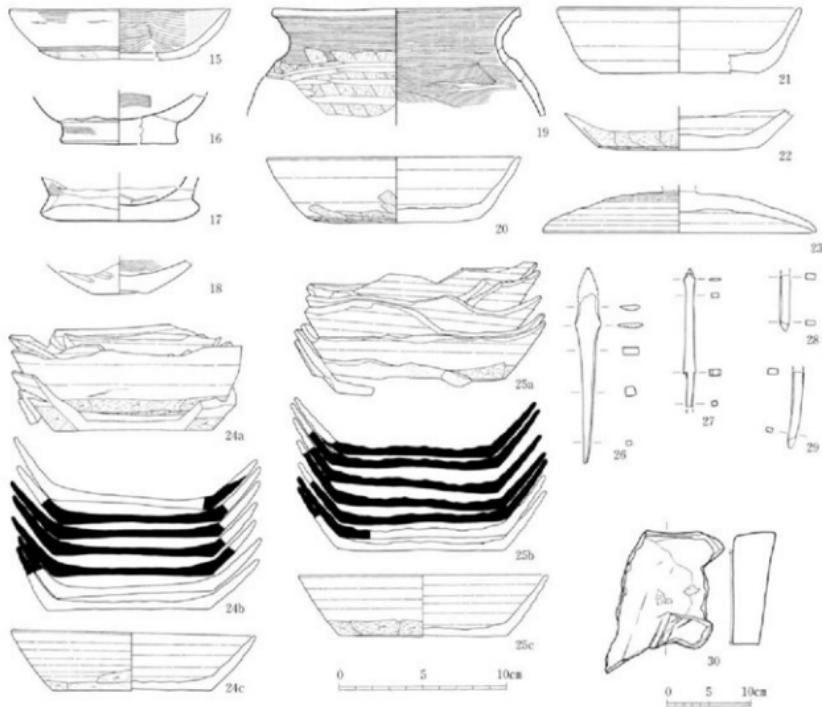
〔出土遺物〕床下土壌から完形の須恵器高台坏1点（3）の他、土師器坏・甕（1）などの破片が少數出土した。P2から須恵器坏1点（2）の他、土師器坏・甕、須恵器坏の破片が出土した。床面から完形の須恵器坏1点（11）、板状鉄製品1点（14）の他、土師器坏・鉢（5）・甕（4・6~9）、須恵器坏（10~13）などの破片が少數出土した。南東主柱穴掘方上の床面からは、熔着した7枚重ねの須恵器坏1個体（25）が出土した。南西主柱穴柱抜取穴からは土師器甕（16）の破片が出土した。周溝からは鉄鎌？（28）の他、土師器甕の破片が少數出土した。廃絶時に埋められた埋土2層からは、熔着した7枚重ねの須恵器坏1個体（24）、完形率の高い須恵器坏1点（20）、鉄鎌1点（26）の他、土師器坏・甕、須恵器坏・蓋（23）・甕などの破片が少數出土した。最上層に自然堆積した堆積土1層からは、鉄鎌（27）、鉄鎌？（29）、砥石（30）の他、土師器坏（15）・甕（17・19）、須恵器坏（21・22）・甕、塙釜式の土師器鉢（18）などの破片が出土した。

このうち熔着した7枚重ねの須恵器坏2個体（24・25）は、いずれも法量がほぼ等しく、体下部～底部が手持ちヘラケズリされている。内面に灰がかぶり、一番上の坏の内面に灰のかぶらない箇所が広く残されていることから、ほぼ同じ法量の須恵器坏を少なくとも8枚以上口縁を上にして重ね、須恵器窯で焼成したことがわかる資料である。このように熔着した須恵器坏は焼成失敗品であって、本来は須恵器窯の灰原に廻棄されるべきもので、消費地にはまったく搬出されないものである。熔着した須恵器坏の集落遺跡からの出土例は、これまで宮城県内をはじめ、東北地方で知られていない。全国的にみても類例は寡聞にして知らない。調査区内に須恵器窯が存在せず、調査区外の丘陵斜面や沢地にも須恵器窯灰原が認められず、本遺跡内に須恵器窯が存在しないとみられることから、本遺跡の近くに同時期の須恵器窯があることを窺わせる。したがって、これらは食膳具としてではなく、置き台などの2次的用途として本遺跡に持ち込まれたものと考えられる。



番号	種類	分類	期	残存	特徴	写真	取扱
1	上部器物	I A	床下土壌	破片	口縁～側上部破片。素ロクロ調節。外面：口縁ヨコナデ。体部ヘナナデ。内面：ナナデ、ヘナナデ。	31-14	020
2	箇唐器環	B3	P 2	1/2	口径約4.4cm、底径約2.5cm、高さ約4.0cm。外面：底部切り離し不明。体下部～底部回転ヘラケズリ。両面火摺痕。基盤断面は流紋构造（荒野他、1994、北野、2001）。焼成良好。	32-1	020
3	箇唐器筒台所	A2	床下土壠	完形	口径17.4cm、高さ11.8cm。高さ約0.7cm。最高5.3cm。外面：底部切り離し不明。体下部～底部回転ヘラケズリ～付高台。	32-7	020
4	上部器物	1B1	床面	破片	口縁～側上部破片(4a)と体下部～底部破片(4b)。外面：口縁ヨコナデ～側上部ナナデ。体下部～底部ナナデ。	31-15	020
5	上部器物	1B1	床面	1/2	口縁～体下部破片。口径12.2cm。素ロクロ調節。外面：ナナデ、厚底。内面：ナナデ、厚底。	31-16	020
6	上部器物	1	床面	2/4	側下部～底部破片。口径8.2cm。素ロクロ調節。外面：底部木炭痕、体部厚底。内面：ナナデ。		020
7	上部器物	1	床面	1	側下部～底部破片。口径8.8cm。素ロクロ調節。外面：底部ナナデ。体部ハナメ、厚底。内面：ナナデ。		020
8	上部器物	I A	床面	1/1	口縁～側上部破片。口径17.5cm。素ロクロ調節。外面：側部ハナメ～口縁ヨコナデ。内面：口縁ヨコナデ、側部ハナメナナデ。	31-17	020
9	上部器物	I A	床面	1/2	口縁～側上部破片。口径19.8cm。素ロクロ調節。外面：ハナメ～口縁ヨコナデ。内面：ナナデ、厚底。	31-18	020
10	箇唐器環	C1	床面	1/2	口径12.8cm、底径5.0cm、高さ4.8cm。外面：底部ヘラ切ツ。焼成不良。	32-3	020
11	箇唐器環	B4	床面	完形	口径15.5cm、底径5.5cm、高さ3.8cm。外面：底部切り離し不明。体下部～底部手持ちヘラケズリ。両面火摺痕。焼成良好。	32-4	020
12	箇唐器環	A5	床面	1/1	口縁～底部破片。口径13.8cm。外面：体下部手持ちヘラケズリ。重ね焼き痕。基盤断面は流紋构造（北野他、1994、北野、2001）。焼成良好。		020
13	箇唐器環	B4	床面	1/1	口径14.4cm、底径6cm、高さ4.2cm。外面：底部ヘラ切ツ～体下部～底部手持ちヘラケズリ。両面火摺痕。焼成良好。	32-2	020
14	板状鉄製品	(床面)	破片	現存5.3cm。幅約3.0cm、厚さ1.5mm。両面欠損。錆斑丸。曲がる。		37-34	030

第96図 S-138竪穴住居跡出土遺物(1)～床下土壌・ピット・床面の遺物



番号	種類	細分類	個数	現存	特徴	写真	収納
15	土器部環	埋上1層	1/4		口径13.4cm、高さ3.0cm。丸底気味。表クロコ調査。外縁：口縁下部ヨコナギ。横位沈縫！集、体下部～底部手持ちヘタケリ。厚壁。内縫：ヘラミカキ～黑色経斑。		020
16	土器部環	I 土器部 破片			制上～底部分成片。底径9.9cm。表クロコ調査。外縁：底部本剥離。斜下部ナギ。内縫：ヘラナギ。		020
17	土器部環	I 地穴 破片			制上～底部分成片。底径7.6cm。表クロコ調査。外縁：底部本剥離。斜下部ナギ。内縫：ナギ。		020
18	土器部环	埋上1層 破片			制上～底部分成片。底径3.5cm。表クロコ調査。外縁：ナギ。内縫：ナギ。		020
19	土器部環	I 地穴 破片	4/5		口径14.4cm。底径9.4cm。表クロコ調査。外縁：口縁ヨコナギ。内縫：ヨコナギ。ヘラナギ。	31-19	020
20	鉢部環	C2 埋上2層	4/5		口径15.2cm。底径10.0cm。高さ3.9cm。外縁：底部切り離し切口。下部～底部分持手ヘタケリ。底部表面は直文様。焼成不良。	32-5	020
21	鉢部環	A4 埋上1層	4/5		口径14.9cm。底径9.4cm。高さ3.3cm。外縁：底部切り離し切口。下部～底部分持手ヘタケリ。底部表面は直文様。焼成不良。	32-6	020
22	鉢部環	C2 埋上1層 破片			制上～底部分成片。底径9.6cm。外縁：底部切口離し切口。下部～底部分持手ヘタケリ。底部。焼成不良。		020
23	鉢部環	A1a 埋上2層	1/2		底部～口縁破片。つまみ穴径16.0cm。外縁：切口離し切口～開閉部ヘタケリ～ハサウエ接合～内凹クロコナギ。焼成不良。		030
24	漆器部環	B4 埋上2層			漆着した下巻ねの漆器部環。黒墨染の不良品。高さ6.3cm。下から1枚目は口縁/4残存。下から2枚目は口縁1/3残存。下から3枚目は口縁1/2～底部分成片。底径4.1cm。高さ9.5cm。器高3.5cm。下から4枚目は口縁1/2～底部分成片。口径14.4cm。底径9.4cm。表クロコ調査。外縁：ヨコナギ。内縫：ナギ。下から5枚目は口縁1/2～底部分成片。底径4.5cm。底径9.4cm。表クロコ調査。外縁：ヨコナギ。内縫：ナギ。下から6枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から7枚目はいすれも底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から8枚目はいすれも底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から9枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から10枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から11枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から12枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から13枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から14枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から15枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から16枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から17枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から18枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から19枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から20枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から21枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から22枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から23枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から24枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から25枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から26枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から27枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から28枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から29枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から30枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。	32-8	020
25	漆器部環	B4 埋上2層			漆着した下巻ねの漆器部環。黒墨染の不良品。高さ6.3cm。下から1枚目は口縁/4残存。下から2枚目は口縁1/3残存。下から3枚目は口縁1/2～底部分成片。底径4.1cm。高さ9.5cm。器高3.5cm。下から4枚目は口縁1/2～底部分成片。口径14.4cm。底径9.4cm。表クロコ調査。外縁：ヨコナギ。内縫：ナギ。下から5枚目は口縁1/2～底部分成片。底径4.5cm。底径9.4cm。表クロコ調査。外縁：ヨコナギ。内縫：ナギ。下から6枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から7枚目はいすれも底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から8枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から9枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から10枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から11枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から12枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から13枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から14枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から15枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から16枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から17枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から18枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から19枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から20枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から21枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から22枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から23枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から24枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から25枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から26枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から27枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から28枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から29枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。下から30枚目は底部分成片。底部～底部分持手ヘタケリ。いすれも能と者ではない。表面1/3にはほかかぶり。	32-9	020
26	鉢	埋上2層 破片			長径式変形器。先端尖。腹身側面は丸丸。腹部は腹側による茎を作らない。腹身側面は無側面。現存長6.1cm。腹身幅1.6cm。長径6.3cm。腹身幅1.6cm。	37-9	030
27	鉢	埋上1層			長径式変形器。基木端欠損。腹身側面は丸丸。腹部は腹側による茎を作らない。腹身側面は無側面。現存長6.1cm。腹身幅1.6cm。長径6.3cm。腹身幅1.6cm。	37-11	030
28	鉢?	西周			鉢底または月字の茎葉片か。現存長6.0cm。腹身5.5～3.5mm長方形。		030
29	鉢?	埋上1層 破片			鉢底または月字の茎葉片か。現存長6.0cm。腹身6～4mm長方形。		030
30	須石	埋上1層 原形			網状や岩質、板状。上面研削・削痕。中核。長さ17.2cm。幅14.2mm。厚さ5.1cm。	39-1	035

第97図 S I 35堅穴住跡出土遺物(2)－堆積層などの遺物

須恵器壺（11・13）は体下部～底部が手持ちヘラケズリされ、体部が直線的に外傾し、ロクロナデや胎土・焼成もこの接着した須恵器壺（24・25）と類似している。同一窯の製品とみられる。

この他、須恵器壺には体部～底部が手持ちヘラケズリされたもの（12・20・22）、底部が手持ちヘラケズリされたもの（21）、体下部～底部が回転ヘラケズリされたもの（2）、底部がヘラ切りのもの（10）がある。これらは接着した須恵器壺（24・25）とは別の窯の製品とみられる。

また、土師器はいずれも非ロクロ調整のもので、土師器壺には体下部に横位に1条の沈線が施された丸底気味のもの（15）がある。

【S I 39堅穴住居跡】（平面図・断面図・遺物：第98図）

〔位置〕 調査区南東部の北斜面落ち際、丘陵尾根上北寄りの標高28.0m付近に位置する。

〔重複〕 S X 2遺物包含層2層と重複し、これよりも新しい。また、西側のS I 38堅穴住居跡と近接し、これとは同時には存在しない。南辺際が残るのみで、他は床面下まで大きく削平されている。

〔平面形・規模〕 平面形は方形とみられ、規模は東西が南辺で3.5mある。

〔方向〕 南辺の方向からみると、西辺・東辺は北で東に約25°偏るとみられる。

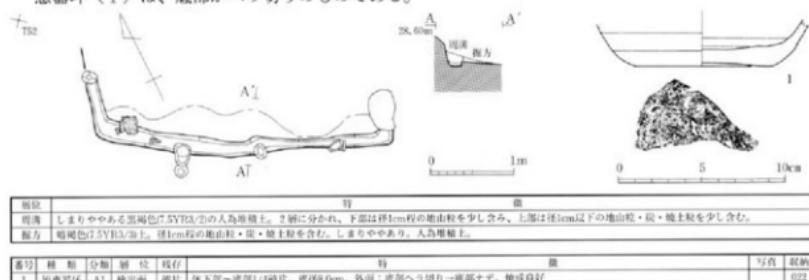
〔主柱穴〕 主柱穴の有無は不明である。

〔カマド〕 カマドの位置は不明であるが、南辺以外に付設されていたと考えられる。

〔周溝〕 幅15～20cmの周溝を南辺、南西隅、南東隅で検出した。周溝内に火災時の炭化材や焼土、炭が落ち込んできたことから、開渠の状態で機能していたものと考えられる。

〔堆積土〕 床面上は削平され、床面上には堆積土ではなく、周溝内に火災時の自然堆積土がある。

〔出土遺物〕 検出面から非ロクロ調整の土師器甕・須恵器壺（1）・甕などの破片が少数出土した。須恵器壺（1）は、底部がヘラ切りのものである。



第98図 S I 39堅穴住居跡平面図・断面図（1/60）、出土遺物

【S I 35堅穴住居跡】（平面図・断面図・遺物：第99図、図版15-3）

〔壁〕 検出面から床面までの壁の高さは、南辺で30～50cmあり、約105°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。壁の上部は崩れている。

〔床面〕 床面は削平されているが、掘方埋土上面を床面としている。床面の周溝際に炭化材、炭片、焼土があり、火災によって焼失したものとみられる。

〔位置〕 調査区南東部東端の北斜面落ち際、丘陵尾根上北側の標高27.0m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。西辺際が残るのみで、他は床面下まで大きく削平されている。

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は南北が西辺でmである。

〔方向〕西辺でみると北で西に約33°偏る。

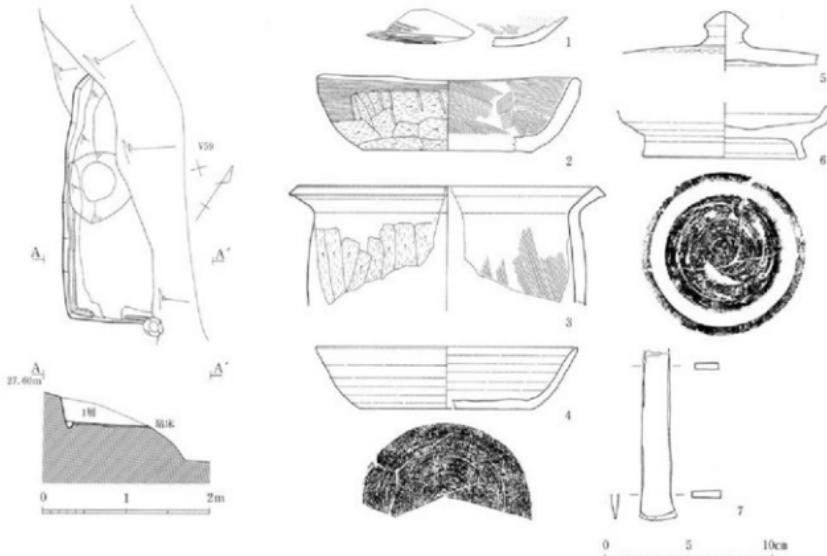
〔壁〕検出面から床面までの高さは、西辺で約30cmあり、約105°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、貼床上面を床面としている。

〔主柱穴〕主柱穴はないとみられる。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔壁材痕〕西辺で幅7cm、深さ5cmの壁材抜取痕跡と考えられる幅狭い溝とその脇の浅い掘方を検出した。いずれも人為的に埋められている。



施設	特徴	写真	収納			
壁構成部	黒色(2.5Y2/3)土。地山粘。淡黄色粘土ブロックを含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。					
窓構	黒色(10YR2/1D)土。径1cm程の地山上ブロックを含む。しまりやあり。粘性なし。人為堆積土。					
貼床	黄褐色(10YR5/8)土。灰黄褐色(10YR6/2)粘土ブロック多く含む。人為堆積土。					
埋土上層	黒褐色(2.5Y3/1D)土。径1cm程の地山上小ブロックを多く含む。炭粒を含む。しまりややあり。粘性なし。人為堆積土。					
番号	種類	分類	施設	特徴	写真	収納
1	土縫苔環	I 1/2	埋土上層	破片 体下部一部放散。外縁ハケメ?、摩滅。内面:ヘリコタキ=泥色地帯。		013
2	土縫苔環	I C2	床面	1/4 径15.8cm、底径10.0cm、器高4.5cm、体部0.9cmと判り、内面クロ調整。外縁:口縁一部コナデ→体部手持ちヘラケスリ、底部ナダ。内面:ナダ。内面全体に第2み、黑色地帯または焼成されている可能性がある。外縁に黒斑。燒成良好。	31-1	013
3	土縫苔跡	II	埋土上層	1/4 口縁~体上部断片。口縁短くひねり出し。内面研とす。外縁:コナデ一部手持ちヘラケスリ、内面:クロコナデ一部手持ちヘラケスリ。外縁:底部切欠し不明一部~底部底盤部ヘラケスリ。体部に漆状焼付帯。		013
4	土縫苔環	A2	床面	1/3 口径15.8cm、底径10.2cm、器高3.7cm。外縁:底部切り離し不明→底盤部軸ヘラケスリ。内面:火難痕・花斑焼付帯。地盤。	31-2	013
5	底盤苔蓋	埋土上層	破片	つまみ足部~体底断片。口縁欠損。底盤状つまみ。つまみ径2.6cm、つまみ高2.0cm。外縁:体部回転ヘラケスリ。二次加工。	31-3	013
6	茎苔苔青苔	Au1/2	床面	体下部一部。底部完全放散。高台径9.8cm、高台高1.3cm。外縁:底部切り離し不明~体下部~底盤部軸ヘラケスリ→付高台。地盤強。	31-4	013
7	茎苔苔青苔 (タガホ)	埋土上層	破片	先端丸く欠損。内部充填。内面粗欠損。底部排泄孔。刃先がやや横曲肉薄。両刃、刃部と柄部の規範なし。刃先幅約1.0cm。刃先長さ約1.5cm。刃先前面直角で、最大幅1.2cm、厚さ1.5mm。柄部を反曲し、古墳時代~六朝時代、輪郭多くが見出されるため、輪郭輪郭判定ができない。系・茎葉なく、通常見受けられては輪の可能性が高い。茎葉は説が付いて解釈がなされているが、輪郭輪郭である。	37-38	030

第99図 S135竪穴住居跡平面図・断面図 (1/60)、出土遺物

【堆積土】床上の堆積土は1層で、人為的に埋められている。

【出土遺物】床面から土師器壊(2)・甕・須恵器壊(4)・高台壊(6)などの破片、埋土から土師器壊(1)・鉢(3)・甕・須恵器壊・蓋(5)・甕などの破片、^壺または^壺豊(7)が少數出土した。このうち土師器は主体を占める壊・甕が非ロクロ調整で、1点のみある鉢がロクロ調整である。土師器壊には丸底気味のもの(1)、平底で器厚が厚く、内面が一般的なヘラミガキではなくナデ調整されている器形・調整が特異なもの(2)とがある。豊か豊(7)は、刃部が両刃で、撥状になるもので、柄頭を欠損しているため、豊か豊か区別できないものである。いずれにしても古代のものとしては、類例がきわめて少ないものである。

【S I 22豊穴住居跡】(平面図:第100図、断面図:第101図、遺物:第102図、図版11-4・6)

【位置】調査区南東部、丘陵尾根上の標高30.5m付近に位置する。

【重複】主要遺構との重複はない。東に隣接するSI23豊穴住居跡とは同時には存在しない。床面レベルは、S I 22豊穴住居跡がS I 23豊穴住居跡よりも25cm高い位置にある(第101図断面B-B')。南東部は床面下、周溝底面下まで大きく削平されている。

【廃絶の原因】火災による焼失。

【平面形・規模】平面形は長方形で、規模は南北が西辺で5.9m、東西が北辺で5.1mである。

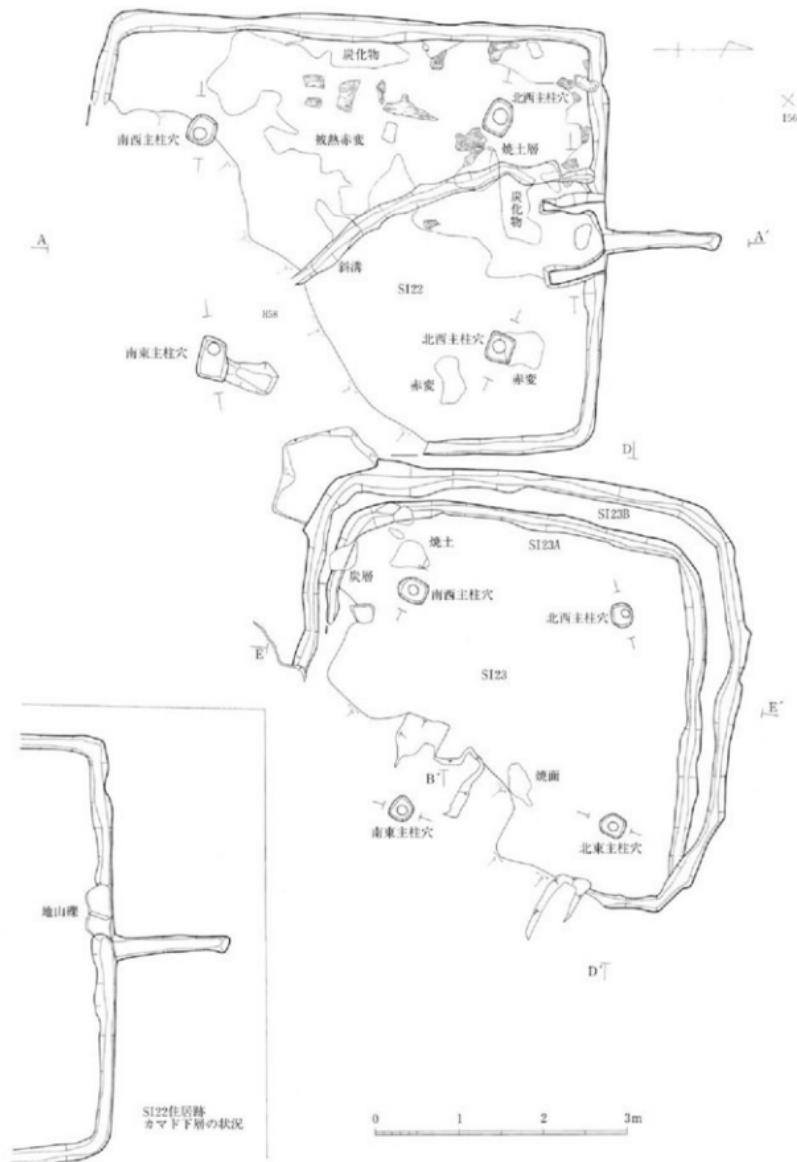
【方向】西辺でみると北へ約3°偏る。

【壁】検出面から床面までの高さは、最も残りのよい北西隅で42cmあり、西辺北半で30~35cm、北辺西半で30~40cmある。壁はほぼ直に立ち上がる。北辺東半では15~25cmとやや残りが悪く、東辺北半は3cm以下、南辺は8cm以下ときわめて残りが悪い。

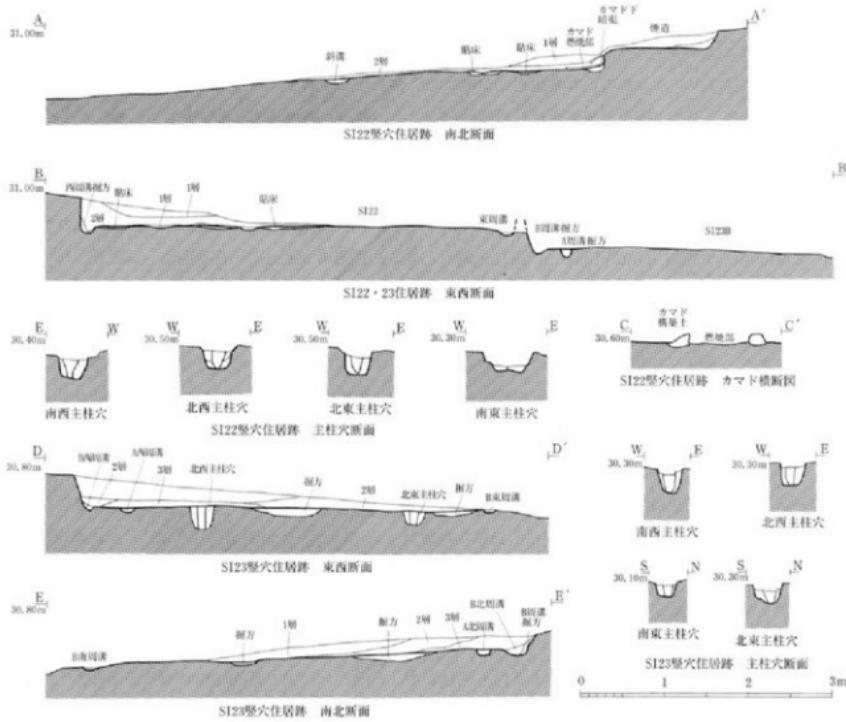
【床面】床面はほぼ平坦で、貼床上面と地山面(粘板岩岩盤)を床面としている。床面上には火災によって生じた炭化物や炭化材、被熱赤変した箇所が特に北西部を中心に広く認められた。

【主柱穴】豊穴住居跡の対角線上で、北西・北東・南西・南東主柱穴を検出した。北西主柱穴は長辺43cm、短辺30cmの不整長方形で、深さ27cm、北東主柱穴は長辺35cm、短辺30cmの長方形で、深さ32cm、南西主柱穴は長辺36cm、短辺33cmの隅丸長方形で、深さ34cm、南東主柱穴は長辺50cm、短辺37cmの長方形で、深さ22cmある。各主柱穴で径14cm前後の円形の柱痕跡を確認した。掘方には炭片・焼土粒を含まず、柱痕跡に炭片・焼土粒が多く含まれ、本豊穴住居跡の焼失を裏付けている。柱間寸法は北西主柱穴-南西主柱穴間が3.6m、北東主柱穴-南東主柱穴間が3.5m、北西主柱穴-北東主柱穴間が2.8m、南西主柱穴-南東主柱穴間が2.6mである。柱痕跡の位置でみると、北西主柱穴は西辺から約1.1m、北辺から約1.3m離れ、北東主柱穴は東辺から約1.3m、北辺から約1.2m離れ、南西主柱穴は西辺から約1.4m離れている。

【カマド】北辺ほぼ中央に付設されている。カマドの向きは丘陵尾根に対して約45°偏り、斜面上方のほぼ北を向く。カマドの天井部は崩壊していたが、両側壁、奥壁、燃焼部、煙道が残存していた。左側壁は長さ78cm、高さは奥で32cm、焚き口で7cm、右側壁は長さ75cm、高さは奥で24cm、焚き口で7cm残存していた。両側壁の内側は被熱のため著しく赤変硬化していた。両側壁外側の幅は下部で1.1mある。カマド側壁はにぶい黄橙色土で構築されている。燃焼部は奥行き70cm、幅



第100図 SI 22・23A・23B 整穴住居跡平面図 (1/60)



住居跡	層	特	圖
SI22	地床	に古い黄褐色(10YR4/3)土。径0.5~1.5cmの粘板岩風化礫片が多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。	
	上柱穴側方	に古い黄褐色(10YR4/3)土。径1~5cmの粘板岩風化礫片を多量に含む。しまりよい。粘性なし。人為堆積土。	
	上柱穴隙縫	粘板岩(10YR3/1)土。径0.5~1cmの粘板岩風化礫片を多く、径4mm以下の細粒土を少含む。	
	カマド構築上	に古い黄褐色(10YR4/4)土。径2~3cmと径3cmの粘板岩風化礫片を含む。しまりあり。人為堆積土。	
	カマド構築部	に古い赤褐色(10YR4/3)土。砂を多量含む。	
	カマド下塙面	カマド下中央に配置された石垣状の堆山状岩石壁があり、表面が熱を受けて赤茶。周溝より認る暗渠はこの壁の両側で止まる。暗渠埋土は暗褐色(10YR4/3)土で、径0.5~1cmの粘板岩風化礫片を多く含み、しまりあり。	
	埋土	2層に分かれ。下層は黒褐色(10YR2/3)土で、炭化物・鐵土・鐵礫片を少含む。しまりややあり。粘性なし。上層は尾泥(30YR4/4)土で、径0.5~2cmの粘板岩風化礫片と径4mm以下の細粒土を少含む。しまりややあり。粘性なし。	
	周溝側方	暗褐色(10YR4/3)土。径0.5~1cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりややあり。粘性なし。人為堆積土。	
	斜溝	黒褐色(10YR3/1)土。径0.5~1cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまり・粘性なし。火災前の自然堆積土。	
	堆積土1層	に古い黄褐色(10YR4/3)土。径0.5~5cmの粘板岩風化礫片を多量に含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。	
	堆積土2層	暗褐色(7.5YR3/1)土。変質した径0.5~3cmの粘板岩風化礫片、鐵土粒を多く含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。	
	堆積土3層	後の薄い層。火災時の自然堆積土。	
SI23A	下柱穴側方	に古い黄褐色(10YR4/3)土。径0.5~3cmの粘板岩風化礫片を多量に含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。	
	下柱穴隙縫	粘板岩(10YR3/1)土。径0.5~1cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりなし。	
	A周溝	粘板岩(10YR3/3)土。径0.5~3cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。	
SI23B	日方側方	に古い黄褐色(10YR4/3)土。径0.5~2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりややあり。粘性なし。人為堆積土。	
	日周溝	黒褐色(10YR3/2)土。径0.5~2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまり・粘性なし。人為堆積土。	
	埋土1層	暗褐色(10YR4/2)土。径0.5~3cmの粘板岩風化礫片を多量に含む。しまり・粘性なし。人為堆積土。	
	埋土2層	に古い黄褐色(10YR4/2)土。径5mm程度と3cm程度の粘板岩風化礫片を含む。しまりややあり。粘性なし。人為堆積土。	
	埋土3層	暗褐色(10YR4/3)土。径0.5~3cmの粘板岩風化礫片。灰土を含む。しまり・粘性なし。人為堆積土。	
SI23	転方	に古い黄褐色(10YR4/3)土。径0.5~2cmの粘板岩風化礫片を多量に含む。しまりよく。粘性なし。人為堆積土。	

第101図 S 122・23A・23B 穫穴住居跡断面図 (1/60)

65cm、奥壁高13cmで、奥壁から焚き口にかけてなだらかに傾斜し、焼土が堆積し、被熱・赤変していた。

右側壁と燃焼部の下には人為的に埋め戻された暗渠があり、その掘方は周溝に続いていた。左側壁の下には地山に含まれていた粘板岩礫がそのまま掘り起こされずに残っていた。そして、地山掘り残しの礫の上に左側壁が構築され、周溝の掘方はこの礫の左際で途切れていた。

煙道はカマド奥壁より外に向かって長さ1.4m延びる。カマド奥壁から煙道入り口にかけてやや上向きに傾斜するが、それより先はほぼ水平に延びている。煙道入り口付近の側壁は、火熱のために赤色硬化していた。トンネル式の煙道の天井部は削平され、深さ18cm残存していた。煙道の最大幅は33cmで煙道入り口部あり、次第に先細りとなる。煙道の先端は若干窪められ、煙出しとなっている。煙出しは煙道先端の幅と同じで、ピット状となっていない。

〔周溝〕北辺・西辺、および東辺・南辺の一部で、幅15~25cm、深さ5cm前後の周溝掘方を検出した。東辺・南辺の多くは削平されていたが、周溝掘方は四辺を巡っていたとみられる。周溝掘方は浅く埋め戻され、その中に焼土・炭が堆積していた。中央が窪むような状態で機能していたことが窺える。なおカマド下では、地山に含まれる粘板岩礫を掘り残した箇所の両側で、周溝掘方が途切れている。

〔斜暗渠〕カマド左脇の北周溝掘方から住居中央に向けて斜めに暗渠が設けられている。掘方は幅14~25cm、深さ5cm前後で、火災前に人為的に埋め戻されていた。位置関係からみて、カマド前面の乾燥を意図した暗渠とみられる。中央から先は削平されて残存していないが、南東隅の周溝掘方に接続していた可能性がある。

〔堆積土〕床面上の堆積土は3層に分けられ、いずれも火災以降の自然堆積土である。

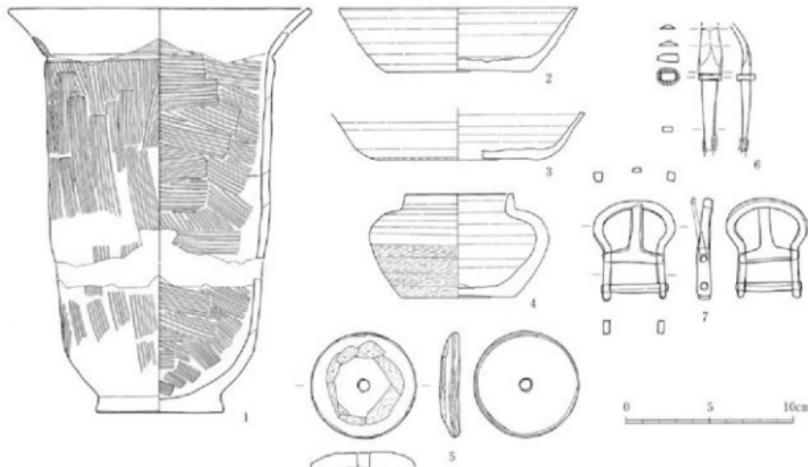
〔出土遺物〕焼失した竪穴住居跡であるにも関わらず、床面からの出土遺物はきわめて少なく、土師器甕破片が少數出土したにすぎない。火災直前に食膳具を含めた家財道具一式を持ち出したことが窺える。カマド内からは土師器甕1点（1）の他、非ロクロ調整の土師器甕、須恵器環破片が少數出土した。周溝からは体下部～底部が回転ヘラケズリされた須恵器環底部破片1点、煙道からは土師器甕、須恵器甕の破片が少數出土した。埋土からは残存率の高い須恵器環2点（2・3）、ほぼ完形で小型の須恵器短頸壺1点（4）、完形の土製紡錘車1点（5）と鉄製鉗具1点（7）、ほぼ完形の鉗1点（6）の他、土師器甕、須恵器蓋・甕の破片が少數出土した。

このうち土師器はいずれも非ロクロ調整のもので、1の土師器甕はカマドで使用されていたかカマドの芯材に使用された可能性もある。鉄製鉗具（7）は馬具で、壺鏡の鏡軸金具である兵庫鎖の先に取り付き、力革を通して鞍に下げる鉗具が面懸・胸懸・尻懸の鉗具とみられる。鉗（6）は刃先・茎尻欠損する。刃部は平面形が鋸形、断面形が片鎬造の両刃で、内反りとなり、撫角の両側で茎部と区別される。茎部には^茎鉗が装着されている。茎部には部分的に木質が残る。

【S I 23竪穴住居跡】（平面図：第100図、断面図：第101図、遺物：第103図、図版11-5・6）

〔位置〕調査区南東部、丘陵尾根上の標高30.5m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。S I 23竪穴住居跡は、床面レベルを同じくして一度建て替えられ、



番号	種類	分類	部位	残存	特徴		写真	版納
					内面	外		
1	上部器面	IA	カマ内口沿	破片	口縁欠損部と非融合の剥下部～底部破片。底径7.5cm。器高約24cm。芯クロ調査。外側：ハケメ→口縁②	26-21	919	
2	頸部器环	BI	埋土1層	1/2	口径14.2cm、底径8.6cm、高さ3.8cm。外側：底部へ切り。焼成不良。	27-1	919	
3	頸部器环	A5	埋土1層	1/2	底径9.5cm。外側：底部へ切り離し不明～底部下部～底部内側へラグゼリ。焼成良好。表面に火神痕。	27-2	919	
4	頸部器环	BI	埋土1層	9/10	口径9.5cm。底径7cm。器高約2cm。最大径10.7cmで、体中央部に最大径を位置する。(1)側面は高さ9mmと短く直立する。(2)表面：クロロゲー化部へ切り離し不明～底部下部～底部内側へラグゼリ。脂土破砕で、砂粒少混合。焼成	27-3	919	
5	土製油瓶串	埋土2層	完形		土製。肩部有肩。肩部内側膨らむ。底面滑台形。口径6.3cm、持抜3.4cm、厚さ1.1cm、袖孔Ø0.5cm、重量17g。上面ケズ	26-12	926	
6	鉢		破片		丸底。基底突出。刃部は平滑形か斜面形。断面が円錐形の両端で、内反りとなり、側面の両端で茅茎と区別される。周縁には柱状が残されている。葉茎は裏面に向かって幅・長さを減じ、部分的に本質質を残る。現存径7.5cm、現存刃長2.6cm。刃部最大1.3cm。刃部Ø2.5mm。現存底径4.4cm。素盞鳴形長方形で、底の最大幅×厚は施装部面あり、最大幅Ø5mm、最大厚5mm。刃部Ø1.3cm、厚さ1.1mmの板状を施す。刃部Ø1.3cm、厚さ1.1mmの板状を施す。刃部Ø1.3cm、厚さ1.1mmの板状を施す。	27-20	929	
7	鉢具		埋土1層		馬具。表面の鋲頭金具である兵馬頭の表面に取り付け。力量を通じて鏡に打ちられる鏡目とみられる。長さ6.0cm、幅4.5cm。日本に由来されたものと日本に利用される料金と兵馬頭が取付けられる様子が記述されている。剝余は先端部の刃部と底面の刃部である。現存刃長2.5cm、刃部Ø5mm。刃部Ø1.3cm、厚さ1.1mmの板状を施す。馬具	27-1	929	

第102図 S I 22豊穴住居跡出土遺物

北辺・西辺・東辺が40~50cm外側に拡張されている。拡張前の古い住居をS I 23A豊穴住居跡、拡張された新しい住居をS I 23B豊穴住居跡とする。いずれも南東部は床面下、周溝底面下まで大きく削平されている。また、西に隣接するS I 22豊穴住居跡とは同時に存在しない。床面レベルは、S I 22豊穴住居跡がS I 23豊穴住居跡よりも25cm高い位置にある（第101図断面B-B'）。

〔S I 23A豊穴住居跡〕

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸正方形で、規模は南北が西辺で4.4mある。東西は北辺で4.4m前後と推定される。

〔方向〕 西辺でみると北で西に約6°偏る。

〔壁〕 床面レベルを同じくしてS I 23B豊穴住居跡に拡張されているため、壁の高さはない。

〔床面〕 S I 23B豊穴住居跡の床面とほぼ同じとみられる。床面下の掘方はS I 23A豊穴住居跡かS I 23B豊穴住居跡の構築に伴うものだが、どちらか判断できない。

〔主柱穴〕 後述するように、S I 23豊穴住居跡の床面上の4箇所で主柱穴を検出した。これら4箇所

の主柱穴で柱痕跡を確認し、S I 23B 壁穴住居跡が人為的に埋められていることから、これらの主柱穴は S I 23B 壁穴住居跡に伴い、柱材が床面近くで切り取られているとみられる。これら 4 箇所の主柱穴を断ち割り調査したが、いずれも重複は認められなかった。S I 23A 壁穴住居跡に主柱穴があつてこの新しい主柱穴と完全に重複していたか、主柱穴がなかったと考えられる。

〔カマド〕 カマドの位置は不明だが、残存状況から南辺か東辺に付設されていたものと考えられる。

〔周溝〕 検出された各辺幅 15~23cm、深さ約 10cm の周溝を検出した。東辺・南辺の削平箇所にも本来は巡らされていたと考えられる。拡張された際に人為的に埋められている。

〔堆積土〕 拡張されているため、周溝以外に堆積土はない。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

《S I 23B 壁穴住居跡》

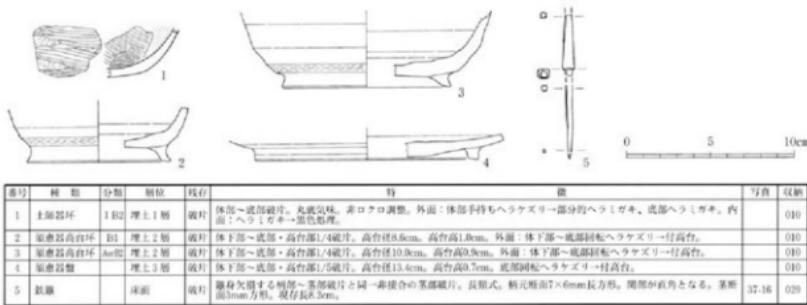
〔平面形・規模〕 平面形はほぼ隅丸正方形で、規模は南北が西辺で 5.2m、東西が北辺で 4.9m である。

〔方向〕 西辺でみると北で西に約 4° 傾む。

〔壁〕 検出面から床面までの高さは、比較的残りのよい北西隅で 39cm あり、約 110° の傾斜でやや斜めに立ち上がる。北辺東半では 10cm 以下、東辺・南辺では 2cm 以下と残りは悪い。

〔床面〕 床面はほぼ平坦で、地山面（粘板岩岩盤）と一部は掘方上面を床面としている。床面上には南西主柱穴の西隣と北東主柱穴の南側に小規模な焼面、南西隅付近に炭化物の多い箇所がある。

〔主柱穴〕 壁穴住居跡の対角線上で、北西・北東・南西・南東主柱穴を検出した。北西主柱穴は長辺 30cm、短辺 25cm の隅丸長方形で、深さ 26cm、北東主柱穴は長辺 30cm、短辺 25cm の隅丸長方形で、深さ 26cm、南東主柱穴は長辺 30cm、短辺 27cm の不整形で、深さ 20cm、南西主柱穴は長辺 35cm、短辺 28cm の隅丸長方形で、深さ 30cm ある。各主柱穴で径 13cm 前後の円形の柱痕跡を確認した。SI 23B 壁穴住居跡が人為的に埋められていることから、柱材は床面近くで切り取られているとみられる。柱間寸法は、北西主柱穴-南西主柱穴間、北東主柱穴-南東主柱穴間、北西主柱穴-北東主柱穴間、南西主柱穴-南東主柱穴間が 2.5~2.6m とほぼ等しい。柱痕跡の位置でみると、北西主柱穴は西辺から約 1.1m、北辺から約 1.3m 離れ、北東主柱穴は東辺から約 1.3m、北辺から約 1.2m 離れ、南西主柱穴は西辺から約 1.4m 離れている。



第103図 S I 23B 壁穴住居跡出土遺物

【カマド】 カマドの位置は不明だが、残存状況から南辺か東辺に付設されていたものと考えられる。
 【周溝】 検出された各辺で幅15~23cm、深さ5cm前後の周溝を検出した。東辺・南辺の削平箇所にも本来は巡らされていたと考えられる。北辺の一部に掘方埋土があり、機能時には一部埋め戻されて開渠の状態であったとみられる。廃絶時に人為的に埋められている。

【堆積土】 床面上の堆積土は3層に分けられ、いずれも人為堆積土である。

【出土遺物】 出土遺物は少なく、床面から鉄錠破片1点(5)の他、土師器壺・甕の破片、主柱穴から土師器甕破片、埋土から土師器壺(1)・甕・須恵器壺・高台壺(2・3)・盤(4)の破片が少數出土した。このうち土師器はいずれも非クロロ調整のもので、須恵器高台壺(2・3)は体下部~底部の回転ヘラケズリ後に付高台され、須恵器盤(4)も底部回転ヘラケズリ後に付高台されている。

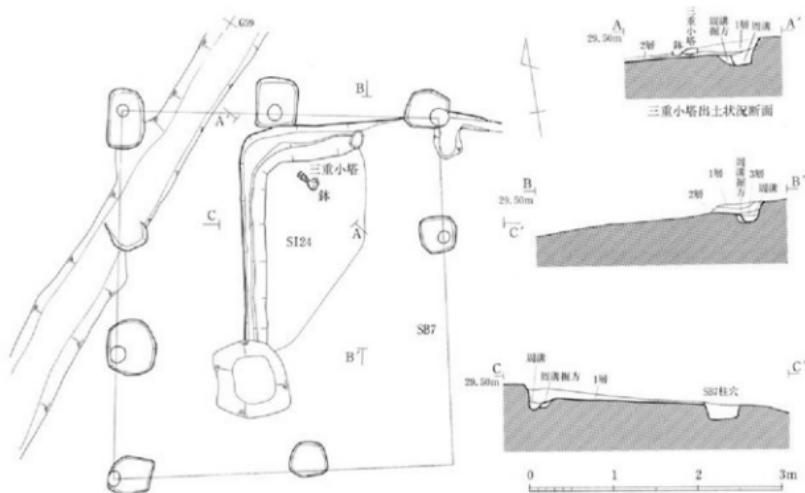
【S I 24堅穴住居跡】(平面図・断面図: 第104図、遺物: 第105図、図版12)

【位置】 調査区南東部の端近く、丘陵尾根上の標高29.0m付近に置する。

【重複】 S B 7 振立柱建物跡と重複し、これよりも古い。北西部を残すのみで、それ以外は床面下と周溝底面まで大きく削平され、残りが悪い。

【平面形・規模】 平面形は方形とみられ、規模は南北が西辺で2.5m以上、東西が北辺で3.0m以上である。

【方向】 西辺でみると北で東に約8°偏る。



周溝方面	灰黄色(10YR5/2)土。傾20cm程の粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
周溝	に灰・黄褐色(10YR5/3)土。しまりあまりない。粘性なし。人為堆積土。
埋土1層	に灰・黄褐色(10YR4/3)土。傾3cm程の粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
埋土2層	褐褐色(10YR3/3)土。傾2cm程の粘板岩風化礫片。炭化物を多く、植土粒を少し含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。

第104図 S I 24堅穴住居跡平面図・断面図 (1/60)

〔壁〕検出面から床面までの高さは、残りの比較的よい北西隅で20cmあり、約90°～110°の傾斜ではほぼ直からやや斜めに立ち上がる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（粘板岩岩盤）を床面としている。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔周溝〕西辺・北辺で幅23～40cm、深さ8cm前後の周溝掘方を検出した。周溝掘方は一部埋め戻され、中央が窪んだ開渠の状態で機能していたとみられる。

〔堆積土〕床面上の堆積土は3層に分けられ、人為的に埋められている。埋土の上に間層を挟まざるSB7掘立柱建物跡が建てられていることから、SB7掘立柱建物跡を建てる際に埋められたものとみられる。

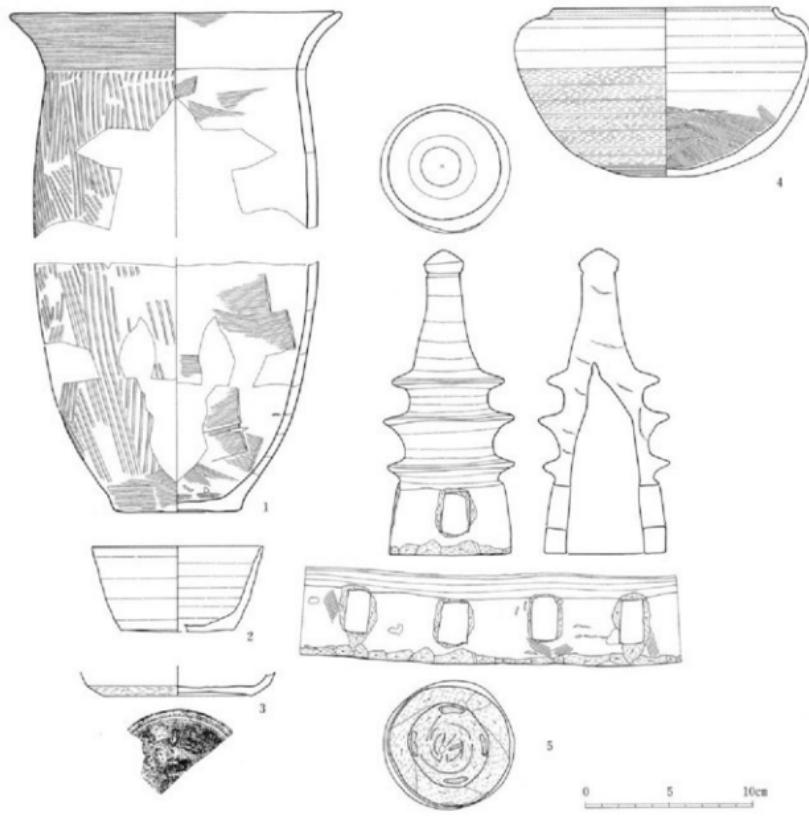
〔出土遺物〕出土遺物は少なく、埋土から土師器甕1点（1）、鉄鉢形の須恵器鉢1点（4）、須恵器質の三重小塔1点（5）の他、土師器坏・甕、須恵器坏（2）・高台坏の破片、検出面から須恵器坏（3）の破片が少數出土した。これらはいずれも本堅穴住居跡の廃絶時に人為的に埋められたものである。

三重小塔は完形で、本堅穴住居跡内の北西隅付近、床面から約5cm上で横倒しになり、その上に本来は完形であったとみられる鉄鉢形の須恵器鉢が被さった状態で出土した（第104図、巻頭図版2-2）。ピットなどの掘方はなく、人為的に埋め戻された埋土2層から出土したものである。きわめて特異な形態の完形の三重小塔を横倒しにして、さらにまた特異な器形の鉄鉢形の須恵器鉢で覆うといった特異な出土状況からみて、不要となったものが廃棄されたのではなく、SB7掘立柱建物跡を建てる直前に本堅穴住居跡を埋める過程で意図的に埋納されたものと考えられる。なお、内部の土を慎重に乾燥篩にかけたが、何も出土しなかった。

土師器はいずれも非クロロ調整のもので、土師器坏には両面がヘラミガキされてから両面が黒色処理された口縁部破片が1点ある。須恵器坏（2）は口径に比して器高の深い（器高/口径比0.5）いわゆる「コップ形」のもので、底部がヘラ切り後に軽くナデされている。須恵器坏（3）・高台坏は体下部～底部が回転ヘラケズリされている。

鉄鉢形の須恵器鉢（4）は、底部が丸底気味で、体部中央上部寄り～底部が回転ヘラケズリされている。口縁部が短く内傾し、鉄鉢形の須恵器鉢の中ではやや特異な口縁部形態であるが、全体的なプロポーションは鉄鉢形の須恵器鉢の範疇に入る。出土状況からみて、欠損部分は削平を受け、本来は完形であったとみられる。

須恵器質の三重小塔（5）は完形で、高さ18.3cm、底径7.8cmある。内面は底径4.6cm、高さ11.4cmの円錐状に底面より割り抜かれ、時計回り・螺旋状にヘラケズリされ、中空となっている。屋根は平面形が円形、断面が算盤玉状で、3重である。屋根に瓦は表現されていない。屋根の大きさは初重が径7.6cm、2重が径7.8cm、3重が径6.8cmある。軸部は初重が高さ4.3cm、径7.8cm、2重が高さ1.8cm、径5.4cm、3重が高さ1.3cm、径4.9cmある。軸部の初重には縦2.6cm前後、横1.64cm前後の縦長方形の透かしが4箇所開けられている。透かしの外周は透かし端より少し低くなるよ



番号	種類	分類	形状	現存	特徴	写真	取納
1	上脚部壺	E 壺上 1脚	2/4	口径1/4脚上部破片と蓋接合の脚下部へ底部分4/4破片。口径15.8cm、底径7.5cm、高さ約30cm。表面クロコ調。外面ハゲメー→1脚ヨコナギ、脚下部ナガ、底部ナギ。内面:口縁ヨコナギ、脚部ヨタナギ、脚下部→底部ナギ。		010	
2	底部器环	E 壺上 1脚	1/4	口径10.3cm、底径6.8cm、高さ5.1cm。外面:底部へ切りナギ。		010	
3	底部器环	A3 袋出面	1/4	直径8.6cm。外面:底部切り崩し、石片一休下部へ底部分軋ヘラケズリ。		010	
4	底部器体	B 壺上 2脚	2/4	底径約9.4cm、口縁部分は直角。最大径は体上部にあり(最大径17.8cm)、体部は丸味を帯びる。丸底輪柱。口径13.4cm、高さ10.4cm。外面:ローラナギ一体中段膨らみ周囲ヘラケズリ。内面:ヨタナギ一休下部→底部ナギ。	27-4	010	
5	三重小器	埋土 2脚	定期	目詰質。有土筋構成上げ・ロクロ成形。大きさ18.3cm、底径2cm。肩部は平出砂押目、腹部骨壺、底部骨壺。底へ2脚ある。初期形造で、外脚が内側斜面に張り出し、外側斜面に張り出している。また、外側の底部は直線した下端と底部は、右から左に向て手前から後へラケズリされている。また、初期外面は部分的にナガナギ、中期外面は内側斜面に張り出している。中期内部は内側斜面に張り出している。底部は表面凹む。中期内外・腹部底面はラケズリされていて、初期内部は内側斜面に張り出している。底部は表面凹む。底盤化されていて、初期底径7.2cm、足底径2.4cm、高1.6cm。宝珠の方に次段が1段水平に添る。地成堅緻、削赤褐色。瓶土に砂粒を少量含む。	26-2 26-1	011	

第105図 S1 24豊穴住居跡出土遺物

うに手持ちヘラケズリされ、表面から中に向けてヘラケズリされている。出入り口の扉を表現したものとみられる。また、初重の底面に接した下端と底部は、右から左に向て手持ちヘラケズリされている。また、初重外面は部分的にナデされ、粘土の付着が2箇所に認められる。相輪部は高さ7.2cmある。宝珠・擦管のみ表現され、露盤・伏鉢・請花・九輪・水煙・竜車は表現されず、表現が簡略化されている。焼きは須恵器質で、窯で焼かれたものである。焼成は堅緻で、暗赤褐色から灰褐色を呈する。胎土には砂粒を少量含み、化粧土などは塗布されていない。粘土紐を積み上げてからロクロを用いて三重小塔形に成形し、内部を底面から中空に削り抜き、軸部初重に長方形透かしを4箇所開けた後、軸部初重外面をヘラケズリし、さらにナデ調整している。

【S I 26堅穴住居跡】(平面図・断面図:第106図)

〔位置〕調査区南東部の端近く、丘陵尾根上の標高28.5m付近に置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。S B 7掘立柱建物跡と接近するため、これと同時に存在しえない。西辺近くが残存するのみで、それ以外は床面下まで大きく削平され、残りがきわめて悪い。

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は東西が西辺で3.7m、南北は南辺で1.1m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で西に約25°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは10cm以下と残りがきわめて悪い。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面(粘板岩岩盤)

A

を床面としている。

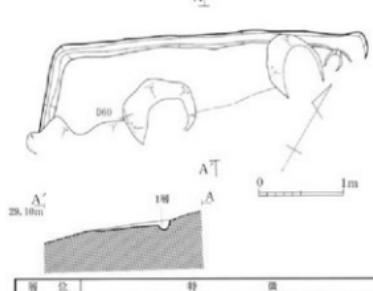
〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、北辺以外に付設されたものと考えられる。

〔周溝〕北辺、および南辺の一部で幅13~18cm、深さ4cmの周溝を検出した。

〔堆積土〕床面上、周溝内とも廃絶以降に堆積した同じ自然堆積層である。

〔出土遺物〕堆積土から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕破片が少数出土した。



第106図 S I 26堅穴住居跡平面図・断面図

【S I 27堅穴住居跡】(平面図・断面図・遺物:第107図)

〔位置〕調査区南東部の端近く、丘陵尾根上の標高27.5m付近に置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。西辺近くがわずかに残るのみで、他は床面下まで大きく削平され、残りがきわめて悪い。

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は南北が西辺で4.0m、東西は不明である。

〔方向〕西辺でみると北で東に約17°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは10cm以下と残りがきわめて悪い。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面(粘板岩岩盤)を床面としている。

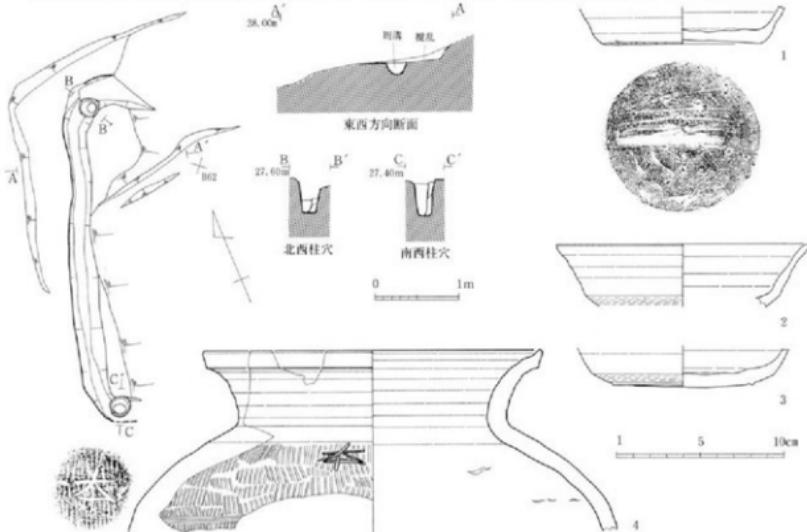
〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕 カマドの位置は不明だが、西辺以外に付設されたものと考えられる。

〔周溝〕 西辺で幅22~33cm、深さ7cm前後の周溝を検出した。周溝内は廃絶以降の自然堆積土である。周溝内の北西隅、南西隅で柱穴を検出した。北西隅柱穴の掘方は径24cmの不整円形で、深さ30cmあり、柱痕跡は径14cmの円形である。南西隅柱穴の掘方は径24cmのほぼ円形で、深さ44cmあり、柱痕跡は径14cmの円形である。

〔堆積土〕 攪乱が床面上まで入り、堆積土は周溝内にのみあり、自然堆積土である。

〔出土遺物〕 堆積土から非クロコ調整の土器器甕、須恵器壺（1・2）・高台环・壺（4）の破片、攪乱から須恵器高台环（3）の破片が少数出土した。このうち須恵器壺には底部をヘラ切り後に体下部～底部を手持ちヘラケズリしたもの（1）、体下部を回転ヘラケズリしたもの（2）がある。須恵器高台环（3）は、底部～底部を回転ヘラケズリした後に、体部下端にケズリ出し（きついロクロナデ）による低い疑似高台を作り出し、底部が疑似高台よりも下に突き出ている。これまでこうした特徴を持つ須恵器高台环は県内で知られていない。類例は後述するが、北関東にみられる。また、須恵器甕（4）は外面体上部に「卒」（「本」の異体字）と焼成前に刻書されている。



構造		特徴		寸法	取扱		
柱穴掘方		暗褐色(10YR3/3)～深い黄褐色(5YR6/4)土。径0.5~5cmの板状剥離化粧片を多く含む。しまりあり。人為堆積土。					
柱穴痕跡		暗褐色(10YR3/3)土。粘板岩風化粧小片を含む。しまりない。					
周溝		黒褐色(10YR2/2)土。しまりない。自然堆積土。					

番号	種類	部位	分類	層位	特徴		寸法	取扱	
					層位	圖			
1	須恵器壺	堆積土	B4	堆積土	体下部～底部完全焼成片。底径9.4cm。外側：底部ヘラ切り→体下部手持ちヘラケズリ。底部粗面な手持ちヘラケズリ。難成不良。		27.5	012	
2	須恵器壺	堆積土	A3	堆積土	口縁～1/4体下部剥離片。口径15.0cm。体下部回転ヘラケズリ。焼成不良。			012	
3	須恵器高台環	壺丸	C	壺丸	体下部～底部焼成片。底径8.4cm。外側：底部壺丸、切妻面し不明→体下部回転ヘラケズリ→削り出し（きついロクロナデ）による低い疑似高台。体上部焼成5~13mmの砂・ガラス粒を多く含む。焼成不良。全身上に壺丸。北関東系かその影響を受けたもの。			27.6	012
4	須恵器甕	堆積土		堆積土	口縁1/4体上部当焼片。口径20.2cm。外側：平行叩き→口縁部ロコナデ→焼成前に胴上部に刻書「卒」（「本」の異体字）。内面：剥離不明で当焼一部剥離。口縁部ロコナデ。焼成良好。	1 5 10cm	27.7 35.8	012	

第107図 S 127整穴住居跡平面図・断面図 (1/60)、出土遺物

3. 井戸跡

3基の井戸跡を検出した。

【S E 1 石組井戸跡】(平面図: 第109・110図、断面図: 第110図、遺物: 第108図、図版21-1・5～7)

(位置) 調査区北東部、丘陵尾根に対して東に入る小さな沢の沢頭、標高35.5m付近に位置する。

(重複) 本井戸跡と一連の遺構であるS X 5 平場は、S B 10 挖立柱建物跡、S I 8・9・17・19・40・41・43・56 竪穴住居跡、S E 2・3 井戸跡、S X 5・6 焼成遺構、S K 12・13 土壙、S X 1 遺物包含層と重複し、いずれよりも新しい。

(関連遺構) 丘陵尾根の北側斜面に S X 5 平場を造成した後、その裾部に S D 1 暗渠を設け、そこで集めた水を S D 1 暗渠で S X 1 石組井戸跡に導水している。S D 1 暗渠の脇にある環状積石もこれらに伴う。

(構造) 挖方は下底が直径90cm、上底が直径1.6mの円筒状で、板状・角柱状の粘板岩礫片を壁面に沿って23段前後積み上げ、壁面と石組との間に裏込め土を入れている。そして、石組の最上段には、やや大きめの扁平な板状の粘板岩礫片並べている。また、S D 1 暗渠から導水される水口には、長さ40～50cmと特に大きな角柱状の粘板岩礫片を縦長に置いている。

(堆積土) 5層に分けられ、板状・角柱状の粘板岩礫片や粘板岩巨礫と一緒に叩き込みながら、人為的に埋めている。

(出土遺物) 井戸内堆積土、井戸裏込め土からは遺物は出土しなかった。

【S X 5 平場】(平面図: 第109・110図、断面図: 第110図、第121図断面A-A'・B-B'、図版21-1)

(位置) 調査区北東部、丘陵尾根に対して東に入る小さな沢の北側、東斜面に位置する。

(規模と構造) 東に約13°傾斜する沢に面した斜面で、南北が約40m、東西が26m以上に及ぶ範囲を大規模に造成している。斜面上方にあたる箇所を切り取って、その裾部に S D 1 暗渠を設け、その上と斜面下方を整地し、平坦面を造成している。整地は明黄褐色粘質土大ブロックを多量に含む暗褐色土と明黄褐色土の互層で、東側の厚い箇所では厚さは1.4mにも及ぶ。

(出土遺物) 近世に使用された火縄銃の鉄砲玉1点(註1)の他、古代の土師器・須恵器などの破片が少数出土した。

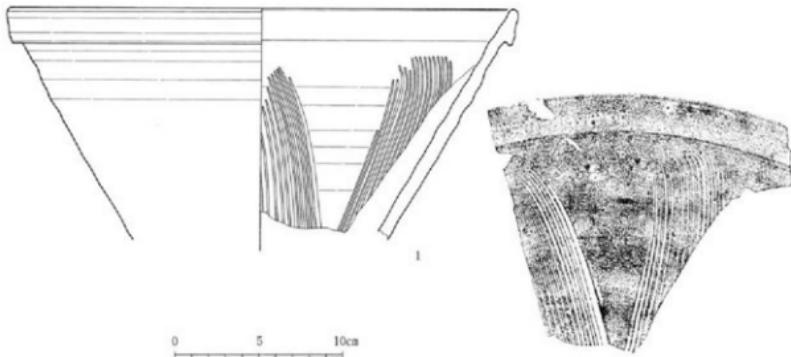
【S D 1 暗渠・開渠】(平面図: 第109・110図、断面図: 第110図、遺物: 第108図、図版21-1・2)

(規模と構造) S X 5 平場の造成に際して切り取った裾部を弧状に巡るように、幅0.6～2.2m、深さ10cm前後の溝を掘削している。そして、S E 1 石組井戸跡から長さ約18mにわたって幅50cm前後の石組暗渠とし、石組暗渠と接続する北側のL字状に曲がった箇所では開渠としている。掘方の幅は石組暗渠では50cmと狭いが、開渠では1.2～2.2mと広くなっている。また、S X 5 平場の裾部に集まつた雨水などがS E 1 石組井戸跡に導水されるように、S D 1 開渠からS D 1 暗渠へと向かって底面がわずかに傾斜している。

S D 1 石組暗渠は、溝状の掘方内に側石を縦長に密接して敷き並べ、その上に蓋石をし、側石と

掘方、側石と蓋石との隙間に裏込め土を詰め、蓋石の上をさらに整地して構築されている。石組暗渠の内法断面は、幅10cm前後、深さ6cm前後の長方形で、幅と深さがほぼ一定している。暗渠内部には下部には砂層、上部にはシルト質土が自然堆積していた。石組暗渠に用いられたのはいずれも粘板岩礫片で、側石が長さ20~45cm、幅6cm前後、厚さ6cm前後の角柱状で、蓋石は長さ20~30cm、幅10~20cm、厚さ6cm前後の扁平な板状である。

〔出土遺物〕 S D 1 暗渠上の覆土から、擂鉢破片1点(1)が出土した。18世紀前葉頃の瀬戸窯の製品で、両面に鋸歯がかけられている(註1)。暗渠内部からは遺物は出土しなかった。



番号	種類	置き位	残存	特徴	写真	取扱
1	擂鉢	SD1暗渠	覆土 破片	口縁1/4~1/2体下部破片。18世紀初め頃の瀬戸窯製器。口径30.4cm。口縁部~体部が直線的に外傾する。ロクロ窓櫛、口縁部を外折させて外前に幅1.2cmの鋸歯を作り、口縁部の内面を2.4cm幅でやや厚くようにミコナタで軽い模を作用。外面体部に10条の対応方向の模(1.1mm)を軽く模。模の間隔は上端で6.5mmあり、覆土は半面に残されてない。外側体下部はロクロアラベット(18世紀後半開拓時代)へカズレとされている。両面に鋸歯。胎土は微細で、粗粒。表面は釉面無し。胎土は微細で、粗粒。	35-7	023

第108図 S D 1 暗渠出土遺物

《環状積石》(平面図・断面図:第109図、図版21-3)

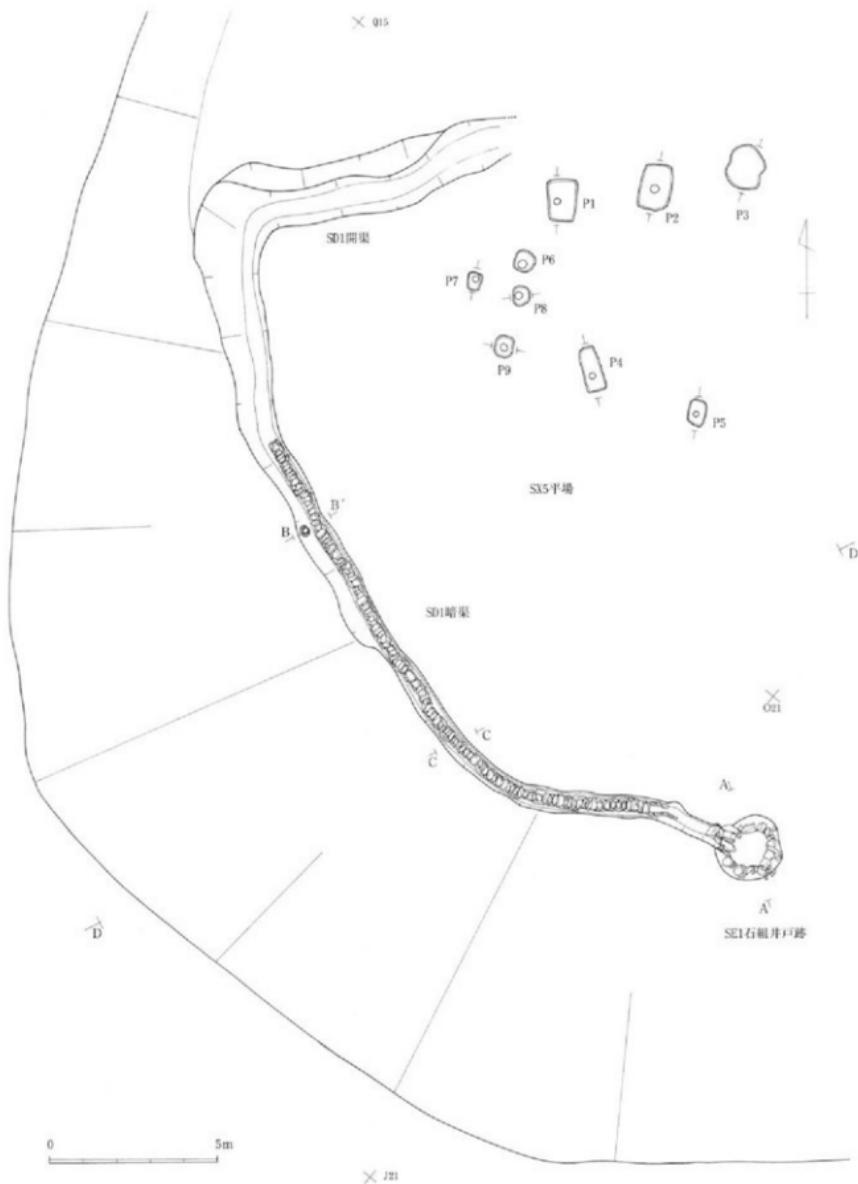
〔位置〕 S E 1 石組井戸跡から約15m、SD1開渠の屈曲部から約11m離れた位置にあり、S D 1 暗渠の段掘りされた掘方の上段際に設けられている。

〔規模と構造〕 円形ピット状の掘方の中に、拳大前後の粘板岩礫片を環状に3段積み重ねている。環状の外径は20cm、内径は10cmで、深さ6cmある。掘方は積石の外傾よりやや大きく、径24cm、深さ14cmある。掘方と積石との間は黄褐色粘質土で裏込めされ、積石内部には自然堆積土が堆積していた。

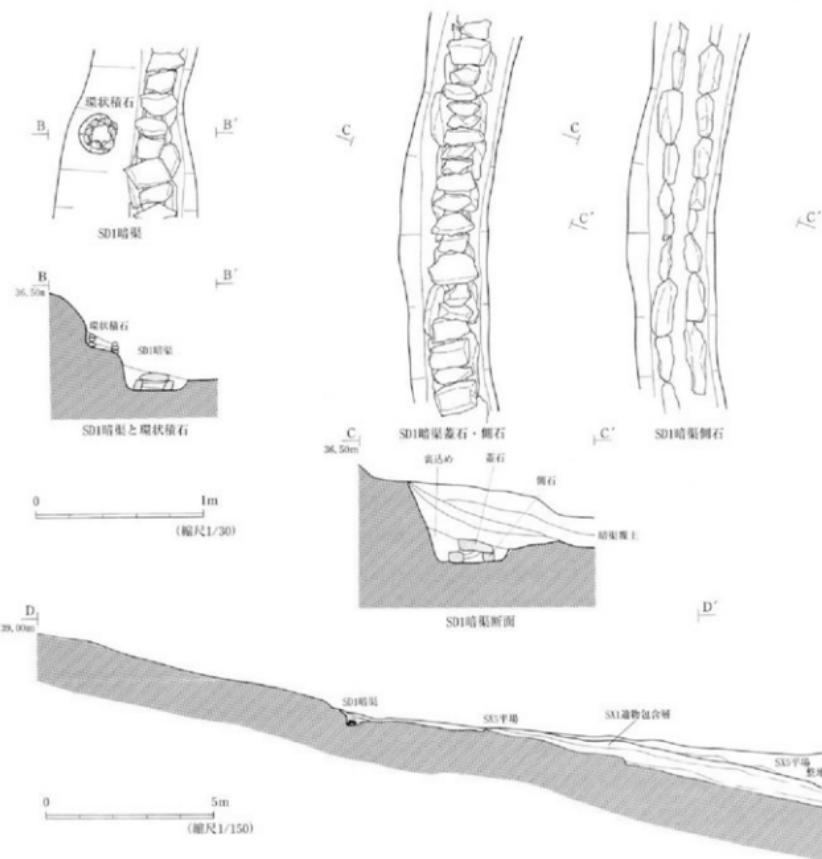
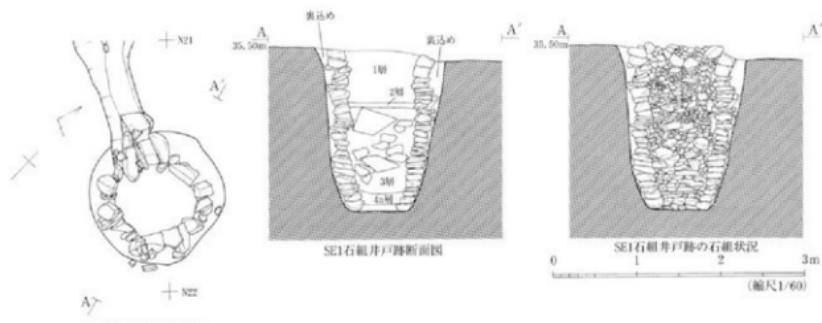
〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

《S X 5 平場の柱穴》(平面図:第109図、断面図:第111図、図版21-4)

S X 5 平場の北半部に柱穴が9つある。これらの柱穴はいずれも S X 5 平場の造成に伴う整地層の上から掘り込まれており、S E 1 石組井戸跡、SD 1 暗渠・開渠、S X 5 平場と同時期またはこれらよりも新しい。掘方はP 1~P 4が長辺1m前後、短辺0.8m前後の長方形を基調とし、P 5~P 9が長辺50cm前後、短辺40cm前後の隅丸長方形を基調としている。掘方埋土はP 1~P 4がS

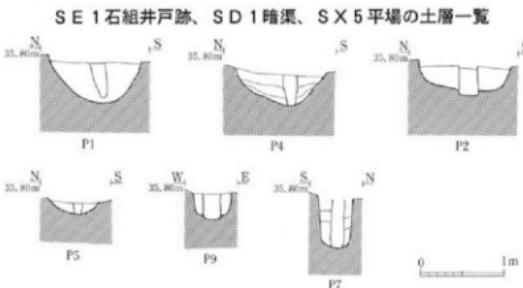


第109図 SE1石組井戸跡、SD1暗渠、SX5平場平面図 (1/150)



第110図 SE1 石組井戸跡、SD1 塩岩、環状積石の細部と断面 (1/150、1/60、1/30)

遺構	層位	特徴
SE1 井戸跡	黄込め	石礫の裏込め土。しまりよい人為堆積土で、2層に分かれる。下層はにい黄褐色(10YR6/4)粘質土で径2~5cmの粘板岩礫片を多く含む。上層は灰褐色(10YR5/1)。
	井戸内埋土1層	灰黃褐色(10YR4/2)土。径0.5~1cmの粘板岩礫化礫片を多量に含む。しまりよい。人為堆積土。
	井戸内埋土2層	黃褐色(10YR5/8)粘質土を主に灰黃褐色(10YR4/7)土を不規則に含む。しまりよい。人為堆積土。
	井戸内埋土3層	暗褐色(7.5YR3/8)土。掌大~径60cmの粘板岩礫片を多量に含む。しまりあり。人為堆積土。
	井戸内埋土4~6層	褐灰褐色(7.5YR6/1)粘質土。グラウイ化。人為堆積土。
	井戸内埋土7~8層	褐灰褐色(7.5YR6/1)粘質土。グラウイ化。人為堆積土。
SD1 暗渠	黄込め	黄褐色(10YR5/8)土。林立。しまり強い。人為堆積土。
	暗渠覆土	にい黄褐色(10YR4/3)~暗褐色(10YR5/8)土。粘質。しまり強い。人為堆積土。
埋状 積石	暗渠内埋土	自然堆積G内埋土。2層に分かれる。下層はしまりのない暗褐色(10YR5/3)砂質土。中層はしまりの強い黄褐色(10YR5/0)土。上層はしまりのある灰褐色(10YR5/2)。
	黄込め	黄褐色(10YR5/8)土。林立。しまり強い。人為堆積土。
SX5 平場	埋状 積石	2層に分かれる。下層は黄褐色(10YR5/0)土。上層はにい黄褐色(10YR6/0)土。いずれも径2~3cmの塊状物を少し含み。しまりあり。
	SX5平場整地	明黃褐色(10YR6/0)粘質土大ブロックを多量に含む暗褐色(10YR5/0)土と明黃褐色(10YR6/0)土の互層。しまり強い。人為堆積土。



第111図 SX5平場の柱穴断面図（1/60）

X 5 平場整地土に由来する明黄褐色粘質土を多量に含み、P 5 ~ P 9 がオリーブ褐色土を多量に含む。これら大型の柱穴と小型の柱穴は、大きさ・埋土に違いがあることから、複数の時期に分かれると考えられるが、いずれも建物跡とは考えにくく、組み合わせなど詳細は不明である。いずれの柱穴から、遺物は出土しなかった。

【S E 2 井戸跡】(平面図・断面図・遺物：第112図、図版19-1)

〔位置〕 調査区北東部、丘陵尾根に対して東に入る小さな沢の沢頭、標高37.0m付近に位置する。

〔規模と構造〕 挖方は平面形が長径2.5m、短径2.1mの不整梢円形、断面が漏斗状で、深さ1.4mある。井戸枠は廃絶時にほとんど抜き取られていたが、井戸枠の最下部の横組み枠材が残存しており、長方形の板組み井戸枠であったと推定される。井戸枠の内法は長辺約1.5m、短辺約1.0mで、材痕から縦方向に立てられた四隅柱が井戸枠より外に張り出すような構造と考えられる。

〔堆積土〕 一部に裏込め土が残り、他は井戸廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕 挖方から非クロロ調整の土師器甕(1)、須恵器壺(2)の破片、井戸内の堆積層から非クロロ調整の土師器甕、須恵器壺(3)・蓋・壺・壺の破片などが少数出土した。このうち須恵器壺(2・3)は体下部～底部を回転ラケケツリしている。

【S E 3 井戸跡】(平面図・断面図・遺物：第113図、図版19-2)

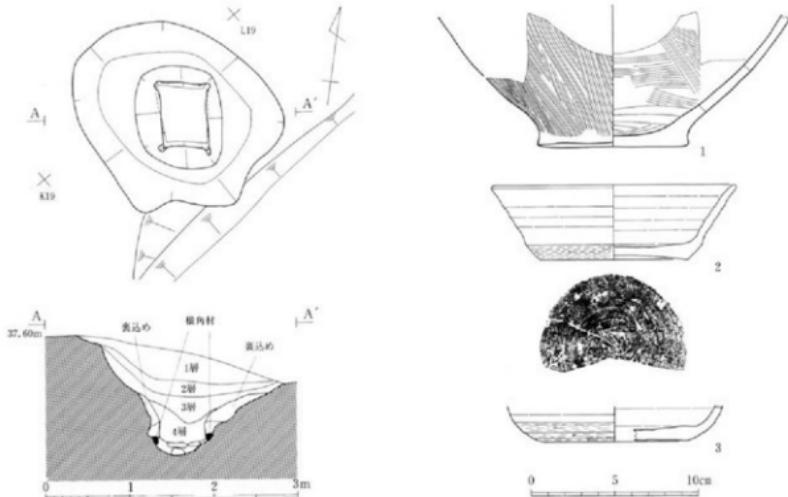
〔位置〕 調査区北東部、丘陵尾根に対し東に入る小さな沢の沢頭に面し、標高36.0m付近に位置する。

〔重複〕 SX 1 遺物包含層、SX 5 平場と重複する。SX 1 遺物包含層よりも新しく、SX 5 平場よりも古い。

〔規模と構造〕 挖方は平面形が長径3.1m、短径2.3mの不整円形、断面が漏斗状で、深さ80cmある。挖方の北側は段掘りされている。挖方の中央は平面形が長径75cm、短径60cmの梢円形で、深さ30cm段掘りされている。井戸枠は廃絶時に完全に抜き取られていたが、ここに円筒状の木製井戸枠が設置されていたと考えられる。

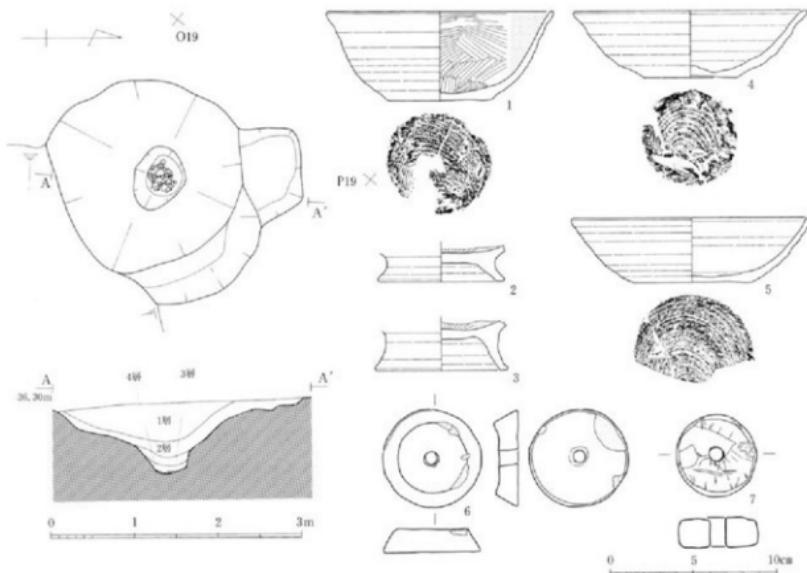
〔堆積土〕 4層に分けられ、井戸廃絶以降の自然堆積土である。このうち、下部の堆積土3層は、10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰である。裏込め土は残っていない。

〔出土遺物〕 挖方からの出土遺物はなく、井戸廃絶以降の堆積土からやや多くの遺物が出土した。灰白色火山灰の下層の堆積土4層からはロクロ調整の土師器環・甕、須恵器環・甕の破片が少数出土した。灰白色火山灰の堆積土3層からは、完形の土製紡錘車1点(6)、残存率の高いロクロ調整の土師器環(1)、須恵器環(4・5)の他、ロクロ調整の土師器環・高台环(2・3)・甕、非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕・甕などの破片が出土した。堆積土2層からは完形の石製紡錘車1点(7)の他、ロクロ調整の土師器環・高台环・甕、非ロクロ調整の土師器甕、須恵器環・甕・壺などの破片が少数出土した。堆積土1層からはロクロ調整の土師器環・高台环・甕、須恵器環・甕、縄文時代前期の縄文土器深鉢などの破片が少数出土した。このうち土師器環(1)、須恵器環(4・



層	特徴	備考
裏込め	しまりのある人為堆積土で、4層に分かれる。1層にはよい黄褐色(10YR7/4)粘質土に明褐色ブロックが不規則に混じる。2層は灰黄色(2.5Y6/2)粘質土、3層は褐色(7.5Y6/5)の粘質土、4層は地山土アロッカが多く含む灰褐色(2.5Y5/2)粘質土で、椎角材と椎柱が一部に残る。	
井戸内堆積土	井戸枠を抜き取られて廃絶した後、中に堆積した自然堆積土で、4層に分かれる。1層にはよい黄褐色(10YR4/3)土で、しまりあまりない。地山土を少し含む。2層にはよい黄褐色(10YR5/6)粘質土で、しまりがある。3層にはよい黄褐色(10YR5/3)土で、しまりがある。4層は灰オーラー色(7.5Y4/2)粘土で、全体的にグリッタ化。	
番号	種類	分類
1	土製紡錘車	輪形 破片
2	須恵器環	A3 植付 2/3 口径14.6cm、底径8.6cm、器高4.5cm、外側：底部切り離し不明・一体下部へ直角回転へケズリ。施成等級。
3	須恵器環	O2 須恵器上部破片 体・底部へ底面1/4破片、底径8.6cm、外側：底部切り離し不明・一体下部へ底部回転へケズリ。施成良好。

第112図 SE 2 井戸跡平面図・断面図 (1/60)、出土遺物



特征	特徴
地植上 1 別 青色土 10YR 4/0 上。しまりあまりない。自然埋積上。	
地植上 2 別 にふい青褐色 10YR 5/1 上。しまりなし。自然埋積上。	
地植上 3 別 10門配石要領に特徴。瓦版状水田灰。しまりなし。自然埋積上。	
地植上 4 別 灰青褐色 10YR 5/2 上。しまりなし。粘性やわり。自然埋積上。	

番号	種類	分類	個数	径	残存	特徴	写真	取扱
1	土師器杯	II D 土師上 3 别	1/3	13径 11.6cm、底径 6.3cm、高さ 5.4cm、外側：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黑色處理。		34-7	023	
2	土師器合口瓶	II 土師上 3 别	2/3	底部→凸台破片。高径 7.6cm、高さ 1.5cm、外側：底部糸切り離し手彌→付合口。内面：鉛錆状ヘラミガキ→黑色處理。		34-8	023	
3	土師器合口瓶	II 土師上 3 别	9/10	底部→凸台破片。高径 8.0cm、高さ 2.0cm、外側：底部糸切り離し手彌→付合口。内面：鉛錆状ヘラミガキ→黑色處理。			023	
4	回転糸杯	(D) 土師上 3 别	3/5	13径 14.0cm、底径 5.6cm、高さ 4.0cm、外側：底部回転糸切り無調整。焼成良好。		34-9	023	
5	回転器杯	(D) 土師上 3 别	1/3	13径 14.1cm、底径 5.7cm、高さ 6.9cm、外側：底部回転糸切り無調整。内面：平滑なクロマヂ。焼成良好。		34-10	023	
6	土製結石車	土師上 2 別 完形	1	土製、上輪質、底面凹形、断面薄舟形。上面を地中に埋める。頂部・底面一部剥落。全体的に厚誠、ミガキか、底質多く含む。		36-10	026	
7	石製結石車	土師上 2 別 完形	1	板細粒砂岩質、内盤形、断面長方形。直徑 4.8cm、厚さ 1.8cm、軸孔 0.9cm、重量 28g。		36-9	026	

第113図 S E 3 戸井戸平面図・断面図 (1/60)、出土遺物

5) はいずれも底部が回転糸切り無調整のものである。他の土師器杯・須恵器杯破片で底部が残存するものは、土師器杯に回転糸切り無調整の他、手持ちヘラケズリされたものが含まれるもの、須恵器杯はすべて回転糸切り無調整である。

4. 炉跡

炉跡 1 基を検出した。竪穴住居跡に伴う炉跡の可能性も残されているが、確証はないので、屋外が跡として扱うこととする。

【S X 6 炉跡】(平面図・断面図: 第114図)

〔位置〕 調査区北東部、丘陵尾根に対して東に入る小さな沢に面した標高33.5m付近に位置する。

〔重複〕 S X 1 遺物包含層よりも新しく、S X 5 平場よりも古い。

【平面形・規模】長径24cm、短径21cmの不整楕円形で、深さ6cmある。底面・壁面全体が被熱を受けて赤変・硬化している。赤変は掘方よりも5cm奥まで及んでいる。

【出土遺物】通常の鉄滓1点の他、発泡して土を多く巻き込んだ鉄滓10点が出土した。

5. 焼成遺構

焼成遺構2基を検出した。

【SX7焼成遺構】(平面図・断面図:第114図、図版19-8)

【位置】調査区北東部、丘陵尾根に対して東に入る小さな沢に面した標高33m付近に位置する。

【重複】SX1遺物包含層、SX5平場と重複し、これらよりも古い。

【特徴】長辺98cm、短辺42cmの隅丸長方形で、深さ14cmある。長軸は等高線に平行する。堆積土は2層に分かれ、下部には炭屑が薄く自然堆積している。底面・壁面全体が被熱を受けて赤変・硬化している。赤変は掘方よりも5cm奥まで及んでいる。

【出土遺物】発泡して土を多く巻き込んだ鉄滓が1点出土した。

【SX8焼成遺構】(平面図:第6・114図、断面図:第114図、図版19-7)

【位置】調査区中央部南寄りの西際、丘陵尾根上や西側の標高31.0m付近に位置する。

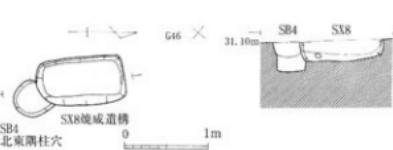
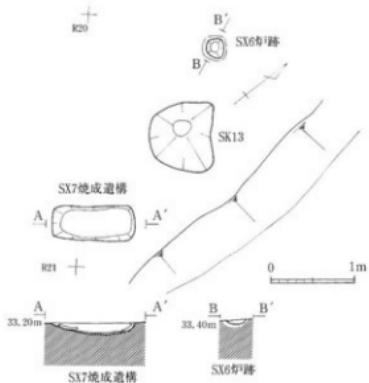
【重複】SB4掘立柱建物跡北東隅柱穴と重複し、これらよりも新しい。

【特徴】長辺103cm、短辺55cmの隅丸長方形で、深さ25cmある。堆積土はしまりのない自然堆積土で、2層に分かれる。壁面全体が被熱を受けて赤変・硬化し、掘方よりも2cm奥まで及んでいる。底面はさほど赤変・硬化していない。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

6. 土壌

土壌11基を検出した。



遺構	特徴
SX6	暗褐色(10YR3/3)土。地山粒・地上ブロックが多く含む。底面は著しく赤色硬化。
SX7	2層に分かれると、1層は暗褐色(10YR3/3)上で、地山粒・地上ブロックを多く含む。2層は黄褐色で、径2~15mmの地上ブロックを含む。底面は著しく赤色硬化。
SX8	しまりのない自然堆積土で、2層に分かれると、1層は暗褐色(10YR3/1)で、地山粒・地上粒・地上柱を少し含む。2層は黒色(10YR4/1)で、地山粒を多く含む。
SK13	暗褐色(10YR3/3)土。径2~5mmの地山粒・地上粒・炭粒を多く、鉄滓を少し含む。

第114図 SX6炉跡、SX7・8焼成遺構、SK13土壤平面図・断面図 (1/60)

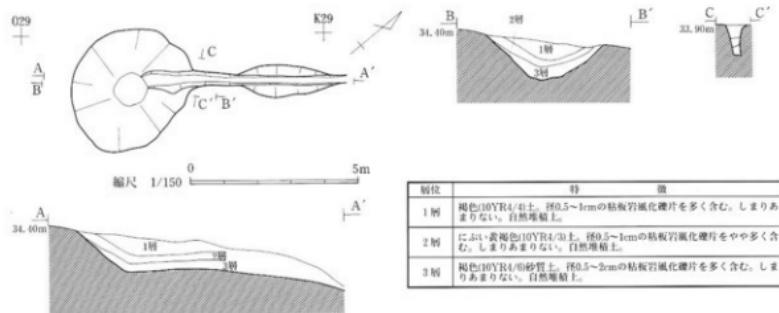
【SK 1 土壌】(平面図・断面図：第115図、図版19-3・4)

〔位置〕 調査区ほぼ中央部、丘陵尾根上やや北寄りの標高34.0m付近に位置する。

〔重複〕 S I 12 穴住居跡と重複するが、堆積土の重複がないため、新旧関係は不明である。

〔特徴〕 平面形は長径3.9m、短径3.5mの梢円形、断面形は擂鉢状で深さ1.5mある。北東方向に傾斜する斜面に向けて、幅45cm、深さ90cmの箱掘りの溝が長さ6.3m延びている。堆積土は3層に分けられ、いずれも廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕 非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・鉢・甕の破片が少數出土した。



第115図 SK 1 土壌平面図・断面図（1/150）

【SK 3 土壌】(平面図・断面図：第116図、出土遺物：第117図)

〔位置〕 調査区南東部、S B 4 掘立柱建物跡の東約1.5m、丘陵尾根上の標高31.0m付近に位置する。

〔重複〕 主要遺構との重複はない。

〔特徴〕 平面形は長径2.0m、短径1.5mの梢円形で、深さ20cmある。人為的に埋められている。

〔出土遺物〕 非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏の破片が少數出土した。このうち須恵器坏（5）は体部外面に90°右横向きに「富」と墨書きされている。

【SK 4 土壌】(平面図：第10・116図、断面図：第116図、出土遺物：第117図)

〔位置〕 調査区南東部、S B 6 掘立柱建物跡の北約2.2m、丘陵尾根上の標高31.5m付近に位置する。

〔重複〕 主要遺構との重複はない。

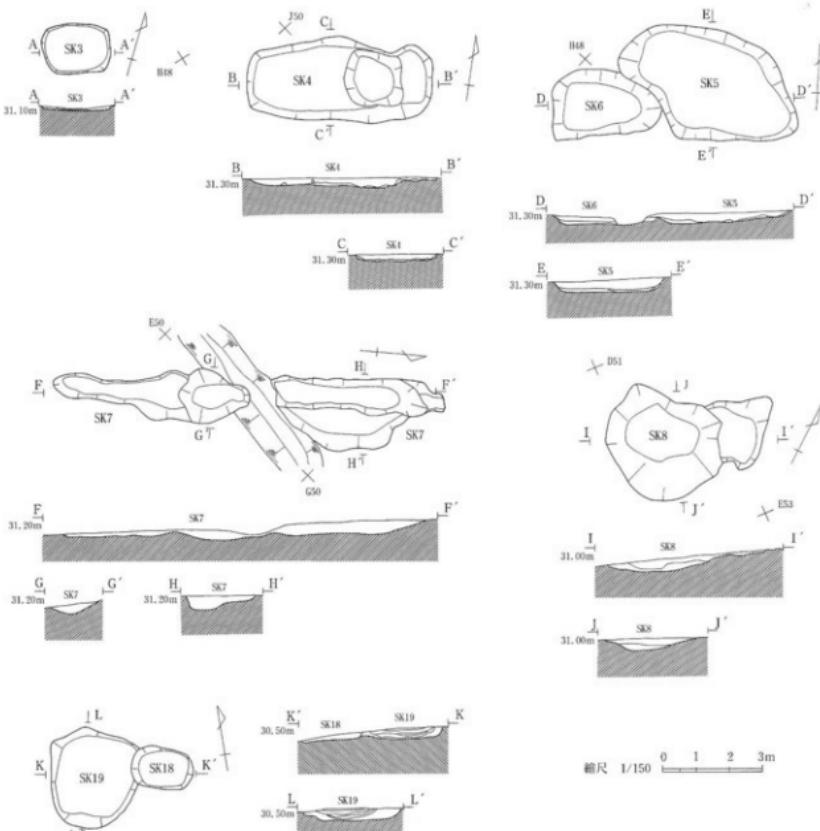
〔特徴〕 平面形は長径5.5m、短径2.5mの不整梢円形で、深さ30cmある。人為的に埋められている。

〔出土遺物〕 ガラス小玉1点（10）の他、非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋（3）・甕、繩文土器深鉢などの破片が少數出土した。このうち土師器坏には平底気味の底部破片、須恵器坏には手持ちヘラケズリと回転ヘラケズリの底部破片が各1点ある。

【SK 5 土壌】(平面図：第10・116図、断面図：第116図、出土遺物：第117図)

〔位置〕 調査区南東部、S B 5 掘立柱建物跡の南約1.0m、S B 6 掘立柱建物跡の北約2.5m、丘陵尾根上の標高31.5m付近に位置する。

〔重複〕 SK 6 土壌と重複し、これよりも新しい。



地 横	特 圖
SK3	しまりのある人為堆積土で、2層に分かれる。1層は黒褐色(10YR3/4)土で、地山小ブロック・炭粒を含む。2層は黄褐色(2.5Y4/1)土で、地山小ブロック・炭粒を含む。
SK4	しまりの強い人為堆積土で、2層に分かれる。1層は暗褐色(10YR3/4)土で、径0.5~1cmの地山粒が多く、炭化物を少し含む。2層はにじい黄褐色(10YR5/4)土で、径2~5mmの粘板岩風化礫片を多く含む。
SK5	しまりの強い人為堆積土で、2層に分かれる。1層は暗褐色(10YR3/4)土で、径0.5~1cmの地山粒が多く、炭化物を少し含む。2層はにじい黄褐色(10YR5/4)土で、径2~5mmの粘板岩風化礫片を多く含む。
SK6	しまりの強い人為堆積土で、2層に分かれる。1層は暗褐色(10YR3/4)土で、径0.5~1cmの地山粒多く、炭化物を少し含む。2層はにじい黄褐色(10YR5/4)土で、径2~5mmの粘板岩風化礫片を多く含む。
SK7	暗褐色(10YR3/4)土で、径0.5~1cmの地山粒を多く、炭化物を少し含む。しまり強く、人為堆積土。
SK8	しまりの強い人為堆積土で、2層に分かれる。1層は暗褐色(10YR3/4)土で、径0.5~1cmの地山粒を多く、炭化物を少し含む。2層はにじい黄褐色(10YR5/4)土で、径10mm程の粘板岩風化礫片を多く含む。
SK18	黒褐色(10YR3/2)土で、径0.5~1cmの地山粒を少し含む。しまり弱く、自然地積土。
SK19	しまりの強い人為堆積土で、2層に分かれる。1層は褐色(10YR4/1)土で、炭化物・樹木枝・地山粒を少し含む。2層はにじい褐色(10YR4/3)土で、炭化物・樹木枝を少し含む。3層は褐色(10YR4/1)土で、炭化物・樹木枝を多く含む。5層は褐色(10YR4/1)土で、炭化物・樹木枝を少し含む。

第116図 SK 3 ~ 8 • 18 • 19 土壌平面図・断面図 (1/150)

〔特徴〕平面形は長径5.7m、短径3.5mの不整円形で、深さ40cmある。人為的に埋められている。

〔出土遺物〕非ロクロ調整の土師器高杯（2）・甕・須恵器壺・高台壺（4）・蓋・甕・刀子？（7）、繩文土器深鉢などの破片が少數出土した。

【SK 6 土壙】（平面図：第10・116図、断面図：第116図）

〔位置〕調査区南東部、S B 5 挖立柱建物跡の南約2.5m、丘陵尾根上の標高31.5m付近に位置する。

〔重複〕SK 5 土壙と重複し、これよりも古い。

〔特徴〕平面形は長径3.3m、短径2.0mの不整円形で、深さ30cmある。人為的に埋められている。

〔出土遺物〕非ロクロ調整の土師器壺・甕・須恵器壺・甕・繩文土器深鉢などの破片が少數出土した。

このうち土師器壺には体下部に段のある体部破片が1点ある。

【SK 7 土壙】（平面図：第10・116図、断面図：第116図、出土物：第117図）

〔位置〕調査区南東部、S B 6 挖立柱建物跡の西約4.0m、丘陵尾根上の標高30.8m付近に位置する。

〔重複〕S I 45 竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。

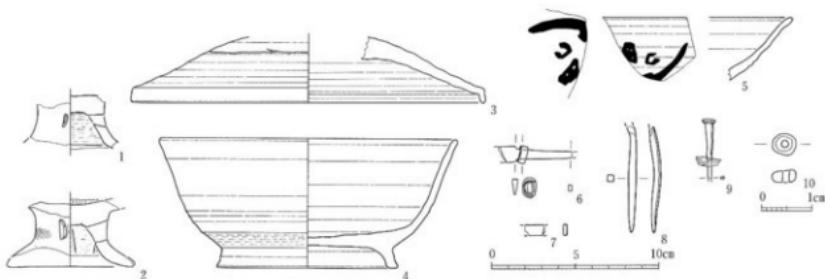
〔特徴〕平面形は長さ11.6m、幅0.9~2.1mの溝状で、深さ40cmあり、土壙が連続したような状態で段掘りされている。人為的に埋められている。

〔出土遺物〕非ロクロ調整の土師器壺・高杯（1）・甕・須恵器壺・蓋・鉢・甕などの破片が出土した。このうち土師器壺には体下部に段のある体部破片が1点ある。

【SK 8 土壙】（平面図・断面図：第116図）

〔位置〕調査区南東部、S B 6 挖立柱建物跡の南西約3.0m、丘陵尾根の標高30.8m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。



多号	種類	分類	遺構	特徴	写真	収納
1	上師器高杯	SK7		底部ほぼ定形・脚部破片、脚部の脚が聞く。非ロクロ調整。脚部に斜変による縦長レンズ状の透かし3箇所。外面:厚底、内面:底面へラッカギー・黑色絶縁。	34-11	023
2	上師器高杯	SK5		底部～脚部2/3弱月、脚部の脚が聞く。脚部厚7.6mm、脚底厚3.3mm。非ロクロ調整。脚部に斜変による縦長レンズ状の透かし2箇所。外面:ナマ、厚底。内面:底部へラッカギー・黑色絶縁。脚部内面手持ちヘラケズリ・ヨコナナ、厚底、焼成不良。	34-12	023
3	須恵器蓋	A1e	SK4	体部～口縁1/4弱段。つまみ欠損。口縁2.3cm。焼成堅密。	34-13	023
4	須恵器高台壺	B2	SK5	口縁わずか～底面・高台高1/4弱段。口径17.8cm、高台高1.2cm。器高7.8cm。外面:底部切り離し不明→体上部～底面間へラッカギー・行削作。焼成堅密。	35-23	023
5	須恵器壺	SK3		口縁～底面微行。ロクロ調整。外面:体部に墨書き「道」(90度右横向き)。焼成不良。		023
6	刀子	SB10 附近		身部～茎部微行。刃先・茎尻欠損。手造り角縫。鍔開・刃闊。茎割部は中割となる。茎元に、装着。現存長4.4cm。刃元幅0.9cm。鍔厚2mm、厚3.5mm。厚4mm。厚1mmの鍔薄板を接着し、外径10×8mm、内径8×5.5mm。	031	
7	刀子?	SK5		刀子の茎部微行。刃先・茎尻欠損。手造り角縫。現存長1.2cm、幅7mm、厚2mm。	031	
8	鉄釘	SK13		頭部欠損。現存長6.3cm、頭幅4mm方巾。	031	
9	鉄釘	SK18		頭部～足破片。現存長3.7cm。頭部8mm方巾。頭部断面4mm方巾。釘足に木質付石。木質の本目は釘足と辨定する。	031	
10	ガラス小片	SK4		アルカリガラス。透明度深い青緑色。直径4.5mm、厚さ2.0mm。直径/厚み比1.7。孔径1mm。古墳時代のものと推定。	36-15	031

第117図 SK 3 ~ 5 · 7 · 13 · 18 土壙出土遺物

〔特徴〕平面形は長径5.0m、短径3.6mの不整円形で、北東部が段掘りされている。深さ36cmで、人為的に埋められている。

〔出土遺物〕非ロクロ調整の土師器壺・甕、須恵器甕などの破片が少數出土した。

【SK12土壤】(平面図：第33・39図、断面図：第34図、出土遺物：第118・119図)

〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根上東寄り、標高36m付近に位置する。

〔重複〕S I 4 0 A・B・C・D 積穴住居跡、S X 1 遺物包含層と重複し、これらよりも新しい。

〔特徴〕平面形は長径3.6m、短径1.5mの不整円形で、深さ40cmある。堆積土は1層で、自然堆積した暗褐色土である。

〔出土遺物〕出土遺物は比較的多く、須恵系土器壺（1～4）・高台壺（5）、土師器壺（7～15・19）・高台壺（17～19）・耳皿（20・21）・高環（22）・甕、製塙土器（23・24）、須恵器壺（25）・高台壺・蓋・甕、丸瓦の破片、須恵系土器高台壺高台部破片転用の円盤状土製品（6）などが出土した。このうち須恵系土器には胎土に砂粒を多く含むものとあまり含まないか細かい砂粒を含むものとがあり、前者が多い。また、内面はコテナデされていない。土師器は大多数がロクロ調整で（7～21）、非ロクロ調整のもの（22～24）は少ない。土師器壺はいずれもロクロ調整で、そのうち底部が回転糸切り無調整のもの（7・10～14）が主体を占め、他には底部を回転糸切り後に部分的に底部を手持ちヘラケズリしたもの（8・15）、底部を回転糸切り後に体下部～底部外周を手持ちヘラケズリしたもの（9）がある。土師器高台壺はいずれもロクロ調整で、内面をヘラミガキした後に内面を黒色処理した一般的なもの（16・17）の他、両面をヘラミガキした後に両面を黒色処理したもの（18・19）がある。土師器高台壺（22）は非ロクロ調整で、脚部に透かしが3部位施されている。製塙土器（23・24）は非ロクロ調整のもので、口縁部が内傾気味に外傾し、器厚が厚く、粘土紐積み上げ痕が明瞭に残る。須恵器壺には底部が回転糸切り無調整のもの（25）がある。

【SK13土壤】(平面図：第114図、出土遺物：第117図)

〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根に対して東に入る小さな沢に面した標高34.5m付近に位置する。

〔重複〕S X 1 遺物包含層、S X 5 平場と重複し、これらよりも古い。

〔特徴〕平面形は径90cmの不整円形で、深さ12cmある。

〔出土遺物〕土師器甕、鉄釘（8）などの破片が少數出土した。

【SK18土壤】(平面図：第114図、出土遺物：第117図、図版19-6)

〔位置〕調査区南東部、丘陵尾根上北寄り、S B 13掘立柱建物跡に近い標高30m付近に位置する。

〔重複〕SK19土壤と重複し、これよりも新しい。

〔特徴〕平面形は長径1.9m、短径1.3mの楕円形で、深さ20cmある。人為的に埋められている。

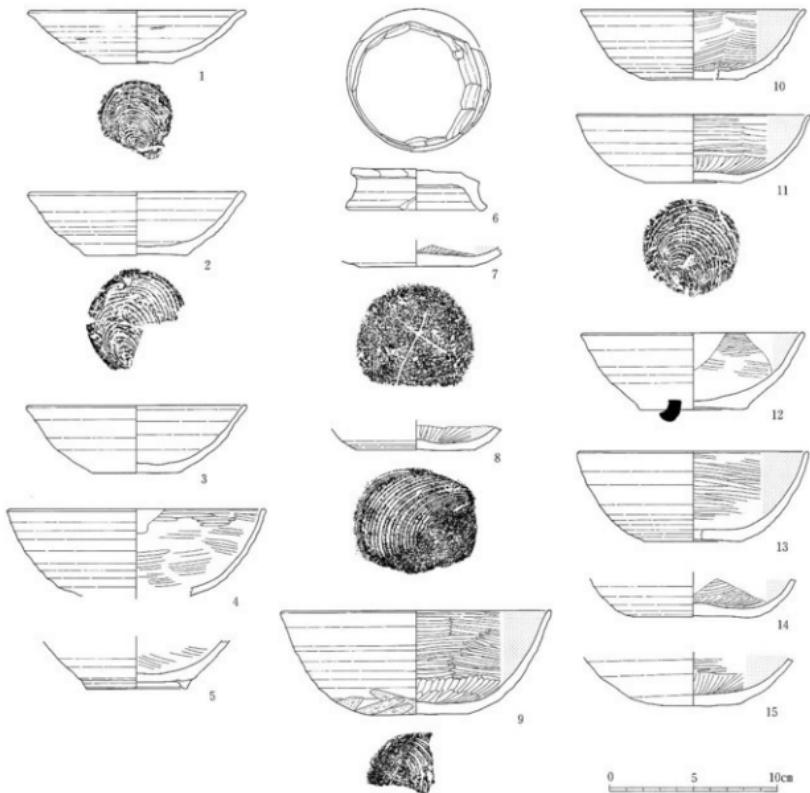
〔出土遺物〕非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕、繩文土器深鉢などの破片が少數出土した。

【SK19土壤】(平面図・断面図：第116図、出土遺物：第120図、図版19-5・6)

〔位置〕調査区南東部、丘陵尾根上北寄り、S B 13掘立柱建物跡に近い標高30m付近に位置する。

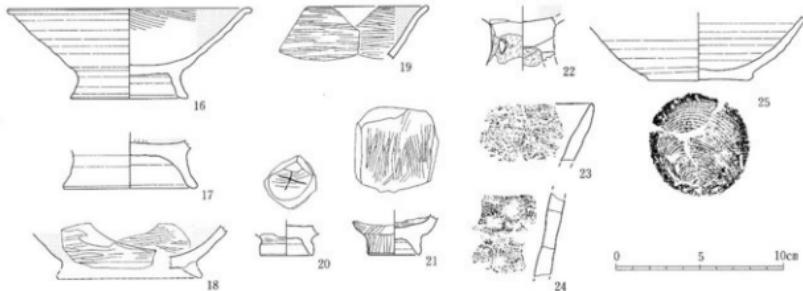
〔重複〕SK19土壤と重複し、これよりも新しい。

〔特徴〕平面形は長径3.0m、短径2.7mの不整円形で、深さ40cmある。人為的に埋められている。



番号	種類	分類	口径	底径	高さ	器形	特徴	備考	写真	枚数
1	罐底系土器环		13.0	4.5	3.2	1/3	クロコ調整。外面：底部回転糸切り無調整。褐色。胎土に砂粒を含む。焼成不良。			024
2	罐底系土器环		13.0	6.0	3.8	1/4	クロコ調整。外面：底部回転糸切り無調整。にいし・黄褐色。胎土に細かい砂粒を多く含む。焼成良好。			024
3	罐底系土器环		13.2	5.3	4.1	1/3	クロコ調整。外面：底部回転糸切り無調整。褐色。胎土に細かい砂粒を多く含む。燒成不良。			024
4	土解器高台环	II B	15.4			1/4	クロコ調整。外面：ロクナデ。内面：ロクナデ→粗雑な粗いヘラミガキ。黒色処理しない。胎土に細かい砂粒を含む。焼成不良。			024
5	土解器高台环	II B					体部～底盤：高台1/3破片。高台6.0cm。高台高5mm。クロコ調整。外面：底部回転糸切り→次線を一条這らせてかく付高台。内面：ヘラミガキし、黒色処理しない。焼成不良。			024
6	円盤状土器品						圓盤状土器高台の口縁～体下部～高台に沿って内面に打ち欠き、鉤起。直径8.5cm、高さ2.5cm。上面環左側の打ち欠き部摩耗。ロクナデ。底部回転糸切り→付高台。にいし・褐色。胎土に細かい砂粒を含む。焼成良好。	34-14		024
7	土解器环	II B	7.0				体下部～底盤3/4破片。クロコ調整。外面：底部回転糸切り無調整→底部に焼成前剥落×。内面：ヘラミガキ・黒色処理。胎土上に細かい砂粒を含む。焼成不良。			024
8	土解器环	II A	7.2				体下部～底盤3/4破片。クロコ調整。外面：底部回転糸切り→底部部分の手持ちへラケズリ。内面：放射状ヘラミガキ・黒色処理。胎土に長石粒を含む。焼成良好。			024
9	土解器环	II A	16.2	6.0	6.2	1/3	クロコ調整。外面：底部回転糸切り無調整→底部～底部外周手持ちへラケズリ。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。胎土に細かい砂粒を含む。焼成不良。	34-35		024
10	土解器环	II B	13.4	5.4	4.2	1/4	クロコ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。胎土に細かい砂粒を含む。焼成不良。			024
11	土解器环	II B	14.0	5.8	4.1	3/4	クロコ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。胎土に細かいガラス粒を多く含む。焼成良好。	34-36		024
12	土解器环	II B	13.4	6.5	4.6	1/3	クロコ調整。外面：底部回転糸切り無調整。体下部～底部に垂腹。内面：ヘラミガキ→黒色処理→摩滅。胎土に海綿骨針を少含む。焼成不良。			024
13	土解器环	II B	13.8	5.8	5.4	1/4	クロコ調整。外面：底部回転糸切り無調整→摩滅。胎土にヘラミガキ→黒色処理→摩滅。胎土に砂粒を多く含む。焼成不良。			024
14	土解器环	II B	7.0				体下部～底盤4/5破片。クロコ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。胎土に海綿骨針を含む。焼成不良。			024
15	土解器环	II A	5.6				体下部～底盤1/2破片。外面：底部回転糸切り→底部部分の手持ちへラケズリ。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。胎土に砂粒を含む。焼成不良。			024

第118図 S K12土壤出土遺物(1)



番号	種類	分類	現存	特徴	写真	収納
16	土師器高台片	II A	I/2	口幅14.6cm、高台径7.0cm、高台高1.7cm、窓高5.4cm。ロクロ調整。外面：底部斜板系切り一付高台。内面：ヘラミガキ→黑色處理一厚底。胎土に細かい砂粒を含む。燒成不良。	34-18	024
17	土師器高台片	II	破片	底面～高台部定形窓片。高台斜板系。高台高2.0cm。ロクロ調整。外面：底部切り離し不規一付高台。内面：ヘラミガキ→底部黑色處理。胎土に細かい砂粒を含む。燒成不良。	34-20	024
18	土師器高台片	II	破片	体下部破片。口縁・高台欠損。ロクロ調整。外削：底部切り離し不規一付高台。内面：ヘラミガキ→表面黑色處理。胎土薄縮。燒成不良。	34-21	024
19	土師器高台片	II	破片	口縁～体部破片。ロクロ調整。内面：ヘラミガキ→表面黑色處理。胎土薄縮。燒成不良。	34-22	024
20	土師器耳皿	II A	破片	体部～底盤部。高台部2層片。高台径3.2cm、高台高1.2cm。ロクロ調整。外削：底部切り離し不規一付高台～ヘラミガキ→黑色處理。内面：拵はヘラミガキ→黑色處理。高台部内面はロクナードのまま。胎土に細かい砂粒を含む。燒成不良。	34-21	024
21	土師器耳皿	II A	破片	底部・高台部2層片。高台径3.2cm、高台高1.0cm。ロクロ調整。外削：底部切り離し不規一付高台～ヘラミガキ→黑色處理。内面：拵はヘラミガキ→黑色處理。胎土に細かい砂粒を含む。燒成不良。	34-19	024
22	土師器高台	破片		底盤部定形～足部破片。口縁～体下部、脚部欠損。赤ロクロ調整。外削：体下部～脚部へケツリ～脚部中辺に縦長突起状の通路～3層片。内面：拵はヘラミガキ→黑色處理。脚部にタケツリ。胎土に細かい砂粒を含む。燒成不良。	34-22	024
23	製陶土器		破片	口縁部破片。外削：指サエ。内面：ナギ。器厚7～8mm。胎土上砂粒・ガラス粒・長石粒を多く含む。燒成や良好。	35-2	026
24	製陶土器		破片	体部破片。外削：粘土堆積み上げ痕～指サエ。内面：胎土堆積み上げ痕～ナギ。器厚7～10mm。胎土に砂粒・ガラス粒・長石粒を多く含む。燒成や良好。	35-3	026
25	製陶土器	D1	破片	体部～底部定形破片。底径6.0cm。外面：底部斜板系切り無調整。胎土に細かい砂粒を含む。燒成不良。	35-1	024

第119図 SK 12土壤出土遺物(2)



第120図 SK 19土壤出土遺物

【出土遺物】縄文土器の口縁部・体部・底部破片が少數出土している。いずれも、胎土に纖維を含む深鉢形土器である。

1・2は同一個体で、斜行縄文（LR）に縦位の2段燃りの燃糸圧痕が施され、内面にナデ調整されている口縁部破片である。3は外面に燃糸文（単軸絡条体L）、内面に貝殻条痕が施される体部破片である。これらの特徴をもつ土器は、吉田浜貝塚上層出土土器群（後藤、1968）、田柄貝塚貝層下土層出土土器群（相原、1986）に類例が認められ、縄文時代早期末に位置付けられる。

4は燃糸文に絡条体圧痕と折板状工具による山形沈線文が、5は口縁部と口唇部に絡条体圧痕が施される。いずれも内面にナデ調整が施される口縁部破片である。これらの特徴をもつ土器は上川名貝塚上層出土土器群（加藤、1951）、里浜貝塚梨木東地点土層出土土器群（東北歴史資料館、1994）に類例がみられ、縄文前期初頭の上川名式に位置付けられる。

6～9は口縁部破片で、6は非結束羽状縄文、7・8は同一個体の斜行縄文・0段多条（RL）、9は斜行縄文（RL）である。10・11は燃糸文（単軸絡条体R）の体部破片、12は単節縄文（RL）が施される丸底の底部破片である。6～12はいずれも内面がナデ調整されている。これらの特徴をもつ土器は縄文早期末から前期の土器群に類例がみられ、この時期に位置付けられる。

7. 遺物包含層

2箇所の遺物包含層（SX 1 遺物包含層、SX 2 遺物包含層）を検出した。

【SX 1 遺物包含層】（平面図：第3図、断面図：第121図、出土遺物：第122図、図版20-1・3）

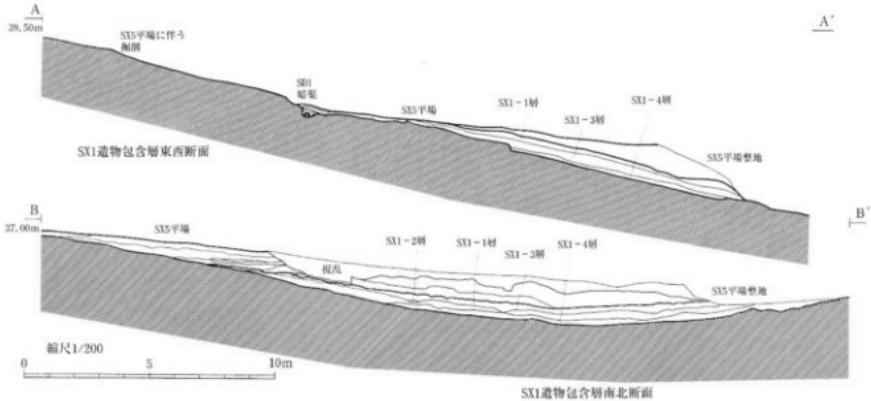
〔位置〕調査区北半部、丘陵尾根上の北東側に向かって傾斜する沢頭を中心に、標高34.0～36.5m付近に分布する。

〔重複〕S I 9・19・40・41・43堅穴住居跡、SE 1・3井戸跡、SX 6炉跡、SX 7焼成遺構、SK12・13土壤、SX 5平場と重複する。S I 9・19・40・41・43堅穴住居跡、SE 3井戸跡、SX 6炉跡、SX 7焼成遺構、SK12・13土壤より新しく、SE 1井戸跡、SX 5平場より古い。

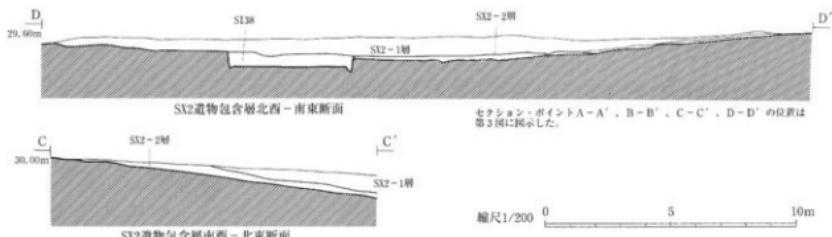
〔規模〕南北が約32m、東西が12m以上で、厚さは最大80cmある。

〔層位〕4層に分けられ、いずれも自然堆積層である。このうち第1層はSX 1 遺物包含層第1層、第2層はS I 40D堅穴住居跡第2層、第4層はS I 40D堅穴住居跡第3層に相当する。したがって、SX 1 遺物包含層は、S I 40D堅穴住居跡の廃絶以降にS I 40D堅穴住居跡の窪みを含めた周辺に自然堆積した遺物包含層である。

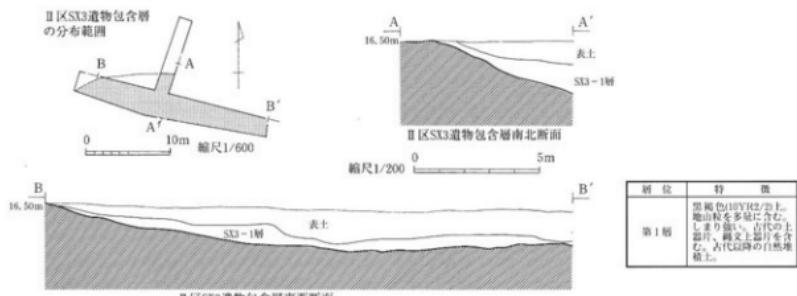
〔出土遺物〕第4層からロクロ調整の土師器環（2・4・5）・高台环（6・7・9）・甕、製塙土器（11）、手捏ね土器（10）、須恵器环（12・13）・甕などの破片が少數出土した。第3層から刀子（15）の破片1点の他、ロクロ調整の土師器環・高台环・甕、須恵器环・甕、土製紡錘車（14）の破片が少數出土した。第1層からロクロ調整の土師器環（1）・高台环・甕、須恵器环・甕の破片が少數出土した。このうち土師器環（1～5）、須恵器环（12・13）は、いずれも底部が回転糸切り無調整のものである。



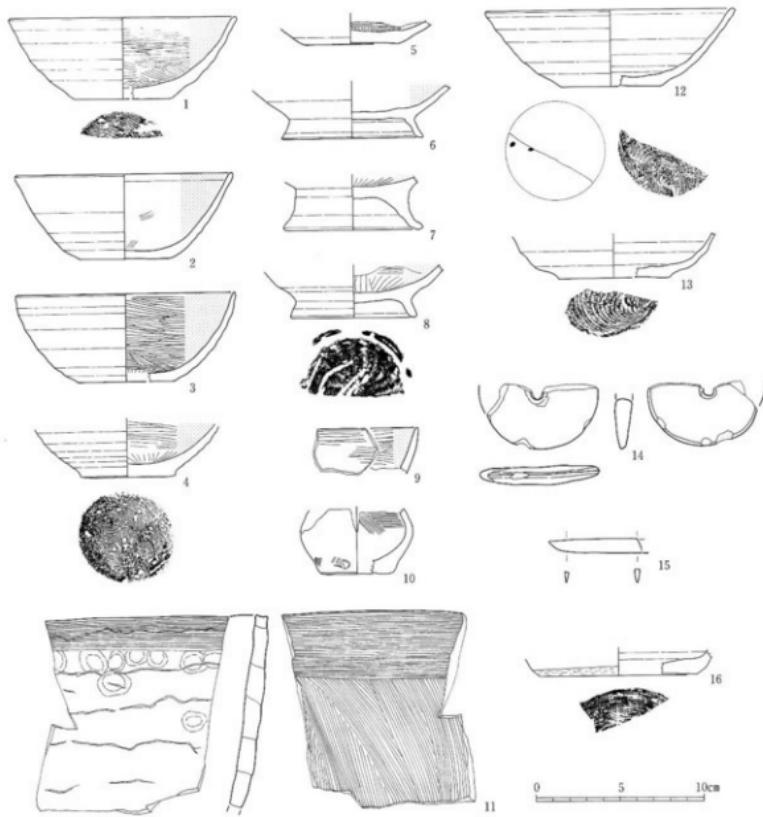
遺構	部位	特徴
SX1 包含層	第1層	暗褐色10YR3/3土。径5mmの地山粒、炭化物を少し含む。古代の土器片を多く含む。自然堆積。
	第2層	同じく黄褐色10YR5/8土。10世紀前半頃に降伏した灰白色火成岩、瓦片にレリーフ状に部分的に自然堆積。
	第3層	褐色10YRA/4土。径5mmの地山粒、炭化物と古代の土器片を多く含む。自然堆積。
	第4層	暗褐色10YR3/4土。径5mmの地山粒、炭化物を多く含む。古代の土器片を少し含む。自然堆積。
SX5 平場	整地層	明眞褐色10YR6/6粘質土ブロックを多量に含む暗褐色10YR3/3土と明眞褐色10YR6/6の互層。しまり強い。人為堆積。
SD1 基盤		SEI石組井戸跡。SX4 平場に伴う石組垣跡で、上部を同じく黄褐色10YR4/3土上で整地。



部位	特徴
第1層	黒褐色7.5YR3/2土。径2~8mmの粘板岩風化礫片、古代の上層片を少し含む。古代以降の自然堆積土。
第2層	黒褐色7.5YR3/2E土。径2~5mmの粘板岩風化礫片。圓文早期末~前期の圓文土器片を少し含む。圓文時代の自然堆積土。



第121図 SX1・2・3 遺物包含層断面図 (1/200)



番号	種類	分類	包含層	層位	特	量	取扱
1	土器器	B	SX1	第1層	口徑13.6cm、底径5.8cm。器高4.9cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。	0.05	
2	土器器	B	SX1	第4層	口徑13.0cm、底径5.4cm。器高4.1cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理→摩滅。	35-4	0.05
3	土器器	B	SX1	第2層	口徑13.1cm、底径5.8cm。器高4.3cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。	0.05	
4	土器器	B	SX1	第4層	底径5.6cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。	0.05	
5	土器器	B	SX1	第4層	底径5.7cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。	0.05	
6	土器器高台	B	SX1	第4層	高台径4.4cm、高台高1.2cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り一枚高台。内面：ヘラミガキ→摩滅→黒色処理。	0.05	
7	土器器高台	B	SX1	第4層	高台径4.4cm、高台高1.2cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り一枚高台。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	0.05	
8	土器器高台	B	SX1	第2層	高台径7.9cm、高台高1.0cm。ロクロ調整。外面：底部切り差し不明一枚高台、菊花状オサム。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。	0.05	
9	土器器高台	B	SX1	第4層	ロクロ調整。外面：ヘラミガキ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。胎上に長石粒を含む。徒或不良。	0.05	
10	手形ね土器		SX1	第4層	底径4.4cm、最大径は7.7cmで、体中央部にある。基ロクロ調整。外面：ハサメメナデ→摩滅。内面：ナデ。塗墨式。	0.05	
11	製壺土器		SX1	第4層	口割部平地、上端わずかに窪む。背ロクロ調整。外面：粘土組積み上げ地→胎サエ→口縁ヨコナデ。内面：口縁ヨコナデ。	35-6	0.06
12	面器器	D1	SX1	第4層	口径14.9cm、底径6.0cm。器高4.6cm。外面：底部回転糸切り無調整。	0.05	
13	面器器	D1	SX1	第4層	底径6.6cm。外面：底部回転糸切り無調整。	0.05	
14	上製縫縫車		SX1	第2層	土脚器。約半分欠損。円盤状。輪孔内に輪と直交する横方向の擦痕がある。直径6.5cm、厚さ1.1cm、輪孔径0.8cm。全面ナデ?、摩滅。	36-13	0.06
15	刀子		SX1	第3層	刃先一寸鉄碎片。刃先がフラワやくつ、半造り角形。現長5.6cm、刃部幅4.5mm、種厚3mm。	37-35	0.01
16	復原器器	A3	SX3	第3層	外面：底部切り差し不明一枚下→底部回転ヘラケラジ→底部に複数削痕（「木」カ）。	35-12	0.05

第122図 S X 1 · 3 遺物包含層出土遺物

【S X 2 遺物包含層】(平面図: 第3図、断面図: 第121図断面C—C'・D—D'、遺物: 第123・123図、図版20—4)

〔位置〕調査区南半部、丘陵尾根上の北東側に向かって傾斜する沢頭を中心に標高28.0m~30.0m付近に分布する。

〔重複〕SB12・13掘立柱建物跡、S I 32・37~39竪穴住居跡と重複する。S X 2 遺物包含層第2層はこれらよりも古く、S X 2 遺物包含層第1層はこれらよりも新しく、その上を覆う。

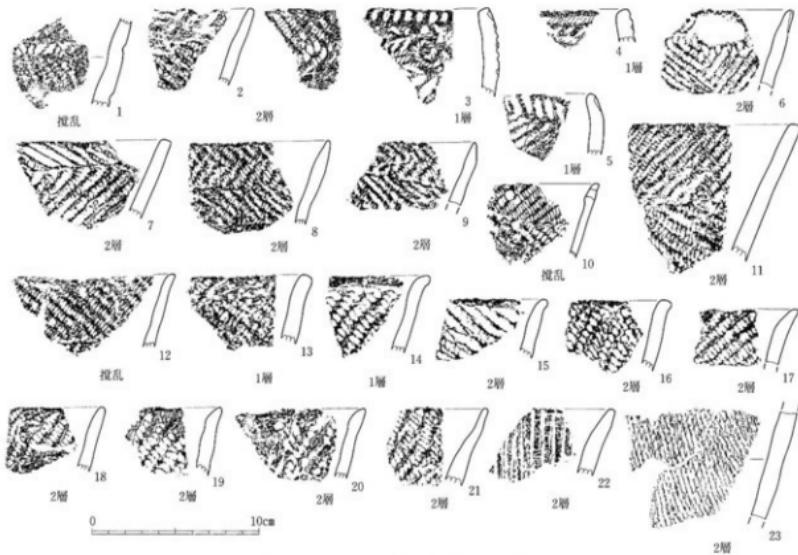
〔規模〕南北が約22m、東西が25mで、厚さは最大90cmある。

〔層位〕2層に分けられ、いずれも自然堆積層である。下位の第2層と上位の第1層とで、時期的に大きく異なる。

〔出土遺物〕縄文土器の口縁部・体部破片が少數出土した。いずれも胎土に纖維を含む深鉢形土器である。

1は斜行縄文(L R)に上下2段に撚糸圧痕(L R)が施され、内面はナデ調整されている口縁部破片である。この特徴をもつ土器は、吉田浜貝塚上層出土土器群(後藤、1968)、田柄貝塚貝層下土層出土土器群(相原、1986)に類例が認められ、縄文早期末に位置付けられる。

2は内外面に結束第1種羽状縄文(0段多条RL・L R)が施される口縁部破片である。3・4は内湾気味の口縁部で、内面に丁寧なミガキ調整が施される。3は渦巻状の1段撚りの撚糸圧痕(R)と継位・斜位の沈線文、4は1段撚りの撚糸圧痕(R)と斜位の沈線文が施される。5は内湾する口縁で、口縁端部に斜位の沈線文、体部には斜行縄文・0段多条(L R)が施される。6



第123図 S X 2 遺物包含層出土遺物

は菱形状の結束第1種羽状縄文（LR・RL）の施される口縁部である。これらの特徴をもつ土器は上川名貝塚上層出土土器群（加藤、1951）に類例がみられ、縄文前期初頭の上川名式に位置付けられる。

7～22は口縁部、23は体部破片である。7・13は非結束羽状縄文（0段多条LR・RL）で、12・15・17・21は斜行縄文・0段多条、14・16・18～20は斜行縄文・単節、22・23は撚糸文（単軸絡条体L）が施される。11は焼成前に補修穴が穿孔されている。

これらの特徴をもつ土器は、縄文早期末から前期の土器群に類例がみられ、この時期に位置付けられる。

8. その他の出土遺物

古代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙、遺物包含層、溝、攪乱、表土などから、縄文時代早期末～前期初頭頃の縄文土器片やその頃と考えられる石器、弥生土器片、続縄文土器片、古墳時代前期の塙釜式期の土師器片などが少數出土した。代表的な縄文土器、弥生土器片、続縄文土器片、古墳時代前期の塙釜式期の土師器を第125図、石器を第126・127図に掲載した。また攪乱や表土などからも奈良・平安時代の遺物が少數出土した。特に注目すべき奈良・平安時代の遺物を第124図に掲載した。

【奈良・平安時代の遺物】（第124図）

表土などから出土した奈良・平安時代の遺物には、土師器壺・高台壺・耳皿（1）・高壺（2）・甕、須恵器壺・高台壺・鉢（5）・甕（3）、円面硯（6）、丸瓦（7）、土製支脚（8）などの破片、砥石（11・12）、板状鉄製品、鉄滓などがある。須恵器甕破片（3）は外面体上部に「是」と焼成前に刻書されている。丸瓦（7）は隣接する桃生城跡出土の丸瓦1類に相当する。

【縄文土器】（第125図1～14）

1～13はすべて胎土に纖維を含んでいる深鉢形土器である。

1・2は菱形状の結束第1種羽状縄文（LR・RL）で、口唇部に刺突文（1）・撚糸押圧文（2）が施され、内面にナデ調整が施される口縁部破片である。3～5は内湾気味の口縁部破片で、外面には非結束羽状縄文（0段多条）に、渦巻状の1段撚りの撚糸圧痕文（R）と縦位・斜位の沈線文が施される。内面に丁寧なミガキ調整が施される。なお、7は3と同一個体である。これらの特徴をもつ土器は、上川名貝塚上層（加藤、1951）出土土器群に類例がみられ、縄文前期初頭の上川名式に位置付けられる。

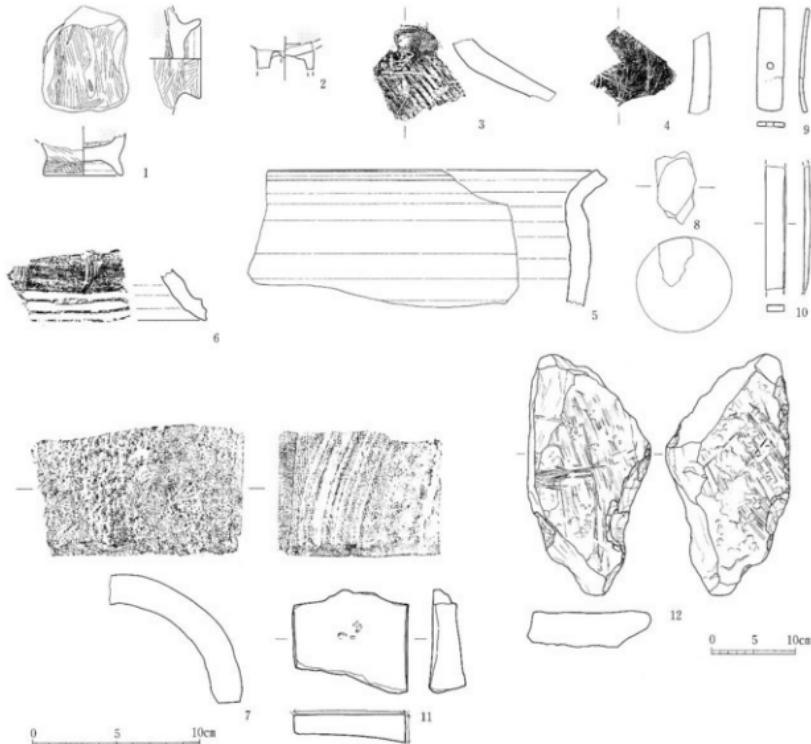
6・8・10・11は斜行縄文・0段多条が施される口縁部破片で、6は口唇部に回転縄文（LR）が施される。9・12は単節縄文が施される口縁部破片である。13は尖底の底部破片で0段多条（LR）が施されている。これらの特徴をもつ土器は、縄文早期末から前期の土器群に類例がみられ、当該期に位置付けられる。

14は2つの突起が付き、羊歯状文が施される深鉢形土器の口縁部破片で、縄文晚期前葉の大洞BC式に位置付けられる。

【弥生土器】（第125図15～24）

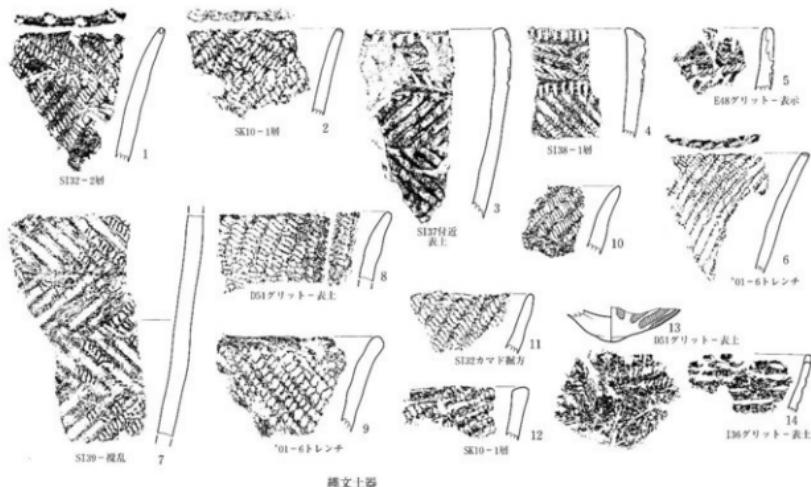
15～24は全体に鈍い黄褐色の胎土で、地文があるものは細かい縄文が施される。小破片のため器形

は不明である。15はやや内湾気味の肥厚する口縁で、棒状工具による1条の沈線文を施した後、口縁下端を指頭押圧し、沈線文上に連続刺突文を施している。16・17は同一個体でやや外反気味の肥厚する口縁である。先端の鋭い工具で2条の沈線文が施された後、口縁下端が指頭押圧される。18はやや外反気味の突起を有する肥厚する口縁で、口縁部には斜行縄文(R L)と工字状の沈線文、口唇部に

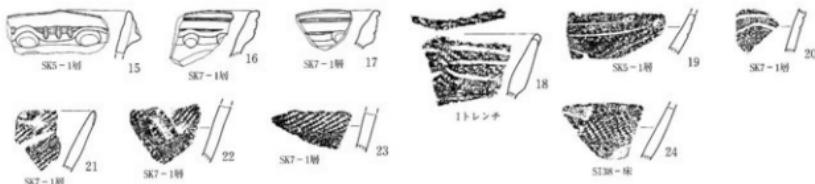


番号	種類	分類	部位	特徴	写真	収納	
1	土器器耳瓶	BIA	SN1周辺表土上	体部～底部・高台部3-5段破片。口縁欠損。高台幅4.8cm。高台高1.1cm。ロクロ調整。外面：底部側軸系切り付高台・口縁高台へラミガキ→黒色處理。内面：口縁～底部へラミガキ→黒色處理。		025	
2	土器器耳瓶	表様	底部～脚部表皮。残存悪く、全体的に厚滅し、透かしは1箇所のみ確認。赤ロクロ調整。			025	
3	須恵器盤	SH6周辺表土上	脚部破片。外面：脚部下ロクロナデ、脚部平行叩き目・焼成前割削「足」。内面：脚下部ロクロナデ、脚部無文当て具痕。燒成品材。		35-11	025	
4	須恵器皿	表様	脚部破片。外面：浅い平行叩き目？ナデー焼成前不明剥離？。またはヘラ記号？。内面：無文当て具痕。			025	
5	須恵器鉢	A2	SH6周辺表土上	口縁～体上部破片。口縁「く」字状に外反。両面コロナデ。		025	
6	円鏡鏡	SH6南西表土上	円鏡鏡。端部は壊状にやすや尖る。台脚外縁：ロクロナデ。横径に平行する縦線・縦線に弧を描く4箇の刻線。内面：ヘラ・ガキ→黒色處理。：ロクロナデ			025	
7	丸瓦	北側表土上	底面～腹端部の残る脚部破片。背面：脚吻き目→ロクロナデ→脚端部に沿って凸面を幅5～8mmで縱方向にヘラケズリ。側面：側面切削→細い布目・脚端部に沿って凹面を幅8～10mmで縱方向にヘラケズリ→底端部に沿って凹面を幅8～10mmで縱方向にヘラケズリと粗略化。内面：底石接觸。ガラス粒をやや多く含む。焼成ややあまい。桃生城跡分類の丸瓦1期（粘土焼き方式による有段瓦瓦）に相当する。		35-6	027	
8	上蓋支脚	SE1周辺表土上	破片。形状のため調査不明。直径約5.7cm。			028	
9	板状鉄製品	中央表土上	平成12年度発掘調査第10号レンチ北側上・板状。長さ6.1cm。幅1.6cm。厚さ2.5mm。ほぼ中央に径3mmの孔1箇所。		37-33	031	
10	板状鉄製品	新浜（D 6）	板状。両端欠損。残存長7.4cm。幅1.2cm。厚さ3.5mm。			37-32	031
11	砾石	SH16周辺表土上	平成12年度発掘調査第10号レンチ中央上・粗粒砂岩製。板状。2面研磨。荒面。長さ6.8cm。幅6.3cm。厚さ2.2cm。		38-19	036	
12	砾石	表土上	粘土岩製。板状。表面2面研磨・削除。長さ28.9cm。幅14.8cm。厚さ4.4cm。			036	

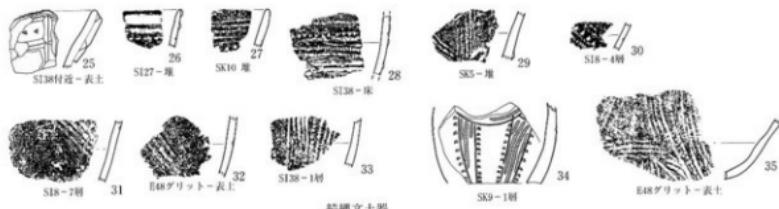
第124図 その他の出土遺物(1)－奈良・平安時代の遺物



縄文土器



弥生土器



統縄文土器



古墳時代前期土器

0 10cm

第125図 その他の出土遺物(2)-縄文土器、弥生土器、統縄文土器、古墳時代前期土器

回転縄文（R L）が施文される。19・20は先端の鋭い工具で工字状の沈線文が施文される体部破片である。21～23は同一個体で斜行縄文（L R）、24も斜行縄文（R L）が施文される。これらの特徴をもつ土器は、弥生後期・天王山式に類似するもので、天王山式の土器群の範疇に位置付けられる。

【統縄文土器】（第125図25～35）

25～35は全体に薄手で黒褐色の胎土である。25～33は壺形土器である。

25は外傾する口縁部で、端部に横位と縦位に垂下する隆起線文が施され、その間に細かな三角形の連続刺突文が施文される。また、口唇部にも細かな刻みが施文される。26はやや外反気味の口縁部で、横位の微隆起線文の下に細かな三角形の連続刺突文が施文される。27はやや内湾気味の口縁部で、横位の細い沈線文にL R 帯縄文と連続刺突文が施文される。28～33はいずれもL R 帯縄文が施文される体部破片で、28は2条の微隆起線文とL R 帯縄文の間に細かな三角形の連続刺突文、29は隆起線文と2条のL R 帯縄文、30～31は帯縄文と細かな三角形の連続刺突文が施文される。33はいずれも縦位の沈線文・L R 帯縄文・連続刺突文が施文される。34は鉢形土器の体部下端から頸部にかけての体部破片で、縦位の沈線文・L R 帯縄文・細かな弧状の連続刺突文による文様が施文される。35は浅鉢形土器の底部から体部にかけての体部破片で全体に摩滅している。沈線文・L R 帯縄文・連続刺突文による弧状の文様が施文される。

これらの特徴をもつ土器は、①微隆起線文のほかに細い沈線文が施文され、②微隆起線文・沈線文に沿って連続刺突文が施文される点で特徴的である。後北C 2・D式（佐藤、1984；相沢、1999）に位置付けられ、石巻市的小沢遺跡（石巻市教育委員会、1993）、新金沼遺跡（芳賀、1999）でも出土している。

【古墳時代前期の塙釜式期の土師器】（第125図36～38）

36は複合口縁大型壺形土器の口縁部破片である。外面にヨコナデ調整後、接合面をヘラ状工具で押さえた縦位の「棒状浮文」が貼付される。内面はヨコナデ調整される。

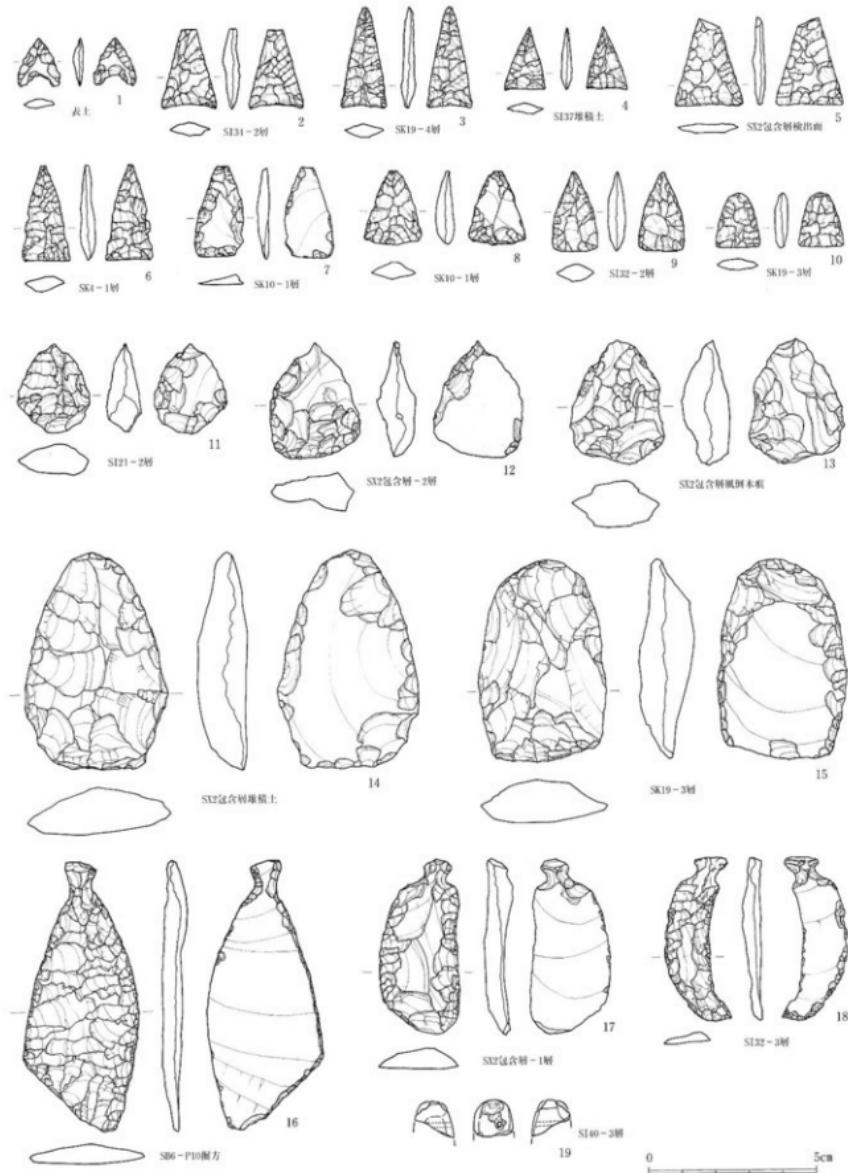
37は複合口縁壺形土器の口縁部破片である。外面に斜位のハケメ調整後、縦位の「棒状浮文」と連続刺突文が施文される。なお、「棒状浮文」は剥落している。内面はヨコナデ調整される。

38は壺形土器の頸部破片で、頸部に刻み目のある突帯が巡る。外面はミガキ調整後、朱彩されている。内面は摩滅のため、調整不明である。

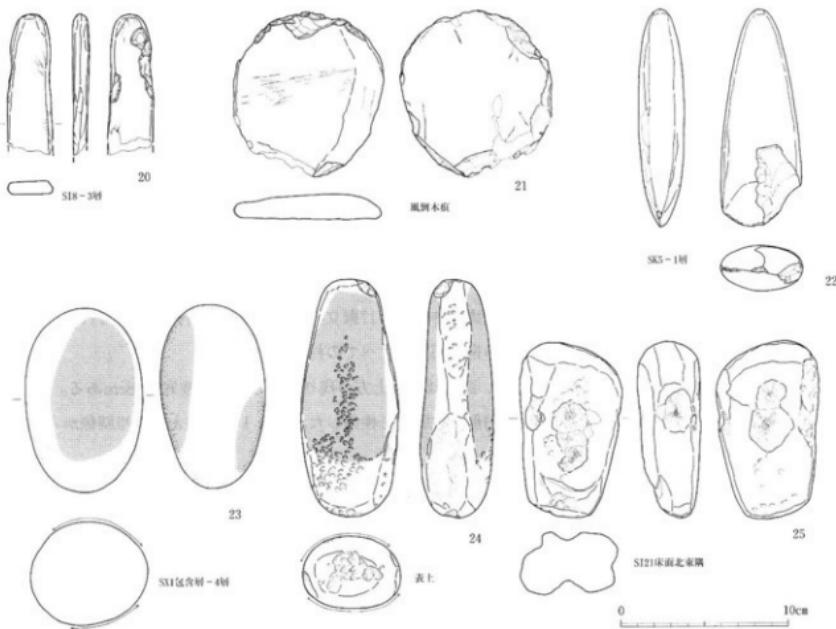
これらの特徴をもつ土器は、古墳時代前期の塙釜式に位置付けられる。

【縄文石器】（第126・127図）

縄文時代の石器には、石鎌（1～10）、尖頭器（11～13）、スクレイバー（14・15）、石匙（16～18）、不定形石器、二次加工ある剥片、剥片、チップ、石核などの剥片石器、石斧（22）、石剣（20）などの磨製石器、凹石（25）、敲石（24）、磨石（23）、円板状石製品（21）などの礫石器がある。他に時期不明の垂飾品（19）がある。このうち石鎌には凹基で両側辺の彎曲するもの（1）、わずかに凹基となる二等辺三角形状のもの（2・3）、平基で二等辺三角形状のもの（4・5・6）、わずかに凸基となる二等辺三角形状のもの（8・9）、先端が丸まる平基のもの（10）などがある。石匙はすべて縦長のものである。



第126図 その他の出土遺物(3)－縄文時代石器



第127図 その他の出土遺物(4)－縄文時代石器

第4章 II・III・IV区で発見された遺構と遺物

1. II区で発見された遺構と遺物

主要調査区であるI区の調査区の斜面下方に設定したII区では、遺物包含層（SX3 遺物包含層）の北西端部を検出した。このSX3遺物包含層はIII区とIV区までは広がらない。

【SX3 遺物包含層】（平面図：第2・3図、断面図：第121図、出土遺物：第122図、図版20-2）

〔特徴〕表土の下が自然堆積した遺物包含層で、堆積土は1層である。

〔出土遺物〕非ロクロ調整の土師器甕、須恵器壺・蓋・甕、縄文時代早期末頃～前期初頭頃の縄文土器深鉢などの破片が少數出土した。遺物の多くは摩滅している。

2. III区で発見された遺構と遺物

III区は三陸自動車道計画路線内の民家の移転地であり、国庫補助の緊急調査費を用いて確認調査を行ったものである。III区は丘陵斜面が大きく削平を受けた人為的な平坦面であったため、遺構は検出されなかった。表土からは古代の遺物が少數出土した。

3. IV区で発見された遺構と遺物

IV区は三陸自動車道計画路線内の民家の移転地であり、国庫補助の緊急調査費を用いて確認調査を行ったものである。IV区では掘立柱建物跡2棟、柱列跡2条、竪穴住居跡3棟、遺物包含層1箇所を検出した（第2・128図）。遺構検出の際に地権者と協議し、遺構面を土盛り保存した後に民家の移転を許可するよう指導した承が得られたため、遺構の掘り下げは掘立柱建物跡、柱列跡について必要最小限に留め、竪穴住居跡、遺物包含層の掘り下げは行わなかった。

【S B16掘立柱建物跡】（平面図・断面図：第128図、図版6-1）

〔重複〕 S A 1柱列跡と重複し、これよりも古い。また、S B17掘立柱建物跡と重複し、新旧関係は不明である。しかし、S B17掘立柱建物跡の方向がS A 1柱列跡とほぼ同様であり、これらが同時に存在した可能性が高く、S B16掘立柱建物跡がS B17掘立柱建物跡よりも古いと考えられる。

〔柱間数・棟方向〕 桁行2間、梁行2間の南北棟で、すべての柱穴を検出した。

〔柱穴〕 一辺40～60cmの方形を基調とし、深さは斜面上方の残りのよい北西隅柱穴で28cmある。

〔柱痕跡〕 すべての柱穴で径16cm前後の円形の柱痕跡を検出した。S A 1柱列跡との重複関係からみて、廃絶時に柱が切り取られているとみられる。

〔平面規模〕 桁行総長は西側柱列で約4.0m、柱間寸法は北から2.0m・2.0mである。また、東側柱列で約4.0m、柱間寸法は北から1.9m・2.1mである。梁行総長は北妻で約3.8m、柱間寸法は西から1.9m・1.9mである。また、南妻で約3.8m、柱間寸法は西から2.0m・1.8mである。

〔方向〕 西側柱列でみると北で西に約10°偏る。

〔出土遺物〕 掘方から摩滅した土師器甕と繩文土器深鉢の体部破片、柱痕跡から非ロクロ調整の土師器甕と繩文土器深鉢の体部破片が少数出土した。

【S B17掘立柱建物跡】（平面図・断面図：第128図、図版6-1）

〔重複〕 S B16掘立柱建物跡と重複し、新旧関係は不明である。前述のように、S B17掘立柱建物跡の方向がS A 1柱列跡とほぼ同様であり、これらが同時に存在した可能性が高いので、S B17掘立柱建物跡がS B16掘立柱建物跡よりも新しいと考えられる。

〔柱間数・棟方向〕 桁行3間、梁行2間の東西棟とみられ、調査区外に位置する南側柱列をのぞく柱穴6箇所を検出した。

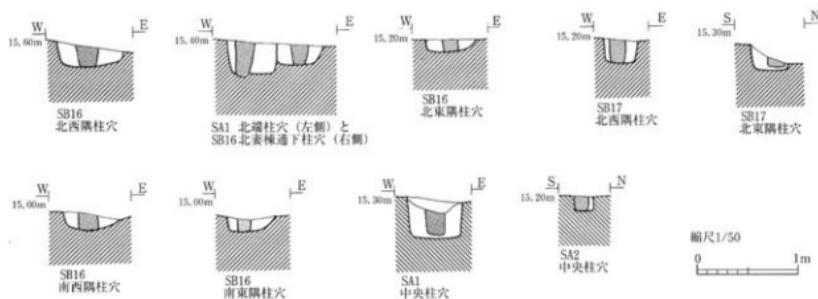
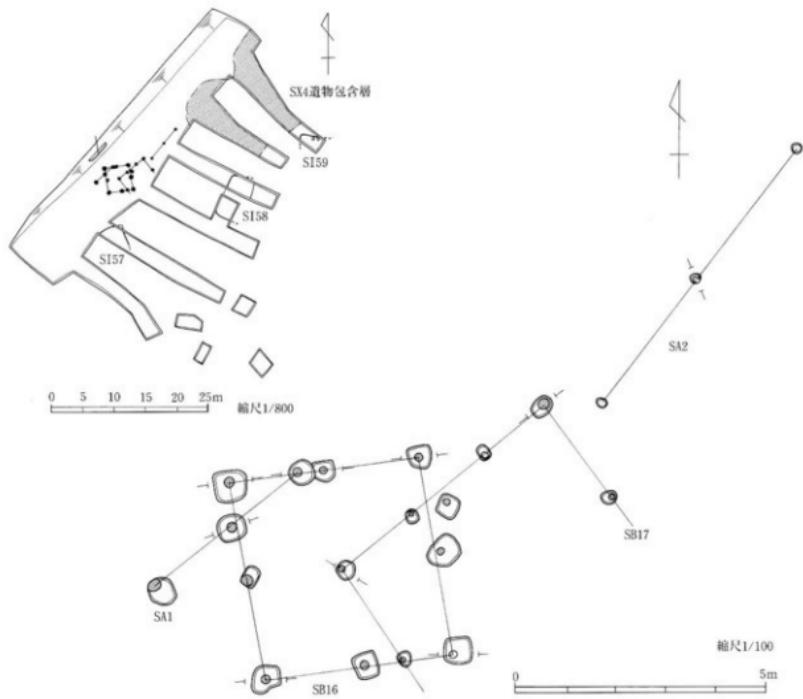
〔柱穴〕 一辺30～45cmの方形を基調とし、深さは斜面上方にあたってて残りの比較的よい北西隅柱穴で24cmある。

〔柱痕跡〕 6箇所すべての柱穴で径14cm前後の円形の柱痕跡を検出した。

〔平面規模〕 桁行総長は北側柱列で約5.2m、柱間寸法は東から1.5m・1.9m・1.8mである。また、東妻で柱間寸法は北から2.3mである。

〔方向〕 東妻でみると北で西に約37°偏る。北側柱列でみると北で東に約52°偏り、S A 1柱列跡の方向とほぼ一致する。

〔出土遺物〕 掘方から摩滅した土師器甕体部破片、柱痕跡から非ロクロ調整の土師器甕体部破片、須恵器環口縁部破片が各1点出土した。



第128図 IV区検出の主要遺構平面図 (1/100)、断面図 (1/50)

【S A 1 柱列跡】(平面図・断面図：第128図、出土遺物：第129図)

〔重複〕 S B 16掘立柱建物跡と重複し、これよりも新しい。

〔柱間数・方向〕 柱間 2 間で、柱穴 3 箇所を検出した。方向は北で東に約53°偏り、S B 17掘立柱建物跡の方向とほぼ一致する。

〔柱穴〕 一辺50～60cmの方形を基調とし、深さは中央柱穴で40cmある。

〔柱痕跡〕 各柱穴で径15cm前後の円形の柱痕跡を検出した。中央柱穴では柱切取穴の下から柱痕跡を検出し、廃絶時に解体されている。

〔出土遺物〕 中央柱穴の柱柱切取穴から回転糸切り無調整の須恵器坏底部破片（1）が1点出土した。

【S A 2 柱列跡】(平面図・断面図：第128図)

〔重複〕 主要遺構との重複はないが、S B 17掘立柱建物跡の北側と約1.0m離れている。

〔柱間数・方向〕 柱間 2 間で、柱穴 3 箇所を検出した。方向は北で東に約38°偏る。

〔柱穴〕 径20cm前後の円形を基調とし、深さは中央柱穴で15cmある。

〔柱痕跡〕 中央柱穴で径11cmの円形の柱痕跡を検出した。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

【S I 57竪穴住居跡】(平面図：第128図、出土遺物：第129図)

〔重複〕 主要遺構との重複はない。南半は床面下まで削平されている。

〔平面形・規模〕 平面形は方形とみられ、規模は北辺で4m以上、東辺で4m以上ある。

〔方向〕 東辺でみると北で西に約13°偏る

〔カマド〕 カマドの位置は不明である。

〔出土遺物〕 検出面から土師器坏・甕（5）などの破片が少数出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏には体下部に段を持つ口縁～体部破片が1点ある。

【S I 58竪穴住居跡】(平面図：第128図、出土遺物：第129図)

〔重複〕 主要遺構との重複はない。東半は床面下まで削平されている。

〔平面形・規模〕 平面形は方形とみられ、規模は西辺で6.4m、北辺で4m以上ある。

〔方向〕 西辺でみると北で東に約20°偏る

〔カマド〕 カマドの位置は不明である。

〔出土遺物〕 検出面からロクロ調整の土師器坏（2）・椀（4）・甕・須恵器坏（3）・甕・壺などの破片が少数出土した。このうち土師器坏（2）と須恵器坏（3）は底部が回転糸切り無調整である。また、土師器椀（4）は、ロクロ調整で、底部が回転糸切り後に付高台と両面がヘラミガキされ、内面が黒色処理されている。

【S I 59竪穴住居跡】(平面図：第128図)

〔重複〕 主要遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕 平面形は方形とみられ、規模は北辺で3.8m以上ある。

〔方向〕 北辺の方向からみて、西辺は北で東に約13°偏るとみられる。

〔カマド〕 北辺に付設されている。

〔出土遺物〕 検出面から非ロクロ調整の土師器坏・甕体部破片、須恵器坏口縁部破片・甕体部破片が少数出土した。

【S X 4 遺物包含層】(平面図: 第128図)

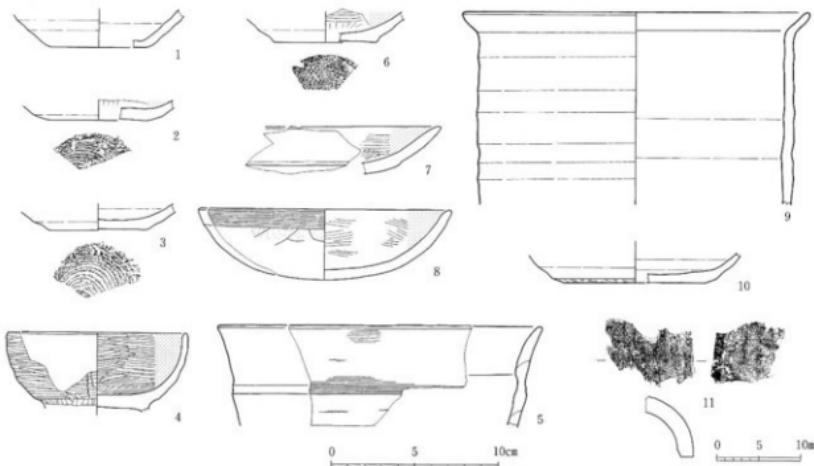
〔位置〕 IV区の北部に位置する。

〔規模〕 規模は南北が20m以上、東西が19m以上である。

〔出土遺物〕 土師器坏 (6・7・8)・甕 (9)などの破片が少数出土した。土師器には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがあり、前者の土師器坏には体下部に段を持ち、丸底気味のもの (6)、段がない丸底のもの (7)、後者の土師器坏には底部が回転糸切り無調整のもの (8) がある。

【表土の出土遺物】(出土遺物: 第129図)

表土から土師器坏・甕、須恵器坏 (10)・甕の破片が少數と丸瓦破片 1点 (11) が出土した。このうち土師器にはロクロ調整のものと非ロクロ調整のものがある。非ロクロ調整の土師器坏には体下部に段を持つものと丸底気味のものがある。須恵器坏には底部～体下部が回転ヘラケズリされたもの (10) がある。丸瓦破片 (11) は桃生城跡出土の丸瓦 2 類に相当する行基丸瓦である。



番号	種類	分類	遺物	特徴	号数	収納
1	須恵器坏	D1	SA1種中央柱穴	体下部～底部1/6破片。底径6.0cm。外面：底部回転糸切り無調整。	35-5	025
2	土師器坏	E2B	S15種唇縫無表面	体部～底部1/5破片。底径6.0cm。外面：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	35-5	025
3	須恵器坏	D1	S15種唇縫無表面	体下部～底部1/6破片。底径5.8cm。外面：底部回転糸切り無調整。	35-5	025
4	土師器高台坏	B C	S15種唇縫無表面	口幅1/3～底部定形・凸台唇欠損破片。口径10.8cm。ロクは調整。外面：底部回転糸切り→付高台→ヘラミガキ（一部にロクナメを残す）。体漏にヘラケズリ。内面：板付状ヘラミガキ→黒色処理。	35-5	025
5	土師器甕	I A	S15種唇縫無表面	口幅1/5～胴上部破片。基ロコ調整。外面：口縁ヨコナメ、体部摩滅。内面：口縁ヨコナメ？、胴部摩滅。	35-5	025
6	土師器坏	E2B	SX4遺物包含層	体部～底部1/4破片。底径6.0cm。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。	35-5	025
7	土師器坏	I BH	SX4遺物包含層	口幅1/6～底部破片。丸底。口径20.8cm。高さ4.3cm。非ロコ調整。外面：口縁ヨコナメ、体部～底部手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	35-5	025
8	土師器坏	I A2	SX4遺物包含層	口縁～体下部破片。体下部に残。丸底気味か。非ロコ調整。外面：摩滅。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	35-5	025
9	土師器甕	I A2	SX4遺物包含層	口幅1/6～胴部破片。口径20.8cm。口縁削り外反。ロコ調整。	35-5	025
10	須恵器坏	A3	表土	体下部～底部1/4破片。残部：底面取り廻し不明・体下部～底部回転ヘラケズリ。尖底寂。施成不良。	36-4	027
11	丸瓦	表土	縦片、右側部残存。凸面：縦面ヘラケズリ。凹面：有目一側縦縫方向ヘラケズリ。灰色。粘土に砂粒を含むが、緻密。機成堅繩。機成城跡分類の丸瓦2類（行基丸瓦）に相当。	36-4	027	

第129図 IV区出土遺物

第5章 考察

1. 古代の土器類の分類

本遺跡から出土した古代の土器類には、土師器、須恵器、須恵系土器、製塙土器、灰釉陶器がある。このうち主体を占めるのは土師器、須恵器で、他は少量である。土師器には古墳時代前期の塙釜式が少量含まれるもの、土師器の多くと須恵器は奈良・平安時代のものである。

これら奈良・平安時代の土師器、須恵器、及びこれらとともに少量出土した須恵系土器について分類を行い、製塙土器、灰釉陶器については記載のみ行う。なお、古墳時代前期の塙釜式の土師器については、量が少ないので、以下の分類からは除外する。

(1) 土師器 (第130・131図)

土師器には製作にロクロを使用しないもの（以下、「非ロクロ調整」とする）とロクロを使用するもの（以下、「ロクロ調整」とする）がある。前者をⅠ類、後者をⅡ類とする。

非ロクロ調整の土師器Ⅰ類には、壺・塊・高塊・鉢・甕・壺がある。ロクロ調整の土師器Ⅱ類には、壺・塊・高台壺・耳皿・壺・鉢・甕・瓶・蓋がある。これらの中には、器形、調整手法の違いなどによってさらに細分されるものがあり、以下のように分類した。

【壺】非ロクロ調整の壺Ⅰ類とロクロ調整の壺Ⅱ類がある。

《非ロクロ調整の壺Ⅰ類》

底部の形状によって以下のように分類される。

〔IA類〕丸底のもの。外面の体下部の段や横方向の沈線の有無によって以下のように細分される。

IA1類：外面体下部に段や沈線が巡るもの。大きさは口径14.6cm、器高4.3cm、器高／口径比0.29である。内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。外面は口縁部がヨコナデされ、体部から底部は摩減して調整不明である。

IA2類：外面体下部に段や沈線のないもの。大きさは口径12~15cm、器高3~5cm、器高／口径比0.25~0.28である。内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。外面は口縁部がヨコナデされ、体部から底部は手持ちヘラケズリされている。

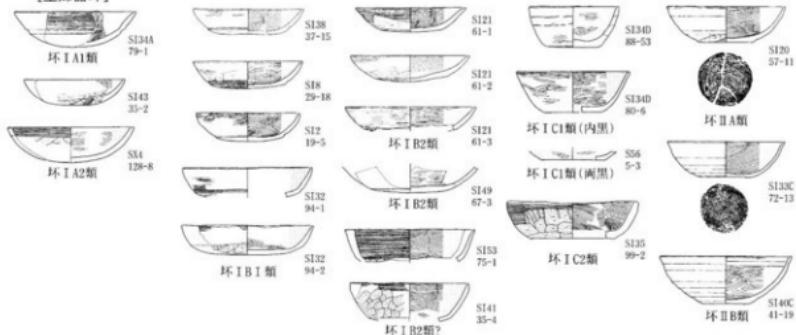
〔IB類〕丸底気味のもの。外面の体下部の段や横方向の沈線の有無によって以下のように細分される。

IB1類：外面体下部に段や沈線が巡るもの。大きさは口径12~17cm、底径7~13cm、器高3~4cm、器高／口径比0.22~0.27、底径／口径比0.63~0.81である。内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。外面の口縁部はヨコナデ、体部から底部は手持ちヘラケズリされている。

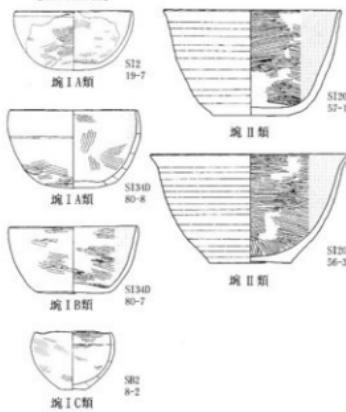
IB2類：外面体下部に段や沈線のないもの。口径13~16cm、底径7~11cm、器高3~4cm、器高／口径比0.22~0.27、底径／口径比0.50~0.65である。内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。外面の口縁部はヨコナデ、体部から底部は手持ちヘラケズリされている。

〔IC類〕平底のもの。器厚と作りによって以下のように細分される。

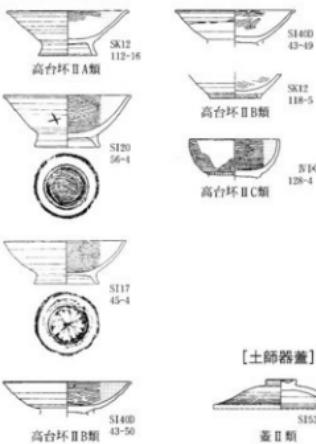
[土師器器皿]



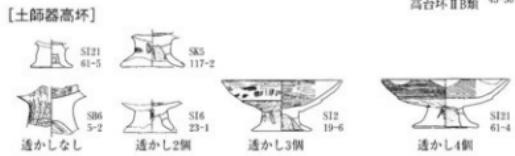
[土師器塊]



[土師器高环]



[土師器蓋]



[土師器耳皿]



縮尺1/6
0 5 10cm

第130図 土師器の分類(1)

I C 1類：器厚が薄く丁寧な作りのもの。大きさは口径10~14cm、底径6~7cm、器高約5cm、器高／口径比0.36~0.45、底径／口径比0.50~0.60である。器高／口径比がやや大きい。両面ともヘラミガキされている。その後に内面が黒色処理されるもの（第80図6、第88図53）と両面とも黒色処理されるもの（第5図3）とがある。

I C 2類：器厚が厚く粗雑な作りのもの。大きさは口径15.8cm、底径10.0cm、器高4.5cm、器高／口径比0.29、底径／口径比0.63、器厚9mmである。口径、底径はI C 1類よりも大きく、器高／口径比が小さい。内面は口縁部から底部がナデされ、その後に黒色処理されていない。外表面は口縁部がヨコナデされ、その後に体上部から底部が手持ちヘラケズリされている。

《ロクロ調整の壺II類》

平底で、体部が膨らみながら立ち上がり、口縁部がそのまま外傾するかわずかに外反する。内面はロクロナデ後にヘラミガキされ、その後に黒色処理されている。底部の切り離しは回転糸切りである。その後の外表面の体部下端から底部への再調整の有無によって以下のように分類される。

〔II A類〕外表面の底部外周または体部下端～底部外周が手持ちヘラケズリで再調整されているもの。大きさは口径14~17cm、底径5~7cm、器高4~7cm、器高／口径比0.30~0.38、底径／口径比0.37~0.45である。

〔II B類〕再調整されていないもの。大きさは口径13~16cm、底径5~8cm、器高3~6cm、器高／口径比0.29~0.40、底径／口径比0.36~0.43である。

【壺】非ロクロ調整の壺I類とロクロ調整の壺II類がある。

《非ロクロ調整の壺I類》

底部の形状・大きさ、口縁部から体部の形状によって以下のように分類される。

〔I A類〕丸底で、口縁部が直立またはわずかに内彎するもの。大きさは口径14~16cm、器高7~10cm、器高／口径比0.51~0.59である。内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。外表面は全面がヘラミガキ、または口縁部から体下部がヘラミガキ、体下部から底部が手持ちヘラケズリされている。

〔I B類〕平底で底径が大きく、口縁部が外傾するもの。大きさは口径13.5cm、器高8.9cm、底径8.0cm、器高／口径比0.59、底径／口径比0.66である。両面ともヘラミガキされ、その後に内面が黒色処理されている。

〔I C類〕平底で底径が小さく、体部が強く膨らみ、口縁部が内彎するもの。大きさは口径9.1cm、器高7.0cm、底径3.0cm、器高／口径比0.77、底径／口径比0.33で、I A類、I B類よりも小型である。内面は口縁部がヨコナデ、体部から底部がナデされ、黒色処理されていない。外表面は口縁部から底部までヘラミガキされている。

《ロクロ調整の壺II類》

平底で、体部が膨らみながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。大きさは口径21~24cm、底径9~10cm、器高13cm前後と大型で、器高／口径比0.55~0.60、底径／口径比0.40~0.42である。内

面はロクロナデ後にヘラミガキされ、その後に黒色処理されている。底部の切り離しのわかるもの（第57図14）は回転糸切りで、その後に底部の一部がナデまたは手持ちヘラケズリされている。

【高坏】非ロクロ調整の高坏Ⅰ類がある。

全形のわかるもの（第19図6、第61図4）は、坏部が丸底で、外面の体下部に段や沈線が巡り、脚部が外に彎曲しながら開くか、厚みを増しながら外に開く。脚部には縦長凸レンズ状の透かしが外面側からあけられている。透かしは第119図6が3個、第61図4が4個である。大きさは口径15cm前後、器高6cm前後、脚部径7~8cm、脚部高2.5cm前後、坏部高3~4cmである。坏部の内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。坏部の外面は口縁~体上部がヨコナデまたはヘラミガキ、ナデされ、体下部から底部が手持ちヘラケズリされている。脚部の内面は手持ちヘラケズリされ、外面は手持ちヘラケズリまたはナデされている。

脚部破片には脚部径5~8cm、脚部高2~3cmのものが多い。脚部下部が欠損して大きさが不明確だが、これらよりも大型のものもある（第5図2）。また、脚部に透かしのあるものとないものとがある。透かしは縦長凸レンズ状で、外側からあけて貫通するものを基本とするが、中には1個が貫通し、それと組み合う孔が貫通していないもの（第48図1）や両側からあけたもの（第23図1）もある。透かしのあるものには2個、3個、4個のものがある。

【高台坏】ロクロ調整の高台坏Ⅱ類がある。坏部の形状によって以下のように分類される。

〔Ⅱ A類〕体部が直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反するもの。底部は回転糸切りで切り離され、その後に外に開く高台が付けられている。大きさは口径14.6cm、器高5.4cm、高台径7.0cm、高台高1.7cmである。坏部の内面はヘラミガキ後に黒色処理され、坏部・高台部の外面と高台部の内面はロクロナデのままである。

〔Ⅱ B類〕体部が膨らみながら立ち上がり、口縁部がそのまま外反するかわずかに外反するもの。底部の切り離しがわかるものはいずれも回転糸切りで（第43図49・50、第56図4）、その後に外に開く高台が付けられている。底部の切り離しが不明なものの中に、付高台された後で底部が菊花状にオサエられるもの（第45図4）もある。大きさは口径14~16cm、器高4~7cm、高台径7~8cm、高台高2cm前後である。坏部の高さは4cm前後のものが多いが、中には5cm程とやや深いもの（第56図4）もある。坏部の内面はヘラミガキ後に黒色処理されるものが基本であるが、ヘラミガキ後に黒色処理されないもの（第43図49）もある。坏部・高台部の外面と高台部の内面はロクロナデのままである。

〔Ⅱ C類〕体部が強く膨らみながら立ち上がり、口縁部が直立するもの。高台を欠損し、全体の大きさは不明だが、底部の切り離しは回転糸切りで、その後に高台が付けられている。口径10.8cm、坏部高4.6cmである。坏部の内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。坏部の外面はロクロナデ後にヘラミガキされ、一部にロクロナデ痕を残す。

この他、全体形状が不明の破片で、底部が回転糸切りされた後、内傾する低い高台が付けられ、内面がヘラミガキされるが黒色処理されないもの（第118図5）、ロクロナデ後に両面がヘラミガキされた後、両面とも黒色処理されるもの（第40図2、第119図18）がある。

【耳皿】ロクロ調整の耳皿Ⅱ類がある。高台の有無によって以下のように分類される。

(Ⅱ A類) 高台の付くもの。皿部を大きく欠くものが多く、全体の大きさは不明確だが、高台径が3～4cmと小型なもの(第19図20・21、第23図1)と6.2cmと大型のもの(第92図7)がある。底部の切り離しは不明で、底部に外に開くか直立する高台が付けられている。皿部はロクロナデ後に両面ともヘラミガキされている。高台部は内面がロクロナデのままである。高台部の外面がロクロナデのままのもの(第92図7、第119図20)とヘラミガキされるもの(第229図21、第123図1)がある。皿部・高台部の両面とも黒色処理されている。

(Ⅱ B類) 高台の付かないもの。底径4.2cmで、口縁を欠き、大きさが不明確だが、口径約8cm、器高約2cmと推定される。平底で、高台が付けられていない。底部が回転糸切りで切り離されたままで、内面のみロクロナデを残して粗くヘラミガキされ、その後に両面とも黒色処理されている。

【蓋】ロクロ調整の蓋Ⅱ類がある。天井部が膨らみ、体部が内彎しながら口縁部にいたる。口縁部をわずかに欠くが、折り返されると推定される。つまみはリング状で、中央がやや突出する。両面ともロクロナデ後に黒色処理されている。

【壺】非ロクロ調整の壺Ⅰ類とロクロ調整の壺Ⅱ類がある。

《非ロクロ調整の壺Ⅰ類》

胴上部から口頸部を欠損し、全体の形状は不明である。底部は平底で木葉痕があり、底径6.6cmである。胴部中央が強く膨らむ。外面は手持ちヘラケズリされ、内面はヘラナデされている。

《ロクロ調整の壺Ⅱ類》

平底で小型の無頸壺で、口径2.6cm、底径4.4cm、器高6.5cm、胴部最大径6.9cmある。胴部中央が強く膨らんでここに最大径があり、口縁部が強く内傾する。外面はロクロナデ後にヘラミガキされ、内面はロクロナデのままである。底部は摩滅し、調整不明である。

【鉢】非ロクロ調整の鉢Ⅰ類とロクロ調整のⅡ類とがある。

《非ロクロ調整の鉢Ⅰ類》

体中央部の膨らみと大きさによって以下のように分類される。

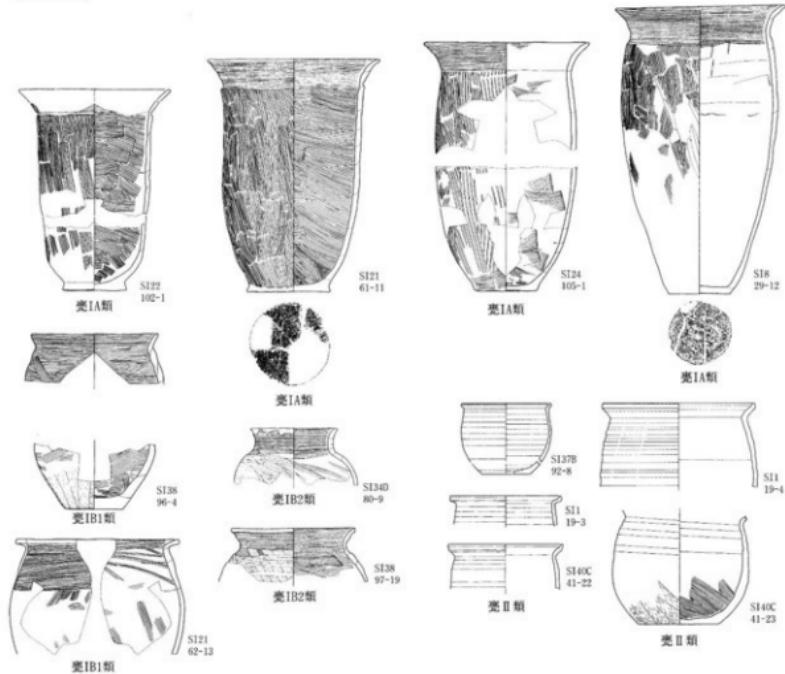
(Ⅰ A類) 体中央部が強く膨らみ、体中央部径が口縁部径とほぼ等しいもの。口縁部は短く外反し、口縁端部はすぼまる。大きさは口径16.4cm、底径8.4cm、器高14.8cm、器高／口径比0.90である。外面は、口縁部がヨコナデ、体部が縱方向のハケメ、体下部が指オサエで調整され、底部には木葉痕が残る。内面はナデで調整されている。

(Ⅰ B類) 体中央部が強く膨らまないものの大きさによって細分される。

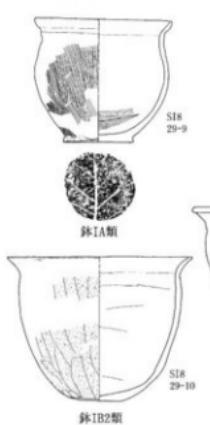
Ⅰ B 1類:口径12cm前後、器高10cm前後、底径6cm前後の小型品で、器高／口径比0.91である。口縁部が長く外反するか、わずかに外反し、口縁端部がすぼまる。外面は、口縁部がヨコナデまたは軽いナデ、体上部がナデ、体下部がオサエ、内面がナデで調整されている。

Ⅰ B 2類:口径17～25cm、器高10cm以上の大型品で、器高／口径比0.78である。口縁部が長く外反

[土器器窓]



[土器器鉢]



[土器器額]



[製塙土器]



第131図 土器器の分類(2)

するか短く外反し、口縁端部はすぼまるか、突帯状となる。外面は口縁部がヨコナデ、体部が手持ちヘラケズリまたはナデされ、内面はナデまたはヘラミガキされている。

《ロクロ調整の鉢II類》

口径17~19cmで、口縁部に最大径がある。体下部から底部を欠き、全体の形状が不明確だが、器高20cm以下とみられ、器高／口径比が0.5以上、1.0未満と考えられるので、鉢に分類した。口縁部は体上部と「く」字状となるように外反する。口縁端部は突帯状で、稜をなす。ロクロナデ後に外面を手持ちヘラケズリし、内面をナデで再調整している。

【甕】非ロクロ調整の甕I類とロクロ調整の甕II類とがある。

《非ロクロ調整の甕I類》

胴部の形状と最大径の位置によって以下のように分類される。

(IA類) 長胴甕で、口縁部に最大径があり、口縁部が長く外反するもの。大きさは口径18~24cm、器高24~35cm、底径6~11cm、器高／口径比1.33~1.68である。外面は口縁部がヨコナデ、胴部が縦方向にハケメで調整されている。底部は木葉痕のもの(第29図12、第61図11、第102図1)が多く、他にナデのもの(第105図1)がある。内面は口縁部がヨコナデ、胴部から底部がハケメ、またはヘラナデ・ナデで調整されている。胴下部にくびれのあるもの(第61図11、第102図1)とくびれのないもの(第29図12、第105図1)とがある。

(IB類) 球胴甕で、胴部ほぼ中央に最大径があり、口縁部が外反するもの。胴部と口縁部の形状によって以下のように細分される。

IB1類：胴部が膨らむ球胴形で、口縁部が短く外反するもの。胴中央部や胴下部から底部を欠き、全体の大きさは不明だが、口径15~24cmである。口縁端部がすぼまるもの(第96図4)と突帯状となるもの(第62図13)とがある。前者は外面の口縁部がヨコナデ、胴部がヨコナデ、ナデ、胴下部が縦方向の手持ちヘラケズリ、内面の口縁部がヨコナデ、胴部から底部がヨコナデ、ナデで調整されている。後者は外面の口縁部がヨコナデ、胴部がナデ、内面の口縁部がヨコナデ、胴部がナデで調整されている。

IB2類：胴部が特に強く膨らむ球胴形で、口縁部が長く外彫気味に外反するもの。胴下部から底部を欠き、全体の大きさは不明だが、口径10~15cmである。口縁端部がすぼまるもの(第80図9)と突帯状となるもの(第97図19)とがある。前者は外面の口縁部がヨコナデ、胴部がヨコナデ後にヘラミガキ、内面の口縁部がヨコナデ、胴部がナデで調整されている。後者は外面の口縁部がヨコナデ、胴部が縦方向の手持ちヘラケズリ後に粗いヘラミガキ、内面の口縁部がヨコナデ、胴部がヘラナデ、ナデで調整されている。

《ロクロ調整の甕II類》

胴上部から口頸部がく字状に外反し、口縁部は短く直立し、端部は面取りされている。口径は10~19cmである。胴下部から底部を欠くものが多い。底部の調整のわかるものはいずれも回転糸切りされたままである。外面の胴下部は手持ちヘラケズリされるもの(第41図23)とされないもの(第92図

8) とがある。

【瓶】ロクロ調整の瓶II類がある。底部から胴下部破片で、全体の形状など詳細は不明である。底径は17.4cmと大きい。ロクロナデ後に両面をヘラミガキしている。

(2) 須恵器 (第132・133図)

須恵器には壺・高台壺・盤・蓋・鉢・甕・壺がある。他に、特殊器形として須恵器質の円面鏡と三重小塔がある。以下、器種ごとに分類と細分を行う。

【壺】主に底部と体部の形状によって以下のように分類される。

〔A類〕体部下端が屈曲してから体部と口縁部が直線的に外傾するもの。底部切り離しの後の外面の再調整によって、以下のように細分される。

A 1 類：再調整されずに、底部がヘラ切りされたままのもの。大きさは口径13~16cm、底径7~10cm、器高3~5cm、器高／口径比0.22~0.34、底径／口径比0.56~0.57である。

A 2 類：底部のみ回転ヘラケズリされているもの。大きさは口径14~16cm、底径7~10cm、器高3~4cm、器高／口径比0.24~0.26、底径／口径比0.52~0.65である。底部の切り離しは不明である。

A 3 類：体部下端から底部が回転ヘラケズリされているもの。大きさは口径13~17cm、底径7~11cm、器高3~5cm、器高／口径比0.22~0.33、底径／口径比0.49~0.65である。底部の切り離しのわかるものにはヘラ切りのもの（第85図42・43）が多いが、回転糸切りのもの（第5図1、第62図25）、静止糸切りのもの（第43図53、第62図18）が少数ある。

A 4 類：底部のみ手持ちヘラケズリされているもの。大きさは口径14.5cm、底径9.4cm、器高3.9cm、器高／口径比0.27、底径／口径比0.65である。底部の切り離しは不明である。

A 5 類：体部下端から底部が手持ちヘラケズリされているもの。大きさは口径13.6cm、底径10~11cmである。底部切り離しのわかるものにはヘラ切りのもの（第8図3、第62図16）がある。

〔B類〕体部下端から口縁部が直線的に外傾するもの。底部切り離し後の再調整によって、以下のように細分される。

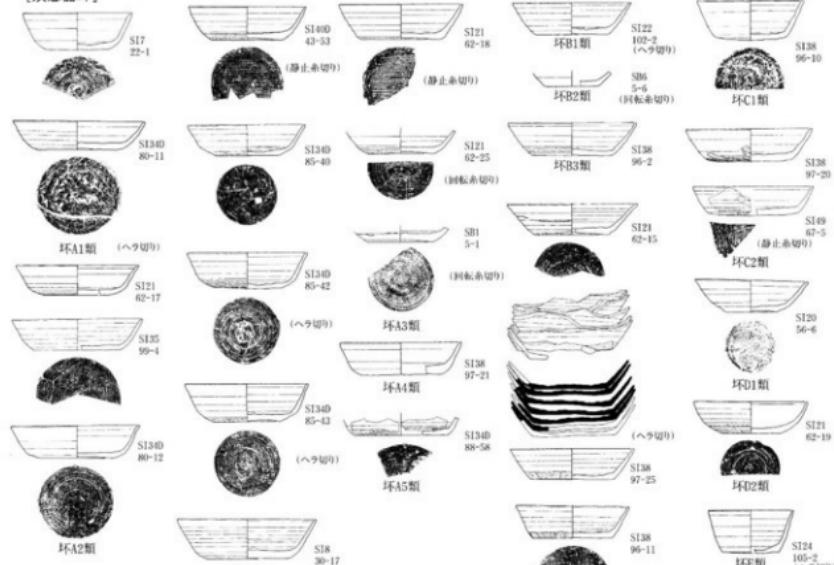
B 1 類：再調整されずに、底部がヘラ切りされたままのもの。大きさは口径14.2cm、底径8.6cm、器高3.8cm、器高／口径比0.27、底径／口径比0.61である。

B 2 類：再調整されずに、底部が回転糸切りされたままのもの。大きさは底径6.4cmである。

B 3 類：体部下端から底部、または体部下端が回転ヘラケズリされているもの。大きさは口径12~16cm、底径8~10cm、器高4~5cm、器高／口径比0.26~0.38、底径／口径比0.62~0.66である。底部の切り離しのわかるものにはヘラ切りのもの（第5図4）、回転糸切りのもの（第88図59）がある。

B 4 類：体部下端から底部、または体部下端が手持ちヘラケズリされているもの。大きさは口径13~16cm、底径8~10cm、器高3~4cm、器高／口径比0.22~0.29、底径／口径比0.56~0.70

[須恵器坏]



[須恵器高台坏]



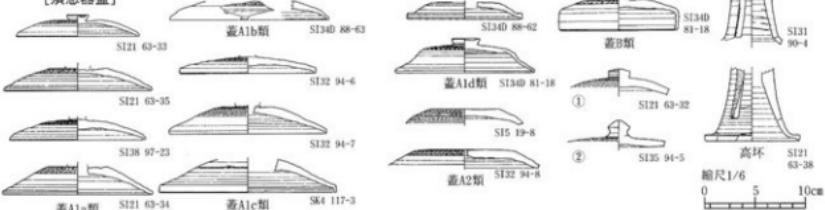
[須恵器高坏]



[須恵器盤]



[須恵器蓋]



縮尺1/6
0 5 10cm

第132図 須恵器の分類(1)

である。底部の切り離しがわかるものにはヘラ切りのものがある（第23図8、第85図37、第96図13、第97図24・25、第107図1）。

〔C類〕体部下端と底部外周が丸みをもち、体下部から口縁部が直線的に外傾するもの。底部切り離し後の再調整によって、以下のように細分される。

C 1類：再調整されずに、底部がヘラ切りされたままのもの。大きさは口径12.8cm、底径8.0cm、器高3～4cm、器高／口径比0.38、底径／口径比0.63である。

C 2類：体下部から底部が手持ちヘラケズリされているもの。大きさは口径14～15cm、底径10～11cm、器高3～4cm、器高／口径比0.24～0.26、底径／口径比0.66～0.75である。底部切り離しのわかるものには静止糸切りのものがある（第67図5）。

〔D類〕体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部が外傾ないしわずかに外反するもの。底部切り離し後の再調整によって、以下のように細分される。

D 1類：再調整されずに、底部が回転糸切りされたままのもの。大きさは口径13～15cm、底径5～8cm、器高3～6cm、器高／口径比0.26～0.37、底径／口径比0.40～0.49である。底径／口径比が他の環各類よりも小さい。

D 2類：体部下端から底部が回転ヘラケズリされているもの。大きさは口径13.6cm、底径7.0cm、器高3.8cm、器高／口径比0.28、底径／口径比0.52である。底部切り離しは不明である。

〔E類〕体部下端から口縁部が直線的に外傾し、器高が深く口径も小さしいわゆる「コップ形」のもの。大きさは口径10.3cm、底径6.8cm、器高5.1cm、器高／口径比0.50、底径／口径比0.67である。他の環各類よりも口径が小さく、器高がやや深く、器高／口径比も大きい。底部の切り離しはヘラ切りで、再調整されていない。

【高台坏】高台の作り方、器高／口径比、坏部高／口径比によって、以下のように分類される。

〔A類〕付高台で、坏部が浅いもの。体部下端から底部が回転ヘラケズリされてから断面方形状で外に開く高台が付けられている。大きさは口径14～18cm、高台径8～12cm、器高4～7cm、坏部高3～6cm、器高／口径比0.28～0.37、坏部高／口径比0.21～0.30である。大きさに大小の区別があり、以下のように細分される。

A 1類：口径15cm前後のもの。

A 2類：口径17cm前後のもの。

〔B類〕付高台で、坏部が深いもの。外面の体部下端から底部が回転ヘラケズリされてから断面方形状で外に開く高台が付けられている。底部の切り離しがわかるものにはヘラ切りのもの（第31図21、第53図8、第85図45）がある。大きさは口径12～18cm台、高台径7～11cm、器高5～9cm、坏部高4～8cm、器高／口径比0.42～0.54、坏部高／口径比0.32～0.47である。大きさに大小の区別があり、以下のように細分される。

B 1類：口径13cm前後のもの

B 2類：口径17cm前後のもの

〔C類〕削り出し高台によるもの。外面の体部下端が回転ヘラケズリされてから、削り出しによって

低い高台が作り出されている。口縁部から体下部を欠損し、全体の大きさは不明で、高台径は8～9cmである。底部の切り離しがわかるものには回転糸切りのもの（第63図28）がある。

なお、A類またはB類の高台部破片で底部の切り離しのわかるものに、回転糸切りのもの（第32図26）、ヘラ切りのもの（第53図8）がある。

【盤】口縁部から体部を欠き、全体の形状・大きさは不明である。高台径13.4cmと大型で、底部回転ヘラケズリ後に断面箱形の高台が付けられている。

【高坏】坏部と脚部との接合方法によって以下のように分類される。

〔A類〕坏部と底部との間に円盤を入れないもの。破片で、全体の形状・大きさは不明である。坏部と脚部との接合面には接合をしやすくするために沈線が巡っている。坏部の外面の体下部は回転ヘラケズリされている。

〔B類〕坏部と底部との間に円盤を入れ、底部が2段構成となるもの。破片で、全体の形状・大きさは不明である。脚部には縦長長方形の透かしが4個あけられている。坏部と脚部との接合面には接合をしやすくするために沈線が巡っている。

この他、透かしが3個ある脚部中央破片が2点ある（第63図38、第90図4）。

【蓋】天井部から口縁部にいたる形態によって以下のように分類される。

〔A類〕天井部から口縁部が斜めに外傾するもの。つまみの有無と天井部から口縁部にかけての形状、口縁部の折り返しの有無によって、以下のように細分される。

A 1類：つまみの付くもの。

A 1 a類：体部が直線的に外傾し、口縁部に折り返しをもたず、口縁端部が丸みをもつもの。つまみの残るもの（第63図33）は、中央がやや突出するリング状のつまみで、つまみの径は2.6cm、高さは7mmである。大きさは口径14～19cm、器高2～4cm、天井高2～4cmである。外面の天井部は回転ヘラケズリで再調整されている。

A 1 b類：体部が緩やかに内彎し、口縁部に折り返しをもたず、口縁端部が丸みをもつもの。つまみの形状は不明である。大きさは、口径約19cm、天井高約2cmである。外面の天井部は回転ヘラケズリで再調整されている。

A 1 c類：体部が直線的に外傾し、口縁端部が短く折り返されるもの。大きさは口径16～22cm、天井高2～5cmである。外面の天井部は回転ヘラケズリで再調整されている。

A 1 d類：天井部と体部が「く」字状に屈曲し、体部から口縁部がやや内彎し、口縁端部が短く折り返されるもの。つまみの残るもの（第81図19）は、中央がやや突出するリング状のつまみで、つまみの径は5.0cm、高さは7mmである。大きさは口径13～17cm、器高2～4cm、天井高2～4cmである。外面の天井部は回転ヘラケズリで再調整されている。

A 2類：つまみが付かず、天井部が平らなもの（いわゆる「平頂蓋」）。口縁部を欠損し、全体の形状、大きさは不明である。外面の天井部は回転ヘラケズリで再調整されている。

〔B類〕天井部と体部がほぼ直角に屈曲するもの。つまみは高い宝珠形である。大きさは口径14.8cm、器高5.1cm、天井高3.6cm、つまみの径2.7cm、つまみの高さ1.3cmである。外面の天井部は回転ヘラケズリで再調整されている。

この他、つまみが残るもの残存が悪く、分類できなかった破片が2点ある。このうち①(第63図32)は頂部がやや盛り上がる扁平な擬宝珠形のつまみ、②(第99図5)は高い宝珠形のつまみである。A 1 a類、A 1 d類のつまみとは形態が異なり、②はB類のつまみと類似している。外面の天井部は回転ヘラケズリで再調整されている。

【鉢】底部の形状、最大径の位置によって以下のように分類される。

〔A類〕平底で、口縁部に最大径があり、体上部から口頸部が緩やかな「S」字状または「く」字状に外反するもの。底径・器高の大きさ、口頸部と体部の形状によって細分される。

A 1類：口径に比べ底径が大きく、器高がやや低く、体上部から口頸部が緩やかな「S」字状に外反するもの。大きさは口径23.4cm、器高13.7cm、底径14.5cm、器高／口径比0.59、底径／口径比0.62である。両面ともロクロナデされ、外面の体部にロクロナデ前の平行叩き目痕を残さない。

A 2類：口径に比べ底径がやや小さく、器高が高く、体上部から口頸部が緩やかな「S」字状に外反するもの。大きさは口径30～33cm、器高20cm前後、底径14cm前後、器高／口径比0.68、底径／口径比0.49である。外面の体部にロクロナデ前の平行叩き目痕を残し、両面がロクロナデされている。

A 3類：口径に比べ底径がやや小さく、器高が高く、体上部から口頸部が「く」字状に外反し、口頸部と体上部との境が内面で稜となるもの。大きさは口径29.3cm、器高20.6cm、底径13.1cm、器高／口径比0.70、底径／口径比0.45である。外面の体下部がロクロナデ後に手持ちヘラケズリされ、内面はロクロナデされている。

〔B類〕丸底で体部が強く膨らみ、体上部に最大径があり、口縁部が短く屈曲して内傾するもの。大きさは口径13.4cm、器高10.1cm、器高／口径比0.75である。外面はロクロナデ後に体下部が回転ヘラケズリ、内面がロクロナデ後にナデで再調整されている。

【壺】大小の区別があり、大きさによって以下のように分類される。

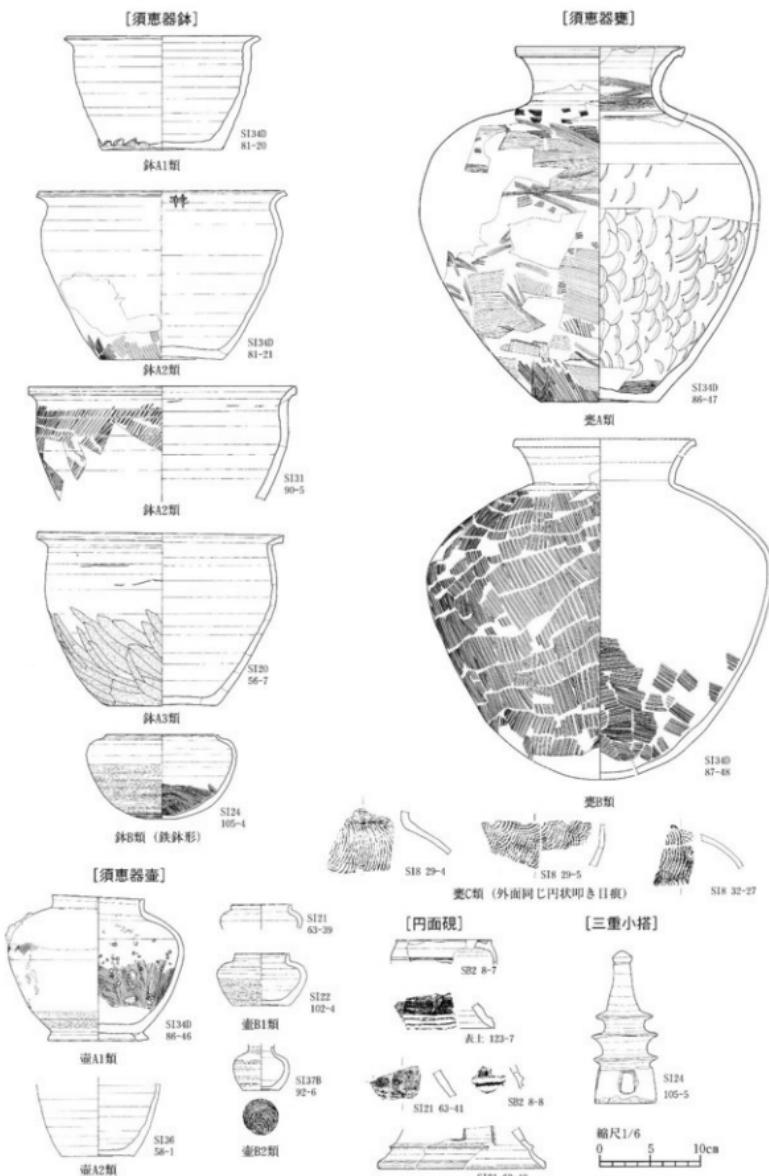
〔A類〕大型なもの。高台の有無によって細分される。

A 1類：高台が付き、口頸部が短く直立するもの(大型短頸壺)。大きさは口径11.0cm、高台径12.0cm、器高17.5cm、最大径20.9cm、器高／最大径比0.84である。両面ともロクロ調整で、外面の体下部は回転ヘラケズリ、内面の体下部はナデで再調整されている。

A 2類：高台の付かない平底のもの。底径8.6cm。口頸部から体上部を欠損し、口頸部の形状は不明である。両面ともロクロ調整で、外面の底部はナデで再調整されている。

〔B類〕小型なもの。高台は付かず、平底である。器形と口頸部の形状によって細分される。

B 1類：最大径に対し器高が低い扁平な器形で、口頸部が短く直立し、体部の中央が強く膨らむもの(小型短頸壺)。大きさは口径6.5cm、底径6.7cm、器高6.2cm、最大径10.7cm、器高／最大



第133図 須恵器の分類(2)

径比0.58である。両面ともロクロ調整で、外面の体下部は回転ヘラケズリで再調整されている。

B 2 類：口縁部を欠くが、器高と最大径がほぼ等しく、口頸部の長い長頸壺と推定されるもの。大きさは底径4.3cm、最大径6.6cmである。底部は回転糸切りで切り離され、外面の体部は回転ヘラケズリで再調整されている。

【壺】底部の形状と外面の胴部の叩き目によって、以下のように分類される。

(A類) 平底で、外面の胴部に平行叩き目痕、ナデを残すもの。口頸部が外反し、胴部が球胴でその上部に最大径が位置する。口縁端部は断面三角形状の突帯となる。外面の口頸部はロクロナデされている。大きさのわかるものは、口径20.2cm、底径14.0cm、器高42.6cm、胴部最大径40.5cm、容量29%である(第86図47)。外面は口頸部がロクロナデ、胴部が平行叩きとその後にナデ、内面は口頸部がロクロナデとナデ、胴下部がナデで調整されている。

(B類) 丸底で、外面の胴部に平行叩き目痕を残すもの。口頸部が外反し、胴部が球胴でその上部に最大径が位置する。口縁端部は断面三角形状の突帯となる。外面の口頸部はロクロナデされている。大きさのわかるものは、口径20~22cm、器高27~42cm、胴部最大径36~42cm、容量20~29%である(第82図22、第87図48)。外面は口頸部がロクロナデ、胴部が平行叩き、底部が平行叩きまたは平行叩き+手持ちヘラケズリ、内面は口頸部がロクロナデ、胴下部がナデで調整されている。

(C類) 外面の胴部に同心円状叩き目痕を残すもの。口頸部・底部形状は不明である。

(3) 須恵系土器(第134図)

須恵系土器には壺・小型壺・高台壺がある。以下、器種ごとに分類と細分を行う。

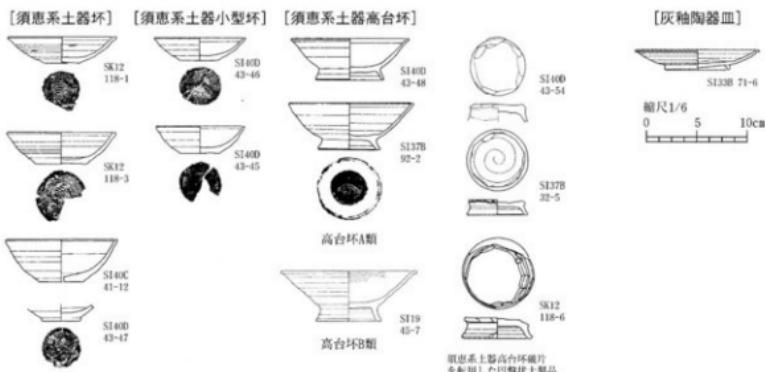
【壺】体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部は体部からそのまま直線的に外傾するか、やや外反する。底部の切り離しは回転糸切りで、その後に再調整されていない。大きさは口径13cmを中心とし、底径4~6cm、器高3~5cm、器高/口径比0.25~0.32、底径/口径比0.33~0.46である。器高は3~4cmのものが多い。中には器高5.1cmと器高のやや深いもの(第41図12)や底部円柱作りの疑似高台状となるもの(第43図47)がある。

【小型壺】体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部は体部からそのまま直線的に外傾するか、やや外反する。底部の切り離しは回転糸切りで、その後に再調整されていない。大きさは口径11cm前後、底径5cm前後、器高約3~4cm、器高/口径比0.26~0.31、底径/口径比0.43~0.47である。

【高台壺】体部の形状、高台部の高さによって以下のように分類される。

(A類) 壺部は体下部が丸みをもち、体上部から口縁部が直線的なもの。大きさは口径14~16cm、高台径7~8cm、器高5~6cmである。底部は回転糸切りで切り離され、その後に外に開く高台が付けられている。

(B類) 体下部から口縁部が直線的で、高台が高いもの(いわゆる「足高高台壺」)。大きさは口径約16cm、高台径7.8cm、器高約5cmで、須恵系土器壺よりも口径が2~3cm大きい。底部の切り離しは不明で、その後に外に開く高台が付けられている。



第134図 須恵系土器・灰釉陶器の分類

(4) 製塙土器 (第131図)

非ロクロ調整で、粘土紐積み上げ痕が明瞭に残り、器厚が6～10mmと分厚く、黄褐色～赤褐色で胎土に砂粒を多く含む。焼成はよい。破片資料のため全形は不明である。口縁部破片を3点図示した。口縁端部は、①丸みをもちらながらすぼまり、外傾するもの、②わずかに外反し、口縁端部が丸みをもつもの、③外傾し、口縁端部が面取りされているものがある。

(5) 灰釉陶器 (第134図)

皿が1点ある。体下部～底部が回転ヘラケズリされてから、定形化した三日月高台が付けられ、内面の口縁～体部に灰釉が刷毛塗りされている。猿投窯製品の黒窯90号窯式第2型式のものである。

2. 土器群の設定と年代的位置付け

(1) 基準資料による土器群の設定

主要遺構から出土した土器をみると、S I 8・20・21・33B・33C・34D・38・40C・40D・53堅穴住居跡の床面、土壤、周溝、主柱穴抜取穴、嵩上げ整地、廃絶時の人为的埋土などから比較的多くの土器が出土している。これらから出土した土器は一括性の高いものであり、それぞれ共伴関係にあるものとみることができる。

各遺構・層位ごとに類型の組み合わせをみると、表1のようになる。この表において、類型の組み合わせの相異に着目して土器群を設定すると、須恵器環A 3類を含むI群土器、②土師器環II B類・甕II類、須恵器環D 1類を含むII群土器の2群に大別される。そして、II群土器は須恵系土器を含まないII A群土器、須恵系土器を含むII B群土器に細分することができる。

遺構	層位	土器	周柱	土器				陶器				須恵器				壺				土器				須恵器				壺								
				环	甌	高台环	蓋	鉢	壺	甌	鉢	高台环	高台环	蓋	鉢	壺	甌	鉢	高台环	高台环	蓋	鉢	壺	甌	鉢	高台环	高台环	蓋	鉢	壺	甌	鉢				
S 18	床面(火災時)	I 群	15	I B1				I A	I B2	I A	A3	B1,B2	A1d																							
S 21	人為的埋土(廐地時)	I 群	42	I B2,I B1				(C)	I B2	I	A,1B1	AL1A2,AL1B2	AL1B1C	B壺	A1a	A2	B1	(C)	(C)																	
S 14D	床面(火災時)	I 群	17	I C1	I A,1B																															
S 14E	床面(火災直後の廐地)	I 群	12																																	
S 13B	床面など(櫛痕時)	I 群	13	(I B1,I C1)					I B1	I A,1	A3,B1,B2	AL1A2,AL1B2	A1d,AL1A2	B																						
S 13C	人為的埋土(廐地時)	I 群	22	I B1															I B2,I	AL1A2,B1,C2,A1B1	A1a															
S 13D	人為的埋土(廐地時)	I 群	8	I B2?														(A)	A3	A2	(A)															
S 13E	床面(火災時)	I B,II	7	II A,II B	II	II B												(B)	D1		(C)	II A3														
S 13F	床面(櫛痕時)	I 群	2	(II)														(B)	D1		(C)	A														
S 13G	理上・認溝(試掘時)	I 群	5	II B														(B)	D1	(AorB)	(C)	(C)														
S 13H	床面・上層(櫛痕時)	I 群	3	II B														(B)	D1			A														
S 13I	主柱穴抜取穴(廐地時)	I 群	1	II B																																
S 13J	床面(櫛痕時)	I 群	4	(II B)														(B)	(D1)		(C)	(C)														
S 13K	床面・認溝など(櫛痕時)	I 群	11	II B														II	(D1)		(A)	(C)														
S 13L	C形穴底部、計上(櫛痕など)遺跡	I B,II	9	II B					II	II B								(B)	(D1)		(A)	(C)														

表1 土器群を設定した遺構・層位から出土した土器の組成

()未掲載の底面破片、○あり

【I群土器】

基準資料：S I 8焼失堅穴住居跡床面、S I 21堅穴住居跡人為的埋土（S B 2建物建設時）、S I 34 D焼失堅穴住居跡床面・3層上面、S I 38堅穴住居跡床面・人為的埋土、S I 53堅穴住居跡人為的埋土

須恵器環A 3類が基準資料のすべてに含まれており、土師器環I B 1類、土師器鉢I B 2類、甌I A・I B類、須恵器環A 1・A 2・B 4類、高台環A 1・A 2・B 1・B 2類、蓋A 1 a・A 1 d類、鉢A 2類、甌B類が複数の基準資料に含まれている。出土層位からみて、この他の類型も共伴関係にある。したがって、I群土器は以下のような類型で構成されているとみることができる。

〔土師器〕環I B 1・I B 2・I C 1類、甌I A・I B類、蓋II類、鉢I A・I B 1・I B 2類、壺I類、甌I A・I B 1・I B 2類

〔須恵器〕環A 1・A 2・A 3・A 4・A 5・B 3・B 4・C 1・C 2・D 2類、高台環A 1・A 2・B 1・B 2・C類、高環B類、蓋A 1 a・A 1 d・B類、鉢A 1・A 2類、壺A 1・B 1類、甌A・B類、円面鏡

【II A群土器】

基準資料：S I 20焼失堅穴住居跡床面、S I 33B堅穴住居跡床面・人為的埋土・周溝、S I 33C堅穴住居跡床面・土壤・主柱穴抜取穴

土師器環II B類・甌II類、須恵器環D 1類が基準資料のすべてに含まれ、出土層位からみてこの他の類型も共伴関係にある。したがって、II A群土器は以下のような類型で構成されているとみることができる。

〔土師器〕環II A・II B類、甌II類、高台環II B類、甌II類

〔須恵器〕環D 1類、高台環、蓋、鉢A 3類、壺、甌A類

〔灰釉陶器〕Ⅲ

【II B群土器】

基準資料：S I 37B堅穴住居跡床面、S I 40C堅穴住居跡床面・周溝など、S I 40D堅穴住居跡C主柱穴抜取穴・嵩上げ整地など

土師器坏II B類・甕II類、須恵器坏D 1類が基準資料のすべてに含まれており、須恵系土器坏が複数の基準資料に含まれている。出土層位からみて、この他の類型も共伴関係にある。したがって、II B群土器は以下のような類型で構成されているとみることができる。

〔土師器〕 坏II B類、高台坏II A・II B類、耳皿II A・II B類、甕II類

〔須恵器〕 坏D 1類、蓋A類、壺、甕

〔須恵系土器〕 坏、小型坏、高台坏A類

〔製塙土器〕

(2) その他の主要遺構出土土器を含めた土器群の設定

前項の基準資料で設定したI群土器、II A群土器、II B群土器において含まれている各類型は、出土状況からみてそれぞれ共伴関係にあるものである。

土器群を設定した堅穴住居跡で基準とした以外の層位から出土した土器、および土器群を設定した以外の主要遺構について、掲載した土器に未掲載の底部破片を含めてその組成をみることにする(表2・3)。そして、各土器群の基準資料に含まれている類型が複数含まれている主要遺構について、その類型を含む土器群に相当するものとして抽出する。なお、堅穴住居跡の掘方・床面出土資料のうち、点数が少ないものについては、その堅穴住居跡の埋土または堆積土から土器群の比定が可能な資料が出土した場合には、その土器群に相当するものと考えた。

こうした作業の結果、I群土器、II A群土器、II B群土器は以下のように設定される。

1) I群土器の設定

I群土器の基準資料に、これに相当するとみられるS I 2・5・6・7・9・23B・24・27・31・32・34A・35・41・43・48・49堅穴住居跡、基準資料のS I 8・21・34D堅穴住居跡の他の層位、S B 1・2・6・9掘立柱建物跡掘方、S K 4土壤から出土した土器を加えて検討すると、I群土器は以下のような組み合わせになるとみられる(表2・3、註2)。

〔土師器〕 坏IA 1・IA 2・IB 1・IB 2・IC 1・IC 2類、塊IA・IB類、高坏I類、蓋II類、鉢IA・IB 1・IB 2・II類、壺I類、甕IA・IB 1・IB 2類

〔須恵器〕 坏A 1・A 2・A 3・A 4・A 5・B 1・B 3・B 4・C 1・C 2・D 2・E類、高台坏A 1・A 2・B 1・B 2・C類、高坏A・B類、盤、蓋A 1a・A 1b・A 1c・A 1d・A 2・B類、鉢A 1・A 2・B類、壺A 1・B 1類、甕A・B・C類、円面硯

2) II A群土器の設定

II A群土器の基準資料に、これに相当するとみられるS I 1・13・17堅穴住居跡、基準資料のS I 20・33B・33C堅穴住居跡の他の層位、S E 3井戸跡から出土した土器を加えて検討すると、II A群土器は以下のような組み合わせになるとみられる(表2・3、註3)。

〔土師器〕 坏II A・II B類、塊II類、高台坏II A・II B類、甕II類

〔須恵器〕 坏D 1類、高台坏、蓋、鉢A 3類、壺、甕A類

〔灰釉陶器〕 皿

遺構	層位	上器群	同品目数	土器						器						壺						須恵系土器	製塩土器	灰燼
				環	陶	高环	耳皿	耳皿	蓋	鉢	壺	環	高台环	高台	耳皿	蓋	鉢	壺	環	小型環	高台			
柱	S B1	壺方(建設時)	1 個?	I	(I A or II B)							(I)		A3										
		柱底跡(床面以下)			(1)							(I)										(○)		
	S B2	壺方(建設時)	1 個?	I	B1B							(I)	A5.B3	B	(A) B	C	(○)							
		柱底跡(床面以下)			(1)							(I)	(C)									(○)		
	S B3	壺方(建設時)	1 個?	I	(I A or II B)							(I)												
		柱底跡(床面以下)			I (I C)							(I)	B2									(○)		
	S B4	壺方(建設時)	1 個?	I	(1)							(I)	(A) B											
		柱底跡(床面以下)			(1)							(I)	(C)											
柱	S B5	壺方(建設時)	1 個?	I								(I)												
		柱底跡(床面以下)																						
	S B6	壺方(建設時)	1 個?	I	3	I C1	I					(I)	(A) B	A or B2										
		柱底跡(床面以下)			I	(1)						(I)	B4											
	S B7	壺方(建設時)	1 個?	I		(I A or II B)							I A										(○)	
		柱底跡(床面以下)																						
	S B8	壺方(建設時)	1 個?	I								(I)												
		柱底跡(床面以下)																						
井	S B9	壺方(建設時)	1 個?	I	2	B1B						(I)	1 A (B4)?											
		柱底跡(床面以下)			(1)							(I)	(A) B4	(A)										
	S B10	壺方(建設時)	1 個?	I								(I)	(C)											
		柱底跡(床面以下)										(I)	(C)											
	S B11	壺方(建設時)	1 個?	I	1	B1B						(I)												
		柱底跡(床面以下)										(I)												
	S B12	壺方(建設時)	1 個?	I								(I)												
		柱底跡(床面以下)										(I)												
井	S B13	壺方(建設時)	1 個?	I								(I)												
		柱底跡(床面以下)																						
	SE 1	自然堆積土(床面以下)	1 個?	I	1							(I)	D2		(A)	(C)	(C)							
	SE 2	自然堆積土(床面以下)	1 個?	I	5	BB	BA					(I, II)	D4				(C)	(C)						
	SE 3	自然堆積土(床面以下)	8 A 個	5	BB							(I)	(C)			(A)	(C)							
	SK 1	人為的堆土(床面以下)	1									(I)		善書「貯										
	SK 2	人為的堆土(床面以下)	1									(I)	(A) B or B	A1e										
	SK 3	人為的堆土(床面以下)	1									(I)	(C)	B2										
域	SK 4	人為的堆土(床面以下)	1 個?	I	1	(I C)						(I)	(C)											
	SK 5	人為的堆土(床面以下)	1 個?	I	1							(I)	(C)	B2										
	SK 6	人為的堆土(床面以下)	1 個?	I	1	(I A or I B)						(I)	(C)											
	SK 7	人為的堆土(床面以下)	1 個?	I	1	I A or I B	I					(I)	(A) B	(A)										
	SK 8	人為的堆土(床面以下)	1 個?	I	1	(1)						(I)												
	SK 9	自然堆積土(床面以下)	8 B 個	25	BB, BB	(I)	I A, BB, BA					(II)	DI				(C)	○	○	○	○			
	SK 10	遺物包含層	8 A 個	15	BB (I)		BA					(II)	DI											

表3 堀立柱建物跡、井戸跡、土壤など出土土器の組成

□土器群設定の基準となる遺構 ()未掲載の底部破片 ○あり

3) II B群土器の設定

II B群土器の基準資料に、これに相当するとみられる S 40 B 窪穴住居跡、基準資料の S I 37 B 窪穴住居跡の他の層位、S K 12 土壤から出土した土器を加えて検討すると、II B群土器は以下のよう組み合わせになるとみられる(表2・3、註4)。

[土師器] 壺 II B類、高台环 II A・II B類、耳皿 II A・II B類、甕 II類、瓶 II類

[須恵器] 壺 D 1類、蓋 A類、壺 A類、甕 A類

[須恵系土器] 壺、小型壺、高台环 A・B類

[製塩土器]

(3) I群土器の特徴

前項で設定した I群土器の基準資料とその相当資料のうち、窪穴住居跡から出土したものについて、掲載した土器と未掲載の底部・高台部破片を各遺構・層位別に集計した(表4-1・2)。また、I群土器を第136~139図に遺構別に集成した。

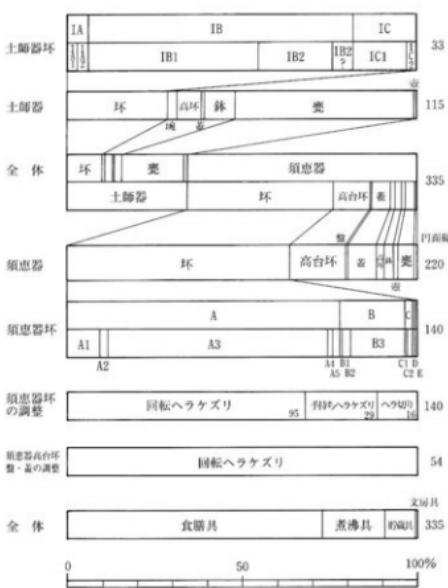
これらの窪穴住居跡から出土した土器は、出土層位の特徴からみて以下のような分類が可能である。

A群 燃失せずに人为的に埋め戻された窪穴住居跡の床面・埋土、燃失した窪穴住居跡の掘方・

貼床などから出土した土器: S I 8・21・34 A・34D 窪穴住居跡掘方・貼床、S I 2・21・

23 B・32・35・38・48 窪穴住居跡床面、S I 7 窪穴住居跡貯藏穴、S I 6・21・22・23 B・

種類	器種	点数	上器組数に 対する割合		土師器・須 恵器別の割合		
			IA	IB			
上 部 器	壺	38	0.3	0.9	28.7		
	IA 1	1	0.3	0.9			
	IA 2	1	0.3	0.9			
	IB 1	16	4.8	13.9			
	IB 2	7	2.1	9.9			
	IB 2?	2	0.6	1.7			
	JC 1	5	1.5	4.3			
	JC 2	1	0.3	0.9			
	鉢	IA	2	0.6	1.7	2.6	
	IA	1	0.3	0.9	0.9	0.9	
	高壺	I	8	2.4	2.4	7.0	7.0
	蓋	II	1	0.3	0.9	0.9	0.9
中 部 器	鉢	10	0.3	0.9	8.7		
	IA 1	1	0.3	0.9			
	IB 1	4	1.2	3.0			
	IB 2	3	0.9	2.6			
	II	2	0.6	1.7			
	壺	IA	18	5.4	15.7	51.3	
	IA 1	2	0.6	1.7	17.6	39	
	IB 2	2	0.6	1.7	1.7	10	
	II	37	11.0	32.2	32.2	37	
	蓋	I	1	0.3	0.9	0.9	0.9
計		115	34.3	100.0			



第135図 I群土器の組成比

円面鏡がA群に含まれている、②土師器では壺I B類、鉢I A類、須恵器では高台壺B 2類、蓋B類、鉢A 1類、壺B 1類、壺A・B類がB群に含まれているなど若干の相違も認められた。しかし、これらの出土点数が少ないので、こうした相違が時期差につながるかどうか判断できない。

そこで、これらA群・B群・C群をさらに集計し、I群土器全体の特徴の傾向性をつかむことについて（表5、第135図）。

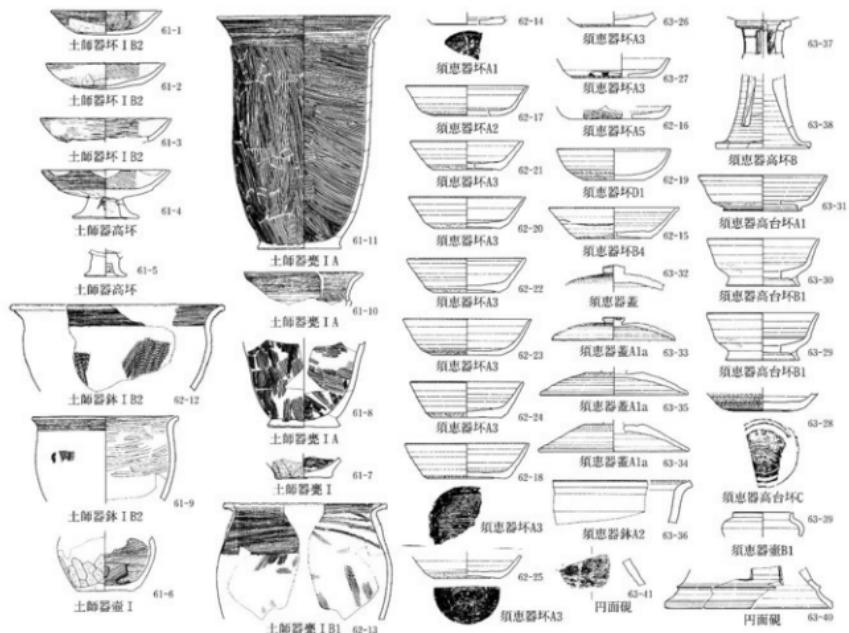
I群土器は土師器・須恵器で構成され、須恵器が約2/3、土師器が約1/3を占める。

このうち土師器は非クロロ調整のI類が主体を占め、クロロ調整のII類がごく少数ある。

土師器I類には壺・壺・高壺・鉢・蓋・壺、土師器II類には蓋・鉢がある。

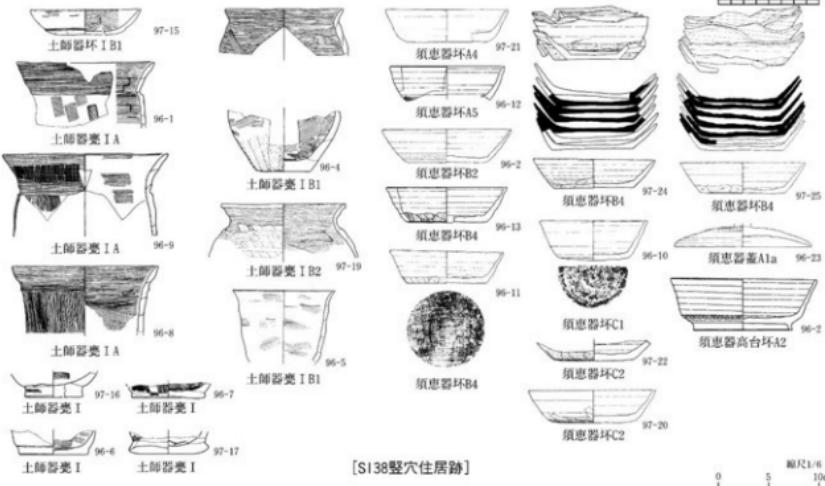
土師器のうち壺が約半数、壺が1/3近くを占める。次いで、鉢、高壺がやや多く、壺、蓋、壺が少ない。壺の中で

表5 I群土器の組成比



[SI21堅穴住居跡]

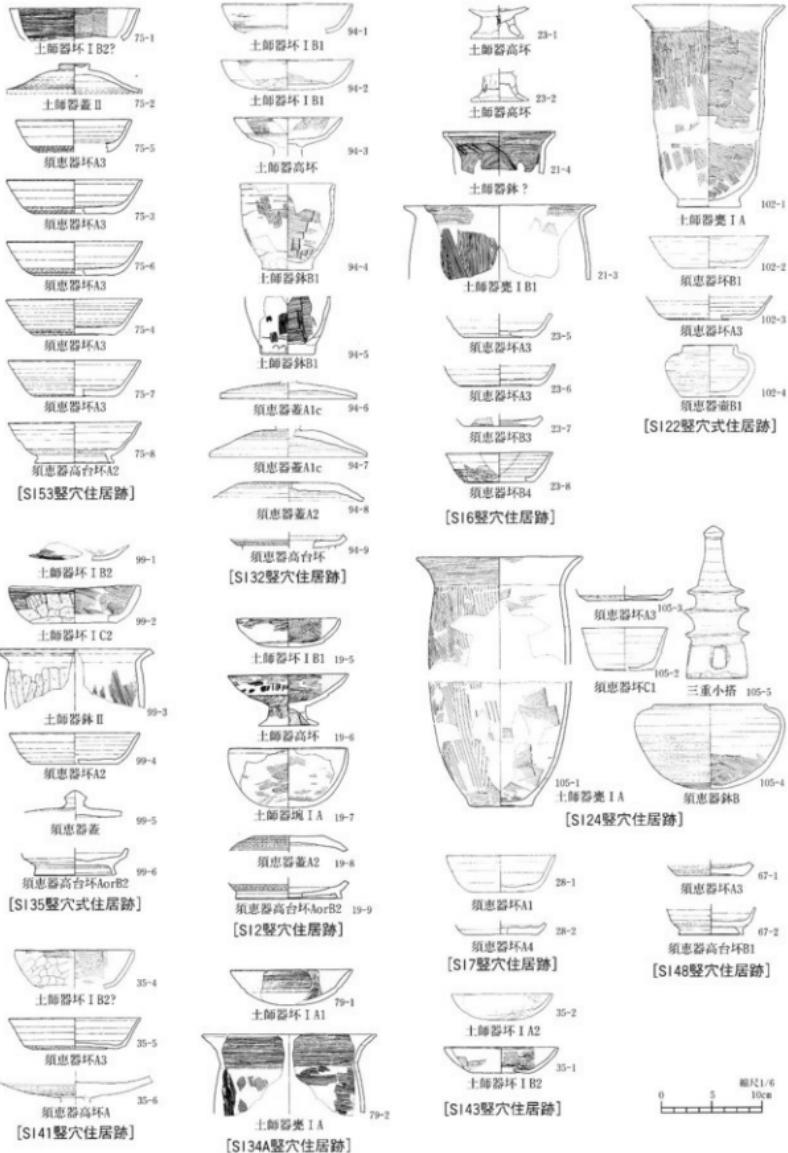
縮尺1/6
0 5 10cm



[SI38堅穴住居跡]

縮尺1/6
0 5 10cm

第136図 I群土器(1) —桃生城造営～存続期の基準資料



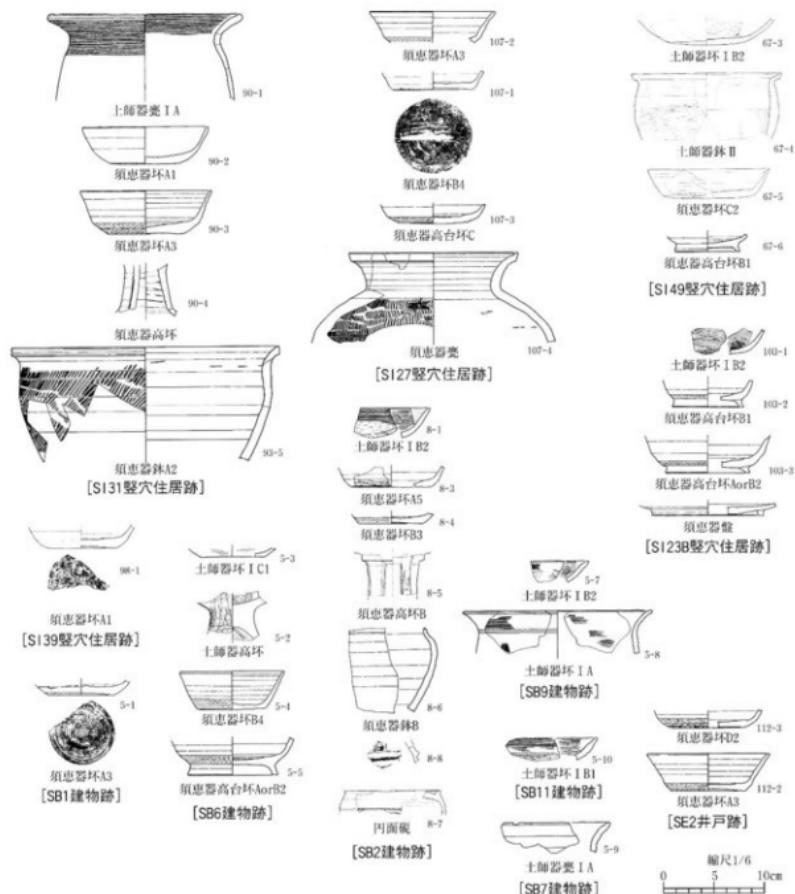
第137図 I群土器（2）一桃生城造営～存続期と推定される資料

は丸底気味の I B 類が主体を占め、丸底の I A 類、平底の I C 類は少ない。甌では長胴の I A 類が主体を占め、球胴の I B 類が少ない。

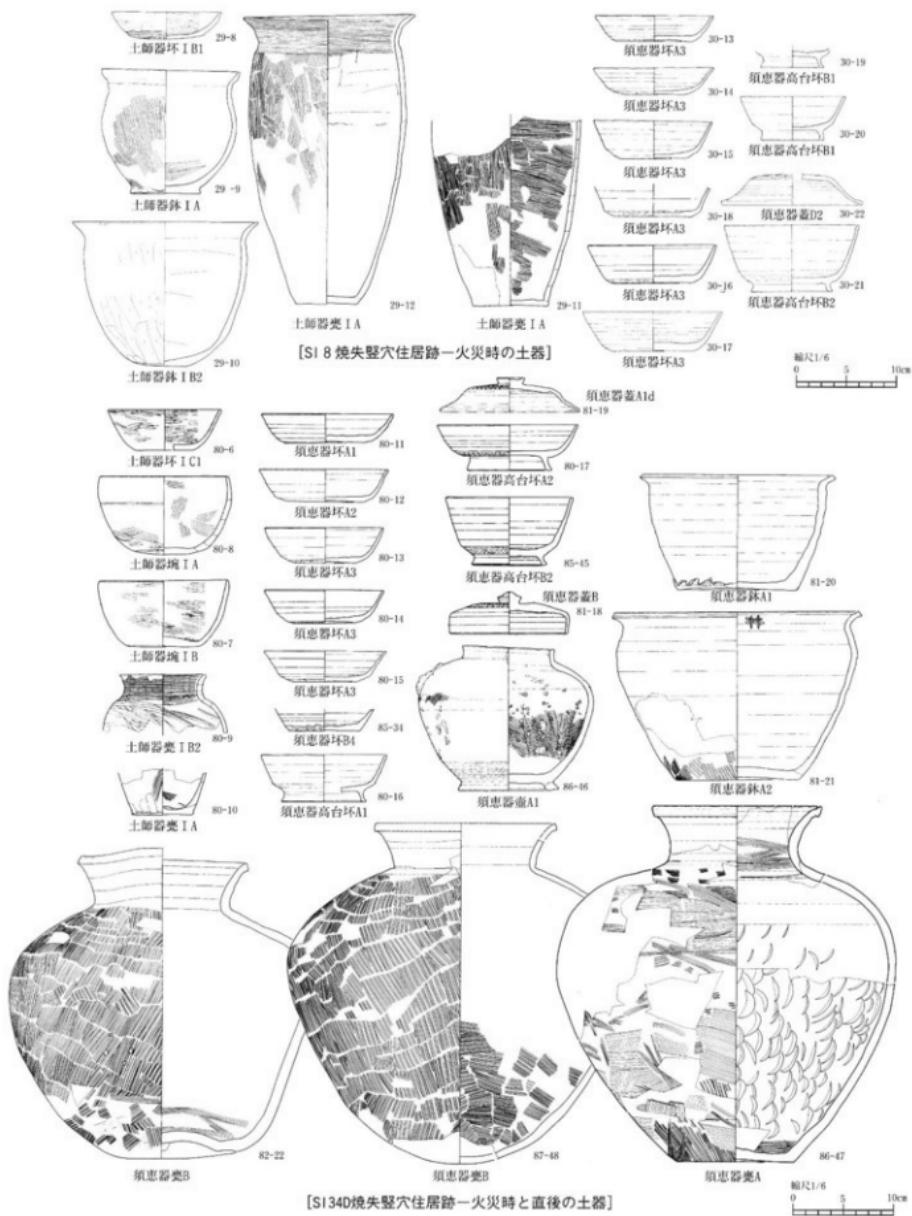
須恵器には壺・高台壺・盤・蓋・高壺・鉢・壺・甌がある。このうち壺が約2/3と主体を占め、次いで高台壺、蓋がとやや多く、盤・高壺・鉢・壺・甌・円面鏡は少ない。

須恵器壺の中で点数が多いのは壺A 3種で、体下端が屈曲してから体部と口縁部が直線的に外傾し、体部下端から底部が回転ヘラケズリで再調整されている。次に多いのが壺B 4種で、体部下端から口縁部が直線的に外傾し、体部下端から底部が手持ちヘラケズリで再調整されている。

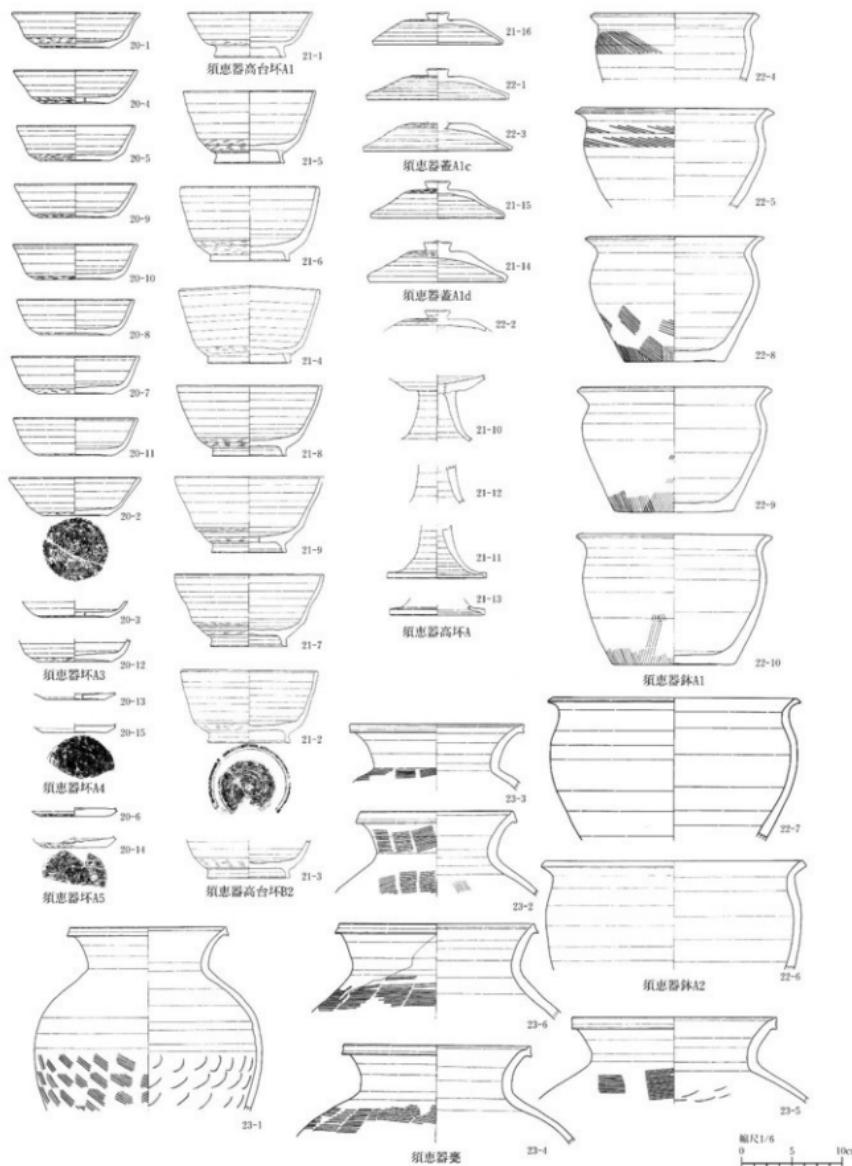
須恵器の再調整に回転ヘラケズリを用いるものは、この他には壺A 2・B 3・D 2種、高台壺A 1・



第138図 I群土器（3）—桃生城造営～存続期と推定される資料



第139図 I群土器(4)－桃生城廃絶期の基準資料



奈良城跡多賀城跡調査研究所、1995、「桃生城跡Ⅲ」をもとに作成

第140図 宝亀5年(774)7月に焼失した桃生城跡政庁S-B17西脇殿跡出土の須恵器

A 2・B 1・B 2・C 類、盤、蓋 A 1・B 類、高坏 A 類、鉢 B 類、壺 A 1・B 1 類がある。須恵器の大多数が回転ヘラケズリで再調整されている、というのが最大の特徴となっている（第135図）。

また、須恵器坏・高台坏で底部の切り離しがわかるものはヘラ切りのもの（第32図1、第80図1、第85図42・43、第97図24・25など）が多く、静止糸切りのもの（第43図53、第62図18）、回転糸切りのもの（第5図1、第62図25、第63図28）が少數であるというのも特徴の一つである。

土師器・須恵器を食膳具（土師器坏・塊・高坏、須恵器坏・高台坏・盤・蓋・高坏）、煮沸具（土師器甕）、貯蔵具（土師器鉢、須恵器鉢・壺・甕）、文房具（硯）に分けると、食膳具が土師器・須恵器とも主体を占め、煮沸具、貯蔵具が土師器・須恵器とも少なく、文房具はきわめて少ない（表6、第135図）。

このように、I群土器は土師器が非クロ調整のものを主体とし、土師器坏では丸底気味のIB類、須恵器坏では体下端が屈曲してから体部と口縁部が直線的に外傾し、体部下端から底部が回転ヘラケズリで再調整されている坏A3類が主体を占め、須恵器の大多数が回転ヘラケズリで再調整されていることなどで特徴付けられる。

（4） I群土器の年代

I群土器と類似する資料に、本遺跡のすぐ西に隣接する桃生城跡の政庁S B17西脇殿跡から出土した土器群がある（阿部・佐藤編、1995；第140図）。この土器群は、土師器は出土していないものの須恵器が比較的多く出土しており、宝亀5年（774）7月の海道蝦夷の攻撃によって焼失した頃の一括土器群として位置付けられている。下限年代は宝亀5年（774）7月、上限年代は桃生城が造営され始めた天平宝字2年（758）頃であり、宮城県内における8世紀第3四半期頃の基準土器群である。

前述の分類にあてはめると、桃生城跡S B17西脇殿出土土器群の須恵器には、坏A3・A4・A5類、高台坏A1・B2類、高坏A類、蓋A1c・A1d類、鉢A1・A2類、甕A類または甕B類があり、本遺跡のI群土器と同様に坏・高台坏・高坏・蓋の調整に回転ヘラケズリが主に用いられている（註5）。量的に最も多い須恵器坏では、I群土器と同様に回転ヘラケズリされたA3類が主体を占め、本遺跡出土のA3類と器形・大きさも近似する（註6）。高台坏ではB2類、鉢ではA1類が多く、特徴的である。高台坏・蓋・鉢も本遺跡のものと器形・法量が近似し、調整技法も同様である。

桃生城跡S B17西脇殿出土土器群は、本遺跡のI群土器の須恵器と種類・大きさ・調整技法などがよく似ているとみなせる。

I群土器の基準資料の一つであるSI34D竪穴住居跡は、拡張された4番目のものであり、それが火災にあって再建されていない。出土した須恵器の特徴は桃生城跡政庁S B17西脇殿跡出土土器群（阿部・佐藤編、1995；第140図）のものと酷似する。当初のSI34A竪穴住居跡もI群土器に相当し、3回建て直されたSI34竪穴住居跡（SI34A・B・C・D）が存続した間にI群土器が使用され続けられている。

SI34A・B・C・D竪穴住居跡が存続した時間幅がどの程度であったか知ることはできないが、本遺跡が桃生城跡と密接な関連をもっていることから、SI34A竪穴住居跡は桃生城が造営され始め

た天平宝字2(758)年頃よりは古くはないとみられる。したがって、S I 34A・B・C・D竪穴住居跡は、桃生城存続期〔天平宝字2(758)年頃～宝亀5(774)年7月〕の時間幅の範囲内に収まとみられる。

以上のことから、I群土器は桃生城存続期〔天平宝字2年(758)頃～宝亀5年(774)7月〕のもので、8世紀第3四半期頃に位置付けられる(註7)。

(5) II A群土器の特徴

II A群土器の基準資料とその相当資料について、掲載した土器と未掲載の底部・高台部破片を各遺構・層位別に集計した(表6)。また、II A群土器を第142図に遺構別に集成した。

II A群土器を出土した遺構のうち、S I 20竪穴住居跡は火災で焼失した竪穴住居跡であり、火災時の床面から出土した土器は良好な一括資料である。土師器は壺II A・II B類、甕II類、高台壺II B類、須恵器は壺D 1類、鉢A 3類からなる。S I 20竪穴住居跡の堆積土から出土した土器は火災後のものだが、本来はこの竪穴住居跡に帰属した可能性が高く、よく似た組成を示している。土師器は壺II A・II B類、甕II類、高台壺II B類、甕II類、須恵器は壺D 1類からなる。

II A群土器を出土した遺構を通してみると、II A群土器は土師器、須恵器、灰釉陶器で構成されている。このうち土師器が1/2強と主体を占め、次いで須恵器が多く、灰釉陶器はごく少数である(表7、第143図)。I群土器の約2/3が須恵器で土師器が約1/3であること(表5、第135図)と比べると、須恵器と土師器の比率が逆転し、わずかであるが灰釉陶器が含まれている。

土師器はすべてロクロ調整のII類で、壺II A・II B類、甕II類、高台壺II B類、甕II類がある。このうち壺が過半数以上を占め、次いで高台壺が多く、甕・甕は少ない(表7、第142図)。

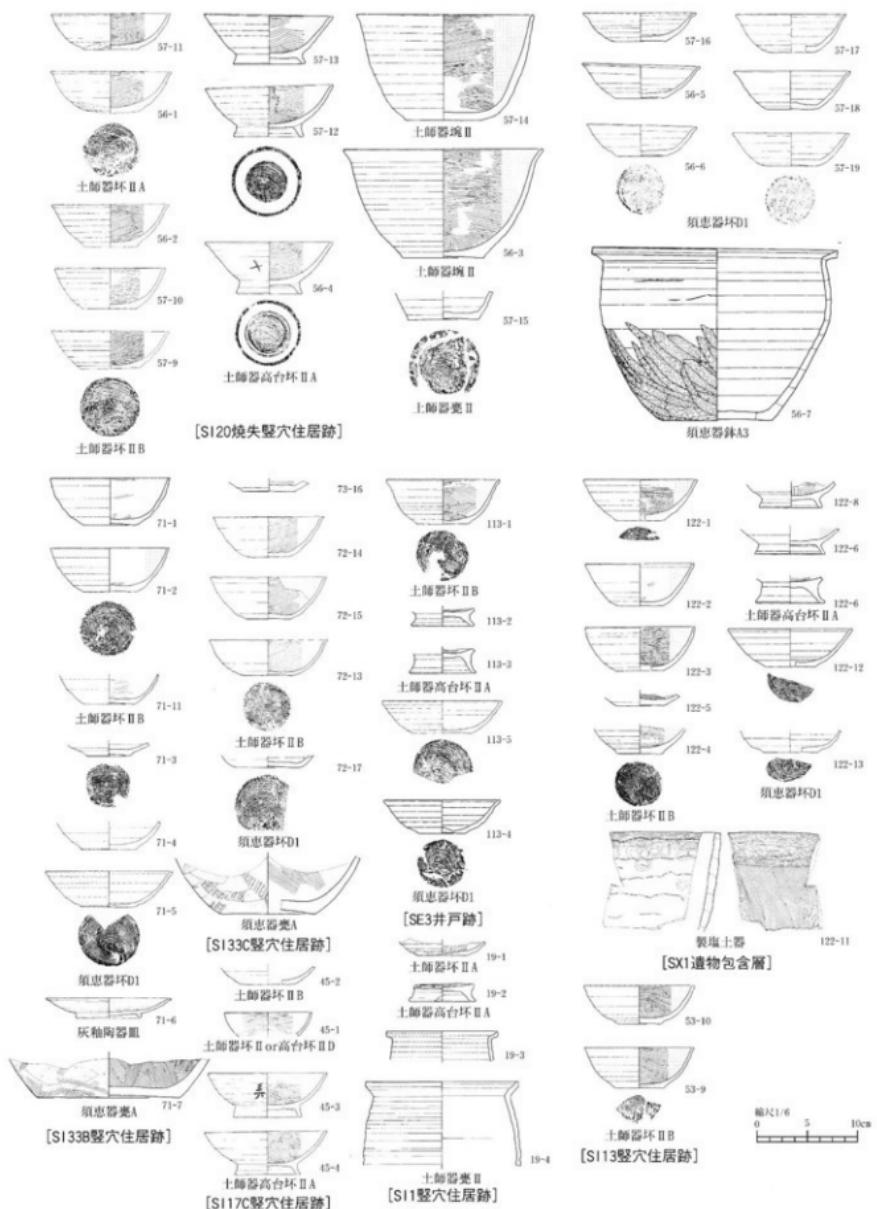
土師器壺は壺II B類が主体を占める。底部の切り離しは回転糸切りで、その後に再調整されていない。22点の平均値でみると、口径13.7cm、底径6.1cm、器高4.9cm、底径／口径比0.436で、口径に比べ底径が小さい。土師器壺には他にII A類がわずかに含まれる。これは底部が回転糸切りで切り離された後、手持ちヘラケズリで再調整されている。高台壺II B類も特徴的な器形で、壺II B類を用いて「ハ」字状に外に開く高台を付けている。

須恵器には壺D 1類、高台壺A類またはB類、鉢A 3類、甕A類がある。これらのうち量的に最も多いのは壺D 1類である(表11、第142図)。底部の切り離しは回転糸切りで、その後に再調整されていない。10点の平均値でみると、口径14.0cm、底径6.1cm、器高4.2cm、底径／口径比0.430で、口径に比べ底径が小さい。法量・器形は土師器壺II B類と似ている。

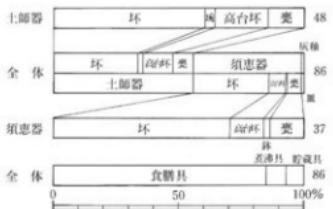
灰釉陶器には猿投窯窯製品の黒窓90号窯式第2型式の皿が1点ある。

土師器・須恵器・灰釉陶器を食膳具(土師器壺・甕・高台壺・須恵器壺・高台壺・灰釉陶器皿)、煮沸具(土師器甕)、貯蔵具(須恵器鉢・甕)に分けると、食膳具が主体を占め、煮沸具、貯蔵具がきわめて少ない(表7、第142図)。

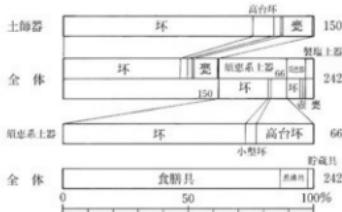
このように、II A群土器は土師器が過半数を占め、いずれもロクロ調整であること、土師器壺では回転糸切り無調整の壺II B類が主体となるものの、手持ちヘラケズリで再調整された壺II A類もわず



第141図 II A群土器—9世紀後葉頃の土器



第142図 II A群土器の組成比



第143図 II B群土器の組成比

(6) II A群土器の年代

II A群土器に含まれる須恵器環はD 1類で、体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部が外傾ないしわずかに外反し、底部は回転糸切りで切り離されたままのものである。これと特徴が類似し、法量も近似する須恵器環は、仙台市五本松窯跡第6・10・15号窯（小川編、1987）で焼成されている。この窯は、多賀城跡政庁第IV期〔貞観11年（869）の陸奥国大地震の復興期〕の瓦を焼成した瓦陶兼業窯で、貞観11年（869）以降の9世紀後半頃に位置付けられている。体部が直線的に立ち上がる点は本遺跡のII A群土器のD 1類とやや異なるものの、須恵器環の底部は回転糸切りで切り離されたままのもので、法量も類似する（註8）。

また、9世紀第4四半期頃を中心とする頃に位置付けられている多賀城跡出土の土器群に、多賀城跡平成6年度現状変更SK2270土壤出土土器群（丹羽、1995）がある。須恵系土器高台鉢を少量含むなど組成にやや異なる点もあるが、土師器を主体としている点は本遺跡のII A群土器と共通している。また、土師器環はII B類を主体にII A類を含む点も共通しており、法量も近似している。破片のため全体の形状は不明であるが、土師器高台環を含むことも共通している。本遺跡のII A群土器はこれと年代的に近いとみられる。

また、II A群土器には1点のみであるが、灰釉陶器皿が共伴する。猿投窯製品で、黒雀90号窯式第2型式に相当する。平安京などの出土傾向からみて、9世紀後半頃に盛行したものと考えられている（齋藤、1994）。

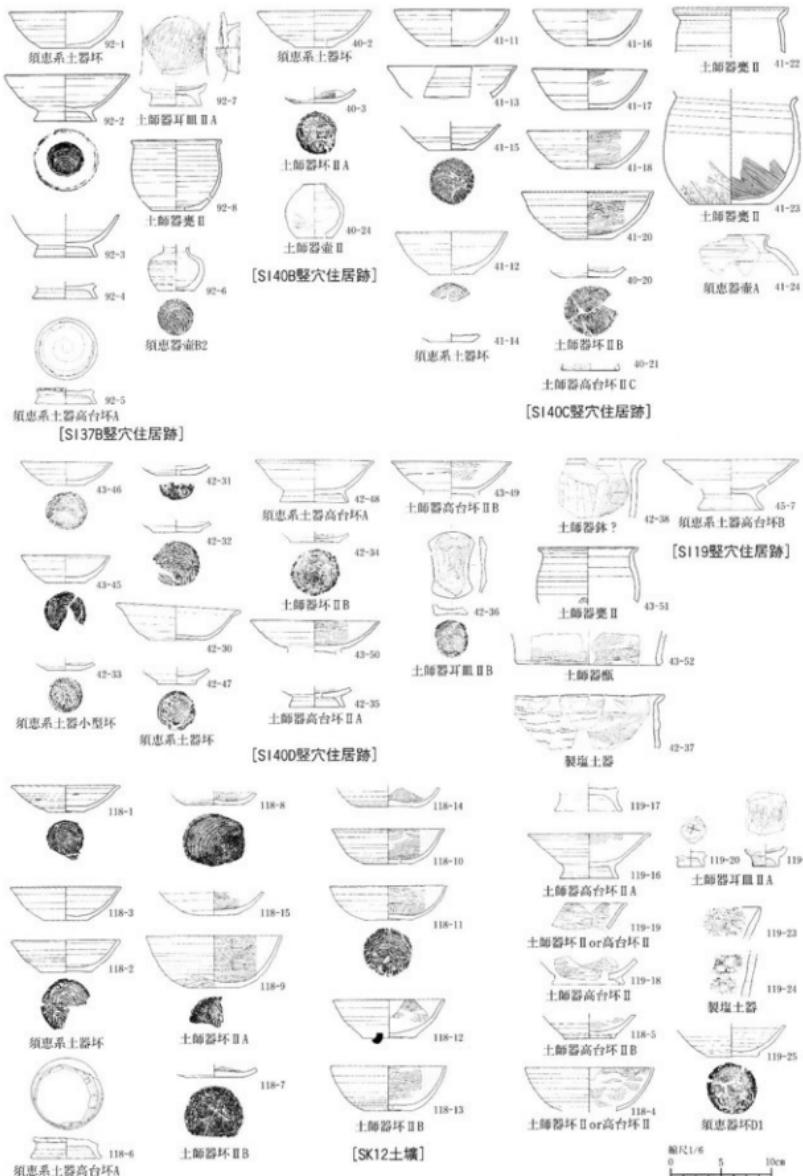
以上のことから、本遺跡のII A群土器は9世紀後葉頃のものと考えることができる。

(7) II B群土器の特徴

II B群土器の基準資料とその相当資料について、掲載した土器と未掲載の底部破片、高台部破片を各遺構・層位別に集計した（表6）。また、II B群土器を第144図に遺構別に集成了した。

II B群土器は土師器、須恵器、須恵系土器、製塩土器からなる。このうち土師器が主体を占め、次いで須恵系土器が多く、須恵器、製塩土器が少ない（表7、第143図）。

土師器はすべてロクロ調整のII類で、环II A・II B類、高台环II A・II B類、耳皿II A・II B類、壺II類、甕II類、瓶II類がある。このうち环が約3/4と主体を占め、次いで甕、高台环がやや多く、それ以外の耳皿・壺・瓶は少ない（表7、第143図）。



第144図 II B群土器—10世紀前葉頃の土器

須恵器には壺、壺、小壺がある。壺はII A群土器と同様のD 1類で、須恵器の主体を占める。

須恵系土器には壺、小型壺、高台壺A・B類がある。このうち壺が主体を占め、次いで高台壺がやや多く、小型壺は少ない（表7、第143図）。壺、小型壺の底部の切り離しは回転糸切りで、その後に再調整されていない。

土師器・須恵器・須恵系土器を食膳具（土師器壺・高台壺・耳皿・須恵器壺・須恵系土器壺・小型壺・高台壺）・煮沸具（土師器甕・瓶・製塩土器）、貯蔵具（須恵器壺）に分けると、食膳具が主体を占め、煮沸具、貯蔵具が少ない（表7、第143図）。

このように、II B群土器は土師器がいずれもロクロ調整で、約6割と主体を占めること、土師器では底部が回転糸切りで切り離されたままの壺II B類が主体を占めること、土師器に高台壺・耳皿が含まれること、須恵器壺も底部が回転糸切りで切り離されたままの壺D 1類のみからなること、土師器に次いで須恵系土器がやや多く含まれること、須恵系土器は壺・小型壺・高台壺からなり、小型壺は量的に少ないとなど特徴付けられる。

（8）II B群土器の年代

II B群土器と同様の土器群は、陸奥国府・多賀城跡の城内・城外で基準となる資料が蓄積されている。これらは多賀城跡終末までの間に4段階にわたって変遷していることが指摘されている（柳澤・白崎編、1998）。このうち、第2段階の第2群土器（註9）は、10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰層およびその前後の層から出土したもので、10世紀前葉頃に位置付けられている。土師器・須恵系土器などからなり、土師器が約3割、須恵系土器が6～7割を占める。土師器はいずれもロクロ調整で、壺が主体を占め、高台壺も少數含まれる。土師器壺は底部が回転糸切りで切り離されたものが大半を占める。須恵系土器には壺・小型壺・高台壺・皿があり、壺が主体を占める。

須恵系土器の含まれる比率は、多賀城跡が6～7割と多いのに対し、本遺跡のII B群土器は約2割と少ない。しかし、須恵系土器に壺・小型壺・高台壺があること、土師器壺では底部が回転糸切りで切り離されたままの壺II B類が主体を占め、土師器に高台壺が含まれること、須恵器壺は底部が回転糸切りで切り離されたままの壺D 1類であるなど、共通点が数多く認められる。

そこで、本遺跡のII B群土器と多賀城跡の2群土器の両者に含まれ、それぞれの土器群を特徴付けている須恵系土器壺・小型壺の法量を平均値で比較することにする。

須恵系土器壺は、本遺跡のII B群土器が口径13.6cm、底径5.5cm、器高4.3cm、器高／口径比0.312で、多賀城跡の第2群土器が口径13.4～13.7cm、底径5.2～5.8cm、器高4.2～4.5cm、器高／口径比0.309～0.329である。須恵系土器壺は本遺跡のII B群土器では少ないが、法量は量の多い多賀城跡の第2群土器の範囲内にある。

また、須恵系土器小型壺は本遺跡のII B群土器、多賀城跡の第2群土器とも少ないが、本遺跡が平均すると口径10.8cm、底径4.7cm、器高3.1cm、器高／口径比0.284で、多賀城跡の第2群土器では多賀城市高崎遺跡第11次調査S X 1080土器廃棄土壙出土土器群（高野、1991）に口径10.3cm、底径4.9cm、器高3.7cm、器高／口径比0.359のものが1点あり、近似している。

土師器坏II B類、須恵器坏D I類の法量も、本遺跡のII B群土器と多賀城跡の2群土器では近似している。

以上のことから、本遺跡のII B群土器は多賀城跡の域内・城外の第2群土器に相当し、年代的には10世紀前葉頃に位置付けられるとみられる。

3. 遺構期の設定と集落の変遷

(1) 遺構期の設定

縄文時代～弥生時代の土器などが表土や遺物包含層、古代の遺構などから少數出土したが、堅穴住居跡がないため、当該期の集落の実態は不明である。

前述のように、本遺跡から出土した奈良・平安時代の土器は、8世紀第3四半期頃のI群土器、9世紀後葉頃のII A群土器、10世紀前葉頃のII B群土器に分けられた。

この他に主な遺構として、古墳時代前期の塩釜式期のS I 16堅穴住居跡、近世以降のS E 1井戸跡、S D 1暗渠・開渠、S X 5平場がある。

これらを含めて以下のように本遺跡における遺構期を設定する。

なお、年代的位置付けができなかったS I 3・4・12・14・18・26・36・44・45・46・47・50・51・55・56堅穴住居跡(15棟)については、ここから除外した。また、遺物点数は少ないが、建て替えられた前後の堅穴住居跡で時期のわかるものについては、その前後の遺構と同じ時期に含めた。

【A期】古墳時代前期の塩釜式期の集落(第145図左側)・・・堅穴住居跡1棟(S I 16堅穴住居跡)からなる。本期における遺構の分布は極めて希薄である。

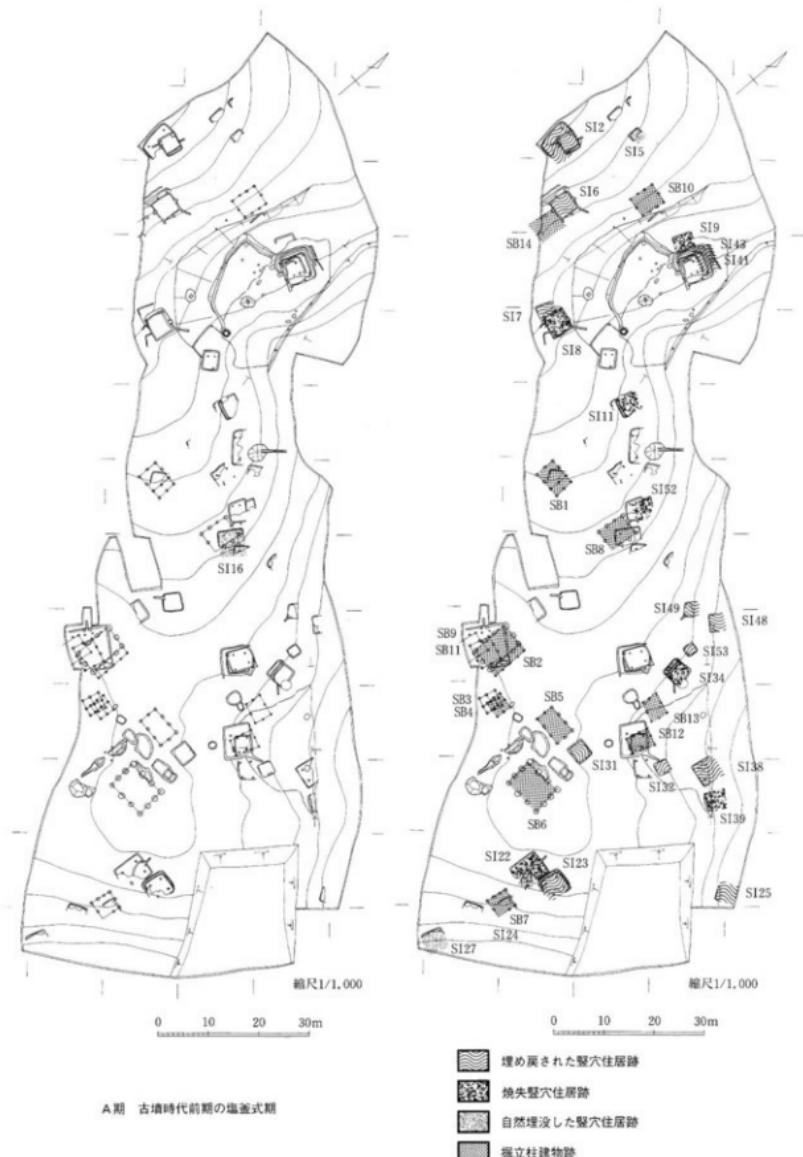
【B期】8世紀第3四半期頃(I群土器)の集落(第145図右側)・・・S B 1・2・(3・4・5)・6・(7・8)・9・(10・11・12・13・14)掘立柱建物跡(14棟)、S I 2・5・6・7・8・9・(11A・11B)・21・22・23A・23B・24・27・31・32・34A・34B・34C・34D・35・38・39・41・43・48・49・52・53堅穴住居跡(29棟)、(S E 2井戸跡)。

【C-1期】9世紀後葉頃(II A群土器)の集落(第146図左側)・・・S I 1・13・(15)・17・20・(33A)・33B・33C堅穴住居跡(8棟)、S E 3井戸跡、S X 1遺物包含層。

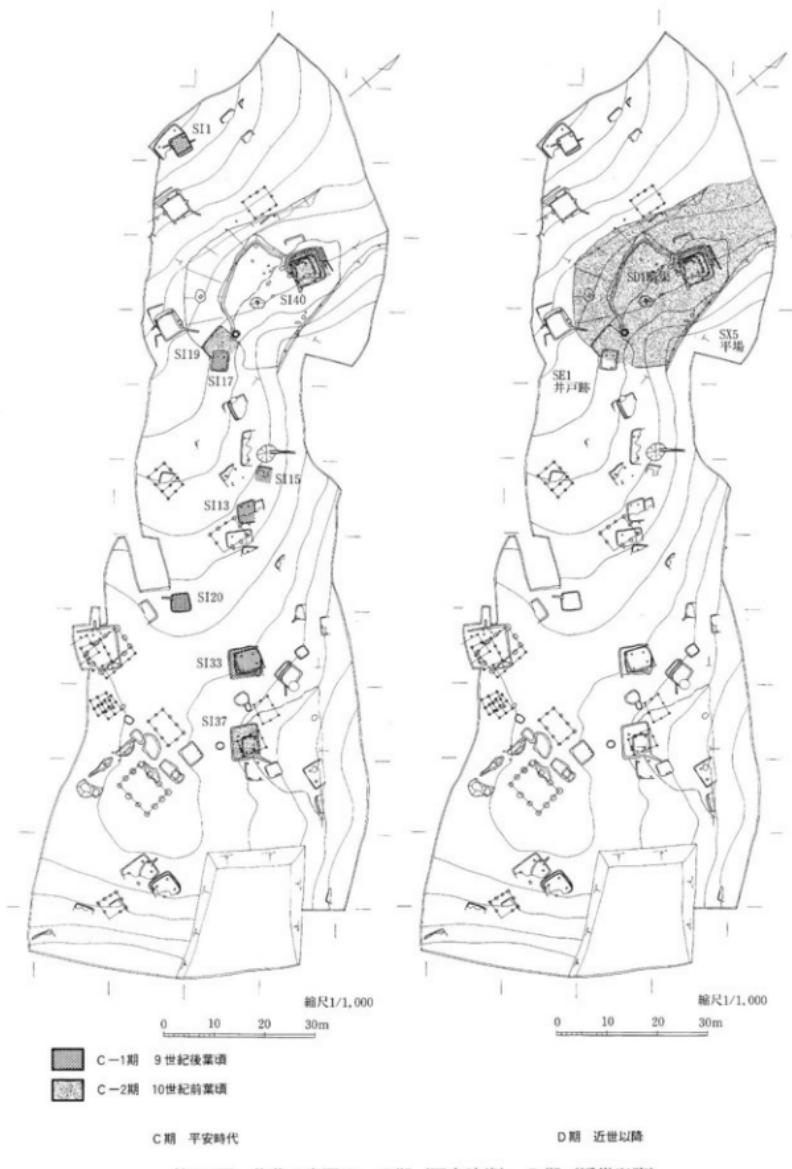
【C-2期】10世紀前葉頃(II B群土器)の集落(第146図左側)・・・S I 19・37A・37B・40A・40B・40C・40D堅穴住居跡(7棟)、S K 12土壤。

【D期】近世以降の遺構(第146図右側)・・・S E 1井戸跡、S D 1暗渠・開渠、S X 5平場

S E 1井戸跡、S D 1暗渠・開渠、S X 5平場は、大規模な造成を伴って構築された一連の遺構である。S D 1暗渠覆土から出土した擂鉢(第110図1)は、井上喜久男氏のご教示によれば、井上(1994)の登窯V期、藤沢(1998)の瀬戸窯第2段階第6小期に相当する18世紀前葉頃の瀬戸窯製品であるという。また、S X 5平場に伴う整地からは火繩銃の鉛製鉄砲玉が出土している。笠原信男氏の御教示によれば、火繩銃の鉛製鉄砲玉は、桃生郡では江戸時代以降に民間で使用されたという。したがって、D期については近世以降に位置付けられると考えられる。



第145図 集落の変遷(1) A期（古墳時代前期）、B期（8世紀第3四半期頃）



C期 平安時代

D期 近世以降

第146図 集落の変遷(2) C期 (平安時代)、D期 (近世以降)

(2) B期の集落の様相

1) 穴住居跡のカマド

B期の穴住居跡29棟（同一穴住居跡の拡張を除外すれば24棟）のうち、カマドのわかる穴住居跡は8棟ある。このうち煙道が外に長く延びる在地のタイプのカマドをもつものが4棟（S I 2・7・22・49穴住居跡）、煙道が外に延びない関東系のカマドをもつものが4棟（S I 6・8・32・34D穴住居跡）ある。

本遺跡に隣接する同時期の城柵・桃生城の造営にあたり、『続日本紀』天平宝字2年（758）12月8日条に坂東の騎兵・鎮兵・役夫と夷俘、『続日本紀』天平宝字3年（759）9月26日条には鎮兵がみえ、坂東の騎兵・鎮兵・役夫が動員されたことが知られている。

関東系のカマドをもつ穴住居跡は、関東からの鎮兵または柵戸が構築して居住したものと考えられる。在地の柵戸と関東からの鎮兵や柵戸が集落を構成していた可能性が高いと考えられる。

2) 須恵器の供給元

S I 38穴住居跡から、7枚重ねで焼成されたまま融着した須恵器壺B4類が2組計14点出土した（第97図24・25）。このように融着した須恵器壺は須恵器窯の窯内や灰原でよくみかけるが、明らかな失敗品であって、本来は消費地に流通しないものである。消費地から出土した例としてはおそらく初めてで、2次的な用途として搬入されたものとみられる。また、S I 34D穴住居跡から出土した須恵器甕B類（第82図22）は著しく焼け歪み、須恵器壺A1類（第86図46）は外面体部に窯壁片が熔着し、内面底部には拳大の窯壁片が熔着している。これらも失敗品であって、本来は消費地には流通しないものである。

これらの例は、本遺跡のすぐそばに須恵器窯があることを示唆している。本遺跡の北北西約2kmには太田窯跡があり、桃生城に瓦と須恵器を供給したとみられている（第1図27：阿部・佐藤編、1995）。本遺跡の須恵器の多くは太田窯から供給された可能性がある（註10）。

3) 搬入土器

遠隔地から搬入されたとみられる土器に、北関東系の削り出し高台の須恵器高台壺、体部外面に同心円状叩き目痕のある須恵器甕がある。

削り出し高台の須恵器高台壺は、S I 21・27穴住居跡から各1点出土した（第63図28、第107図3）。削り出し高台による須恵器高台壺は、全国的にみても数少なく、貼り付け高台が主流である。8世紀代のものとして関東では群馬県・栃木県・千葉県などに類例が知られている（千葉県文化財センター、1994）。

体部外面に同心円状叩き目痕のある須恵器甕は、S B 2掘立柱建物跡、S I 8穴住居跡から出土した（第8図10、第28図4・5、第31図27・28）。体部外面に同心円状叩き目痕のある須恵器甕は、茨城県新治窯跡群のある下総北半部を中心に分布している（酒井、1981；川井、1988；山口、1994）。

これら北関東系の須恵器高台壺・甕が出土したことは、桃生城の造営に動員された関東からの柵戸や鎮兵が携えてきた土器もわずかながらあったことを示唆している。

なお、S B 2掘立柱建物跡、S I 21・31穴住居跡から出土した脚部に透かしのある須恵器高壺

(第8図5、第63図37・38、第90図4)も県内ではあまり例のないもので、8世紀中葉頃の松山町次橋2号窯跡(東北学院大学考古学研究部、1983)と8世紀第4四半期頃とみられる大衡村亀岡遺跡第3号土壙(東北学院大学考古学研究部、1979)から各1点出土している。また、S B 2掘立柱建物跡、S I 21堅穴住居跡から出土した底部が2段構成で脚部に透かしのある須恵器高环(第8図5、第63図37)もあまり例のないものである。福島県会津大戸窯跡群上雨屋83号窯跡(石田、1994)に透かしのない2段構成の須恵器高环が認められる。これらの高环の供給元については今後の課題であるが、本遺跡への人の移動や物資の供給について知る手がかりの一つになりうるものである(註11)。

4) 土葺き屋根をもつ堅穴住居跡

残りが特にS I 8・34D焼失堅穴住居跡の床面の上には、焼土塊・焼土・炭片・小礫片を多量に含む土層が自然堆積していた。この土層は壁際では20~25cmと最も厚く、中央部の厚い箇所では12cm前後で、薄い箇所では3cmであった。平均の厚さは12cm程度である(註12)。焼土塊にスサを含まず、地山に含まれる小礫片を多く含んでいたことから、この土層は堅穴住居跡を掘削した際の掘削土を屋根の上に葺いたものが焼け落ちたもので、これらの堅穴住居跡は土葺き屋根であったとみられる(註13)。

また、この土層の上に炭層がないことから、葺土の上には草など焼失しやすいものは被せていないかったとみられ、屋根の上から火がついたとは考えにくい。床面の上に多くの土器・石製品・鉄製品などが残されていたことから、家財道具を持ち出した後に焼却処分されたような堅穴住居跡ではない。火もとは堅穴住居跡の内部であり、放火または失火とみられる。

そして、建築部材がほとんど焼失し尽くして残っていないことから、堅穴住居跡の焼失実験(石守、1995・2001)で指摘されたように、建築部材が灰になるまですべて燃え尽きた後、屋根に葺かれていた葺土が焼け落ちたものと推定される(註14)。

後続する堅穴住居跡や掘立柱建物跡がないこと、この他に同時期とみられる焼失した堅穴住居跡が複数あることなどから、S I 8・34D堅穴住居跡などI群土器を出土し、焼失した堅穴住居跡は、桃生城跡と同様に宝亀5年(774)7月の海道蝦夷の攻撃によって焼失した可能性が高い。

5) 鉄製品(第147図)

B期の遺構から出土した鉄製品には、馬具(第147図1~10)、武具〔柳葉鎌(第147図11)、圭頭鎌(第147図12)、長三角形鎌(第147図13)などの鉄鎌〕、工具〔刀子(第147図25~35)、鉗(第147図36)、鑿または鑿(第147図37)、有袋鉄斧(第147図38・39)〕、農具〔曲刃鎌(第147図40)〕、漁労具〔釣針(第147図42・43)、刺突具(第147図44)〕、その他〔鉄釘(第147図21~23)、縫(第147図24)、紡錘車(第147図41)など〕がある。これらのうち、特に出土例の少ない馬具(註15)と鑿または鑿を取り上げる。

【馬具】(第147図1~10)

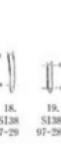
馬具にはU字状吊手金具(第147図1)、引手(第147図2)、鉸(第147図3)、兵庫鎖(第147図4・5)、辻金具(第147図6)、縁金具?(第147図7~10)がある。いずれもB期の堅穴住居跡から出土した。

鉄製U字状吊手金具（第147図1）は、木心金属張三角錐形壺鐘（斎藤、1986）に銛留されるもので、斎藤編年（斎藤、1986）によるIV期（6世紀末）～VI期（7世紀中頃）のものに類似している。本例により木心金属張三角錐形壺鐘が少なくとも8世紀第3四半期頃まで残ることが判明した（註16）。

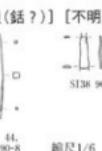
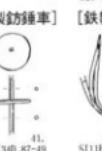
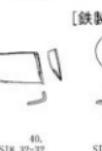
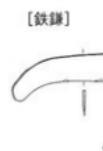
引手（第147図2）は、轡の一部をなす鉄製金具で、銜先・鏡板に取り付けられて手綱を連結させるためのものである。直線的で振りのない2本線の柄の一端に鏡板に取り付けられる引手先、もう一端に手綱が付けられる引手壺を一体となって造りだした鍛造品で、「一体造くの字状引手壺無撫二条線引手」と呼ばれる型式（岡安、1984・1998）である。実用的な環状鏡板付轡に取り付けられる引手と考えられており、県内では多賀城跡第66次調査SK2321土壤第10層から出土した8世紀後葉頃～9世紀初頭頃の双環状鏡板付轡（柳澤・白崎編、1996）にこれと同型式の引手が取り付けられている。奈良時代の轡の出土例は全国的にみてもきわめて少ない（大谷、1984；瀧瀬、1994；小島、1997）。

鉸具（第147図3）は、横棒に巻き付けた革帯を責金具で留め、T字状刺金で別の革帯をこれに連結する構造のものである。正倉院所蔵品（正倉院事務所編、1976・1994・富永、2002）や古墳出土馬具からみて、こうした鉸具は、力革が取り付けられて壺鐘と鞍とを連結する鉸具、または面懸・胸懸・尻懸の鉸具と考えられる。

【鉄製馬具】



【有袋铁斧】



第147図 B期の遺構から出土した鉄製品の集成

兵庫鎖（第147図4・5）は、壺鏡の鏡軸金具か轡の立闇または引手とみられる。これが出土したS I 34D堅穴住居跡からは壺鏡金具なども出土しており、これらとセットとなる馬具とみられる。

また、辻金具（第147図6）は、古墳出土馬具にも例をみないものである。径4mmの鉄棒を三角形状に曲げ三叉状に鍛接して縁金具とし、その一脚に薄い鉄板（長さ8cm、幅3.5cm、厚さ1mm）を二つ折りにしたを鈎板2箇所鍛留めにして幅3.5cmの革帯を取り付け、他の2脚にはほぼ同じ幅の革帯を貴金具で取り付け、3方向に革帯を引っ張る構造のものである。本例は正倉院例（註20）よりも簡略的なものだが、三叉状に帶革が取り付けられて三方向に引っ張るとみられる点で、構造的には正倉院例と同様である。馬具の胸懸または面懸の辻金具とみられる。

縁金具？（第147図7～10）は、木心金属張三角錐形壺鏡に取り付くU字状吊手金具（第147図1）と共に伴したことから、この壺鏡の縁金具の可能性がある。

B期の堅穴住居跡から出土したこれらの馬具は、本遺跡のB期集落に騎兵や騎乗の武官が駐屯していたことを示し、『続日本紀』の記事（註18）を一部裏付けている。平安時代のC期の堅穴住居跡からはこれらの馬具は出土せず、前述したような遺跡の性格の違いを示していると考えられる。

【鑿または鑿】（第147図37）

鑿または鑿は、S I 35堅穴住居跡から出土したものである。刃部が両刃で、撥状になるもので、柄頭を欠損しているため、鑿か鑿か区別できない（註19）。鑿、鑿のいずれにしても、古代のものとしては類例がきわめて少ない（註20）。

6) 鉄鋳冶生産

B期の堅穴住居跡などから出土した製鉄関連遺物には、薦羽口・鉄滓・鍛造薄片がある。薦羽口はいずれも破片で全体の形状・大きさが不明だが、外径7cm前後の小型品と外径8cm前後の大型品がある。鉄滓類には通常の鉄滓の他、椀形滓、小球状滓、鍛造剥片がある（付章2参照）。量的にはテン箱1箱に満たない。

S I 31堅穴住居跡からは薦羽口（第90図6・7）と椀形砂鉄系精鍊鍛冶滓、椀形鍛鍊鍛冶滓、小球状滓などの鉄滓、鍛造剥片が出土した。精鍊から鍛鍊までの一連の鍛冶がこの堅穴住居跡内または付近で行われていたことを示し（付章2参照）、B期の集落で精鍊鍛冶から鍛鍊鍛冶までの鉄生産が行われた工房もあったことがわかる。

また、焼失したS I 34D堅穴住居跡からは鉄滓も少數だが出土した。床面には著しく焼けた焼面が2箇所あり、土器・鉄製品・砥石など家財道具が多く残されていた。この堅穴住居跡出土の鉄製品には、馬具、鉄鎌、鎌、刀子、有袋鉄斧、鉄製紡錘車があり、鉄製品が特に多い。これら鉄製品を製作・修理した鉄鋳冶工房の可能性が高い。

この他、S I 51堅穴住居跡は椀形精鍊鍛冶滓が出土し、鉄鋳冶工房の可能性がある。

また、S B 5掘立柱建物跡掘方から薦羽口（第5図12）、S B 6堅穴住居跡掘方から鉄滓、S B 10掘立柱建物跡掘方から椀形滓が出土した。

7) B期集落の性格と年代

本遺跡は桃生城の東に隣接し、本遺跡の立地する丘陵を尾根伝いに登って行けば、桃生城跡第4次

調査で検出した桃生城跡外郭東辺北部の土橋状の通路部分に至る（阿部・佐藤編，1996；第151図）。I区西端からこの土橋状の通路部分まで約75mあるにすぎず、さらにそこから政庁北東隅築地塀まで約190mあるにすぎない。

桃生城の造営については、陸奥国内の郡司・軍毅（軍團の統括者）・浮浪人・夷俘、坂東諸国の騎兵・鎮兵・役夫などが従事し、天平宝字2年（758）頃から開始され、翌天平宝字3年（759）末頃までの1年余りで完成したことが『続日本紀』の記事から知られている。また、発掘調査の結果、桃生城跡では政庁区画築地塀と政庁内の主要殿舎（正殿・後殿・両脇殿）、政庁西側官衙、外郭北西隅築地塀、城内区画築地塀、椿が宝亀5年（774）7月の海道蝦夷による桃生城襲撃によって焼失し、その後は再建されていないことが明らかとなってきた（岡田・進藤他1975；氏家・桑原・岡田他，1976；阿部・佐藤編，1995～1999；後藤・吾妻編，2000；柳澤・阿部編，2001；吾妻・阿部編，2002；柳澤，2001；白鳥他，2002；註21）。

I群土器は桃生城跡のものと類似し、B期集落は桃生城と時期的に重複する。

B期集落は竪穴住居跡と掘立柱建物跡とからなり、中には桃生城政庁後殿跡に匹敵する主屋（S B2 掘立柱建物跡）もあり、一般的な集落ではない。

B期のS I 43竪穴住居跡埋土からは桃生城跡の平瓦1類が出土し、S I 8 焼失竪穴住居跡では桃生城跡の丸瓦1類が施設瓦に用いられており、桃生城と同時期であることを裏付けている。

前述のように鉄製品を生産・修理したとみられる鐵鍛冶工房（S I 31・34D竪穴住居跡）もあり、馬具の存在から騎兵や騎乗の武官の駐屯が窺える。

また、カマドは在地のものと関東系のものとからなり、北関東系の須恵器高台环・甕など北関東から搬入されたとみられる土器も出土している。在地の人々のみならず、関東出身者も居住したことが窺える。

桃生城には陸奥国内や関東諸国などから柵戸（移民）や鎮兵（坂東諸国から動員された常駐兵）などが動員・移住されたことが『続日本紀』に記されており、関東系のカマドや北関東系の須恵器の存在はこれらの記事を裏付けている。



第148図 新田東遺跡と桃生城跡の位置関係

以上のことから、本遺跡のB期集落は天平宝字2年（758）頃～宝亀5年（774）7月の間に存続した当時最北の城柵・桃生城の兵站基地としての役割を果たしたものと考えられ、桃生城と同時期のものとみられる。

桃生城跡のすぐ東に隣接する同時期の集落である本遺跡は、律令政府の辺境政策に基づいて動員され、桃生城を支えた柵戸や鎮兵などの人々の集落と位置付けることができる（註22）。

8) B期の細分

B期集落は、掘立柱建物跡14棟、少なくとも竪穴住居跡29棟（同一竪穴住居跡の拡張を除外すれば24棟）からなる（第145図右側）。

竪穴住居跡と掘立柱建物との関係をみると、S I 21竪穴住居跡、S B 2・9・11掘立柱建物跡では、S I 21竪穴住居跡が最も古く、これを埋め戻して直ちに主屋とみられるS B 2掘立柱建物跡が建てられ、次にS B 9掘立柱建物跡が建てられ、最後にS B 11掘立柱建物跡が建てられている。

これらの新旧関係を基準として、最も古いS I 21竪穴住居跡をB-1期、次のS B 2掘立柱建物跡をB-2期、3番目のS B 9掘立柱建物跡をB-3期、最後のS B 11掘立柱建物跡をB-4期としてまず設定する。

これら重複するS B 2・9・11掘立柱建物跡の方向は、最も古いS B 2掘立柱建物跡が北で西に約1°偏り、次に新しいS B 9掘立柱建物跡が北で東に約12°と大きく偏り、最も新しいS B 11掘立柱建物跡が北で東に約4°偏る。そこで、これら重複する掘立柱建物跡の方向を基準として、他の掘立柱建物跡を位置付けることとする。

本期の掘立柱建物跡14棟の時期、方向、規模、新旧関係は表8の通りである。

掘立柱建物跡	時期	方 向	規 模	新旧関係
S B 1 掘立柱建物跡	B-2期	北で西に約3°偏る。	桁行3間、梁行2間の東西棟	S I 118と重複、新旧不明。
S B 2 掘立柱建物跡	B-2期	北で西に約1°偏る。	桁行4間、梁行2間の東廻付南北棟	B-1期のS I 21より新しく、B-3期のS B 9、B-4期のS B 11よりも古い。
S B 3 掘立柱建物跡	B-3期	北で東に約10°偏る。	桁行2間、梁行2間の倉庫	S B 4と重複。
S B 4 掘立柱建物跡	B-2期	北で東に約2°偏る。	桁行2間、梁行2間の倉庫	S B 3と重複。
S B 5 掘立柱建物跡	B-2期	北で東に約1°偏る。	桁行3間、梁行2間の東西棟	
S B 6 掘立柱建物跡	B-3期	北で西に約9°偏る。	桁行3間、梁行2間の東西棟	
S B 7 掘立柱建物跡	B-3期	北で東に約9°偏る。	桁行3間、梁行2間の南北棟	B-2期のS I 24よりも新しい。
S B 8 掘立柱建物跡	B-4期	北で東に約5°偏る。	桁行3間、梁行2間の南北棟	A期のS I 16よりも新しい。
S B 9 掘立柱建物跡	B-3期	北で東に約12°偏る。	桁行3間、梁行2間の東西棟	B-1期のS I 21、B-2期のS B 2より新しく、B-4期のS B 11よりも古い。
S B 10 掘立柱建物跡	B-4期	北で東に約5°偏る。	桁行3間、梁行2間の南北棟	
S B 11 掘立柱建物跡	B-4期	北で東に約4°偏る。	桁行2間以上、梁行2間以上	B-1期のS I 21、B-2期のS B 2、B-3期のS B 9より新しい。
S B 12 掘立柱建物跡	B-3期	北で東に約16°偏る。	桁行3間、梁行2間の南北棟	C-2期のS I 37よりも古い。
S B 13 掘立柱建物跡	B-4期	北で東に約6°偏る。	桁行2間、梁行2間の東西棟	S B 12と近接し、別時期。
S B 14 掘立柱建物跡	B-4期	北で東に約4°偏る。	桁行2間以上、梁行2間以上	B-1期～B-3期の間S I 6よりも新しい。

表8 B期の掘立柱建物跡の一覧

重複する S I 24 壁穴住居跡、S B 7 挖立柱建物跡では、S I 24 壁穴住居跡を埋め戻して直ちに北で東に大きく偏る S B 7 挖立柱建物跡が建てられている。前述の遺構期設定の基準とした掘立柱建物跡の方向からみると、S B 7 挖立柱建物跡は B - 3 期の S B 9 挖立柱建物跡と同様であり、S B 7 挖立柱建物跡は B - 3 期に、その直前の S I 24 壁穴住居跡は B - 2 期に位置付けられる。前述の例と併せてみると、壁穴住居跡と掘立柱建物跡が重複する箇所では、壁穴住居跡が古く、次いで掘立柱建物跡が建てられたとみられる。

また、前述の遺構期設定の基準とした掘立柱建物跡の方向からみると、ほぼ磁北を向く S B 1・2・4・5 挖立柱建物跡が掘立柱建物跡の中では最も古い一群と考えられ、B - 2 期に位置付けられる。その次に北で東に大きく偏る S B 3・7・9・12 挖立柱建物跡が続くとみられ、B - 3 期に位置付けられる。そして、北で東に 4~5° 偏る S B 8・10・11・13・14 挖立柱建物跡がこれに続くとみられ、B - 4 期に位置付けられる。

なお、北で西に約 9° 偏る S B 6 挖立柱建物跡については、S B 2 挖立柱建物跡に次ぐ規模であり、別時期の主屋の可能性が考えられ、偏りの角度が西と東という違いがあるものの、S B 9 挖立柱建物跡に近いことから、これと同時期の B - 2 期に考えた。

また、各掘立柱建物跡の柱痕跡には焼土が含まれていないので、掘立柱建物跡は火災にあっていないとみられる。

これら B 期の主要遺構の重複関係と掘立柱建物跡の方向による遺構期の設定を第149図に示した。

【B - 1 期】	【B - 2 期】	【B - 3 期】	【B - 4 期】
S I 21 壁穴住居跡	→ S B 2 挖立柱建物跡 S I 24 壁穴住居跡 S B 3 挖立柱倉庫跡 S B 1 挖立柱建物跡 S B 5 挖立柱建物跡	→ S B 9 挖立柱建物跡 S B 7 挖立柱建物跡 → S B 4 挖立柱倉庫跡 S B 6 挖立柱建物跡 S B 12 挖立柱建物跡	→ S B 11 挖立柱建物跡 S B 8 挖立柱建物跡 S B 10 挖立柱建物跡 S B 13 挖立柱建物跡 S B 14 挖立柱建物跡
この他、		S I 6 壁穴住居跡 (B - 1 期 ~ B - 3 期の間)	→
① S I 34 A 壁穴住居跡 → S I 34 B 壁穴住居跡 → S I 34 C 壁穴住居跡 → S I 34 D 壁穴住居跡 (焼失) ② S I 23 A 壁穴住居跡 → S I 23 B 壁穴住居跡 (→隣接して同時に存在しない S I 22 壁穴住居跡 (焼失)) ③ S I 7 壁穴住居跡、S I 46 壁穴住居跡 → S I 8 壁穴住居跡 (焼失)			
の新旧関係がある。これらの壁穴住居跡は上記の B - 1 期 ~ B - 4 期のいずれに位置付けられるか明確ではない。ただし、焼失した S I 8・22・34 D 壁穴住居跡は、宝亀 5 年 (774) 7 月の海道蝦夷による桃生城襲撃によって、桃生城とともに焼失したものである可能性が高く、B 期の最終末に位置付けられる。したがって、これら焼失壁穴住居跡は B - 4 期またはそれ以降に位置付けられるとみられる。			

第149図 B 期の主要遺構の重複関係と掘立柱建物跡の方向

次に、上記以外の壁穴住居跡について位置付けを行うことにしたい。

B 期の焼失した壁穴住居跡 7 棟 (S I 8・9・11 B・22・34 D・39・52 壁穴住居跡) はいずれも建て直されずに廃絶していることから、この火災は宝亀 5 年 (774) 7 月の海道蝦夷による桃生城襲撃によるものとみられ、B 期の終末期 [B - 4 期またはそれ以降] に位置付けられる。

この他の焼失壁穴住居跡は、いずれも遺存状況が悪く、家財道具を残したまま焼失したのか検討できなかった。しかし、人為的に埋め戻された壁穴住居跡が 20 棟と多く、自然埋没した壁穴住居跡が 2

棟と少ないことから、これらも桃生城存続期間中に焼却処分されたものではなく、宝亀5年（774）7月に焼失した可能性が高いと考えられる。

また、焼失豎穴住居跡以外の豎穴住居跡22棟のうち、自然堆積土が床面上に堆積している豎穴住居跡が2棟（S I 5・27豎穴住居跡）ある。これらはB期の集落が廃絶した以降に自然埋没したと考えられる。

この他、豎穴住居跡20棟（S I 2・6・7・11A・21・23A・23B・24・31・32・34A・34B・34C・35・38・41・43・48・49・53）が人為的に埋め戻されており、床面上にあまり遺物を残さない。これらは存続期の中でも相対的に古いものと考えられることから、B-1期～B-4期の間に位置付けられると考えられる。桃生城造営期にはかなり多くの動員があったことが『続日本紀』の前述の記事から知られているので、これら人為的に埋め戻された豎穴住居跡の中にB-1期のものがかなりあると推定される。また、S I 6 豊穴住居跡については、前述のようにB-4期のS B14掘立柱建物跡と重複してこれより古いことから、B-1期～B-3期の間に位置付けられる。また、3回建て直されているS I 34豎穴住居跡については、最後のS I 34D豎穴住居跡が前述のようにB-4期またはそれ以降に位置付けられる。当初のS I 34A豎穴住居跡がB-1期、S I 34B豎穴住居跡がB-2期、S I 34C豎穴住居跡がB-3期に対応する可能性が考えられる。

以上のことから、B期は少なくとも4小期に分けられ（註23）、B-1期～B-4期の様相は以下のようにまとめられる。なお、豎穴住居跡の位置付けはその小期に確実に含められるもののみについて行った。豎穴住居跡が各期に多く存在したとみられる。

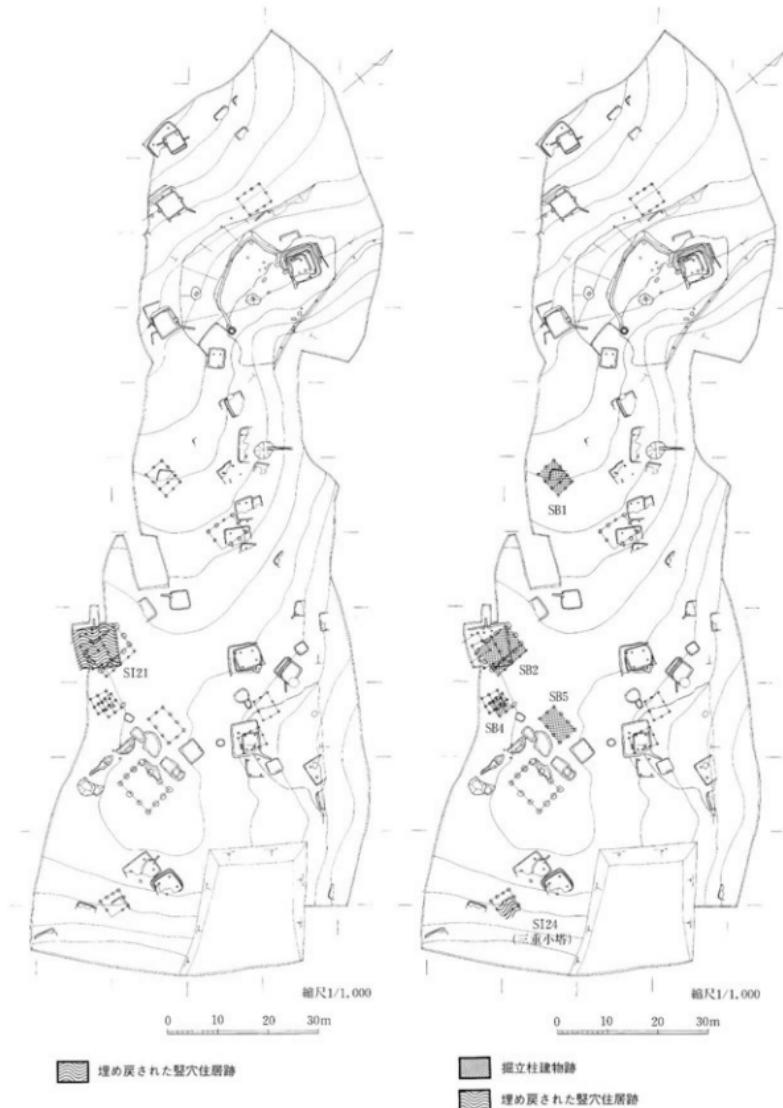
【B-1期】豎穴住居跡1棟（S I 21豎穴住居跡）以上からなる（第150図左側）。人為的に埋め戻された豎穴住居跡20棟のうち、かなり多くが本期に位置付けられると推定されるが、特定できない。

S I 21大型豎穴住居跡からは、在地の土器（第135図上段）の他、北関東系の削り出し高台の須恵器高环（第62図25）、県内あまり類例のない透かしのある須恵器高环（第63図37・38）、蓮花の蕾がヘラ書きされた円面硯（第63図41）、古墳時代前期の珠文鏡（第65図51）とガラス小玉（第65図50）など特殊な遺物が出土しており、注目される。S I 21豎穴住居跡はB-2期に埋め戻され、S B 2掘立柱建物跡が建てられている。

B-1期がB期の当初の小期であり、本遺跡のB期集落が律令政府の辺境政策に基づいて桃生城を支えるために陸奥国内や関東諸国などから動員・移住された柵戸や鎮兵の集落であるので、B-1期は天平宝字2（758）年頃よりは古くはない。桃生城が翌天平宝字3年（759）末頃までの1年余りで完成したので、B-1期の下限年代がこの頃に位置付けられる可能性が考えられる。

【B-2期】ほぼ磁北を向いた掘立柱建物跡4棟（S B 1・2・4・5掘立柱建物跡）と豎穴住居跡1棟（S I 24豎穴住居跡）以上からなる（第150図右側）。他にS I 34B豎穴住居跡など他の豎穴住居跡の存在も推定されるが、特定できない。

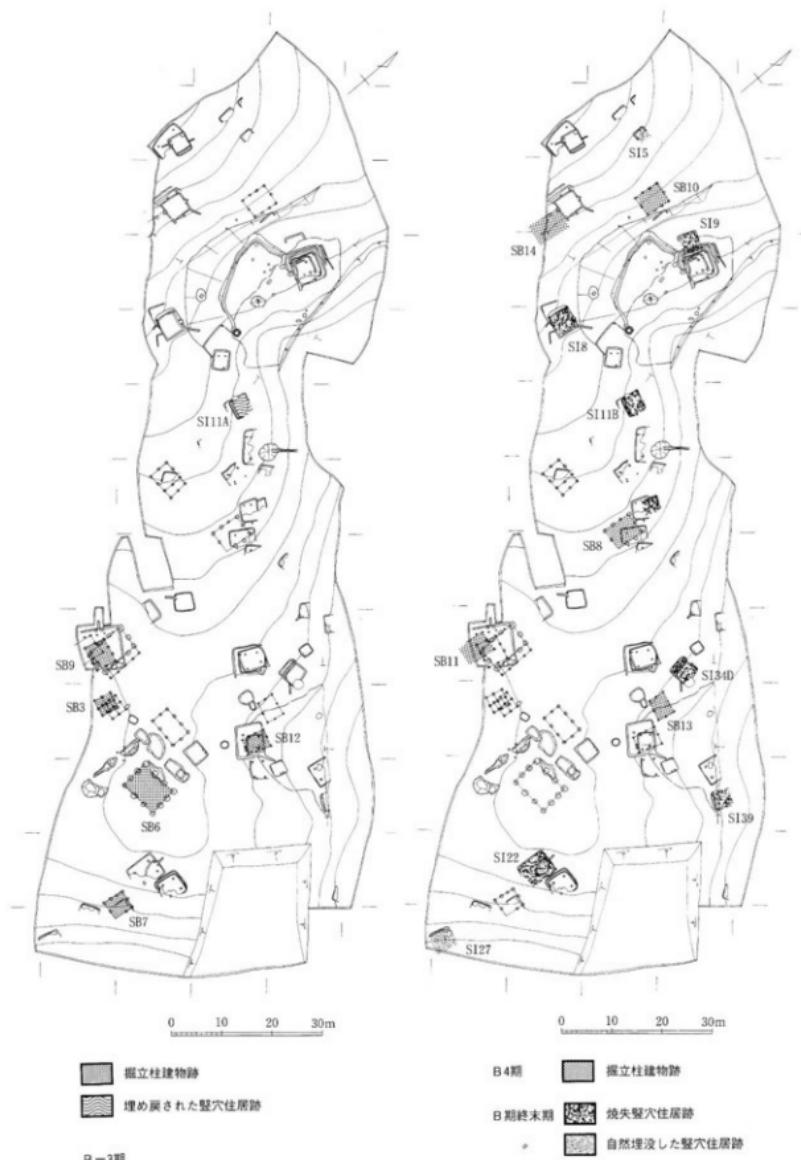
掘立柱建物跡のうち、S B 2掘立柱建物跡は桁行総長約7.7m、梁行総長約4.7mと最も平面規模が大きな桁行4間、梁行2間のS B 2東廂付南北棟で、ほぼ北を向いて建てられている。隣接する桃生城政庁跡のS B 1正殿跡、S B 2後殿跡、S B 16東脇殿跡、S B 17西脇殿跡の掘方の規模（阿部・佐



B-1期 桃生城造営期～
[天平宝字2年(758)]

B-2期

第150図 集落の変遷(3) B-1期(左側)、B-2期(右側)



第151図 集落の変遷(4) B-3期(左側)、B-4期、B-4期末期(右側)

B-4期及びB-4期末期 [B-4期または、
それ以後、桃生城廢絶の宝亀5年(774)7月]

藤編, 1995) には及ばないものの、掘方は一辺約1.1mとかなり規模が大きい。柱痕跡の大きさも径約30cmと大きい。S B 1 正殿跡の径50cm前後、S B 16・17脇殿跡の径40cm前後には及ばないものの、S B 2 後殿跡の柱痕跡に等しい。一部の柱に礎盤も使用している。こうした規模の大きな格式の高い立派な建物であることから、B-2期の主屋とみられる。

このS B 2 建物を建てる際には、B-1期のS I 21堅穴住居跡を埋め戻している。埋土からは古墳時代前期の珠文鏡とガラス小玉も出土している。後述のように、同型式の珠文鏡の分布状況から考えて、関東からの鎮兵や柵戸などが携えてきた先祖伝来の鏡を埋納した可能性が考えられる。

また、桁行2間、梁行2間の小規模な倉庫(S B 4 挖立柱建物跡)が1棟あり、注目される。

集落の性格は、堅穴住居跡のみからなるB-1期とは明らかに変質したものとみられる。

【B-3期】北で東または西に大きく偏る掘立柱建物跡5棟(S B 3・6・7・9・12掘立柱建物跡)からなる。S I 11A・34C堅穴住居跡など堅穴住居跡の存在も推定されるが、特定できない(第151図左側)。

S B 6 挖立柱建物跡は桁行3間、梁行2間の東西棟で、柱間寸法・掘方・柱痕跡が大きく、主屋とみられる。S B 3 挖立柱建物跡は小規模な倉庫であり、B-2期のS B 4 倉庫の位置をややすらして建て替えている。またS B 7 挖立柱建物跡を建てる際には、B-2期のS I 24堅穴住居跡を埋め戻している。埋土からは三重小塔(第105図5)と鉄鉢形の須恵器鉢(第105図4)が出土した。後述するように、この三重小塔が天平宝字8年(764)9月の藤原仲麻呂(惠美押勝)の乱直後に発願された百萬塔を模しているとみられることから、天平宝字8・9年(764・765)以降と考えられる。

【B-4期】北で東に数度偏る掘立柱建物跡5棟(S B 8・10・11・13・14掘立柱建物跡)からなる(第151図右側)。前述のように、焼失堅穴住居跡7棟(S I 8・9・11B・22・34D・39・52堅穴住居跡)、自然埋没した堅穴住居跡2棟(S I 5・27堅穴住居跡)は、本期またはそれ以前のB期集落の廃絶期に位置付けられる。本期にこれらの堅穴住居跡が存在した可能性がある。

(3) 桃生城廃絶以降の平安時代の集落

【C-1期】9世紀後葉頃の集落(第146図左側)。

堅穴住居跡8棟(S I 1・13・15・17・20・33A・33B・33C堅穴住居跡)、井戸跡1基(S E 3井戸跡)、遺物包含層1箇所(S X 1 遺物包含層)からなる。このうちS I 20堅穴住居跡は焼失住居跡で、床面に土器などが多く残されていた。前述のように、この時期には桃生城は廃絶してから約100年を経ており、桃生城とは関係のない一般集落とみられる。

【C-2期】10世紀前葉頃～中葉頃(第146図左側)の集落。

堅穴住居跡7棟(S I 19・37A・37B・40A・40B・40C・40D堅穴住居跡)、土壙1基(S K 12)からなる。このうちS I 40堅穴住居跡は3回建てなおされた大型堅穴住居跡で、3小期目のS I 40C堅穴住居跡と4小期目のS I 40D堅穴住居跡の内部にそれぞれ鍛冶炉をもち、S I 40C堅穴住居跡からは高チタニア系砂鉄系製錬滓などの鉄滓、S I 40D堅穴住居跡からは椀形精錬鍛冶滓などの鉄滓(付章2参照)も出土したことから、鉄精錬・製錬などの鉄鍛冶を行った工房跡とみられる。

4. 特殊遺物

(1) 三重小塔

S I 24竪穴住居跡の埋土から、須恵器質の三重小塔が完全な状態で出土した（第105図5、巻頭図版2-1・2、図版12-1～3、36-1）。I群土器と共に伴したことから、この三重小塔は桃生城存続期（天平宝字2年（758）頃～宝亀5年（774）7月）の8世紀第3四半期頃に位置付けられる。こうした完形の小塔が奈良時代の遣構から出土した例は、全国的にみて初めてのものである。以下、この三重小塔について、検討する。

1) 円形小塔の集成

本例と同様に屋根・軸部が円形の古代の小塔を集成し、提示する（第152図；註24）。遺跡出土の須恵器質の小塔については、以下の8遺跡17例が集成できた。本遺跡と平城宮跡、窯跡を除けば、いずれも古代寺院跡から出土している。形態のみならず出土遺跡からみても、これら小塔が宗教的な遺物であることを裏付けている。なお、石川県七尾市能登国分寺跡から軸部が円形の多宝塔の瓦塔が出土している（七尾市教育委員会、1994）。しかし、軸部径が18.8cmと大きく、下記16例と明らかに大きさ・形態が異なるため、除外した。また、瓦塔・泥塔や中世以降に模倣されたものも除外した。

1. 法隆寺伝世の百萬塔（第152図1、巻頭図版2-1左側、註25）

百萬塔は天平宝字8年（764）9月の藤原仲麻呂（惠美押勝）の乱直後に称徳天皇の発願で乱関係者の供養のために製作が開始され、宝亀元年（770）4月に完成し、法隆寺など十大寺に十万基ずつ分置された木造三重小塔で、法隆寺にのみ伝世している（金子、1991）。

2. 法隆寺伝世の一萬節塔、十萬節塔

百萬塔と同時に作られた木造小塔で、一万基に1基ずつ一萬節塔、十万基に1基ずつ十萬節塔が作られ、それぞれ法隆寺に1基ずつ現存している。

3. 宮城県河北町新田東遺跡 S I 24竪穴住居跡出土の三重小塔（第152図2、巻頭図版2-1右側）

4. 平城宮跡第250・259次造酒司地区 S D 11600溝出土の三重小塔（第152図3）

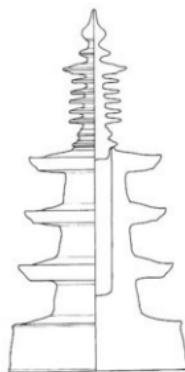
概報（奈良国立文化財研究所、1996）では器蓋のつまみ部で火舎の蓋と推定されていたが、その後の検討から百萬塔を模倣した三重小塔の可能性が高いと考えられる（註26）。

相輪部と基壇部を欠損する。内部は中空となっている。現存高8.7cm。屋根径は初重が6.8cm、二重が6.6cm、三重が6.4cmで、初重屋根－二重屋根間が2.5cm、二重屋根－三重屋根間が2.1cmで、本遺跡の三重小塔に数値が近い。屋根の断面形状は百萬塔と酷似する。円筒状に軸部両面をロクロ成形した後、屋根を貼付し、ロクロナデ、タテナデしている。長頸壺の製作技法と類似し、初重の軸部が2段構成となっている。

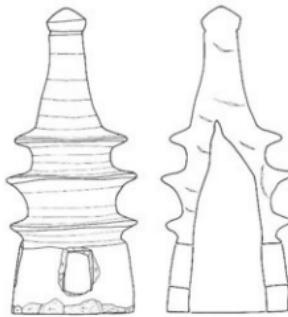
5. 千葉県袖ヶ浦町川原井廃寺跡出土の小塔（光江編、1986；第152図4）

瓦塔相輪部の九輪破片として提示されている（註27）。しかし、これまでに出土している瓦塔の相輪部とは形状・構造が異なる。小塔の初重破片とみることもできるかもしれない。屋根径7.6cm。川原井廃寺跡は、8世紀第4四半期～9世紀後半にかけて存続したとみられている。

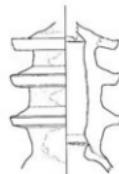
6. 岐阜県各務原市各務廃寺跡出土の小塔（各務原市教育委員会編, 1983; 第152図5~12）
8点出土している（註28）。泥塔として報告されているが、泥塔とは形態・焼成が異なる。いずれも須恵器質で、焼成やや甘く、灰白色を呈するもの（第152図5・7・9）、焼成が比較的よく、青灰色～灰色を呈するもの（第152図12）、その中間的なもの（第152図6・8・10・11）の3者がある。胎土は微細で、チャート小片をわずかに含み、各務廃寺跡出土の須恵器と同様である。美濃須衛窯跡の製品の特徴と一致する。いずれも破片で全形のわかるものはない。基壇をもつ七重小塔と推定される中実のもの（第152図9）が手捏ねで、それ以外の7点はロクロを用いている。ロクロを用いた7点のうち、基部の残る6点はいずれも中空で、層数不明のものが多い。中には五重以上のもの（第152図7・12）や四重以上のもの（第152図6）がある。
7. 岐阜県各務原市出土の五重小塔（小川, 1983; 第152図12; 註29）
泥塔として報告されているが、一般的な泥塔とは形態・焼成が異なる。須恵器質で、焼成やや甘く、灰白色を呈する。胎土は微細で、チャート小片をわずかに含み、各務廃寺跡出土の須恵器と同様である。美濃須衛窯跡の製品の特徴と一致する。相輪部を欠損し、五重小塔と推定される。基壇が表現され、中実である。大きさが異なるものの、岐阜県各務原市船山北5号窯跡出土の小塔（第152図13）と形態が類似する。
8. 岐阜県各務原市美濃須衛窯跡群船山北5号窯跡出土の五重小塔（岐阜県文化財保護センター, 2000; 第152図13・14; 註30）
相輪部を欠損するがほぼ完形の五重小塔（第152図13）と相輪部、基壇を欠損する中空で層数不明の小塔（第152図14）とがある。前者は中実で、現存高7.9cm、基壇径5.7cm、初重屋根径5.5cmと小型である。後者は現存高5.9cmで、最大屋根径7.8cmと前者よりやや大きい。須恵器質だがいずれも生焼けで、灰白色をしている。泥塔と報告されているが、須恵器窯製品であり、形態的にみても泥塔とは異なる。8世紀末頃に位置付けられている。
9. 岐阜県大垣市美濃国分寺跡出土の七重小塔（八賀, 1972; 第152図15）
基壇をもつ七重小塔。総高22.9cm。基底部径14.1cm。一萬節塔を模倣したものともみられている。しかし、總高は一萬節塔の約1/2と小さいにもかかわらず、塔身部径は大きく、屋根径も大きい、基壇高が低く、基壇径が大きい、屋根間の高さが低い、相輪部の形態が似ていない、中空であるなど、一萬節塔とはかなり異なっている。
10. 富山県立山町上末窯谷1号窯跡第5次操業出土の三重小塔（富山大学人文学部考古学研究室編, 1989; 第152図16）
三重小塔と推定され、初重・二重に6単位の斗拱がT字形に表現されている。塔身部、屋根が円形である点は他の例と共通するが、組物が表現されている点は異なる。總高8.8cm以上、基部径7.3cm。初重屋根径12.2cm。8世紀末～9世紀初め頃に位置付けられている。
11. 出土地不明、山形県鶴岡市致道博物館所蔵の三重小塔（石田, 1969）
須恵器質の三重小塔で、相輪部と基壇部を欠損する。内部は中空となっている。現存高11.2cm。写真のみで、実測図は公表されていない。



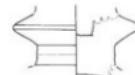
1. 法隆寺 木造百萬塔



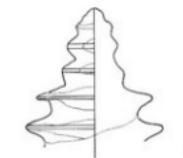
2. 宮城県新田道跡 三重小塔



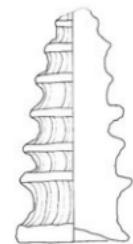
3. 平城宮跡 三重小塔



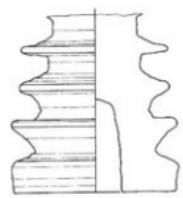
4. 千葉縣川原井廃寺跡



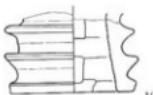
5.



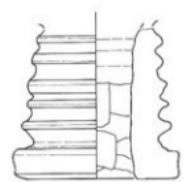
9.



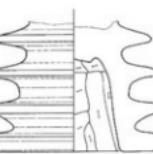
6.



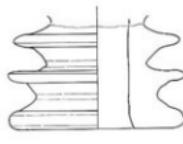
10.



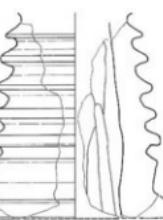
7.



11.

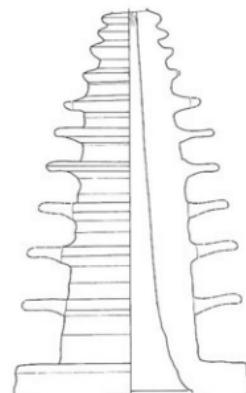


8.

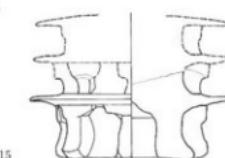


12.

5~12: 岐阜縣各務廃寺跡



16. 富山縣美濃國分寺跡



17. 富山縣上末窯谷1号窯跡

0 50 100%
縮尺1/3

第152図 三重小塔関連遺物の集成

	三重小塔	百萬塔	
製作契機	百萬塔の模倣と考えられる。	天平宝字8(764)年9月の藤原仲麻呂の墓石後、称極天皇の発掘によると。	
安置場所	新田造跡より当時の床板間に埋められた。後続するSB7建物の遺構に伴う地盤の可能性がある。	法隆寺など大寺方に百萬塔が2つ置かれて、諸大寺では百萬塔を安置するための小供養などの施設を作ることで、正隆寺では百萬塔、相輪部が26.054余基ほどある。平城宮の内裏東方斜線排水路SL2700からも「百点出土」(奈良県立文化研究所、1987・1988)、平城宮内裏にも一部安置されていたとみられている。	
製作年代	桃生城有縫跡(大平宝字2(758)年頃～宝字5(774)年7月)の8世紀前半とされる。百萬塔を安置するための施設を作った頃は天平宝字8(764)年9月よりやや遅れた頃、SB7建物との関係を考慮に入れるに、700年代後半から720年代終め頃に製作されたものと考えられる。	法隆寺に現存する百萬塔は、天平神壽3・神護寶元(767)年～神護寶元2(768)年に作成する。上層は天平宝字8(764)年9月の藤原仲麻呂の墓石後、ト闐室(宝龕)1700年4月26日条の百萬塔完成記事で、その間約5年。	
材質	須恵器質。	木製(塔身部はヒノキ、相輪部はサクランボやサカキ、シンドンを用いる)。	
総高	18.3cm。	* 平均高21.5cm。	
作り方	ロクロ成形による塔身部と相輪部の一体造。	木工用横植縫縫を用いる。塔身部と相輪部を別々に作った組立式。	
製作者	須恵器工人。	平城宮内裏などの官宦工房の木工職種工人。墨書きされた工人は250余人(金子、1994)。	
往上げ	胡粉(白土)を塗布していない。	胡粉(白土)を全面に塗布。	
塔身部高	10.9cm。	* 平均高13.21cm。	
基部最大径	7.8cm。	10.5cm。	
星型の数	二重(太田(1984)、中川編(1990)に準じ、下から星番、二重、三重と呼ぶ)。	三重(太田(1984)、中川編(1990)に準じ、下から星番、二重、三重と呼ぶ)。	
星型の形状	平面は円形。断面は豊賀玉状。瓦や組物は表現されていない。	平面は円形。断面は上が大きくて下が小さい扁平な台形状で、上面端部近くがやや深くで底部を中心とする。瓦や組物は表現されていない。	
初重屋根径	7.8cm。	* 平均9.20cm。	
二重屋根径	7.9cm。	* 平均8.40cm。	
三重屋根径	6.8cm。	* 平均7.62cm。	
軸部断面の形状	円形。	円形。	
山の表現	初重軸部の1箇所に長方形の透かしで表現。	扉は表現されていない。	
初重軸部の大きさ	高さ4.3cm、最大径7.8cm。	高さ約1.8cm、最大径約5.4cm。	
二重軸部の大きさ	高さ1.8cm、最大径5.4cm。	高さ約1.8cm、最大径約4.7cm。	
三重軸部の大きさ	高さ1.3cm、最大径4.9cm。	高さ約1.8cm、最大径約4.0cm。	
基壇の有無、形状と大きさ	基壇は表現されていない。	基壇は表現されている。円錐台状。基壇基部平均径10.50cm、基壇平均高1.08cm、基壇上部平均高9.84cm。	
初重屋根までの高さ	5.1cm。	* 平均6.33cm。計測表の(B-A)による。	
初重屋根・二重屋根間	2.9cm。	* 平均6.33cm。計測表の(C-B)による。	
二重屋根・三重屋根間	2.1cm。	* 平均6.21cm。計測表の(D-C)による。	
内部の孔位置と大きさ	初重軸部底面から上方に向けて、下径4.5cm、深さ11.4cmの孔を2箇所に割り抜く。	塔身部の第3初重屋根上から下方に向けて、* 平均上径2.25cm、* 平均深さ8.33cmの2箇所を円錐台状に割り抜く。	
内部への埋納	不明。中に入っていた土を慎重に引き分け、芯にかけたが、何も入っていないかった。	印加された須恵器作先人(陀羅尼作(6種あるうちの根本、心、相輪、六瓣の6種類))を軸轆身の内部に納めた。軸轆頂には相輪部で蓋をするものと、軸轆削り後のノミ駒頭を残すものとかある。後者が時期的に行なった。	
塔身部の作り方	粘土層を巻き上げ。ロクロ成形している。初重軸部には長方形の透かしを入れ、透かし周囲と下部底面を手持ちヘラケシりしている。	軸轆削りで製作されている。上に一本芯だが、組立式のものもある。軸轆底面に軸轆削りの跡がある。底面には輪郭線で輪郭を引いて軸轆を束むのと、軸轆削り後のノミ駒頭を残すものとかある。後者が時期的に行なった。	
相輪部	相輪部高	7.2cm。	* 平均総高8.53cmで、相輪部に入れられる?を除いた高さは * 平均7.80cm。
	相輪部の細部表現	頂部の宝珠のみ表現され、蓮花、宝輪、伏鉢、露盤は表現されていない。	上から順に宝珠、小・大二重の説花、五重の宝輪(宝輪を施築化)、説花、伏鉢、露盤が表現されている。
	宝珠の形状と大きさ	低い立体形で、須恵器の宝珠つまり類似する。径2.4cm、高さ1.4cm。	宝珠の高さがあり、宝珠先端が尖って長く延びている。* 平均径1.34cm、高さ約2.8cm。
	相輪部基部径	3.9cm。	相輪部基部は露盤となる。* 露盤平均径2.50cm。
	宝珠直下の最上階花蓮	宝珠直下の最上階花蓮にある塔身の径は1.3cm。	* 平均1.92cm。
相輪部	相輪部の作り方	ロクロ成形による塔身部と相輪部の一体造。	軸轆削りで製作されている。上に一本芯だが、組立式のものもある。

表9 三重小塔と百萬塔の比較

*は金子裕之、1991「百萬塔」「法隆寺の宝室 第5巻 百萬塔・陀羅尼経」p.93の計測表による。

本遺跡の三重小塔と最も類似する資料は、法隆寺に伝世する木造百萬塔(第152図1)と平城宮跡から出土した須恵器質の小塔(第152図3)である。後者は屋根の形態が百萬塔と酷似するが、全体の形状が不明確である。上記遺跡出土の小塔の多くは、木造百萬塔とは形態・大きさが異なり、全体の形のわかるものも少ない。須恵器質の小塔では本遺跡から出土した三重小塔のみが完形で、最も百萬塔

に類似している。

2) 三重小塔と百萬塔との比較検討

本遺跡の三重小塔（第152図2）と百萬塔（第152図1）とを比べると（表9）、屋根・軸部が円形の三重小塔であり、ロクロ成形されていること、瓦が表現されていないこと、法量が近似することなど類似点が多い。ただし、須恵器質の焼き物であること、相輪部の表現が簡略化されていること、屋根の大きさが初重・二重・三重と順に小さくならないこと、屋根の断面形が算盤玉状であること、初重の軸部に長方形の透かしが4箇所開けられていること、基壇が表現されずに、内部が基壇底面から中空に割り抜かれていること、仕上げに胡粉（白土）が塗布されていないことなどは百萬塔と異なる。

須恵器質の焼き物で、須恵器窯で焼成されたとみられること、初重の軸部に長方形の透かしが4箇所開けられていることなどは瓦塔と共通している。しかし、瓦塔は総高が1m以上と大きく、法量がまったく異なるとともに、屋根・軸部が方形で、瓦や組物も表現され、木造塔をかなり忠実に小さくしたものである。本遺跡出土の三重小塔は瓦塔とは法量・形態が大きく異なる。

以上のように、本遺跡出土の三重小塔は百萬塔を模倣したものとみられるが、忠実には模倣していない。

桃生城存続期〔天平宝字2年（758）頃～宝亀5年（774）7月〕でも相対的に古いB-2期のS I 24堅穴住居跡から出土したことから、宝亀5年（774）7月よりも古いとみられる。また、百萬塔を模倣したものとみられることから、天平宝字8年（764）9月より古くはならない。

この三重小塔は、B-2期のS I 24堅穴住居跡埋土から、横倒しになった上に鉄鉢形の須恵器鉢B（第105図4）が被さった状態で出土した（第104図、巻頭図版2-2）。

鉄鉢形の須恵器鉢は、「从供養具」とみられ、僧尼や从教との関連の深い遺物である（中野、1976；兩宮、1983；兵、1997；考古学から古代を考える会、2000など）。

三重小塔が百萬塔を模倣したものとみられ、三重小塔と鉄鉢形の須恵器鉢がともに出土したことを考え合わせると、三重小塔と鉄鉢形の須恵器鉢を用いた何らかの供養（註31）が行われた可能性が高いと考えられる。

（2）珠文鏡

B-1期のS I 21堅穴住居跡埋土より珠文鏡が1点出土した（第65図51）。この鏡は鋒が進行し、遺存状態はかなり悪い。大きさは直径約7cmで、約3/4残存している。文様は外側から素縁、外向锯歯文、櫛歯文、二重圓線、一列に整然と配置された珠文、圓線となっている。鏡式は森下分類の珠文鏡2式、中山・林原分類、樋口分類の珠文鏡I類に相当し、古墳時代前期（4世紀代）に列島内で製作された倭鏡である（森下、1991；中山・林原、1994；樋口、1979、註32・33）。

ところが、この鏡が出土したB-1期のS I 21堅穴住居跡は、上限年代が桃生城造営期〔天平宝字2年（758）頃〕に位置付けられる。したがって、この珠文鏡は少なくとも300年間は伝世されてから埋められている。

本例のように、年代的にかけ離れた古墳時代の鏡が古代の竪穴住居跡から出土した例には、9世紀後半頃の埼玉県嵐山町大木前遺跡第5号竪穴住居跡から出土した彷彿二神二獸鏡、9世紀前半頃の千葉県千葉市下田遺跡第49号竪穴住居跡から出土した珠文鏡など、全国的にみてもごく少數例しかない（埼玉県埋蔵文化財調査事業団、2001）。今回、奈良時代の竪穴住居跡から出土した珠文鏡は、かなり珍しいものと言える。

新田東遺跡に古墳時代前期に属する古墳があったとは、これまでの周辺地域の状況からみてとても考えられない。塩釜式の竪穴住居跡が1棟（S I 16竪穴住居跡）のみ検出されたが、出土遺物は貧弱で、珠文鏡を保持していた集団に属していた可能性は低い。同型式の珠文鏡の北限である長野県を含めた中部・関東地方から、奈良時代になんでもたらされたものとみる方がより自然な解釈である。この珠文鏡については、桃生城の造営にあたり、関東地方から強制移住させられた柵戸や鎮兵などが伝世してきた可能性が高いと考えておきたい。

なお、珠文鏡と同じく S I 21竪穴住居跡埋土からガラス小玉が1点出土したが、成分分析の結果からみて古墳時代のもので、珠文鏡とほぼ同年代のものとみられる。

第6章 まとめ

1. 古墳時代、奈良時代、平安時代の集落が検出された。他に縄文時代前期の土壙1基、遺物包含層1箇所、近世以降の石組井戸跡1基、石組暗渠・開渠1条、平場1箇所が検出された。
2. 奈良時代のB期集落は、西に隣接する城柵官衙遺跡の桃生城を支えるために、律令政府の辺境政策に基づいて陸奥国内や関東諸国などから動員・移住された柵戸や鎮兵の集落跡である。
3. 奈良時代のB期集落は、桃生城造営期の天平宝字2年（758）年頃～廃絶期の宝亀5年（774）7月までのもので、掘立柱建物跡14棟、竪穴住居跡29棟以上からなる。竪穴住居跡29棟のうち、20棟は人為的に埋め戻されており、桃生城造営期または存続期のものである。また、焼失した7棟、自然堆積して廃絶した2棟は、桃生城廃絶期の宝亀5年（774）7月頃のものとみられる。掘立柱建物跡を中心にみると4小期の変遷がある。各小期には複数の竪穴住居跡の存在が推定されるが、特定できない。
4. B期の竪穴住居跡には関東系のカマドがあり、北関東系の須恵器高台壺・甕も出土している。遺構・遺物から『統日本紀』にみえる関東からの鎮兵や柵戸の存在を裏付けることができた。
5. B期の竪穴住居跡から馬具が出土し、『統日本紀』にみえる騎兵や軍毅などの存在を裏付けることができた。
6. 平安時代のC期の集落は、宝亀5年（774）7月の桃生城廃絶から約100年後的一般集落であり、2小期に分けられる。

註

註 1 愛知県陶磁資料館主任学芸員の井上喜久男氏に御教示いただいた。器形・調整・胎土・鉄錆軸・焼成の特徴などからみて瀬戸窯製品であり、井上編年（1994）の登窯V期〔1716～1743年、享保～寛保年間〕、藤沢編年（1998）の瀬戸窯第2段階第6小期（18世紀前葉頃）のものであるという。御教示に感謝いたします。

註 2 I群土器の可能性のある土器が出土した遺構・層位には、S I 11B 烧失堅穴住跡堆積土、S B 3・4・5・7・8・10・12・14掘立柱建物跡掘方、S B 5・6・10・11・12掘立柱建物跡抜取穴、S B 1・2・3・4・6・7・9掘立柱建物跡柱痕跡、S E 2 井戸跡掘方・自然堆積土、S K 3・5・6～8土壤がある。また、I群土器を設定した基準資料に含まれていないが、I群土器に相当する資料に含まれている類型には、土師器坏I A 1・I A 2・I C 2類、高坏I類、鉢II類、須恵器坏B 1・E類、高坏A類、盤、蓋A 1 b・A 1 c・A 2類、鉢B類がある。

註 3 II A群土器を設定した基準資料に含まれていないが、II A群土器に相当する資料に含まれている類型には、土師器高台坏II A類がある。なお、土師器坏I類・壺I類、須恵器坏A 3類がこれら的一部から破片で少數出土したが、II A群土器よりも古い時期のI群土器が混入したものとみられる。

註 4 II B群土器の可能性のある土器が出土した遺構・層位には、S I 37A 積穴住跡周溝、S I 40A 積穴住跡周溝・主柱穴抜取穴、S I 40B 主柱穴掘方、S X 1 遺物包含層がある。また、II B群土器を設定した基準資料に含まれていないが、II B群土器に相当する資料に含まれている類型には、土師器壺II類がある。なお、土師器坏I類・壺I類、須恵器坏A 3類がこれらの遺構の一部から破片で少數出土したが、II A群土器よりも古いI群土器が混入したものとみられる。

註 5 本遺跡のI群土器に含まれていた須恵器のうち、桃生城跡 S B 17西脇殿出土土器群に含まれない須恵器の類型には、坏A 1・A 2・B 1・B 3・B 4・C 1・C 2・D 2・E類、高台坏A 2・B 1・C類、高坏B類、盤、蓋A 1 a・A 1 b・A 2・B類、鉢B類、壺A 1・B 1類、壺C類、円面鏡がある。前述のように、これらの多くはI群土器の中で少數含まれていた類型であり（表5、第135図）、これらが含まれていないことは大きな差異ではないと考えられる。

註 6 本遺跡出土の須恵器坏A 3類と桃生城跡西脇殿出土の須恵器坏A 3類について、Microsoft社のExcel2000を用いて口径、底径、器高、底径／口径比、器高／口径比、器高／底径比、外傾度の属性表を作成し、商用の汎用統計ソフトSTATISTICA Version99j（開発元：米StatSoft社、日本法人：スタッフソフト・ジャパン株式会社）の学習用機能限定版STATISTICA BLUE BACKS Special Version（新村秀一、2002）にその属性表を読み込んでデータ解析した。結果は下記の表のとおりである。この表の中央値（Q2）は測定値を小さい順に並べた時の中央の値、第1四分位点（Q1）は同様に25%の値、第3四分位点（Q3）は同様に75%の値を指す。中央値を中心とするQ1からQ3までの間に計測値の50%が入り、中央値がこれらの計測値を代表している。点数の少ない桃生城西脇殿の数値は、いずれも新田東遺跡の中央値を中心とする50%の範囲内に入り、両者の法量が類似していることがわかる。

須恵器坏A 3類	計測数	平均	中央値(Q2)	最小値	最大値	第1四分位点(Q1)	第3四分位点(Q3)	四分位点範囲	標準偏差
口径	31点 9点	14.7cm 14.8cm	14.6cm 14.8cm	13.3cm 14.0cm	16.6cm 15.6cm	14.1cm 14.6cm	15.4cm 15.2cm	1.3cm 0.6cm	0.844349 0.516667
底径	43点 12点	8.4cm 8.3cm	8.4cm 8.3cm	7.0cm 9.3cm	11.0cm 7.6cm	7.8cm 8.0cm	9.2cm 8.6cm	1.4cm 0.7cm	0.890021 0.487029
器高	30点 9点	4.15cm 4.3cm	4.25cm 4.2cm	3.1cm 4.0cm	5.2cm 4.5cm	3.9cm 4.2cm	4.4cm 4.3cm	0.5cm 0.1cm	0.450861 0.166667
底径／口径	9点	0.567 0.565	0.568 0.575	0.493 0.487	0.652 0.628	0.531 0.544	0.603 0.582	0.072 0.037	0.044904 0.040864
器高／口径	30点 9点	0.282 0.288	0.285 0.284	0.220 0.272	0.333 0.307	0.265 0.281	0.301 0.298	0.053 0.017	0.026396 0.012278
器高／底径	30点 9点	0.500 0.565	0.511 0.575	0.344 0.487	0.614 0.628	0.450 0.544	0.538 0.582	0.090 0.037	0.054945 0.040864
外傾度	30点 9点	52° 53°	52° 53°	46° 48°	59° 57°	51° 57°	55° 55°	4.5° 5°	3.525249 3.077016

新田東遺跡・桃生城西脇殿出土の須恵器坏A 3類の法量比較（上段：新田東遺跡、下段：桃生城跡西脇殿）

註7 I群土器を出土し、基準資料に用いた竪穴住居跡のうち、焼失したS I 8・34D竪穴住居跡は宝龟5年（774）7月の桃生城廃絶期に位置付けられ、I群土器を出土した他の遺構よりも年代的に新しいとみられる。

3回建て直されたS I 34D竪穴住居跡のうち、当初のS I 34A竪穴住居跡には丸底の土師器環I A 1類が含まれている（第137図下）。また、焼失した最後のS I 34D竪穴住居跡には丸底の土師器環I A類が含まれず、平底の土師器環I C 1類と土師器碗I B類が含まれている（第139図）。層位の関係からみて、土師器環の丸底（I A類）から平底（I C類）への転換が新旧関係として把握される。これらS I 8・34D焼失竪穴住居跡出土土器をI群土器の中でも新しい土器様相としてみることができる。

一方、S B 2・9・11掘立柱建物跡と重複してこれらより古いS I 21竪穴住居跡については、S B 2・9・11掘立柱建物跡からもI群土器が出土したことから、I群土器を出土した遺構の中より古い遺構であり、そこから出土した土器（第136図上段）はI群土器の中でも古い様相のものととらえることができる。土師器環は丸底気味のI B類に限られ、土師器高环を含む。土師器高环は新しい土器様相を示すS I 8・34D焼失竪穴住居跡に含まれず、土師器環I B類はS I 34D焼失竪穴住居跡に含まれていない。量的に少ないため、断定できないが、土師器環I B類、土師器高环もI群土器の中でより古い様相のものとみることができるものとみるかもしれない。

註8 底部が回転糸切りで切り離されたままの須恵器環、土師器環は宮城県内では9世紀後葉頃に一般化している。

註9 第2群土器の基準資料には、多賀城市高崎遺跡第11次調査S X1080土器廐棄土壙出土土器群（千葉・伊藤、1995；高野、1991）。多賀城市山王遺跡第9次千刈田地区S X543土器廐棄土壙出土土器群（石川・相沢、1991）がある。

註10 在地・関東系というカマドの相違に関わらず同じ土器様相であることを併せ考えると、この太田窯跡の製品が官給品として本遺跡に居住した人々に支給された可能性がある。その一方で、次項で述べるように、北関東系の須恵器高台环・甕が両者のタイプの竪穴住居跡から若干出土している（S I 2・8・21・27竪穴住居跡）。このことは竪穴住居の構築者と居住者が必ずしも一致していなかったことを示唆している。

註11 脚部に透かしのある須恵器高环は、関東では茨城県新治窯跡群（赤井、1997a・b）などで知られ、岐阜県美濃須衛窯跡群（齊藤・後藤編、1995）にも多く認められる。

註12 体積はS I 8竪穴住居跡では約2.5m³、S I 34D竪穴住居跡では約2.1m³で、埋蔵文化財関係で一般的に用いられているテン箱（内法54cm×34cm×15cm）に換算すると、S I 8竪穴住居跡では約92箱分、S I 34D竪穴住居跡では約76箱分となる。固く焼き締まった焼土塊にはスサを含んでいなかった。この層直下の床面上には炭化材があり多く認められず、上部に炭化物の薄い層は認められなかった。そしてS I 8・34D竪穴住居跡とも壁際が周溝状に掘削され、その掘方が埋められ、上部が座んだ状態で火災に遭っていた。また、S I 8竪穴住居跡のカマド前には暗渠が設けられ、この暗渠も掘方が埋められて、上部が座んだ状態で火災に遭っていた。

註13 S I 34D竪穴住居跡の火災後に流入した堆積土からはスサを含まない焼けた駆土片が少量出土している。S I 8焼失竪穴住居跡については、壁と土葺き屋根をもつ構造であったと考えられる。

註14 土葺き屋根をもつ古墳時代～平安時代にかけての竪穴住居跡については、群馬県下での検出例が多く、中筋遺跡・黒井峯遺跡・荒神前遺跡などの例が集成されている（深澤、1992）。また、竪穴住居跡の覆土モデルと上屋・埋没過程モデルについての論考もある（江口、1998）。本遺跡の焼失竪穴住居跡の構造を考える上で参考にさせていただいた。

註15 宮城県内では、①6世紀末～7世紀初頭頃の仙台市大年寺山第10号横穴の鍔・轡・引手・革金具（佐藤・菊地編、1990）、②利府町郷楽遺跡第107号住居跡出土の8世紀後半頃の鉄製U字状吊手金具（庄子他、1990）、③多賀城跡第66次調査S K2321土壤第10層出土の8世紀後葉頃～9世紀初頭頃の双環状鏡板付簪（柳澤・白崎編、1996）、④仙台市中田畑中遺跡第54号土坑出土の9世紀代と推定される壺鏡鏡軸金具（太田編、1994）、⑤多賀城市市川橋遺跡河川跡出土の10世紀前葉頃の鉄製壺鏡（多賀城市埋蔵文化財センター、2000）など、数遺跡から馬具が出土している。このうち、②の利府町郷楽遺跡第107号住居跡出土例は、本遺跡出土の壺鏡金具と形態が類似し、年代も本遺跡

に近い。また、③の多賀城跡第66次調査S K2321土壤第10層出土例に取り付けられている引手は本遺跡例と類似している。本遺跡の轡も同様の環状鏡板付轡であったとみられる。

註16 木心金属張三角錐形蓋鏡について、古墳時代の出土例（斎藤、1986；花谷、1991；富永、2002）が集成されている。奈良・平安時代のものは出土馬具自体きわめて少ない（大谷、1984；瀧瀬、1994・1997；小島、1997）。また、古代の木製轡についても出土例が少ない（永井、1996）。鉄製U字状吊手金具は、平安時代などの遺構からの出土例も少數知られているが（大谷、1984；原他、1989；太田編、1994；瀧瀬、1997；山口編、1999など）、木製舌長鏡に取り付く金具と推定されており（原他、1989）、これらの共伴関係や年代、取り付けられる木製鏡の形態などについて、今後さらに検討する必要がある。

註17 3方向に革帯を引っ張る構造の辻金具には、正倉院中倉宝物の金銀泥絵鞍（第1号鞍）、素地牛久木鞍（第2号鞍）の胸懸の辻金具がある（正倉院事務所編、1976・1994；日本馬具大鑑編集委員会編、1991）。これらは水晶・琥珀が嵌装された金銅製の優品で、3本の革帶は先金具・平環・締金具でそれぞれの脚と結合され、鍛留めはされていない。馬形埴輪の例では面懸の辻金具は3方向ないし4方向に引っ張る構造のもので（増田、1960；太田、1999；徳江編、1998）、尻懸の辻金具は4～6方向に引っ張る構造のものである。

註18 本遺跡の隣接する桃生城の造営にあたり、「続日本紀」天平宝字2年（758）12月8日条には坂東の騎兵、「続日本紀」天平宝字3年（759）9月26日条と「続日本紀」天平宝字4年（760）1月4日条には軍団を統括した軍毅がみえ、騎兵や騎乗した武官が存在したことを示している。

註19 銃であるならば、軍防令備戎具条には兵士10人ごとに備えるべき火具の一つとして銃1点が規定されており、本遺跡の性格を考える上で注目される。

註20 群馬県松井田町愛宕山遺跡第4号焼失竪穴住居跡出土の8世紀末～9世紀初頭頃（天平宝字4年（760）初鈔の万年通寶が共伴、土器からの年代推定）の銃（徳江、2000）、埼玉県上里町中堀遺跡出土の平安時代の銃（瀧瀬、1997）など、少數例が知られているにすぎない。

註21 桃生城跡が宝亀5年（774）7月の後に再建されていないことについて、鈴木拓也氏はその直後の宝亀5年（774）10月に按察使兼鎮守將軍の大伴駿河麻呂が遠山村を攻撃して制圧し、宝亀7年（777）頃より海道蝦夷から山道蝦夷に律令政府の攻撃目標が絞られてくることから、宝亀5・6年の征討によって遠山村を中心とする海道蝦夷がほぼ制圧され、そこに桃生城に代わる海道蝦夷の支配の拠点として中山柵が設置されたと推定している（鈴木、1998）。桃生城より北に位置する中山柵の設置によって、桃生城は前進基地としての役割を終え、再建されなかつたとみられる。そして、桃生城を支えた本遺跡のB期集落も廃絶したとみられる。

註22 B期集落の出現と廃絶のあり方は突然であり、隣接する当時最北の城柵・桃生城の存廃と同一歩調を取ったものとみられる。また、このことは桃生城を支えるために律令政府の辺境政策に基づいて陸奥国内や関東諸国などから勤員・移住された柵戸や領兵の集落である本遺跡の性格をよく示している。

註23 B-1期の上限年代については、桃生城が造営された天平宝字2年（758）頃、B期の下限年代は桃生城が海道蝦夷の襲撃によって焼失した宝亀5年（774）7月とみられる。B期の存続年代は桃生城存続期〔天平宝字2年（758）頃～宝亀5年（774）7月〕の17年間とみられ、この間に少なくとも4小期の変遷があることになる。各小期を通じて存続した竪穴住居跡などもあると予想されるが、1小期は平均4年と短く、短期間のうちに変遷している箇所もあることがわかる。

註24 東海地方の出土品については、愛知県陶磁資料館の井上喜久男氏と岐阜県各務原市埋蔵文化財調査センターの渡辺博人氏に御教示いただいた。また、奈良国立文化財研究所の金子裕之には百萬塔全般にわたって御教示いただいた。御教示に感謝申し上げます。

註25 法隆寺百萬塔（第153図1）は金子（1991）掲載図を筆者が再トレースしたものである。誤りがあればすべて筆者の責任である。また、卷頭図版2-1左側の百萬塔は東北歴史博物館所蔵のもので、本遺跡出土の三重小塔と並べ

て撮影させていただくとともに、掲載を快諾していただいた。東北歴史博物館の御配慮に感謝申し上げます。

註26 平城宮跡出土資料（第153図3）については、須恵器の器蓋として概報（奈良国立文化財研究所、1996）に報告されたものである。資料調査にあたって奈良国立文化財研究所、金子裕之・宍道一郎・金田明氏の御配慮をいただき、ともに実見して本遺跡の三重小塔と同様の三重小塔の一部としてみた方がよいとの結論に達した。そして、後日に金田氏が改めて実測された実測図を提供していただき、柳澤がトレースしたものを提示した。誤りがあればすべて筆者の責任である。関係者各位の御配慮に感謝申し上げます。

註27 千葉県袖ヶ浦町川原井廃寺跡出土資料（第153図4）については、報告書掲載図を上下逆にみて裏トレースした。誤りがあればすべて筆者の責任である。

註28 岐阜県各務廃寺出土小塔（第153図5～12）は、各務原市埋蔵文化財調査センターで実見し、「各務原市史」掲載の図に一部加筆・修正して再トレースした。そのうち第153図11は未公表資料で、筆者が略測図をとらせていただいた。誤りがあればすべて筆者の責任である。各務原市埋蔵文化財調査センターの御配慮に感謝申し上げます。

註29 山田寺跡出土小塔（第153図13）は、各務原市埋蔵文化財調査センターで実見させていただき、「各務原市史」掲載の図に一部加筆・修正して再トレースした。各務原市埋蔵文化財調査センターの御配慮に感謝申し上げます。

註30 岐阜県文化財保護センターで実見させていただいた。御配慮に感謝申し上げます。

註31 百萬塔の造立根据となった「無垢淨光大陀羅尼經」には、建立した仏塔の前に「方壇」を作つて供養する呪法が述べられ、その際に「五色鉢」「五鉢」「供養鉢」「五供養鉢」が用いられている（新脩大正藏經刊行会編、1928, pp.718～720；千早、1908）。

註32 大手前大学の森下草司氏に珠文鏡全般について御教示いただいた。感謝申し上げます。

註33 これまで見つかった珠文鏡は、1994年段階の集成によると、全国で約250例ある（中山・林原、1994）。珠文鏡には珠文が一列に並ぶもの、二列に並ぶもの、三列以上乱雑に配されるものなどがある（樋口、1979；小林、1979；森下、1991；今井、1991）。珠文鏡の北限は、福島県会津坂下町森北1号墳（吉田編、1999）と福島県原町市桜井古墳群上浜佐支群7号墳（鈴木編、2001）で、これらは珠文が二列に並ぶ型式である。今回見つかった珠文鏡と同様に珠文が一列に並ぶ型式の珠文鏡は、群馬県に2例、長野県に6例、東京都に1例、岐阜県1例、大阪府に1例、兵庫県に2例、広島県に1例、徳島県に3例、愛媛県に2例、福岡県に1例、熊本県に1例など21例以上がある（白石・設楽編、1994；今井、1991；西山、1997；中山・林原、1994）。このうち、長野県長野市川柳将軍塚古墳（森本、1929；後藤、1977；岩崎、1982）、同川田条里遺跡・篠ノ井遺跡群（西山、1997）、古墳時代前期の群馬県甘楽郡甘楽町天引向原遺跡20号住居跡（右島編、1994）、群馬県佐波郡赤堀町今井南原古墳群（群馬県立博物館、1980）がこれまで北限であった（白石・設楽編、1994；西山、1997；中山・林原、1994）。珠文鏡の分布を考える上でも、今回出土した珠文鏡は貴重である。

なお、宮城県内でこれまで見つかった古墳時代の鏡は9例（①四獸形鏡：伝古川市日光山古墳群、②重圓文鏡？：色麻町御山古墳、③六獸形鏡：仙台市一塚古墳、④乳文鏡：仙台市裏町古墳、⑤捩文鏡？：仙台市南小泉遺跡、⑥捩文鏡：角田市吉乃内1号墳、⑦六鈴六獸形鏡：丸森町孤塚古墳、⑧六鈴七獸形鏡：丸森町台町20号墳、⑨内行花文鏡：丸森町台町20号墳）だが、珠文鏡はない（藤沢、1994）。

引用文献（あいうえお順）

相沢清利 1999 「東北地方縄文文化小考」『宮城考古学』第1号 pp.55～65

相原淳一 1986 「第1群土器」『田柄貝塚』（宮城県埋蔵文化財調査報告書第111集）

相原淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年」『考古学雑誌』76-1 pp.1
～65

- 赤井博之 1997 a 「新治窯跡群東城寺桑木窯跡探集須恵器の新資料」『茨城県考古学協会誌』第9号 pp.95~110
- 赤井博之 1997 b 「新治窯跡の基礎的研究－奈良・平安時代の須恵器編年について－」『土曜考古』第21号 pp.9~15
- 吾妻俊典・阿部恵編 2002 『桃生城跡X』(宮城県多賀城跡調査研究所 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第27冊)
- 阿部恵・佐藤和彦編 1995 『桃生城跡III』(宮城県多賀城跡調査研究所 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第20冊)
- 阿部恵・佐藤和彦編 1996 『桃生城跡IV』(宮城県多賀城跡調査研究所 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第21冊)
- 阿部恵・佐藤和彦編 1997 『桃生城跡V』(宮城県多賀城跡調査研究所 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第22冊)
- 阿部恵・佐藤和彦編 1998 『桃生城跡VI』(宮城県多賀城跡調査研究所 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第23冊)
- 阿部恵・佐藤和彦編 1999 『桃生城跡VII』(宮城県多賀城跡調査研究所 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第24冊)
- 兩宮龍太郎 1983 「古代村落と仏教磁鉢をめぐる人々」『千葉県埋蔵文化財センター研究連絡紙』第2号 pp.9~15
- 石川俊英・相沢清利 1991 『山王遺跡－第9次発掘調査報告書一』(多賀城市文化財調査報告書題26集)
- 石田明夫 1994 『会津大戸窯－大戸窯跡群発掘調査報告書〔遺物編〕一』(会津若松市文化財調査報告第37号)
- 石田茂作 1969 『日本佛塔』
- 石巻市教育委員会 1993 「北海道系の土器（続綱文土器）が発見されました」『石巻市文化財だより』第22号
- 石守晃 1995 「復元住居を用いた焼失実験の成果について」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』12 pp.95~106
- 石守晃 2001 「復元住居を用いた焼失実験 再び」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』19 pp.95~104
- 井上喜久男 1994 「尾張陶磁(4)一江戸中期の瀬戸物編年一」『愛知県陶磁資料館研究紀要』13 pp.27~51
- 今井堯 1991 「中・四国地方古墳出土素文・重圓文・珠文鏡－小型倭鏡の検討－」『古代吉備』第13集 pp.1~26
- 岩崎卓也 1982 「川柳將軍塚古墳・姫塚古墳」『長野県史考古資料編 全1巻 主要遺跡（北・東信）』 pp.340~347
- 氏家和典・桑原滋郎・平川南徳 1976 『桃生城跡II』(宮城県多賀城跡調査研究所 多賀城関連遺跡発掘調査報告書 第2冊)
- 江口志麻 1998 「豎穴住居復元のための一考察」『新潟県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第2号 pp.103~124
- 岡田茂弘・進藤秋輝他 1975 『桃生城跡I』(宮城県多賀城跡調査研究所 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第1冊)
- 岡安光彦 1984 「いわゆる「素環の櫛」について」『日本古代文化研究』創刊号 (PHALANX—古墳文化研究会— pp.95~120)
- 岡安光彦 1998 「古墳文化における地域性－九州地方出土の環状鏡板付櫛を中心に－」『駿台史学』第102号 (駿台史学会) pp.111~129
- 小川淳一編 1987 『五本松遺跡 都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書』(仙台市文化財調査報告書第99集)
- 太田昭夫編 1994 『仙台市中田南遺跡』(仙台市文化財調査報告書第182集)
- 太田博太郎 1984 『日本建築史基礎資料集成十一 塔婆I』
- 太田博之 1999 「千葉県烟沢埴輪窯出土馬形埴輪に見る面懸の構造」『古代』第107号 pp.77~89
- 大谷猛 1984 「住居址出土の馬具」『東京都教育委員会学芸研究紀要』第1集 pp.53~67
- 各務原市教育委員会編 1983 「第三章 歴史時代の遺跡・遺物 第二節 古代の寺院跡」『各務原市史 考古・民俗編 考古』 pp.475~512
- 加藤孝 1951 「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集』1 pp.183~199
- 金子裕之 1991 「百萬塔」『法隆寺の至宝－昭和資材帳－ 第5巻 百萬塔・陀羅尼経』 pp.90~113

- 金子裕之 1994 「百萬塔の工房」『官営工房研究会会報1 百萬塔工房をめぐる諸問題』(奈良国立文化財研究所) pp.1~26
- 川井正一 1988 「外面に同心円文叩き目を有する須恵器について」『婆良岐考古』第10号 pp.51~66
- 鬼頭清明 1991 「陀羅尼經」『法隆寺の至宝—昭和資材帳— 第5巻 百萬塔・陀羅尼經』 pp.114~117
- 岐阜県文化財保護センター 2000 『船山北古墳群・船山北窯跡群・船山北遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第52集)
- 工楽善道・金子裕之 1983 「百萬塔の調査から」『伊河留我 法隆寺昭和資材帳調査概要』1 pp.16~23
- 藏中進 1988 「慶州仏国寺発見『無垢淨光大陀羅尼經』と『百万塔陀羅尼』」『水門』16 (藏中進1995『則天文字の研究』 pp.271~286再掲)
- 群馬県立博物館 1980 『企画展 群馬の古鏡』
- 考古学から古代を考える会 2000 『古代仏教系遺物集成・関東』
- 小島敦子 1997 「群馬県における集落出土の馬具」『荒砥上ノ坊遺跡Ⅲ』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第223集 pp.159~162
- 小林三郎 1979 「古墳時代初期鐵製鏡の一侧面—重圓文鏡と珠文鏡—」『駿大史学』46 pp.78~96
- 後藤勝彦 1968 「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚(1)」『仙台湾周辺の考古学的研究』 pp.1~20
- 後藤秀一・吾妻俊典編 2000 『桃生城跡Ⅲ』(宮城県多賀城跡調査研究所 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第25冊)
- 後藤守一 1977 『古鏡聚英 上編』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2001 『大木前／小栗北／小栗／日向遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第259集
- 斎藤弘 1986 「古墳時代の葦鏡の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 pp.47~53
- 斎藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産—猿投窯を中心に—」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3—』(古代の土器研究会第3回シンポジウム) pp.109~120
- 斎藤孝正・後藤健一編 1995 『須恵器集成図録 第3巻 東日本編I』
- 酒井清治 1981 「房總における須恵器生産の予察(1)」『史館』第13号 pp.1~24
- 佐藤信行 1984 「宮城県内の北海道系遺物」『宮城の研究 I 考古学編』
- 佐藤則之・葵地芳朗編 1990 『大年寺山横穴群』(宮城県文化財調査報告書第136集)
- 庄子敦也 1990 『利府町郷跡II—仙塙道路関連遺跡発掘調査報告書—』(宮城県文化財調査報告書第134集、利府町文化財調査報告書第5集)
- 正倉院事務所編 1976 『正倉院の金工』(日本経済新聞社)
- 正倉院事務所編 1994 『正倉院寶物4 中倉I』(毎日新聞社)
- 白石太一郎・設楽博己編 1994 『国立歴史民俗博物館研究報告第56集 共同研究「日本出土鏡データ集成」2 弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成』
- 白鳥良一・阿部恵・後藤秀一・佐藤和彦・古川一明・吾妻俊典・白崎恵介 2002 「〈遺跡速報〉桃生城跡第1次~第10次発掘調査の概要」『考古学ジャーナル』No.494 pp.34~38
- 新村秀一 2002 『パソコン活用 3日でわかる・使える統計学 統計の基礎からデータマイニングまで CD-ROM付』(講談社BLUE BACKS)
- 鈴木拓也 1998 「古代東北の城柵と移民政策」『古代東北の支構構造』 pp.271~302
- 鈴木文雄編 2001 『櫻井市古墳群上池佐支群7号墳発掘調査報告書』(福島県原町市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集)
- 大正新脩大藏經刊行会編 1928 (1989普及版) 「No.1024 無垢淨光大陀羅尼經」『大正新脩大藏經 第19卷 密教部

- 二』 pp.717~721
- 多賀城市埋蔵文化財センター 2000 『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に伴う発掘調査報告2－』(多賀城市埋蔵文化財センター調査報告書第59集)
- 高野芳宏 1991 「高崎遺跡 井戸尻(今村氏)地区の調査」『多賀城市史 第4巻 考古資料』 pp.471~485
- 瀧瀬芳之 1994 「曹について」『川越市・日高市光山遺跡群』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第137集) pp.296 ~301
- 瀧瀬芳之 1997 「V 1(14)金属製品」『上里町中堀遺跡』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集) pp.1237~1271
- 千葉県文化財センター 1994 『千葉県文化財センター研究紀要14 生産遺跡の研究3－須恵器－』
- 千葉孝弥・伊藤浩 1995 『高崎遺跡－第11次発掘調査報告書一』(多賀城市文化財調査報告書第37集)
- 千早正朝 1908 『無垢淨光陀羅尼經 調貼和解 完』
- 東北学院大学考古学研究部 1979 「亀岡遺跡発掘調査報告」『温故』第12号
- 東北学院大学考古学研究部 1983 「宮城県志田郡次橋須恵器窯跡発掘調査報告」『温故』第13号
- 東北歴史資料館 1994 『里浜貝塚IX』(東北歴史資料館資料集36)
- 徳江秀夫編 1998 『綿貫鏡音山古墳 I 墳丘・埴輪編』(群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第242集)
- 徳江秀夫編 2000 『愛宕山遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第276集)
- 富水里菜 2002 「馬具の帶金具」「跨帶をめぐる諸問題」 pp.89~104
- 富山大学人文学部考古学研究室編 1989 『越中上末窯跡』(富山大学考古学研究報告第3冊)
- 永井宏幸 1996 「古代木製鏡小考－愛知県一宮市大毛沖遺跡出土例の位置付け－」『古代』第102号 pp.149~158
- 中川武編 1990 『日本建築みどころ事典』
- 中野政樹 1976 「供養具」『新版仏教考古学講座 第5巻 仏具』 pp.43~78
- 中山清隆・林原利明 1994 「小型微製鏡の基礎的集成(1)－珠文鏡の集成－」『地域相研究』21 pp.95~125
- 七尾市教育委員会 1994 『史跡能登国分寺跡整備事業報告書』
- 奈良国立文化財研究所 1996 「I 平城宮の調査 1 造酒司の調査」『1995年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』 pp. 4~21
- 西山克己 1997 「第4章第6節 1 青銅鏡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16－長野市内その4－篠ノ井遺跡群 成果と課題編』(長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書22) pp.91~100
- 日本馬具大鑑編集委員会編 1991 『日本馬具大鑑 第二巻古代下』(日本中央競馬会)
- 丹羽茂 1995 「Ⅲ. 現状変更に伴う調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1994 多賀城跡』 pp.55~110
- 花谷浩 1991 「鎧瓦考」「奈良国立文化財研究所研究論集IX』(奈良国立文化財研究所学報第49冊) pp.95~115
- 八賀晋 1972 「第六章第四節 美濃国分寺」『岐阜県史 通史編 原始』 pp.415~423
- 原明芳他 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3－塩尻地内－吉田川西遺跡』(長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3)
- 樋口隆康 1979 『古鏡』
- 深澤敦仁 1992 「「土葺屋根」構造を有する竪穴式住居址について」『群馬考古学手帳』vol.3 pp.35~44
- 藤沢敦教 1994 『宮城県』『国立歴史民俗博物館研究報告第56集 共同研究「日本出土鏡データ集成」2 萌生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成』 pp.12~15
- 藤沢良祐 1998 「第二章第六節 近世赤津村の窯業生産」『瀬戸市史 陶磁史篇六』 pp.266~280
- 兵ゆり子 1997 「V 1(8)鉄鉢形土器」『上里町中堀遺跡』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集) pp.1197 ~1207

- 増田精一 1960 「埴輪馬にみる頭絡の結構」『考古学雑誌』 pp.47~62
- 松村恵司 1988 「百萬塔調査の成果と課題」『伊珂留我 法隆寺昭和資材帳調査概要』 8 pp.20~31
- 右鳥和夫編 1994 『白倉下原・天引向原遺跡Ⅲ』(群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第173集・関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第26集)
- 光江章編 1986 『一千葉県袖ヶ浦町-東郷台遺跡(川原井廃寺)-南總ゴルフ場増設に伴う埋蔵文化財確認調査』(君津都市文化財センター発掘調査報告書第17集)
- 森下章司 1991 「古墳時代鏡製鏡の変遷とその特質」『史林』 72-5 pp.1~43
- 森本六爾 1929 『川柳村將軍塚の研究』
- 柳澤和明 1994 「II. 第64次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1993 多賀城跡』 pp.3~49
- 柳澤和明 2001 「桃生城跡の概要」『第27回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.77~100
- 柳澤和明 2002 「宮城県桃生郡河北町新田東遺跡」「第28回古代城柵官衙遺跡検討会資料集」 pp.65~74
- 柳澤和明・阿部忠編 2001 「桃生城跡IX」(宮城県多賀城跡調査研究所 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第26冊)
- 柳澤和明・白崎恵介編 1996 「II. 第66次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1995 多賀城跡』 pp.2~111
- 柳澤和明・白崎恵介編 1998 「II. 第68次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997 多賀城跡』 pp.7~77
- 山口耕一 1994 「北関東地域における茨城産須恵器について(上)-外面同心円状叩き目を有する須恵器を中心に-」『栃木県埋蔵文化財調査事業団・埋蔵文化財センター研究紀要』第2号 pp.109~130
- 山口耕一 1999 『多功南原遺跡』(栃木県埋蔵文化財調査報告第222集)
- 横田賢次郎 1983 「福岡県内出土の硯について」『九州歴史資料館研究論集』 9 pp.1~42
- 吉田博行 1999 「放射状区画をもつ珠文・乳文鏡について」『森北古墳群』(福島県会津坂下町教育委員会・創価大学) pp.139~150

付章1 新田東遺跡より出土した炭化材・種子の分析

吉川純子 (古代の森研究会)

1. はじめに

新田東遺跡は、宮城県河北町にある桃生城跡の東に隣接し、掘立柱建物跡、竪穴住居跡などで構成される大規模集落跡である。今回分析にあてた試料を出土した竪穴住居跡のうち、S I 8・34D竪穴住居跡は屋根に土が葺かれている8世紀第3四半期頃、奈良時代の焼失竪穴住居跡、S I 20竪穴住居跡は9世紀後葉頃、平安時代の焼失竪穴住居跡である。前者は桃生城跡が西暦774年に蝦夷により攻撃を受けた際に焼失したと推定されている。

同定に際しては、東北大学理学研究科教授鈴木三男氏にご指導を仰いだ。ここに記して感謝いたします。

2. 炭化材同定結果

試料は自然乾燥させた後、カッターや剃刀を用いて横断面、放射断面、接線断面を割り出し、反射顕微鏡で観察、同定した。同定結果を表1にまとめた。全18試料で広葉樹8分類群が認められた。以下に同定した分類群の木材解剖学的記載を行う。

1) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

図版1-1 a-c (No.7) : No.7 (S I 8), No.11, 12, 14 (S I 34D)

早材部では大型で丸い単独管孔1-2列配列し、晩材部でごく小型、薄壁で角張った管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は單一で放射組織は同性、單列小型のものと複合で大型のものがある。この大型の複合放射組織のため、コナラ属の炭化材は放射方向の割れ目が沢山出来る。また、薄片状に放射方向に割れてしまうため、残りの薄片状の横断面では複合放射組織が全く見えず、クリと誤同定されることがある。コナラ節には、ミズナラ、コナラ、カシワ、ナラガシワなどの種類がある。

2) コナラ属クヌギ節 (No.18) *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科

図版1-2 a-c (No.18) : No.18 (S I 34D)

早材部では大型で丸い単独管孔が1-2列配列し、晩材では厚壁で丸い小型の管孔が放射方向に比較的ルーズに配列する環孔材。道管は單一穿孔。放射組織は單列同性で小型と大型の複合放射組織がある。また道管の周りには周囲状板道管がある。年輪幅の広いものでは年輪界近くで小道管がかなり小さくなり、コナラ節との区別が困難な場合がある。

3) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

図版1-3 a-c (No.16) : No.4 (S I 20), No.5, 8, 9 (S I 8), No.16, 17 (S I 34D)

試料番号	高さ	道管類	層	位	明確
1	S I 20	C-1層	3層		キムノキ属
2	S I 20	C-1層	床面		ムクノキ近似種
3	S I 20	C 1層	3層		カエデ属
4	S I 20	C-1層	3層		クリ
5	S I 8	B網状木	床面		クリ
6	S I 8	B網状木	床面		ケヤキ
7	S I 8	B網状木	床面		コナラ属
8	S I 8	B網状木	内壁溝内		クリ
9	S I 8	B網状木	?		クリ近似種
10	S I 34D	B網状木	床面		ケヤキ
11	S I 34D	B網状木	床面		コナラ属
12	S I 34D	B網状木	床面		コナラ属
13	S I 34D	B網状木	床面		ムクノキ近似種
14	S I 34D	B網状木	内壁溝電離		コナラ属
15	S I 34D	B網状木	内壁溝内		モクレン属
16	S I 34D	B網状木	?		クリ
17	S I 34D	B網状木	?		クリ
18	S I 34D	B網状木	?		クヌギ属

表1 炭化材の樹種同定結果

年輪のはじめに大型で丸い単独管孔が1-数列配列し、晩材にいくにつれ徐々に径が小さくなる小型薄壁管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は單一、放射組織は同性で單列。試料のうちNo. 9は燃焼が激しかったらしく、保存が極めて悪い。

4) ムクノキ近似種 cf. *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科

図版1-4 a-c (No.13) : No.2 (S I 20), No.13 (S I 34D)

やや大型で厚壁の管孔が単独及び放射方向に2-3列複合してまばらに散在する散孔材。年輪界に近づくと管孔径はやや小さくなる。木部柔組織は周囲状と帶状。放射組織は異性で1~4細胞幅。ムクノキは放射組織の端の直立細胞に結晶がみられることが多いが、この試料ではみられなかったため、近似種とした。

5) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科

図版2-5 a-c (No.10) : No.6 (S I 18), No.10 (S I 34D)

大型の管孔が年輪のはじめに1-2列配列し、晩材では小型で薄壁の管孔が数個から十数個ずつ塊を作り斜め方向に連なる環孔材。道管の穿孔は單一で小道管にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性で上下端が直立細胞、幅は1-8細胞ほど放射組織の周りには大型の結晶がみられる場合が多い。

6) モクレン属 *Magnolia* モクレン科

図版2-6 a-c (No.15) : No.15 (S I 34D)

小さい道管が放射方向に2-3個複合して散在する散孔材。道管は穿孔が單一で壁孔が階段状、炭化材では階段穿孔に見える。年輪界にはターミナル柔組織がみられる。放射組織は1-2細胞幅で異性。道管はどちらかというと丸みが強く、ホオノキの可能性がある。

7) ネムノキ属 *Albizia* マメ科

図版2-7 a-c (No.1) : No.1 (S I 20)

大型で丸い管孔が単独または2個複合して2-数列集合し、晩材で徐々に径が小さくなりながら放射方向に2-3個複合して散在する環孔材。木部柔組織は年輪のはじめでは周囲状、晩材部では翼状から連合翼状。道管は單一穿孔。放射組織は同性で1-3細胞幅、きれいな紡錘形ではなくやや角張った感じである。

8) カエデ属 *Acer* カエデ科

図版2-8 a-c (No.3) : No.3 (S I 20)

小型で丸い管孔が単独または2、3個複合して散在する散孔材。道管は單一穿孔で内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は1-4細胞幅で同性。

3. 炭化種実同定結果

新田東住居跡からは、若干の炭化種実が得られたため、ここに同定結果を記す。S I 20 (C-1期) からはモモ核及びクリ炭化種子を出土し、S I 21 (B-1期) からはモモ核及び不明草本の地下茎を出土した。また S B6-P11 (B-3期) 及び S I 34D (B期終末) からはモモ核を出土した。

モモ炭化核の長さは最大19.7mmから最小13.3mm平均16.1mmと小さく、長さと幅の比は1:1.1ではほぼ円形に近い。モモ核は緻密で細胞が詰まっているため、炭化しても取縮が激しくではなく、サイズとしては現在のものと比較するとかなり小さく外形も丸い。クリ炭化種子の高さは最大15.4mm最小11.6mm平均11.12mm、幅は最大16.2mm最小12.4mm平均11.3mmであった。クリの種子は生では水分をかなり含み、空隙が多いので炭化するさいの収縮が激しいが、本遺跡で出土した炭化種子を生の状態に復元すると20mm程度を超えるとみられ、現在の山野に生育しているような小さいクリと考えられる。

4. 考察

焼失竪穴住居跡における出土炭化材はほとんどが柱材をはじめとした建築材と推定されている。分析にあてた18試料のうち最も多いのはクリで6試料、3試料がコナラ属コナラ節、ケヤキとムクノキ近似種が2試料ずつ、それにモクレン属とネムノキ属、カエデ属であった。8～11世紀の東北地方の建築材は、西日本のように針葉樹を利用せず、コナラ節、クヌギ節、クリなどの広葉樹材の利用が圧倒的に多い。8世紀以前から続く傾向としてこれらのブナ科樹種利用にくわえ、ケヤキ、あるいはモクレン属を利用する例もあるという（山田,1993）。おそらく本遺跡でもクリ、コナラ節などとともに周囲から調達しやすいケヤキやモクレン属などを加えて建築材として利用していたと考えられる。

図1に各竪穴住居跡の出土炭化材分布を示した。SI8竪穴住居跡ではクリ、コナラ節とケヤキで、いずれも建築材として利用度の高い樹種である。この竪穴住居跡もクリ、コナラ節、クヌギ節、ケヤキを使っており、周溝で出土したモクレン属も周囲の林野で手に入れやすい樹種であるため利用されたと考えられる。SI34D竪穴住居跡では、No.16の棚板とみられる炭化材にはクリが使われていた。SI20竪穴住居跡ではクリ、カエデ属は比較的利用されやすい樹種であるが、ネムノキ属は耐久、保存性が低く、一般には建築材としては用いられず、ちょっとした道具に使われるか、燃料材などとして持ち込まれた可能性も考えられる。なお、ムクノキに近似する材がSI34D及びSI20竪穴住居跡で出土しているが、現在では関東地方以南にしか分布していない。

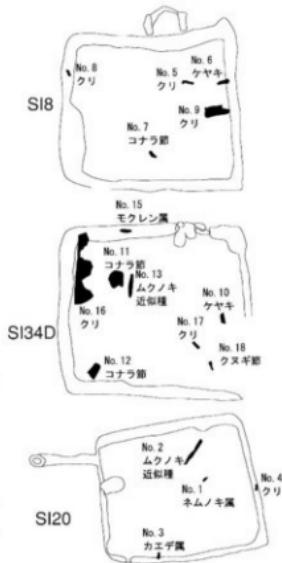
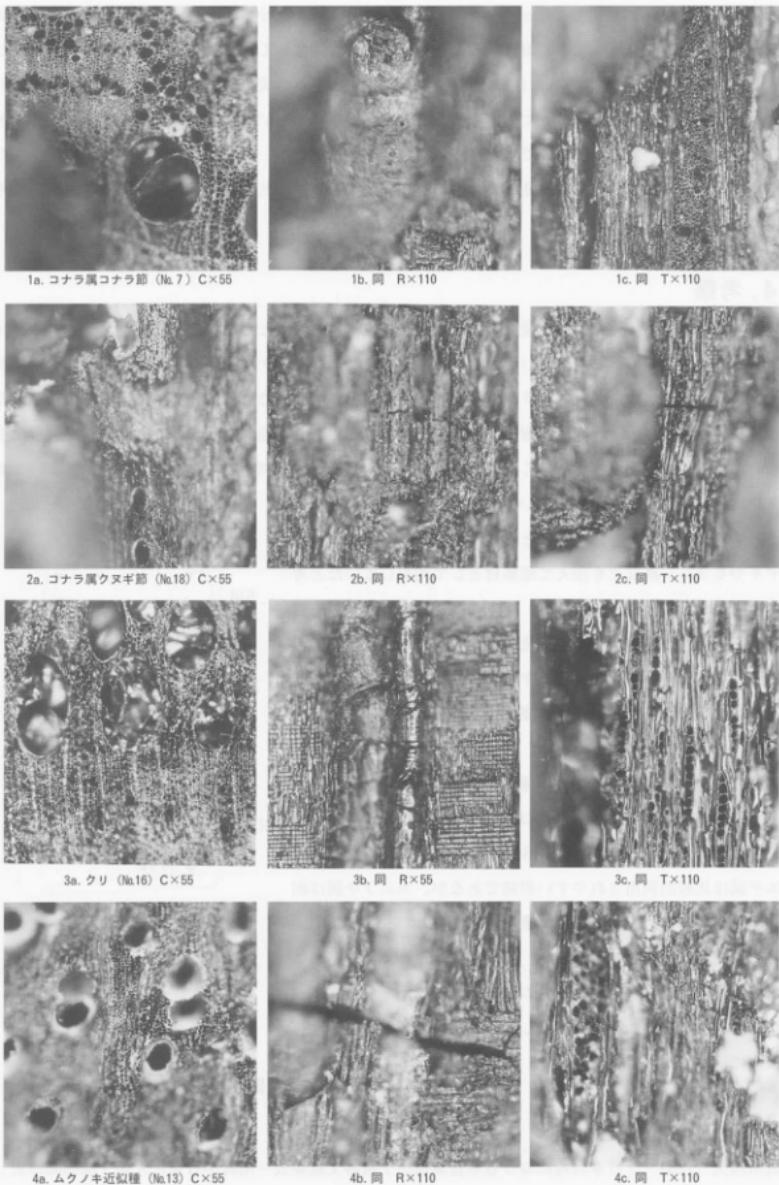


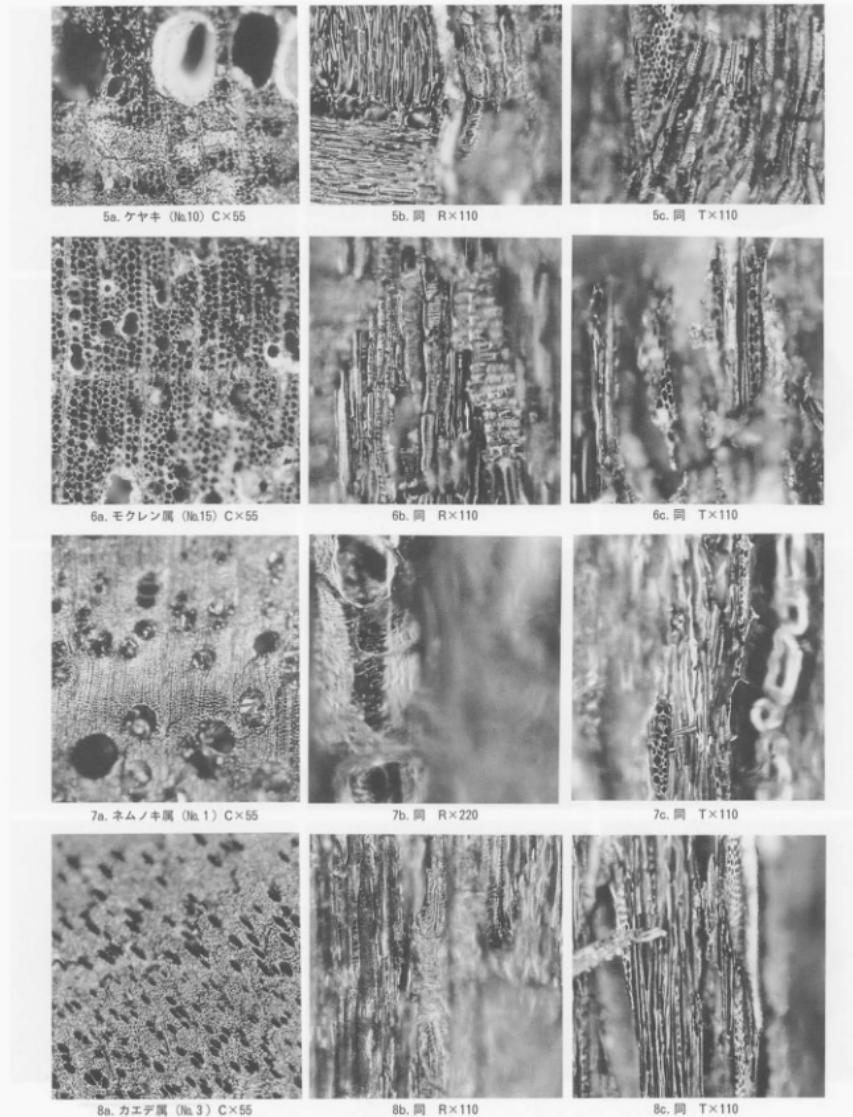
図1 新田東遺跡炭化材出土状況

引用文献

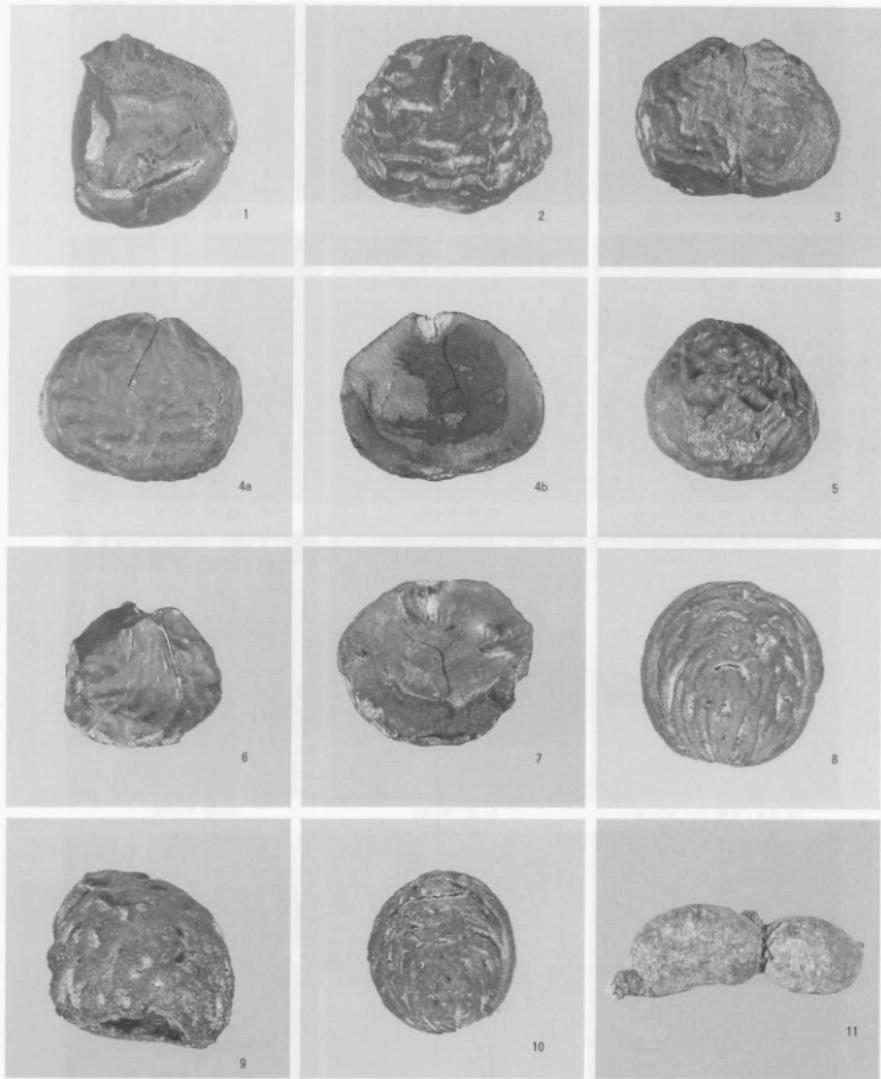
- 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史」
『植生史研究』特別第1号 p. 242



図版1 新田東遺跡より出土した炭化材（1）



図版2 新田東遺跡より出土した炭化材（2）



1-7 (クリ、炭化種子) 1,8-10 (モモ、炭化核)、11 (草本、地下茎)
1,8 (S I 20-2層); 2,10 (S I 20-1層); 3-7 (S I 20-2層)
9 (S I 34D-4層); 11 (S I 21-3層) 4bは4aの内面

scale 10mm

図版3 新田東遺跡より出土した炭化種実

付章2 新田東遺跡出土製鉄関連遺物の分析・調査

川鉄テクノリサーアーチ株式会社

分析・評価事業部埋蔵文化財調査研究室

岡原正明・天辰正義・小川太一・福田文二郎

1. はじめに

宮城県河北町新田東遺跡から出土した製鉄関連遺物（鉄滓・鍛造剥片・礫羽口）について、自然科学的な観点での分析調査を依頼されたので、①鉄滓・鍛造剥片・礫羽口の外観と切断面部分の顕微鏡観察による記録、②鉄滓の化学成分分析による製鉄工程上の位置付けを中心に以下報告する。

2. 調査項目および試験・観察方法

(1) 調査資料と調査項目

資料No.	出土遺構	層位	時期	資料種別	原材	重さ(g)	着磁力	M.C.反応	外観写真	組織写真	EDX分析	X線回折
1				複形砂鉄系精錬渣滓	洋	134.4	強	無	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2	S131住跡	埋上1層	B期	複形精錬渣滓(合鉄)	洋	103.2	強	有	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3				粒状渣滓	洋	0.2	無	無	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4				鍛造剥片	洋	0.7	無	無	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5	S151住跡	堆積上1層	B期	複形砂鉄系精錬渣滓(合鉄)	洋	401.1	強	有	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6	S111住跡	堆積上1層	C-1期	砂鉄系精錬渣滓(合鉄)	洋	23	弱	無	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
7	S117住跡	堆積上3層	C-1期	複形精錬渣滓	洋	173	強	無	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
8	S140住跡	C地周溝	C-2期	高タニア砂鉄系精錬渣滓	洋	26.8	弱	無	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9	S140住跡	堆積上1層	C-2期	複形精錬渣滓	洋	63.6	強	弱	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
10	SK7上階	堆積上1層	B期 ^a	複形精錬渣滓	洋	272.8	強	無	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
11	S131住跡	埋上1層	B期	礫羽口	始上	433	無	無	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

註 M.C.反応はメタルチャッカによる金属探知反応。時期は第5章3を参照。

表1 調査資料と調査項目及び資料の製鉄工程上の位置付け

(2) 試験・観察方法

①重量計測、外観観察および金属探知調査

資料重量の計量は電子天秤を使用して行い、少數点2位以下で四捨五入した。各種試験用試料を探取する前に資料を撮影し、試料採取時の特異部分についても撮影を行った。

着磁力調査については、直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し、官能検査により「強・やや強・中・やや弱・弱」の5ランクで、個別調査結果を表示した。金属探知機(MC: metal checker)を用いて残存金属の有無を調査した。

②化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するJISの分析法に準じて行った。

鉄滓中の成分は、18成分(全鉄T.Fe、金属鉄M.Fe、酸化第一鉄FeO、酸化第二鉄FeO、シリカSiO₂、アルミニウムAl₂O₃、ライムCaO、マグネシアMgO、酸化ナトリウムNa₂O、酸化カリウムK₂O、チタニアTiO₂、酸化マンガンMnO、酸化リンPO₄、化合物C.W.、炭素C、ヴァナジウムV、銅Cu、コバルトCo)を化学分析した。

③顕微鏡組織写真

資料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上）した。金属箇所はナイタル（5%硝酸アルコール液）で腐食後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、金属組織および介在物（不純物、非金属鉱物）の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断した。原則として100倍および400倍で撮影を行い、必要に応じて実体顕微鏡（5倍～20倍）でも観察した。

④SEM-EDXによる観察

真空中で試料面の直径2μm程度の範囲に電子線を照射すると試料面から二次電子、反射電子、特性X線などが発生する。SEM（走査型電子顕微鏡：Scanning Electron Microprobe Analysis）によって、二次電子または反射電子の発生程度を写真として撮影できる。さらにEDX（エネルギー分散型X線分析：Energy Dispersive X-ray spectroscopy）によって、試料に電子線を照射した際に放出される特性X線のエネルギーを検出し、試料表面層の元素分析を行うことができる。この両者を組み込んだSEM/EDX（X線マイクロアナライザー付き走査型電子顕微鏡）を用いて観察した。

SEM-EDX装置の仕様；検出器：KEVEX社製Quantum、走査電子顕微鏡：日立製S-4100型、標準電子線加速電圧：15kV、標準蛍光X線積算時間：100秒間、元素マッピング分析（最大指定元素数：8、マッピング分析所要時間：約30分）。

⑤X線回折測定

試料を粉碎して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有な反射（回折）された特性X線が検出されることを利用して、試料中の未知の化合物を観察・同定することができる。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。測定装置は理学電気株式会社製 ロータフレックス（RU-300型）を用いた。

3. 調査結果および考察

資料1・2・5～10の鉄滓について、表2に化学成分分析結果、表3にX線解析結果、図1～3に成分分析結果を示した。以下、資料番号順に調査結果を述べる。

（1）資料番号No.1 楠形精鍊鍛冶滓

①外観観察（図版1-1・2） 長さ81.2mm×幅58.6mm×厚さ32.4mm。資料の重量は134.4gである。MC（金属探知）反応はない。大きな割欠部が一辺にある。上部は木炭痕の空洞や灰色の土の詰まった凹凸の激しい様相を呈し、細かな気泡痕が全体に見られる。底部は楕形を呈し、砂粒がかみ込まれ火床材や水酸化鉄とともに、細かな気泡痕が多い。砂礫の汚染の少ない緻密な部分から試料採取した。形状から炉内に放置された炉内滓に見える。

②鉱物組織分析 資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した断面の100倍と400倍の顕微鏡ミクロ組織写真を図版2-22に示す。写真前面の灰白色四角状で中が三角形の空洞に見えるチタン鉄酸化物のウルボスピネル（Ulvospinel:2FeO·TiO₃）結晶と中間面に灰青色で四角形がやや崩れた形状をしたマグ

ネタイト (Magnetite:Fe₃O₄) およびやや小さいファイヤライト (Fayalite:2FeO•SiO₂) 結晶が観察される。したがって、本資料の主要組織は、ファイヤライト、マグネタイトおよびウルボスピネルから構成されていると推察される。

X線回折チャートのまとめを表3に示した。ファイヤライト、ウルボスピネルとシリカ (Quartz: SiO₂) が検出された。顕微鏡組織とほぼ一致している。

No.	T. Fe	M. Fe	FeO	FeO	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	比率(%)	
									Fe ₂ O ₃	FeO
1	43	0.18	47.6	8.32	21.5	6.26	1.67	1.29	14.9	85.1
2	51.9	0.33	32.6	39	16.3	4.16	0.37	0.33	34.5	65.5
3	51	0.33	55.6	10.7	21.1	4.99	1.09	0.75	16.1	83.9
6	39.6	0.17	64	13.8	13.8	3.51	0.4	0.5	17.7	82.3
7	37.5	0.12	61.1	14.1	12	3.49	0.84	0.92	18.8	81.3
8	30.9	0.22	28.5	12.1	23.5	6.21	1.12	3.64	29.8	70.2
9	59	2.66	15.8	63	3.47	1.12	0.39	0.5	79.9	20.1
10	54.8	0.28	57.9	13.6	17	4.19	0.57	0.54	19	81

No.	Na ₂ O	K ₂ O	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	C.W.	Co	C	V	Cu	造洋成分%
1	0.43	0.87	6.59	0.23	0.339	0.87	0.012	0.04	0.046	0.001	35
2	0.21	0.38	0.27	0.06	0.255	3.62	0.012	0.35	0.062	0.005	21.8
3	0.45	0.99	2.43	0.13	0.221	0.78	0.011	0.04	0.016	0.005	29.4
6	0.18	0.36	1.55	0.08	0.207	0.63	0.008	0.06	0.024	0.004	18.8
7	0.22	0.76	4.9	0.14	0.144	0.46	0.02	0.02	0.18	0.002	18.2
8	0.11	1.03	23	0.66	0.161	0.37	0.036	0.63	0.27	0.001	35.9
9	0.04	0.12	4.49	0.15	0.288	4.32	0.023	0.56	0.083	0.003	5.6
10	0.18	0.32	3.51	0.13	0.377	0.75	0.006	0.02	0.026	0.001	22.8

C.W.=化合物、造洋成分=SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O

表2 分析鉄滓資料の化学成分分析結果 (%)

資料 No.	鉱物成分								Quartz 石英
	Wustite ウスタイト	Magnetite マグネット	Hematite ヘマタイト	Fayalite ファイアライト	Uvöspinel ウーベンスピン	Ilmenite イルメナイト	Goethite ゴエシタイト		
	A	B	C	D	E	F	G	H	
1				◎1	◎2				◎3
2		◎2		◎1					◎3
5	◎3	◎2		◎1					
6	◎1	◎3		◎2					
7	◎1	◎3		◎2		◎1	◎3		
8				◎2	◎1	◎3			
9		◎1	◎3		◎2				
10	◎2	◎3		◎1					

A : Wustite - FeO, B : Magnetite - Fe₃O₄, C : Hematite - Fe₂O₃, D : Fayalite - Fe₂SiO₄,

E : Uvöspinel - Fe₂TiO₄, F : Ilmenite - FeTiO₃, G : Goethite - FeOOH, H : Quartz - SiO₂.

註 表中数字は検出強度順番

表3 分析鉄滓資料のX線解析結果

③化学組成分析 化学成分分析の結果(表2)によると、全鉄(T. Fe) 43.0%に対して、酸化第一鉄(ウスタイト:FeO)は47.6%、酸化第二鉄(ヘマタイト:Fe₂O₃)は8.3%で、FeOとFeOの比率は、15:85で、平衡状態図(註1)からウスタイトの存在領域に近い。反応ではウスタイト(FeO)と鉄(Fe)が生成していたであろう。また、金属鉄(M. Fe)は0.18%と少ないので、金属鉄は殆ど錆化したと推察される。

滓中成分の指標となる造洋成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O)は35.0%である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニア(Titanium dioxide: TiO₂)が6.59%で、バナジウム(Vanadium:V)を0.05%含有する。鉱石に含まれる成分の一つである銅(Copper: Cu)は0.001%と少ない。したがって、低チタニア含有の砂鉄を始発原料とした可能性が高い。なお、鉄滓中のチタニアは工程が進むほど外部に放出されるので、含有率は下がり最終工程(鍛錬鍛冶)では介在物に残る程度の微量になる傾向がある。

一方、本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの組成分析結果（データ）を整理し、図1に、全鉄（T.Fe）とチタニア（TiO₂）の関係を示す。図2には、T.Fe（%）と造滓成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O）（%）の関係を示す。本資料は、図1では砂鉄系製鍊滓と砂鉄系精鍊滓グループの境界領域に属し、図2では鉱石系製鍊滓グループと砂鉄系製鍊滓グループの中間位置に属している。したがって、化学組成分析、顕微鏡観察およびX線回折の結果を考慮すると、本資料は、チタニア含有の砂鉄系精鍊滓治滓と推察される。

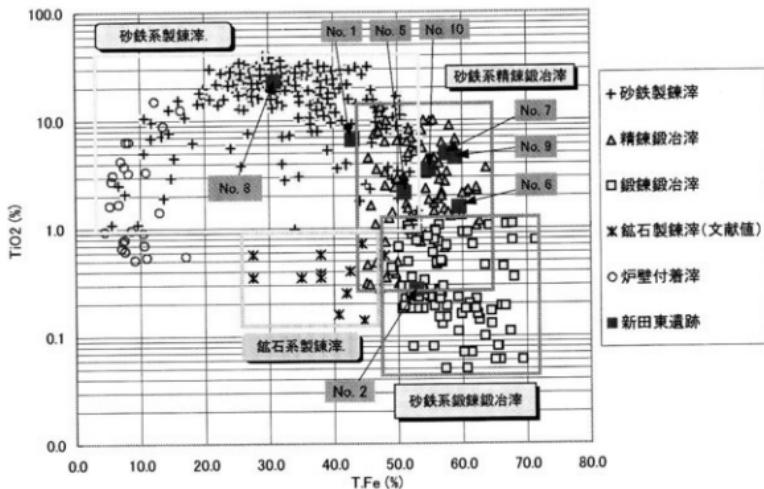


図1 出土鉄滓類の全鉄量（T.Fe）－チタニア（TiO₂）量分布図

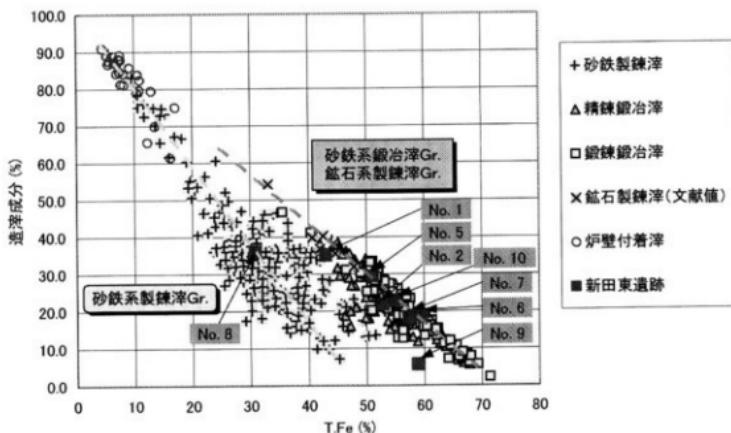


図2 製鍊滓と鍛冶滓の分類

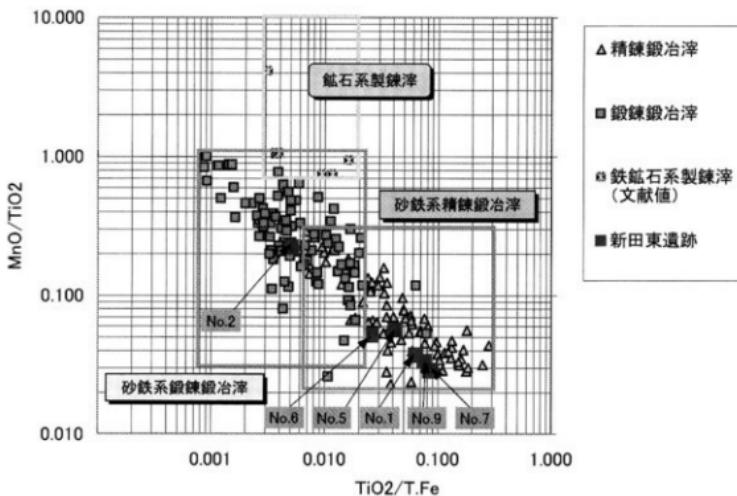


図3 砂鉄系鍛錬鍛冶滓と鉱石系製錬滓の分類

以上の結果を総合すると、この資料は楕形砂鉄系精錬鍛冶滓（炉内滓）で、鉄源にはチタニア含有の砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(2) 資料番号No.2 楕形鍛錬鍛冶滓（含鉄）

①外観観察（図版1-3～5） 長さ81.4mm×幅57.6mm×厚さ40.4mm。資料の重量は193.2gである。M.C（金属探知）反応がある。重量感のある鉄滓で、全体が水酸化鉄と土砂に覆われ、黄土色になっている。胴部には細い割れが中心に向けて入っており、鉄が鏽化中の状態である。底部には中央に水酸化鉄の瘤があり、割れが溝を通っている。茶褐色の割れ目や木炭（繊維）も観察される。

②鉱物組織分析 資料を切断し、樹脂に埋め込み研磨した断面の100倍と400倍の顕微鏡ミクロ組織写真を図版2-23～25に示す。写真前面に樹枝状のマグнетай特（Magnetite: Fe₃O₄）、その背面に大きな短柱状のファイヤライト（Fayalite: 2 FeO・SiO₂）結晶が観察される。一方、金属鉄が共存し、フェライト（Ferrite: α-Fe）の大きな結晶が観察された。したがって、本資料の主要組織は、ファイヤライトとマグネットай特ならびに、金属鉄とその鏽化物から構成されていると推察される。また、含鉄は加工されておらず、滓内に残存した状態である。

X線回折チャートのまとめを表3に示した。ファイヤライト、マグネットай特とゲーサイト（Goethite: α-FeOOH）が検出された。ゲーサイトは金属鉄の鏽化物である。

③化学組成分析 化学成分分析の結果（表2）によると、全鉄（T. Fe）52.9%に対して、酸化第一鉄（ウスタイト: FeO）は32.6%、酸化第二鉄（ヘマタイト: Fe₂O₃）は39.0%で、Fe₂O₃とFeOの比率は、54:45で、平衡状態図からマグネットай特の存在領域に近い。滓中成分の指標となる造滓成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O）は21.8%である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタ

ニア (Titanium dioxide:TiO₂) が0.27%とかなり低い。バナジウム (Vanadium:V) を0.002%含有する。鉱石に含有される成分の一つである銅 (Copper:Cu) は0.005%と少ない。化合水 (C.W.) が3.62%と高いので、金属鉄の鉄化物が多いと推定される。

一方、本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの組成分析結果（データ）を整理し、資料番号No.1と同様に、図1と図2をプロットし、図3には、砂鉄系と鉱石系を分類する (MnO/TiO_2 と $TiO_2/T.Fe$) 関係を示す。本資料は、図1では、砂鉄系鍛冶津グループの範囲に属する。図2では、鉱石系製錬津グループと砂鉄系鍛冶津グループに近い位置に属する。図3では砂鉄系鍛冶津に属する。したがって、化学組成分析、顕微鏡観察およびX線回折の結果を考慮すると、本資料は、砂鉄系鍛冶津と推察される。

以上の結果を総合すると、この資料は含鉄鍛錬鍛冶津で、含鉄は未加工の状態で津内に残存していた鉄源にはチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(3) 資料番号No.3 粒状鉄津

①外観観察 (図版1～3) 長さ3.9mm×幅2.3mm以下、 $\phi 4mm \sim \phi 1.5mm$ のもの4点が収集されている。資料の重量は0.2gである。MC（金属探知）反応はない。 $\phi 4mm$ のものは黒光りして微細気泡がある。中間の $\phi 2.8mm$ のものには比較的大きな孔があり、中空になっているものと思われる。この2点について断面組織を観察した。

②鉱物組織分析 資料を樹脂に埋めこみ研磨した断面の20倍顕微鏡マクロ組織写真を図版2-26に示した。急冷され微細な結晶となり、全面に残存気孔が観察される。100倍と400倍の顕微鏡ミクロ組織写真を図版2-27・28に示す。27には短冊状のファイヤライト、ウスタイト結晶、28には全面に樹枝状のファイヤライト結晶が観察される。したがって、鍛錬鍛冶または精錬鍛冶の初期工程で鉄津が飛散して急冷凝固したファイヤライト結晶とウスタイト結晶と推察される。

以上の結果を総合すると、この資料は粒状鉄津で、鍛錬鍛冶工程または精錬鍛冶工程で飛散して急冷凝固した可能性が高い、と推定される。

(4) 資料番号No.4 鍛造剥片

①外観観察 (図版1～8・9) 長さ5.3mm×幅3.6mm×厚さ1.0mm。大きいものは7mm四角、小さなものは1mm四角の剥片。資料の重量は0.7gである。MC（金属探知）反応はない。鍛造剥片とかさぶた状の薄い表皮状鉄津片も含まれている。表面には薄く土が付着しているものが多いが、軽く研磨すると青銀色の光沢のある表面が出てくる。肉厚の表皮状のものと鍛造の際に鉄の表面から酸化皮膜が剥離した極薄の試料を用いた。

②鉱物組織分析 資料を樹脂に埋めこみ研磨した断面の顕微鏡ミクロ組織写真を図版2-29・30に示す。29（鍛造剥片：大、厚さ $800\mu m=0.8mm$ ）には全面に白色で主にウスタイト相とゲーサイト相が観察される。黒色の気孔が見られるが、飛散過程では存在していた金属鉄が鉄化してゲーサイトになり溶出した痕跡と推察される。30（鍛造剥片：小、厚さ $200\mu m=0.2mm$ ）には全面に白色で緻密なウスタイトが観察される。酸化皮膜（酸化鉄：ウスタイト）が剥離して飛散したものと推察される。

以上の結果を総合すると、この資料は鍛造剥片で、鍛錬鍛冶工程で、鉄の酸化皮膜（厚さ800～200

μm) が剥離し飛散した、と推定される。

(5) 資料番号No.5 梶形砂鉄系精錬鍛治済（含鉄）

①外観観察（図版1-10～12） 長さ104.0mm×幅78.0mm×厚さ36.9mm。資料の重量は401.1gである。3面に割欠面のある梶形鍛治済。上部は平坦で土と水酸化鉄が凹部を埋め、部分的に黒光りするガラス質済が見える。木炭繊維痕が多い。重量感があり、上部にMC（金属探知）反応があり、着磁力も強い。底部は2段済状で、下部は黒色の済。他は茶褐色をしている。黒色部の上にMC反応があるのでここを切断調査した。

②鉱物組織分析 資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した鉄済の顕微鏡ミクロ組織写真を図版3-31に示す。写真前面に樹枝状のマグнетタイト(Magnetite:Fe₃O₄)、繭玉状のウスタイト(Wustite:FeO)およびその背面に大きな短冊状のファイヤライト(Fayalite: 2 FeO·SiO₂)結晶が観察される。したがって、本資料の鉄済組織は、ファイヤライト、マグネットタイトとウスタイトから構成されていると推察される。一方、鉄済中に金属鉄が観察された。金属鉄の顕微鏡ミクロ組織写真を図版3-32に示す。金属鉄の外周にはもやもやとした乳白色のゲーサイト(Goethite: α -FeOOH)組織、中心部に純鉄のフェライト(α -Fe)と炭素(0.5% C程度)を含むパーライト[Pearlite: セメンタイト(Cementite:Fe₃C)結晶とフェライト(Ferrite: α -Fe)結晶が層状に析出する]組織が観察される。鉄済中に残存した鋳造中の金属鉄である。

X線回折チャートのまとめを表3に示した。ウスタイト、ファイヤライトとマグネットタイトとが検出された。鉄済組織と一致している。

③化学組成分析 化学成分分析の結果（表2）によると、全鉄(T. Fe) 51.0%に対して、酸化第一鉄(ウスタイト:FeO)は55.6%、酸化第二鉄(ヘマタイト:Fe₂O₃)は10.7%で、Fe₂O₃とFeOの比率は、16:84で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。

済中成分の指標となる造済成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O)は29.4%である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニア(Titanium dioxide:TiO₂)が2.13%とバナジウム(Vanadium:V)を0.016%含有する。鉱石に含有される成分の一つである銅(Copper:Cu)は0.005%と少ない。

一方、本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの組成分析結果（データ）を整理し、以上の資料と同様、図1、図2と図3にプロットした。本資料は、化学組成分析、顕微鏡観察およびX線回折の結果を考慮して、砂鉄系精錬鍛治済と推察される。

以上の結果を総合すると、この資料は砂鉄系精錬鍛治済で、金属鉄を含んでいる、鋳造中の金属鉄が未加工のまま残存した資料で、鉄源にはチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(6) 資料番号No.6 砂鉄系精錬鍛治済

①外観観察（図版1-13） 長さ38.9mm×幅31.0mm×厚さ13.4mm。資料の重量は23.0gである。MC（金属探知）反応はない。三方に割欠面のある肉薄偏平な黒色で細かく発泡した済。両面とも凹凸が激しく、凹部には砂礫が入っているが、全体的に清浄な資料である。

②鉱物組織分析 資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した鉄済の顕微鏡ミクロ組織写真を図版3-33に示す。写真前面に樹枝状のマグネットタイト(Magnetite: Fe₃O₄)、繭玉状のウスタイト

(Wustite:FeO) およびその背面に大きな短冊状のファイアライト (Fayalite: 2 FeO•SiO₂) 結晶が観察される。したがって、本資料の鉄滓組織は、ウスタイト、ファイアライトおよびマグネタイトから構成されていると推察される。

X線回折チャートのまとめを表5に示した。ウスタイト、ファイアライトとマグネタイトとが検出された。鉄滓組織と一致している。

③化学組成分析 化学成分分析の結果（表2）によると、全鉄(T. Fe) 59.6% に対して、酸化第一鉄（ウスタイト:FeO）64.0%、酸化第二鉄（ヘマタイト:Fe₂O₃）は13.8%で、Fe₂O₃とFeOの比率は、18:82で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。

津中成分の指標となる造滓成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O）は18.8 % である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニア（Titanium dioxide:TiO₂）が1.5%となっており、バナジウム（Vanadium:V）を0.024%含有する。鉱石に含有される成分の一つである銅（Copper:Cu）は0.001%と少ない。

一方、本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの組成分析結果（データ）を整理し、以上の資料と同様、図1、図2と図3にプロットした。したがって、化学組成分析、顕微鏡観察およびX線回折の結果を考慮すると、本資料は、チタニア含有の砂鉄系精錬鍛冶滓と推察される。

以上の結果を総合すると、この資料は砂鉄系精錬鍛冶滓で、鉄源にはチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(7) 資料番号No.7 椭形精錬鍛冶滓

①外観観察（図版1－15） 長さ88.4mm×幅58.0mm×厚さ31.0mm。資料の重量は173.0gである。MC（金属探知）反応はない。割欠面が1ヶ所で半割されたような鉄滓。上部は黒色発泡し粗鬆な鉄滓で一部に茶色の水酸化鉄瘤が付いている。底部には水酸化鉄と土との瘤が生成され黄土色の盛り上がりしている部分がある。比較的付着物の少ない肉厚幅広い部分から試料を採取した。

②鉱物組織分析 資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した鉄滓の顕微鏡ミクロ組織写真を図版3－34に示す。写真前面に蘭玉状のウスタイト (Wustite:FeO)、樹枝状と多角形状のマグネタイト (Magnetite:Fe₃O₄) およびその背面に大きな短冊状のファイアライト (Fayalite: 2 FeO•SiO₂) 結晶やチタン鉄酸化物のウルボスピネル (Ulvospinel: 2 FeO•TiO₂) 結晶が観察される。したがって、本資料の鉄滓組織は、ウスタイト、ファイアライト、マグネタイトおよびウルボスピネルから構成されていると推察される。

X線回折チャートのまとめを表3に示した。ウスタイト、ファイアライトとマグネタイトとが検出された。鉄滓組織とほぼ一致している。

③化学組成分析 化学成分分析の結果（表2）によると、全鉄(T. Fe) 57.5% に対して、酸化第一鉄（ウスタイト:FeO）61.1%、酸化第二鉄（ヘマタイト:Fe₂O₃）は14.1%で、Fe₂O₃とFeOの比率は、19:81で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。

津中成分の指標となる造滓成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O）は18.2 % である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニア（Titanium dioxide:TiO₂）が4.9%とやや高く、バナジウム

(Vanadium:V)を0.18%含有する。鉱石に含有される成分の一つである銅(Copper:Cu)は0.002%と少ない。

一方、本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの組成分析結果(データ)を整理し、以上の資料と同様にプロットした結果と化学組成分析、顕微鏡観察およびX線回折の結果を考慮すると、本資料は、チタニア含有の砂鉄系精錬鍛冶滓と推察される。資料No.6と同様の傾向を示している。

以上の結果を総合すると、この資料は砂鉄系精錬鍛冶滓で、鉄源にはチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(8) 資料番号No.8 高チタニア砂鉄系製鍊滓

①外観観察(図版1-16) 長さ31.6mm×幅27.1mm×厚さ23.2mm。資料の重量は26.8gである。MC(金属探知)反応はない。割欠面は鋭角に3方向にある。銀黒色をした流出滓状の資料である。割欠面は緻密で、キラキラと結晶が光って見える。表面には木炭織維痕があり、流出滓特有の表面が滑らかな部分がある。付着物は少ないが、一部に砂礫をかみ込んでいる。

②鉱物組織分析 資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した断面の100倍と400倍の顕微鏡ミクロ組織写真を図版3-35に示す。写真前面の白色針状で空洞があるチタン鉄酸化物のイルメナイト(Ilmenite: $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)または針状のブショードブルッカイト(Pseudobrookite: $\text{FeO} \cdot 2\text{TiO}_2$)および大きい多角形状で空洞があるチタン鉄酸化物のウルボスピネル(Ulvospinel: $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)結晶と写真の背面にファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)結晶が観察される。したがって、本資料の主要組織は、ウルボスピネル、イルメナイトまたはブショードブルッカイトおよびファヤライトから構成されていると推察される。

X線回折チャートのまとめを表3に示した。ウルボスピネル、イルメナイトおよびファヤライトが検出された。顕微鏡組織とほぼ一致している。

③化学組成分析 化学成分分析の結果(表2)によると、全鉄(T.Fe)30.9%に対して、酸化第一鉄(ウスタイト: FeO)は28.5%、酸化第二鉄(ヘマタイト: Fe_2O_3)は12.1%で、 Fe_2O_3 と FeO の比率は、30:70で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。

滓中成分の指標となる造滓成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$)は35.9%である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニア(Titanium dioxide: TiO_2)が23.0%と高い。バナジウム(Vanadium:V)を0.27%含有する。鉱石に含有される成分の一つである銅(Copper:Cu)は0.001%と少ない。したがって、高チタニア含有の砂鉄を始発原料とした可能性が高い。

一方、本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの組成分析結果(データ)を整理し、図1に全鉄(T.Fe)とチタニア(TiO_2)の関係を示す。図2にはT.Fe(%)と造滓成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$)(%)の関係を示す。本資料は、図1では、砂鉄系製鍊滓グループの範囲に属する。図2では、砂鉄系製鍊滓グループに属する。したがって、化学組成分析、顕微鏡観察およびX線回折の結果を考慮すると、本資料は、高濃度含有チタニアの砂鉄系製鍊滓と推察される。

以上の結果を総合すると、この資料は砂鉄系製鍊滓で、鉄源には高チタニア含有の砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(9) 資料番号No.9 梶形精錬鍛冶滓

①外観観察（図版 1 - 17） 長さ 58.4mm × 幅 33.6mm × 厚さ 27.6mm。資料の重量は 63.6g である。M C（金属探知）反応は弱。全体が土と水酸化鉄の固着物に覆われ瘤も生成された資料。水分の多いところに埋蔵されていたものか。黄土色や茶色の瘤が多く、やや細長い重量感のある資料。一部に茶褐色の水酸化鉄も見え、銹化進行中の鉄を含んでいるものと見られる。

②鉱物組織分析 資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した断面の 100 倍と 400 倍の顕微鏡ミクロ組織写真を図版 3 - 36 に示す。写真前面に針状で空洞があるチタン鉄酸化物のイルメナイト ($\text{Ilmenite: FeO} \cdot \text{TiO}_2$) または針状のブショードブルッカイト ($\text{Pseudobrookite: FeO} \cdot 2 \text{TiO}_2$) より多角形状で空洞があるウルボスピネル ($\text{Ulvospinel: } 2 \text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) 結晶が溶融鉄滓（ガラス質）から晶出している。写真的上部と下部は、金属鉄が銹化したゲーサイト ($\text{Goethite: } \alpha\text{-FeOOH}$) 相が存在し、全体を白色化している。

したがって、本資料の主要組織は、ウルボスピネル、イルメナイトまたはブショードブルッカイトおよびゲーサイトから構成されていると推察される。本来は、金属鉄が存在していたが、金属鉄は銹化進行中と推察される。

X線回折チャートのまとめを表 5 に示した。マグネタイト、ウルボスピネルおよびヘマタイトが検出された。マグネタイトはゲーサイトの銹化過程で生成したものと推察される。

③化学組成分析 化学成分分析の結果（表 2）によると、全鉄(T. Fe) 59.0% に対して、酸化第一鉄（ウスタイト:FeO）は 15.8%、酸化第二鉄（ヘマタイト:Fe₂O₃）は 63.0% で、Fe₂O₃と FeO の比率は、80 : 20 で、平衡状態図からマグネタイトの存在領域に近い。

滓中成分の指標となる造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$) は 5.6 % である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニア ($\text{Titanium dioxide: TiO}_2$) が 4.5% で、バナジウム (Vanadium: V) を 0.08% 含有する。鉱石に含有される成分の一つである銅 (Copper: Cu) は 0.003% と少ない。したがって、チタニア含有の砂鉄を始発原料とした可能性が高い。

一方、本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの組成分析結果（データ）を整理し、以上の資料と同様、図 1、図 2 と図 3 にプロットした結果と化学組成分析、顕微鏡観察および X 線回折の結果を考慮すると、本資料は、チタニア含有の砂鉄系初期精錬鍛冶滓と推察される。

以上の結果を総合すると、この資料は 砂鉄系楔形精錬鍛冶滓 で、共存していた金属鉄は全て銹化進行中、鉄源にはチタニア含有の砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(10) 資料番号 No.10 楔形精錬鍛冶滓

①外観観察（図版 1 - 18） 長さ 74.2mm × 幅 58.6mm × 厚さ 48.5mm。資料の重量は 272.8g である。M C（金属探知）反応はない。2 方向に割欠面のある肉厚重量感のある資料。上部は気孔や木炭痕があり薄く水酸化鉄に覆われているが、中凹。底部は火床材が付着し、おにぎり状に膨らんでいる。黒色発泡粗鬆な鉄滓である。

②鉱物組織分析 資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した鉄滓の顕微鏡ミクロ組織写真を図版 3 - 37 に示す。写真前面に多角形のマグネタイト ($\text{Magnetite: Fe}_3\text{O}_4$)、繭玉状のウスタイト (Wustite: FeO) よりその背面に大きな短冊状のファイヤライト ($\text{Fayalite: } 2 \text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) 結晶が観察される。

したがって、本資料の鉄滓組織は、ウスタイト、ファイヤライトおよびマグネタイトから構成されていると推察される。

X線回折チャートのまとめを表3に示した。マグネタイト、ウスタイトとファイヤライトとが検出された。鉄滓組織と一致している。

③化学組成分析 化学成分分析の結果（表2）によると、全鉄(T. Fe) 54.8%に対して、酸化第一鉄（ウスタイト:FeO）57.9%、酸化第二鉄（ヘマタイト:Fe₂O₃）は13.6%で、Fe₂O₃とFeOの比率は、19:81で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。

滓中成分の指標となる造滓成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+Na₂O+K₂O）は22.8%である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニア（Titanium dioxide:TiO₂）が3.5%で、バナジウム（Vanadium:V）を0.026%含有する。鉱石に含有される成分の一つである銅（Copper:Cu）は0.001%と少ない。したがって、チタニア含有の砂鉄を始発原料とした可能性が高い。

一方、本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの組成分析結果（データ）を整理し、以上の資料と同様、図1、図2と図3にプロットした結果と化学組成分析、顕微鏡観察およびX線回折の結果を考慮すると、本資料は、チタニア含有の砂鉄系精錬鍛冶滓と推察される。

以上の結果を総合すると、この資料は砂鉄系楕形精錬鍛冶滓で、鉄源にはチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い、ものと推定される。

(11) 資料番号No.11 蘭羽口

①外観観察（図版1-20・21） 長さ71.4mm×幅67.9mm×厚さ32.4mm。外径60mm、内径25～30mm。資料の重量は433.0gである。MC（金属探知）反応はない。外観写真を34頁に示す。やや肉薄の羽口で先端部には着磁力やや弱の黒色溶融鉄滓が付着している。内部の被熱影響部を避けて胎土も採取し分析を試みる。滓部はガラス質状光沢部もある。

②鉱物組織分析 資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した鉄滓の顕微鏡ミクロ組織写真を図版3-38に示す。写真的溶融鉄滓（ガラス質）の前面に樹枝状のマグネタイト（Magnetite:Fe₃O₄）および多角形状で空洞があるチタン鉄酸化物のウルボスピネル（Ulvöspinel: 2 FeO·TiO₂）結晶が観察される。したがって、本資料の組織は、溶融滓が羽口炉壁に付着して生成したものと推察され、精錬鍛冶に使用されていたものであろう。

③胎土組成・耐火度分析 表4に胎土成分のEDX分析結果を示す。シリカ（SiO₂）が66.1%で、通常の粘土（約60%程度）よりもやや高めで、耐化度を向上させるアルミナ（Al₂O₃）も18.7%で、通常の粘土における約15～18%に近い、耐火度は普通（1500°C程度）と推定される。

以上の結果を総合すると、この資料は羽口の一部で、溶融滓が付着していて、精錬鍛冶に使用されていたものと推定される。

No.	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	TiO ₂	CuO	K ₂ O	ZrO ₂	SiO ₂	RuO ₂
11	66.1	18.7	11.4	1.37	0.47	1.61	0.043	0.018	0.009

定量値は、検出された化合物濃度の合計を100重量%として補正して求めた。

表4 萤光X線による資料11（蘭羽口）の化学成分分析結果

4.まとめ

資料の調査結果および考察結果を以上に述べた、それらの結果を以下にまとめる。

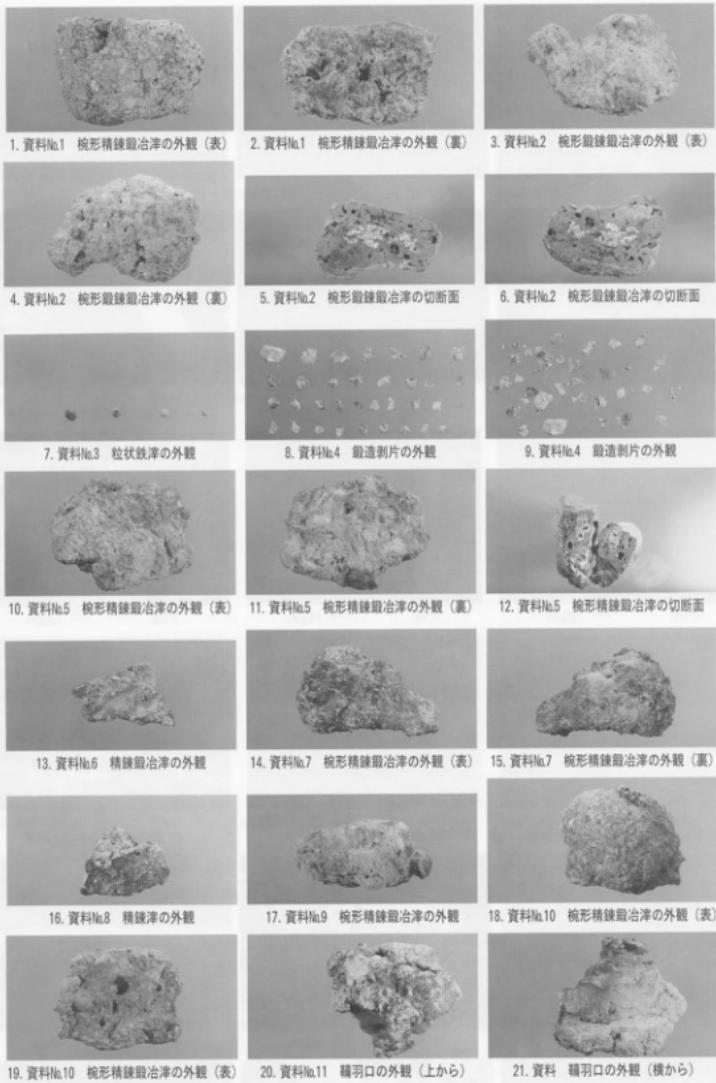
- ①No. 1・2・5・6・7・9・10資料は砂鉄系鍛治滓、No.1資料は鍛錬鍛治滓、No. 2・5・6・7・9・10資料は精錬鍛治滓と推定される。No. 2とNo. 9 資料は、鉄滓中に金属鉄が共存している含鉄鉄滓である。いずれも加工処理を受けた形跡はない。
- ②No. 3 資料は粒状鉄滓で、鍛冶工程（精錬または鍛錬）で発生したものと推定される。
- ③No. 4 資料は鍛造剥片で、鍛冶鍛錬工程で発生した鉄の酸化皮膜（厚さ800～200 μm）が剥離したものと推定される。
- ④No. 8 資料はチタニア系砂鉄製鍊滓で、高チタニア含有砂鉄を製鉄の始発原料としていると推定される。
- ⑤No.11資料は、繩羽口の一部に溶融滓が付着した耐火材である。

参考文献

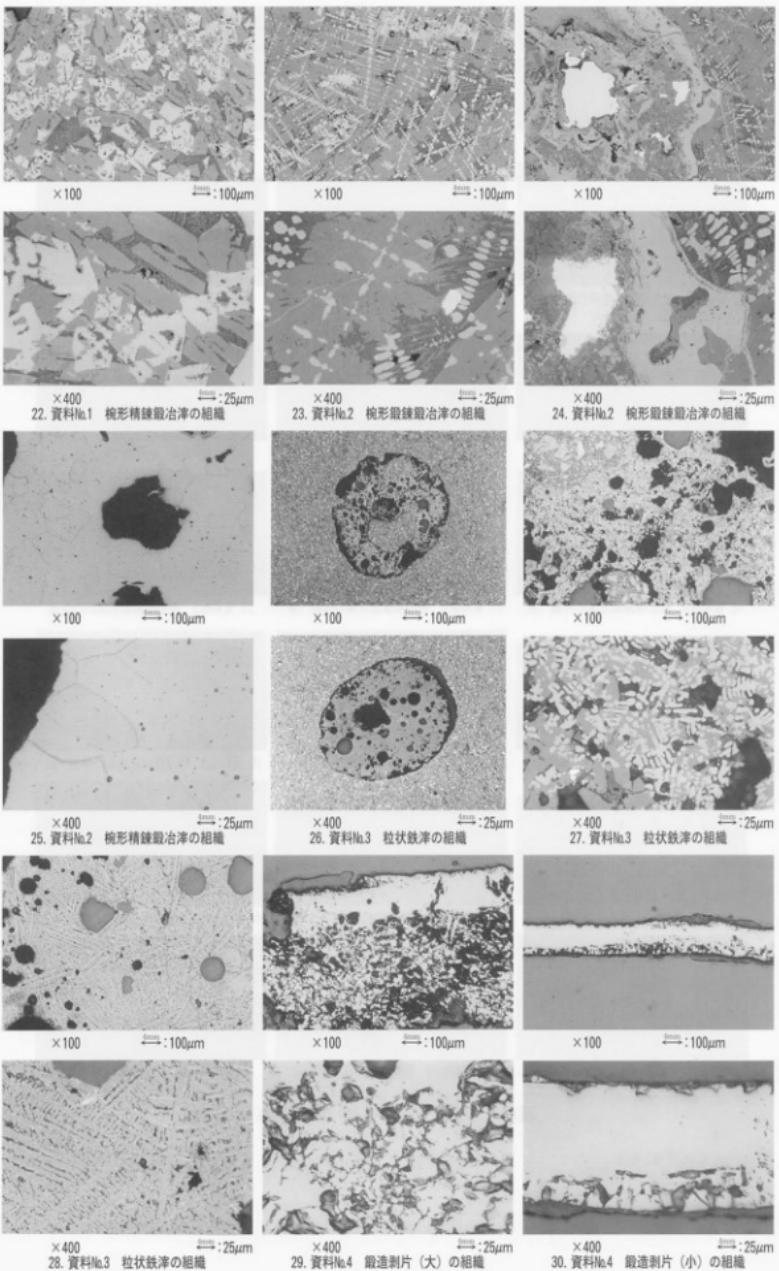
- 宮田敬郎 1986 「鉄の考古学」
たたら研究会編1994 「日本製鉄史論集たたら研究会創立25周年記念論集」
佐藤知雄 1963 「炭素鋼の顕微鏡組織写真と解説」
西沢泰二、佐久間健人 1979 「金属組織写真集 鉄鋼材料編」(日本金属学会)
三辻利一 1989 「胎土分析による土器の产地推定－螢光X線法」『考古学・美術史の自然科学研究』(古文化財編集委員会編)
小川太一 2002 「分析側から見た鉄関連遺物発掘調査への期待」『鉄の歴史－その技術と文化フォーラム』論文集
(日本鉄鋼協会 鉄関連遺物分析評議研究会)

註

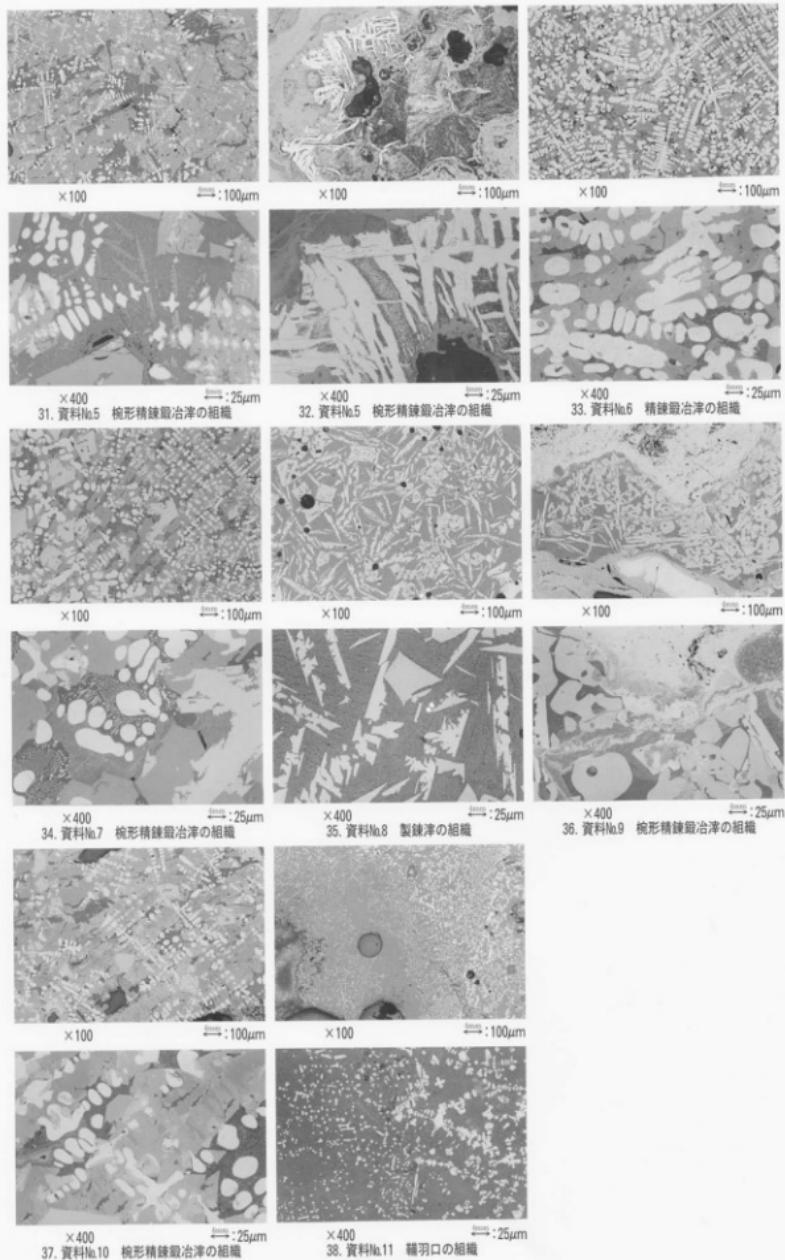
- 註1 FeO-Fe₂O₃-SiO₂系状態図 (by Osborn and Muan) :Slag Atlas [ドイツ鉄鋼協会] (1981) [Verlag Stahleisen] Dusseldorf, Fig. 106, p.76を用いた。



図版 1 分析資料の外観（縮尺40%）



図版2 分析資料の組織写真（1）



図版3 分析資料の組織写真（2）

写 真 図 版

1. 調査区全景
(真上上空から)



2. 調査区全景
(真上上空から)



3. 調査区全景
(南東から)





3. 颍查区南部
（航上上空约5）



2. 颍查区中部
（航上上空约5）

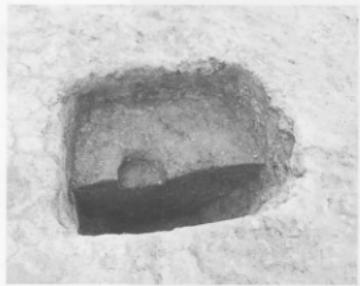


1. 颍查区北部
（航上上空约5）

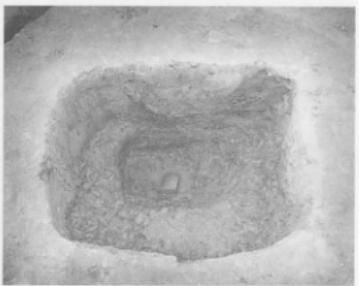
1. SB 1 挖立柱建物跡
SI 18 空穴住居跡
(北から)



2. SB 2・9・11
挖立柱建物跡
SI 21 空穴住居跡
(東から)



3. SB 2 挖立柱建物跡南東隅柱穴断面



4. SB 2 挖立柱建物跡北東隅柱穴掘上状況



1. S B 5 挖立柱建物跡
(北から)



2. S B 6 挖立柱建物跡
(南から)



3. S B 8 挖立柱建物跡
S I 16竪穴住居跡
(東から)

図版4 S B 5・6・8・掘立柱建物跡、S I 16竪穴住居跡

1. S B 10掘立柱建物跡
(北から)



2. S B 12掘立柱建物跡
S I 37A・B竪穴住
居跡
(北東から)



3. S B 13掘立柱建物跡
(北東から)





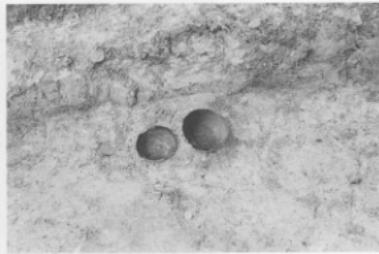
1. SB 16・17
掘立柱建物跡
(北東から)



2. SI 1・2・44
掘立柱建物跡
(北から)

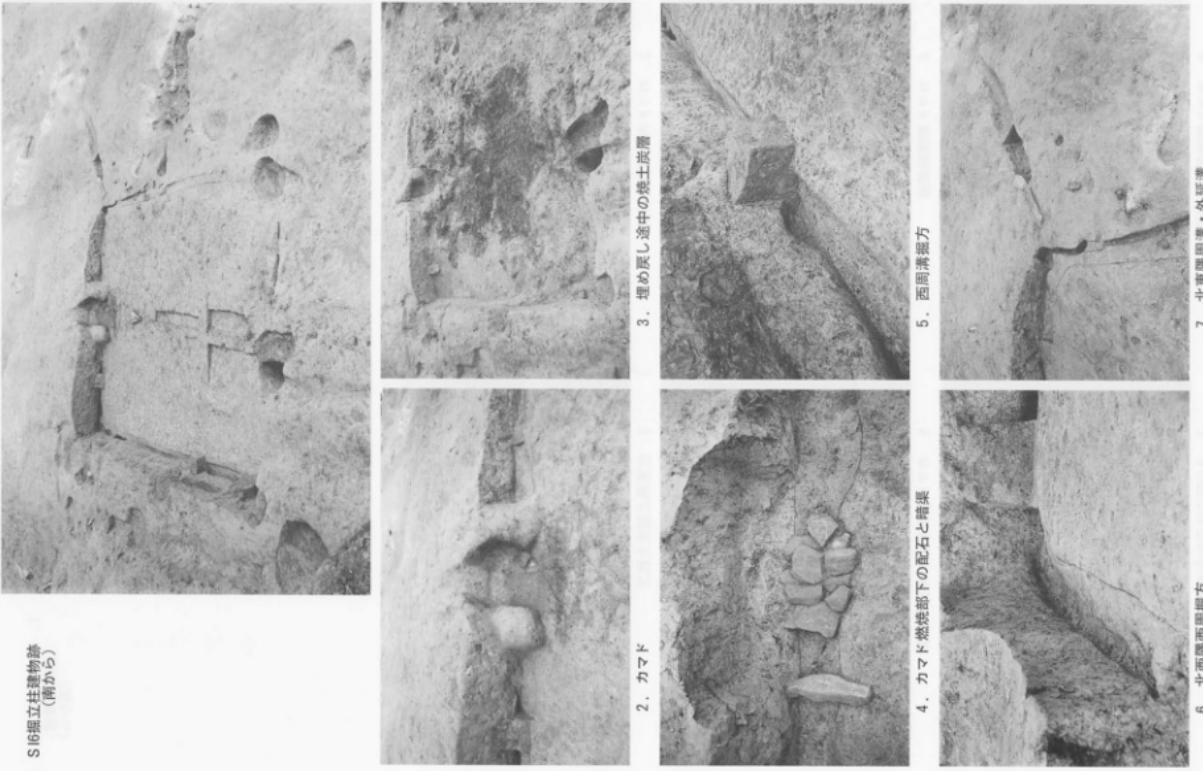


3. SI 1整穴住居跡カマド



4. SI 12整穴住居跡土器出土状況

図版 7 S 1 6 穴住居跡





1. S18堅穴住居跡
(焼失住居跡)
(南から)



2. カマド内土器出土状況



3. 北東隅土器出土状況



4. カマド燃焼部底面



5. カマド燃焼部掘方断面・暗渠



6. カマド燃焼部下の配石



7. S18堅穴住居跡完掘状況

図版8 S18焼失堅穴住居跡

1. S I 17・19竪穴住居跡
(東から)



2. S I 16竪穴住居跡土器出土状況 (北東から)



3. S I 16竪穴住居跡管玉出土状況 (南から)

4. S I 16・51竪穴住居跡
(南東から)





1. S I 20堅穴住居跡
床面の土器、炭化材
の出土状況
(北東から)



1. S I 20堅穴住居跡
完掘状況
(北東から)



3. S I 20堅穴住居跡南西部土器出土状況
(北東から)



4. S I 20堅穴住居跡カマド検出状況
(北東から)

1. SI21竪穴住居跡
(東から)



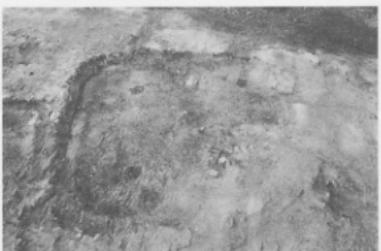
2. SI21竪穴住居跡 カマド検出状況 (東から)



3. SI21竪穴住居跡 珠文鏡出土状況 (南から)



4. SI22竪穴住居跡 (東から)



5. SI23竪穴住居跡 (東から)



6. 調査区南東端 (SI22・23・24・竪穴住居跡) (北から)



1. S I 24堅穴住居跡
S B 7 挖立柱建物跡
(南から)



2. S I 24堅穴住居跡
三重小塔出土状況
(南から)



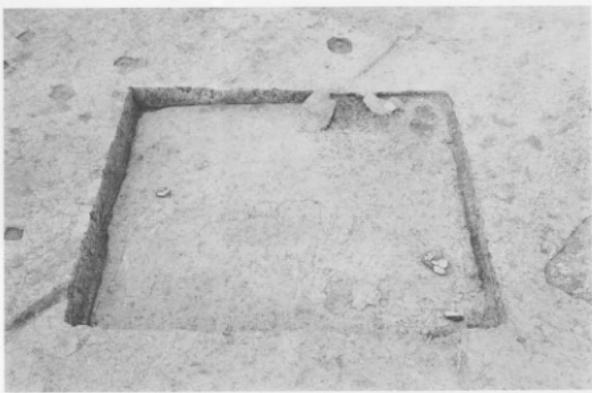
3. S I 24堅穴住居跡三重小塔出土状況
(西から)



4. S I 24堅穴住居跡 三重小塔出土状況
(南から)

図版12 S I 24堅穴住居跡、S B 7 挖立柱建物跡

1. S I 31堅穴住居跡
(南から)



2. S I 32堅穴住居跡
(北から)



3. S I 49堅穴住居跡
(北から)





1. SI32竪穴住居跡・カマド検出状況



2. SI49竪穴住居跡カマド検出状況



3. S I 33竪穴住居跡
(北から)



4. S I 33C 竪穴住居跡カマド底面 (北西から)



5. S I 33C 竪穴住居跡カマド掘方 (北から)



6. S I 33C 竪穴住居跡床面 (北から)



7. S I 33C 竪穴住居跡pit 9 磁板 (南から)

図版14 S I 32・33・49竪穴住居跡

1. S I 37堅穴住居跡
(北東から)



2. S I 53堅穴住居跡
(北から)



3. S I 35堅穴住居跡
(北から)



1. 完掘状況（東から）



2. 土器出土状況（3層上面）
(東から)



3. 土器出土状況
(西から)



図版16 S 134D 焼失竪穴住居跡（1）

1. 床面の土器出土状況
(東から)



2. 土器出土状況（3層上面）



3. 土器出土状況（3層上面）



4. 棚板検出状況



5. S I 34D 竪穴住居跡カマド掘方



6. カマド掘方



7. 外延溝

図版17 S I 34D 烧失竪穴住居跡（2）



図版18 S I 40 積穴住居跡



1. SE 2 井戸跡（北西から）



2. SE 3 井戸跡（北西から）



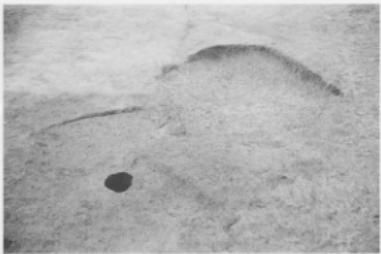
3. SK 1 土壌（北から）



4. SK 1 土壌（南から）



5. SK 19 土壌断面（北から）



6. SK 18・19 土壌（北から）



7. SX 8 焼成遺構（東から）



8. SX 7 焼成遺構（東から）

図版19 SE 2・3 井戸跡、SK 1・18・19 土壌、SX 7・8 跡焼成遺構



1. S X 1 遺物包含層南北断面（西から）



2. S X 3 遺物包含層東西断面（南から）



3. S X 1 遺物包含層
(西から)



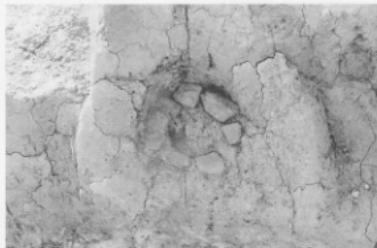
4. S X 2 遺物包含層
(調査区南部遺構群)
(南から)

図版20 S X 1・2・3 遺物包含層

1. SE 1 石組井戸跡
SD 1 暗渠
SX 5 平場
(南東から)



2. SD 1 暗渠石蓋・側石



3. 環状積石



4. SX 5 平場Pit 1断面



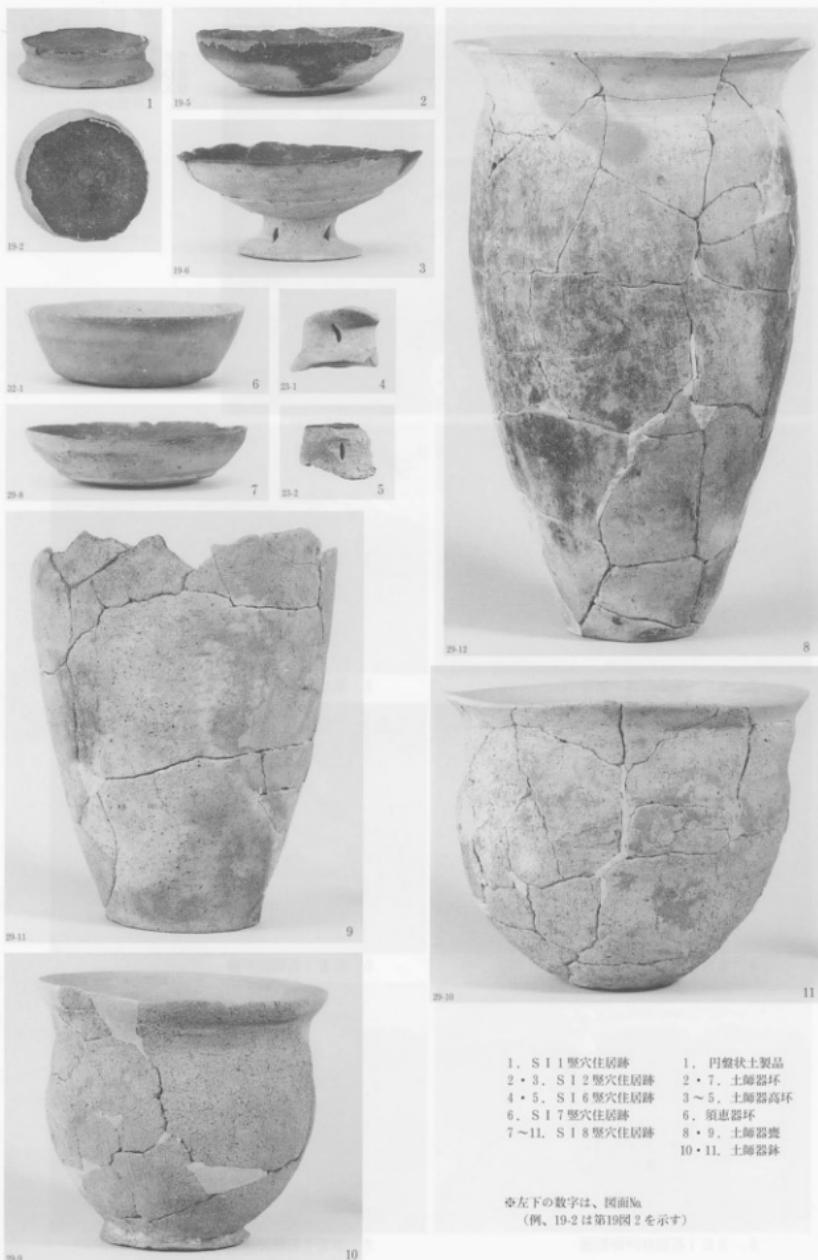
5. SE 1 石組井戸跡



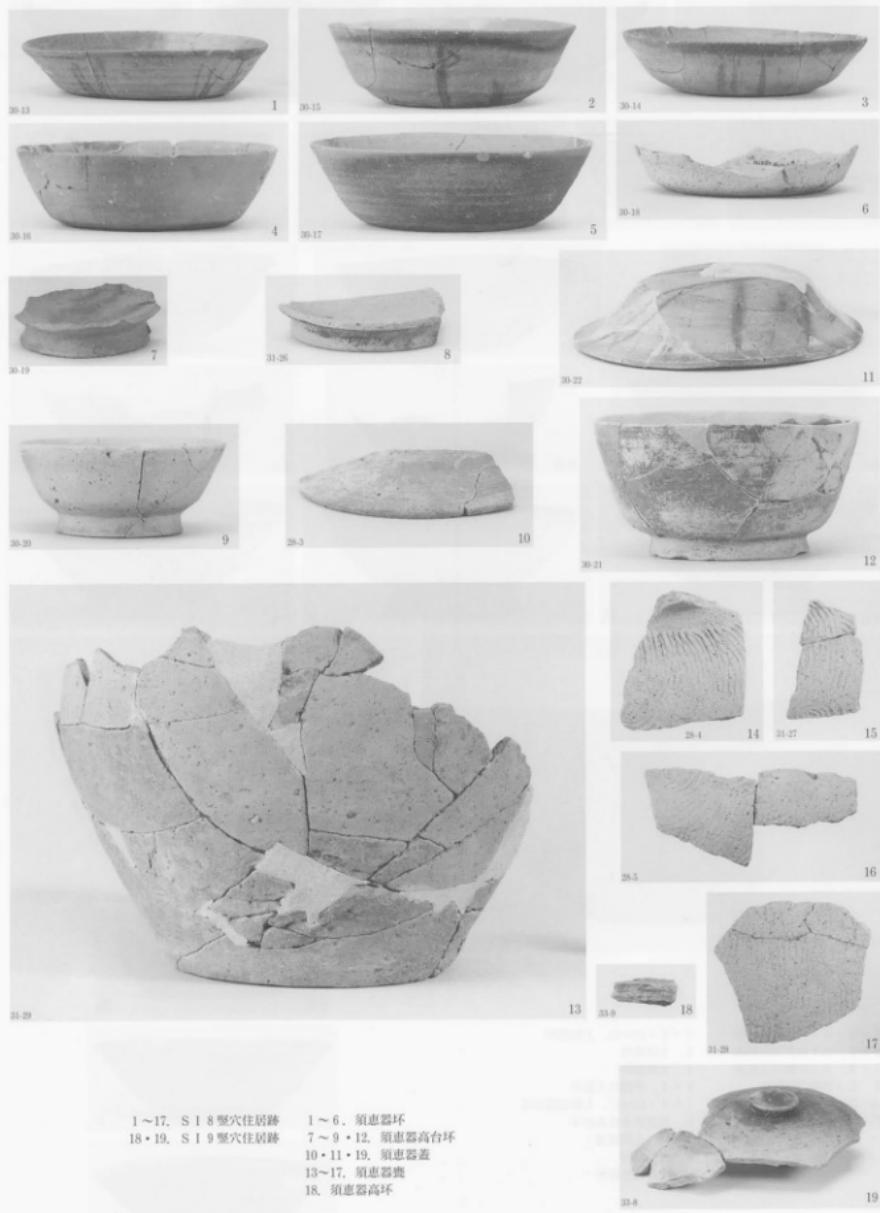
6. SE 1 石組井戸跡断面



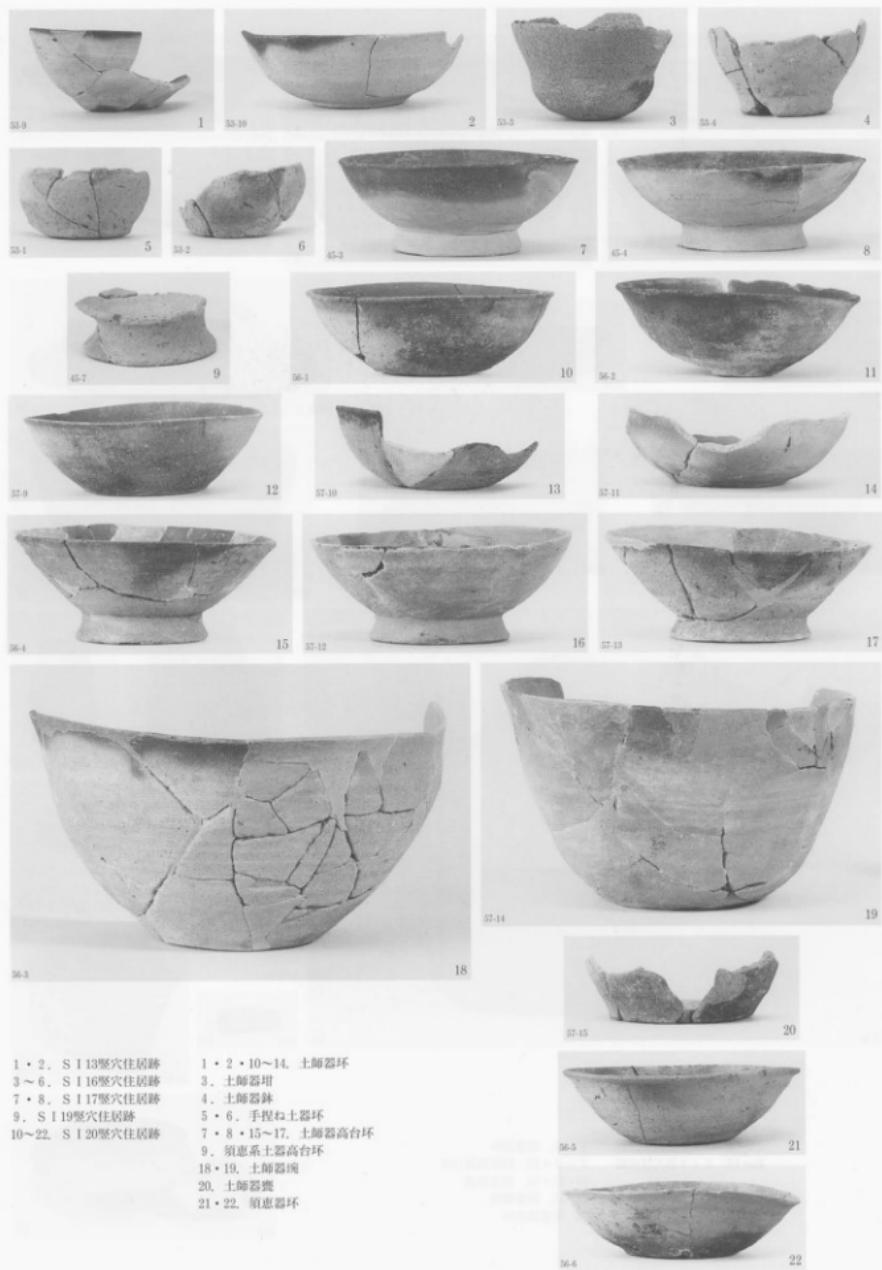
7. SE 1 石組井戸跡石組状況



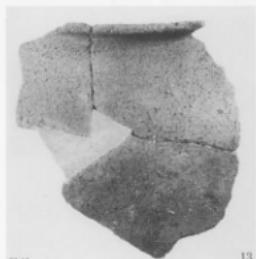
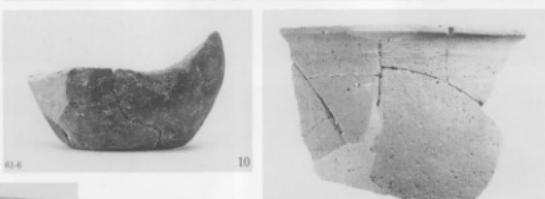
図版22 S11・2・6・7・8堅穴住居跡出土土器



図版23 S 1 8 + 9 整穴住居跡出土土器



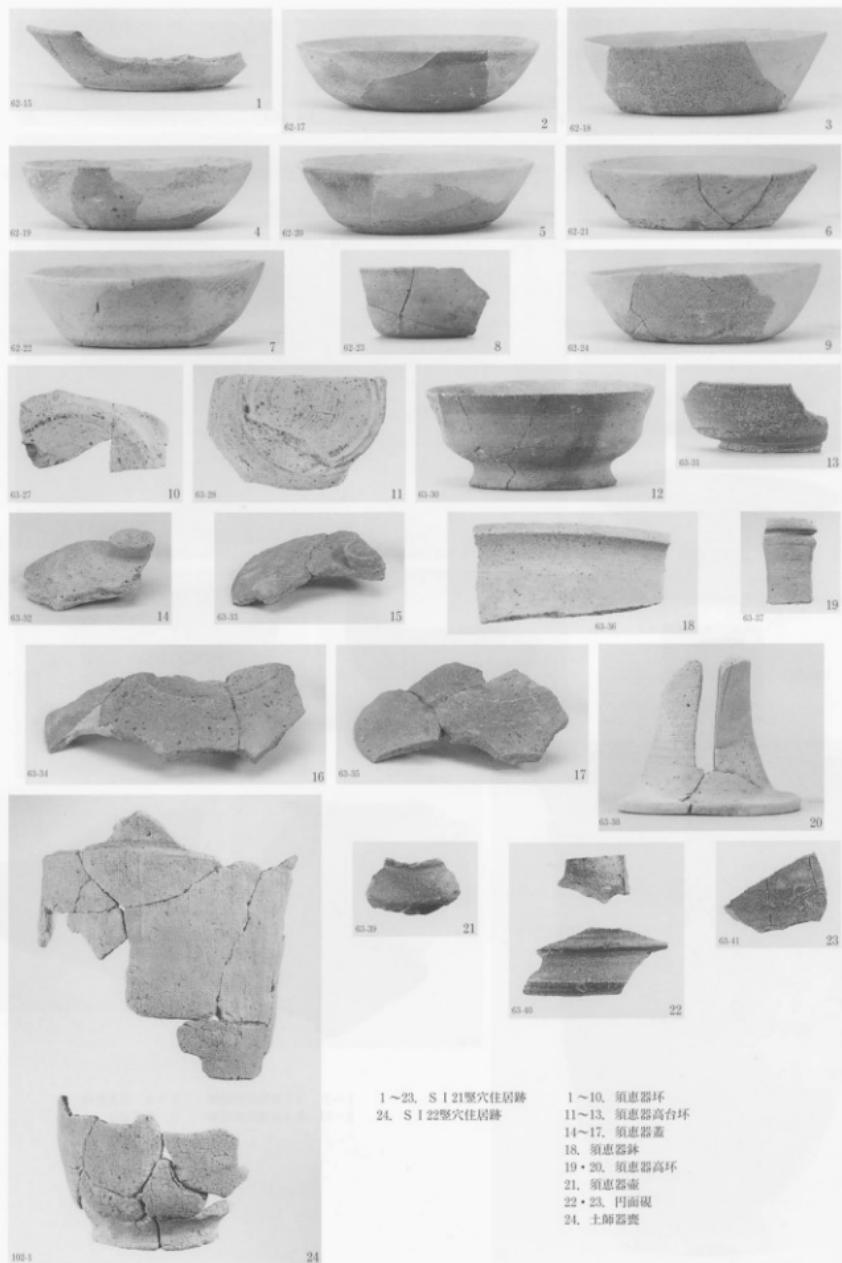
図版24 S I 13・16・17・19・20竪穴住居跡出土土器



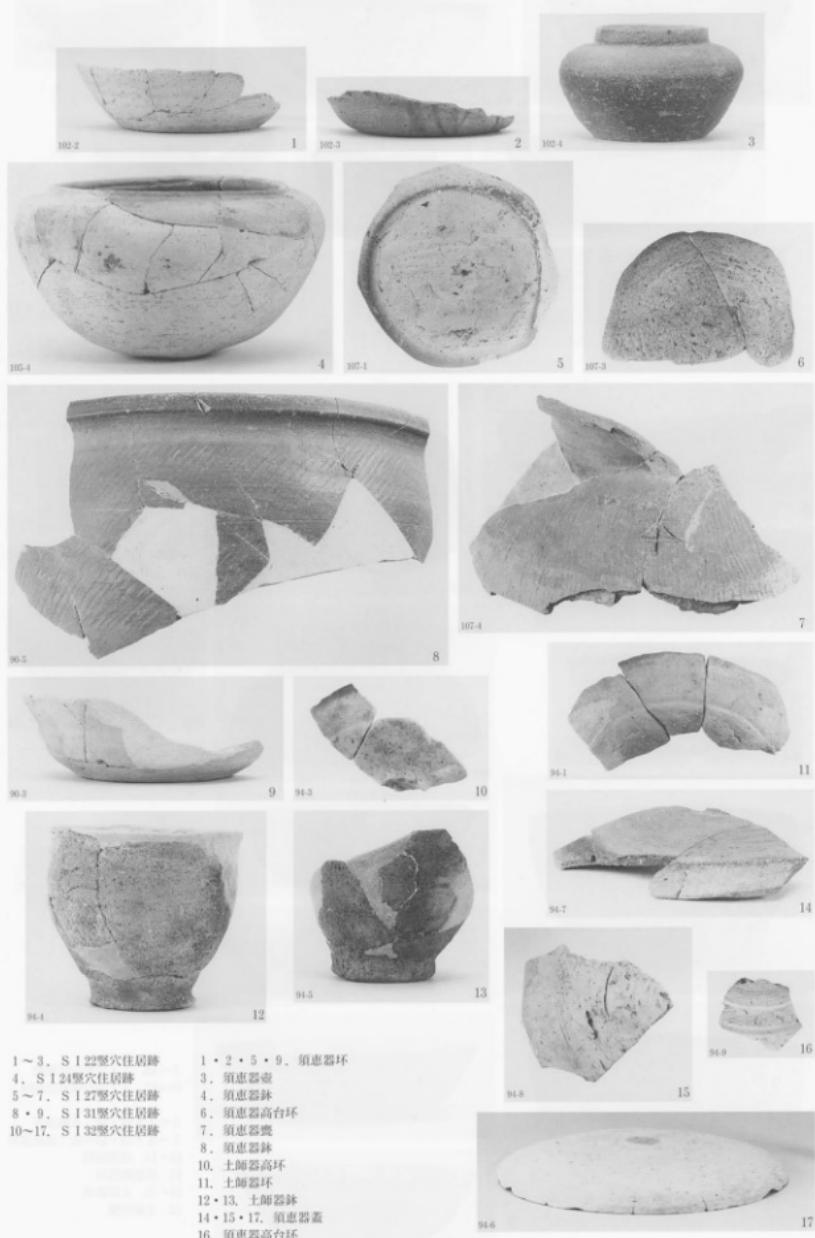
1 ~ 5. S 1 20 壓穴住居跡
6 ~ 14. S 1 21 壓穴住居跡

1 ~ 4. 頸壺器環
5. 頸壺器跡
6 ~ 7. 土壺器環
8 ~ 9. 土壺器壺
10. 土壺器壺
11 ~ 14. 土壺器跡
12 ~ 13. 土壺器壺

図版25 S 1 20・21 壓穴住居跡出土土器



1～23. S I 21堅穴住居跡
 24. S I 22堅穴住居跡
 1～10. 須恵器環
 11～13. 須恵器高台环
 14～17. 須恵器鉢
 18. 須恵器高环
 21. 須恵器蓋
 22・23. 円面環
 24. 土師器甕



図版27 S I 22・24・27・31・32堅穴住居跡出土土器



図版28 S I 33・34D 積穴住居跡出土土器



1 ~ 16. S I 34D 整穴住居跡

- 1 ~ 8. 須恵器環
- 9 ~ 13. 須恵器高台环
- 14 ~ 15. 須恵器蓋
- 16. 須恵器短頸壺

内面底面：崩落した窓壁片が着着

図版29 S I 34D 整穴住居跡出土土器



1

1～2. S I 34D 壺穴住居跡



3.a



底部：融着物あり

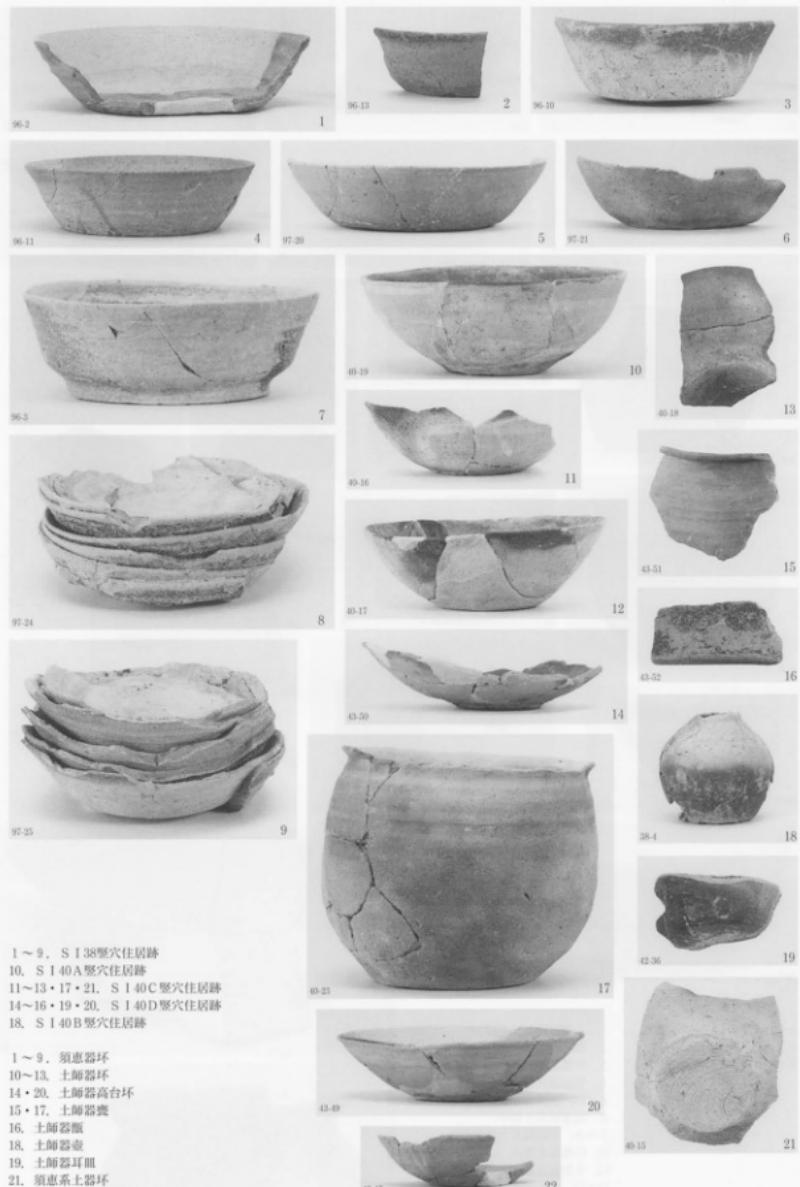


4 86-47





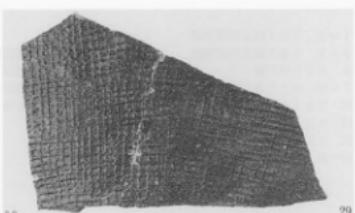
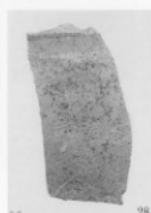
図版31 S I 35・36・37B 堅穴住居跡出土土器



図版32 S I 38・40A・40B・40C・40D 整穴住居跡出土土器



1. S 1 40 B 整穴住居跡
2. 4~7・9. S 1 40 C 整穴住居跡
3・8. S 1 40 D 整穴住居跡
10~13・S 1 42 整穴住居跡
14. S 1 41 整穴住居跡
15~16. S 1 48 整穴住居跡
17~18. S 1 49 整穴住居跡
19~22. S 1 51 整穴住居跡
23. S 1 51 整穴住居跡
24~29. S B 2 挖立柱建物跡
- 1・3・4. 須恵系土器
2. 須恵系土器小型环
5. 須恵系土器高台环
6. 内盤状土器品
7・12・15・19~20. 須恵器环
8. 須恵器壺
9. 須恵土器
10・11・14. 土師器环
13・25. 須恵器高环
16~17・22~23. 須恵器高台环
18~24. 土师器环
21. 土师器壺
26. 内面鏡
27・29. 須恵器壺
28. 須恵器环



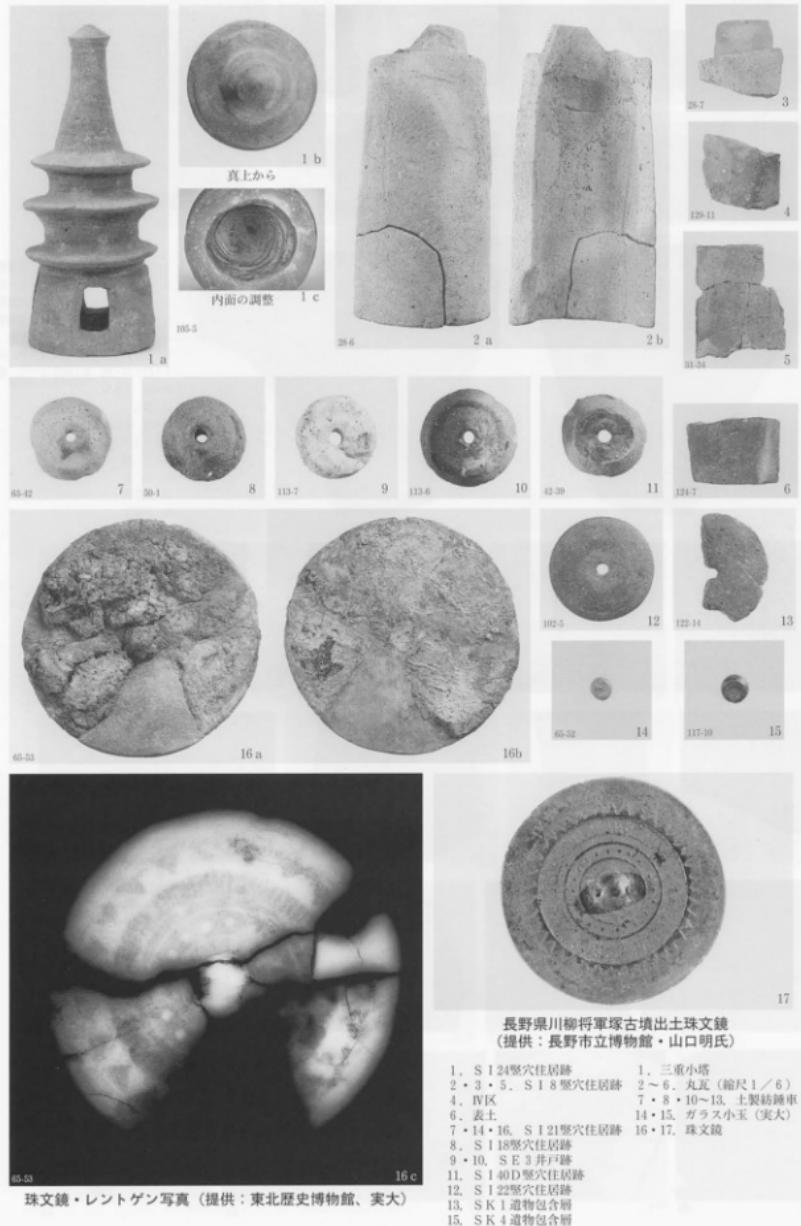
図版33 S 1 40 B・40 C・40 D・41・42・48・49・51・53整穴住居跡、S B 2 挖立柱建物跡出土土器



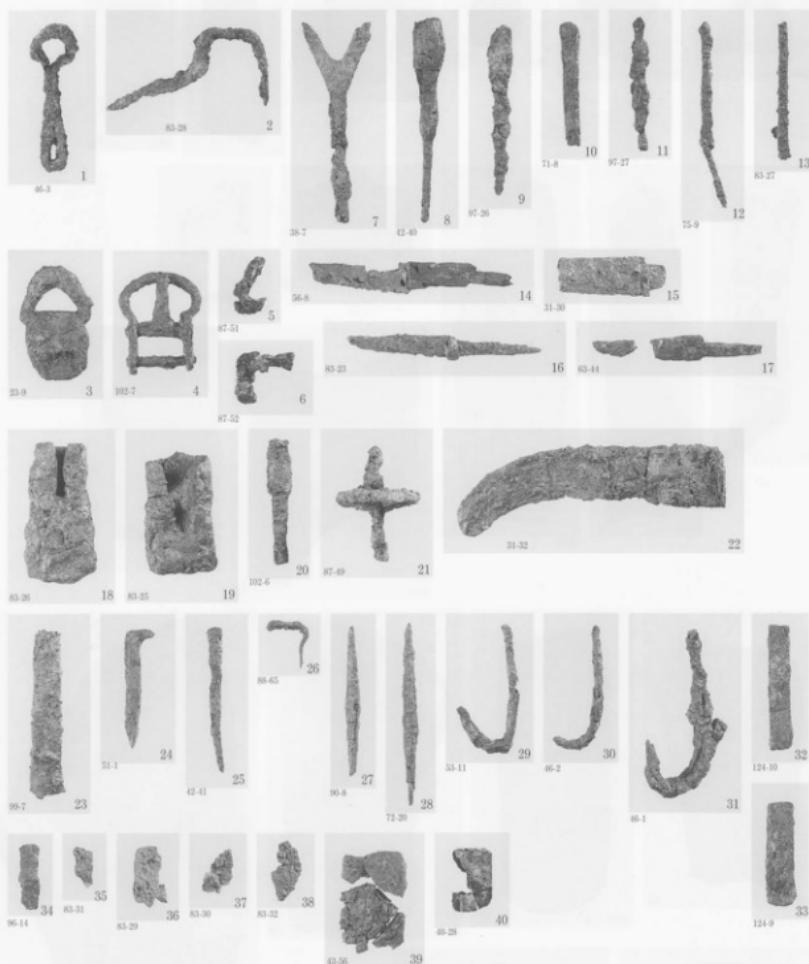
図版34 SB 2・6 挖立柱建物跡、SE 2・3 井戸跡、SK 4・5・7・12 土壙出土土器



図版35 SK12土壌、SX1・3遺物包含層などの出土土器、ヘラ書き土器、墨書き土器

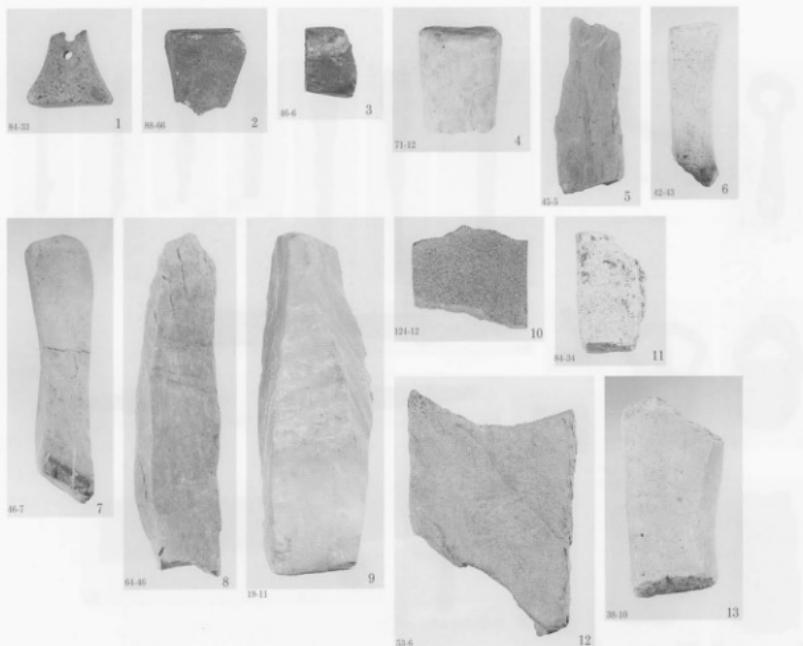


図版36 三重小塔丸瓦、土製紡錘車、ガラス小玉、珠紋鏡



- 1・30・31. S I 11B 壁穴住居跡
 2・5・6・13・16・18・19・26・35～37. S I 34D 壁穴住居跡
 3. S I 6 壁穴住居跡
 4・20. S I 22 壁穴住居跡
 7. S I 40B 壁穴住居跡
 8・25・39. S I 40D 壁穴住居跡
 9・11・34. S I 38 壁穴住居跡
 10. S I 33 壁穴住居跡
 12. S I 53 壁穴住居跡
 14・S I 20 壁穴住居跡
 15・20. S I 22 壁穴住居跡
 17. S I 21 壁穴住居跡
 22. S I 8 壁穴住居跡
 23. S I 35 壁穴住居跡
 24. S B 6 鋸立住居跡
 27. S I 31 壁穴住居跡
 28. S I 33C 壁穴住居跡
 29. S I 13 壁穴住居跡
 32・33. 表土
 40. S I 40C 壁穴住居跡
1. 引手 22. 錘
 2. 帯鉗・吊手金具 23. 銀or鈴
 3. 帶金具 24・25. 鉄釘
 4. 銀刀 26. 錐
 5. 兵庫銷 27・28. 刺突具
 6. 環状金具 29～31. 鉄針
 7～13. 鉄鏹 32～34. 板状鉄製品
 14～17. 刀子 35～38. 壁鑽or縫金具
 18・19. 有袋鉄斧 39. 不明鉄製品
 20. 錐 40. 銅製帶金具
 21. 編繩車

図版37 鉄製品（1～39）、銅製品（40）



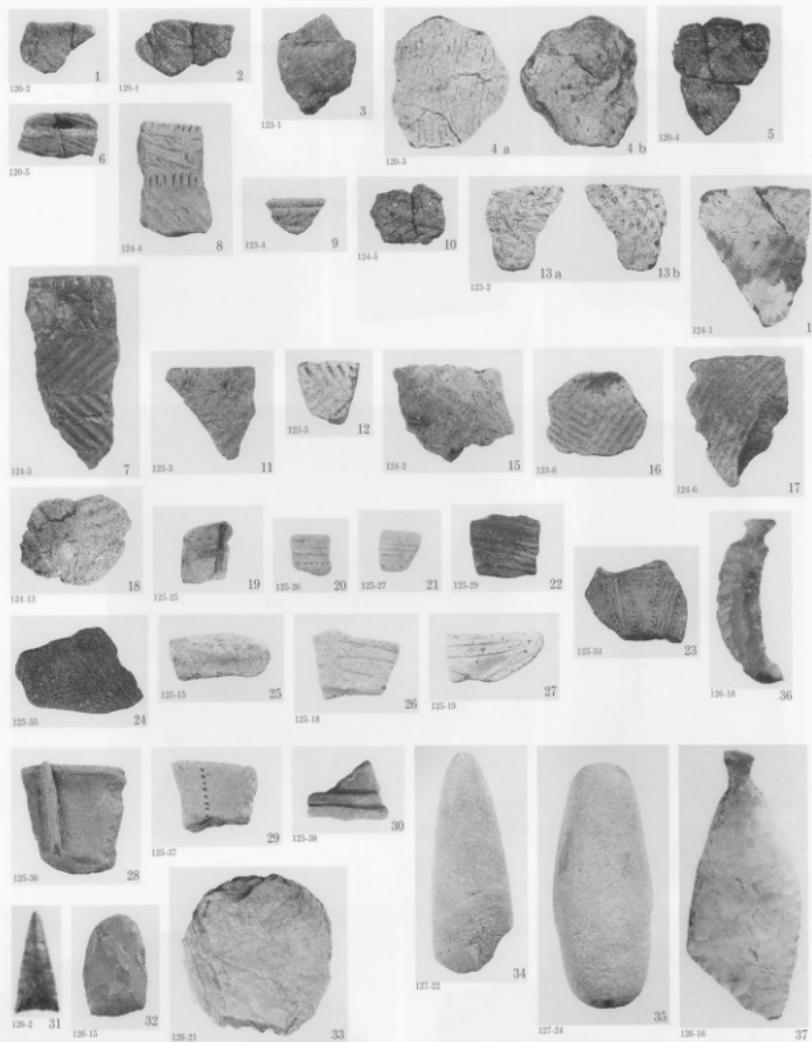
1~19. 砥石

- 1~2. S I 34D 壁穴住居跡
- 3~7. S I 11B 壁穴住居跡
- 4. S I 33B 壁穴住居跡
- 5. S I 17壁穴住居跡
- 6. S I 40D 壁穴住居跡
- 7. 16~17. S I 21壁穴住居跡
- 8. 18. S I 1壁穴住居跡
- 9~10. 表土
- 11. S I 1壁穴住居跡
- 12. S I 16壁穴住居跡
- 13. S I 40B 壁穴住居跡
- 14. S I 40C 壁穴住居跡
- 15. S I 15壁穴住居跡

図版38 砥石



1. S I 38堅穴住居跡 1～5. 砥石
 2・5. S I 33C堅穴住居跡 6・7. 焼け落ちた葺土
 3. S I 53堅穴住居跡
 4・6. S I 34D堅穴住居跡
 7. S I 8堅穴住居跡



- 1・2・4～6. SK19土壤
 3・9・11～13・16・29・30. SX2遺物包含層
 7・10・17～19・24・26・28・33・35. 表土
 8・22. SI27壁穴住居跡
 14・36. SI32壁穴住居跡
 15・21. SK10土壤
 20. SI17壁穴住居跡
 23. SK7土壤
 25・27・34. SK5土壤
 31・32. SK19土壤
 37. SB6掘立柱建物跡
- 1～4. 繩文土器(早中期)
 5～15・16. 繩文土器(前期初頭、上川名式)
 17・18. 繩文土器(早期末～前期)
 19～24. 縱縫文土器(後北C2・D式)
 25～27. 弥生土器(天王山式)
 28～30. 土師器(古墳時代前期、塙釜式)
 31. 石鏃
 32. スクレイバー
 33. 円盤状石製品
 34. 磨製石斧
 35. 磨石
 36・37. 石匙

図版40 繩文土器、縄縫文土器、弥生土器、土師器、石器

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しんでんひがしいせきーさんりくじどうしゃどうけんせつかんれんいせきちょうさほうこくしょⅡ-							
書名	新田東遺跡－三陸自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ-							
副書名								
卷次								
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第191集							
編著者名	柳澤和明・茂木好光・西村力							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 TEL022-211-3682							
発行年月日	西暦 2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 道路番号	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
新田東遺跡	宮城県桃生郡河北町飯野字新田	04561	66073	38度 31分 49秒	141度 16分 50秒	確認調査 2001.11.27～ 2001.12.5 事前調査 2001.4.23～ 2001.12.10	約8,500m ²	三陸自動車道建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
新田東遺跡	散布地	縄文	土壤1基、遺物包含層1箇所		文土器、石器、弥生土器	縄文早～前期、弥生後期、統縄文		
	集落跡	古墳	竪穴住居跡1棟		土師器	塙釜式期		
	集落跡	奈良	桃生城天守平宝字2年(758)頃～宝亀5年(774)7月	掘立柱建物跡14棟、竪穴住居跡29棟以上、井戸跡1基	土師器(壺・壇・高坏・蓋・鉢・甕)、須恵器(环・高台环・蓋・盤・高坏・鉢・短頸瓶・甕)、墨書き土器、焼成前ヘラ等、鐵製品(馬具・鐵鐵、刀子・鍔・斧・鎗・鑿)または鏃・釣針・刺突具・纺錘車など、土製品(百萬塔を模倣した須恵器質の三重小路・紡錘車)、石製品(砥石・磨石・マド支脚石)、瓦(桃生城政府で使用した丸瓦・平瓦を竪穴住居構築材に転用)	上西陽の城柵・桃生城を支えるために陸奥国山内や伊東諸国などから搬入・移住させられた棚戸や筋戸などの集落。②4小同期の変遷がある。③上限年代が桃生城造営期の天平宝字2年(758)年頃、下限年代が桃生城废絶の宝亀5年(774)年頃。この時期は農耕の範囲が柱建物跡と竪穴住居跡からなる。④後半期の主な變遷として、常に水と供給されてきた古河に水を供給するための堀川と、金B-3期の土器は須恵器から鐵製品へと変遷する。⑤後半期の土器は須恵器質の三重小路・紡錘車)、石製品(砥石・磨石・マド支脚石)、瓦(桃生城政府で使用した丸瓦・平瓦を竪穴住居構築材に転用)		
集落跡	平安	9世紀後～10世紀中葉頃	竪穴住居跡16棟、井戸跡1期、土壤1基、遺物包含層1箇所	土師器、須恵器、須恵系土器、製壺土器、灰釉陶器、墨書き土器、ヘラ書き土器、土製・石製紡錘車、砥石、鐵製品(鉄鐵・刀子・鍔・釣針・刺突具など)、銅製帶金具、土製支脚	①2小同期の変遷がある。C-1期は9世紀後葉頃、C-2期は10世紀中期頃の集落。②桃生城存続期のB期集落とは性格が異なり、通常の一般集落となる。③C-1期の焼失後1期住居跡1棟、C-2期の鉄製治工房1棟がある。			
集落跡	近世	近世	井戸跡1基、石組暗渠・開渠1条、平場1箇所	擂鉢、鉛製鉄砲玉				

宮城県埋蔵文化財調査報告書第191集

新田東遺跡

—三陸自動車道建設関連遺跡調査報告書II—

平成15年3月31日印刷

平成15年3月31日発行

発行 宮城県教育委員会

仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24
